

道化の名は必要悪

鎌鼬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悪となろう!!

悪徳の御旗を掲げよう!!

さあ善人よーハー必要悪を倒してみせろ!!

必要悪を否定し、絶対正義を肯定しろ!!

目次

原作前・日記

悪役日記 | 1

悪役日記・2 | 6

悪役日記・3 | 12

とある夜の出来事 | 17

悪役日記・4 | 26

悪役日記・5 | 31

無印

黄衣の王と花の魔術師 | 36

frist time | 42

frist time・2 | 48

frist time・3 | 55

frist time・4 | 65

frist time・5 | 72

frist time・6 | 77

frist time・7 | 83

Second action | 92

second action・2 | 99

second action・3 | 106

second action・4 | 111

second action・5 | 116

second action・6 | 123

second action・7 | 133

third title | 142

d a r k k n i g h t	A, s 編	v a m p i r e	v a m p i r e	v a m p i r e	v a m p i r e	v a m p i r e	v a m p i r e	s c i e n c e	d i r t y	d i r t y	幕 間	f o r t h	f o r t h	f o r t h	f o r t h	f o r t h	f o r t h	t h i r d	t h i r d	t h i r d	t h i r d	t h i r d	t h i r d	
		g i r l · 6	g i r l · 5	g i r l · 4	g i r l · 3	g i r l · 2	g i r l	p e r s o n	h e a r t · 2	h e a r t		p r a y · 7	p r a y · 6	p r a y · 5	p r a y · 4	p r a y · 3	p r a y · 2	p r a y	t i t l e · 7	t i t l e · 6	t i t l e · 5	t i t l e · 4	t i t l e · 3	t i t l e · 2
315		306	296	289	283	275	268	261	253	246		237	230	219	213	206	199	193	186	178	171	163	157	148

s u r p r i s e p a r t y · 3	s u r p r i s e p a r t y · 2	s u r p r i s e p a r t y	n o r m a l d a y · 8	n o r m a l d a y · 7	n o r m a l d a y · 6	n o r m a l d a y · 5	n o r m a l d a y · 4	n o r m a l d a y · 3	n o r m a l d a y · 2	n o r m a l d a y	u n h a p p y f a m i l y · 8	u n h a p p y f a m i l y · 7	u n h a p p y f a m i l y · 6	u n h a p p y f a m i l y · 5	u n h a p p y f a m i l y · 4	u n l u c k y f a m i l y · 3	u n h a p p y f a m i l y · 2	u n h a p p y f a m i l y	d a r k k n i g h t · 7	d a r k k n i g h t · 6	d a r k k n i g h t · 5	d a r k k n i g h t · 4	d a r k k n i g h t · 3	d a r k k n i g h t · 2
510	503	495	488	480	471	464	456	450	443	433	426	418	408	401	392	384	376	370	363	355	346	339	330	321

d	d	d	d	d	d	d	d	d	d	s	s	s
a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	u	u	u
r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r
k	k	k	k	k	k	k	k	k	k	p	p	p
n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	r	r	r
e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	i	i	i
s	s	s	s	s	s	s	s	s	s	s	s	s
s	s	s	s	s	s	s	s	s	s	e	e	e
h	h		h	h	h	h	h	h	h	p	p	p
e	e	h	e	e	e	e	e	e	e	a	a	a
a	a	e	a	a	a	a	a	a	a	r	r	r
r	r	a	r	r	r	r	r	r	r	t	t	t
t	t	r	t	t	t	t	t	t	t	y	y	y
.	.	t
1	9	.	7	6	5	4	3	2		6	5	4
0		8										
618	605	594	587	582	572	565	556	548	539	531	525	517

原作前・日記 悪役日記

●月△日

俺は転生した。ライトノベルの様に、二次小説の様に良くある記憶を持ったまま転生するあれだ。奇妙な体験をしたことを記念して、今日から暇を見つけて日記をつけようと思う。

日本で散歩していたら後ろから甲高い車のブレーキ音と誰かの叫び声が聞こえ、振り返ったら赤い液体を着けた黒塗りの高級車が突っ込んで轢き殺されたのだ。最後に考えたのが疲れていないのにといい、俺も能天気だなあと思う。

轢かれて死んだと思ったら、次の瞬間には何も無い真っ白な空間にいた。ここが死後の世界かな？なんて考えていると、何もなかったはずの空間が歪んで1人の男性が現れた。スーツを着込んで黒髪を七三分に分け、人当たりの良い笑みを浮かべていたのでサラリーマンか何かと考えていたがこんなところにサラリーマンがいるはずが無いと考え直して警戒する。

するとその男性は飛び上がった。後方にトンボを切りながら空中で身体を捻らせ、そのままぶれる事なく膝を折って背中を曲げ、頭を前に倒す。曲芸か何かと見間違えてしまう程の行動の果てに、余計な音を一切立てずに着地した時のその姿はローリー土下座だった。日本人ならば誰もが理解している、謝罪や懇願するときに用いられる姿勢。本来ならば最後の最後、それ以外にどうすることも出来ない様な状況下でしか使う事の許されないそれを初っ端から持ち出して来たのだ。

後方宙返り土下座という東洋の神秘を、日本人におけるファイナルウエポンを開幕から使つて来たことに戦慄を覚えながら、このままでは話が出来ないと理由をつけて何とか彼に土下座を止めさせて話を聞くことに成功した。

彼は悪神の使いらしい。悪神の使いというジャンルで固有名詞を持つていないらしいので、俺は彼のことを見た目と後方宙返り土下座という東洋の神秘からタナカと呼ぶ事にした。何でもとある世界に転生者が送り込まれた事により善悪のバランスが善に傾き過ぎて崩れそうになり、そのバランスを取るために俺にその世界に転生して欲しいとの事だった。

善と悪で思い付くのはゾロアスター教の善悪二元論だろう。悪とは善に打ち倒される物で、善性を肯定するための踏み台だという考えを持つていたので善に傾いていた方が良いのではないかと尋ねたのだがそう簡単な話では無いらしい。タナカによれば善と悪のバランスは俺が考えている以上に緻密で、世界のどこかで善行が行われれば世界のどこかで悪行が行われる。それがあつた程度ならば世界そのものがバランスを取るように設定されているのだが、とある善神が転生者を送り込んだ結果、善と悪のバランスが設定を超える程に崩れてしまつてしまつた。善悪のバランスが保たなくなつてしまえばその世界は崩壊し、連鎖的に他の世界にも影響を及ぼす事になるらしい。それを防ぐ為に俺に悪としてその世界に転生してくれと、タナカは今度はトリプルアクセル土下座を決めながら懇願して来た。

こいつはどれだけ土下座の引き出しを持つているのかと戦々恐々しながらも、タナカの言葉に嘘が無いと経験から理解出来たので断るという選択肢を出せなかった。それに、生前でもそういう悪性に分類される様なことを生業としていたので抵抗が無かつたからというのも理由にあつたりする。

俺が引き受ける事に地面を頭に打ちつけながら感謝の言葉を述べるタナカを止め、詳しい説明を受けた。転生して欲しい世界というのは「魔法少女リリカルなのは」の世界らしい。一部作では終わらずに複数の続編が放映された人気作品で俺も知っている作品だったが、部で言うところの *striker* 編まで俺に悪役を務めて欲しいとの事だった。そこまで俺が悪役を務めれば、後は世界のバランス設定でどうにか出来るレベルに落ち着くと予想しているらしい。

そうして俺はこの世界に転生した。前世の記憶と人格を引き継いで、タナカからの依頼を覚えた状態で。肉体年齢は5歳程で、記憶にあるその頃の俺の容姿と似通っていた。タナカによれば俺には肉親は存在せず、彼が保護者を務めているらしい。前世の親の顔も覚えていない親不孝者だが、いきなり見知らぬ夫婦のことを親として慕うふりをしなくて済んだ事には感謝しなくてはならない。

●月□日

今日は色々な確認を行った。

身体能力はまさに5歳児そのもの。重い物は持てず、簡単に息切れを起こす上にすぐに腹が減る。当たり前と言っては当たり前なのが前世の頃とは比べものにならない程に低下していた。それを理解して落ち込んだのだが、逆に言えば肉体をリセットして成長し直せると言う事。目指せ、身長180センチの細マッチョボディ。

しかし変わらない物はあった。それは前世で修めていた技術だ。5歳児ボディになった事でリーチこそ短くなっていたのだが、技術を始めたとした技術は問題無く使う事が出来たのだ。未熟な事が理由なのか、縮地を連発したら身体が悲鳴をあげていたのだが、それも成長すれば解決するだろう。そこら辺は気長にやるしか無い。

そして魔術も違和感を少し覚えたのだが問題無く使用する事が出

来た。前世の幼少期から見ていた夢で、花に囲まれた塔の中にいる女性。ユルフワ系な彼女だったが前世でも架空の存在とされていた魔法——彼女に言わせれば魔術を使う魔術師を名乗っていた。その彼女にここまで来たご褒美だと魔術を幾らか習ったのだ。彼女に習った魔術は前世の世界では架空の存在だったという事もあり使用は控えていたのだが、この世界では魔導技術は存在している。使っても問題無いだろう。

心配があるとすれば、また彼女に会えるかどうかだ。前世の世界だから彼女に会えていたのであって、この世界では彼女に会えない可能性がある。母の様な、姉の様な——俺の初恋の人だ。会えなくなる事を寂しく感じる。タナカから頼まれた事を終わらせたら、彼女の事を探してみるのもありかもしれない。

身体能力には不安を感じるが、成長すれば解決すると判断してタナカから貰ったデバイスの確認もする。この世界における魔法使いの杖の役割を果たすデバイスは黄色の首飾りを模していた。黄色という色から前世でどハマリしていたクトウルフTRPGを連想してしまい、名前の登録の際に思わずハスターにしてしまった。それが原因なのかバリアジャケットは真っ黄色のトレンチコートになっていた。解除した時に手足が無事か心配になったが、しっかりと骨は残っていた。これに蒼白い仮面を被って悪役を務めよう。

ハスターから話を聞いたのだが、彼女——どうやらAIの性別は女性らしい——は俺の事情を認知しているとの事。その上で俺を絶対に裏切らないと、何があっても側に居てくれると約束してくれた。最悪1人でやり切る事を覚悟していたのでハスターのその申し出は嬉しかった。

そしてハスターとこの世界の魔法についてのアレコレを話し合つて夜の9時に寝る事にした。寝る時間が早いかもしれないが、これも

180センチの身長を手に入れる為だ。寝れる時に寝る。

●月×日

何であんたがそんな所にそんな状態にいるのさ……ツ!!

(ここから先はグチャグチャになっていて読む事が出来ない)

悪役日記・2

●月●日

予想外の出来事があったせいで混乱したが一日かけてようやく落ち着く事が出来た。何があったのかを考えを整理する意味合いを含めて記そうと思う。

昨日、俺は家の外に出た。テレビ越しでしか見ることが出来なかった上に土地勘の全く無い町なのだ。何処に何があるのか知るために、ハスターと一緒に散歩に出かけた。

低身長で見る街並みは前世で見ていた時と視点が変わっていても新鮮だった事を覚えている。一応自分でも覚えるようにしていたが、ハスターとの会話を楽しみながら見知らぬ町の街並みを眺めていた。

そしてとある公園に差し掛かった。昨日は休日だったせいか公園には我先にと遊具に群がる子供達の姿と、その保護者らしい大人達が集まって談話をしている姿があった。俺があ頃の年代の時にはあんな無邪気さを持ち合わせる事が出来ない環境だったので、何があんなに楽しいのかと呆れると同じくらいにあの無邪気さが羨ましいと感じていた。

そこまでは良かった。そこまでは休日によくある微笑ましい光景で片付けられた。問題はここからだった。

心中に湧き上がっていた呆れと羨望を振り切って散歩を続けようとした時にある光景が飛び込んできたのだ。それは公園に当たり前のように設置されているベンチで、そこには2人の子供が腰掛けていた。

1人は茶髪の女の子。遠目からでは判断し辛かったのだが、初対面のはずなのに彼女には見覚えがあった。恐らく彼女がアニメの主人公であった魔砲少女こと高町なのはなのだろう。雰囲気は暗く、顔を俯かせていたので何があったのかと考えたが、確かこの時期に彼女の父親が仕事の関係で大怪我を負ってしまった家庭環境がよろしくなかった事を思い出す。恐らくその関係で彼女はああしているのだろう。

1人は黒髪の男の子。男の娘では無い。彼は高町なのはの隣に座って懸命に話し掛けていた。恐らく彼がタナカが言っていた転生者だろう。見た所、二次小説に登場する様な踏み台転生者の様な下心を持たずに彼女の事を励ましてやりたいという雰囲気を感じた。俺の役割が役割なので俺から彼女に接触することは出来ない。そういう意味では彼が彼女の側に居ることに安心した。

そして2人の背後に1人の男性の姿があった。ベンチに座る2人の真後ろに隠れもしないで立っていてすぐに気づかれそうなものなのに、2人は彼の事など見えていない様に平然と話し合っていた。男性が口を動かして話しているというのに、聞こえていない様に無視してだ。

その時から嫌な予感がした。原作の事など過去に見たことのあるもので薄っすらとしか覚えていないのだが、それでも彼らの背後に立っている男性に見覚えがあったから。なので気配を断ち、2人の視界に入らない様に大きく迂回しながらその男性に近づく。すると彼は気配を消しているはずの俺の事をあっさりとは看破してくれた。前世で鍛えたはずの技術が簡単に見破られた事に落ち込むが、同時に彼ならば仕方がないと考えてしまう。

この世界の主人公である高町なのはの父親、高町士郎。彼が足の無

い半透明の姿――霊体でいた。

普通ならば生者は幽霊を見ることは出来ないのだが、俺は物心ついた時から幽霊を見る事が出来た。俺に魔術を教えてくれた女性曰く、俺は天然物の魔眼を持っていらっしゃるらしい。霊視の魔眼と彼女が名付けたその効果は名前の通りに通常では目視出来ない霊体を視認できるといふもの。それに加えて俺の起源である干渉により、俺は霊体を見るだけではなくて触れる事も出来る。

自分の事が見えていると気づいた土郎さんに2人に聞こえない様に声をかけてその場から離れ、どうして死んでいるのか尋ねた。俺の記憶が確かならば彼はこの時期に大怪我を負うが、死にはしなかったはずなのだ。

土郎さんが言うにはボディーガードの仕事で襲撃者から対象を守っている最中に膝に銃弾を受けてしまい、その隙に神風特攻よろしく手榴弾を持った襲撃者の自爆に巻き込まれて即死したとの事だ。どうにか対象者を守る事が出来たが彼は死んでしまい、その結果家族は自分の死を引きずっているのが未練となっている様だ。高町なのはに背後霊よろしく引つ付いていたのもそれが理由らしい。

死んだ理由を聞いて馬鹿じゃないかという感想を抱き、そのまま口にした。家族を持って守るべき家庭があると言うのに命の危険がある仕事に就いているとは何事か。その仕事じゃなければ生きられないという極限状態ならばまだしもそうでなくてもいいのなら足を洗うべきなのだ。重箱の隅を突く様に自分の考えを述べ、途中で口を挟まれても即座に論破しながら説教じみた事をする土郎さんはその場に両手を着いて崩れ落ちていた。

霊体なのに器用だなあとと思う事で現実逃避をする。

実はこの世界、魔法少女とか言う可愛らしいタイトルなのに割と頻りに危機的な状況になるのだ。無印編では確かジュエルシードとかいう宝石が原因でいくつかの世界が危なくなり、A's編では闇の書という本が原因で地球崩壊しかけたりする。それを救うのが高町なのはを始めとした魔法少女たちなのだが、物語の設定上の都合なのか活躍する殆どが年端もいかない少年少女なのだ。身体は当然の様に幼く、それと同時に精神も未熟である。

この世界の主役である高町なのは。もしも土郎さんの死がきっかけで家庭崩壊を起こし、アニメの時の様な状態になっていなければ……最悪、無印編で地球滅亡とか普通にありえるのだ。

そんな事になってしまえばタナカからの依頼が果たせなくなる。彼との依頼でstrickers編までこの世界を続けなければならぬ。幸いな事に高町なのはの方は転生者の方がどうにかしてくれるだろう。後は荒れているであろう高町家をどうにかして崩壊させない様にするだけだ。

なので、戦闘民族と名高い高町家でも最強と称される土郎さんに武術の稽古をつけてもらう事を条件にこの件をどうにかする事を約束した。

現在、土郎さんは俺の背後霊をやっている。

●月・日

この日は高町家の観察に費やした。土郎さんの未練をどうにかすると約束したはいいが、俺は高町家の現状を憶測でしか把握していない。実際に見た方が良いと思ったのだ。

高町なのはの方は転生者が付き添っているので問題ないだろう。土郎さんの死により前とは変わってしまった家族たちに怯えている

様だがそれは時間で解決する問題だ。それよりも高町なのはの頭を撫でている転生者の姿を見て悪霊に成りかけていた土郎さんを落ち着かせる事の方が問題だった。

土郎さんが経営していた喫茶店は彼の奥さんである高町桃子さんと高町美由希さんの2人が後を引き継いで経営していた。土郎さんの死を悲しんでいる雰囲気を漂わせ、泣いていたのか目元を少し腫れさせながらもしつかりと顔を上げていた。それは悲しみに暮れるだけではダメだと、守るべきものがあるのだと理解している者の顔だった。今こそ忙しくて高町なのはの事をなおざりにしてしまっている様だがこれも時間が解決してくれるだろう。

問題があるのは高町恭也だった。丸一日見ていたわけでは無いが彼の行動は店の手伝いは最小限、それ以外の時間をすべて道場で修行に明け暮れるというものだったのだ。土郎さんの死んだ原因が自分が無力だったからと、残された者たちを守る為に強くあらねばと感じているのだろう。その姿は鬼気迫るものがあり、痛々しくてとても見られないなかった。

俺から言わせて貰えば高町恭也の行動は本末転倒としか言えなかった。強くなりたいという理由は理解でき、彼の心境にも共感できる。しかし、だからといって大切な者たちをなおざりにしてしまっただけは駄目だろうが。今は店の方は桃子さんと美由希さん、それと彼の最低限の手伝いでどうにか回しているが、このままの状態が続けばいつか2人が体を壊すのが目に見えている。そうなって恭也は自分のやってきた事の無意味さに気がつき、何をしていたのだろうと絶望する姿を想像するのは容易かった。

高町家の観察をした結果、恭也さえどうにかすれば大丈夫だという結論に至った。土郎さんも同意見の様で、どうするのか尋ねられた。今の彼に言葉で語りかけても無駄なのは今日の彼の行動を見て分

かっている。言葉がダメならば行動でどうにかするだけだ。

ハスターに考えついた魔法を話し、実現出来るか聞いたところ時間は必要だが問題無いと言われた。魔法の完成を待って行動を起こす事にする。それまでは土郎さんに稽古をつけてもらう事にした。前世でも一応武術の類は修めたのだがその大半は見稽古で、まともな師事を受けて修めたものではないのだ。そう考えると結構危ない現状だがワクワクしている。

さて、最強レベルの戦闘民族の実力とやらを体感させてもらおうか
……!!

悪役日記・3

●月\$日

(空白になっている)

●月€日

うで うごか

(ここから先はグチャグチャになっていて読めない)

●月%日

筋肉痛が治まってきたので日記を書こうと思う。

・日の夜、人の寄り付かない場所を探して士郎さんに稽古をつけてもらった。その時に士郎さんが俺の実力が知りたいと言って始めに模擬戦をする事になったのだ。断る理由がなかったので俺は木材を適当に削った木刀を構え、士郎さんは他に何も持たずにあたかも剣を持ってしている様に構えた。

何をやっているのかと思ったがそんな考えは模擬戦が始まるのと同時に吹き飛んだ。士郎さんは空手で剣を持っていないはずなのに、俺からは彼の手に真剣が握られている様に見えたのだ。腕が振るわれ、幻想の剣閃が走る。木刀なんかでは受けごと叩き斬られると判断し、俺は形振り構わずに避ける事を選んだ。

目の前の光景が信じられずに驚きながらも流石は最強レベルの戦闘民族だと感心し、俺から斬りかかっても最低限の体捌きだけで避けられる。幽霊だから当たらないのではなく、完全に見切られているので剣が届かないという、圧倒的な実力差が俺と士郎さんとの間にあったのだ。

その事実には流石は最強レベルの戦闘民族だと感心することはあっても絶望することはしなかった。むしろ届かせてやると滾る思いだった。

そうして真夜中に始めた模擬戦は気がつけば朝日が昇るまで続けられた。結果、俺が全力で向かっていっても土郎さんに一度たりとも届くことは無かった。土郎さんの振るった剣も俺には当たらなかったのだが、それは彼が手加減をしてくれたからだろう。もしも彼が最初から本気で戦っていたら、初めの一撃で両断されていたはずだ。

そして人に見つからない様に家に帰り、仮眠を取って目を覚ましたら全身が筋肉痛になっていたのだ。そりゃあ身体がまだ出来上がってもないのに全力で動かせばこうなる。一昨日、昨日と指一本どころか身じろぎするだけでも悲鳴をあげてしまいそうになる程の重傷だった。何とか日記を書ける程度には治ったが、運動が出来るほどには治っていない。明日あたりまではベッドに寝たきりで過ごす事になるだろう。

土郎さんからは大人気ない事をしたと謝られたが俺の負けず嫌いが原因でこうなったのだから謝られるのは筋違いだと説得し、動けない俺の代わりに高町家の様子を見てもらう事にした。報告を聞く限りでは・日と変わらない様子らしい。俺が回復するまでこの状態が続いて欲しい。

●月。日

俺が寝たきりでベッドから動けない間、家の事をしてくれたのは意外な事にハスターだった。俺の魔力を消費する事で超能力で言うところの念動力の様な魔法を使い、家の掃除に料理、洗濯までしてくれたのだ。ありがとうとお礼を言うと、ハスターの言語能力がバグってしまい何を言っているのか分からなかったが嫌な思いはしていない様だ。

そしてハスターが魔法を使っている時に気が付いたのだが、どうやらこの世界の魔法と俺があの人から教えてもらった魔術は別物の様だ。

魔法も魔術も魔力という燃料を使って行使されるものなのだが、魔術の方は魔術回路と呼ばれる擬似神経から生成される魔力を使い、魔法の方は別のところから生成される魔力を使っている様だ。ハスターに聞けば魔法の方の魔力を生成しているのはリンカーコアと呼ばれる臓器であり、この世界の魔導師に必要なものだと教えられた。要するに魔術師における魔術回路の様なものだろう。

俺は自前で持っていた魔術回路とタナカから与えられたであろうリンカーコアの2つの魔力生成手段を持っている事になる。これは大きなアドバンテージだ。ハスター曰く、教えられた魔術とこの世界の魔法は似ている様で違う物で、この世界の魔法が使えない状況でも魔術の方は問題なく使用出来るとの事だ。手数は多いに越したことはない。このアドバンテージは有効活用させてもらおう事にしよう。

●月#日

ようやくベッドから起き上がり、歩くことが出来る程度に回復した。寝たきりが原因で筋力が落ちているかと思っただが、ハスターが魔法で頑張ったらしく思っていたよりは落ちていなかった。ハスターが優秀過ぎる。感謝の意味合いを込めて磨いたのだが、その間妙に艶のある声を出されて心臓に悪かった。

身体を軽く動かして節々に痛みはあるものの問題ないと判断して士郎さんに稽古をつけてもらおうとしたのだが断られてしまった。彼がいうにはまだ身体は治りかけで、完全に治るまでは休む様にとの事だった。前世ではこういう状態でも無理やり身体を動かしていたのだがそれは余裕が無かったからそうせざるを得なかったのだ。今

生では前世ではなかった余裕があるので大人しく従う事にする。

●月十日

痛みが無くなり、土郎さんから治ったと判断されたので今日から稽古を再開する事にした。とは言っても初日の様なことはしない。俺の身体はまだ未熟なので、それを考慮した上で無理の無いプランを言い渡された。

ランニングに軽い筋トレと前世でやった事に比べれば軽過ぎる様に思えるのだが、この時期に無茶苦茶な鍛え方をしてしまうと成長に悪影響が出てしまうかもしれないと言われて素直に従った。180センチの高身長の為ならば悪魔の尻だって舐めてやる。

あとは素振りをするように言われた。土郎さん曰く、俺の戦い方は滅茶苦茶だとの事だ。振り方が素人丸出しの癖して要所要所では達人級の動きを見せるなんてどんな人生を送ったんだと呆れられた。ちなみに土郎さんにはタナカからの依頼は伏せてあるが俺が転生した人間だと教えてある。土郎さんからの信頼を得られるメリット、そしてデメリットはほとんど無いと判断してだ。これから先の事は分からないが、もしかしたら依頼に関しても話すかもしれない。

話が横道に逸れてしまった。要するに俺は実戦経験豊富な素人だと言われたのだ。なので身体が出来上がるまではひたすら基礎を繰り返せと言われた。それに対して反論はせずに従った。何代も続く武術の達人である土郎さんの言葉が間違っているとは思わなかったからだ。

稽古が終わって疲労感はあるものの初日の様な事にはなっていない。正直物足りなさを感じるのだが、無茶をしては元も子もない。よく寝て、また明日に備えよう。

●月：日

士郎さんに稽古をつけてもらってから一週間。ようやくハスターが俺の思いついた魔法が完成したと報告してくれた。試しに使ってみると視点が高くなり、幼かった身体は成熟した大人のそれになっていた。

ハスターに頼んでいたのは変身魔法だった。原作が始まれば身元バレを防ぐ為に正体を隠す必要があり、いずれは作るつもりだったが、だが今回の高町家の件で予定を前倒しにしたのだ。

子供の身体に慣れた頃になって大人の身体になったのだが、少しの違和感も感じない。何故なら、変身した姿は俺の前世の姿だからだ。

士郎さんによれば高町恭也は深夜は道場で過ごしているらしい。真夜中になったら行動する事に決める。

●月々日

(ヨレヨレで読みにくい「やったぜ」と書かれている)

とある夜の出来事

真夜中、誰しもが寝静まった道場で模造刀を振るう1人の青年がいた。彼の名は高町恭也。月明かりだけで照らされた道場は薄暗く、視界が悪くなっていたのだが彼からすればそんな事はどうでも良かった。

模造刀を握る手に力を込めて、一心不乱に振るう。一振り一振りが達人級の腕前の持ち主が見たら感嘆の声を上げる様な程に研鑽された剣筋であったのだが、本人はこれでは足りないとより速く、より巧みに振るえるようにと工夫を凝らす。

賞賛の声などいらぬ。彼が目指しているのは今は亡き父なのだから。

恭也の父はボディガードの仕事で死んだ。その日以降、彼を突き動かしているのは父の分まで自分が家族を守らなくてはならないという強迫観念だ。店の手伝いを最低限で済ませ、それ以外の時間全てを研鑽と呼ぶには烏滸がましい程の過酷な鍛錬に費やしている。

守ってくれる父親が死んだ今、何かあったときに家族を守れるのは自分だけなのだから。その時になって力及ばずに守れなかったと後悔したくなかったから、恭也は鍛錬を止めない。

正直なところ、恭也自身こんなことをして意味があるのかと考えている。剣を振るうよりも家族のそばにいるべきでは無いのかと思っている。しかし、彼はそれが甘えのように思えて仕方がなかった。

妥協して、弱いままでいて、それで守ることが出来なくなる……そう自分に言い聞かせる。

だから家族からあがる心配の声も無視して、体力も精神も極限まで使い、気絶するように眠り、朝を迎える。まるで人生全てをそれだけに注ぎ込んだ求道者のような生活。それがここ最近の恭也の生活サイクルとなっていた。

「こんにちわ〜」

そしてそのサイクルに変化が訪れた。誰も起きておらず、敷地内だから誰も近づかないはずの道場に来客があったのだ。剣を振るう手を止めて入り口を見れば、そこにいたのはフード付きの黄色いトレーニングコートを着た人物。顔はフードを被っている上に蒼白い仮面で隠されていて分からないが、声の質からして性別は男。身長は目測で170センチに届かないくらいなのだが、彼から放たれる気配が一回り大きく見せていた。

「……何者だ？」

只者ではない。それに仮面で顔を隠している不審人物。恭也が警戒するには十分すぎる理由が揃えられていた。模造刀を構えて警戒を隠さない。自身の怪しさに気がついているのか、彼は気まずそうに頭を掻きながら道場上がる。

「何者か、ねえ……そこんところは、ほら、顔隠している時点で身元バレしたくないってそこはかとなく察してくれない？この先色々やる事があるから今の段階で顔をバラしたく無いのよ。Do you understand？」

流暢な英語を交えながら話す男性。一見すれば隙だらけで、恭也の実力を知っている者たちがこの光景を見ていたとしたら、すぐにでも制圧出来るだろうと考えていただろう。しかし、実際に対峙している

恭也はそんな事を考えられなかった。一見すれば確かに隙だらけのように見えるのだが、その全てが隙を突かせるための誘いの罠であると看破していた。不用意に踏み込めばやられるのはこちら。それを理解しているから、恭也は自分から仕掛ける事はせずに男性の一挙一動を警戒している。

「……反応は無い、か。予想してたけど余裕無すぎじゃね？張り詰めて生きていてもいつかプツンするだけだぞ？適度な余裕に適度な緊張こそ人生を楽しむための秘訣だと思うんだけどなあ……：そんなんじやあ士郎さんが浮かばれないぞ？」

「ッ!?!……父さんを知ってるのか？」

「知り合い、知人、まあそんな感じの深くはないけど浅くはない程度の間柄だと思ってくれば良いさ」

男性はそう言いながら道場の片隅に置かれていた模造刀が立て掛けられていた籠に近寄る。そしてその中から二振りを手に取り、構えずに恭也に向かい合った。

「士郎さんから色々と言われててな、それで俺からも言いたい事があるんだが……言葉なんかじゃ納得出来ないし、理解もしたくないんだろ？だから、まずは力づくでって事で」

全くの自然体、そこから飛んできたのは模造刀だった。切っ先が真っ直ぐに恭也の眼球目掛けて飛んできている。真正面から、堂々と不意を打たれた恭也は投げられた模造刀を寸の所で躲す。

その瞬間に恭也の注意は全て模造刀に向けられた。それを知覚した男性は恭也の死角に潜り込み、接近して無造作にもう一振りの模造刀を振るう。死角に潜り込まれた程度で見失う程、恭也の気配察知能力は低くはない。冷静に、手に持つ模造刀でその一撃を受け止めてカウンターを仕掛けてようと試みる。

そして模造刀同士がぶつかり合い「ッーッー」恭也は吹き飛ばされる。

「ッーッー!?!」

武術の基礎なんぞ知ったものかと振るわれた一閃はまるで軽自動車にぶつかったかの様な衝撃を恭也に齎した。咄嗟に受け止める事を諦めて自分から飛んだのでダメージは受けていないのだが、そうしてもなお手には軽い痺れが残っている。まともを受け止めていれば模造刀ごと叩き斬られていたであろう。

「馬鹿力め……!!」

「生憎とまともな鍛錬なんぞした事が無かったものでね、基本的に力任せになってしまっただけだ。ああ、悪癖だとは理解しているぞーッー理解してるだけだけどな!!」

そう言っただけで男性は距離を滑り込む様な巧みな歩法で一気に詰めて恭也に肉薄し、模造刀を振るう。一閃一閃が臂力任せに振るわれる。受け流すことも危ういと感じた恭也はその全てを避ける事を選ぶ。幸いにして剣筋自体はまともな鍛錬なんていていないと言っていたせいか拙さが目立つので避ける事自体は難しくはない。しかしそれ以上に常識はずれの怪力で振るわれるのが怖かった。

模造刀が振るわれる度に大気が裂け、剣圧が肌を撫で、一撃でももらえばタダでは済まない。恭也の直感が警鐘を鳴らす。父親のツテで何度か達人級の人間と手合わせをした事がある恭也だが、この体験だけは初めてだった。武術というのは弱者が強者を倒すために存在している。武術を極めれば極める程に、見ている者は強いとでは無くて上手いと感じる様になる。剣舞や殺陣などが良い例だろう。その巧さを知っているが故に、男性が振るう力任せの剣に戸惑ってしまう。

しかし、いくら怪力で振るわれようとも剣自体は素人が振るうそれと大差ない。巧みに、最小限の体捌きで無造作に振るわれる剛剣を躲し――

「――ヌルい」

――カウンターで放った一閃を恭也以上の体捌きにてあつさりと躲す。恭也が斬る事が許されたのは微かに残された残像だけ。そしてカウンターを放って無防備になっていた恭也の腹に膝蹴りが突き刺さり、鍛え抜かれた腹筋を容易く貫通して内臓をシェイクした。

「グ――」

内臓に強い衝撃を受けた事で胃液が逆流して吐きそうになる。それを堪える恭也だが、男性は模造刀を投げ捨て、待つてやる義理などないとはかりに追撃の鉄拳で恭也の顔を上げさせる。頬を、米神を、顎を、鼻を、硬く握り締められた拳で打ち据える。加減はしているだろうが無造作に剣を振るっただけで恭也を吹き飛ばす程の膂力を持った拳なのだ。一撃を貰うたびに恭也の脳は右へ左へ、上へ下へと揺れて視界がぐちゃぐちゃになる。

そしてハンマーを使っているかの様に振り降ろされた一撃がトドメとなり、恭也はその場に崩れ落ちた。前のめりで倒れ、手に持っている模造刀を手放さなかった辺りは流石は武人である。

「やれやれ、やっと倒れたか」

『流石ですマスター』

『ちよつとやり過ぎじゃないか?』

気絶する恭也を見下ろす男性、彼の耳に2つの声が届く。その2つ

の声は恭也が気絶するのを見計らって声をかけたのだが、仮に彼が目
を覚ましていたとしても耳に届く事は無かつただろう。

1つは男性の首にかけられたペンダント——デバイスであるハ
スターが念話で彼ともう1人だけに聞こえる様にしてあり、もう1つ
の声は普通では聞くことが出来ない死人の——高町士郎の声だか
らだ。

「やり過ぎとか言ってるけど、これでも大分加減はしたぞ？どれもこ
れも治せる程度の傷だけだし」

『そっか……治せるなら問題ないね』

『息子がボコられたのにこの反応。どう思いますか？』

「流石は戦闘民族ですわ」

『加賀美君もハスターさんも酷くない？』

コキコキと小気味の良い音を立てながら首を回していた男性が
フードを退かし、仮面を外す。そこにあったのは三白眼で薄っすらと
笑う青年の顔。目つきの鋭さとその笑みが相まって、こいつが悪だと
思わせる雰囲気醸し出していた。

「それじゃあとは任せるぜ」

『うん、ありがとうね』

運動をしたせいで上がった体温を肌の露出と髪を乱暴に搔く事で
発散してから加賀美は俯せに倒れていた恭也をひっくり返して心臓
の上に手を置く。

「壹 弍 参 肆 伍 陸 漆 捌 玖 拾

布留部 由良由良止 布留部」

唱えられたのはこの世界の魔導における詠唱では無く、異なる世界

における魔術の詠唱。加賀美の起源である干渉を用いることにより、死者である士郎と生者である恭也とを話し合わせる。馬鹿正直に正面からこういう事が出来るなどと話しても信じられないのは分かっていたので強引にこれを行うために気絶させる事にしたのだ。

加賀美の傍らに佇んでいた士郎の姿の透明度が増していき、気絶している恭也と重なって見えなくなる。加賀美がやったのは擬似的な憑依。今頃2人は精神世界で再会し、話し合っているだろう。

その間に加賀美は恭也の身体を治す。夢の中で師事していた女性から教わった魔術を使い、頭蓋骨のヒビと腹部の内出血を治療する。誰かに見られる可能性はあったが、この道場を覆い隠す様に魔術で人払いをかけているのでゼロに近いだろう。仮に見られたとしても魔術で記憶操作を行えば解決出来る。こちらの魔導でも似た様なことは出来るのだが、何人いるのか分からない転生者を警戒して敢えて魔術の方を使う事にした。

そして数分で治療は終わる。火照った身体も冷めたのでフードを被り直してコートの内側にしまって置いたタバコを加えて火を付ける。本来なら現在の肉体年齢的に吸ってはならないのだが、生憎と生まれ育った環境のせいで加賀美の中の倫理観は酷く偏ったものになっている。人前では兎も角人目のないところで、変身魔法を使っているのだから大丈夫だと考えているのだ。

「う……ッ」

「お、もう起きたのか?」

加賀美が一本目のタバコを吸い終わった頃、擬似的な憑依を始めてから10分足らずで恭也は目を覚ました。憑依が解かれた事で士郎も姿を現しているが、その顔は憑依する前に比べて晴れやかな物になっている。

「あんたは……」

「どうだ？親父さんと話は出来たか？」

「……ああ、凄い叱られた。こつちでボコボコにされて気絶したかと思ったら夢の中でも説教されながらボコボコにされてたよ」

「そうかそうか、そいつは上々だ」

吸い終わったタバコを携帯灰皿に入れ、蒼白い仮面を被り直す。

加賀美の目からしても恭也の表情は憑き物が落ちた様にさつぱりとしていて、さつきまで感じられていた鬼気迫るものは感じられなくなっていた。一体どんな話し合いが行われたのか気になるところではあるが、親子水入らずで行われた会話を書き出す様な無粋な真似はしない。これならば彼は踏み外す様なことはしないだろうと安心し、加賀美は道場から出ようとする。

「なあ……その、ありがとうな」

「……ククツ、どういたしまして」

恥ずかしいのか、ぶつきら棒に言われた感謝の言葉を笑いながら受け取って今度こそ道場を後にする。誰にも見られていない事を、そして誰も起きていない事を確認しながら人払いの魔術を解除し、気配を消して夜の闇に紛れる様にしてその場から立ち去る。

「にしても、善側のフォローもせにやならんとか……この仕事は面倒が多そうだな。これじゃあ前世まえの方が気楽だぜ……敵の殺意は凄かったけど!!」

『一体どんな前世を送ったのさ?』

「面倒めんどうごとこそ今世いまの方が多くなりそうだけどやってることは変わらなかつたな」

本気を出しているわけでは無いが、それなりの速度で移動する土郎

の疑問に答えながら、加賀美は上を見上げた。夜空に浮かぶのは綺麗な満月。前世の記憶の中でも深く印象に残った、彼がこの生き方を決意した時と良く似た光景がそこにはあった。

「――公publicの敵、絶対悪、必要悪、善性の否定者にして肯定者……
要するに悪役さ」

悪役日記・4

▲月a日

ベッドが愛おしく思えてきた今日この頃、高町恭也フルボッコ事件により俺は再び筋肉痛になった。全身を襲う激痛になんとか耐えながらも身体を起こせる程度まで回復させたところで実の息子を容赦なくフルボッコにする戦闘民族の士郎さんから俺の身体の事について話された。

彼の予想では、俺はリミッターが外れ易い体質なのではないかとの事らしい。普通、人間の身体は本来の性能100%を発揮すると耐えられないのでリミッターをつける事で問題無く使えるようにしている。緊急事態や感情が高ぶった時などはそのリミッターが外れて本来の性能を発揮することが出来るのだが、落ち着いてしまえば急激な疲労や無理な行使による激痛が襲ってくるらしい。前回の模擬戦、そして今回のフルボッコ事件を通して、彼はそうでは無いかと予想したらしい。

考えてみれば士郎さんの言っていることには心当たりがある。前世の幼少期に過ごしていた場所はこの世の地獄の様な、人間の醜悪な部分を集めて煮詰めた様な、まさに掃き溜めとしか言えない環境だった。善意を見せれば付け込まれる、弱者は食い物にされる、知恵がなければゴミの様に扱われる、そんな環境で子供だった俺が大人を相手して生き残る為には常に全力で抗う以外に方法が無かった。先天的に身についたのか、後天的に身についたのかは今となってはわからないが、確かに大人相手に廃材片手に立ち回った後には激痛に悶え苦しんでいた記憶がある。

士郎さんから言わせればこの体質はメリットであり、デメリットで

あるらしい。メリットは他の人間では発揮することが出来ない100%の性能を簡単に発揮出来ること。デメリットは言うまでもなく発揮してしまえばこうして動けなくなることだろう。

そう言われたがそれは身体が成長すれば解決する問題だ。前世では子供の頃は兎も角、大人になってからは多少身体が軋む程度で済んでいた。今は身体が子供だから100%の負荷に耐えられないだけであり、10年20年すれば自然と負荷に耐えられる身体に成長するはずだ。それに関しては土郎さんも同意見らしく、今後の稽古に力加減をコントロールする内容が付け加えられた。

もしかして前世で170センチ無かったのはこれが原因じゃ無かろうか？

▲月b日

ベッドから起き上がれ、歩ける様になったので出歩いても不審がられない時間帯を見計らって高町家が経営している喫茶店「翠屋」に行った。

子供ボディーになったせいで妙に威圧感たっぷりなドアを開けるといらっしやいませと耳通りの良い声を掛けられた。出迎えてくれたのは高町桃子さんと高町美由希さん、そしてカウンターの向こうで難しい顔をしながらコーヒーを淹れている高町恭也だった。どうやら生前に土郎さんが担当していた係を引き継ぐようとしているらしい。

憑いてきていた土郎さんがその光景を見て号泣していたのが鬱陶しかったので適当に念仏を唱えて昇天させかけた。

客として来ている、そして身体は今世の本来の姿なのだが、ここは戦闘民族が経営している店だ。なにかのタイミングで気配でバレた

とかなりかねないので無邪気な子供のフリをしながら名物らしいシュークリームを注文して食べた。

頭が真っ白になった。

気がつけば頼んでいたシュークリームは無くなってしまい、胃袋がすでに収まっていることを知らせていたがそれを無視して追加でシュークリームを頼む。パリパリとした生地、濃厚でいてしつこさが全くないカスタード、それらを崩さないように適切な温度で冷やされている。前世でもこれだけ美味な食べ物食べた事が無かった。

もう一個、もう一個と食べていくうちに気がつければ10個も食べてしまっていた。確かにこれは魔的である。土郎さんが家族補正込みで大きさに話しているだけかと思った。

これ以上入らないと胃袋が悲鳴を上げたところで満足し、テイクアウトでさらにシュークリームを頼んだ。これはヤバイ。身元バレしてしまう可能性があるのに毎日でも来たくなくなってしまいうちは無いか。

そして家に帰ってから手作りの土郎さんの位牌の前にテイクアウトしたシュークリームを置き、リビングのテーブルの上にもタナカへと紙に書いておいておく。是非とも彼にもこの魔性のシュークリームを堪能して欲しかったから。

朝になっていたらシュークリームは消え、代わりに日本円の札束が山積みになっていた。これは買ってこいという意味表示なのだろうか？

▲月c日

今日は面白い出合いがあった。

シュークリームの魅力に取り憑かれた俺は「翠屋」へとシュークリームを求めて出掛けていた。そしてその道中の公園で、言い合いをしているのが聞こえたのだ。

無視しようかと思ったのだがその公園は高町なのはと転生者の少年が良くいる公園。彼らに何かあったらこちらに支障が出てしまうので興味を惹かれたという程を装って覗き込んで見た。するとそこには転生者の背中に隠れながら怯える高町なのはの姿と、腕を組んで傲慢そうに見下している金髪の少年の姿があった。

金髪の少年が傲慢な物言いが高町なのはに語りかけ、それを転生者の少年が気に入らないのか怒気のもった声で反論していて一触即発の空気が公園には漂っていた。最終的には転生者の少年が彼女の手を引いて公園から出て行ったのだが、面白いのはここからだっただ。

2人が出て行った事で無人になった公園。1人だけ残された金髪の少年は突然頭を抱えてその場にしゃがみ込んだ。ブツブツと何かを言っているようだが距離があって聞き取りづらい。なので金髪の少年に気付かれないように気配を消してこっそりと近づいた。

すると金髪の少年は「またやってしまった……」だの、「これどうしたらいいの……」だの、傲慢な物言いに対する後悔をしていた。思わず何をやっているのか気になって声をかけると、彼は飛び上がりながらさつきと同じ傲慢な物言い話しかけて来たのだ。さつきの独り言を聞いていたのでそれを演技かと思いい、普通に話すように言ったのだが彼は話し方を変えようとしなない。なので近くに落ちていた木の枝での筆談を試みた。

結果、それは成功した。金髪の少年――桜木累さくらぎ るいは転生者で、転生の際にギルガメッシュという人物の能力とデバイスを特典としてもらったらしいのだが、その際に強制的にギルガメッシュという人物と

同じ話し方や素ぶりになってしまいう呪いも授かったらしいのだ。幸いな事にその呪いは他人と話す時だけに作用するのでこうして筆談する分には問題なかったようで、普通に話す事が出来た。

不快そうに眉間に皺を寄せながら睨んでくるのに、筆談では「これでもともに意思疎通が出来る……!!」と感嘆符をつけてまで喜んでいたのでとてもシユールだった。

向こうも俺のことを転生者だと気がついたようで「良かったら友達になってください」と頼まれたのでオーケーを出した。その時に筆談は喜んでいたが、口では「貴様のような蒙昧が我が友になるだと？ハッ!!片腹痛いわ!!」などと言っていた。

また明日会うことを約束して桜木と別れた。中と外が全く違う友人が出来た、良い1日だった。

日記を書いていて気づいたのだが、転生特典とは一体何なのだろうか？ハスター辺りが知っているかもしれないので、明日聞いてみる事にする。

悪役日記・5

▲月d日

タナカから話を聞き出そうとして、連絡手段が無い事に気づいた。こちらからは連絡は取れないが、依頼の内容的には向こうからこちらの事は観測しているはずだ。なのでリビングに適当な魔法陣書いて供物として「翠屋」のシュークリームを置き、いあいあ叫びながら適当な踊りを踊った。家に招いていた桜木はその光景を見て内外共にドン引きしていた。

すると魔法陣が良かったのか、それともシュークリームが良かったのか分からないが、魔法陣が光り輝いて俺を転生させた男タナカがある時と同じ姿で召喚された。

供物のシュークリームを齧りながら桜木の事を認識してタナカは動いた。手のひらでシュークリームを押し込んで一息で食べ、綺麗な円を形作りながら後宇宙返り。そのままクルリクルリと三度回転して爪先、膝、手の順番で静かに着地——俺の時と同じ様に、開幕から最終兵器である土下座を切り出した。

俺が見事な土下座だと感心し、桜木が突然の土下座に戸惑っている。タナカから事情が説明された。なんでも桜木は俺を転生させた悪神側でも、俺が転生する理由となった善神側でも無い、第三の神に転生させられた転生者だそうだ。元々は善神側が1人を転生させ、悪神側が俺を転生させて終わりだったはずなのだがそれを知った他の神が面白半分でこの世界に更に転生させたらしい。しかも複数人。桜木を含めて4人も。

それは規定違反らしく、その神は現在罰を受けているそうだ。善神と悪神の二柱による奇跡のタッグコンビが結成された。タナカは

言っていたが、どんな罰なのかが気になるところだ。

そしてその神が転生させた者たちに関しては特にお咎めは無いそうだ。しかしお咎め無しでの代わりに何もしない、つまり桜木にかけられた呪いに関してもノータッチらしい。その事に桜木は口では神には頼りたくは無いと悪態をついていたが、筆談では「転生させても良かっただけでもありがたい事です。呪いに関しては少し残念ですけどね」などと真逆の様に思えることを言っていた。

それを聞いて再び土下座を決め、シユークリームを片手に帰ろうとしていたタナカを呼び止めて転生特典なる物について尋ねた。すると、俺と善神側の転生者に関してはデバイスとリンカーコア、それと可能性を与えたと教えてくれた。

桜木を転生させた神がやった様に能力を与えるだけでは人間は育たない。その能力を伸ばそうと努力はするだろうが、それはあくまで与えられた能力の延長でしか無い。悪神も善神も、人間の可能性を信じている。悪を知りながらも善に生き、善を尊びながらも悪を成す人間の事を愛している。なのでいずれは頭打ちを迎える能力を与えるのではなく、最低限の補助と大事を成せるかもしれない程度の可能性を与えたとの事らしい。勿論可能性だから、何もしなければ起こらないと付け加えられたが。

成る程、俺たちの事を信じているからこそ目に見える形では与えてくれなかったらしい。なら、その期待に応えられる様に努力しよう。神の使いの様な立ち位置ではあるが、神の玩具になったつもりなんぞ欠片も無い。

俺は俺の意思で、この世界で悪となる。

▲月y日

桜木と遊んだり、土郎さんとの鍛錬で時間が取れなかったせいで日記に間が空いてしまった。日記が見つからなかったという理由もあったが、掃除の最中にベッドの下から見つけたのでまた書こうと思う。

俺の住んでる家の隣に、沙条と言う一家が引っ越して来た。仕事の関係で越して来たという沙条さんは2人の娘を連れて引っ越し蕎麦を片手に挨拶に来た。沙条さんは少し疲れているのか草臥れているもののダンディズム溢れるミドルガイだった。俺も歳をとるのならそんな歳の取り方をしたい。

2人の娘の片方は綾香といい、まだ首も座っていない赤ん坊だった。よく顔を見ようと覗き込んだ瞬間に愚図られたので悲しくなった。

そしてもう1人の娘は愛歌といい、俺と同年くらいの少女だった。きめ細かい金髪の髪に透き通った瞳、ドレスの様な服に愛らしい顔付きと相まってまるで人形の様に見える。沙条さんが唾を飛ばしながら愛歌がどれだけ可愛いのか自慢するのも分かる気がする。

この家の両隣は空き家だったので静かだったが、これからは騒がしくなりそうだ。前世では出来なかったご近所付き合いというものも少し期待している。

▲月z日

愛歌に懐かれた。超懐かれた。別れ際に頬にキスされるくらいに懐かれた。

事の始まりは本を読もうとこの街にある図書館に向かった事だった。俺の家から図書館までは距離が遠いのでバスを利用して行ったのだが、バス停から少し離れたベンチで泣きじゃくっている愛歌を発見したのだ。お隣さんなので見て見ぬ振りなど出来ずに落ち着かせてどうして泣いているのか聞いたところ、好奇心からバスに乗ったはいいが帰り道が分からなくなってしまったとの事だった。土地勘の無い街で親から離れて1人つきりというのは俺たち転生者の様に精神が成熟していない子供には泣きたくなくなる程に辛いのだろう。

なので予定を変更して愛歌と帰ることにした。憑いて来ていた士郎さんの安心させる為にとという言葉に従い、手を繋いで。

帰る道中で街の案内もした。また泣き出さない様にと愛歌の好奇心を刺激しながら面白おかしく解説を交えてだ。前世ではペテン師紛いの事も経験があるので、寂しさを感じさせない程に感情を刺激する事など簡単だった。前の街とは違う街並みにはしゃぎ、散歩していた犬に怯えて俺の背中に隠れ、歩いていた野良猫に走っていく愛歌は年相応の少女だった。

だけど野良猫を追いかけようとして道路を横断するのはやめて欲しい。俺が止めたから大事には至らなかったが、間に合わなかったら車に轢かれてたぞ。

途中で“翠屋”で愛歌と一緒にシュークリームを食べて家に帰った。クリームで口の周りをベタベタにしながらシュークリームを頬張る愛歌は素直に可愛いと思った。その時に桃子さんと美由希さんから彼女が出来たのかと聞かれたけど反応に困る。確かに俺の目からしても愛歌の事は可愛いと思うが、それは沙条さんの様な父親的な意味合いだと思う。未来の事は分からないが、少なくとも今の愛歌をそういう対象としては見る事はできない。

沙条家の前に到着したところで包丁を両手に持った沙条さんに遭遇した。なんでも今愛歌が居ないことに気がつき、誘拐されたと考え探しに出ようとしていたらしい。装備が探しに行く格好では無くて殺しに行く格好だったが、それはそれだけ沙条さんが愛歌の事を大切に思っている事の証だろう。実の親の顔を覚えていない、実の親から愛された覚えの無い俺からしたら羨ましいものだった。

そんな顔をしていた俺に、愛歌は抱きしめて無事を喜んでいた沙条さんから離れると俺の顔に手を添えて、「今日はありがとう、私の王子様」と言つて俺の頬にキスをしたのだ。

俺は愛歌の行動に混乱した。

そして憤怒の表情を浮かべながら包丁を握っている沙条さんを見て正気に戻った。

デッドオアアライブな鬼ごつこの果てに何とか生きる権利を獲得することが出来たが、今後沙条さんに会うのは少しだけ怖くなってしまった。俺の明日は愛歌に掛かっている。沙条さんの事を落ち着かせてくれる様に祈ろう。

道中気になることがあった。愛歌と歩いていると、銀髪でオッドアイの少年が妙に馴れ馴れしい態度で俺の事など見えていない様に愛歌に話しかけて来たのだ。その事に愛歌は怯えて俺の背中に隠れたのだが、それに対して銀髪の少年は「俺の嫁に何をしゃがる」「モブキャラ風情が生意気だ」などと言つて殴りかかって来た。言動が完全に頭のヤベー奴のそれだった。幸いな事に近くを通りかかった大人が間に入ってくれ、その隙に逃げる事が出来たのだがアレは一体何だったのだろうか？

それと、桜木が愛歌の事を見て白目を剥いて固まっていたのも気になる。今度会った時に聞いてみよう。

無印

黄衣の王と花の魔術師

——いあ！いあ！はすたあ!!

暗闇の中、上下前後左右も分からない空間の中で四方八方から声が聞こえてくる。

——はすたあ！くふあやく！ぶるぐとむ！ぶぐとらぐるん！ぶるぐとむ!!

それは讚美歌。旧支配者である「名状しがたきもの」、
「星間宇宙の帝王」、
「邪悪の皇太子」を崇め、讚えるための歌。

——いあ！いあ！はすたあ!!

どうして俺はこの場にいるのだろうか。土郎さんとの鍛錬を終えてベッドにダイブした事は覚えている。そこから先の記憶が無いので、恐らく寝落ちしてしまったのだろう。なら、俺はこの場に呼び寄せられた事になる。自分の意思でここに来ようと考えた事など一度も無い。それ以外に考えられない。

「……いい加減、姿くらい見せてくれない？邪神様」

『おや、気づいていたのだな?』

呆れた様に言えば、讚美歌が途絶えて目の前に黄色いローブで全身を覆い隠した人物が現れた。見えなくても存在している事には気づいていたのだが、目にした事で改めて理解させられる。タナカの側だと言っていた悪神とは全く異なるベクトルの神。狂気、冒瀆、醜悪と

いう人間にとって忌避すべき物を脳髓にダイレクトに叩き込まれた様な衝撃を味わいながらも、その身から放たれる神性が下等な存在である俺に跪く事を要求してくる。正気を投げ捨てて、その欲求に従えば楽になれると理解し、

「意志：精神汚染無効こんにちわ、邪神ハスター。一体なんの様かな？」

それを意志力にて振り伏せ、平然を装いながら対応する。

仮に正気を投げ捨ててその欲求に従ったところで出来上がるのは狂信者が1人だけだ。タナカとの依頼があり、そうなれば嘆き哀しむ者たちがいるのだからそうする訳にはいかない。

『ふむ……現し身とはいえ飲み込んだか。何、そちらのデバイスとかいう物にわざわざ我が名を付けていたのでな、暇つぶしを兼ねて呼び寄せたのだ』

「暇つぶしでたかが人間を自分の領域に呼び込むとかやめてくれませんかねえ……」

『たかが人間？何を言うか!!現し身とはいえ我が姿を見て狂気に晒されながらも、それを飲み下して正気を保つ貴様のどこがたかが人間か!!』

「ハッ!!邪神の狂気だと？生憎と俺は悪を自称しているものでな、そんなもので押し潰される程度の柔な精神なんぞ持ち合わせていないんだよお!!」

ハスターが顔を近づけてきて視界いっぱい蒼白い仮面が映る。それに対して引くのではなく、逆に顔と顔が触れそうになる程に踏み込んで行った。

虚勢でもいい、心を奮立たせる。ハスターを前にして少しでも臆してしまえば、その瞬間に俺はこいつの狂気に飲み込まれて戻ってこ

れなくなると誰に教えられた訳でもなく直感で理解していた。

そうやって数秒顔を突き合わせていると、ハスターから放たれていた狂気が僅かに和らいだ。仮面で顔は分からないが、気配からすると笑っている様だ。

『良いぞ、面白い。我が狂気に晒されながらも己を欠片も見失わなぬ強烈な自我……気に入ったぞ。貴様が己を見失わずに貴様で有り続ける限り、我が風に加護をくれてやろう』

『待って、それって加護っていうよりも呪いの類いじゃない?』

『精々その生き様で我を楽しませろ』

「この腐れ神イツ!!愉快ってんじやねえぞ!!ジャパニーズサブカルチャーパワーでお前の事を辱めてやるからな……!!」

『え?我何をされるの?』

日本のサブカルチャーへの力の入れようは狂気の域に入っていると思う。動物を、武器を、戦艦を、果てはグロテスクなクトゥルフ神話の邪神でさえも美少女に擬人化させてしまうから。初めて日本に来た時、サブカルチャーに触れて日本の闇の深さを感じたのが昨日の様に思い出される。

「精々萌えキャラになって触手でヌルネチヨに犯される自分の姿を見て悶え苦しむが良い……!!」

『待て、それはどういうー』

これから自分が何をされるのか分からなくて恐怖を感じているのだろうハスターが慌てながら俺に向かって手を伸ばす。しかしその手が届く前に俺は不可視の力でその空間から弾き飛ばされた。

気がつけばそこはハスターの領域では無く、別の空間に来ていた。視界一面に咲き乱れる花、それを塔の最上階から見下す。空を見れば雲一つない青空で、暖かな日差しが強過ぎず弱過ぎず丁度いい塩梅で降り注いでいた。

「ここは……」

「……やあ、久しぶりだねキョウヤ」

ここがどこなのか理解すると同時に、背後から抱き締められた。転生した事で縮んだ身体を必死に使う事で何とか身体の向きを変えると、そこにいた下手人は予想していた通りの人物だった。

「マーリン」

薄い桜色に染まった長髪に女性らしい身体付きを隠そうともしない白いローブを羽織った女性。彼女はこの塔の主のマーリン。魔術の無い世界の住人であった俺に魔術を教え、それだけでは無く何も知らなかった俺に生きる為に必要な知識を教えてくれた女性だった。

「いやはや、君の世界から君の気配が無くなってあちこち探していたら、まさかあんなところで見つけるとはね。絡まっていたのが危ない奴だったけど、これは幸運だったと素直に喜んでおこう」

「俺も会えて嬉しいよ。ちゃんとした別れも出来なかったからな」

前もって死ぬ事が分かっていれば、死ぬかもしれないと覚悟をしていればその前に前世で別れを告げる事が出来たのだが、事故死だったのでする事ができなかった。前世で残した唯一の未練だったのだが、こうしてまた会う事が出来たので良かったと喜ぼう。

「でも世界を跨ぐ的な事してるけど大丈夫なのか？これって魔法の領域だと思うんだけど」

「ん？大丈夫だよ。知っていると思うけど、ボクと君が会っているのは夢の中だ。人間の夢っていうのは孤立している様に見えて実は繋がっていてね、それを辿ってこうして会いに来たというわけさ」

話を聞く限りではかなり無茶をしているように思えるのだが、彼女は無理なことは無理だと、無茶な事は無茶だと口にする人だ。彼女が大丈夫だと言うのなら大丈夫なのだろう。

「それなら良いんだけど」

「それにしても……キョウヤ、いつの間に君はこんなに可愛らしくなってしまうんだい？まるでボクらが最初に出会った時の様じゃないか」

「ちよつと頼まれ事があつて、その結果別の世界に転生したんだよ」

「頼まれ事って……また悪役かい？」

頷く事で肯定すると、抱き締められる力がほんの少しだけ強くなった。そういえば前世でも悪役をする事を伝えたい時には似たような反応をされたなあと懐かしむ。

「君が決めた事ならボクは何も言わない。だけど、1つだけ言わせてくれ……どうか、自分を大切にしてくれ。君はどうしても、自分の事を軽く見過ぎるからね」

「自己評価を間違えたつもりは無いんだけどなあ……」

「評価じゃなくて価値を間違えてるんだよ。確かに、君は世間的には

見れば換えの効く人間なのかもしれない。だけど、ボクや君の親友からすれば、君は何にも換えられない存在なんだ」

「言いたいのは分かった……でもあいつ、容赦無く殺しに来てたけどな!!」

「それはそれ、これはこれと考えてるんじゃないかな？彼も彼で割と壊れた人間だったからね」

抱き締められ、久しぶりのマーリンの温もりにハスターによって削られた精神を癒していると視界が白ずんで来た。何度も経験したこのある夢の目覚めだ。

「また会えるよな？もつと話したい事があるんだ」

「また会えるさ。こうして出会えた事で君とボクの間には再び縁が出来た。あとはそれを辿れば良いだけだから、いつでも気軽に会う事が出来るよ」

「ああ、それなら安心だ」

彼女とまた会う事ができる。そう言われた事により不安は無くなった。もう会えなくなるかもしれないと怯えながら夢から覚める様な事はしない。

「またな、マーリン」

「またね、キョウヤ」

だからこうして再会を約束する言葉を交わし、俺は夢から覚めるのだ。

f i r s t t i m e

意識が夢から現実に帰ってくるのと同時に腹部に何かのしかかかって来た。日頃から行なっている土郎さんとの鍛錬の成果と、のしかかかってきたものが思いのほか重たくなかったから然程ダメージは受けていない。のしかかかってきたものの正体に察しをつけ、視線をそちらに向ければ予想していた通りの人物が乗っかっていた。

「……おはよ、愛歌」

「フフツ、おはよう両夜」

下手人は予想をしていた通りにお隣に住む幼馴染の少女愛歌だった。窓から差し込んでくる朝日に照らされているせいで彼女の金髪がキラキラと輝き、彼女の容姿と相まって一枚の絵画の様に見える。

「そしておやすみ」

「ちよ、二度寝はダメよ!!」

寝てからハスターの元に飛ばされ、マーリンと再会したせいで精神的な疲労が取れていない。主に前者の方が原因なのだが、今は少しでも眠りたい気分なのだ。だから二度寝をする為に布団を頭まで覆い被さって寝ようとしたのだが、愛歌に剥ぎ取られてしまう。

「もう、折角作った朝御飯が冷めちゃうじゃない!!」

「あと30分は寝ても間に合うと思うんだけどなあ……」

「ダメよ。綾香がお腹空かせて待ってるんだから」

「綾香も来てるのか……なら起きないとダメだな。って、沙条さんは？」

「お父さんなら今頃一人でご飯食べてるんじゃないかしら？」

愛歌の沙条さんへの対応が厳し過ぎる様に思えるのだが、あの人はダンディズム溢れる見た目でありながら娘からの対応は塩でも砂糖でも大喜びするという人間なので問題無いのだ。一歩間違えればただの危ない人なのだが、親子だから許されると思われる。

でも愛歌がこんな対応をするのは理由があったりする。沙条さん、流石に勝手に愛歌の日記を読むのはダメだと思う。

「だから早く起きて……」

「ん？どうしたんだ？」

突然言葉を切った愛歌が何かを確かめる様に俺の身体に顔を近づける。どうやら匂いを嗅いでいる様だ。今では慣れたので特に反応はしないのだが、ある日突然俺の匂いを嗅ぐと安心すると言って匂いを嗅いできた時は本当に驚いた。

どうせ今日もそんな感じだと思い……

「……知らない女の匂いと花の匂いがする」

……その言葉に一瞬身体を硬直させてしまった。

知らない女というのはマーリンの事だろう。しかしなんで分かった？彼女とは夢の中で出会ったのだから現実の肉体に匂いなんて移る筈がないのに。しかもそれだけではなくて花の匂いまで気づいている。一体どういう嗅覚をしているのか教えて欲しい。

光の消えた目で、愛歌が俺の顔を覗き込んで来た。

「ねえ、一体誰の匂いなのかしら？」

「落ち着け。知らない匂いがすると言われても全く覚えが無い。風呂

に入ってそのまま寝たから外にも出てないしな。お前なら分かるだろ？」

「確かに……お風呂場の電気が消えてからすぐに家が暗くなってたわね。夜も家から出た気配は無かったし……」

自分で言っておいてなんだが、どうしてこの幼馴染様は俺の行動を把握しているのだろうか。家に監視カメラや盗聴器が仕掛けられていないことは前世からの習慣で毎日確認している。なら覗き見されたのではと考えるが、俺が寝たのは土郎さんとの鍛錬が終わったからなので夜中……つまり、愛歌はもう寝ているはずの時間帯なのだ。ハスターに愛歌が寝ているかどうか確認してもらったから鍛錬をしているのに。

「むむう……分からないわね、でも匂いはする。だから上書きするわ!!」

「あゝハイハイ」

上書きすると宣言して愛歌がした行動は抱きつく事。ギョウつという擬音が付きそうな程に力一杯抱きしめて来て、俺もそれを拒まずに受け入れて抱きしめ返す。こうしてやらないとその日一日愛歌の機嫌が悪くなるのだから仕方がない。不機嫌になった愛歌は桜木が怖気付く程に謎のプレッシャーを發揮するのだ。直接的な被害は全て沙条さんに向かうので無害といえば無害なのだが、怖いから不機嫌にさせないでくれと桜木から懇願されている。

「……ん、もうしないわね。大丈夫よ」

「だったら着替えるから降りてくれ」

はくいと機嫌良く返事をして部屋から出て行く愛歌を見送ってから寝間着を脱ぎ捨ててハンガーに吊るしてあった服……私立聖祥大付属の制服に着替える。原作の舞台である海鳴市内には住んでい

るものの、主人公である高町なのはと近い方が行動しやすいから、それと学校に通わなければ不自然だからという理由で二度目の人生で学校に通っている。前世では学校なんて話に聞いただけの存在で、勉強はすべてマーリンから教えられていたので為になるかどうかは別として、新鮮で楽しい。

白を基調とした制服なのだが個人的には似合っていない気がする。桜木に見せた時も腹を抱えて大笑いされたし、そんな桜木にドロップキックを決めていた愛歌も私服で頑張れと言われた。

「そういえばそろそろだったな」

制服に袖を通したところで桜木から前に言われた事を思い出していた。

原作にどハマリしていたわけではないので俺の知識は大まかな話の流れや登場人物、重要な語句だけに留まっている。細かな事は桜木の方が詳しく覚えていたので教えてもらったのだが、高町なのはが小学三年生の時に無印が始まるのだと教えられた。現在、俺は小学三年生。そして高町なのはも同じ小学三年生。つまり、そろそろ無印の始まるタイミングなのだ。

「やつとか……何というか、感慨深いな」

ようやくタナカからの依頼を果たす時が来た。そう思うと少しばかり緊張してしまい、すぐに湧き上がる興奮に塗り潰される。頼まれたからという理由が存在しているもの、もし頼まれなくてもこの世界がどんな世界なのか分かっていたら同じように行動をしていただろうか。

なにせ、俺は悪役だ。

公共の敵、絶対悪、必要悪、善性の否定者にして肯定者……善というものがこの世の中に存在していることを証明する為に悪を行う性格異常者。それが俺なのだ。一度死んだ程度では変わらない、邪神の狂気に晒されたとしてもブレない、そういう生き方をすると決めて、そういう生き方を貫き通す愚か者。

「それで良い、それが良い」

辛いと感じた事はある、苦しいと思った事はある。けども、前世でそうやって生きて、後悔したことなど一度も無かった。きつと決めたからなのではなく、俺はこういう生き方をするしか出来なかったのだろう。

「物語が始まったら祝福してやるよ、善性様。だからどうか、悪が倒されるに相応しい存在であってくれ」

悪役とはトドのつまり、正義に倒される存在である。高みへと持ち上げる為の踏み台、強さを浮き彫りにする為のやられ役、輝かせる為のかませ犬……そうであると決めた瞬間から負ける事が確定される役職である。

だからこそ、望むのはたった一つだけ。こいつならば倒されても惜しくはないと思えるような正義であってほしいという事。そう思えるような存在に打ち負かされるのならば、俺は拍手喝采しながら地獄に堕ちたって構わない。

だが、もしも俺の眼鏡に敵わない様な存在が善神側の転生者として現れ、朗々と正義を歌うのなら、俺はそいつを迷う事なく滅ぼす。そして次の正義を待つ。

だから願わずにはいられない。どうか相応しい存在であってくれ。
タナカからの依頼を果たさせてくれ。

そう考えていると鏡が視界に入り、そこには邪悪な笑みを浮かべた俺の顔が写っていた。愛歌たちにこんな顔は見せられないとすぐにいつもの顔に戻し、彼女たちが待っているリビングに向かう事にした。

「やてやてつと」

深夜に愛歌が寝静まった事を確認してから海鳴市の都市部に建てられた高層ビルの屋上を陣取る。海鳴市で一番高い建物という事だけあって、そこにいれば市内を見渡すことが出来るからだ。物語の始まりが間近に迫っていると桜木から教えられてから、異変があったらすぐに分かるようにと暇を見つけてはここで過ごす様になっている。

「ーーなんだ、貴様も来ていたのか」

『こんばんわ、加賀美さんも来てたんですか？』

そこに現れたのは黄金に光り輝く船に乗った金髪の少年。神からの呪いによつて強制的なロールプレイをさせられている桜木だった。

桜木が話しかけた事により、右目では彼の姿を捉えながら左目には空中に投影されたモニターが写り、桜木の言葉に合わせる様にして文字が走る。桜木は神からの呪いのせいで口頭ではまともに話すことが出来ず、筆談でしか正確に意思の疎通を行うことが出来なかった。しかし一々筆談をしていたら面倒だという事で、念話を応用したチャット機能の様なものをデバイスに組み込んだのだ。

これのおかげで俺は桜木の言葉を正確に理解する事が出来るようになった。最近では慣れたのであの王様口調の翻訳も出来るようになったのだが、それでも何が言いたいのか正確に分かった方が良いに決まっている。

黄金に光り輝く船が宙に浮いているというのに、地上にいる人間たちは誰一人として騒いでいない。恐らく、桜木の言っていた宝物庫の

財宝とやらを使って彼らの認識を阻害しているのだろう。

「よお桜木、相変わらず違うようで同じ事を話してるな」

「あの忌々しい神の呪いが原因だ。善神と悪神によって罰されているのならば多少は胸がすくのだから」

『腐れ神の呪いのせいですよ。善神と悪神が罰をしているらしいですから多少はスッキリしましたけどね。会う機会があったら乖離剣見舞わせてやる……!!』

「内側の方、相変わらずその神に対する殺意たけーなあ……で、もうそろそろ原作の始まりだっけ？」

「その通りだ」

『その通りです』

そう言いながら桜木は船から飛び降りて俺の隣に座る。そして背後に黄金の渦を展開させ、そこから黄金の盃2つと市販のジュースのボトルを取り出して俺に渡して来た。それは俺の気に入っているメイカールの製品で、律儀に適温に冷やされている。言葉こそ傍若無人を地で行く様な桜木だが、根は善良で真面目な少年だ。学校でも言動から始めはドン引きされていたが、今ではクラスの長をクラスメートたちから推薦される程に親しまれている。

「ユーノ・スクライアが発掘したロストロギア、ジュエルシードを乗せた輸送船がプレシア・テストアロッサに襲撃されて海鳴にばら撒かれる。で、ユーノ・スクライアがそれを集めようと行動している最中に高町なのはと接触して戦闘民族出身のJSからリリカルな魔法少女JSにジョブチェンジを果たす……だったよな？」

「間違っってはおらんがもう少し言い方というものがあるであろうが、戯けが」

『間違いじゃないですけど少し悪意的な変質を感じるんですけど……』

「ワザとだよ」

悪意のある変質をしているのは認める。でも間違っていないから問題ないはずだ。現在高町家にいるはずの士郎さんの視覚を“干渉”を利用して借りれば、そこには自室で机に向かって勉強をしている高町なのはの姿があった。桜木から原作の始まりが近いことを教えられてから、士郎さんには高町なのはの事を気にかけて欲しいと伝えていたがその通りになってくれているらしい。

酷い時には桃子さんの入浴シーンとか映ったりするのだが。そして翌日になって愛歌に怪しまれるまでがデフォルトだったりする。

『で、加賀美さんは悪神に頼まれた悪役に徹するんでしたよね?』

桜木の口からではなく、モニターに映る文字だけを見てああと返事を返す。彼が会話をするのが面倒になって来た時によくやる事だ。面倒臭がるなど言いたいのだが、自分の考えている通りの言葉を出せないのだからどうも強く言うことが出来ない。

「タナカが言うには、結果的に善神の転生者に俺は悪だと認識されれば良いんだってよ。だから研究用にいくつかジュエルシールドパクって、最終的にはこの騒動は俺が起こしたっていう風に思わせるつもりだ」

前世ならば迷う事なくジュエルシールドがばら撒かれた瞬間に表立って活動をしていたが、生憎と今の俺は子供だ。なので無印とA、s編は出来るだけ動かず、所々で思わせぶりな言動をとる事で俺が悪だと思わせる事にすると決めた。本音を言えばすぐにでも動きたいのだが、今は準備期間だと自分に言い聞かせる事で堪える。

それに悪神の転生者である俺が子供である様に、善神の転生者も子供なのだ。少なくともstrickers編で身体が出来上がって来

た頃合いになってからじゃないとつまらない。

『イかれていますね……普通悪役なんて自覚して自分からやりたがりませんよ。貴方、前世は何をやってたんですか?』

「前世でも悪役をやったぞ?それこそ国際指名手配されて賞金を掛けられる程に有名だったな」

『根っからの悪役だよこの人』

「自覚はしているさ……自重はせんがな!!」

そんなものは前世の頃から自覚している。悪役になる事を決めて、悪役をやっていて気づいたのだ。過程はどうであれ、俺は絶対にこうなる事を選ぶと。運命という言葉はあまり使いたく無いのだが、こればかりは運命だと言うしかない。

『そう言えば善神の転生者って分かってるんですか?まだ顔も分かりませんとかだったら間抜けなんですけど』

「既に調べてある。ハスター、データを頼む」

『Yes sir.』

ハスターに声をかけるとチャットモニターとは別のモニターが投影される。そこに映るのは高町なのはと一緒に歩いている黒髪の少年の写真。楽しそうに笑う高町なのはと共に、彼も楽しそうに笑っていた。

「名前は黒須龍斗、くろすりゆうと聖祥大付属の小学三年生で高町なのはと同じクラスだ。タナカに確認を取っているから間違いないぞ」

『写真見た限りだと誠実そうな奴ですね』

「性格は真面目で努力家。正義感は強いものだからといっても頭が硬いわけじゃなく、相反する意見を聞いて妥協点を出せる様な柔軟さを持つているらしい」

『何ですかそのどこかのゲームの主人公的なステータスは』

「残念だが事実だ。周囲からの聞き込みと俺の目で確かめた事だからな」

前世で絶対正義としてあった俺の親友とは違ったタイプの間人だが、彼の様な人間も正義のあり方の1つだ。今はまだ未熟だが、それは言い換えれば成長の余地があるということに他ならない。願わくば、最後に俺と対峙する時には俺が認められる様な素晴らしい存在になっていてほしい。

『でも戦えるんですか？加賀美さんの様に前世の経験にプラスして士郎さんに憑かれて稽古をしているのなら分かりますけど』

「問題ない。あいつの家は道場を開いていて剣を教えている。それも、実戦形式のな。恐らく転生する時にそういう家に生まれる様に頼んだんじゃないか？」

『なんて御都合主義』

タナカから聞いたのだが、黒須は前世では喧嘩もしたことの無い人生を歩んでいたらしい。だからこそ戦える様になりたくてそういう家に生まれる様に頼んだのだろう。桜木たちからすれば転生特典の様に思えるだろうが、俺はそうは思わない。

桜木たちは戦える力を直接神から与えられ、黒須は戦える力を学べる機会を与えられた。同じように聞こえるだろうが、その2つは絶対的に異なっている。

「御都合主義？その何が悪いんだ？」

そして、俺は御都合主義は嫌いでは無い。

「どうしようもない絶望に見舞われる事があるだろう。己の無力を嘆く事があるだろう……誰にもどうすることが出来ない状況、そんな時

に祈らなかつたか？ああ神様助けてくださいって」

『それは、ありますけど』

「嘆きなんて、悲しみなんて、絶望なんて無いに越した事はない物だ。それにぶち当たった時に御都合主義を望み、御都合主義を授かり、御都合主義で解決する。誰もが笑顔で迎えられるハッピーエンド、大団円で終わるのなら御都合主義だって悪いものじゃないさ」

『でもなあ……あの腐れ神に助けを求めらるってものなあ……』

「そこかあ」

全ての神が悪い訳ではないと桜木も理解しているだろうが、染み付いた苦手意識はそう簡単には無くならない。桜木が気に入らないというのなら、それはそれで良いのだ。俺の考えと桜木の考え、その2つを統一させる必要なんて無いのだから。

「ツーーと、来たみたいだな」

『そうみたいです』

乾いた喉を湿らせようと盃にジュースを注いでいると、空中に突然魔力の塊が現れ、21に分かれて別々の方向へと飛んでいった。恐らくはあれがジュエルシードだろう。桜木の言う通りに進むのであれば、この後にユーノ・スクライアがやって来る事になる。

「今の内に1つだけでも回収しておくか……山の辺りに落ちた奴があるな。それにしておこう」

『山の中……温泉の時のかな？まあ、争いの種が減ると考えればそうした方が良いでしょうね。僕のヴィマーナに乗って行きます？』

「マジで？助かるわ。夜の内に往復出来ない距離じゃないけど、そうすると朝が辛くてな……ん？」

『何かありました？』

「黒須につけた魔力スフィアが反応してる……黒須が動いたのか？」

黒須につけていた監視用の魔力スファイアが反応している。それは黒須が行動を起こしていると言う証拠。なので映像を繋げると、黒須がデバイスと思われるアクセサリーを手にながら夜の街を走っていた。黒須の走っている方角からおおよその目的地を割り出し、予め町中に仕掛けていた監視用の魔力スファイアの映像を空中に投影する。

するとそのうちの一つが民族衣装のような衣服に身を包んだ少年と、地球では見ることが出来ない不定形生物とが戦っている光景を映し出していた。

「おお、もしかしてユーノ・スクライアに助太刀するつもりか？」

『……………マジで？』

「ふあ〜……」

ジュエルシールドがばら撒かれた翌日、俺の所属しているクラスの自分の席で机に上半身を預けながら大欠伸をする。疲れが取れていないせいで眠たくて仕方がない。原因が肉体的なものではなくて精神的なもので、授業が始まるまで寝たところで気休めにもなりはしないだろう。

「起きてからずっと眠たそうね、両夜。昨日は寝れなかったの？」

「寝る事には寝たんだが……何というか、寝たのに寝てない感じで疲れてる」

俺の前の席に座る愛歌にも心配されてしまう始末だ。前世では弱みを見せれば付け込まれるような環境で育ってきたので人前では弱っている姿を見せる事はなかったのだが、今世では環境が優しいからなのかつい無警戒になって見せてしまう。前世のあの環境で育っていた当時の俺が見れば驚くかもしれないが、個人的には良い傾向の腑抜け方だと思う。あの時は周りが敵だらけだったから弱い姿を見せてはいけなかったが、今ではこんな姿を見せても誰も付け込もうとしないのだから。

昨晚、ジュエルシールドがばら撒かれて原作がスタートする用意が整った。本来ならばユーノ・スクライアがあの時点でジュエルシールドによって作られた生命体によって負けてフェレットになるのだが、黒須の介入により無事に倒したのだ。それを見ながら、開幕から原作ブレイクとはやってくれたなど大笑いしつつ、山に落ちたジュエルシールドを回収した。そして家に帰って冷静になったところでこの重大さに気がついてしまったのだ。

ユーノ・スクライアが無事という事は、高町なのはとの接触の機会が失われるという事である……つまり、タイトルにもなっている魔法少女が誕生しないのだ。

これは不味い。原作ではあのスタートで様々な経験を積んで成長した彼女だったからこそ超えられた困難がいくつもあった。魔法少女になる時期がズレて成長に原作と誤差が出てしまえば、原作では超えられた困難も超えられなくなってしまう可能性がある。

他の転生者たちは恐らくこの原作ブレイクに気が付いていない筈だ。昨日、黒須とユーノの共闘を観ながら周囲に監視の目が無いか確認したのだが、誰も観ていなかったのだ。俺の索敵をやり過ごしていた可能性もあるにはある。しかし、転生してから今日まで転生者の存在を捕捉して監視してきたのだが、黒須以外だれ一人として修行らしい修行を行っていないかったのだ。そんな奴らが俺の索敵をやり過ごせたとはい到底思えない。

原作が始まるまで、どういう形で介入したら悪役おれという存在を際立たせながら出来るだけ被害を抑えられるのか考えてきた。しかし、それはどれも高町なのはが魔法少女として覚醒することが前提条件だ。油断していたと言われても仕方がないのだが、タイトル詐欺なんて流石の俺も予想出来なかった。

「……何か考え事？」

「ああ」

「それって私に話せない事なの？」

「ああ」

「両夜って本当にズルいわね……何を隠しているのか教えてくれないくせに、隠しているって事は簡単に教えてくれるんだから」

転生者ではない愛歌にこんな事を話せるはずが無い。だから俺の悩みを明かせずに困ったような顔をさせてしまった。仮に沙条さんが今の愛歌を見れば、いつぞやの様に包丁を両手に持ったマーダー沙条さんとの猟奇的な鬼ごっこが再開される事になるだろう。

だけど、愛歌はそれ以上踏み込んで来なかった。俺の隠し事に彼女を巻き込みたくないのだと察してくれているから。力になれない事を口惜しみながらも、俺の意思を尊重してくれている。

「力になって欲しかったらいつでも言ってみてね？このパーフェクト愛歌ちゃんがいつでも力になってあげるから」

「そんな事にならないで欲しいけど……そうする以外になかったらそうさせてもらおうわ」

それで満足してくれたのか、愛歌は俺の頭を撫でてきた。優しく労わる様に、幼くて暖かな手で撫でてくれる。彼女の顔はまるで母親が子供に向ける様な慈愛に満ちた表情になっていた。そんな顔を見れば、彼女の手を振り払うという選択肢なんて選べるはずが無く、彼女の思うままにさせておくしかない。

「……我が来た!!」

『おはようございまーす』

そんな中で教室の入り口が力一杯開かれて桜木がやって来た。相変わらずの内面と外面の温度差に笑いそうになってしまう。

「お、桜木じゃん。おはよー」

「おはよう、桜木君」

「我様!!我様!!我様!!」

一歩間違えれば頭のヤベー奴の様に思える挨拶と共にやって来た

桜木だが、クラスメイトたちは当然の様に挨拶を返すだけだった。実はこのクラス、学年が上がった事による入れ替わりが殆ど存在せずに一年生の時とほぼ同じ顔ぶれで固定されているのだ。なので桜木のあの発言にもすでに慣れてしまい、「言葉は乱暴だが実は良い奴」的なイメージを持たれている。一年生の頃は一々俺が間に入って桜木の言葉を通訳してやらなきやいけなかったのが懐かしい。

そして桜木が来たという事はもうそろそろホームルームの時間になるという事。少しだけ名残惜しそうな顔をして、愛歌は自分の席へと向かっていった。

彼女の手が頭から離れる時、少しだけ寂しいなと感じた。

「それでは、高町なのは魔法少女化計画を始めます」
『なんか頭のおかしい計画立てましたね』

学校が終わって深夜と呼ぶにはまだ早い時間帯。ヴィマーナの上で今夜やるべき事を告げると桜木から頭のヤベー奴を見るような目で見られてしまった。

安心してくれ、俺もやばい事を言っているという自覚はある。ただどうもしなきやならんのだ。

「自分でも頭のおかしい計画立てたって自覚してるけどさ、桜木だって分かるだろ？このまま進められるとやばいって」

『まあ……確かにそうですね』

俺と桜木を始めとした転生者たちが持つているであろう原作知識は、全て高町なのはが魔法少女になる事が前提条件となっている。このまま黒須がユーノとジュエルシードを集めて、原作の様に進まなかったら何が起るのか分からないのだ。21個もあって、その内のたった一つでも地球を滅ぼせる危険性を秘めている。なら原作通りに進ませる事でその危険性を排除したいと考えるのは当たり前のことだ。

『でも、加賀美さんには士郎さんが憑いているですよ？娘を危険な目に合わせるのをあの人が許しそうに無いんですけど』

「そういうと思って、捕獲した高町士郎がこちらになります」

『うおおおおおおおッ!!離せ!!離せエエエエエッ!!なのは!!なのはあああああッ!!』

『うわあ……空中に浮かんだお札が暴れまわってる』

士郎さんの姿を視認できる俺からすれば、今の彼は全身にお札を貼られて身動きが取れずにまな板の上で暴れまわる魚の様に見える。しかし霊体が見えない桜木には言った通りにお札が暴れ回っている様にしか見えないのだろう。

「ちゃんと事情は説明したんだけど、土壇場になってごねられてね。必要な処置だよ」

『目の前の光景がホラーなんですけど……でも魔法少女化計画ってどうするんですか?』

「捻った事はしないさ。始まりと同じ様に高町なのはとユーノ・スクライアを会わせるだけだ」

ただし、と付け加えながら海鳴市に設置していた監視用の魔力スフィアから送られてくる映像を空中に投影する。その内の一つには黒須とフレットになつているユーノが町を探索している姿が、一つ

には結界も張らずに戦っている赤髪と銀髪の2人の少年の姿が、一つには人気の無い町を徘徊している不定形のジュエルシードの魔力生命体の姿が映し出されていた。

「赤髪と銀髪の2人に黒須をぶつけてユーノから離し、その後でユーノをジュエルシードとぶつかる。ユーノが負けそうになったタイミングで高町なのはがやって来てくれればベストだな」

『要するに原作と同じ流れで魔法少女にさせようとしていると』

「その通り。無論、ここで死なれたら困るので最低限のサポートは陰ながらにするつもりだ。それを予め教えてあるのに……」

『なのは!!なのは!!なのはぁーっ!!』

「このザマだよ」

『お札がブレイクダンス踊ってる様にしか見えない……』

是非ともその光景を見てみたかったのだが、生憎と俺からの視点では士郎さんが高町なのはの名前を叫びながらぐるぐる回っている姿しか見えない。

この作戦が危険だと理解しているので俺たちの存在がバレない限りのサポートをすると約束したのだが、やはりそこは親というべきなのか、土壇場になってこうしてごねられてしまった。これを士郎さんのわがままだと非難するのは容易いが、彼の心境を思えば強いという事は出来ない。精々のたうち回っている姿を白い目で見ると、くらくらする。

『でもどうやって彼女を外に出すんですか？原作じゃあユーノが念話を無差別に飛ばす事でなのはに助けを求めてましたけど』

「同じ事をやれば良いだけだ」

あゝ、と喉の調子を整え、声の質を出来る限り少女の物に近づける。前世で習得した声帯模写がここに来て役に立った。子供の身体でま

だ変声期を迎えていない事もあって、余程耳が良くなければバレないであろう程の完成度になる。そして魔力スフィアの一つで家で机に向かつて勉強している高町なのはの映像を映し出し、ハスターに指示を出して念話を高町なのはに飛ばす。

「誰か……誰か、聞こえますか……」

『にやあ!? な、何!? 何なの!?!』

「今、私は貴女の心に語りかけています……誰か、誰か助けて下さい……私はここに居ます……誰か、助けて……」

掠れるような、弱々しい声で語りかけながら念話技術を応用して彼女に幾つかの画像を送る。そこはジュエルシードの魔力生命体の通るルート。この街に住む者ならば位置の特定など容易いだろう。念話を終えると映像に映る高町なのはは今の声が夢なのかどうか迷っていたが、すぐに弾かれたようにして家から飛び出していった。

そして次は黒須の方だが、こちらは簡単だ。さつきまで黒須たちと離れた場所でぶつかっていたはずの赤髪の少年と銀髪の少年が、同じ画面に黒須と一緒に映し出されている。

拠点となる場所を放置出来るほど、俺は豪胆ではない。すでに海鳴市を覆うようにして魔術で結界を張っているのだ。誰を通さないとかの特殊な効果は一切持たない、内部は俺の領域だと示すためだけの結界。スペシヤリストである坊主と比べればお粗末な物になるが、それでもこの領域内ならばある程度俺の好き勝手に出来る。赤髪と銀髪の2人のいた場所に暗示をかけて、無意識のうちに黒須たちがいる場所に移動する様にしていたのだ。本人たちはそれに気づかず、自分たちの意思でそこに行つたと思っっている筈だ。

そして2人はユーノを連れて歩いている黒須に向かって何かを叫んで攻撃を始める。それに対して黒須はデバイスを展開して軍服の

ようなバリアジャケットと長剣を装備し、ここは自分が引き受けると言ってユーノにジュエルシードの探索を続けさせた。

「ぎつとこんなものよ」

『うわあ……えげつないくらいに綺麗に嵌りましたね』

「事前に調べててあいつらの性格とか分かってるからな。それを踏まえればこの程度の事なんて誰にだって出来るさ」

『そうだとしても、それを行動に移してキチンと実現させるのは凄いですね』

黒須が赤髪と銀髪の2人と戦闘を始め、しばらく経ってからユーノがジュエルシードの魔力生命体と遭遇して戦闘を始める。

フェレットの姿から人間の姿になったユーノが拘束魔法で捉えて封印しようとするが、ジュエルシードはそれを力技で抜け出す。基本的に封印するのならば弱らせなければならぬ。だがユーノは攻撃が苦手らしく、拘束は何度も成功させるものの封印まで持っていく事が出来ないでいた。

ジュエルシードを封印する事が出来ず、逆に攻撃されてドンドン追い詰められていくユーノ。そして……そんな彼の目の前に高町なのはが現れた。

そこから先は俺が覚えていた原作通りの流れだったと思う。高町なのはの潜在的な魔力に気がついたユーノがデバイスを彼女に渡し、魔法少女リリカルなのはの爆誕。魔力のゴリ押しでジュエルシードの封印を成功させた。

そして2人の相手を終えた黒須と合流し、周囲の被害を確認してサイレンの音を聞いてその場から逃げ出した。2人はどうなったかと思えば、気絶して道路の端に置かれていた。加減されていたようで怪

我をしているようには見えない。その内眼を覚ますだろう。

「一応は目的通りの展開にはなってくれたな。これで高町なのはハリカルな魔法少女としてバンバン砲撃を撃ってトラウマを量産してくれるに違いない」

『そんな事よりも士郎さんの顔がヤバいことになってるんですけど……』

それは理解している。だから俺は頑なに士郎さんの方を向こうとはしていないかった。

『まあ、僕にとって重要なのはここから何ですけどね』

「何かあったか？」

『一つだけアドバイスを。加賀美さん……迷わないでください』

そう言つて桜木はヴィマーナをしまった。足場にしていた物が無くなったことにより、俺はそのまま自由落下を始める。桜木は再びヴィマーナを出してそれに乗り、士郎さんの事も札の存在で場所を把握していたのか一緒に乗せていた。

つまり、俺1人だけが落下する事になる。

「桜木イツ!!」

このままでは数秒後には地面に激突して愉快的なオブジェクトにジョブチェンジを果たしてしまう。なのでハスターに浮遊魔法を使わせる事で速度を落とし、ゆっくりと着地する事にした。降りた場所は神社の境内、元々が無人なのか人の気配は感じられず、さっきの光景を見られたということはなさそうだ。

桜木の行動を裏切りかと思えたが、最期の言葉と桜木のなにかを見

定める様な視線から違うと結論付けて溜息をつく。

彼が何を考えているのか分からない。しかし、何かがあることは理
解出来た。

何か来るのかと身構えていると、コツコツと階段を登る足音が聞こ
えて来た。一步一步の間は大きく空いていたが、足音の軽さから子供
のそれだと判断出来た。

誰が来るのかと警戒していると現れたのは――

「……愛歌？」

――翠色のドレスのような洋服を着た愛歌だった。

予想もしていなかった愛歌の登場を妙だと警戒する。沙条の家からこの神社まではそこそこの距離離れていて、気軽に来ようと思うような場所ではない。しかも今の時間帯ならば、家には沙条さんが間違いないくいるはず。彼が溺愛している愛歌の深夜徘徊を簡単に認めるとは思わなかった。彼女が沙条さんの目を盗んで家から出たまですら分かるが、それならば何故この神社に来ているのかと疑問に思う。

「どうしたんだ愛歌、こんなところに来て」

警戒を解かずに、それでいてそれは俺も同じだと思いう言葉を愛歌にかける。幸いな事に俺のバリアジャケットは黄色いコートで仮面を付けていないので誤魔化す事が出来る。彼女からここにいるわけを聞き、家に帰そうと考えていた。

愛歌は幼馴染で、数少ない大切な人だ。前世ではそう言える人間はたった2人しか思いつかなかったが、彼女がそのカテゴリーに入っている人間だと胸を張って言える。だから非日常的な光景が平然と広がっているこの場所において欲しくなかった。日常で楽しそうに笑う彼女に、こちらの世界に来て欲しく無かったから。

だが、現実是非情であった。

「りよう、や……」

掠れた声で俺の名前を呼び、俯かせていた顔を上げて表情を露わにする。愛歌の両目からは涙が流れていて、洋服のデザインで露出していた胸元には3つの結晶体――ジュエルシードが埋め込まれていた。

「たすけ、てえ……」

そして懇願を求める声と共に、彼女の影が蠢いた。

「たまには夜の散歩も悪くはないわね」

時間が少し巻き戻る。加賀美と桜木が黒須の行動によって魔法少女にならなかった高町なのはを魔法少女にしようとしていた頃、沙条愛歌は家から出て夜の街を歩いてきた。その行動にこれといった理由は無い。ただ、偶々夜の街を歩きたくなり、それを実行しただけの話だ。

父親の目は厳しかった物の、他の同世代の子供と比較して優秀である彼女にとってその目を盗んで外に出る事は不可能なことでは無かった。授業で疲れたから早く寝ると言って部屋に戻り、適当な荷物を自分の代わりにベッドに入れて身代わりにした。良く観察すれば即座にバレそうなお粗末なものではあったが、彼女の父親は娘である愛歌のことを溺愛している。疲れている事に気を遣って部屋に入るところか近づきもしないと予想出来るのでバレる心配は無かった。

太陽が落ちた事で冷えた空気の中、夜の街並みを堪能しながらお気に入りの翠色のドレスを着て愛歌は鼻歌交じりに歩く。少し前まで

は夜は何か恐ろしいものが潜んでいるのではと考えて怖い時間だったが、ある日を境にして怖さを感じなくなったのだ。

その日とは加賀美と出会った次の日の事。好奇心の赴くままに行動した結果、図書館まで来てしまい帰り方が分からなくなつて泣いていた自分の事を加賀美は助けてくれたのだ。今の自分がその時の自分を見れば何をやっているのかと呆れるが、同時に良くやったとサムズアップをするだろう。

用事があつてここまで来たはずなのに泣いている自分の事を心配して家まで送ってくれたのだ。知らない事で生じる怖さを感じさせないようと自分の事を気遣いながら、はぐれないようにと言つて手を握つてくれながら、優しく、優しく、大切に接してくれた。

それで彼女は恋に落ちた。単純だと思ふかもしれないが、幼かった当時の彼女はそんな単純な事で加賀美両夜という少年の事を好きになつたのだ。

まるで絵本に登場する王子様のようにだと思つた。顔は誰もが恋をするような甘いマスクなどでは無く、目付きの悪い顔付きだが、その日から愛歌にとって加賀美は彼女の王子様になった。

彼と過ごす日々は楽しかった。まだ詳しくないだろうと街の案内をされると言われて2人で出かけた時は心臓が爆発するのではないかと思つてしまうほどに緊張した。

彼の友人だと言われて桜木累という少年を紹介された時には少しばかり嫉妬してしまつたが変わった話し方をする彼に毒気を抜かれてしまい、今では友人の1人だと言えるほどに親しくなっている。流石に加賀美程に彼の言葉の真意を理解する事は出来ないのだが。

今が楽しいと、幸せなのだと思わず胸を張って言うことができず。しかし、だからこそ学校での加賀美との会話に少しばかり苛立ちを感じてしまった。

「両夜つたら、隠してる事は教えてくれるのに何を隠しているのか教えてくれないのよね」

それは加賀美の隠し事。これまでの付き合いから彼は後ろめたい事があるから隠しているのではなく、隠さなければならぬから隠しているのだと理解している。

大切に思われているのは理解している。だからこそ、その隠し事があるのか聞くことが出来ず、隠されている事に苛立ちを感じていた。

まるで自分では、彼の隣に居られないのだと言われているような気がしたから。

普段はしない夜の散歩をしたのには気分転換がしたかったからという理由がある。普段とは違った景色を見ていれば、少しはこの苛立ちが治るのではないかと期待したのだ。

「完全にこれって私のアレよね……」

自身の行動を省みて、適切な言葉が出てこずにあーうー言いながらその場で頭を抱える。分かっている、分かっているのだ。この苛立ちが間違っている感情である事など。

加賀美がどうして自分に隠し事をしているのか、聡明な彼女はその理由を理解していた。それは、知れば巻き込まれるから。自分を守る為にそれを隠す事で、巻き込まれないようにそれから遠ざけているの

だ。

「嬉しいのは嬉しいのだけど……私ってそんなに頼り甲斐が無いのかしら……」

自身のスペックを優秀だと理解している彼女からすれば加賀美の行動は嬉しさを感じるのと同時に歯痒さを覚えてしまうものだった。優秀である、それだけではダメな出来事に遭遇している。一番近い自分に頼る事なく、たった1人でそれに立ち向かっている。

「ううん……よし、明日になったら聞きましょう」

どうしたらいいのかとその場で考えても答えが出ず、どうしていいのか分からなくなってしまった彼女はその場で深呼吸して考えるのを止めた。それは思考を放棄した訳ではなく、答えが出ない問題はいくら考えてもしようがないという合理的な判断だった。

うだうだと考えても答えは出ない。だからと言って考えなくても気になって仕方がない。なので、愛歌は直接加賀美に何を隠しているのかと聞く事にした。朝にはいつでも力になると待つつもりでいたがそれは止める事にする。女心と秋の空という言葉があるのだから大丈夫だと免罪符を用意しておく事を忘れない。

そうと決まれば明日に備えて早く寝ようと踵を返して家に帰ろうとした。

「……あら？…何かしら」

しかし、そんな彼女の視界の端に何かが入った。気になってそれの近くに行けば、そこにあったのは3つの蒼い宝石だった。

「宝石？ 落とし物かしら……」

倫理観がまともな彼女はそれを見なかった事にするという選択肢は選ばずに、盗まれないように一度持つて帰り、朝になってから交番に届ける事を選んだ。そしてそれを実行する為に宝石に手を伸ばし……その指先が宝石に触れた。

その瞬間、世界が一変した。

「ツ……!?」

脳髓に直接情報を叩き込まれたような衝撃が彼女を襲う。咄嗟に宝石から手を引こうとするものの身体は意思に反して離れようとはせず、それどころか宝石を離さないようにと力一杯に握り締める。

「あ……」

彼女の脳内にとある映像が流れ込む。それはとある世界の1人の青年と1人の少女の姿。金髪で凛々しい顔付きの青年はまるで絵本に登場する白馬の王子様のよう。少女の方は多少成長しているものの、まるで自分と瓜二つだった。見えない何かを手にして戦う青年とその後ろに立つ少女は、2人の風貌も相まって王子様とお姫様にしか見えなかった。

それだけでは終わらない。

続けて流れ込んできたのは少女の感情。少女が戦う青年へと向ける……狂愛だった。彼が好き、彼が大好き、彼を愛している……だから、何でもしてあげると。愛している青年の為に、青年の感情さえも無視して行動する……完全なサイコパスだった。

それが彼女を蝕む。ジワジワとなんていう優しいものではなく、塗り潰すかのように行われるそれはまさに汚染だった。仮に映像で見せられた彼女のように愛歌も同類■接続■ならばそれに抗えたであろうが、この世界にいる沙条愛歌という少女は優秀なだけのただの人間でしか無かった。

「ア……ああ……嫌……いやあ……!？」

自分が自分では無くなる、そんな体験した事のない恐怖を感じながら愛歌は自由が失われていく身体を必死になって動かした。その頃には手にしていたはずの宝石は胸元に埋め込まれて怪しく輝いていた。このままでは自分が自分に良く似た怪物になつてしまつて分かつたから。助けを求めて、彼の元へと向かった。危機的な状況に陥っていたからなのか第六感が働き、いつもならばいるはずのない場所にいる彼の元へと辿り着く事に成功した。

そこにいたのは彼女の知っている加賀美両夜ではなかった。いつものような自然体でいるが、彼から感じられる気配はどこか鋭く、不自然な行動をとれば即座に攻撃するだろうと分からされるだけの気迫を発していた。

ああ、これが隠したかった事なのかと場違いな感想を思いながら、

「りょう、や……たすけ、てえ……」

彼女の意識は『彼女の王子様』に助けを求めたところで消えた。

「……始まったか」

ジュエルシードに、別の世界の自分の記憶に汚染された愛歌が加賀美と対峙した時、桜木は神社の上空にヴィマーナの玉座に腰をかけてその光景を見下ろしていた。愛歌は自身の影を触手のように扱いつつながら視界に入っている加賀美の事を襲い、それに対して加賀美は両手にナイフを持つて触手を捌いていた。

本来の加賀美の獲物は高町士郎から教えられた日本刀か小太刀なのだが、それでは間に合わないかと判断してナイフを選んだのだろう。事実その選択肢は正しかった。迫る触手は正面から、左右から、背後から、死角からと多様な角度から襲い掛かっている。仮にいつもの武器を使っていたら今頃は死んでいたに違いない。

『お札のせいで動けない……!!ねえねえ、桜木君。両夜君の事を助けに行かないのかい？行かないのなら行かないで、このお札を剥がしてくれると嬉しいんだけど……って、聞こえないか』

「貴様、姿は見えぬが我が^{オレ}があやつの事を助けに行かぬ事を疑問に思っただな？そして助けに行かぬのならその札を剥がせとも」

『え、聞こえてたの？』
「戯けが、聞こえたわけでは無いわ。そう思った、そう考えたと仮定して話しているだけだ」

桜木には士郎の姿は見えないし、声を聞く事も出来ない。しかし、彼の心理を知っていればそう考えているだろうと推測する事は容易かった。

何故ならば、桜木の転生特典は英雄王ギルガメッシュであるから。

神が人を支配していた古代の時代において、神々の支配から人間を独立させて人類史の幕開けとなった英雄の魂や思想以外の全ての能力を手に行っている。『ギルガメッシュ叙事詩』に登場するギルガメッシュではなく、創作物の中に登場するギルガメッシュのそれではあるが、そんな彼からすれば姿が見えず、声が聞こえない程度など障害にもならず不思議な構図にはなるが会話を成立させる事など簡単だった。

「貴様の懇願、そのどちらにも否と答えよう。我はあやつオレの事を助けはせぬし、その札を剥がす事もしない」

そして桜木は士郎の疑問を否と返した。

『どうして!?!友達じゃないのか!?!』

「友だから、か……確かに我はあやつオレの事を朋友であると認めている。だがな、こればかりは手を出す訳にはいかぬのだ。何故ならば、これは加賀美両夜という人間が乗り越えなければならぬ試練だからだ」

本音を言えば桜木だって今すぐにヴィマーナを地上に下ろし、加賀美の助けになりたいと考えている。しかし、桜木が与えられたギルガメッシュの肉体がそれを許さなかった。良くある二次創作のようにギルガメッシュの魂や思想などを与えられる事でそれらがギルガメッシュの物よりになる事を警戒し、混ざらないようにと排除したはずなのに肉体だけで行動を止められていた。

それに対して憤るようなことはしない。寧ろ流石は英雄王の肉体だと賞賛し、同時にこの程度の事で自由に使えるなどと考えていた己を恥じた。

『試練……? 一体何の』

「あやつが真に悪として振る舞えるか否か、それを問う試練である」

桜木は……正確には彼の使っているギルガメツシユの肉体はこの事態を予知していた。英雄王の目は先の世でさえ見通す。それは未来視と呼ばれているものであり、英雄王の肉体を授かった桜木もまたそれを保持していたが、ネタバレなどつまらないといった理由からそれを使う事はしなかった。本来ならば生涯において使うはずの無かった未来視……それがある日、桜木の意思を無視して勝手に発動したのだ。

その時に見た光景は今眼下に広がっている通りのジュエルシードによって暴走している愛歌と加賀美が戦っている光景。そしてその先の2つの未来。

1つは愛歌が加賀美の事を殺害した未来。致命傷を負いながらもジュエルシードを封印することに成功した加賀美は愛歌を助けられたことに安堵して、しかし悪を果たせない事を悔やみながら死んでいった。そして正気に戻り、加賀美を自分の手で殺してしまった事実に発狂した愛歌に反応してジュエルシードが再び暴走。今の様な中途半端なものではなく、完璧な形でこの世界の愛歌が別の世界の愛歌と同じ「少女の形をした万能」に成り果ててこの世界を滅ぼす。

1つは加賀美が愛歌の事を殺害した未来。他の暴走体とは比べ物にならない強さを持った愛歌のジュエルシードの封印を困難だと判断し、彼女を生かす事を諦めて殺害する事だとか封印を成功させると。その場合は別の未来とは違い加賀美は発狂することは無かったが、人としての生き方を捨て、己が理想を忘れて作業的に悪を成す「悪性装置」としか言えない存在に成り果てる。そして善神側の転生者でさえ殺し、機械的に悪を成し続け、最終的に時空管理局が管理下に置いてある世界の九割を滅ぼした所で成長した桜木に殺された。

加賀美が死ぬか、愛歌が死ぬか。桜木の見た未来はこの2つしか無かった。未来とは不確定であり、ちよつとした出来事で簡単に変わる事を知っていたが友人である2人の死を彼は避けたかった。なので行動に移そうとしたが……それをギルガメッシュの肉体は拒んだ。

身体は完全に支配されていて、出来ることなど2人の戦いを眺める事と考えることだけ。桜木の介入によって未来を変える事は許されなかった。

『エル、僕の事を見限ってくれ。大切な友人2人が殺し合っているのに何も出来ずに見ている事しか出来ない僕の事を』

数少ない許されたことの1つである思考することにより、桜木は加賀美と共に開発した念話式のチャット機能を使って自分の左腕に巻き付けている鎖型のデバイスであるエル——正式名称エルキドウに語りかける。

彼は罰して欲しかった。いくら英雄王の肉体だからとはいえ自分の身体を思うがままに動かす事が出来ずに、友人が殺し合っている光景を眺めている事しか出来ない自分を。この先にどうなるのかを知っているのに何も出来ない自分を責めて欲しかった。

『……ギル、僕の主。僕は決して君の事を見捨てたりはしないよ。例えばこの先に待ち受ける未来が最悪であって、それを何もしなかったギルのせいだと誰もが罵ったとしても、僕だけは君の味方であり続ける』

AIを有しているインテリジェントデバイスであるエルキドウは桜木の言葉に対して柔らかな声で自分の考えを告げた。自分は貴方の事を責めない、誰もが敵になったとしても自分は貴方の味方である。

それは桜木にとって望んでいない言葉であり——同時に、同じくらいにかけて欲しい言葉でもあった。

彼が前世で死んだ時の年齢は僅かに16歳、そして転生してから生きた年月はたったの4年。合わせたところで20年しか生きておらず、特別な事情でもなければ現代の世の中で20年生きた精神は成熟していない。彼は頭では自分が悪いのだと理解していたが、感情では自分が悪くないと認めて欲しかった。精神が成熟したものでも苦悩するであろう問題、未成熟な桜木にはそれはあまりにも重たすぎた。

「さて——悪性を掲げた患者に狂愛に侵された少女。貴様らの行く末、この我が見届けてやろう」

英雄王の肉体から語られる言葉は愉悦混じりであり、その表情は出し物でも見ているかの様な微笑を浮かべていた。

『どうか、この未来が訪れない様に……』

桜木は自分が見た未来が訪れない様に祈る事しか出来なかった。

『もしも、そうなったのなら——』

その時は、自分の手で決着を着けると覚悟を決めながら。

「チィー」

舌打ちをしながら様々な角度から襲い掛かってくる影で出来た触手をナイフで払い除ける。突如として愛歌に敵意剥き出しで襲われ、ジュエルシードの暴走に巻き込まれたと気が付いた時には混乱していたがすぐに落ち着いて冷静に対処出来るくらいには余裕を持っている。

目の前に立つ愛歌の顔からは表情が抜け落ちている。いつも浮かべている天真爛漫な笑顔も、助けを求めた時に浮かべていた悲痛そうな泣き顔も無く、ただ無表情。何度か呼びかけても反応が無かったことから今の彼女には意思は無く、ジュエルシードに操られている状態だと察することが出来る。

今すぐに彼女の胸元に張り付いているジュエルシードを引き剥がして碎きたい衝動に駆られるのだがそれは出来ない。影の触手自体は守りに徹していれば全て捌ける程度の脅威しか無いのだが、それ以上厄介な事があるのだ。

『マスター、5秒後に限界です』

ハスターの声を聞いてナイフを投げ捨て、量子化しておいた新たなナイフを握る。20秒間影の触手を防ぎ続けていたナイフは重力に従って落下し、着地と同時に泥の様に崩れ落ちた。

ハスターの解析によればあの触手の正体は影などでは無く悪性情報の塊だという。科学技術の発展によって成立しているこの世界の魔法はあの触手に触れた瞬間にコンピューターウイルスに汚染さ

れたかのように改竄されて無力化され、実態を持つていたとしてもいずれは汚染されて形を保てなくなつて先のナイフの様に崩れ落ちる。

惚れ惚れする程に殺意の感じられる能力だった。

なのでこうして防御に徹するしかない。被弾を覚悟すれば愛歌の元まで辿り着ける自身はあるが、あれを一発でも掠つてしまえばどうなるか分からない。自分の命を惜しんでいる訳ではないが愛歌に助けてと懇願された以上、彼女を助けなければならぬ。その為にもあの触手に触れるわけにはいかなかった。

「ナイフの残りは？」

『30です。そしてアンチプログラムの作成は完了しましたが、確実に防げるかは不明です。その上、恐らく一度使えばアンチアンチプログラムを用意されると思います』

「一度限りのギャンブルせにやならんのか……」

ハスターからあの触手の危険性を知らされたと同時に、アンチプログラムを作る様に指示していたがすでに完成していたらしい。問題があるとするればその性能を試すだけの時間がない事。成功していれば愛歌の元まで辿り着けるのだが、失敗していればあの触手にやられる事になる。しかも仮に成功していたとしても、その一度で決着をつけなければアンチプログラムに対するアンチプログラムを作られる可能性が出てしまう。イタチごっこかと思つたが、技術というのはそういうものだとなつて、

「……行くぞ」

『Yes master . アンチプログラム、発動します』

迷う事なく一度限りのギャンブルを実行する。アンチプログラムが起動すると同時に全身に薄い膜の様なものが出来上がり、それを確

認して止めていた足を前へと動かした。

空気を斬り裂きながら迫り来る触手の数は50を超える。前傾姿勢で全力で疾走して避けられるものはすべて避け、避けられないものはナイフで弾く。その最中で二、三度触手が俺の身体を打つたのだが、衝撃以外の何も感じない。どうやらアンチプログラムの作成は成功していた様だ。

触手の幕を突破し、愛歌の前に飛び出る。それに反応して新たな触手が生成されるがそれが動き出すよりも俺が一撃を叩き込む方が圧倒的に早い。普通に攻撃をすれば愛歌の身体を傷付けてしまうのだが、ハスターによって俺の武装は非殺傷設定されているので衝撃を与える事になるが傷を付ける心配は無い。

そうしてナイフの刺突を愛歌の胸元で忌々しく輝くジュエルシードに突き立てようとして―――意思に反して腕が停止した。

「―――」

何が起きたのか理解出来ない。愛歌に攻撃する事への後ろめたさは合ったものの、迷いはなかったはず。何かをされた訳でもない。それなのにピタリと、腕が自分の物ではなくなったかの様に動かかなくなってしまったのだ。

それはどうしようもない隙だった。迎撃の為に生成されていた触手が間に合ってしまった、鞭の様ではなく槍の様に突き出されて腹部に突き刺さる。アンチプログラムとバリアジャケットのお陰で触手の汚染は防げたものの内臓でも痛めたのか口の中が鉄臭くなり、弾き飛ばされてしまう。

『マスター!!』

「……生きてるし、動けない程のダメージじゃないから安心しろ」

吐血混じりの唾を吐き捨てながらハスターにそう返す。今、気にしているのは負ってしまったダメージではなく、どうしてきつきの攻撃の手を止めてしまったのかだ。

今の攻撃のタイミングは完璧で、止める理由など無かったはずだ。それなのに身体は意に反して勝手に動きを止めた。悪性情報による汚染をアンチプログラムでレジストし、ハスターによる非殺傷設定で愛歌へのダメージを無くしていた。彼女を傷付けずに、ジュエルシードから開放できたはずなのに――

「いや、待てよ？」

上から落ちてくる触手の攻撃を転がりながら避けて跳ね起きて距離を取る。

あの触手は悪性情報の塊であり、科学技術の発展によって成立しているこの世界の魔法の天敵であると言える。ハスターの活躍により俺への汚染を防ぐアンチプログラムを作る事は出来ていたが、非殺傷設定が正常に作動出来なかった可能性がある。

もしもそうになっていた場合、どうなっていたか……考えなくてもわかる。あの一撃は愛歌の胸を貫いて心臓を破壊し、彼女のことを殺していた。

「成る程成る程」

そう考えれば納得がいく。無意識の内に愛歌を殺してしまう可能性を考えて、無意識的に俺は愛歌を殺さない様に手を止めたのだ。それは反射的な行動だろう。だから俺の意思に反して身体が止まって

しまったと思い込んでしまった。実際には、もっとも俺の意思に沿った行動だったのにだ。

「全く、俺も弱くなってしまうたな」

前世の俺が今の俺を見たらきつと呆れてしまうに違いない。

前世では、俺はある目標を持っていて、それを達成する為ならば文字通りに何でもやった。一般社会における倫理観に反することなど数え切れないほどに、人の気持ちを踏み躪るなんて息をするかの様に。

そんな俺が、目の前に立つ少女を傷付けたくないと思っている。だって、彼女は愛おしい存在なのだから。

そう考えて思わず笑いが込み上げてくる。悪を名乗り、その自称に恥じない悪行を積んできた俺が、たった一人の少女を殺したくないと思っている事実。前世でもあいつと敵対した時にはそんな事は考えなかった。マリーリンとは敵対した事がないので分からないが、そうなった場合は今回の様に手を止めていたかもしれない。

皮肉な話だ。善を強くする為の感情である愛、それが悪を弱くするのだから。

しかし、だからといってこの感情を切り捨てたいとは考えない。数多くの制約に縛られる事になる正義ならば、その正義を貫く為に切り捨てなければならぬかもしれない。だが、生憎と俺は悪役なのだ。どんな制約にも縛られる事なく、我儘に身勝手に、何も切り捨てずに貫くでしょう。

「ハスター、何があっても非殺傷設定を切らすなよ？最優先でだ。も

しも切らすような事があつたらお前を砕いてやるから」

『それはマスターを差し置いてでしようか?』

「当然だ」

前世でも経験した事がないので断言は出来ないのだが、俺がこの手で愛歌を殺したら俺は俺で無くなってしまふだろう。精神は砕けて形骸化し、それなのに効率的な悪行を考える頭脳と悪行を行える肉体だけが残ってしまう。それは加賀美両夜という人間ではなく、「悪性装置」という名の機械でしか無くなってしまふ。

『……分かりました。何があつても、非殺傷設定を正常に作動させます』

「ありがとう」

首にぶら下がっているハスターを優しく撫でる。ハスターをそちらにかかりつきりにさせた以上、これからはハスターのサポート無しで戦わなければならなくなる。近接戦ならば士郎さんに鍛えられているので自身はあるのだが、魔法戦に関しては経験が圧倒的に少ない。魔法をメタする事が出来る今の愛歌相手では、敵わないと理解している。

なので――

「天上に座する尊き御身に
畏み畏み申す」

――この世界には無い手段を使う事にした。

魔術回路の起動は魔術師それぞれのイメージによる。祝詞と共にイメージするのは暗闇の中に差し込む一筋の光。俺が渴望してやまない物を思い描くと同時に全身に存在している擬似神経が唸りを上げて魔力を精製し始めた。

この世界には無い方法での魔力の精製に気が付き、脅威になると判断したのか愛歌が触手を伸ばす。手数を優先しているらしく触手は細いが数が多い。通り抜ける程の隙間も存在していない触手の壁が迫り来るが、俺はそれを微塵も恐れていない。

魔力を魔術として発動せずにそのまま放出する。それだけで俺を中心として突風が吹き荒れ、迫る触手を吹き飛ばした。

俺の属性は風と水だとマーリンは言っていた。適性があるのはそちらの方面の魔術だと言い、夢の中ではその2つの属性について教えられていた。その為なのか、この世界ではスキルと呼ばれている能力の魔力変換資質としても現れている。

触手が吹き飛ばされた事による一瞬の硬直の隙を突き、その場から逃げ出す。すぐに立ち直って今度は複数の触手を束ねて太さを持たせてきた。試しに魔力を放出して吹き飛ばそうとしたが質量が増している為に僅かに鈍くなった程度で済まされてしまう。

「付属、収束――」

ならばと、手にしたナイフに風を纏わせて振り抜く。予想としてはさつきまでのように弾くのでは無いかと考えていたが、結果として触手を斬り払う事が出来た。ナイフを見ても触手の悪性情報に汚染さ

れている気配は見られず、斬り払われた触手は霧散して消えて無くなる。

そして背中に走る寒気に従い、その場から飛びのこうとするが間に合わないと悟る。なので起源である“干渉”を用いて周辺の大気に干渉し、背後から強風を吹かせてそれに乗ってその場から逃げ出す。

するとその一瞬後に地中から触手が飛び出してきた。先端は鏃の様に尖っていて、咄嗟に投げ出さなかったら今頃は串刺しになっていただろう。

「……調子が良すぎるな」

魔術師として魔術を使うのはこれが初めてでは無い。今日までにどんな事が出来るのか、戦闘で使えるのか、どんな使い方が効率的なのかを考えて何度も使用している。その中には今の様な使い方も含まれていて、使った事もあるのだが、明らかに使用する魔力の量が減っていた。今までがコップ一杯分の量を使っていたとしたら、今では小瓶1つ分程度。魔力の効率が良くなり過ぎている。

風を使っている、そう考えれば原因と思わしき存在はすぐに分かった。恐らく、邪神ハスターが与えると言っていた風の加護とやらだろう。旧支配者で邪神というカテゴリーなのだから、もつと扱いに困る様な物を渡されていると思っていた。

ありがとうございますハスター様。お礼として作ったハスター擬人化の触手同人誌は封印します。

『………!!………!!………!!』

遠く空の彼方から邪神ハスターが全力で叫んでいる様な気配を感じ

じ取ったが無視し、迫り来る触手を吹き飛ばし、斬り払い、あるいは躲す。ナイフも、俺の魔力も悪性情報に触れ続けているが汚染されている気配は無い。試しに魔術で大気圧を使って触手の1つを拘束してみたのだが、その魔術はそのまま触手を拘束し続けていた。

それを見て確信する。この触手に魔術が有効だと。

考えてみればおかしな話では無い。この世界の魔法は科学技術の発達によつてもたらされているもので、プログラムを通して発動している。そこに悪性情報が入ってしまえばプログラムは正常に作動せずに、魔法は発動出来ず、展開させ続ける事も出来ない。

しかし魔術は違う。マーリンからの説明では魔術とはその文明の力で再現出来る奇跡であると教えられている。火を出したければライターを使えば良い。風を起こしたければ扇風機を使えば良い。氷が欲しければ冷蔵庫を使えば良い。極論を言えば魔術なんてすべて科学技術で代用出来るのだ。しかし、その結果はすべて神秘を通して齎されている。この世界の魔法しか知らないジュエルシードからしてみれば、俺の使う魔術は未知の領域なのだ。長く使えばいずれは理解されて同じように汚染されるだろうが、短期決戦のつもりで使えば問題無い。

俺に届かない事に苛立ちを覚えたのか、触手の動きが大雑把になりつつあった。最初では無かったはずの触手と触手との間に人一人分の隙間が見える。

それを好機と捉えて地を蹴る。そのままの加速ならば絡め取られそうだから、風を追い風として用いる事で強引にトップスピードまで持って行く。迫り来る触手を吹き飛ばし、斬り払いながら、愛歌の眼前に迫り着く。

「ツーーー」

そして全身に痛みが走った。愛歌の足元にあつた影が細く鋭い針となつて身体を貫いたのだ。接近を成功させた事によつて出来る気持ちの緩みを利用したカウンター。風を乗り越え、ハスターのアンチプログラムも解析されたのか無効化されていた。咄嗟に身体を捻る事で臓器へのダメージは避けられた。

問題はここからだ。

身体の中に入った針から悪性情報が送り込まれる。それは毒というよりも呪詛に近い。悪意、殺意、憎悪、嫌悪、嫉妬……人間が持っている負の感情を寄せ集めて煮詰めて濃くしたような物が垂れ流されている。

それはあくまで情報だけであり、明確な自我や知性を持っているわけではない。ただ、役割として侵し、穢し、冒瀆してありとあらゆる存在を殺そうとしている

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

飲降下』『名誉榮譽を没収する群体総意による抹殺』『資産財産を凍結する 我欲と裁決による嘲笑』『死刑懲役禁固留罰金科料、私怨による罪、私欲による罪、無意識を被る罪、自意識を謳う罪、内乱、勧誘、詐称、窃盗、強盗、誘拐、自傷、強姦、放火、爆破、侵害、過失致死、集団暴力、業務致死、過信による事故、護身による事故、隠蔽。

益を得る為に犯す。

己を得る為に犯す。

愛を得る為に犯す。

得を得る為に犯す。

自分の為に■す。

窃盗罪横領罪詐欺罪隠蔽罪殺人罪器物犯罪犯罪私怨による攻撃攻撃 攻撃攻撃攻撃汚い汚い汚い汚いおまえは汚い償え 償え償え償え償え償えあらゆる暴力あらゆる罪状 あらゆる被害者から償え。

『この世は、人でない人に支配されている』 罪を正すための良心を知れ罪を正すための刑罰を知れ。

人の良性は此処にあり、余りにも多く有り触れるが故にその総量に気付かない。

罪を隠す為の暴力を知れ。

罪を隠す為の権力を知れ。

人の悪性は此処にあり、余りにも少なく有り辛い故に、その存在が浮き彫りになる。

百の良性と一の悪性。

バランスをとる為に悪性は強く輝き有象無象の良性と拮抗する為兄弟で凶悪な『悪』として 君臨する。

故に死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。

この程度の呪いならば拒む必要も無い——飲み下せる。流し込まれる悪性情報が魔術回路に、リンカーコアに、魂に吸収されていき、逆にまだ飲み干し足りないかと吸い上げていく。

「あ———……」

愛歌を蝕んでいる悪性情報が減ったからなのか、彼女の目に僅かに光が戻った。まだ自我ははつきりとしていないよう言葉は出せていないが、俺の身体に付いた傷を見て悲痛そうに目を見開いている。

だから、俺は愛歌を抱き締めた。傷を見せないように、悲しんでいる彼女を慰めるために、ジュエルシードに囚われている彼女を守る為に。

「愛歌、すぐに助けてやる。だから、もう少しだけ我慢してくれ」

優しく、安心させる声色を作って愛歌の耳元で囁く。自我がはつきりとしていない今では返事は期待していなかったが、それでも彼女は僅かに首を縦に振って肯定してくれた。

待っている、だから助けてと、聞こえないはずの音が聞こえた。

「———神罰招来」

囚われた彼女を救うべく行動に移す。キーワードを呟くと共に暴風が吹き荒れ、俺の起源が大气へと干渉して気象を操作。上空に巨大な積乱雲を発生させる。轟く雷鳴が鼓膜を打つ。本来ならば遠くの敵を一方的に攻撃する為の物であって自爆用の技では無い。それに元よりも明らかに規模が大きくなっていった。

ハスター、やっぱりお前の擬人化の触手同人誌ばら撒くわ。

「ハスター」

『非殺傷設定、正常に作動中。いけます』

これから来るであろう衝撃に備えて歯を食い縛り、万が一に備えて愛歌を傷付けない為にさらに強く抱きしめる。

「カムナガラ随神相シナツノミカツチ——級長津祀雷命イイツ!!」

そして、最後の詠唱と共に神罰は降り注いだ。

Second action

「はあ……」

空を見上げてため息を吐きながら同時に煙を吐き出す。視界に映る空は泣きたくなるほどな真っ青の晴天。しかし視線を下に向ければ薄汚れ、倒壊しかけている廃墟が目に入る。人が住み着かなくなった、手入れがされなくなった、建設の途中で放棄された、純粹に年月が経って落下している、などなどの様々な理由で廃墟と化しているのだが、空が晴天である事を除けば前世の生まれ育ったあの場所を思い出すので個人的には好ましく思っている。まともじゃ無い事を自覚している俺からしてもあの場所は中指を立てたくなるほどに劣悪な環境であったが故郷である事には変わりない。帰りたいとは考えないが、ふとした拍子に懐かしく思うのだ。

タバコがフィルターまで燃えたところで吸い殻を投げ捨て、地面に鼻血を流しながら転がっている男に視線を向ける。折れた鼻を押さえながら男は必死に後退りして逃げようとするのだが、すぐ背中が廃墟にぶつかってしまつて逃げられない。

「なあ、俺は言ったよな？聞きたいことがあるつて。それなのに返事が銃を武装したチンピラ5人つてどういう事なのさ？ちよつと理解が出来ないから教えてくれない？」

桜木や愛歌に向ける笑みとは違う、攻撃的な意味合いを含めた笑みを男に向ければヒイツと、情けない声を上げる。男の周りで惨殺されているチンピラたち、自分もこうなるのでは無いかと危惧して怯えているのだろう。

「こ、こころ辺のボスがお前に懸賞金かけてんだよ!!生死問わずで!!」

「すっごい分かりやすい説明ありがとう」

命を狙われた理由を簡単に説明してくれた事のお礼として腰から銃型のデバイスを引き抜く。ハスターとは違ってこのデバイスにはAIが入っていない。偶々壊れていたのを見つけて修理して使っているのだ。

そして引き金を引く。音もなく銃身から薬莖が吐き出されて男は額に穴を開けて動かなくなる。死んだ事を確認して、さらに引き金を引く。装填しているだけの弾丸を全て撃ち、男の顔が穴だらけになっ
て判別がつかなくなったところで一言、

「悪くはないけど音が無いのは寂しいな」

『隠密性を重視するのならばそちらの方がよろしいのでは？』

「そうなんだけどさあ、銃ってこう、撃ったときの反動と音が欲しいわけよ。サイレンサーの有用性は理解しているけど、音が無いのは気に食わん。ただの好みの問題だ」

人間を6人殺しておいて出たのはそんな感想だけだった。今更人を殺してウジウジするような貧弱メンタルなんてしていない。前世では手段を問わずに何人も殺して来ている。初めて殺したのは、確か四、五歳くらいの時だったか。子供だった俺をシヨタ専門のホモ野郎に売りつけようとしていた奴を近くに落ちていたガラスの破片で殺したのが初めてだった。

試運転を終わらせて新たなマガジンを入れた銃型のデバイスをガンアクションで遊んでから腰のホルダーに叩き込む。ハスターがあるのに他のデバイスに手を出すのはどうかと思うかもしれないが、このデバイスとハスターとでは役割が違う。

ハスターは俺のサポートに重視している。魔法の解析や俺が魔法

を使用する際の補助、周囲の索敵に隠蔽とサポーターとしての働きは100点中120点を出す程の性能を誇るのだが攻撃性が無い。もつと言えば、黒須のデバイスのように武器にはならないのだ。だからこそ、このデバイスにはハスターには無い攻撃性を重視している。

魔力を弾丸として撃ち出す事は当たり前で砲撃魔法も熟せ、時空管理局が質量兵器として忌避している実弾を撃つ事が出来る。デバイスを修理する時に知識が足らずに苦労したが、一度基礎を覚えて理論が理解出来ればあとは簡単だった。AIを組み込めなかったものの、目的であった攻撃性を持たすことには成功している。

『どうやらこの顔は狙われているようですね。変えますか？』

「ついでにバリアジャケットも色だけで良いから変えてくれ。ハスターに任せる」

『了解しました』

地球で愛歌に勧められて買った中折れ帽子のズレを調整しながら指示を出せば、すぐにバリアジャケットの色が黄色から黒に変わり、下に着ていた服も質の良いダークグレーのスーツに変わっていた。手鏡で顔を見れば前よりも中性的な物に変わっていて、じつくりと観察されたらバレるかもしれないが一見では気づかれないだろう。

「やれやれ、先は長そうだ」

前よりも若干高くなった声でそう呟きながら路地裏から外に出る。探している人の手掛かりを掴めるとは思えないが行動するしか無いと気合を入れ直し、もう一度、ミッドチルダ廃墟都市区間の空を見上げた。

愛歌に憑いたジュエルシードの暴走は無事に止める事ができた。非殺傷設定とはいえども戦略級を目的とした魔術を使った事で俺も愛歌も気絶してしまったが、上で見物していた桜木がジュエルシードの封印処理をした上で俺たちを連れて帰ってくれた。なんでも桜木は愛歌がジュエルシードに憑かれる未来を見ていたので止めようとしたのだが、身体がそれを許さなかったらしい。チャット画面が処理落ちする程に謝られたので一発殴るだけで済ませる事にした。

問題はそこからだった。桜木が言うには愛歌に憑いていたジュエルシードに魔力は殆ど残っていなかったらしい。即座に愛歌の身体を解析すれば、無くなったジュエルシードの魔力全てが愛歌の身体に宿っていたのだ。この世界の魔導師のようにリンカーコアがあるわけでもなく、俺の様な魔術師の様に魔術回路を宿しているわけでもない。愛歌の身体そのものが魔力を宿し、さらには魔力を生成していたのだ。

それを知って俺がとった行動は愛歌に裏側の事を全て話して謝る事だった。彼女を裏側に入らせない為に隠していたのだが踏み込んでしまい、さらにジュエルシード3つ分の魔力を持っているとなれば知らせない方が危険であると考えたから。

それを聞いて愛歌は笑った。隠し事を話してくれてありがとう、助けてくれてありがとうと、これで俺の事を堂々と支えてあげられると。

悔しいけど、それが少しだけ嬉しかった。

兎も角愛歌の存在を高町なのはを始めとした主人公連中、転生者たちに隠す必要が出てきた。ロストロギアと呼ばれる危険物であるジュエルシード3つ分の魔力を宿している愛歌は、生きているロストロギアと認識されかねない。監視されるのなら幸運だが、高い確率で時空管理局は愛歌の存在を危険視し、封印するなど言うだろう。幸いなことに桜木の宝物庫の中には魔力を隠せる財宝があったのでそれを使って愛歌の魔力を隠した。

そして俺はミッドチルダに向かい、プレシア・テストロッサの手掛かりを探している。今は安定しているが、ジュエルシード3つ分の魔力を宿している愛歌の容体がいつ急変してもおかしく無いから、詳しい人間に診てもらうことにしたのだ。現段階で魔導技術に詳しく、愛歌の身体を診てくれそうな人物にそれ以外に心当たりが無かったから。時空管理局は論外、*striker*編ではジェイル・スカリエツティという人物が該当するのだが現段階でどこで活動しているのか分からないので候補から外した。

人間は生きていくだけで何かしらの痕跡を残す。それはプレシア・テストロッサも例に漏れず、食料品などの物資の補給をミッドチルダでやっていると予想してミッドチルダまで移動し、金さえあれば何でも話すという情報屋を探しては尋ねているのだが全く手掛かりを掴むことが出来ない。フェイト・テストロッサがやって来たところからプレシア・テストロッサの居場所を掴むことが出来るのだが、桜木からの報告では未だに姿は見えず、仮に接触出来たとしても警戒されるのがオチだ。

見つからない可能性を求め続けて一週間が経った。

「……そろそろ一旦帰るか」

『その方がよろしいかと。エルキドウを通じて愛歌様から送られる

メールがそろそろ4桁を迎えそうです』
「4桁ってマジかよ」

モニターを投影してもらえば確かに未読のメールが900通以上溜まっていた。試しにいくつか読んでみれば、その日の出来事や俺に会いたいという旨が綴られている。一応夜に通信はしていたのだがそれだけでは物足りなかった様だ。

そこで今日の夜に帰る事と、愛歌の手料理が食べたい事をメールに書いて送信する。すると5秒も経たずに返事は返って来た。内容は沙条さんにおねだりしてでも美味しい料理を作るから必ず帰ってきてとあった。

「ハツハツハ、愛^{うい}やつめ」

『愛歌様はもしかしてヤンデレと呼ばれるタイプの女性なのでは……』

「ヤンデレって、病的なまでに異性に対して愛情を向ける奴の事だろ？そこまで愛されるのなら男冥利に尽きるってもんだ。嬉しいとは思うけど怖いとは思わないな」

そんな事をハスターと話しながら歩いているとある店から男が1人飛び出してきた。

トランクス一枚に白衣という格好で。

「いつって……いやあまさかガチで身包み剥がされるなんて思わなかったよ!!何とか白衣だけは死守出来たけど、最悪白衣の下は全裸で帰ることになるとこだった!!」

『マスター、時空管理局に通報を』

「待って……待って……!!何でこんなところでパンイチ白衣で居るんだよ……!!」

頭を抱えてその場に蹲る。身包み剥がされたと言っていたから恐らくは賭け事に負けて服を取られたのだろう。彼が出てきた店はこちらでは有名な賭博場だったから。

問題なのはその人物だった。

董色の髪に優男風の顔付きの男性は、俺が探していたけど真っ先に切り捨てた人物……ジェイル・スカリエツィその人だった。

second action・2

「いやあ本当にありがとうね!!剥ぎ取られた服を取り返してくれただけじゃなくて奢ってくれて!!」

「俺の精神衛生上の問題だよ。目の前にいきなりパンイチ白衣の男が飛び出してきた時の俺の気持ち分かるか?」

「欲情した?」

「ブチ殺すぞテメエ」

廃墟都市区間の一角にあるバー、そのカウンターでジェイルと共に酒を飲む。ジェイルの格好は出会った時のパンイチ白衣ではなく、下にキチンとスーツを着込んでいた。

あの後しばらく落ち込んでからパンイチ白衣の格好のまま帰ろうとしていたジェイルを呼び止め、俺はジェイルが剥ぎ取られた賭博場でジェイルの服を取り戻したのだ。プレシア・テストロッサを探していたのだが、才能で言えばジェイルの方が頭2つ以上飛び抜けている。服を取り返す事で恩を売ろうというのが半分、残りの半分は男のパンイチ白衣なんていう絵面を見たくなかったからだ。

「にしても、いい店を知ってるね。廃墟都市でこれだけのお酒を出せる店があるなんて知らなかったよ」

「知りたかったことがあってこういうグレーな所で良い具合の酒場を探してたんだよ」

「その心は?」

「情報を集めるのに人が多い場所に行くのは基本だろ?それに酒を飲めば気持ちが高揚する。気持ちが高揚すれば判断力が鈍ってペラペラと色んな事を話してくれる。後は俺の趣味だ」

「成る程、合理的だね」

グラスに残った蒸留酒を飲み干してカラカラと氷の音を響かせれば、カウンターの向こうに立っていた初老のバーテンダーが無言で蒸留酒のボトルを手にとってグラスに注いでくれた。ジェイルには偉そうな事を言ったのだが、このバーでは俺の望む情報は得られなかった。しかし、廃墟都市区間という地球で言えばスラムの様な場所でありながら、ここで出される酒の質は中々の物だったのだ。それにジュークボックスから流れている静かなクラシックに薄暗く落ち着いた雰囲気も合わさって上流階級御用達の高級バーの様に感じられる。

騒がしく飲む事は嫌いではないが、落ち着いた雰囲気でも飲みたい時にはここで飲む事を決めた。

「ふう……それにしてもお酒って初めて飲んだけど中々美味しい物だね」

「そうなのか？ 飲まない奴にしても少しは飲んだ事があると思ったが」

「頭の回転が鈍くなるからアルコールは飲まない様にしてたんだよ。白衣で分かると思うけど私は研究者でね、唐突に思いついた事を忘れないように気を遣ってたんだよ」

「パンイチのイメージが強過ぎて研究者とか信じられねえ」「解せぬ。あ、マスター、これもう一杯頂戴!!」

そう言われてバーテンダーが差し出したのはアルコール度数の低い、ジューズに近いカクテルだった。どうやらジェイルが酒に慣れていない事に気付き、酔わないように弱めの酒を出しているらしい。観察眼が凄すぎる。一つの事を極めようとするのと全てに通ずると聞くが、その類の人間なのだろうか。

そしてジェイルの発言だが、彼の経歴を考えれば不自然では無かった。

詳しくは覚えてはいないが、ジェイル・スカリエツティという人間はこの時代では生まれなかったはずの人間だ。管理局最高評議会と呼ばれる人物たちが作り出した人工生命体。『無限の欲望』アンリミテッドデザイアという与えられたコードネーム通りに自分を動かしている欲望どまりよくが他人の都合によって作り出されたものであると理解して自覚しながらも、それで良しと受け入れている真性のキチガイ。そんな彼からすればアルコールの味よりも欲望を優先する事の方が重要だったのだろう。

それを思い出して、理解し、そういう人間だったなあと同情する。それでおしまいだ。

ジェイルの生まれた経歴を知って、首輪を付けられた境遇に同情はするがそれ以上の感情は湧かない。踏み込んだ間柄であるのなら、親友だと肩を組んで笑い合える関係であるのなら、俺は全力で力になった。そうでは無いから力にならない。俺が助けたいと思えば利益を度外視して力になるのだが、彼を助けようなんて思わなかった。

だってこいつ strikers 編のラスボスだし。自力で最高評議会の首輪を外すし。

「……で、君の目的は一体なんだい？」

「なんだ、気がついてたのか？」

ジェイルに気付かれていた、その事実には驚きはしない。寧ろやっとな気が付いたのかという反応を見せながらタバコに火を付ける。

「見ず知らずの私のためにわざわざ賭博場に乗り込んで服を取り戻し、こうしてお酒まで奢ってくれたのだから何かしらの目的があるんじゃないかと考えるのは普通だと思うけど？」

「流石は『無限の欲望』アンリミテッドデザイア様だ。頭が良く回る」

「アンリミテッドデザイア」
無限の欲望”と、この時点ならば限られた存在しか知られないはずのジェイルのコードネームを告げても彼は何も反応を見せずにカクテルを楽しんでいた。恐らくはある程度自分のことを知っているのでは無いのかと予想していたのだろう。寧ろその返しは想定内だとドヤ顔を浮かべられた。

「ああ、別にお前の事をバラそうだななんて考えてない。ただ、頼みたい事があるんだ」

「頼みたい事?」

「俺の友人がジュエルシールドっていうロストロギアに憑かれてな、内包していた魔力を身体に宿しちまったんだよ。リンカーコアも無いのにな」

ほうっと、ジェイルの目に好奇心が浮かび上がる。 “無限の欲望”

“の名前の通りにジェイルは自分の欲望の赴くままに行動をする。その果てが自らの創造主への反逆に繋がるのだから笑えないのだが、今はそれが都合が良かった。

これでジェイルは愛歌に興味を持つてくれた。

「治療法は不明、今は安定しているがこの先どうなるのか分からない……だから、診てやってくれないか?」

「久しぶりに会ったっていうのにこんな所に連れて来るなんて酷い人」

「ゴメン、超ゴメン」

「ちよつと雑じゃないかしらね」

ジェイルと出会った翌日、地球が夜になってから俺は愛歌を連れてジェイルに指定された管理外世界に来ていた。時空管理局の手が入っていないからなのかこの世界は密林に覆われていて、彼方此方から野生動物の気配を感じる。

地球の方は桜木に任せているので問題ないだろう。タナカには悪いが、今の俺の最優先は愛歌の安全だから。

俺は変身魔法を使わずに子供の姿のまままでバリアジャケットを展開している。ジェイルには信用の証として元の姿を見せているので間違われる事はないだろう。今の愛歌の格好はあの夜と同じ翠色のドレスのような洋服。ただ、その上から鮮やかな蒼色の外套を羽織っている。これは桜木から貸してもらった魔力隠蔽効果を持つ聖骸布で、ハスターが本気で索敵しても愛歌の魔力を感じられないと言っていた。世の中に出回れば大騒ぎになるような代物なのだが、これでも桜木からしてみれば下の下クラスの財宝だという。

桜木の財宝の一部を売り払えば豪遊出来ると考えてしまった自分が憎い。

「でも、良かった。元気そうね」

「あく……一週間も顔を合わせて無かったからな」

「……私のためだって理解はしてるけど、それでも寂しかったんだから」

「ゴメン、今度埋め合わせするからさ」

「ならシヨツピングモールに買い物に行きましょう。それと気になる映画があつたからそれも観たいわ。で、最後には翠屋でお茶をしましよう」

「いいなそれ、久しぶりにゆっくり出来そうだ」

いつもなら桜木を加えて3人で遊んでいるのだが、今回は愛歌への謝罪の意味合いもあるから2人で行かなくてはならない。

許せ、桜木。お土産に翠屋のシュークリーム買ってくるから。

「ぐええええ……頭いたあい……」

「やっと来たー」

ガサゴソと、茂みを掻き分ける音とジェイルの気配を感じたのでそちらを見れば、二日酔いなのか顔を真っ青にさせたジェイルが今にも死にそうな顔をしながら現れた。

熊に乗って。

落ち着かせるために深呼吸をし、目頭を強めに揉んで再度ジェイルを見る。そこには変わらず、死にそうになっているジェイルの姿があつた。

白熊に乗って。

「なんで白熊なのさ……!!」

「やあカガミ君。メチャクチャ頭が痛いんだけど、これって何かの病気なのかな?」

「それは二日酔いだから!!酒飲みすぎて二日酔いになってるだけだから!!」

「そつかくこれが二日酔いなのか」

四つん這いになって歩く白熊の背中の上で、二日酔いで死に掛けているジェイルの姿を見て、ジェイルとは違った意味で頭が痛くなつた。

「あゝダメだこれ。気持ち悪過ぎる……」

ソファーに寝転がっていたジエイルはそう言いながら白衣を漁り、懐から錠剤が詰め込まれた小瓶を取り出してその中身を口に入れた。まるでラムネ菓子でも食べているかのように景気良くボリボリと音を立て、飲み下してから数秒後、

「ふう……復活!!復活!!マッドサイエンティストスカさん復活!!特に誰も待つていないだろうけど待たせたね!!」

さつきまで死にそうにしていたはずの顔を元に戻して元気にソファーの上でピースした手を顔の前で横にしながらウインクをしていた。どうやら二日酔いの治療薬を使用していたらしい。服用からたった数秒で完治するなど今の医学のレベルではどうあがいても実現出来ない領域である。言動こそ頭のヤベー奴のそれだが、その技術、知識は間違いなく現人類よりも数歩も先を行ってきた。

「二日酔い用の薬があるのならさつきと使えば良かったじゃねえか」

「分かっているなあカガミきゅんは……」

「おう、カガミきゅん止めろや」

「確かに私は自他共に認める天才で、好奇心の為ならば倫理観なんてゴミ箱にシユートするような天災さ。だけど、知識としては知っていても経験として知らないことはあるんだよ。今回の二日酔いだってそうさ。知っていたけど経験した事はない、だから敢えてなってみただよ」

その理屈は理解出来る。人というのはただ知識として知っているだけではダメだからだ。例えば骨を折ると痛いという事を知識とし

て知っているよりも、実際に骨折を経験していればどのくらい痛みがあるのか、そしてそれによりどれだけ不便になるのかを経験し、経験していないものよりも骨折をしないように気をつける。

理解は出来た、ただしカガミきゅんは許さん。

「で、愛歌はどうなんだ？」

「う〜ん……多分君が知っているのと大差ないと思うよ？」

俺たちのいる部屋の壁には大きなモニターが設置されていて、そこには検査用と思わしき大型の機械に入れられた病衣姿の愛歌が映っていた。最初、ジエイルは魔法で愛歌の診察をしようとしていたのだが、ジュエルシード暴走の際に使っていた悪性情報が愛歌の意思で使えるようになった事による弊害でレジストされ、機械による診察へとシフトされていた。機械とはいえ、悪性情報に侵されて正常に作動しなくなるのでは無いかと考えたが、魔法がレジストされていた時にアンチプログラムを作成していたようで不具合を起こしていない。

二日酔いという悪条件でありながら、一瞬でアンチプログラムを作成したジエイルの優秀さに舌を巻く。彼がその気になったら、この時代を終わらせることも可能であろう。

「まあザックリといえば愛歌君そのものがリンカーコアになっているようなものだね。本来ならリンカーコアというのは大気中の魔力を取り込んで貯蔵するための器官だ。先天的に備えているものがほとんどで、時折後天的に備えられるケースがあるのだが、それは置いておこう。しかし、調べた限りでは彼女の体内にはリンカーコアに該当する器官は見当たらない、彼女の身体自体がリンカーコアになっているというべきかな？普通の魔導師たちがリンカーコアを通して行なっている魔力の貯蔵を、彼女は肉体で行なっている。ジュエルシードの暴走によってそういう機能が付いたみたいだね」

「やっぱりかあ……で、治りそうか？」

「分からないとしか言えない。何せこんなケースは過去に事例が存在しない。後天的にリンカーコアが備わったケースはあるにはあるが、彼女の件とは全くの別物だから参考にはならないしね……うん!! 久し振りに面白い事になつてきたぞお!! 私の脳細胞がトツプギア!!」

白衣を脱いで上機嫌に振り回しているジェイルを見て、一先ず安堵する。

ジェイルが愛歌に興味を持った事により、こいつは愛歌から目を離さなくなつた。過去に事例が存在しない、先に同じような存在が登場するのか分からない、愛歌と同じ状態の人間を作れるのか分からない。だから、ジェイルは愛歌の事を調べたければ彼女を守るしかない。より多くの未知のデータを得る為に。

「この事で愛歌の命が脅かされる可能性は？」

「絶対にとは断言出来ないけど無いと思つていいんじゃないかな？ リンカーコアが存在していないと言つても、今の彼女の状態はリンカーコアを備えている魔導師と変わらないんだ。貯蔵している魔力の量が桁外れに多い事と妙な魔力変換資質を持つているけどね。少なくとも今の安定している状態が続くのなら、彼女は無事な筈だよ。細胞なんかも魔力を貯蔵する機能が追加されてるだけでその他の働きは正常だから、肉体的な寿命はそのままじゃないかな？」

「そうか……それは良かった」

安全が保障されたわけでは無いが、ジェイルの説明でこの先愛歌の命が脅かされるような可能性はほとんどないと理解して肩の力を抜く。俺たちの事情に巻き込まれたから、彼女はこんな存在になつてしまったのだ。これで仮に寿命が縮んだとかいつ死ぬか分からないとか言われたら……想像しただけでゾツとする。

「で、物は相談なんだけど……」

「愛歌のデータが欲しいんだろ？本人の了解があればくれてやる。その代わり、あいつに何かあつたら全力で救え。死なせるんじゃないぞ」

「こちらとしても興味深い存在だからね。死なせない事を約束しよう……君もね」

何やら深い意味を感じさせる言葉を言われたがそれに対する反応はしない。ジェイルならば気がついてもおかしくないと考えていたから、話していない事を知っていたとしてもそれに対して驚かないのだ。

「やっぱり気付いてたのか？」

「愛歌君を魔法で調べようとした時についてと思つてカガミきゅんもスキャンしようとしてたんだよね」

「成る程、それはバレるな。あとカガミきゅんは止めろ」

「君、愛歌君の魔力変換に侵されているよね？」

そう、ジェイルが言った通りに俺は愛歌の悪性情報に身体を侵されている。服の上からでは見えず、普段は見えないようにハスターの魔法で変わらないように隠しているが、首から下の身体には黒い刺青の様な物が刻まれている。愛歌を助けた後にこれが刻まれていた事に気が付き、調べた所、愛歌の使っていた悪性情報と同じものであると分かった。ハスター曰く、リンカーコアにまで届いているとの事。

そして興味深い事に、この刺青は魔術回路としても使える。数で数えれば数本分と少ないのだが、移植でもしなければ増えないはずの魔術回路が増えたのは個人的には嬉しかった。これにより俺も愛歌と同じように悪性情報が使えるようになった。

「個人的に調べたけど特に問題は無いぞ？あ、データいる？」

「頂戴頂戴!!……それでも既存の魔導技術に対する天敵なんてものを身体に直接宿しているのだから何が起こるか分からない。私からすれば、カガミきゅんも愛歌君と同じくらいに興味を惹かれる存在なんだ。私が満足するまで死んでもらったら困るよ」

「なら、俺の方も頼んどこうかね。優先するのは愛歌だけど……カガミきゅんはいい加減止めろ」

物凄い勢いでキーボードを打っているジェルから目を逸らしてモニターに映る愛歌を見る。どうやら機械による検査は終わったらしく、愛歌は横たわっていた診察台から降りていた。

側にいた、白熊の背中に乗って。

機械を操作していた、罌と月の輪熊に手を振って部屋から出て行く。

「……なあジェル、なんで熊が助手みたいな事してるんだ？」

「別に深い理由は無いよ。人手が足りないなあって思った時に偶々近くにいたのが彼らだったから、改造して人間並みの知性を持たせてるだけさ」

「そっかあ」

深く突っ込んだら負けのような気がしたので、それ以上は突っ込むことはせずにジェルの作業を眺めておく事にした。

フェイト・テストロッサの姿を確認した。

それがジェイルのところまで診察を済ませて地球に帰還した時の桜木からの報告だった。タイミングに入れ違いになったことを少しだけ残念に思いながら、偵察用の魔力スフィアを飛ばしてフェイト・テストロッサ、そして使い魔であるアルフの監視をする。

ジェイルが見つかるまではプレシア・テストロッサとの接触する為にフェイトの到着を待ち望んでいたのだが、プレシアよりも技術が優れているジェイルを見つけて愛歌の安全を確認した以上、進んでプレシアと接触する必要がなくなったのだ。それでも俺はプレシアのいる時の庭園の座標位置を知らず、このままでは最終決戦に参加して悪役ムーブをするという目的が果たせない。なのでフェイトを監視、そしてプレシアに報告する為に移動魔法を使う際にその魔法を解析して時の庭園の位置を知る事にした。

そして一夜明けて監視用の魔力スフィアから送られてくる光景をチェックしているのだが、彼女たちは拠点にするつもりらしいマンションの一室で荷解きをしていた。

『荷解き、荷解きかあ……』

「引越しをしたら荷解きをする、何もおかしい事じゃ無いわよ？何で桜木君はそんな事を言うのかしら？」

「知っちゃいけない事を知ってしまった的な感じじゃないか？」

アニメだとそのままジュエルシードの探索を始めていたのだが、彼女たちの行動は愛歌が言うようにおかしいことでは無い。この世界を拠点として活動する以上、彼女たちは拠点で生活する事を余儀無く

される。だからこそ、持ち込んできた荷物の整理をしているのだが、桜木的には見たくなかった物を見てしまった感覚なのだろう。

例え、アルフがお隣さんへ引越しの挨拶をしていたとしてもだ。

「にしても呪いだっただかしら？口ではとても偉そうな事を言っていたのに、実はこんな風だったなんて」

『ファツキユー腐れ神。出会った時に乖離剣を抜く事も辞さない』

表面上では不愉快そうに眉間に皺を寄せているだけだが、内心では両手の中指を立てている桜木君の姿が浮かび上がる。乖離剣とやらが何なのかは知らないが、桜木の言い方的には奥の手や切り札に該当する武器らしい。それを出会い頭に使うと言う辺り、桜木の神へのイトが天元突破している。

さて、シレッとチャットに参加している愛歌だが、ジェルに緊急時の連絡用としてデバイスが渡されているので参加出来ているのだ。

「魔力変換：悪性情報」とでも呼べるスキルを身につけ、触手をブンブン振り回すだけでこの世界の魔導師たちを一方的に蹂躪出来る愛歌だが、此方側には踏み込んできたばかりなので素人といっても過言では無い。そこでジェルが護身用だと言ってデバイスを愛歌に渡して身体に不調があれば彼へ、魔導師たちにバレて危険を感じたら俺へ連絡出来るようにしたのだ。これにより愛歌の安全性は高まった。今の彼女の危険性は全て話してあるのでドンパチに巻き込まれに行くような事はないだろう。

『ただいま〜』

「あ、お帰り」

「え？両夜、誰に話してるの?」

『高町士郎さんっていう幽霊。加賀美さんはそういうのが見える人だからね』

壁からニユキつと士郎さんが現れたので挨拶をしたら不審がられてしまった。そういえば見える事を話していなかったなと思っただが、桜木が簡潔に説明して、それで納得してくれたので良しとする。

『今度の連休でなのはたちは友達を連れて温泉に行くみたいだよ。確か、温泉のある方にもジュエルシードがあるんじゃないかな?』
「温泉って言ったら……ああ、山の方か。あそこはもう俺が拾ったから無いぞ。反応はそれ以外には無かったから他に可能性も無いし、純粹に休憩になるな」

『戦闘温泉回がただの温泉回になるのか……』

「温泉、温泉……ああ、そういえばお父さんがこの間温泉旅行が当たったって言ってたわね。連休中に行くから両夜の事も誘ってって言われてたのすっかり忘れてわ」

「……御都合主義、なのか?」

戦闘に介入する事は無く、俺が魔導師兼魔術師だとバレル要因は無いのだが、主人公の行くところに偶然のように行く事になっているのは世界がそれを望んでいるからなのだろうか?

バレル可能性を考えれば行きたくない、そして愛歌を行かせたくない。俺だけがバレルのであればまだいいが、愛歌の存在がバレた時、それが時空管理局の耳に届くのが不味い。俺や桜木のように親のいないものならばまだしも、愛歌には家族がいる。バレてしまえば無抵抗でも抗っても家族から引き離される事になる。それを、俺は望んでいない。

『何を悩んでるんですか?らしくないですよ』

どうするべきかを考えていると、桜木が肩を叩いてきた。相変わらず外見は俺の事を見下したような目をしているが、チャットの文字は

俺の事を労っている。

『バレるのが怖いのならバレなければ良いだけの事です。彼の宝物庫なら、そういう財宝があります。それを使えば大丈夫ですよ』

「桜木……お前、相変わらず外と中が違うな。可笑しいから笑っている？」

『台無しだよこの人』

真面目な雰囲気だったが桜木の内外の温度差が違い過ぎて笑いが込み上げてきたのでこらえる事なく素直に笑う事にする。が、内心では桜木の心遣いに感謝をしていた。

今愛歌が魔力を誤魔化す為に使っている聖骸布は桜木が宝物庫と呼んでいる場所から出て来たものだ。ジュエルシード3つ分という控えめに言っても規格外な魔力を隠す事が出来る聖骸布がポンッと出て来るのなら、より高度な隠蔽効果のある財宝もあるはずだ。本来なら桜木はそれをしなくても良い。俺がこの先どんな事をするのかを知っているので無関係を装えばいいのに、彼は俺に進んで関わろうとしている。

『僕がそうしたいからそうしているんですよ。それに、今世と前世を含めて初めて出来た友達ですから。友達を助けるのは当たり前前の事なんですよ』

前にどうして俺の先の事を知りながら付き合ってくれたのかを聞いた時にこう言われた。今世と前世で友達が俺以外にいなかった事実に泣きそうになるのを誤魔化す為に笑い、それと同時に納得した。

ああ、こいつは善い奴だなあと。

だからこそ、俺はこいつを拒まない。こいつが俺の事を見限り、自

分から離れて行かない限り、俺は彼を側に居させ続ける。

「なら甘えさせてもらおうか。桜木、宜しくな」

『なんか釈然としないですけど……分かりました。家族同伴デート楽しんで来て下さいね!!』

「デ、デート……!!これってデートになるのかしら……」

「男女が出かける事をそう定義するのならデートになるんじゃないか？」

『お、加賀美君の反応が思ったよりも慣れててるぞ？もしかして手馴れてる感じかな？』

「ノーコメントで」

「両夜？何故か分からないけど貴方が女遊びに慣れているっていう情報が届いたのだけど……詳しく聞かせてもらえるかしら？」

「オーケー、落ち着こう。話すからその触手をしまってください」

『うーんこの修羅場』

外面はこの光景を眺めていやらしく笑っている桜木の顔面を全力で殴り抜きたい衝動に駆られるが、そんな事よりもドス黒い瘴気と悪性情報の触手を出しながらにじり寄ってくる愛歌の相手の方が優先事項だった。

「なんでここに居んのさ」

フェイト・テスタロッサが月村邸で高町なのはと邂逅を済ませた後の連休。俺は予定していた通りに沙条さんに連れられて温泉旅行に来ていた。沙条さんはチェックインを済ませてくると移動で疲れて眠った綾香を連れて行ったのでこの場には俺と愛歌、そして誘うは誘ったけど断ったはずの桜木がいた。

それも大人の姿でだ。

俺のように魔法で大人になっているのかと思ったが、ハスターに調べてもらったところ本当に大人になっていると返って来た。恐らくは宝物庫から取り出した財宝を使って大人になっているのだろう。前に若返りの薬があると言われて実物を見せてもらったのでその逆の効果のある薬を持っていてもおかしくは無い。問題なのはどうして大人の姿でこの場にいるのかと言うことだ。

「何、我オレはこの宿屋のスポンサーであるが故にな。その関連でここに来たに過ぎん。貴様らの邪魔はせぬ故安心して逢引に励むが良い」
『僕がここのスポンサーをしていて、優待券を貰ったから来てるんですよ。心配しなくても面倒事に巻き込みなんてしないんで安心してデートを楽しんで下さい』

周りの目を気にしてか、浴衣姿の桜木は設置されているマッサージ機能付きの椅子に座りながらチャット機能と平行して尊大な物言い
で語りかけて来た。右から女将と思われる和装の女性に酌をして貰い、左から支配人と思われるナイスガイに団扇で煽がれている。スポンサーというよりも完全にここの主人のような態度だが、従業員の誰

もが文句どころか嫌な顔をしていないので彼らにとってこれは当たり前の事なのだろう。

「本当かしら？もしも嘘だったら……」

「まあ待て、流石の我も馬に蹴られるのは御免被る。精々貴様らの蜜月を肴として楽しませて貰うだけだ」

『お馬さんに蹴られるのは嫌なんで。まあ2人のやり取りを見て楽しませてもらうくらいはしますけどね？』

「それなら良いわ」

愛歌は桜木の事を嫌っているという訳ではなく、純粹にこの場では邪魔だと思っただけのようで、邪魔をしない事を約束すると敵意を鎮めた。

「ああ、分かっていると思うが隠したければ我のくれてやったそれを外すなよ？」

『2人とも、そのブレスレット外さないで下さいね？バレちゃいますから』

「分かってるよ」

桜木から渡されたブレスレットは隠蔽効果があるらしく、これを着けている間は索敵などに引かからなくなると言っていた。信じていない訳ではないが念のために性能を調べた所、ハスターが探知能力を全開にしても反応を捉えることが出来なかった。桜木の言う通りに、これを外さなければ愛歌の存在はこの旅館にいる魔導師たちにバレないだろう。しかも愛歌だけではなく俺の分まで渡された。俺は黒色で、愛歌は白色。これを着けた時にお揃いだと言って嬉しそうにしていた彼女の笑顔は忘れられない。

桜木に別れを告げて、借りた部屋に向かう。割り当てられた部屋は畳張りで、家族向けなのか広々とした部屋だった。沙条さんは急須に

お湯を入れてお茶の準備をしており、綾香は沙条さんが用意したと思われる布団の上で横になってスヤスヤ眠っていた。

「2人とも来たか……両夜君、君の知り合いだと言っていた彼だが一体何者なんだね？」

「俺の親父の知り合いですよ。滅多に家に帰らないからか顔は広くてですね、こっちは知らなくてもあつちは知ってるって人がいるんです」

着替えを詰め込んだバックを部屋の隅に置きながら沙条さんの疑問に答える。あいつが桜木だと言っても信じてもらえないから、親父——正確には保護者となっているタナカの知り合いだと誤魔化して。前に一度だけ沙条さんにそう思わせる為にタナカに頼み、挨拶に行かせた事がある。その時にタナカは仕事の関係で外国出張が多いと家にいない理由を騙っていたので、沙条さんは疑う事なくアツサリと信じてくれた。

「低姿勢なのにグローバルな方だよ、あの人は。そういえば彼は連休中には帰ってこないのかい？」

「忙しいみたいで帰れないって言っていましたよ。何でも今は北半球と南半球を反復横跳びしてるみたいで」

「そうか、一度腰を落ち着けてゆっくりと話したかったのだが……まあ良い。私は綾香が目を覚ますまで離れられないから、2人は今のうちにお風呂に入って来たらどうだ？」

「そうさせて貰います。愛歌、行こうか」

「……このお風呂って混浴なのかしら……うん、私たちは子供だから許されると思うけど、そういうのはまだ早いと私は思うの!! もっと大人になってから……もっところ、ロマンチックな雰囲気をお願いしたいわ!!」

「少し落ち着け。焦り過ぎてとんでもない事を口にしてるから」

「両夜君……君はまさか、愛歌と混浴するつもりなのかね？」

押しが強いクセして意外と乙女チックな愛歌のせいで阿修羅様にご降臨なされたようだ。憤怒で顔を歪ませている沙条さんの背後には燃え盛る炎を身に纏った三面六臂の阿修羅様が控えている。

どうして温泉に来たのに死亡フラグが立ってしまうのだろうか。

「いや、流石に公共の場ではやらないですよ」

「ほう、それは公共の場では無かったらやるといふ事か……!!」

「お父さん？両夜に手を出したら……洗濯物別々で洗うわよ」

「グハッ……!!」

沙条家の家事は愛歌が一手に担っている。なので洗濯物を洗うのも彼女なのだが、洗濯物を別々に洗うというのか沙条さん的には急所だったらしく胸を押さえながらその場に崩れ落ちた。よく聞く反抗期の娘は父親と一緒に服を洗濯したくないというやつなのだろう。何やらブツブツと呟きながら崩れている沙条さんからは普段のダンディーさからは考えられない程に哀愁が漂っていた。さっきまで憤怒に燃えていた阿修羅様でさえ、両手両膝をついて崩れ落ちている。

「綾香の教育に悪いから黙りなさい」

愛歌がそう言っただけで呪詛のような呟きはピタリと止み、代わりに噛み殺すような嗚咽が聞こえて来た。

「全くお父さんったら………両夜、行きましよう」

「南無阿弥陀南無阿弥陀」

俺が出来るのは沙条さんのこれからを祈って念仏を唱えることくらいだった。

「あゝ……ダメになるうゝ……」

旅館の浴場で肩まで浸かりながら全身を弛緩させる。まだ早い時間帯だからなのか利用者は俺以外に誰もおらずに貸し切り状態。家の風呂とは違う少し熱めのお湯と、露天風呂特有の開放感が合わさって言葉にし辛い快楽を感じられる。初っ端から沙条さん with 阿修羅様という死亡フラグに見舞われてしまったのだが、これさえあればそれも許せる。日頃の行動によって蓄積していたストレスが溶け出していくようだった。

『メンタルケアという点では今回の旅行は十分な効果を出せたようですね』

「ああ、温泉なんて話に聞いてただけで普通の風呂と変わりないって思ってたけど違うわ。これは良いものだ」

他に誰も居ないので外に声が漏れないように気をつけながらハスターに話しかける。機械なのに水に浸けても大丈夫かと心配していたが、防水加工は施されていると妙に力説されたのでこうして連れて来たのだ。デバイスであるハスターに温泉なんて意味があるのかと思ったが、声がいつもよりも柔らかく聞こえるので効果はあるのだろう。

「はあゝ……何も考えずにヒヤッハーしたい……やりたい事をやりた
いようにやりたいなあ……」

温泉に浸かっているからなのか気持ちが緩んでしまい、愚痴が溢れてしまう。今世ではあれやこれやと色々と考えて行動をしているのだが、元々俺は深くは考えずに基本的にその場のノリで行動するタイプの人間なのだ。計画しての行動は出来なくは無いのだが、好みでは無い。もつと気持ちが赴くままに好き勝手に行動したい。

でもそれではダメなのだ。然るべき手順を踏んで高町なのはを始めとした主役たち、善神側である黒須龍斗を成長させなければならぬ。自称ではあるが絶対悪を名乗っている俺と敵対するのなら、それに相応しい存在であって欲しい。

今は我慢の時期だ。極限の空腹状態で出される料理が最上の美食となるように、我慢に我慢を重ねて彼らの成長を待とう。

「ん？君は……加賀美君か？」

「あれ、恭也さん？」

口をお湯の中に入れて我慢我慢と暗示のように呟いていると土郎さんにそっくりな青年——高町恭也が現れた。「翠屋」のシュークリームにどハマリして常連になっているので向こうも俺の事を知っている。彼も来る事を知ってはいたが、偶然会ったという反応を見せる。

「久しぶりだな。君もここに来てたのか」

「ええ、友達の旅行について来たんですよ。恭也さんは？」

「俺も同じだよ。でも生憎と女所帯でな、俺を含めて男はたったの2人なんだよ」

『やあ、加賀美君』

実は3人だつて言っても信じてくれないだろうなあ、と考えながら恭也さんの背後に浮かんでいる土郎さんの姿を視界に捉える。露骨

に視線を向けると不審がられるので焦点を合わせる事なく、あくまで恭也さんだけを見る。幽霊で誰にも見えないのだが良識はまだ失われていないようで男湯に来たらしい。流石に妻や娘だけじゃなくて他の女性も利用している場所には入らなかつたようだ。

「はあく広いですね……」

ペタペタという足音が聞こえて来たので視線をそちらに向ければ、そこには想像していた通りの人物がいた。

短めに切り揃えられた黒髪に実直そうな顔付き。風呂に入るために全裸になって見える身体は細身ではあるがしなやかに引き締まった肉体で実践に向けて鍛えられた身体だった。

「恭也さんの知り合い？」

「ああ、そういえば加賀美君は知らないんだったな。彼は黒須龍斗、なのはの友達だ」

「えっと、はじめまして、黒須龍斗です」

「歳近いんだからもっとフレンドリーで良いぞ？俺は加賀美両夜、翠屋の常連だ。宜しくな」

互いに全裸でなんとも締まらないものだったが、これが善神側の転生者である黒須龍斗との初めての邂逅だった。

「あゝあゝあゝダメになるうゝ」

黒須との初会合もそこそこに、長湯しているのを理由にして風呂から上がった俺はまだ入っている愛歌を待っている間にマッサージチェアーに座っていた。子供の身体ではマッサージチェアーの規格に合わないかと思っただが、高身長を目指して肉体改造をしているおかげか同年代に比べて背が高かったお陰で何とか使えたのだ。

ゴリゴリと力強く肩と首筋が揉まれ、腰も程よい力加減で刺激される。前世を含めて初めてマッサージを受けたのだが、純粹に良いものだと感じた。前世では目的の為に生き急いでいたところもあって知識としては知っているが経験としては知らないという事が山程ある。こうして知っていたが体験した事がない物を体験しているだけでも転生した価値はあると思った。

「ねえ、そのあんだ。少し良いかい？」

「んゝ？」

声を掛けられたのでそちらに視線を向けると、そこには浴衣姿で色鮮やかなオレンジ色の髪を靡かせた女性がいた。

「何か御用？」

「気持ちよさそうにしているけど、それって何なの？」

「マッサージしてくれる椅子だよ。その肘置きのところにお金入れたらしてくれる。やってみたら」

ふーんと言い、しかし興味はあつたのか女性は懐から硬貨を取り出して投入し、恐る恐るといった様子でマッサージチェアーに腰を下ろ

した。始めの方こそ慣れていないせいでひゃわ、と可愛らしい声をあげていたのだが暫くすれば慣れて全身を弛緩させてマッサージチェアのなすがままにされている。

「あ、あ、これ良いねえ……」

最初の警戒は一体何だったのかと問い質したくなる程に蕩けた表情になっていくが、注目すべきはそこでは無い。彼女の胸だ。平均よりも大きいサイズの彼女の胸がマッサージチェアの振動によつて細かく揺れているのが浴衣の上からでも分かる。しかも揺れ方からして彼女は下着を着けていないらしい。

実に素晴らしい光景だった。やっぱりデカイ胸は最高だなと、自分が男だと再認識出来た。

本音を言えばその揺れをじっくりと観察させて欲しかったのだが、そんな事をすれば殺されても文句が言えない事は理解しているのだからこつそりと盗み見するだけに留め、同時にチャット機能をオンにする。

『桜木、俺の隣でマッサージチェア使ってるお姉様のお胸がメツチャプルプルしてる』

『何ですかその報告は……けしからんですよ。じっくりと観察したいですからどこにいるのか教えて下さい』

『悪いな、この光景は1人用なんだ』

『加賀美イツ!!』

『両夜? どういう事なのか後でじっくりと話しましょうね?』

あ、と思った時にはもう遅かった。普段見ることの出来ない光景に興奮していたのか、チャット機能を個別には無く、全員に届くようにしていたままだった。愛歌から送られてきたコメントは普通の物

のはずなのに、触手が蠢いているように見えてしまう。

どうにかしようと考えるが良いアイデアは思いつかず、桜木から念仏をコメントとして送られたので諦めることにした。いくら素晴らしい光景が目の前にあつたからといって、それを俺に対して好意を向けている彼女に知らせるのはいけない事である。

刑の執行を待つ罪人の気分でマッサージチェアに身を委ねようとしていたが、そこで時間になつて止まつてしまう。もう一度硬貨を叩き込んで再び楽園へと辿り着こうとした時、金髪の少女が俺の隣にいる女性に駆け寄っていくのが見えた。

いつもなら隣の女性の関係者かと疑問を持つて終わらせるのだが、今回ばかりは違った。金髪をツインテールに纏めた少女の顔に心当たりがあつたから。硬貨を入れようとしていた手を止め、まさかここに居たのかという動揺を隠す為、そしていつでもここを離れられるようにと携帯を取り出して操作しているフリをする。

「あ、アルフここに居たんだ」

「ん？……ああフェイトじゃないか」

予想していた通り、女性に話しかけて来たのはフェイト・テストアロツサだった。そしてアルフという名前を聞いて、そう言えば彼女はフェイトの使い魔の人間形態だった事を今更ながらに思い出す。原作を見たのが前世でも大分昔だった事もあつて、主要キャラの数人以外の顔と名前が朧げになっている。今回は大丈夫だったが、下手をしていたら怪しまれていたかもしれない。

いずれは敵対する事は決まっているが、それは今ではないのだ。愛歌の事もあつて出来る限りリスクを冒さないようにしなければならぬ。このまま偶々出会った一般人を装って彼女たちと別れようと

したのだが、

「よう!!フェイトにアルフ!!お前たちも来ていたのか!!」

落ち着いた雰囲気の旅館に似つかわしくない大声と大きな足音を立てながらやって来たのは転生者の1人である銀髪の少年。確か名前は御剣刃^{みつるぎやいば}。高町なのはやその友人、さらには容姿の優れた少女たちに馴れ馴れしい態度で声をかけ、逆に男性にはどんな相手だろうが一言目にはモブ、二言目にはオリ主だと言うので周囲から蛇蝎の如く嫌われている少年である。それはフェイトとアルフも例に漏れず、御剣は笑顔で近づいているのだが彼女たちは困り顔に顰めっ面という反応である。

態度、思考などは完全に二次創作で登場するような踏み台転生者のそれなのだが、その転生特典は桜木が自身の天敵だと語る程のものだ。

魔力量は測定不能、規格外を表すEX。剣を魔力で編み上げて実体化させるレアスキル “アンリミテッド・ブレイドワークス無限の剣製”。魔導師たちの燃料である魔力は無尽蔵であり、様々な剣を作るレアスキルはどんな戦況だろうが対処出来る万能能力。本人の思考と戦闘技術が残念過ぎるので然程驚異的には感じられないが、それでも今後それらが改善される可能性を考えれば十分に脅威である。

そもそも人類が生み出した物であれば時間軸を問わずに所持しているというスキルを持つ桜木の天敵になれるというだけで脅威として認識するには十分過ぎる。

本人の思考と戦闘技術は下の下の下だとしても。

そんな御剣はフェイトとアルフに向かって話しかけているが、明ら

かに2人は好意的に接していない。フェイトは拒絶はしたいがどんな風にすればいいのか分からないという困り顔だし、アルフは殴りたいけど殴ってはいけなから我慢しているという顔だし。そしてそんな2人の反応を知ったものかと、御剣は一人で上機嫌に話しかけている。

「……ん？お前……」

と、上機嫌に2人に向かって話しかけていた御剣だが、俺がいることに気がつくとその顔をみるうちに怒りで歪ませていく。

「おいお前!!2人に何をしやがった!!」

一体どこに俺が2人に何かをする要素があったというのだろうか。何かしたつけ、と視線を向けるが、2人は顔を横に振って否定する。

「何もしてないけど……」

「嘘を吐くな!!お前が何かしてなかったら2人がこんな顔するわけないだろうが!!」

2人の顔のことには気がついていたようだ。もっともその原因が自分にあると気付かず、俺に原因があると考えているようだが。完全に頭のヤベー奴の思考だった。出来るのなら早くこの場を離れたかったが、どうにかして御剣を沈めないと愛歌に被害が及びそうな気がする。

御剣に絡まれた愛歌がストレスで暴走する未来が見える。

「そんな事を言われても何もしてないぞ。言いがかりはよしてくれ」

「五月蠅え!!モブ風情がオリ主である俺に生意気なんだよ!!」

そう言いながら殴り掛かってくる御剣。流石にこの場で魔法を使わない程の理性は残っているようだが、精神が未熟過ぎるこいつならその内使ってしまったそうだ。幸いなことに殴りかかる挙動は武術を齧っているものではなく、それどころか喧嘩すらしたことの無い素人のそれだったので十分に対処出来る。

大振りに殴り掛かってきた手に腕を添えて受け流し、重心が移動しかかっているのを見計らって足払いをかける。すると前に出ようとしている力は変わらず、だけど支えとなる足は地面から離れているので止まる事が出来ず、御剣は俺を殴ろうとしたそのままの勢いで自分から壁に顔を突っ込んでいった。

「今の内に逃げるぞ」

「え……え？」

「ああ、ちよつと!!」

御剣の反応は無く、だが時折動いていたので気絶しただけだと判断して2人の手を引いてその場から逃げ出した。その時にチャット機能で愛歌に御剣がいる事、桜木に御剣が暴れようとしたので制圧した事を告げるのを忘れない。我慢の出来ない餓鬼の癩癩で、この旅館が無くなる事が嫌だったから。

「ここまで来れば良いか……急に引っ張って悪かったな」

「ううん、大丈夫だよ」

「寧ろ良くやってくれたって褒めてやりたいくらいさ!!」

浴場から遠く離れた中庭まで来て、御剣が追いかけて来ないのを確認してから2人の手を放す。今回の2人は俺と御剣のイザコザに巻き込まれた立場だと言うのに彼女たちはそれを笑って許してくれた。それどころかアルフの方は満面の笑みを浮かべながらサムズアップを向けている。

正直に言えば2人をこの場所に連れて来たのは御剣から逃げるためだけでは無く、風呂に入っているであろう高町なのはたちと出会わないようにするのも理由に含まれているのだが言わなくても良いだろう。

体力的なものでは無く精神的な疲れから癖で懐からタバコを取り出そうとして、出て来たのはココアシガレットだった。そういうば子供姿では吸わないようにする為に代わりにこれを持って来ていたなあと思いつきながらココアシガレットを啜る。

「あの頭のヤベー奴は何なの？キチガイなの？それとも精神病患者？ああでもモブとかオリ主とか言ってたからシミュレーション仮説の可能性もあるな」

「あはは……ごめんね？あの人、怒りっぽいのかすぐに怒っちゃうの」「フェイト、あれは怒りっぽいんじゃないやなくてただの癩癩だよ。自分の思う通りに進まないだけですぐにああなるんだ」

「そりゃあ何ともまあ、未熟だな」

フェイトは元からの気質なのか言葉を選んでフオローしようとしているのだが、アルフはそれをバツサリと切り捨てていた。フェイトは苦手としているだけで嫌っていないように見えるが、アルフは心底嫌いだという風で不機嫌そうにしていた。

フェイトたちに精神的な負荷を与えるという役割では御剣はその

役割を十分に果たしていると言える。だが、あまりにも負荷をかけ過ぎるとプレシアによるネタバレの前に心が折れてしまいそうだ。最悪原因……御剣を排除する方向も考えておいた方がいいかもしれない。

同じ転生者なのだから出来る事ならばそうはしたくない。だけど、あいつが存在するせいで支障が出るのならそうするだけだ。

「ところであんた、名前はなんて言うのさ？私はアルフ、こっちはフェイトだよ」

「フェイト・テスタロッサです」

少なくともA's編までは様子を見ようと決めた所で名前を聞かれた。そういえば俺は彼女たちの名前を知っているが、2人は知らなかったなと思いつく。

「そういえば言っただけじゃなかったな。俺は加賀美両夜って言うんだ。好きに呼んでくれ。ただしカガミキゅんと言ったらブチ殺す」

「ならリョーヤって呼ばせて貰うよ」

「わ、私もリョーヤって呼んで良い？」

「良いぞ？カガミキゅんと呼ばなかったらな」

「どうしてそう呼ばれるのが嫌なの？」

「恥ずかしいじゃん」

「殺意出してた割には案外普通の理由だったね……」

ジェイルにそう呼ばれた時からそう呼ばれる度に全身に鳥肌が立って仕方がない。これは一種の拒絶反応みたいなものだ。この先絶対に慣れることは無いだろう。

なので今度ジェイルがそう言ったらブチ殺す……と、愛歌の事を診れる奴が居なくなってしまうので、擬人化していないハスターとナイ

アルラトホテツプの同人誌を見せてやろう。

『……………!!……………!!』

『……………!!……………!!』

遠くどこから星から全力のツッコミの気配がした。しかしそれ以外には何も無かったので無視する事にする。今更抗議の声を上げられたとしても、もう同人誌は完成しているのだから遅いのだ。

ちなみにハスターの擬人化触手同人誌は良い値段で売ってくれた。

『……………!!』

『……………!!』

片方の気配が小さくなった気がする。

「あのさ、リョーヤ。もし良かったらフェイトと友達になってやってくれないか？最近この街に来たばかりだから知り合いが誰もいないからさ……………」

「ぼっち？一人ぼっち？」

「一人ぼっちじゃないよ。アルフがいるし、母さんもいるし」

「ほら、ご覧の通り純粋な子でさ……………」

「言いたいことは分かった」

ぼっちと言われてもアルフと母親、その2人しか挙げられなかった時点でもう察する事は出来た。アルフはフェイトの使い魔であり、原作では彼女の為にプレシア・テスタロッサと対立を厭わない。だから偶然出会った、魔導師ではない俺に友達になってほしいのだろう。

でも、残念だけど今はその返事をする余裕は無いんだ。

「悪いけど返事は後回しにさせてくれ……これからちよつと、お話しななきゃならないから」

「――両夜」

言葉にすれば音符マークが付いていそうな声で、いつのまにかやって来た愛歌が俺の名前を呼んだ。浴衣姿で、温泉から上がったばかりなのか頬は紅をさしていて髪の毛には水気が残っている。その微笑みはとても無邪気で、見慣れていない者がそれを見れば天使のように見えたかもしれない。

全身から放たれる怒気を除けば。

愛歌はスキルを使つてはいけない。彼女の特異性を隠すために使つてはならない。だから今はスキルを使用していないはずなのに、彼女の背後には黒い触手が蠢いているように見えた。もちろんそれは愛歌の怒気を見せているイメージだと理解している。

「さあ……逝こうか」

すぐに戻ってくるからと2人に告げ、俺は愛歌に引き摺られて近くの茂みの中に入っていった。

「いやいや、お待たせ」

「え……ええ……」

「お待たせって、さっきから凄いい音が聞こえてたんだけど何がどうしてそうなったのさ」

愛歌に茂みの中に引きずり込まれてから数十秒後、何事も無かったかなように出てきた俺と愛歌を見てフェイトとアルフは明らかに引いていた。それは俺の格好が原因なのだろう。アルフが言っていたように凄いい音を立てるようなことはあつたが俺は無傷のまま、目に見えるところだけではなく見えないところにも傷一つ付いていない。

頭に犬の耳を生やし、首には首輪とリードを付けられているが。

「念のためにと思っただけど持って来ておいて良かったわ。すぐに目移りしちゃうようなダメ犬の手綱はしっかりと握っておかないといけないって、死んだお母さんも良く言っていたし」

「お、それはもしかして沙条さんの事か？」

「何でそんなに平然としてるのさ……」

「だって俺が悪いのは自覚してるし。このくらいで済むのなら安いものだろ」

嫉妬からくる暴力でも振るわれるのではないかと覚悟していたが、まさか犬の耳と首輪を着けさせられるとは予想外だった。幸いにも首輪は苦しくなく、リードを握っている愛歌はご満悦の表情を浮かべている。これならば俺の羞恥心が死滅するだけで済みそうだ。

「えっと……似合ってるよ？」

「そりゃあそうよ。だって両夜に着けるために選んだのだからね!!」

……ところで貴女たちは誰なのかしら？」

「金髪の方がフェイト・テスタロッツサ、オレンジ色の方がアルフ。御剣に絡まれてた近くにいたら絡まれたんで、逃げるついでに連れてきた」

「初めまして、フェイト・テスタロッツサです」

「私はアルフ、宜しくな」

「沙条愛歌よ。先に言っておくけど、両夜は私のだから渡さないわ!!」
「ちよつと落ち着こうか」

俺の前に立って2人に向かって威嚇するように宣言する愛歌を後ろから抱き締める。始めは理解していなかったが、その事を認識するとボンツと、首から上が真っ赤に染まった。割と俺への好意を公開しているが、逆にこちらから攻められるのには滅法弱いのだ。抱き着きだけではなく、少しアダルティーな感じで指を絡ませながら手を繋ぐだけでも顔を真っ赤に染め、借りてきた猫のように大人しくなる。

「悪いな、俺の連れが暴走して」

「そんな事ないよ」

「世の中には色んなタイプの人が居るって改めて認識したよ……」

「そういえばさっきの友達の件だけだな」

愛歌を大人しくさせたところでアルフから持ちかけられた話を蒸し返す。無自覚系ぼっちであるフェイトの友達になってほしいと頼まれていたのだ。交友関係を広げる事で心の支えを作ろうとしているのだろうアルフの考えには賛成だ。

「生憎と、俺って作ろうと思って作ってる訳じゃなくて、気がついたらなっていたっていう人間なのよね。だから、友達になろう!! うん!! で友達になったとしても、これって友達って言えるのかなあ?なんて考えるわけよ分かる?あと愛歌、そのままグリグリやられると帯が解けてアダルティーな感じになるから止めてくれない?」

「嫌よ」

「嫌か……嫌ならしょうがないな」

「諦めちゃうんだ……」

やられっぱなしでは不服で反撃のつもりなのか、いつも何か愛歌は反転して俺に抱き着いていた。それにより帯が解けそうになっていたので一旦止めて欲しかったのだが、一層強く抱き締められるだけだった。

このままでは露出シヨタが出来上がってしまう。隙を見て帯を締め直そう。

「言いたいことは分かるけど……」

「だから、今日一日一緒にいようぜ。それで気兼ねなく話せるようになったら友達って事で」

生憎と胸を張って友人だと言える人間は桜木と愛歌くらいしか思いつかない。その彼らと違って、一緒に行動をしていて気がついたらそういう関係になっていたのだ。なら、フェイトと違ってそういう関係になれるかもしれない。悪役だとか主要人物だとか、そういう小難しい事は一旦置いておいて、今日一日はやりたいようにやらせてもらうとしよう。

「お、そりゃあ良いね。見ての通りこの子は世間知らずで箱入り娘だから、色々教えてあげてよ」

「アルフ、私は箱に入っていないよ？」

「取り敢えず天然さんだって事は理解した。愛歌もそれで良いか？」

「貴女がそうしたいと決めたのならそうしたら良いわ。ただし、さつきみたいな事はしちやダメよ？次は愛歌ちゃんウィップでお仕置きするわよ」

どうやらあの凶悪極まりない触手の名前は愛歌ちゃんウィツプに決まったらしい。愛歌の風貌で鞭と聞くとドMロリコン大歓喜の光景が出来上がるのだが、あの触手が使われると痛気持ちいいを通り越して人が死ねるのでご遠慮願いたい。

そもそも、俺は虐められるよりも虐めたい派なのだ。

「じゃあそこら辺探索しようか。本当だったら温泉の定番と聞いている卓球でもやってみたいけど、ある場所がさっきの奴が居たところの近くだからな……」

「あははは……」

苦笑いするフェイトとため息を吐いているアルフの姿を見てこいつらも苦労しているなあと、軽く御剣の所業に同情しながら、抱き着いている愛歌を引きずるようにして中庭の散歩をする事にした。

フェイトとアルフと出会ったのが昼頃、そこから散歩をしたり、桜木から御剣が強制排除された事を聞いて卓球をしたり、その際にアルフの胸に目が行ってしまった事を愛歌にバレて愛歌ちゃんウィツプの刑が約束されてしまったり、卓球をして汗をかいたからと2度目の温泉に入ったりと時間を過ごした。始めの方は戸惑いがちであったフェイトだが、俺の前世で習得した詐欺師まがいの話術により徐々に警戒心を無くしていき、卓球をした時はガッツポーズをする程にはしゃいでいた。

そして夕食の時間になり、良かったら一緒に食べないかと誘ったのが30分前。現在では、少し顔を覆いたくなるような光景があった。

「沙条さん……!!」

それが俺の目の前で酒瓶を抱き締めながら眠っている沙条さんの姿だ。元々アルコールに弱かったのもあったが日頃の疲れが溜まっていたらしく、愛歌が二、三度酌をただけであっさり酔い潰れてしまったのだ。普段ダンディズム溢れる沙条さんが顔をだらし無く弛緩させながら眠っている光景は、彼に少しだけ憧れていた身からさせて貰えば複雑なものがあつた。

「これで良いのよ。お父さんつたら今日の旅行の為に結構無理をして予定を空けたみたいなのよ。身体を休めるのが目的なら、しっかりと休んでもらわないとね」

「たしかに最近帰るのが遅かったみたいだけどさ……」

普段はぞんざいに扱っているのに、こういう時の気配りは出来るらしい。愛歌は押入れからタオルケットを取り出すと身体を冷やさないように沙条さんにかける。

常日頃の態度が塩なので嫌っているように見えてしまうが、やはり愛歌は沙条さんの事が好きなのだ。でなければ彼の体調を気遣って酔い潰したり、こうやってタオルケットをかけたりはしない。反抗期というべきか、精神が早熟しているというべきか、少しばかり周りよりも早く育っているのだからそういう対応をしようだけなのだ。

「フェイトちゃん、アルフおねーちゃん。これ美味しいよ!!」

「そうなの?ちよつと頂戴ね……うん、美味しい」

「いやあ来てからずっと思ってたけどこっちの料理は美味しいねえ」

綾香はすでにフェイトとアルフに懐いたようで、2人に挟まれながら料理を一喜一憂しながら食べている。これが美味しいあれが美味しいと一口食べる度に2人に報告する姿は見ていてもホツコリする。

こつそりとその様子を写真に撮って桜木に送ったら、チャットで読めない文字が返ってきた。

「綾香、ちゃんと野菜も食べなさいよ」

「アルフも食べないとダメだよ?」

「う……お野菜嫌い……」

「や、野菜なんて食べなくても生きていけるし……」

その瞬間、綾香とアルフはガツチリと手を握り合い、野菜嫌い同盟が結ばれた。

「そうなの……だったら、野菜を食べない綾香にはこの旅館自慢のデラックス温泉パフェはあげられないわね……」

「お野菜食べりゅ!!」

「綾香?!」

しかしその同盟もデラックス温泉パフェの魅力には勝てず、あっさりと崩れ去る事になったが。

「それにしても、リョーヤは美味しそうに食べるね?」

「そうか?俺としては普通に食べてるつもりなんだけど」

「確かに、こう一口一口を味わって噛み締めてる感じ?」

そんなつもりは無かったのだが、指摘されてみると心当たりはある。前世で少年期に育ったところの環境は劣悪に劣悪を極めていた。命の危険なんてそこら辺に転がっていて、人権なんてものを語れば笑

われてから肉袋のように扱われる、そんな場所だった。そんなところで何も力を持たない子供が満足に食べていけるはずがなく主食は食べられそうなものであれば何でも、腐りかけた残飯がご馳走という有様だった。

そんな環境で育ったからなのか、美味しいものを食べたいという欲求はあるし、長く味わっていたいという気持ちもある。それが彼女たちからすれば気になったのだろう。

そうやって楽しく食事を済ませ、綾香の持ってきていたトランプで遊んでいると夜も遅くなっていった。綾香はまだ遊びたがっていたが船を漕いで今にも寝落ちしそうだったので、また明日も遊ぶとフェイトとアルフと約束して倒れるように眠りに落ちた。

「……アルフ、そろそろ」

「何だ、もう帰るのか？」

綾香が寝たのを見計らってフェイトが立ち上がりとしていたのでそこに声をかける。恐らくはここにきた目的であるジュエルシードの探索をしようとしているのだろう。

「うん、綾香ちゃんも寝ちゃったから私たちも寝ようかなって」

「だったらお茶でも飲んでけよ。まだいると思ってる人数分用意したんだ」

少しだけ迷ったそぶりを見せながら、それでもお茶の一杯なら良いかとフェイトは湯気が立つお茶の入った湯飲みを手に取り、息をかけた冷ましながら飲む。一口、二口と少しずつ飲んでいたが、湯飲みが空になった頃には顔を真っ赤にし、フラついたかと思ったらその場で倒れた。

「フェイト!?!リョーヤ、何をしたんだ!!」

「何をつて、お茶の中にお酒入れたんだよ」

チャポチャポと中身のまだ残っている徳利を揺らしながら悪びれもなく言う。あのまま帰していればフェイトたちは目的であったジュエルシードの捜索に向かっていた。だが、ここにあったジュエルシードはすでに俺が回収している。見つからないジュエルシードを探させるわけにはいかないと、こうして沙条さんの飲み残しであるお酒を使つてフェイトを酔わせたのだ。

「見たところフェイトは疲れてるみたいだったからな、少し強引だったけどこうさせて貰った。流石に友達が疲労で倒れるなんて目覚めが悪いからな……てかアルフ、体調管理くらいしっかりしろよな?」
「うっ……だ、だってフェイトがやる事があるから……今日も本当だったら休ませるつもりだったんだけど……」

「押し切られかけてるじゃねえか……だからこうやって酔わせたんだよ。フェイトがここまで弱かったのは予想外だったけど。そのまま布団に入れて朝まで寝かせてやれ。基本的な生活習慣を改善しないと焼け石に水とはいえ、しっかりと寝かせてやればマシになるだろ」
「分かった……フェイトの事、ありがとうね。リョーヤ」
「友達だからな」

少しだけ恥ずかしさを感じながら、フェイトを抱えて出て行くアルフを見守る。アルフは休むのかは分からないが、フェイトはこれで休めるだろう。原作でも彼女はギリギリまで追い詰めていたのは覚えている。これで少しでも休めれば幸いだった。

「今日会ったばかりの子に優しいわね」

「したいように行動してるけど、打算も混みだからな。あいつがここで潰れるのは俺としても不利益になるんだよ」

魔法による監視、盗聴が無いことを確認してから綾香を寝かせてきた愛歌に話しかける。徳利を口につけて中身を飲むが、地酒なのか度数は然程高くなく、後味のスッキリとした清酒で中々に良い酒だった。

「あれやこれやを気にかけてやらないといけないんだよ」

「分かっているわよ……」

「何だ、嫉妬してるのか？」

「してるわ。だから……」

掛け布団を引っ張りながら愛歌は俺の膝の上に乗し、それに包まれる。2人とはいえ子供の身体なので、余裕を持って包まれることになった。

「今日はこうして一緒に寝ましょう？」

「了解です、お嬢様」

逆らう理由も無かったのでその申し出に従い、リモコン操作で部屋の電気を消してそのまま寝る事にした。

トクントクンと、密着する事でより強く感じられる愛歌の鼓動。それを子守唄代わりに聴きながら。

温泉で疲れを癒し、これから頑張るぞと気合を入れ直したのがついこの間。それなのに俺は疲れ切っていた。鏡を見たらきつと俺の目は死んでいるに違いない。その原因は、俺の眼下で繰り広げられている光景だ。

街中で発見された暴走しかけているジュエルシード。外への被害を出さないために結界が張られているが、その周りでは高町なのはとフェイト、ユーノにアルフ、更には転生者たちが魔法を使って戦っていた。爆弾の周りで重火器を使った戦闘を行なっているといえれば分かりやすいか。下手をすれば魔法がジュエルシードに命中して本格的に暴走を始め、地球崩壊待った無しである。

高町とフェイト、黒須はジュエルシードに注意しながら戦っているので問題無い。ユーノはバインドを用いながら、アルフは格闘技主体の戦闘スタイルなので、彼らも問題無い。問題なのは残る転生者2人だ。

御剣は無尽蔵の魔力を潤沢に使ってスキルで剣を作って射出し、もう1人の赤髪の転生者——赤賀和真あかぎかずまは10秒ごとに能力が倍加するスキルを使って上昇した魔力を使って魔法を撃っている。彼らは他の者たちと違って周りを気にせずに戦っている。今は奇跡的にジュエルシードに被害は向かっていないが、その内命中して俺の危惧している通りになるだろう。

「てなわけでちよつと介入してくる。流星に地球崩壊は見逃せんわ」

『うくん、悪役ロールしてる割には介入する理由が善人ですね』

「馬鹿野郎、俺は悪だぞ？地球が無くなったら悪役もクソも無いだろうが」

「でも良いの？今日までずっと姿を隠していたのに」

「そろそろ姿見せて警戒させた方が良かったって考えてたから良い機会だと思ふ事にする……てかそう思わないとやってられるか」

姿を見せることは決めたが身元バレまでは流石に御免被る。なので子供の姿から変身魔法で大人の姿に変わり、顔を隠す為に蒼白い仮面を着けてヴィマーナの淵に立つ。

「んじゃ、行ってきます」

『頑張つて下さい』

「行ってらっしゃい。負けたらダメよ？必ず勝つて帰つてね？」

愛歌と桜木にサムズアップを向け、ヴィマーナから飛び降りる。

足場が無くなったことで身体は重力に引かれて自然落下を始め、徐々にその速度を加速させていく。このままの勢いで落ちれば着地する時には愉快的なオブジェクトになってしまうことは間違い無しだ。残念な事に俺には飛行魔法の適性は殆ど無く、高町やフェイトのように自由自在に空を飛ぶ事は叶わない。精々出来て直線的に素早く移動する事だけ。そんな頼りないものでも使えば俺が愉快的なオブジェクトになる未来を回避出来るのだが、それではダメだ。

理由は……それではつまらないから。

ゆっくりと、静かに着地していつのまにかそこに居た、では無く、目を引く方法で現れて俺の存在を見せびらかさなければならぬ。効率や能率なんていうものではなく、ただの俺の趣味であるが。

なので腰から銃型のデバイス……愛歌命名のカスパールを引き抜く。オペラ「魔弾の射手」に登場する、狩りの魔王ザミエルに魂を売った猟師の名前。主役では無くても悪魔と契約を結んでいた人物の

名前を持ってきてくれた辺り、愛歌は本当に俺の事をよく分かっている。

カスパールの銃口を下に向けて、引き金を引く。カスパールは魔力弾だけでは無くても実弾も撃つように改造されたデバイスで、使用する弾薬の種類を問わない。装填された弾薬によって、その銃口のサイズを変える。現在の銃口は50口径^{12.7mm}、銃火器の中でも最大の破壊力を持つ事で有名なアンチマテリアルライフルと同じ口径である。

実弾を撃てるということは、反動も当然のようにある。本来ならば腹這いになって撃つようなそれを撃つたことで、落下する速度が軽減されながら弾き飛ばされるような衝撃がやってくる。銃身から空になった薬莖を叩き出し、それを回転することで流しながらさらに引き金を引く。それを何度も繰り返しながら落下速度を極限まで落とすまで着地する。

何度も爆音を立てながらやってきたことでこの場にいる全員の視線が集まる。派手な音を立てながら乱入をした事により、全員の手が止まっていた。突如として現れた俺に警戒、困惑などの感情が向けられるのを感じながら、

「封印」

『封印魔法行使——封印、完了しました』

隣に浮かんでいたジュエルシールドにカスパールの銃口を向け、ハスターに指示を出すのと同時に引き金を引くことでカスパールが封印したように見せる。カスパールの製造目的がハスターにはない攻撃性を持たせる事だったので、ハスターが使える封印魔法を使うことが出来ないのだ。なので封印する為にはハスターに任さなければならず、だけど2つのデバイスを使っているというアドバンテージを隠す為にカスパールで封印したように見せた。

「ツ!! テメエー!!」

「新手の転生者かー!!」

封印したジュエルシードを回収すると、誰よりも早くに御剣と赤城が復帰して向かってきた。御剣の手にはスキルで作った黒と白の双剣が握られ、赤城の手にはデバイスである大剣が握られている。さっきまでは互いを否定するように戦っていたのにこうして息のあっている姿を見ると笑いが込み上げてくる。流石に2人の連携はお粗末としか言えないものだが、まともな実戦経験も無い彼らにそんな事を期待するのは酷というものだろう。

なので、今後に期待して叩き潰す事にする。

カスパールの銃口を向けて引き金を引き、実弾では無く魔力弾を発射する。非殺傷設定の施されたそれを先行していた御剣が双剣の片方で弾こうとし、逆弾き飛ばされた。残念だが、カスパールの魔力弾はアンチマテリアルライフルを想定している。両腕を使って防ぐ、あるいは逸らす事を選んでいたら結果は違っていたかもしれない。

弾き飛ばされた御剣の背後から飛びこえるようにして赤城が飛び出し、大剣を振るう。その剣筋はお粗末なものだが、スキルを使って身体能力を強化している為に小学生の一振りとは思えない程の速度でそれは振るわれていた。

けど、あいつの剣よりも全く遅い。

カスパールの銃身を大剣に添えて僅かに横から力を加えてやり、その軌道をズラす。俺という標的を捉えることなく大剣はアスファルトを砕き、啞然としている顔面にカスパールを突きつけて引き金を引

く。

バリアジャケットというのは魔力で構成された魔導師の戦闘服である。形成されると同時に全身に不可視の防御フィールドが形成され、バリアジャケット越し以外の攻撃からも使用者を守る。なのでバリアジャケットを展開している場合はその防御フィールドを越えなければダメージを与えることが出来ない。

貫通特化の魔力弾はバリアジャケットの防御を抜いて赤城にダメージを与えた。非殺傷設定なので外傷こそ着かなかったが、頭を撃たれたことで脳震盪を起こしてそのまま大の字に倒れる。

「死ね……ッ!!」

いつのまにか遠く離れた場所まで移動していた御剣の殺意に満ちた眩きが聞こえた。視線をそちらに向ければ、御剣はドリルのように捻れ曲がった剣を矢のように弓に番い、それを放とうとしていた。強張りの弓なのか、本人の筋力が足りないのか分からないが、偉くもたついているように見える。だが、それは人を殺すには十分過ぎる威力があると直感で理解出来た。

「……魔弾デア・フライシユッツェの射手」

上手くいかない事があればすぐに癩癩を起こし、自分の強さに慢心して直接的な手段を取ろうとする未熟さにまだまだだと評価を下し、御剣に銃口を向ける事なくカスパールの引き金を引いた。

魔力弾が射出されずに空撃ちしたように見えるだろう。しかし、引き金を引くのと同時に御剣は白目を向いてその場に崩れ落ちた。

魔弾デア・フライシユッツェの射手、ハスターとカスパールの2つによる必殺の魔弾。カス

パールの射出した魔力弾をハスターが即座に目標の体内に直接転移するという初見殺しの技。例えネタバレされて対策を取られたとしても、ハスターのサポートに特化した機能により、その対策を乗り越えて必ず相手を撃ち抜く。今回は魔力弾であったのに加えて非殺傷設定なので御剣には傷一つ付いていないが、本来ならこれは実弾で行われる技である。

バリアジャケットの守りを通り抜け、体内に直接銃弾を叩き込む、文字通りの必殺の技。

交戦開始から30秒と経たずに御剣と赤城の2人を戦闘不能にした事により、残された5人はようやく俺が驚異的な存在であると認識して戦闘態勢に移る。

「Come on――」

挑発するようにカスパールでガンアクションを行いながら、流暢な英語で語りかけた。

御剣と赤城が倒された後の彼らの反応は、命を賭けた実戦経験がほとんどない者とは思えない程に早かった。ジュエルシードを回収しようとしている者たちと奪おうとしている者たち、互いの仲間に視線を向け、恐らくは念話で短い会話を交わし、それぞれが違う行動を選んだ。

黒須、高町、ユーノの3人はその場に残り、構えて交戦の意思を示した。ジュエルシードの危険性を知っているから、それを奪おうとしているように見える俺の事を放っておかないと判断したのだろう。黒須が前に出て長剣型のデバイスを構え、その後ろに高町とユーノが立つ。接近戦を主としている黒須が前に出て、砲撃とバインドによるサポートの高町とユーノが後方に控えるというのは定石通りなのだが悪くない判断だった。

対するフェイトとアルフだが、即座に撤退を選んだ。敵である俺に背中を向け、なりふり構わずに全力でこの場から逃げ出す。俺がジュエルシードを封印して確保した事で、この場のジュエルシードは諦めたらしい。戦力が未知数の俺と戦うのは得策ではないと考えての行動だろう。その行動は慎重を期するのであれば間違いでは無かった。

フェイトたちを攻撃する事は出来たがその即断を讃えてそのまま見逃す事にする。ジュエルシード争奪戦に本格的に参加するつもりならば彼女たちをこの場で処理した方が良いのだろうか、俺の目的はあくまで俺の存在を知らせる事。ジュエルシードを確保したが、それは興味深いからという理由で2つもあれば十分なのだ。今回のように爆弾の近くでガンパティーするような事がない限りはこれ以上俺は介入するつもりはない。

逃げ出していくフェイトの後ろ姿を見て高町が悲しそうな声を出していたが、ユーノに叱咤されて改めて俺に注意を向ける。桜木に聞いた話では高町と同じ年くらいだと聞かされていたが、どうも戦いの基本というものを理解しているようだ。遺跡の発掘をしているらしいから、その最中で原住民族とかち合う事があつたのだろうか。

「three、two、one——」

緊張感が高まり、黒須が飛び出す為に僅かに重心を移動させた瞬間、カスパールを持っていない手を前に突き出して指を折りながら3カウントを取りローゼロになった瞬間に短距離転移ショートジャンプで高町の隣に移動し、頭に銃口を押し当ててゼロ距離射撃を行う。

なんでもありの戦闘経験は間違いなく俺の方が多いのだが、この世界の魔法を使った戦闘においては向こうの方が多。加えて数の方も一対三と向こうの方が有利である。馬鹿正直に真正面から戦えば向こうに圧されることは目に見えている。故に黒須から動き出す事で奪われそうになっていた主導権を動き出す瞬間に3カウントをする事で奪い取り、正面から短距離転移ショートジャンプによる奇襲でイニシアチブを取った。

出来る事ならばこれで高町が落ちてくれれば良かったのだが、魔力弾を食らって仰け反った程度で然程ダメージを負っていないように見える。バリアジャケットの防御が赤城よりも厚いらしい。一応アンチマテリアルライフルを想定している威力なのだがこの程度で済ませられるとは自信が無くなってしまいそうだ。

なので追加。突然の奇襲を受けて何が起きたのか把握し切れていない高町の頭部に更に魔力弾を叩き込む。

カスパールは引き金を引き続ければマシンガンのように連続して

撃てるように設計している。故に銃口を高町の頭部に向けたまま引き金を引き続けければ、秒間20発射出可能な魔力弾の全てが頭部に目掛けて放たれる。流石に防御が高いとはいえ集中して頭だけを狙われればダメージは積もる。脳震盪でも起こしたのか、高町は意識は残しているもののその場に崩れ落ちた。

「なのはーっ!!」

この奇襲を目の当たりにし、真っ先に正気に戻ったのはユーノ。フレットの姿のまま高町の側へと駆け寄りながら、俺を拘束する為にバインドを何重にも重ねがけする。それは力任せ魔力任せに行使されるものではなく、どこをどの様に止めれば暴れにくいのかを理解した掛け方だった。より少ない労力で大きな相手を抑え込む。まさしく理想的な拘束の仕方。力任せではこの拘束からは逃れ辛く、下手に手を出さずに黒須が正気に戻ってやって来るまでの時間稼ぎに努めているのがよく分かる。

だからこそ、今回は相手が悪かったとしか言えない。

俺を縛り上げるバインドーそれらが片っ端から崩れ落ちる。

「なーっ」

何が起きたのか理解出来ないユーノを蹴り飛ばす。愛歌の悪性情報による汚染を飲み込んだ影響で、俺の身体にも悪性情報の魔法を汚染して不発にさせるという効果が出ている。砲撃系の魔法の様な魔力を叩きつける系統の魔法であるのなら魔法そのものが維持できなくても魔力そのものをぶつける事は出来る。しかしバインドの様な攻撃性を持たない魔法であれば、俺の身体に触れた瞬間に悪性情報に侵される。

仮にユーノが攻撃性のある魔法を使っていれば結果は変わったかもしれないが、不得手なのか監視している最中で彼がそんな魔法を使った所を見た事がない。そもそも使えていればジュエルシードに負けて誰かに頼るということは無かったはずだが。

ともあれ、これで高町とユーノは無力化した。御剣も赤城も目覚める気配は無く、残されたのは黒須1人だけ。転生してからずっと知りたかった俺の対抗者の実力をようやく知る事が出来る。

「オオオオオオーツ!!」

一気呵成と言わんばかりに魔力をジェット噴射の様に噴出させて迫る黒須。俺の目が錯覚で無ければ噴出された魔力が炎となって燃え上がっている様に見える。

『……解析完了。あの炎は魔力変換によるものです』

「燃え滾る正義感ってか？物理的に燃え上がるとはたまげたものだ」

その姿はまるで自身を薪にして燃えている様で、酷く痛々しく見えた。

だがそれはそれ、これはこれというやつだ。痛々しく見え、そう思っただけでそれ以上は何も感じない。

黒須が間合いまで詰め、切りかかって来る瞬間に短距離転移ショートジャンプで一閃を躲し、背後から撃つ。高町を倒した魔力弾の連射、それを黒須は長剣に炎を纏わせながら振るい、炎の壁を発生させる事で防ぐ。距離は離れていたがその熱量は膨大で、火傷を負ってしまいそうな程。

飛びかかって来る火の粉を空いていた手で払いのけ……死角から迫ってきた黒須の斬撃をカスパールを盾にして吹き飛びながらも

防ぐ。

「技術、柔軟性は十分だな」

あの炎の壁は魔力弾を防ぐだけでは無く、自分を隠す為にも使われていた。そして俺が姿を見失った隙に死角に回り込み、一閃。

さらに振るわれた剣は僅かに2度だけだが、十分に鍛錬を重ねて研鑽された技術を感じさせた。黒須の実家は剣術家で、教わっていたことを知っていたが剣の練度だけで言わせてもらえば俺よりも上だった。

それに関しては仕方がないと諦めるしかない。俺は幽霊である土郎さんから教えられているが、それは全て口頭か土郎さんが手本を見せてくれるだけ。それに対して黒須は生きている人間から教わり、手合わせも経験している。実戦に程近い環境で剣を振るう事に関しては向こうの方が先を行っているのだ。それは幽霊で身体を持たない土郎さんとは出来ない事。時折手合わせの様な事を土郎さんとはやっているが、実際にぶつかり合える訳ではないのでどうしても遅れてしまうのだ。

「まあそれだけだけだな」

接近戦の練度に関しては向こうに劣ると理解した。なので接近戦は徹底して避ける。

始めに見せた魔力放出による移動を警戒しながら一定の距離を保ったままカスパールの引き金を引く。黒須は高町の様に遠距離、中距離からの攻撃を持たないのか、どうにかして俺に近づこうと魔力弾に被弾しながら向かって来るが、向かって来た分だけ俺が距離を開けるので届かない。黒須の土俵で戦えばこちらが不利になると分かっ

ているのだから、黒須の土俵で戦わない。明らかに向こうが弱いのなら敗北からの成長を期待してわざと相手の土俵で戦うことをするのだが、生憎と俺では敵わないと悟ったのだ。

故に黒須の剣が届かない位置から攻撃する。

前に進もうとする足を、

剣を握る手を、

力を込めている腹を、

気合いを叫ぶ喉を、

睨めつけて来る目を、

呼吸をする肺を、

鼓動している心臓を、

一撃で止まる様な柔な精神をしていないと直感で察して、削ぎ落とす様に少しずつ身体を動かすための力を削る。

そうやって数分後には非殺傷設定のお陰で無傷だが、満身創痍の状態で地面に転がっている黒須の姿があった。

「あ……ああ……ッ!!」

「まだ動こうとしているのか」

立つのもやつとな状態でありながら前に出ようとして何度も転げ回った影響で全身は泥まみれ。そんな状態でも剣を手放していないのは素直に感心する。黒須の挙動を警戒しながら近づいてしやがみ込む。動かそうとしているのに動けない黒須だが、前世ではこんな状態なのに平然と動き回れる様な奴を知っているので警戒を解かない。

「なあ、お前は何がしたいんだ？同類」

同類と、自分はお前と同じ転生者だと暗に告げながら動く事のできない黒須に問い掛ける。本当ならば黒須が動けなくなつたところで撤退するつもりだったのだが、気になることが2つ出来たので訊ねる事にしたので。

1つ目は、どうして善神側の転生者になつたのか。人とは苦痛よりも楽な事を選ぶ生物だ。正しい事は痛くて辛く、間違っている事は楽。だからこそ、人は間違っていると知りながらも間違^楽つた事^方を選ぶ。善神側の転生者として生きるといふ事は苦痛しかないならばの道を歩くのと同意義。何故そんな道を選ぶ事が出来たのか、それが知りたくなつた。

2つ目は、妙な感覚があつたから。高町程の防御力を持たない黒須は、アンチマテリアルライフル級の威力を持つ魔力弾を受けながらも戦い続けた。己を顧みず、目の前の敵に向かつて真っ直ぐに挑むその姿に……妙な懐かしさを感じたのだ。

気になつた、知りたくなつた、だから訊ねた。聞こえているのか、答えてくれるのか分からない。だが、どうしても聞かずにはいられなかつた。

「僕、は……俺は……なるんだ……」

意識がハッキリしているのか混濁しているのか分からないが、黒須から掠れた声が聞こえてくる。喉を痛めつけ過ぎたかと自分の行動を少しだけ後悔して、一言一句を聞き逃さない為に集中する。

「あの人の……様な……後悔しない……皆んなを守れる……正しい……道を歩ける……英雄に……」

「……ガリア・オールライトの様な英雄に……!!」
「……」

ガリア・オールライト。その名前を聞いた瞬間に頭の中が真っ白になった。そして思考する力が戻ったと同時に驚愕と納得する。

驚愕の理由は、その名は俺の前世で現代に現れた英雄と世界中に称された男の名前だったから。まさかこの世界でその名前を聞くとはカケラも思わなかったのだ。

そして納得の理由は、ガリア・オールライトの様になりたいと聞いたから。それならばお前があいつの様に……俺の認めた英雄の様に感じたとしてもおかしくは無い。

「ク……クハッ、ハハッ……アハハハハ……ッ!!」

全てが繋がった。まさかの因果を感じてしまい思わず笑いが溢れてしまう。成る程、あいつを目指しているのなら善神側の転生者として転生したことも、その対抗馬として俺が選ばれた事も納得出来る。

「成る程成る程、ガリア・オールライトが貴様の憧憬か!!」

公明正大、滅私奉公、絶対正義の体現者。あらゆる悪を憎み、あら

ゆる悪を許さず、あらゆる悪を切り捨てる正義の使徒でありながら、致命的な欠陥を抱えた人間破綻者。そんな人間に憧れ、そんな人間の様になりたいと誓っている人間の相手なんぞ、俺以外に出来るものなんて存在しない。

倒れている黒須の髪を掴み上げて顔を起こし、鼻先が付きそうなほどに顔を近づける。黒須の目には未だに炎の様に燃え盛る光が宿っている。悪役としての役割はどこかで頼まれたからだと考えていたが、その考えはこの瞬間から切り捨てる。善神と悪神の役割なんぞ知らん、世界の崩壊なんてどうでも良い。

この瞬間から、黒須との対峙は俺と黒須だけの物になる。

「ならば予言してやろうー噎び泣け、貴様の最果ては英雄だ。天上に燃ゆる太陽を思い、焦がれ、焼かれながら黄泉路へと堕ちるが良い。この俺、アクロ・ダカーハが祝福してやろう」

「ーアク、ロ……!!」

前世の名前を告げた瞬間に、黒須の目に怒りの色が混じる。前世で俺と何かしらの関わりがあったのだろうか。因果なものだと思いつながら黒須を投げ捨て、湧き上がる興奮を抑えながらこの場から立ち去った。

黒須龍斗という人間がどういう人間なのか理解出来た翌日。学校が終わり、今日の夕食は何にしようか迷いながら帰っていると持っていた携帯電話が鳴った。デバイスであるハスターを使えば桜木や愛歌と連絡を取れることは出来るのだがそれは魔導師である事が前提となっている。なので裏側の事を知らない人間用として携帯電話を購入しておいたのだ。

専ら掛かってくるのは新作が出来た事を教えてくれる「翠屋」からなので、この電話もそうかと思っ取り出したのだが、画面に表示されている名前を見て固まった。

画面に表示されていたのは「フェイト・テスタロッサ」の文字。

俺は魔導師では無いと言っているのでフェイトには携帯電話の番号を教えている。温泉の日に連絡先を教えてから何度か話した事はあったがそれは夜で、夕方にかけて来た事は無かったのだ。珍しいなと思いつつながら通話ボタンを押す。

「もしもし？こんな時間に珍しいな。何かあったのか？」

『うん、その……ちよつと相談したいことがあって……今から会えないかな？』

「良いけど、電話じゃダメな話か？」

『出来ればアルフと一緒に直接会って話したいんだけど……』

声色を聞く限りでは騙そうとしているようには聞こえないので俺が魔導師だと、昨日の乱入者と同一人物であるとはバレていないようだ。なら何を話したいのだろうかと考えるが、思いついたどれもが確証の持てないものばかり。数秒だけ悩み、俺の事を騙そうとしていな

いので会う事を決めた。

待ち合わせ場所は近くの公園で徒歩で行ける場所だったのでそのまま向かう。平日で夕暮れ時の公園には人がおらず、電話してから数分しか経っていないというのに既にフェイトとアルフが待っていた。

「あ、リョーヤ」

「よっすよっす」

「来てくれたんだね。それにしてもその制服似合っていないね」

「自覚はしているから放っておいてくれ」

「わ、私は似合ってる……と思う……よ？」

「フェイト、よく覚えておけ。他人を思いやったフォローが他人を傷つける事を」

聖祥大付属の制服は白を基調としたもので、明るい色合いの服が似合わない俺が着るとどうしても違和感を感じてしまう。バリアジャケットにしている黄色いトレンチコートだけは合うのにどうしてだろうかと1日かけて悩んだ事があったが結局答えを出す事はできなかった。

「で、今日は何があったんだ？」

いつもならこの時間の彼女たちはジュエルシードの探索をしているか拠点で身体を休めている時間帯だ。昨日の俺の乱入を警戒して探索を控えているのかもしれないが、それにしたって急に会いたいとされるのは不思議に思ってしまう。

「言いくいんだけど……ちょっとアンタに頼みたい事があるんだ」

「頼みたい事？」

えっと、や、その、などと言って言いくそうにしていたフェイト

を見兼ねたアルフがそう前置きをして口を開く。

「ああ……その、なんだ、私たちをリョーヤの家に泊めてくれないか？」

「……はあ？」

話が長くなりそうだったのでベンチに腰をかけて話を聞けば頭が痛くなるような物だった。

彼女たちは海鳴にあるマンションで暮らしているのだが、ここ最近部屋に押し掛けている銀髪の少年がいるらしい。顔見知りの間柄でも何でもなく間違いない初対面だというのにまるで既知の間柄のように親しげに、教えてもない名前を呼んで話しかけ、頼んでもいないのに用事を手伝うと言ってついて来て足を引つ張る。その事を注意しても反省している素振りを欠片も見せず、それどころか心配してくれていると自分の都合の良い解釈をしているそう。

どこからどう聞いても御剣の事です。誠に申し訳ございません。

「それってこの間の温泉に行った時にいた奴の事だよな？」

「うん、そうだよ」

「このままあいつに側に居られたら休むに休めないからね。一旦部屋から離れる事にしたんだけど、そうすると寝る場所が無くてね」

「だから俺の家に泊まらせてほしいと……警察に通報したらどうだ？」

「その、あんまり大事にしたいく無くて……」

完全にストーカーとなっていてるので国家権力である警察に通報すれば解決すると考えたが、フェイトはそれをしたく無さそうであった。確かにジュエルシードを探すためにこの街にいる彼女たちは出来る限り目立つ事を避けなければならない。時空管理局が来た時にそれが原因で拠点の場所がバレてしまえば、彼女たちの今日までの苦労が水の泡になるから。

付き纏われてまともに休めていないのだろう。休憩を削ってまで未成熟な身体を使っているフェイトは愚か、少なくとも身体は成熟しているアルフでさえ疲労を漂わせていた。今はまだそれだけで済んでいるのだが、近いうちに倒れてしまいうだろう。

「……まあ、部屋は空いてるから別に良いぞ」

そんな状態になっても頑張り続けている2人の姿が微笑ましくて、そして俺と同類である御剣が原因で2人が追い詰められているのが申し訳なくて、気がつけばそんな事を口にしていた。

「……本当に良いの？」

「私たちが頼んでおいてなんだけど、本当に大丈夫なのかい？親に相談も無しで」

「親父は仕事で飛び回ってるから実質一人暮らしだからな。あ、隣が愛歌の家でよく遊びに来るけど、それでも大丈夫か？」

そう聞くと2人は顔を綻ばせながらありがとうと言った。アルフに至っては深々と頭を下げている辺り、余程御剣の存在が負担であったと思い知らされる。俺よりも原作を知っているだろうに、どうしてこうも彼女たちを追い詰める事が出来るのかが不思議で仕方がない。

散々お礼を言われた後、2人を服などの必要な物を取りに帰らせた。彼女たちはそのまま家に来るつもりだったようだが、部屋はあっても女性用の服や下着は存在しないのだ。フェイトならばサイズは大きいだろうが俺の服を着れたかもしれない。しかしアルフに着せる服は無いのだ。室内裸族スタイルでいさせるというのも一つの手だったが、見た目子供中身成人男性の俺以外にも元気に高町家の背後霊をやっている土郎さんが家にいるのだ。流星に室内裸族スタイルをさせるわけにはいかなかった。

御剣にバレないようにと念を押してから彼女たちと別れ、チャット機能を開く。

『今日から我が家にフェイトとアルフが泊まる事になったぞ。これ決定事項だから』

『フアツ!?!』

『両夜、愛歌ちゃんウィップが血に飢えているわよ?』

『のっけからお仕置き宣言はやめろ下さい……ネタとかじゃなくてマジで。あれは冗談抜きでヤバいから』

愛歌を納得させる事が出来なければ俺は死ぬ事になる。そう直感で察してフェイトたちが俺の家に泊まる事になった経緯を……御剣の行ったストーリーキング行為を2人に教える。

『マジかあ……マジかよ』

『納得して頂けたでしょうか愛歌様?』

『確かにそんな状況なら家に居させるよりも別の場所に居させた方が良いわね……分かったわ。その代わりに、私も2人が泊まつてる間は両夜の家に泊まるわ!!』

『ちよつと待て。そっちの家は大丈夫なのか?』

『お父さんなら事情を話せば許してくれるわ。綾香もフェイトとアルフに会いたがっていたし。それに……』

『……それに?』

『天然系箱入り娘属性のフェイトとやんちゃ系お姉ちゃん属性のアルフと一緒に暮らすとか許すわけにはいかないわ!!ちよつとしたハーレムじゃない!!ラッキースケベは私以外には認めないわ……!!あと、私とフェイトとちよつとキャラが被ってるから危機感を覚えてるのよ!!幼馴染系金髪美少女という絶対的なポジションの私と!!キャラが!!被ってるのよ!!金髪美少女の部分が!!』

『桜木助けて。愛歌が別次元の言葉を使い始めた』

『安心して下さい、それは全部日本語ですから。ああ、散歩に出たついでにフェイトたちのいるマンションに行っただんですけど、加賀美さんが飛ばしているの以外の監視用の魔力スフィアを見つけたんで壊しておきました。多分御剣のですね』

『マジかよ、ありがとう』

時の庭園の場所を知るために監視用の魔力スフィアを飛ばしているが、求めている情報はそれだけなのでプライベートな部分は見ないようにしている。御剣辺り、そんな事知ったものかと平然と観ているうだったので桜木の行動はグッジョブと言うしかない。魔力スフィアが壊された事に気がついて新しい物を飛ばすか、本人が出てきそうだが、その頃には彼女たちは準備を済ませて俺の家に向かっている頃だろう。

夕食をどうするか迷っていたが、彼女たちが来るのなら少し豪華なものにしようと決め、材料を買うためにスーパーに向かう事にした。

朝、目覚ましが鳴る直前に目を覚まして手を乗せる。起きたばかりで頭が働かないが数分ほどボンヤリして意識がハッキリとしたところで改めて時刻の確認、しっかりと午前5時前に起きる事が出来た。寝間着を脱ぎ捨ててジャージを引っ張り出し、誰も起こさないように細心の注意を払いながら家を出て走り出す。

ジョギングでのルートや距離なんてものは決めていない。決めていることがあるとすれば1時間以内で家まで帰れる距離を走る事だけ。その日の気分で今日走るルートを選び、30分が経った時点でUターン。走ってきた道をそのまま辿って家に帰る。

そしてそこから1時間程素振りをする。子供の身体に合わせて小太刀と同じサイズと重量の木刀を土郎さんから教わった通りに振るう。本人がこの場にいたらアドバイスをしてくれるのだが、今日は朝早くから高町家の方に行っているように姿が見えなかった。普通に振って身体の調子を確かめ、ゆつくりと振る事で型の確認をして、素早く振って乱れていないか試してみる。

生憎と土郎さんから教わっているのは剣の振り方だけで彼が修めていた剣術を習っているわけではない。これに関しては俺からは何も無い。土郎さんからしてもこちらの事情を知っているとはいえない。彼の家が伝えてきた技術云々を軽々しく教えることに良い感情を抱かないだろうし、俺がその剣術を修めて戦っている姿を誰かに見られた時、高町家に余計な疑いをかけられる可能性が出てしまうから。

前世の経験では命のやり取りなんて億劫になる程にやってきたが、それらは全て喧嘩の延長線上の様なものでしかなく、まともに稽古なんてしていないのだ。こうして基本中の基本である握り方や振り方

を教えてもらえただけでもありがたい。

だが、出来る事ならば試合形式でも良いから打ち合える相手が欲しかった。前の黒須との戦闘で、近接戦の技術に関しては負けていると自覚した。指導者が原因で負けたからと言いついては訳をするつもりは無いが、素振りだけではいずれば限界を迎える。これ以上先の段階に進もうと思つたら、俺を簡単にあしらえる事の出来るほどの実力者か、同格の相手が欲しいところだ。

最近になってその悩みは解決したのだが。

「おはよう、リョーヤ」

「おう、おはよう」

目覚めが良いのか寝起きのはずなのにすっかりとしているフェイトに返事をしながら時計を確認すれば針は午前の7時を超えていた。いつもの平日ならばここで終わらせて学校に行く準備をするのだが、今日は週末で学校が休みなので気にしなくて済む。

黒のジャージを着込んだフェイトの手には、彼女が振るっているデバイスと同じくらいの長さの棒が握られていた。

「アルフはまだ寝てるのか？」

「うん、ご飯が出来れば起きると思うんだけど」

「いつも通りだなあ……」

滅多な事が無い限りは彼女は自分から起きようとせず朝食の匂いに釣られて目を覚ます。ストーカー御剣の被害から逃れられたからなのか、それとも自分が家事をしなくてはいけないという重圧から解放されたのか、どちらにしても気が緩んでいることは確かだった。

出来ることならばアルフにも起きていて欲しかった。達人とは言えないが徒手空拳での戦いをメインとしている彼女との試合は多くの事を学ぶ事ができるのだ。今はそんな戦い方をする者はアルフくらいしかいないのだが、これから先の事を考えれば経験しておいて損は無い。

そして胸。試合中に揺れる彼女の胸は素晴らしいの一言に尽きる。

「リョーヤ!!何を考えてるか分からないけどマナカが怒ってるから……!!」

「おっと、失敬」

アルフの胸の事を考えただけで愛歌は何かを察したのか、家の中から凄まじいプレッシャーを放ってくる。それはフェイトにも感じられる程のもので、今では慣れたのか冷や汗をかく程度で済んでいるが、初めての時には顔を真っ青にして腰を抜かしていた。

よく見ると陰の部分が僅かに蠢いているような気がする。魔力は使っていない、つまり悪性情報は使っていないはずなのだ。

「それじゃいつも通りでいいな?」
「うん」

頭の中からアルフの事を追い出せば家から放たれていたプレッシャーは無くなる。そうして携帯のアラーム機能を1分後と30分後に設定してフェイトと対峙する。フェイトが俺が朝に素振りをしていることに気が付き、良かったら手合わせをして欲しいと頼まれたからこうして朝食前には手合わせをするようにしているのだ。

フェイトは棒を構え、俺は特に構えるようなことはせずに自然体のままで立つ。構え方を土郎さんから教わっていないわけでは無いが、

構えると動作が限定される事、構えから動作を予想される事、構えのない事で相手の油断を誘う事から俺は戦いになっても構えない。

そして1分が経って携帯のアラームが鳴り響き、フェイトが飛び出してくる。

「うゝ……また負けた」

「強い弱いとかの話じゃなくて、フェイトの方は拙いんだよなあ」

30分が経ってももう一度アラームが鳴るのと同時にフェイトはその場に崩れ落ち、今回も勝てなかった事を悔しがって不貞腐れる。

フェイトは魔導師であり、その本領は魔法を使った戦闘である。その為に魔法の方に重きを置くのは当たり前で、接近戦に関しては出来なくは無程度程度の練度しか備えていないのだ。その上にフェイトの膂力は華奢な見た目通りのものでしか無く、身体強化をしていなければ俺と打ち負けて当然である。

フェイトの師匠が悪いというわけでは無い。単純に魔法無しで戦えば俺が勝てるというだけの話だ。これが魔法有りの物になったら分からないが、互いに魔導師である事を隠している現状では有り得ない話だろう。

「両夜く、フェイトく、もうそろそろご飯出来るわよく」

開けてあった窓から愛歌の声が聞こえてくる。俺とフェイトが手合わせをしている間に朝食の用意を彼女がしてくれたのだ。それはフェイトたちが泊まる前から変わらない光景なのだが、愛歌はこの状況に危機感を感じているらしく、前よりも気合の入った朝食を用意してくれているようになった。

キャラ被り云々とチャットで言っていたが、天然箱入り娘のフェイトと肉食系のように見えて実はお姫様思考の愛歌とではキャラが全く異なると思うのは俺だけなのだろうか。その事をそれとなく愛歌に聞いてみたのだが彼女からすれば金髪美少女の部分が重要らしく、そこだけは例えフェイトであつても譲れないのだと燃えていた。一方的だが敵視しているように見えて、実際には仲は良いのだから女の友情は本当に不思議極まりない。

「先に風呂に入ってるよ。俺は後からで良いから」

「そう？それならお先に使わせてもらおうね」

学校がある時には時間の関係で先に使わせてもらうのだが、今日は学校が休みで急ぐ理由も無いのでフェイトに先に風呂を使わせる。朝一番で気温は低いとはいえ、身体を動かした事で汗をかいていて気持ち悪いだろうという気遣いからで他意はない。御剣が同じ事をすれば後ろ言葉に意味深とか付きそうだが。

風呂を使う為に家の中に戻っていったフェイトを見送ってから木刀や棒を元にあつた位置に戻し、俺も家の中に入る。するとエプロンを着けた愛歌——ついでにその後ろにいる土郎さんが出迎えてくれた。

「おはよう、両夜」

『両夜君おはよう。今日は翠屋で新作を出すらしいから行ってみないかい?』

「おはよ」

愛歌には言葉で返し、土郎さんにはフェイトたちに聞かれないように親指を立てる事で返事にする。幽霊なんてオカルトチックなものが見えているのを彼女たちには知らせていない。それを知らせるほどに親密な間柄では無いという判断からだ。

それにしても翠屋の新作は楽しみだ。この間作られた美由希さんのロシアンプチシューとかでなければ良いけど。パーティー用に作ったと言っていたが、外れの当たる確率が6分の6というのは流石に罰ゲームの域を超えていると思う。

笑顔で俺に差し出してから、笑顔を浮かべながら背後に鬼神を従えた桃子さんに引き摺られていったので桃子さんのにもアウトだったに違いない。

靴を脱いで家の中に入ると、向かって左側の部屋のドアが内側から開かれる。あそこはフェイトたちに貸し与えた部屋なので、アルフが朝食の匂いを嗅ぎ取って目を覚ましたのだらう。外見だけならば我が家の中で一番高齢なのにそれで良いのかと疑問に思っていたが、そんなものは部屋から出てきたアルフを見て吹き飛んだ。

「ふあ〜……おはよおりョーヤ、マナカ……」

目覚めたばかりで寝惚けているのか、アルフは眠たそうに目をこすりながら身体を伸ばしているがそんなものは些事ではない。寝間着代わりのつもりなのか、今のアルフの格好は第3ボタンだけ閉じられたワイシャツのみ。下着であるショーツは流石に履いている。適度に鍛えられてスラリとした脚とキュツと締まった尻、括れている腰

回りが丸見え。さらに寝る時には付けない派なのか大きく見せられている胸元にはブラジャーが存在しなかった。

マーベラスと叫びたくなるような光景がそこにはあった。

「……」

「……」

それを見て愛歌は絶句し、俺は無言で頭を下げた。

愛歌はアルフの胸を見て、自分の胸を見、そしてアルフの胸を見直す。アルフと自分の胸の差を確認しているのだろう。何度見ても結果が変わる事など無いし、そもそも成熟しているアルフと未成熟な愛歌を比べる事自体が間違っているのだが彼女からすれば関係無いのだろう。

何度も見比べる行動をし、最終的に愛歌はその場で崩れ落ちた。

「何なのよその胸部装甲はあ……!!反則、反則よ!!その凶悪なもので両夜の事を誑かしておねショタ展開に持つていくつもりなのね!!このどすけべワンコオ……ッ!!」

「あく……マナカはまた朝から飛ばしてるねえ」

「アルフ、余計な事を言わずに部屋に戻って服を着てくれ。このままだと愛歌が闇落ちするから」

「もう半分くらい落ちてるような気がするんだけど……」

残り半分を残す為にもだ。仮に愛歌が完全に闇落ちした場合、地球消滅待った無しだと桜木からカケラもありがたく無いお言葉を頂いている。胸囲の格差社会が原因で地球消滅とか笑い話にもならないので意識を完全に覚醒させたアルフを部屋に戻す。

これがフェイトとアルフが我が家に泊まってからありふれた光景
になっていた。

「いい加減、機嫌直せよ。てか、休みがこれだけで潰れたんだけど?」
「う〜!!」

「お願いだから人語で話してくれない?その言語はちよつと俺には早過ぎるから」

リビングのソファに腰を下ろし、その上から愛歌が座る。そしてそれを後ろから抱き締めるとというのが彼女を慰める時のお決まりの体勢となっていた。朝のアルフの胸部装甲によるショックから未だに立ち直ることが出来ず、せつかくの休日だというのに愛歌を慰める事で1日を使い潰してしまった。別にやりたい事があつた訳でもなく、今日は土曜日で明日も休みなのだがどうしても損をしている気分になつてしまう。

朝からこの姿勢になつて夕方まで続けているのだが、辛いとは感じていない。愛歌は軽く、見ているこちらが心配になりそうな程に細身の身体をしている。殆どが自己流とはいえ鍛えている俺からすれば、この姿勢を一日中続けていても然程苦痛には感じない。

「リョーヤ、マナカ、ちよつと出掛けてくるね」

「てかあんたらまだその格好でいたのかい?」

「腕ぐわ」

「止めろよ」

アルフの姿を視界に入れた瞬間に即答するあたり、今日はダメージが大きかったのだろう。愛歌の目には躊躇いが感じられず、俺が抱き締めていなかったら宣言するのと同時にアルフに飛びかかり兼ねない凄味を感じさせていた。

本当に止めてほしい。あんな立派な胸を腕ぐだなんて勿体無いから。

「出掛けるっていうけど飯はどうするんだ？」

「出掛けたついでにアルフと食べてくるから大丈夫だよ」

「両夜、折角だから良いお肉を買ってきて焼肉しましょう」

「フェイト、別にご飯食べてからでも良いんじゃないかな？」

「アルフ……」

焼肉というワードを聞いた瞬間、迷う事なくアルフは目を輝かせながらそう提案してきた。初対面ではお姉さんっぽいなあ、なんて感じていたのだが、我が家に泊まるようになってから食事に対する貪欲さを見る限りではただの食いしん坊にしか思えなくなっている。事実、そんなアルフを見るフェイトの目も憐れなものを見ているようなそれになっている。間違っても身内に向けるような目では無かった。

だけど俺は見逃さない。フェイトも焼肉というワードを聞いた瞬間に僅かに反応していた事を。

ジュエルシードを探す事に熱心だったせいなのか、フェイトの食生活やら生活習慣はかなり乱れていた。魔導師について知らないという俺たちと一緒に暮らす事で生活を合わせる必要がある、そのおかげでいくらか改善されたからなのかフェイトもアルフ程ではないが食事に対して楽しみを覚えているようだった。

「心配せんでも取っておいてやるから、明日の昼にでも食べればいいだろ？」

「そう、だね……アルフ、行こう」

「リョーヤ!!お肉取っておいてくれよ!!」

「焼肉の匂いが充満した部屋で待っているわよー空になったパツクと一緒にね!!」

「マナカアツ!!」

愛歌の煽りのせいで見た目成人女性VS少女のキャッツファイトが行われそうになったのだが、それよりも先にフェイトがアルフを引き摺って行った事でそれは未然に防がれた。その時にフェイトが身体強化の魔法を使っていたのだが突っ込んではいけないのだろう。

「愛歌、少し煽り過ぎじゃないか？」

「だって……アルフの胸があ……」

「何でまだまだ成長の余地があるのにそんなに胸に対してヘイト稼いでるのさ」

「……私のお母さん、胸が小さかったのよ」

愛歌の胸に対する異常な怒りの正体が分かった。要するに胸が成長しない可能性に危機感を覚えているのだろう。身体の成長は個人差があるとはいえ、親の遺伝によるものが大きい。母親が小さかったから自分も小さくなるのではと考えて、その結果胸への憎しみに繋がっているのだ。

「それに、両夜は胸の大きい人が好きみたいだし……」

「好きかどうかは置いておいて、確かにデカイのに目が行くのは認める」

「認めちゃうのね……」

「男だからな」

女性の胸の大きさというのは孔雀の羽根のようなものだところかで聞いた事がある。孔雀の羽根が派手なのは、それで異性の目を惹くためだという。つまり、胸の大きな女性は男性の目を惹こうと胸を大きくしているのだ。よって俺が大きな胸に目を惹かれてしまう事はおかしな事ではない、健全な事だと完璧な理論を展開する。

そもそも俺の精神はすでに成熟しているのだ。肉体的には未成熟で精通も済ませていないシヨタボデーであるが精神年齢は今世と前世を合わせれば三十路を超え、来年には四捨五入すれば四十路に突入するところまで行っている。故に成熟していない愛歌よりも、成熟している女性に目が行くのは仕方の無い事だ。

だけど、まあ、

「別に愛歌の胸の成長が絶望的だとしても、気にしないけどな」

「……それは異性として見ていないからという意味でかしら？」

「いや、お前に対する感情は変わらないっていう意味で」

だからといって、愛歌への想いは変わる事はない。確かに立派な胸に目を惹かれることは認めるが、それは愛歌への想いが無くなったということでは無いのだ。

前世ではマーリン以外に抱く事が無かった誰かを愛おしいと、傷つけたく無いと、大切にしたいという感情。精神年齢三十路越えの俺が10にもなっていない愛歌に恋をするというどこからどう見ても事案案件であるのだが、この気持ちを隠すつもりも偽るつもりも欠片も無い。

俺は沙条愛歌の事を愛している。それはきつと、彼女から拒絶されたとしても変わることの無いだろう。

『おやおや、前世じゃあ30になっても女の気配の無かった君がこんな愛らしい少女の事を好きになるだなんてねえ……結婚するならアヴァロンで用意しておくよ？来賓にアーサー王でも呼ぼうか？きつと祝砲代わりにカリバーしてくれよ』

夢でしか会えないはずのマーリンの声が聞こえたのだが無視する

事にする。彼女の事だから夢の中で結婚したいと言えば全力で頑張ってくれるだろうがまだ早過ぎる。ハウスと念じると、ハッハッハ……なんていうどこか胡散臭い笑い声と共に彼女の気配が遠くなっ
ていった。

油断していたら現実の世界にやって来そうである。こう、徒歩で来たとか言っ

それよりもエクスカリバーを祝砲代わりにするんじゃない。

「……」

「どうしたんだ、急に黙って……まあ耳が赤いから照れてるのは丸分
かりなんだけどな」

「もう……!!両夜ったら唐突に恥ずかしげもなくそういう事言い出す
から卑怯だわ!!ゼロ距離から砲撃喰らった気分よ!!」

「想いなんてものはな、言葉にしないと通じないんだよ。だから恥ず
かしげもなく言わせてもらおうのさ」

「……ッ!!」

恥ずかしさと嬉しさがごっちゃになってしまつて何を言つていい
のか分からなくなったのだろうか。愛歌は顔を赤くしながら俺の胸
に顔を埋め出した。それを拒む理由も無いので受け入れ、彼女のやり
たいようにやらせる。

すると、リビングの入り口の方から視線を感じた。

そこにはニヤニヤといやらしく笑う桜木の姿があった。

「不法侵入か?」

「この我が態々オレこのような小屋に向向いてやったのだ。そこは感激に
むせび泣きながら平伏するところであろう……ムッ!?!」

『暇だったから遊びに来たんですけどお邪魔だったみたいですね。お馬さんに蹴られる前に逃げますから、終わったら連絡してーっつて!?!』

いつものように王様口調で語りかけて見世物でも見ているように楽しげに語っていた桜木だったが、自分の影が競り上がり、足元に絡み付いているのに気がついて顔色を変える。

「出歯亀は嫌われるわよ、桜木君?……乙女の至福のひとときを邪魔した事への報いを受けなさい」

誰が何をしたなんて確認するまでも無く分かるーっ愛歌だ。桜木がさっきの光景を見ていたことに気が付き、ネタとかノリとかでは無く機嫌を悪くしている。わざわざ悪性情報を使って桜木の動きを拘束し、更に魔法の展開を阻害している辺り本気度が伝わってくる。

悪性情報に触れると魔法だろうが生身だろうが容赦無く汚染されるはずなのだがそれは暴走状態の時に限った話らしく、愛歌の理性が保たれているならば悪性情報を使用しても汚染をある程度コントロール出来るようだ。現に悪性情報の触手が触れている桜木の服は朽ちることなくその姿を保っている。

「ま、待て!!流石にそれはやり過ぎては無いーっ」

『待って!!謝ります!!謝りますからそれだけは御勘弁を、ご慈悲をーっ』

「問答無用ーっ!!」

許しを乞うていた桜木だったが、愛歌は聞く耳を持たずに腕を振ると桜木の姿が消えた。

そして廊下の奥の方から桜木の悲鳴と、聞いているだけで精神が不

安になりそうな生々しい音が聞こえてくる。

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏……」

家に張り巡らせている隠匿の魔術が問題無く作用している事を確認し、悪性情報を使っても愛歌の存在が外にバレる心配は無い事を確かめる。

俺に出来ることは廊下の奥の方で地獄を味わっているであろう桜木の冥福を祈る事くらいだった。

時空管理局が接近しているらしい。

それが愛歌に罰を受けた桜木の残した最後の言葉だった。

詳しい詳細を聞くために死体蹴りを決行し、気絶していた桜木を起こして話を聞いたところ、少なくとも海鳴での魔法感知が出来るほどの距離まで接近しているようだ。これで隠蔽などの工作を行わなければ即座に捕捉される状況になった事になる。

俺はハスターが優秀なので、桜木は宝物庫の中身が優秀なので問題ない。愛歌の方も、桜木から宝物庫の中身を借りているので大丈夫だろう。もつとも現状で動くのは俺だけ。愛歌には自分から動く理由が無く、桜木は介入せずに傍観する事を選んでいるから。

そして管理局の接近により、フェイトとアルフは更に追い詰められた事になる。客観的にこの状況を見れば彼女たちの立ち位置は危険物を奪いに来た強盗と変わらない。後に真相が明かされれば情状酌量の余地があるなどと同情されるかもしれないが、今の段階で彼女たちの助けになろうなどと考える殊勝な人間なんて全ての事情を知っている転生者たちしかない。

事実、彼らはそうした。木に取り憑いたジュエルシードを封印し、高町とフェイトがいざ勝負となりそうになった時に時空管理局の執務官を名乗るクロノ・ハラオウンが乱入、武装を解除して投降するように呼び掛けた。

黒須はその指示に従ってデバイスを解除した。ユーノから時空管理局の役割を聞いていたのか、元から知っていたのか分からないが大

義名分は向こうにあると判断しての迷いの無い行動だった。

そして赤城と御剣は逆らった。ジュエルシールドを奪う事を諦めて逃走しようとしたフェイトとアルフ。逃げる後ろ姿を背後から攻撃しようとしていたクロノの前に立ち、フェイトたちの逃走の手助けをしていた。

御剣はストーカーなのでフェイトたちから好かれないと考えて行動しているのだと予想出来る。しかし赤城は何を考えているのか分からない。高町と黒須に手を貸し、危険物のジュエルシールドの回収を手助けしていたというのに、ここに来てジュエルシールドを奪う側のフェイトたちに手を貸して裏切っているのだ。言葉と行動が全く一致していない。ここまでは大して被害は出ていないので御剣ほど警戒しているわけでは無かったが、これからはあいつと同じくらいに警戒をしておいた方が良さだろう。

警告を無視して仕掛けて来た2人をクロノは一人で制圧していた。素人が見ても分かるような圧倒的な強さを持っているわけではないが、言葉にすれば上手い戦い方をしていた。

魔力の消費を避ける為にか魔力弾一つだけを操作してスキルによって作り出された剣を弾きながら御剣を打ち取り、

倍加する能力で力任せに攻めようとしている赤城の初動をバインドで阻害して冷静に砲撃魔法で仕留めた。

高町のような派手な砲撃魔法でも無く、フェイトのような圧倒的なスピードでも無く、黒須のような突き抜けた意志力を持っているわけでもない。ただ自分ができる事を判断し、最小限の労力で最大限の成果を得る。数多くの経験を積んだ安定した強さを見せつけてくれた。

そして高町と黒須はクロノの指示に従ってこの場から転移魔法で

姿を消した。恐らくは彼らの拠点に向かったのだろう。居なくなつた彼らの代わりに戦闘服のような同じデザインのバリアジャケットを着た人間が複数人現れ、認識阻害魔法を使用してから2人一組になって飛び立っていくのを彼らと同じように認識阻害魔法と変身魔法を使用して大人の姿になって近くのビルから見ている。

「ツーマンセルねえ。やっぱり組織は厄介だよな、場数を踏んでるからジュエルシードなんて危険物が近くにあるかもしれないっていうのに冷静に対処してやがる」

彼らの行動の意図は分かる。ツーマンセルによる人海戦術だ。どうも魔導技術では暴走していかないジュエルシードの探索は困難らしく、高町たちも暴走状態、もしくはその手前の状態になった時によくその存在を知る事が出来るようだった。彼らもある程度ジュエルシードの事を調べてから来ているのだろう。

組織というのは厄介な存在である。時空管理局という名前の通りいくつかもの時空を管理している、パワーピラミッドにおけるトップに位置している彼らは潤沢な資金と豊富な人材を所持している。潤沢な資金を用いて装備を整えて人材を鍛える。人材に関しても才能が無くてもある程度のレベルまでは訓練を積ませる事で至る事が出来るし、才能のある者に関してはその人間に合わせた特別なトレーニングを施す事だって可能だ。

そんな彼らが弱いはずが無い。今回やって来た中でトップクラスと思えるクロノほどの戦闘能力は無いにしても、隊による行動で事前には作戦を立てれば高町だって封殺出来るレベルにあると考えられる。高町は魔法が強力なので強く見られがちだが、数週間前まではただの少女で特別な訓練を受けた訳ではないのだ。

訓練を受けたことの無い天才と訓練を受けた凡人たち。まともに

ぶつかり合えば、幾らかは被害は出るだろうが後者が勝つに決まっているのだ。

まあ、世の中にはそんなお決まりさえも蹂躪するような理不^{御都合主義}尽も存在するわけだが。

『フェイトとアルフは逃げ切れたようですね。これからどうしますか？』

「時空管理局の内部が気になるから捕まえて聞き出すわ」

移動手段、人数、装備等々、知らないことは沢山ある。これからの活動予定は時の庭園での悪役ロールくらいしか無いのだが、それらの情報は知っておいて損はない。少なくとも後一度、A's編で起こる闇の書事件で彼らはやって来るのだ。その時が今回と同じになるのか分からないが、今回の情報を元にすればある程度は予想出来る。多少の危険を払ってでも知る価値はあると考える。

海鳴中に飛んで行った管理局員たちにマーキングを付け、その中でも都合の良い者を選んで近づく事にする。移動した先は人通りの少ない路地裏。夕暮れ時で光源が少なくなり、薄暗くなったそこで彼らは地面に足を着けてジュエルシードを探していた。

デア・フライシュツェ
「魔弾の射手」

隠蔽魔法を使っているために彼らは俺の存在に気がつく事なく、わざわざ前に出て俺の存在を教えてやる必要も無いのでカスパールの魔力弾転移を叩き込む。非殺傷設定されていたので傷は負っていないのだが、不意打ちを受けた彼らは苦しい呻き声をあげながらその場に崩れ落ちた。

「ハスター」

『ハック、並びにデータのコピー完了しました。ダミー作成……完了。これでモニター上では彼らは通常通りに活動していると判断されま
す』

ヒュウつと、ハスターの優秀さを囃し立てるように口笛を吹きなが
ら倒れている管理局員2人を回収する。緊急事態に陥った時の為に
設定してあったのか、彼らのデバイスは救難信号を送っているようだ
がハスターによって阻害されて届くことは無い。

そして転移魔法を使用する事で管理局に捕捉されないように、近く
にあった廃墟ビルへ徒歩で移動した。

「うっ……」

「何が……」

「起きたか」

準備を済ませたところでちょうど良く、彼らは目を覚ましたよう
だ。デバイスは取り上げ、そのせいかバリアジャケットは解除され
て時空管理局の制服と思われる青いスーツ姿の2人は手足を拘束さ
れた状態で椅子に座らされている。

ちなみにデバイスは悪性情報を流し込んだ事とハスターの手に
よって初期状態にして俺が回収している。仮に彼らに戻したところ
で、使い物にはならなかった。

「っ!?!何をするつもりだ!!」

「威勢が良くて何より何より。これから『質問』するのに、弱々しい奴は使えないからな」

ゴトリと態とらしく音を立てながら2人の目の前に2つのバケツを――正確にはバケツの中に放り込んだ物を見せる。初めは威嚇するように叫んでいた彼らだが、バケツの中身を見た瞬間に顔を青くして絶句していた。

バケツの中身は様々な道具。ノコギリ、ハンマー、ペンチ、電動ドライバー、釘、針金、ホース……この状況で見せられれば、本来の使い方をされないだろうと簡単に予想が出来る物がこれでもかと詰められている。

「君たちは時空管理局の人間だ。そこに所属しているという事は名誉であり、その事を誇りに思っているだろう。ただ馬鹿正直に聞いたところで素直に教えてくれるなんて思っていないからな……だから、こうやって真心を込めて『質問』する事にした」

バケツの中から電動ドライバーを取り出し、スイッチを入れる。けたたましいい音を立てながら回転するドライバーの先端部、何をされるのかを察した2人は逃げ出そうともがくのだが拘束されているのだからそれは叶わない。

「出来る事ならば早く教えて欲しい物だ……ああ、だけど教えられたそれが本当なのかどうかは俺には判断が付かないからな、何度も同じ事を『質問』するかもしれないがそれは許してくれ」

この場所には魔法ではなく魔術で防音と人払いをかけているので邪魔が入る心配も無い。

電動ドライバーの先端を向かって右側の管理局員の足に当て、「質問」を始める事にした。

「……まあこんなところか」

2時間ほど時間を掛け、2人から懇切丁寧に「質問」をした事で得た情報を纏める。何度も何度も嘘を吐いていないのか確認しながら「質問」をしていたので嘘は言っていない筈だ。信憑性を確かめる為に他の管理局員にも「質問」をしておきたいところだ。

「御協力ありがとう、感謝するよ」

「あ……アア……」

「……」

協力してくれた事にお礼を言ったのだが、返ってきたのは言葉になっていない声だけ。それはそうだろう。彼らの有様はやった自分で言うのもなんだが酷い状態だった。

オブラートに包んで言えば、形が残る程度にミンチにされた生肉だから。

前世ではこう言う事は良くやっていた。今世では久し振りにやったのだが、案外腕は衰えていなかったようで、キチンと死なない程度に留めることができた。

知りたかった事を知れた今となつては彼らを生かしておく意味も、義理も無い。仮にこの場所を教えて彼らを助けさせたとしても、彼らの身体は治療不可能な程にボロボロで精神は崩壊済み。生かしてやるよりも死なせた方が彼らの為だろうと考え、用意しておいた灯油タンクをひっくり返し、そこへ火のついたマッチ棒を投げる。2人が炎に包まれて生き絶えたのを確認してから飛ばしの携帯で消防署に連絡を入れる。予めこの周囲には誰も住んでいない事は確認してあるので、余計な被害が出る事もないだろう。

時空管理局の人間で、この世界の人間ではない彼らを知る者はこの世界にはいない。身元不明の焼死体として扱われる事になる。

炎に巻き込まれないように注意しながら忘れ物はないか確認し、帰った頃には丁度夕食の時間になるな、なんて考えながら廃墟ビルを後にした。

「さって、どうしようかねえ……」

リビングのソファに腰掛けながらそう呟くが、それに反応して返してくれる人物は誰もいない。フェイトとアルフは時空管理局が来たからか、御剣の姿が見えなくなったのを口実にマンシヨンに帰ると言って出て行ったし、愛歌は今の時間帯は学校に行っている。本来ならば俺も学校に行っていないなければならないのだが、そう言う気分にならなかったのも体調不良を理由にして休んでいる。その事を愛歌は当然知っているのだが、彼女はこちらの事情を知っているのも何も言わずに見逃してくれた。

現在の海鳴の町には管理局員の海戦術によるジュエルシードの捜索が行われている。認識阻害を施したい歳の大人たちが飛行魔法でビュンビュンと飛び回っている光景は見えている俺からすれば大笑い物なのだが、1つでも地球を滅ぼせるジュエルシードがまだ未封印の状態で放置されているのだから笑い話にはならない。

その時に高町と黒須が管理局員たちと共に行動をしているのを目撃した。どうやら今回の件は局員だけでの解決は難しいと判断されたらしく、現地の協力者として彼らの助けを求めたようだった。反対に赤城と御剣は普段通りに生活をしているのだが感じられた魔力は以前よりも大幅に減少していた。どうやらこの間の行動が原因で魔力封印処分を受けたらしい。

管理局の法律に当てはめれば公務執行妨害でしょっぴく事も出来たはずなのにそれだけで済ませると言う事は法律に当てはめる事をせずに、だけど見逃すわけにはいかないかと取られた苦肉の策なのだろう。これで2人は以前のように膨大な魔力に任せられた戦い方をするこ

とが出来なくなった。封印処が解かれるまでは気にしなくても良いだろう。

問題なのはこれから先、どういう風に行動をするべきなのかだった。管理局員の目に関しては最初の2人の他に2組程「質問」をして彼らの識別コードを入手したのでリーダー上に限って言えば誤魔化す事ができる。知りたかったプレシア・テスタロッサが居る時の庭園の座標に關しても、フェイトが時空管理局が来た事を報告する為にか転移魔法を使用していたのを解析する事で知ることが出来た。その気になれば今からでも乗り込むことが可能である。

ジュエルシードに關しても、未回収の場所は把握出来ている。海鳴全体に広げておいた魔術の結界のお陰で判断が付く。市内には残り2個、海の方に5個程反応がある。俺が保持しているのは愛歌に取り憑いた結果魔力を無くした3つと合わせて5つ。なので計算上では時空管理局側とフェイト側と合わせて9個確保している事になる。

今の局面はストーリー上で言うのなら佳境を迎えた頃だろう。下手に手を出して遅れが発生すれば何もかもが台無しになってしまうという予感がある。ならば静観しているのが正解なのだろう。だがストーリー任せにしてしまえば間違いなくフェイトが鬱展開に放り出される事になる。流星に友人がそんな展開に陥るのを知っていて何もしない程に人でなしでは無いつもりだし、こんな状況で何もせずに見ているだけと言うのは至極つまらない。

どうせならば物語は大団円で終わるべきだ。苦難を乗り越え、悲しみを踏破し、残った誰もが笑いながら喜び、未来を見据えて生きていく。そんな終わり方が好ましい。

どうやって動けば物語が大団円で終わり、尚且つ悪役おれという存在を際立たせることが出来るのか。それが悩みの種だった。

一番丸く済むのは時空管理局が時の庭園に突入した時に乱入する事だろう。管理局員とプレシアを纏めて倒し、ジュエルシードを総取りにするようなロールプレイをすれば嫌でも俺の事を敵認定してくれる。黒須に俺の前世の名前がアクロ・ダカーハである事を告げてあるので間違いない。問題なのはそうしたところでフェイトを取り巻く環境は何も変わらないという事。フェイトがプレシアの実子のクローンであると言う事も、プレシアはフェイトの事を娘として見えない事も、何一つとして解決しない。それらの事実がプレシアの口から語られる前にプレシアを倒すというのも一つの手だが、フェイトを悲しませたくない以上俺はプレシアを殺さずに管理局へと引き渡すつもりでいる。そうやってしまえばいざ尋問でその事を告げられ、遅かれ早かれフェイトの耳に届いてしまうだろう。

ならば悲しませる覚悟で、恨まれる覚悟でプレシアを殺して保管されているプレシアの実子の死体を処分する。そうすればプレシアの心境と真実はフェイトに届く事なく終わる。しかし、時空管理局が黒幕がプレシアであると分かった時点で彼女の経歴を調べるのは目に見えている。実子のクローンであるフェイトの存在はプレシアの経歴の中には存在せず、残された研究の内容からそういう存在なのではないかと推測されるのが目に見えている。何よりも、これでは過程が変わった程度で原作と結果が変わっていない。行動の一つとしてあげるのはアリなのだが、乗り気にはなれない選択肢だった。

「はあ……頭痛くなってくる。俺ってばこう、もっとその場の勢いとかノリとかで行動するタイプの人間なのにねえ……ああヤダヤダ!! もっとヒヤッハーしたあい!! 頭空っぽにして行動したあい!! 超時空戦艦アースラ乗っ取って、戦艦落としようぜ!! 目標時の庭園な!! “とかやりたあい!!”

「止めんか戯けが。その様な事をしたところで得られるのは其の場凌ぎの快樂でしかないぞ」

管理局員に“質問”をして得た情報を纏めた資料と、これからの行動を整理するために書いていた紙を放り投げてソファーに転がると、誰も居ないはずなのに声が聞こえて来た。顔を上げてそちらを見れば、そこには桜木が立っていた。

愛歌に触手でお仕置きされた時の事を思い出してしまい、吹き出してしまう。

「待て貴様、今何故笑った」

『加賀美さん、今なんで笑ったんですか?』

「この間の愛歌ちゃんウイップによる桜木の処刑を思い出して」

「あの日は、何も、無かった。いいな?」

『愛歌ちゃんウイップ……処刑……触手責め……あ、頭が……!!』

変わらぬ反応をしてくれる桜木の中身は兎も角、いつも傲慢な表情を浮かべている外面さえ冷や汗をかいてあの日の事を無かった事にしようとしている辺り、愛歌ちゃんウイップによるお仕置きは相当に効いたらしい。

どうしようか一瞬だけ迷い、面白さを優先するべきだと判断してネタにする事に決めた。

「まあ兎に角座つたらどうだ?生憎茶も菓子もアルフが全部消費したせいで出せる物は無いけど」

「あの駄狼め、あれ以上肥えてどうするつもりなのだ?」

『接触するつもりは無かったんで会っては無いですけどアルフのスタイル変わってなかったんですね……胸以外は』

「詳しく聞かせてくれ」

「良いのか?貴様の女に話すぞ?」

『愛歌様の怒り狂う姿が目浮かぶのですが……』

「無しだ無し!! やっぱ無しな!! 代わりに触手責めの事はネタにしないから!!」

「貴様アツ!!」

『それネタにしたらバビロン待った無しですよ? 宝物庫全開放しちやいますよ?』

一通り話したところで不快そうに鼻を鳴らしながら桜木は俺の向かいのソファ―に腰掛ける。流れる様に自然な動作で脚を組む姿は子供の姿では似つかかわしくないはずなのに優雅に見え、支配者階級の人間の風格を漂わせていた。

「で、こんな時間に何の用だ? てか学校はどうしたんだよ」

「何、我が友が悩んでいる気がしたので先達として相談に乗ってやろうと考えただけの事よ……暇潰しも兼ねてな」

『そろそろ加賀美さんが悩む頃合いかと思つて相談に乗ろうと思つて来たんですよ。学校なら仮病で休んでおきました』

そう言つて桜木は俺が投げ捨てた紙の内の一枚を無造作に手に取る。拾われたのは偶然なのか俺がこれからどんな行動を取ろうかを考える為に書いていた紙だった。

「あの2人を救う腹積もりだったのか? 全くもって笑わせる。過去に囚われた女と考える事を放棄した紛い物、そんな物を救つて何とするというのだ」

『フェイト救済ですか……無理ゲーですね。二次創作なら親バカになつてるプレシアもあり得ますけど、原作の彼女はアリシア一筋。フェイトの事は完全に代用品としか見ていません。何気に親の言う事だからって疑いも無しにジュエルシードを集めようとするフェイトも厄ダネなんだよなあ』

「悪役がハッピーエンドを目指して何が悪い?」

「いや、何も悪くは無い。幸福を得ようと努力するその姿勢は人間と

して当たり前前の姿だ。例えそれが己が器に不相応なものであれ、その遍くを我は認めよう。精々無様に足掻いて我を楽しませよ」

『ハッピーエンドを目指す事自体は良いことですよ。小綺麗で賢いバッドエンドよりも汚くて馬鹿なハッピーエンドの方が好きなんです。問題はそのハッピーエンドを迎えるのがクツソ難しい事なんですけどね』

「ホントそれな」

一番なのはプレシアに実子をーアリアシア・テスタロッサの事を諦めさせ、フェイトの事を娘として見るように仕向ける事。それが出来るのならフェイトがアリシアのクローンであると暴露されたとしても、フェイトはプレシアに支えられる事になる。原作のように高町に支えてもらうのもありなのだが、下手をすれば依存症真つしぐらなので出来る事ならば避けたいところだ。

「過去に囚われて先を見据えぬ者に未来を向かせる事は並大抵の事では無いぞ?さて、どのようにするのだ?」

『ハッピーエンド迎えようと思ったらアリシアの事を諦めさせるのが一番なんですけどね、クローン作ってまでアリシアの事を生き返らせようとした彼女にそれが出来るのかどうか……一瞬でも良いからアリシアが生き返って、こんな事してるお母さんなんて大っ嫌い!! “って言うってくれたら解決しそうですけど』

「死んでる奴に何を求めてるんだ……って、あく……」

「ん、どうした?何か思いついたのか?」

『何か思いつきました?』

思いついた。思いついてしまった。何故今の今まで思いつかなかったのかと自己嫌悪してしまう程に簡単でお手軽な手段を思いついてしまった。

何せ状況は違えど、似たようなシチュエーションの問題を俺は一度

解決している。その時と同じ手段を用いれば良い。結果は前回と同じになるか分からないが、何もしないでこうして頭を抱えているよりはマシだろう。

「確実とは言えないけど一つ思いついた。もしもの時にはお前にも協力してもらおう事になるけど、乗るか？」

「^{オレ}我の手を煩わせるつもりか？許す。その手段を話してみせよ」
『どんな方法を思いついたんですか？是非とも聞かせてください』

内外ともに俺の思いついた方法に興味を引かれたらしく、身体をやや前のめりに倒しながら桜木は尋ねてきた。

この方法は考えついた中で最も運任せなやり方、そして最も幸福なやり方だった。可能性で言えば失敗する可能性の方が圧倒的に多過ぎるギャンブルじみたやり方。

だけど俺はそれを実行する事を選んだ。何故なら、それが成功した時の終わり方が最も納得出来る終わり方だったから。

悲劇など少ないに越した事は無い――俺の生み出す悲劇以外は認めない。

嘆きに満ちた終わりなんぞ糞食らえ――俺の生み出した嘆き以外は認めない。

仮に失敗した所で全ての責は俺だけにあり、俺の行った悪行が一つ増えるだけだ。

自分の思う通りに物事が進んで行く未来を求めて、俺はその手段を桜木に語った。

桜木に思い付いた手段を話し、内外ともにそんな事で良いのかと呆れられた後、俺は変身魔法で大人の姿になりその足でプレシア・テスタロッサの居城である時の庭園に来ていた。イメージとしてはRP Gに登場するラスボスの居るダンジョンだと言えば良いのか、薄暗い室内に妙に広々と作られた空間を見るとそうとしか思えなかった。

無印のラスボスをプレシアだと捉えれば強ち間違いでは無いが。

時の庭園に到着すると同時にハスターによる隠密魔法、魔術による隠形、技術による気配遮断を用いているので魔法的、人間的手段で見つかる心配はしていない。しかし機械による探索の場合には見つかってしまう可能性があるので用心しなければならぬ。それに、侵入者対策に仕掛けられている魔法にもだ。悪性情報による構築崩壊で魔法的なトラップによる脅威は無い。しかし、トラップが発動しようとしていた痕跡は残る。それがプレシアに伝われば何者かがここに侵入し、トラップを解除しながら進んでいると勘付かれる事になる。

幸いなことにトラップの類はハスターの探索で簡単に見つかるのでそれを回避しながら、床の擦れ具合による人の行き来の痕跡から最も人が向かっている場所を目指して進む。プレシアが拠点として使っている時の庭園にやって来る人間なんてフェイトとアルフくらいしか居ない。なのでこの痕を辿ればプレシアのいる場所まで辿り着ける筈だ。

ゆつくりと、焦ることなく、寧ろ上機嫌に鼻歌を歌わないように気をつけながら時の庭園内を進んで行く。そうして2時間程、普通に移動していれば10分そこらで済みそうな距離を行くと下層にあった

大きな扉を見つけた。床擦れの痕は他の部屋に一切立ち入る事無くこの扉の中に消えているのでここが目的地なのだろう。念の為に耳を澄ませて中の様子を伺うと、1人だけ部屋の中に居るのがわかる。

『マスター、スキャンニングの結果中の人物は高確率でフェイト・テストロッサの血縁者……つまりプレシア・テストロッサであると推測出来ます』

「そうか、それは良かった。空き巣みたいにコソコソ嗅ぎまわるのは嫌いじゃないが趣味では無いからな」

そもそもフェイトとアルフが海鳴で時空管理局の目を盗みながらジュエルシードを搜索しているのを確認してからやって来たのだ。帰還していない現在であれば、ここに居るのはプレシア1人だけになる。

カスパールがいつもの位置にあるのを確認し、無造作に、そして無警戒に扉を開いた。

部屋の中は玉座の間のイメージが似合う部屋だった。障害物が何も置かれず、中央には真つ直ぐに絨毯が引かれていて、その先にある玉座には寡れきった表情の年配の女性――プレシア・テストロッサがつまらない物でも見るような目で、驚く事無く俺の事を見下していた。

「我が家にそこそことやって来るなんて一体誰なのかしら？」

「これは失礼、何しろサプライズが趣味なものでして。私はアクロ・ダカーハ、お好きなようにお呼び下さい」

「これは驚いたわ、コソ泥なのに最低限のマナーは弁えているのね」

「親しき仲にも礼儀ありと言います。なら、親しく無い間柄にそれが求められないわけが無いでしょう？」

その目には狂気が宿り、何があっても最愛の娘を取り戻すのだという意志力が燃え盛っている。だというのに彼女は狂気的な意志力を持ったままにどこまでも冷静であった。

侵入者である俺の事を警戒しながら使えるかどうかを見定めていて、万が一に備えて周囲に攻撃用の魔法を構築している。不審な動きをしたり、プレシアの眼鏡に敵わなければ即座にその魔法を起動させて俺の事を殺す腹積もりらしい。

一歩間違えれば死にかねない状況。今世では全く無く、前世では当たり前前のようにあったこの状況に仮面の下に隠した口を思わず吊り上げてしまう。

そしてそれだけでは無く、プレシアの後ろで半透明の姿で佇むフェイトそっくりな少女の姿を見つけた事で、さらに笑みは深くなる。

「アクロ・ダカーハと言ったわね、一体なんの用かしら？ ジュエルシードを求めているのならここには無いわ」

「いえいえ、ジュエルシードに興味は惹かれますが既に研究用の分は確保してあります。時空管理局が来た今ではこれ以上の行動は控えられた方が賢明だと思えますので。私が来たのは別件ですよ」

返って来るのは無言だが、その目は続きを促していた。

俺とプレシアは初対面だがフェイトから俺の存在は報告されて知っているのだろう。乱入した時と同じ黄色のトレンチコートに蒼白い仮面というどこからどう見ても恥ずかしくない不審者スタイル。高町たちを倒してジュエルシードを回収出来る実力者である俺の協力を得られるのなら自分の目的を果たすことも可能だと考え、俺を自分の側に組み込んで利用しようとしているのが目に見えてわかる。

なのでええと、態とらしく間を空けてこちらに意識を集中させて、

「フエイト・テストロッサ……そして、アリシア・テストロッサに関してです」

容赦無く彼女の地雷を踏みつけた。

「――」

彼女から放たれるプレッシャーが増大する。狂気的な意志力に突き動かされながらも理性を持ち合わせていた彼女の目から理性が消え、代わりに怒りが増していく。

プレシアはアリシアが死んでいると理解している。だからアリシアを生き返らせようと活動し、この過程としてクローンであるフエイトを作り出して絶望し、最後の望みとして歪んだ形であるが願いを叶えるジュエルシードに目を付けた。

故に、プレシア・テストロッサの狂気とはアリシア・テストロッサへ捧げる親愛。それに無関係の人間が土足で足を踏み入れれば怒るのは当たり前的事だ。

「……貴方、自分が何を言っているのか理解しているのかしら？」

怒りを燃やしながらもプレシアは威圧するように、それでいて自分を落ち着かせる様に話しかけて来た。聡明な彼女の事である。俺が無策で時の庭園にやって来ていると頭のどこかで考え、実は管理局と何か繋がりがあるのではないかと予想し、怒りに身を任せて行動すればこの場所が管理局にバレるのではないかと己を抑えている。ジュエルシードが集まって無いこの状況で見つかるのはダメだと必死になって己を律していた。これらはすべて今の彼女の姿を見ての

想像に過ぎないのだが強ち間違いでは無いだろう。

それらはすべて、頭が良すぎるが故に作り出してしまった妄想に過ぎないのだが。

「アリシア・テスタロッサに会いたいですか？彼女の声で母と呼ばれ、彼女の目で姿を見られ、大切だと叫びながら彼女の事を全力で抱き締めたいですか？——フェイト・テスタロッサという、アリシア・テスタロッサの紛い物では無い本人に、会いたいですか？」

「……一体何が目的なのかしら？」

「話が早くて実に結構!!」

回りくどいことは一切無しで直球に尋ねてくれたのはこちらとしても都合が良かった。長々と話したところで時間をいたずらに消費するだけでしか無い。求めている物を持っている者が目の前に現れたのなら、何が欲しいのかを率直に尋ねるべきだ。

ペラ回す様な言葉遊びも好きではあるが。

腰に吊るしていたカスパールに手を伸ばして握る。突然デバイスを手にした事にプレシアはここで初めて驚いた様な表情を見せてくれた。

「そちらにはそちらの目的があるように、こちらにはこちらの目的があります。その目的の為に、一度でも良いから大魔導師と呼ばれた魔導師と戦ってみたいと思いませんか。お手合わせを願います」

これから先、数多くの魔導師と敵対するのは目に見えている。策を練って殺すこともあるだろうが、その多くは直接的な戦闘で殺しあうことになるはずだ。それなのに俺には対魔導師の経験は全くと言って良いほどに無い。

高町のような鍛錬も積んでいない魔導師では無く、赤城や御剣のようなスキル頼りの魔導師では無く、黒須のような近接戦主体の魔導師では無い。

純粋にこの世界の魔法を極めた魔導師との実戦経験。それが俺の欲している物だ。

「……成る程、倒して言う事を聞かせろと言う事で良いかしら？」
「いえいえ、こちらが勝ったとしてもアリシア・テスタロッサとは会わせて差し上げます……もつとも、会わせるだけなのですが」

そう言いながらプレシアはゆっくりと、そばに立て掛けてあったデバイスと思わしき杖を手にながら立ち上がった。身体を動かすのも辛いのか酷く気だるげな動作ではあったが、隙は何えない。それどころか少しでも目を離せば、そのまま殺られると直感が叫んでいた。

プレシアとの間に緊張が走る。いつでも動けるようにと適度に身体を弛緩させながら、いつもの通りに敢えて構えずに自然体のままでいる。

と、その時、生存本能が全力で警鐘を鳴らした。

その瞬間、とてつもない量の光と音が視力と聴力を容赦無く蹂躪した。

「カハーローツ」

あまりの衝撃に意識が遠のき掛け、気付がわりに用意していた魔法により意識を繋ぎ止める。妙な浮遊感を覚えながら今の攻撃で受けたダメージを把握する。全身からスタンガンでも喰らったかのように痺れを感じ、視力と聴力は光と轟音のせいではばらく使えそうになかった。それでも非殺傷設定にはされていたのか痺れ以外には身体に不調は感じられないし、視力と聴力も時間が経てば回復する程度の物でしかなかった。

つまり、非殺傷設定という手加減を施された上で意識を無くす程のダメージを与えられたのだ。これが実戦で、非殺傷設定がされていなかったら今の攻撃で終わっていたに違いない。

『ハスター』

『監視スフィアとソナーを展開しました。それらを繋いで視力と聴力の代わりとします』

一瞬、何かと繋がるような感覚を覚えたかと思えば聞こえないはずの耳以外で周囲の音が聞こえ、見えないはずの目以外で落下している自分の姿を客観的に見る事が出来た。

どうやら先の一撃で足場の床が崩壊し、吹き抜けの部分に繋がった事で落下しているようだ。足の近くに魔力で足場を作り、痺れで違和感を感じている身体を無理やり動かして足場を蹴って近くにあった出っ張りに指を引っ掛ける。

「もう終わりなのかしら？大層な口を聞いた割には大した事ないのね」

片手で壁にぶら下がりがらどのくらい身体が動くのかを確かめていると穴の空いている天井からプレシアがゆつくりと、飛行魔法を行使しながら現れた。彼女の周囲には三十近い魔力弾が展開されていて、そのどれもが紫色に帯電していた。

『マスター、どうやらプレシア・テスタロッサは魔力変換資質の持ち主のようです。先の一撃も構築していた魔法と変換した電気の合わせ技かと』

『よりにもよって相性が悪いのだったかあ』

愛歌から与えられた悪性情報は魔法に対して絶対的な優位を誇っている。バインド魔法ならば触れるだけで崩れ落ちて目的である拘束をさせないし、砲撃魔法だって構築を崩してしまえばただ魔力の塊をぶつけられているだけになってダメージを減らす事が出来る。

しかし、この悪性情報はスキルに対しては効果を期待出来ない。才能によって発現するスキルは魔法のように術式によって作られたわけではないのだから。今回のようにプレシアの魔法自体は悪性情報の汚染によって無効化する事が出来たが、変換資質によって電気に変換された魔力をそのままぶつけられたのだ。まともに魔法を喰らうよりもダメージは少ないのだろうが、それでも痛手を負ってしまった。

「何を言っているんですか？まだまだこれからですよ」

「あら、元気そうね……だったら、もう少し威力を上げて問題なさそうね」

まだ上がるのかよ、と仮面の下の顔が引き攣るのを感じながら壁を

蹴ってその場から移動する。足の握力で壁を掴み、腹筋と背筋を使って重力に逆らい壁に向かって垂直に立ちながら、地面と変わらない速さでの移動。2歩目に踏み出した足が壁から離れるのと同時に帯電した砲撃魔法が俺のいた場所に放たれていた。

痺れが抜け切るまで攻撃を喰らうわけにはいかないと判断して底が見えない程に深い吹き抜けの壁を縦横無尽に走り回りながらカスパールの引き金を引く。殺すわけにはいかないので非殺傷設定で放たれた魔力弾だが、プレシアはそれを一瞥すると避ける事はせずに全てを障壁で受け止めていた。

威力には自信があつたと言うのに、ヒビすら入れることが出来なかった。

『マジかよ』

『純粹に魔力の差です。カスパールの魔力弾よりもプレシア・テストタロツサの障壁の方が使用される魔力が多かった、それだけの話です』
『理解はしてたけど、実際に見せつけられると心に来るな』

魔導師で魔術使いだといえれば聞こえが良いかもしれないが、実際にはどちらも極めていない半端者なのが俺である。対するプレシアはこの歳まで魔導師一筋でやって来ている。純粹に魔導技術で培った年月が、積み上げられた鍛錬が違い過ぎる。カスパールの魔力弾を一瞥しただけで大凡の込められている魔力を計り、必要な魔力を見切つて障壁を使用しているのが何よりの証拠。

舐めていたわけではない。

油断も慢心もしていないはずだった。それでも、越えることが出来ない程の差が俺とプレシアとの間には存在していた。

「……サンダーレイジ」

側面から……プレシアの視点からしてみれば頭上から雷撃が落ちて来た。魔法で再現されたからなのか自然現象での雷程には速さは無いのだが、それでも人間の反応速度を越える速度で落ちてくるそれを避けられるはずがない。

「……ッ!!」

視界の端に光が見えた瞬間に避けられないと悟り、耐える事を選択していた。だから全身を雷撃に襲われても最初の時のように意識が遠退くような事は無かったが、ダメージは間違いなく蓄積していく。

「デア・フライシュエツェ魔弾の射手……ッ!!」

このまま逃げ回っていたところで事態は好転しないと判断して魔弾を放つ。初見必殺、回避不能であるカスパールの魔弾はハスターによってプレシアの体内に撃ち込まれ、魔力ダメージで意識を奪うはずだった。

プレシアの側に魔弾が転移し、明後日の方向に飛んで行く。

「体内への魔力弾のピンポイント転移……初見であるのなら必殺になりそうな技ね」

「は、ハハ……」

切り札が無効化された事実思わず乾いた笑いがこぼれ出してしまい、その数秒後にはプレシアの周囲に停滞していた魔力弾が撃ち込まれる。

「だけどお生憎様、ここは私の領域よ。侵入者への備えは当然してあ

るの。ピンポイント転移なんて繊細さが必要とされる技術なんて、いつも通りに使えるとは思わない事ね」

考えてみればプレシアの言う通りである。ここはプレシアの拠点で、俺は彼女からすれば侵入者。自身が有利になり、相手が不利になるような仕掛けなんて用意して然るべきなのだ。それを卑怯だと糾弾するつもりは無い。自分の優位性を確保しつつ相手に劣勢を強いて戦うのは戦闘の基本なのだから。

プレシアの領域になんの備えも無しに飛び込んでいった俺が悪い。

「サンダースファイアーアーリーファランクスシフト」

帯電する魔力弾に撃たれながらも足を止めてはいなかった。避けられる物は避け、迎え撃てる物は迎え撃ち、躲せない物は覚悟して受け止めていたのでダメージは最小限で抑えられている。それをプレシアは見越していたのだろう。魔力弾によつて上がった砂埃の中から飛び出して来た俺を待ち構えていたのは総数が100を越える魔力スファイアたち。

それらが容赦無く撃ち込まれた。

「アーアー」

壁のように迫る魔力スフィアの弾幕をダメージを負いすぎた状態で逃げられるはずが無く、俺は弾幕に飲み込まれた。意識はある、しかし電気を食らい過ぎた事による痺れが身体から自由を奪い、力を込めるのが困難になっていた。

壁を握っていた足の力が抜け、重力に従って落下する。

元より、この結果は覚悟していた事だ。魔導師としての実力はプレシアの方が上だと分かっていた。碌に魔導師戦闘の実戦も積んでいない俺がプレシアに勝てるという幻想など抱いていなかった。

魔導師としての俺は、プレシア・テスタロッサには敵わない。それが客観的、主観的に自分の実力を把握して出して出した結論だった。

底が見えない程の深い穴を落ちて行く。

視力が回復した目で見上げれば、そこには蔑んだような、呆れたような目で俺の事を見下しているプレシアの姿があった。偉そうな事を散々抜かしていたのにこんな結果で終わった事に対する感情なのだろう。少なくともそう思われても仕方の無い、反論の出来ない内容だったと自覚している。

よってこの戦いの勝者はプレシア・テスタロッサ。身の程知らずの俺は敗北する――

「成る程、魔導師の戦いというものを理解させてもらった――だが、敗北は認めん。勝つのは俺だ」

――否、否だ。魔導師としての実力が劣っているのは認めるが、だからといって勝負に敗北する事は認めない。

悪とは善に倒される存在である。故に善以外に負けることなどあつてはならない。それが俺の前世から抱いている矜持だ。

プレシアは善とは呼べぬ存在である。だから負ける事は許されない。魔導師として劣っているのなら、それ以外で戦うだけの事。生憎と格上との戦いなんて前世では飽きる程にやっているのだ。要所要所での負けは認めようとも、全てを覆せる最終的な勝利は認めない。

落下しながら近くにあつた壁に左腕を突き立てる。拳は砕け、骨どころか筋肉まで使い物にならない程のダメージを負うが落下は止まった。回復魔法を使って蓄積していたダメージを、今負った腕の負傷を治しながら再び壁を足場にして立つ。

「第二ラウンドだー！ーッ!!」

認めなければ負けていない。そんな子供のような穴だらけの自論を振りかざしながら、俺はプレシア目掛けて突貫した。

回復魔法を使って再起したように見えるが、回復魔法が優先的に回復するのは負傷でダメージが抜けるまでは時間がかかる。目と耳は回復したが、身体の痺れは未だに残っているのだ。

プレシアもそれを理解しているのか、俺の再起に対して動揺した素振りを見せずに杖を振り上げ、魔力スフィアを展開すると同時に帯電する砲撃を放ってきた。

スキルなどの要素を抜きにして言えば魔法というのは発動するために使用された魔力の量で優劣が決定する。俺の魔力はAランクで、プレシアには上回られているだろう。総量で上回られている以上、放たれる魔法に対してそれよりも魔力を消費した魔力を使ったところで先に息切れするのはこちらになる。ならばこの場の選択肢は避ける以外には存在しないのだが、それを選べば展開されていた魔力スフィアが襲い掛かってくるのが目に見えている。

流石は大魔導師。自分の有利な空間で戦いながらも慢心を欠片もしていない。冷静に、冷徹に、勝つ為の最善手を思考して実行して来る。

なので、まずは彼女の予想を裏切る事から始める。

「アアツハツハアーーーーッ!!」
「なーーーー」

プレシアが絶句するのを気配で感じながら高笑いをあげてさらに加速し、迫る砲撃に飛び込んだ。

全身を襲う魔力ダメージは回復魔法でカバーし、全身を襲う電気の痺れは気合いでカバーする。前世では怪我をしても医者に罹る事など出来なかったので痛みは全て我慢していた。

肉を断たれる斬撃に比べれば、
骨を碎かれる打撃に比べれば、
身体を貫かれる刺突に比べれば、
内臓を侵される病魔に比べれば、

ただ痺れるだけとは何とも優しき事か。

全身を雷撃に襲われて身体感覚は鈍っているというのに精神は高揚し、それに釣られるように身体は万全の状態よりも好調になっていく。その種は気合い、根性——精神論と呼ばれるそれらである。ある程度ならばそれらでどうにかなるが一定を越えればそんな物ではどうにもならない状況なんて多々ある。しかし、それ以上を越えるためには精神論が必要不可欠なのだ。

肉体の不調を、生存本能でかけられている安全装置リミッターを、気合いと根性にて無視し、意図的に外して前に進む力に変える。精神力で肉体の限界を超越する、誰にでもできるような事ではないと理解している。だが、前世の親友は容易くやってのけていたのだ。なら、彼の敵としてあつた俺も出来なくてはならない。出来ないとは釣り合わない。

「なら——ッ!!」

効いていない訳ではない、しかし止まる気配を見せないのを見てプレシアが動き出す。何時迄も続くかと思われた雷撃が止み、彼女の周囲にあった魔力スフィアの数が100以上に増え、同時に背後に特大の魔法陣をいくつも展開させている。中途半端な一撃では、チマチマとした連撃では効果が無いと判断したからなのだろう。

実際にその選択は正しい。いくらダメージを誤魔化せると言っても限度がある。今まではハスターのヒーリングで足りていたが、今準備されている魔法を使われれば回復量を超えてしまうだろう。

しかしそれは物事を一方からだけ見た時の考え方だ。プレシアは今、必殺の魔法を放つ為に準備をしている。術式を構築し、魔力を込め、魔法を行使するまでの時間、距離的に俺がプレシアの元まで辿り着く事は出来ないが出来る事など幾らでもある。

「祇園精舎の鐘、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を表す。驕れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き人も遂には滅びる、偏に風の前の塵に同じ——」

壁を足場として踏みつけながら魔術回路を起動する。第二ラウンドだと叫んだのは己を奮い立たせる為だけではなく、言葉通りの意味でもあった。これから先は魔導師としてでは無い、加賀美両夜アクロ・ダカーハの全てを出して戦うという宣言。

早口で呟くのは平家物語の一文。魔導における詠唱ではなく、魔術における詠唱。この世界の科学技術の発展の恩恵では無く、別世界の神秘の恩恵による魔術を邪神の後押しを受けながら、愛歌の悪性情報に汚染された魔力を消費しながら行使する。

「一切合切朽ちて果てろ——吹き荒べ、塵界じんかいの風エツ!!」

プレシアの魔法が使用されるよりも早くに、俺の背後から追い風が吹く。その風は当然のように俺の先にいるプレシアの元まで届き——展開されていた魔法陣を崩壊させた。

同時に、宙に浮いていたプレシアが落下する。

「なんでー！？」

塵界の風、俺の魔力変換資質の風と愛歌の悪性情報による汚染を組み合わせたこの世界には存在しない魔術。悪性情報に汚染された突風を吹かす魔術で、全力で使えば時の庭園を塵にする事だって可能だ。それをした場合の被害を考えて今回は出力を抑えていて、物体を若干脆くする程度の効果しか出せていないだろう。しかし、悪性情報による汚染の本命は魔法術式の構築の阻害にある。

この空間一杯に悪性情報をばら撒いているのと同じなのだ。すでに使われている攻撃系の魔法ならば兎も角、展開途中の魔法や飛行などの補助魔法は使えなくなる。プレシアが予め用意されていた仕掛けによって優位に立っているのなら、俺はその優位性をすべて台無しにした上でプレシアから魔法という唯一の手段を奪う。

そしてプレシアが落下しているということは、彼女から俺の方へと近づいて来てきているのと同じである。

壁を蹴り、落下しているプレシアに接近してカスパールを向ける。銃口には魔法陣が展開されていて、使われる時を今か今かと待ち望んでいるように見えた。

「悪いな、勝たせてもらおうぞ」
「アーーー」

プレシアが何かをいうよりも先にトリガーを引き、砲撃魔法を放つ。悪性情報に汚染されている俺はこの空間に満ちている悪性情報の影響を一切受ける事なく魔法を使う方が出来る。

至近距離からの砲撃魔法を魔法が使えないプレシアが避けられる

筈がなく、彼女はカスパールの銃口から放たれた砲撃に飲み込まれて姿が消えた。

「アイ!!アム!!チャンピオオオオオン!!」

『魔法では負けていたのに態度が大きく無い?てか何をしたの?』

「最終的に勝った奴が勝者なんだよお!!勝てば官軍ってな!!何をしたかとか、企業秘密だから教えないぞ!!」

『うっわムカつく』

意外と毒を吐くなあとと思いながら、意識を失って落下しているプレシアを拾い、近くにあつた部屋へと飛び込む。非殺傷設定だったので負傷はしていないのだが、彼女は気絶していた。バリアジャケットは使用していたはずなので気絶はしないと考えていたのだが、どうも予想していたよりも弱っていたらしい。

だが、プレシアが気絶してくれたことはこちらにとつて都合が良かった。目の前に浮かんでいる、フェイトと同じ顔をした半透明の少女に視線を向ける。

俺が望んでいた通りに、アリシアは霊体となってプレシアのそばに居てくれた。もしも彼女がプレシアのそばに居なかったら桜木に頼んであの世を写す鏡を宝物庫から出してもらい、アリシアの事を探さなくてはならなかったが手間が省けて良かった。

「確認するけどプレシアの娘のアリシア・テストロッサで良いんだよね?」

『そうだよ、私がアリシア・テストロッサ……つて、アレ?どうして貴方は私と話せるの?そもそも私の事が見えてるの?』

「見えてる見えてる、超見えてる。俺のスキルでお前みたい存在が見えるようになってるんだよ」

正確には俺の「霊視の魔眼」のお陰なのだが、初めから説明するのが手間なのでスキルという事にしておく。出来る事ならばプレシアが気絶している間に済ませておきたいからだ。アリシアもそれで納得してくれたようで頷いていた。

「で、物は相談なんだがプレシアと話してみたくないか？」

『え……出来るの？』

「出来るから提案してるんだよ。どうする？」

『……話せるのなら、お母さんと話したい。私が死んでからの事とか、フェイトの事とか、沢山話したい事があるの。でも、どうして初めて会う私たちにそんな事をしてくれるの？』

「俺には俺の都合があるんだよ。で、こうした方が俺にとって都合が良いからそうしてるだけだ。言ってしまうえば俺のためだから」

プレシアに改心させる事でフェイトに訪れる鬱展開を無くしたい。俺がこのタイミングでプレシアに接触を図ったのはそれだけが理由なのだ。仮にあの温泉旅行でフェイトと会っていなかったら、友達になっっていなかったら俺はプレシアがジュエルシードを使ってアルハザードへ向かおうとするまで介入するつもりは無かった。

フェイトと交友を結んだから、俺は今この場所にいるのだ。

「それじゃあ、今からプレシアと話が出来るようにするけど、一つだけ注文がある」

『何かしら？』

「この前を見ようとしていない馬鹿を目一杯叱ってやってくれ」

過去を蔑ろにしろとは言わない。人間が生きるための原動力なんてものはいつだって過去にあり、過去があるから未来を見据えて生きるのだから。しかしプレシアは過去に囚われていた。最愛の娘の死を嘆き続け、過去だけを見て、未来に目を向けようとしなかった。プ

レシアの所業に関しては特に思う所は無いのだが、それだけは許せなかったのだ。

どんなに暖かくても、どんなに眩しくても、過去は過ぎ去った出来事ではない。それだけに目を向けて現在と未来を見ようとしていないプレシアの事が気に入らなかった。

なので最愛の娘に叱られて、ついでに嫌われたらいいんじゃないかと思っただけでそう言ったのだが、アリシアもアリシアでプレシアの所業に思うところがあつたらしく、満面の笑みを浮かべてサムズアップをしてくれた。

「壹 弐 参 肆 伍 陸 漆 捌 玖 拾
布留部 由良由良止 布留部」

それを見届けて準備が出来たと判断し、起源を用いた魔術の詠唱を行う。元々半透明だったアリシアの姿が更に希薄になり、横になって気絶しているプレシアと重なる。前に恭也に対して行った事と同じ、プレシアにアリシアを憑依させる事で精神世界で会話をさせる。

恭也の時はこれで上手くいったのだが、今回もこれで上手くいくとは限らない。最悪、これによってプレシアが更に過去へ執着してしまう可能性もあるのだ。

だけど、その可能性を考慮した上で俺はこの手段を選んだ。この方法以外にフェイトの鬱展開を回避する方法が思いつかなかったから。

上手く行って欲しいなあと思いつながら、これ以上俺に出来ることは無いので祈る事しか出来なかった。

「さてさて、中々進んで来た頃合いかな？」

プレシアとの邂逅後から入り浸っている時の庭園の一室で、変身魔法を使った大人の状態で笑う。監視スフィアからの映像に映るのはオレンジの毛並みが特徴的な狼の姿をしたアルフと、彼女に念話で話しかけている高町と黒須の姿だ。プレシアがアルフを時の庭園から追い出したのだがその際に魔法で攻撃されていて、体力を回復させる為に狼の姿になっているところを高町の友人に保護されたいらしい。

地味に幸運だなあと考える。何故なら、アルフが時の庭園から追放された同時期に赤城と御剣が町の中を徘徊していたから。どうやらアルフが時の庭園から追放されるのは原作と同じ出来事だったらしく、保護して何かをしようと企んでいたのだろう。高町の友人に拾われていなければ、今頃どうなっていたのか分からない。

相棒のいなくなったフェイトだが、彼女は今もプレシアの言葉に従って管理局の目を盗みながらジュエルシードを探し回っている。アルフが居たとしてもマンパワーで劣っている彼女では時空管理局に負けてしまい、発見することは出来ても封印する前に管理局員に見つかってしまい逃走する事が何度もあった。防御に比を置いているタンクタイプではなく、速さを重視しているスピードタイプだったのが幸いして包囲される前に逃げることに成功しているもののジュエルシードを確保する事が出来ないでいた。

そしてフェイトは現在海の上にいた。陸地でのジュエルシードの確保は難しいと判断して、まだ探していない海の中にある可能性にかけて故意にジュエルシードを暴走させようとしている。仮にジュエルシードが暴走したとしても近くには管理局の目がある。すぐに見

つまり、次元崩壊を避ける為に介入するのが目に見えているのでここは放っておくことにした。

『ねえねえアクロさん、お母さんがいい加減怖くなって来たんだけど？』

「俺の話を聞かなかった、俺の好意を無下にしたプレシアが全て悪い。きつと裁判官だって満場一致で俺の無罪を証明してくれるに違いない」

『満場一致で有罪判決を下す未来しか見えない』
「ガツデム」

俺は無視しているが、まだ精神の幼いアリシアは怖がっても無理はないだろう。何故なら、今のプレシアはこの部屋の隅で蹲ってブツブツと小声で呟いているから。彼女の風貌と相まってアリシアよりも幽霊をやっている。

精神世界でアリシアとプレシアを合わせて会話をさせる事には成功した。これでフェイトに対する考えが幾らかでも改善されて少しでも親子のようになればいいと望んでいたが、それは叶わぬ願いだった。

目を覚ましたプレシアの放った第一声が「必ずアリシアを生き返らせる」だったから。すでに死んでいる者への未練を断ち切らせる為にアリシアとの会話をさせた訳なのだが、それが逆に彼女への想いを強くさせてしまったようだ。時の庭園の動力源を暴走させ、戦艦落としならぬ庭園落としを実行して管理局からジュエルシードを奪い、その足でアルハザードへ向かおうとしていたので再度彼女を気絶させた。

そんなプレシアの姿を見て、アリシアは四つん這いになって泣き崩れていた。親に想われているのは純粹に嬉しいのだろう。しかし狂

気に囚われて、アリシアのクローンであるフェイトを道具のように酷使し、一歩間違えれば世界を崩壊させかねない物を使おうとする母親なんてアリシアは見たくなかったのだ。

アリシアと会話をさせる事でプレシアを改心させる方法は頓挫した。プレシアのアリシアへの想いの強さを図り損ねていた事が原因である。なので別の手段を取ることにした。

価値観の変更――即ち、洗脳である。

一度プレシアの精神を完全に崩壊させ、都合の良いように作り直す。プレシアの自我を保ったままに同じ事を出来なくも無いのだが、そうした場合は些細な違和感で洗脳前の自分を取り戻しかねないので一度人格をリセットする必要があった。一応洗脳する前にアリシアに尋ねたのだがドン引きされ、それでも他に方法が無いと悟り、プレシアがフェイトに優しくなるのならと最終的にはサムズアップをして了承してくれた。

話術と魔法と魔術を使い、プレシアの人格を完全に白紙化させる。前世でも都合の良い手駒をつくる為に洗脳をしていた経験があるので間違える事はない。前世とは違って話術だけでは無く魔法と魔術も使えたので、プレシアのアリシアへの想いが強過ぎて手古摺ったものの成功される事が出来た。現段階では人格を再構築している最中である。

途中でフェイト達が帰ってきて報告に来た時には焦ったが、そこはプレシアにいつも通りに対応しろと命じて解決した。プレシアの人格は白紙化させたが記憶の方までは手を出していない。記憶の中にある彼女と同じような事をさせる事でフェイト達にプレシアの変化を感じさせないようにした。

流石にお仕置きと称してフェイトを鞭打ちするにはドン引きした。アリシアはまたやっていると行って遠い目をしていた。こんな様子ではプレシアの目的通りにアリシアを生き返らせる事ができたとしても、以前のような親子関係でいられるかは怪しかった。

その時にフェイトを助けようとしたアルフを攻撃して時の庭園から追放した事には焦ったが、考えてみれば結果オーライだったかもしれない。これでアルフから高町たちへ、高町たちから管理局へフェイトとプレシアの関係性が伝わり、フェイトはプレシアに虐待され、ジュエルシードを集めるように命令されている”と知られるから。少なくとも一般的な感性の持ち主ならこれでフェイトの事を憐れむ。裁判を受けた時に裁判官への心境が良くなるかもしれない。

「そろそろ仕上げに入らないと間に合わなくなりそうだな」

フェイトが目的通りにジュエルシードを6つ暴走させ、海水で出来た龍となって襲いかかって来るそれと戦っている彼女を見て椅子から立ち上がる。

『時空管理局がここに来るの？座標はバレてない筈だけど』

「バラすんだよ。フェイトが高町たちと協力してジュエルシードを封印した時にプレシアにあいつらを攻撃させる。そうすりゃあ黒幕のいる時の庭園にご案内というわけだ」

『そして管理局員たちは目にする……狂気に囚われたお母さんと保管されている私の死体を……!!』

「最愛の娘を蘇らせる為にアルハザードへ向かうのだ!!娘の代わりとして作ったフェイトなんぞ、ただの人形でしか無かったのよ!!おおなんて非道な事か!!なんと醜い妄執か!!なんて残酷な事実であるか!!」

『しかしその刹那、背後から現れる影がお母さんの胸を貫く!!』

「ジャンジャジャン!!プレシアが黒幕かと思った？残念、俺だよ!!アクロ・ダカーハ様がプレシアの事を操っていたのさ!!アルハザード

診察によればもう末期の段階に入っていて治療は不可能。後1年生きられるかどうかという状態だった。もしかするともう手遅れだと分かったからこんな一か八かの勝負に出たのかもしれない。そうではないと、今回の件はあまりにも穴が多過ぎるから。

発狂して頭を掻きむしっているプレシアをバインドで拘束し、隣の部屋へと連れ込む。その際にフェイトの戦っている姿を見ているアリシアを見たのだが、プレシアの事が気になっていようでチラチラと視線を彼女に向けていた。

プレシアがアリシアを愛していたように、アリシアもプレシアの事を愛している。普通なら洗脳なんて非道は何としても阻止するところなのだが、アリシアは年齢に反してあまりにも聡明過ぎた。プレシアがやった事がいかに酷い事かを理解していて、プレシアを死なせればフェイトの心が折れる事を承知していて、だから俺の計画に乗ることを選んだ。

プレシアにこれまでした事の罪を償わせる為に、人形として扱われていたフェイトに母親の愛を教えてあげる為に。

その姿はあまりにも眩しかった。

だから、これから先は御都合主義には頼らない。神様が気まぐれで与えてくれるご褒美を望む事はしない。愛しているが故に起きてしまったこの物語を、せめてハッピーエンドで終わらせる為に。

この時ばかりは御都合主義肯定派である俺だが、御都合主義に対して中指を突き立ててやろう。この終わりは神様の気まぐれなんている幸運で終わらせるべきではなく、人間の努力によって達成される必然であるべきなのだから。

「ようやく終わりが見えてきたな……」

時の庭園に訪れた時、プレシアが腰を下ろしていた玉座に彼女の代わりに足を組みながら座り、時空管理局の到着を待つ。

プレシアの再調整が終わって洗脳が完了したところでジュエルシードが封印出来たらしく、そのままプレシアに命令させてフェイトと高町に攻撃させてジュエルシードを時の庭園まで持ってきた。いくら時の庭園から地球までという、単純な距離ではなく次元さえも超えて雷撃を落としたプレシアの魔導師としての腕に舌を巻く。強さという括りでは彼女はこの世界でもトップクラスの实力者である事には間違いないだろう。

よく勝てたなあとしみじみ思う。非殺傷設定、そして悪性情報のメタがあったとはいえ。

『アクロさんアクロさん、管理局員たちが転移して来たよ』

「もうか、案外早かったな……とところで、お前が言い出したこととはいえ本当に良かったのか？」

『うん。私はもう死んでるし、それに残ってたからお母さんがいつまで経っても闇落ちしてるだろうからね』

「お前が死んだ時点でもう闇落ちして手遅れなんだよなあ……」

フワフワと俺の隣に浮かんでいるアリシアはそう返すと楽しそうに笑っていた。考えてみれば彼女が死んでから今日までの間、俺以外の誰とも会話をしていないので話す事が楽しくて仕方がないのだろう。彼女が死んでから何年経っているのか分からないが、長い年月人との交流を絶たれたのだから飢えてしまうのも理解出来る。

「それじゃプレシア、打ち合わせ通りに頼むぞ」

「……ええ、分かっているわ」

最初に出会った時とは真逆の立ち位置で、眼下に立つプレシアにそう言えば彼女からはしつかりとした返事が帰ってきた。今ここにいるプレシアは原作通りにアリシアだけを愛している狂人ではなく、フェイトの事も娘だと認識している普通の母親だ。

洗脳を完了させた時に、自分が今までフェイトに対してやった事を思い返して死にそうな顔をして自殺しかける程には普通の感性を持っている。

その時に腹を抱えて爆笑していたアリシアにイラツとした。

「だけど、ちよつと待つてくれるかしら?」

「何だよ」

「最後にアリシアに言いたい事があるのよ……アリシア、私は馬鹿な親だったわ。貴女が死んだ事を認めながらもその死が認められず、色んな外道に手を出してしまった馬鹿な女……だけど、私は貴女を愛している。母親として、この気持ちに嘘は無いわ。ありがとうアリシア、私の娘に生まれて来てくれて」

『お母さん……いい感じの雰囲気を持つて行こうとしているのは分かるけど、フェイトにやった事は絶対に許さないからね!!有耶無耶にしようとしても誤魔化さないんだから!!』

「……だ、そうだが?」

「カハー……ッ」

アリシアからの言葉をそのまま、変な歪曲なしで伝えるとプレシアは血反吐を吐いて顔から倒れた。白目を剥いて痙攣している辺り、相当ショックを受けたのだろう。子離れ出来ない親バカが最愛の

娘からそんな事を言われたらこうなってもしょうがないと思う。

そしてアリシアはそんな母親に向かって白目を剥きながら舌を出して両手の中指を突き立てていた。

とてもじゃないがフェイトのオリジナルだとは思えない。こんな
のからあんな天然娘が出来たなんて信じたく無かった。というより
も俺と会話をするようになってからアリシアが外道になっている気
がする。久しぶりの会話でテンションが上がって隠されていた外道
の本性が明らかになったのだろうか。

取り敢えずアリシアに習って俺も白目を剥きながら舌を出して両
手の中指をプレシアに向かって突き立てておく。した後で仮面を
被っていた事を思い出して顔芸が見えないじゃないかと思っただが、外
すのが手間なのでこれでいいかと放置しておく事にする。

「ゴフツーーーそ、そろそろ扉の前まで来た頃よ……」

『格好つけてるけど足が生まれたての子鹿みたいに震えてるんだよ
ねえーハッ、ザマア』

「聞こえてないからいいけど死体蹴りが酷くね？」

アリシアのプレシアへのヘイトが凄まじい事になっているが、闇落
ちして自分のクローンであるフェイトを代用として生み出した事、些
細な違いからフェイトを娘として認めなかった事、アリシアを蘇生さ
せる為にジュエルシードという危険物を集めさせた事などを考えれ
ばここまでヘイトを稼いでも納得してしまうのが悲しいところだっ
た。

アリシアの言葉を伝えれば間違いなくプレシアは再起不能になっ
てしまうので敢えて伝えず、扉に視線を向けてタイミングを見計ら
う。

そして扉が開いた瞬間――肘掛を指で軽く叩くワンアクションで真空波を作る魔術を発動させ、プレシアを斬り刻んだ。

鮮血を撒き散らしながら崩れ落ちるプレシアの姿を見て、部屋に突入しようとしていた管理局員たちの足が止まる。予想外の光景から生まれた、意識の空白。それを見逃せる程に余裕は無いのでハスターにバインド魔法を行使させて管理局員たちを拘束する。

「――ようこそ、時の庭園へ」

『よっしや――盛大に歓迎するよ!!』

仰々しく両手を広げるような行動をとりながら管理局員たちを出迎える。アリシアは倒れるプレシアを見てガッツポーズを取った後、姿が見えないのいい事に両手でダブルピースを作りながら動けない管理局員の周りを回っている。

その姿を見て確信する――最大の敵はもしかしたら彼女なのかもしれないと。

「私の名はアクロ・ダカーハ。有り体に言えば、今回のジュエルシードを巡る騒動の引き金を引いた張本人だ」

『――それはどういう事なのか、説明していただいてもよろしいですか?』

空中にモニターが投影され、そこに黄緑色の髪をポニーテールで纏めた女性の姿が映る。背後の光景から推測するに、戦艦アースラからの映像だろう。そしてこのタイミングで登場したという事は、彼女は今回送られてきた隊員の中で一番身分の高い者なのかもしれない。

「語るのは構わないが些か無礼じゃないかな?こちらはしつかりと名

前を教えたというのに、そちらは名乗らないとは……嘆かわしい、時空管理局の程度が知れるぞ?」

『あら、それは失礼しましたわ。私はリンディ・ハラオウン、時空管理局の提督で巡航艦アースラの艦長です』

『ムムツ、お母さんと同じ匂いがする……つまり、あの人は子持ちの熟女に違いない……!!』

アリシアの発言に吹き出しそうになるが、地球にも高町桃子さんという子持ちでありながら二十代前半で通じそうな人間がいるので堪えることに成功した。姿を見る事が出来るのが俺だけだとはいえ、一応シリアスな雰囲気なのでそういう発言は控えてほしい。普段は流せるような発言だが、今の雰囲気と合わさると威力が高過ぎるから。

「ご丁寧にも……どういう事なのかと言われてもその通りなのだが? プレシアにユーノ・スクライアが発掘したジュエルシードの性能について伝え、それがあれば望みが叶うのではないかと唆しただけだが?」

『ジュエルシードを始めとしたロストログアの危険性については貴方もご存知の筈ですが?』

「危険物だから時空管理局によって管理されるべきだと? そんなので我慢出来たら法律なんて作られやしないだろうさ。生憎と俺では管理局の守りを抜く事は出来なかった。だからそれが出来るような実力者を唆した。お陰で……」

ポケットの中から俺が集めたジュエルシード5つを取り出す。内3つは魔力が無くなってただの宝石に成り下がっているが、残り2つに込められた魔力は健在。封印処置は施しているので暴走する心配は無いのだが、知らなければ1つでも次元震を起こせる危険物を5つも所持しているように見える。

「……」覧の通り、5つもジュエルシードを得ることが出来た。プ

レシア様様だ。感謝してもし足りないというのはこの事だな……まあ彼女は病気に侵されていて、殆どはあの人形娘に任せていたみたいだが」

《今、フェイトの事を人形扱いしたかしら？》

《ステイ、お静かに》

人形娘と、悪印象を持たれる為に蔑んだ呼び方をしたら血みどろになって倒れているプレシアが反応してしまった。一応致命傷にはならない、重傷になる程度の傷しか負わせてないので意識はあるが興奮すれば出血が酷くなってそのまま死んでしまう危険性もある。

『おや、フェイトの事を人形扱いしてたお母さんが何か言ってる』

《……だ、そうだが？》

《ガフ……》

なのでアリシアの言葉をそのまま伝えて、プレシアにとどめを刺しておく。

『人形娘……フェイトさんの事ですか？』

「そうだ、だってそうだろう？ 実の娘の代用品として作ったのだからな」

本来ならばプレシアが伝える筈だった事を、代わりに俺が口にする。リンディは冷静を装って黙っているのだが、彼女の背後からは微かなざわめきが聞こえている。

そして、乗り合わせていたフェイトの絶句も。

『どういう、事ですか……』

「こういう事だよ」

困惑しているフェイトが乗り出すようにして画面に現れたのを見

計らい、玉座の後ろに設置されている扉、それに目掛けてカスパールを向けて引き金を引く。砲撃魔法によって破壊された扉の先には――近未来的な施設の部屋があり、その中央の培養液らしき液体に満たされたポットにはフェイトと同じ顔の少女――アリシアの肉体が保管されていた。

『あ、不味い。私の身体、何も着てなかった……』

『良かったな、全裸でケープブルデビューだぞ。喜べよ、この映像絶対に証拠として残されるぜ』

『ノオオオオオ……!!』

数年使っていないとはいえ自分の身体が映像に残されるのは嫌なのだろう。アリシアは顔を両手で覆いながらその場に崩れ落ちた。このまま静かになってほしい。主に俺の腹筋の為に。

「管理局なら犯人がプレシアだと分かった時に彼女の経歴について調べてるんだろ？なら、フェイト・テストロッサという人物の戸籍が無いことも知っている筈だが？」

『本当、ですか……？』

『……ええ、私たちが調べた限りでは、プレシア・テストロッサの子供は娘のアリシア・テストロッサただ1人だけ……フェイトさんの事はどこにも記されていないかったわ』

「それはそうだ。何せ、フェイトはアリシアのクローンだからな」

玉座から立ち上がり――途中で不自然にならないように転がっているアリシアの事を蹴り飛ばし、アリシアの遺体が保管されている部屋に入る。

「彼女はとある実験の暴走事故に巻き込まれて死亡した。僅か5歳の時だった。娘の事を溺愛していたプレシアだ、彼女の死をキツカケに狂気に囚われてもおかしく無いだろう。そうして娘の蘇生手段の1

つとして選り、実行したのがアリシア・テスタロッサのクローンを作り、そのクローンに記憶を転写させる事……そうして出来たのがフェイト・テスタロッサだ。しかし、そんな事をして出来上がるのはアリシア・テスタロッサの記憶を持っただけの別人だ。2人の齟齬に気づき、それでも愛さねばと思い、神経を擦り減らして疲弊していくプレシアは再びアリシアを蘇らせる方法を模索した」

『それがジュエルシードだと?』

「正確にはジュエルシードを使い、アルハザードに向かうように唆したのだが……涙ぐましい努力じゃないか。まあ、情緒不安定になつたせいでフェイトには虐待を行なつていたようだが、彼女の背景を考えればそれも微笑ましく思える」

肩を揺らしながら笑つてみるが、映像の向こうにいるリンディはクスリとも笑わない。それどころか俺へと敵意を向けている。今の彼女の俺への印象は、『娘の死を嘆く母親を唆した悪党』といったところだろう。順調にヘイトを稼ぐことが出来ているようだ。

「まあそれもここまでだ。いくらプレシアが条件付きとはいえSSランクの魔導師だとはいえ病に侵されて死に体では管理局の相手など出来ない。欲しかったものは手に入れたし、俺は逃げさせてもらおうか」

『この状況で逃げられるとお思いですか?』

包囲が完成しているわけではないが、この場には管理局の目があつる。普通に転移して逃げたところで解析され、転移先を判明されて追いかけられるのが目に見える。

だから、他の事に目を向ける事にする。幸いな事にそれが出来るオモチャが目の前に転がっている。

「いいや、逃げるさ。流石の管理局だろうと、ジュエルシードが暴走し

ているのを見逃すわけにはいくまい？」

『まさかー』』

リンデイが俺が何をしようとしているのか気がついたようだが、この場に居ないものにはどうすることも出来ない。プレシアに奪わせさせたジュエルシード15個、それにカスパールの銃口を向け、引き金を引く。

魔力弾がジュエルシードに当たる。それにより施されていた封印処置が解除され、ジュエルシード15個が同時に暴走を始める。

「ジュエルシード15個、ついでに時の庭園の動力源も暴走させておいた。早く止めなければ近くの時空に被害が出るぞ？」

『なんて事を……!!』

「ああそうだ、最後に1つだけ伝えたいことがあるんだー人々が大切にしているものを壊すのって、愉快だと思うんだ」

カスパールの銃口をアリシアの入っているポットに向け、躊躇うことなく引き金を引いた。非殺傷設定のしていない砲撃魔法が放たれてポットを飲み込み、培養液に漂っていたアリシアの遺体を欠片も残さずに消し飛ばす。

これはアリシアから頼まれていた事だ。自分の遺体なんてもの残っているからプレシアは生き返るかもしれないなんていう希望を持ってしまう。洗脳して価値観を変えたので大丈夫だと思うのだが、何かの拍子でかつての狂気に再び囚われる可能性がある。

だからアリシアの遺体を消し飛ばした。それがアリシア本人の望みだから。

プレシアが気絶していて良かったと思う。予定では目の前でアリ

シアの遺体を消されて泣き叫ぶ彼女の姿を見せつけるつもりだったが、そんな事をしたらこのやり取りが狂言だと口走るかもしれないから。

『なんてことを……!!』

「それじゃあ頑張ってくれたまえ。私は家に帰ってポップコーン食べながら特撮アニメ見るから」

そう言つて通信機の役割を果たしていた魔力スフィアを破壊する。ついでにバインドを締め付けを強くして拘束されていた管理局員たちの意識を奪い、プレシアのも含めて全てのデバイスを悪性情報で汚染しておく。これで人の目は無くなり、デバイスに音声を録音される心配も無くなった。

プレシアの方に関しても心配していない。アリシアの遺体を消し飛ばした腹いせに狂言だと発言される可能性を考えて、魔術を仕込んでいる。目が覚めた時には俺の事はあやふやにしか覚えておらず、リンドイに言った通りに俺がジュエルシードの事を話したという具合に記憶操作される筈だ。

『これで良かったのかなあ……』

「分かん。だけどやれるだけの事はやった。やれば良かったと後悔するよりもこっちの方がまだマシだ」

『……そうだね。うん、そう思う事にする』

「俺は帰るけど、お前はどうするんだ？」

『アクロさんに着いていっても大丈夫かな？私と話せる人がいるってだけでかなり安心するし、地球がどんなところなのか見て見たいし』
「要らないことを話さないのなら良いぞ」

幽霊であるアリシアの存在を見ることが出来るのは俺だけだ。しかしそれは「今は」と付くものであつて、これから先にそういふこと

が出来るスキルの持ち主が現れないとは限らない。本格的に活動するまで……最低でもA，S編が終わるまでは舞台である地球にいたいのだ。

それに対してサムズアップをして頷いてくれたアリシアを引つ張り、転移魔法を行使する。ジュエルシードの暴走の影響で調べにくくなっていているらしいが念には念を入れ、隠蔽に隠蔽を重ねた上でいくつかのダミーをばら撒いておく。これでバレたのなら流石だと相手を褒めるしか無いだろう。

「こんなところで躓いてくれるなよ『英雄候補様』？英雄に憧れ、英雄になりたいと本気で思っているお前に俺は期待しているのだから——」

願わくば、俺が倒されるに相応しい存在になってほしい。その為の舞台は用意した。これ乗り越えて英雄になって魅せろと仮面の下で静かに笑いながら、時の庭園から去っていった。

「満点花丸というわけにはいかなかったが及第点くらいは取れたか」

愛歌も桜木も誰もいないリビングで1人呟く。空中に投影されたモニターにはノイズが走っているが、さっきまでは時の庭園内の映像が――黒須と高町、そしてフェイトの活躍がリアルタイムで映っていた。

プレシアが用意していた機械兵を打ち倒しながら、胸に秘めた思いを叫びながら――信じられない現実を知らされて絶望しながら、それでも再起して立ち上がる勇気を見た。結果として彼らはジュエルシードと動力源の暴走を止める事に成功していた。死者は0人。一番被害が大きかったのはプレシアで、重傷らしく緊急手術が行われていたが、それでも一命を取り留めていた。

中々に良いものを見せてもらった。ポップコーンは無かったのでポテトチップスを齧りながらの観戦だが。

転生者という異物があつたが故に多少の変化はあつたものの、大まかな道筋は原作と変わらなかつた。そうであつた方がこれからの出来事の予想がつきやすく、何かあつた時の対処も楽になると判断してそうなるように仕向けていたからそうなつたのだ。思うように物語が進んでいくことへの愉悦はあつたのは認めるが、取り返しがつく範囲で道筋から外れて欲しかったという期待もあつた。

高町、そしてフェイトに関しては特にいう事はない。ジュエルシード3つ分の魔力を取り込んでいる愛歌には及ばないものの、桜木をして「世界に愛されている」と言わしめるほどに才能に溢れている。マトモな訓練を受けているフェイトに短い時間で追いつくどころか

追い越せるほどの実力を身につけた高町の姿を見れば、桜木の言葉に頷くしかない。

流石は魔砲少女で魔王なだけはある。超高高度から砲撃をバカスカ撃たれるなど御免被る。

黒須に関してはまだまだ未熟としか言えなかった。ガリア・オールライトという英雄に焦がれ、目指している彼は自分に来る事を把握して、高町とフェイトのサポートに回って機械兵を倒す事に集中していた。これがガリア・オールライトならば出来る出来ないなど関係無く、やらなければならぬという意志力を持ってして不可能を可能にしていたに違いない。剣の腕に関しては光るものを感じさせたが、それ以外の魔導戦に関しては半人前というのが時の庭園での戦闘を見ての評価だった。

しかし、だからといって失望はしない。未熟だという事は、裏を返せば成長出来る余地があるという事だからだ。この世に生まれながらにして完成している生物など存在しない。どれもが未熟で生まれ落ちて成長し、成熟して完成する。今はまだ未熟としか言えないような存在であつても、これから先どうなるかは分からない。俺が本格的に活動するまでまだまだ時間はあるのだ。その間に、未熟という評価を撤回出来るほどに成長してほしい。

ともあれ、これで無印編は終わりを迎えた。

ジュエルシードは俺が待っている物以外は全て時空管理局に回収され、フェイトとアルフとプレシアは事情聴取の為に身柄を保護された。これからの裁判次第だが、俺の暗躍によって彼女たちは被害者であることと認知されて情状酌量の余地があると判断されることを祈るしかない。もつとも魔導師としての実力は一級品であるフェイトと、条件付きとはいえSSランクの魔導師であるプレシアを惜しみ、何かし

らの条件をつけて管理局に縛りつけようとしているのは目に見えて
いるので然程心配はしていない。

ジュエルシードの暴走に巻き込まれたせいでリンカーコアを持た
ない魔導師となつてしまった愛歌。定期的にジェイルの元に向かい
検査をしているが、いづらか身体能力が向上した程度で今のところは
大きな異常は見つかっていない。恐らく魔力を宿した事が影響して
いるのだろう。それもデメリットでは無くメリットとして愛歌本人
は受け入れて喜んでいたので問題では無さそうだった。

俺を心配させない演技である可能性も考えたが、飛び跳ねて全身を
使つて喜びを露わにしている彼女の姿を見てそれは無いと悟つた。

結果的には大団円とは言えないが十分にハッピーエンドと言つて
も良い終わり方だろう。最良なのはアリシアの遺体をしっかりと埋
葬させてやるまでだったが、本人から残さないでと頼まれたのだから
仕方がない。

本来ならば死ぬはずだった者が^{アリシア}生き残り、心に消えない傷を負うは
ずだった少女^{フェイト}を救えたのだ。この終わり方をダメだと否定してしま
えばバチが当たる。

一先ずこれで物語の限りを迎えたと判断して身体力を抜く。必
ず成功させると意気込んでいたせいで妙な力が入っていたようで、今
頃になって倦怠感がやって来た。冷蔵庫に向かい、中に入っていた
ペットボトルの水を一気に飲み干す。

「おーい、俺は寝るから静かにしてくれよ。 土郎さん、彼女にちよつと
この家のルールとから教えてやって下さい」

『おー、私以外の幽霊なんて初めて見たよ!!私^{アリシア}、よろしくね

……おじ様♪』

『お、おじ様……!!どういう事だ……なんかこう、ゾクゾクするような感覚に襲われる……!!』

アリシアのおじ様呼びで何やら新しい感覚に目覚めつつある土郎さんを放置して、俺は寝室へと向かう事にした。

「……あゝあゝ?」

心地良い眠りの中にあっただが、携帯から着信を伝える音が鳴らされたせいで目を覚ましてしまう。時間は午前5時、いつもならばもう起きている時間帯のだが、疲れていたからなのか妙に目覚めが悪い。思わず苛立った声を上げてしまい、携帯の画面を目覚め切っていない眼で確認すればそこにはフェイトの名前が表示されていた。

「……もしもし?」

『あ、リョーヤ?おはよう』

「……おはよう」

まだ眠い、こんな朝早くから電話するなど言いたかったが、彼女は俺の生活リズムを知っている。だからこの時間ならば起きていると考えて電話して来たのだろう。そう考えると怒るに怒れなかったので、感情を声に出さないように注意しながら電話に出る。

『こんなに朝早くからゴメンね?実はちよつと話したい事があつて……』

「今じゃないとダメな事なのか？」

『うん……その……か、母さんの都合で海鳴からしばらく離れる事になったんだ。それで空いてた時間が今くらいしか無くて……』
「離れるのかあ……そうかあ……」

地球でいう所の警察としての権限を持っている時空管理局に捕まった以上、彼女は裁判を受ける事になる。そのために地球から離れなくてはならないのだろう。しばらくと言っているのも帰ってくるつもりはあるらしいが、いつになるのか分からない。その前に世話になった俺に別れの挨拶をしないと云ったところか。

それはそれとして、建前ではあるがプレシアの都合と言われて笑いそうになってしまう。

「愛歌はまだ起きてないけど良いのか？」

『うん、本当だったらマナカにも挨拶したかったけどこんな時間だからね』

「こんな時間に叩き起こされた俺について何か一言」

『え？リョーヤはいつもこの時間に起きてるから大丈夫でしょ？』

「d a m m i t」

俺のようにネタや煽りでは無く、フェイトは心の底からそう思っ
て口にしているのでタチが悪い。これが天然娘の恐ろしさかと戦慄し
ながら、ベットから起き上がる。

「場所はどこだ？」

『この前の公園で良いかな？』

「公園……ああ、あの御剣被害ストーカーの相談を受けた場所？」

『そう、そこ……待ってるからね』

さり気なく御剣をストーカーだと認めていたフェイトに天然なの

かそれともわざとなのか判断が付かない。待っていると、どこか寂しそうな声で電話が終わった。

寝間着を脱ぎ捨てて適当な服を着てリビングに降りると、そこには四つん這いになった土郎さんの上に座りながらテレビを見ているアリシアの姿があった。

その姿を見て顔を覆った。

「何やってんの……!?!」

『あ、アクロさん……じゃなくて今はリョーヤだったね?おはよー!!これは純然たるゴーストカースト決定戦の結果による物だから!!』

『ハツ!!ち、違うんだ両夜君!!これはゴーストカースト決定戦に負けたからこうなっただけで僕の趣味じゃないんだ!!決して桃子との生活を懐かしんでなんかいないからね!!』

「もう取り繕えてねえよ……クツソガバガバで語るに落ちてるじゃねえか……」

土郎さんが慌てて否定しているがアリシアに肘を落とされてどこか嬉しそうに呻いている時点でギルティである。もつともアリシアからされる行為に喜んでいいるのではなく、その行為から生前のことを思い出して喜んでいいるのだと思われるが四つん這いになって幼女に乗られて喜んでいいる成人男性という絵面のせいでどうすることも出来なかった。

「ちよつと出てくるわ。ごゆっくり……」

『いつてらっしやくい』

『違う、違うんだ……!!言い訳を!!釈明の機会をくれ!!両夜君……!!』

尊敬していた大人の知りたくもなかった一面から目を逸らし、土郎

さんの未練がましい声とアリシアの笑い声を聞きながら家から出た。

海鳴は海に隣接しており、そのためか早朝になると稀に霧が出る事がある。今日はその稀な日だったようで辺りには霧が立ち込めていたが視界に困る程の濃度ではないし、公園までの道は覚えているので邪魔にはならない。そうやって数分ほど歩き、辿り着いた公園にはフェイトが先に来て待っていた。

そしてフェイトの側にはアルフと、そしてプレシアの姿があった。

アルフが来ているのは予想していたがプレシアの存在は予想外だった。時の庭園にいた時の様な黒いドレスでは無くセーターにロングスカートという有り触れた格好で――何やら気まずそうにしていた。

その姿を見る限りではどうやら洗脳は成功している様だ。もしも成功していなければプレシアがフェイトに対してあのような対応をするはずが無く、そもそも憎悪している彼女と一緒に行動しようだなんて考えない。フェイトの事をアリシアと同じくらいに愛している、一緒にいたい、でも彼女に精神が不安定だったとはいえ虐待してしまったので気不味い。といった具合だろう。

これで失敗していたら隙を見てもう一度プレシアに“教育”をしてやらなければならないかったところだ。

そして、この公園にはフェイトたち以外の気配を感じる。恐らくは管理局の者だろう。フェイトたちの希望を叶える為に外出させた方がいいが目を離すわけにはいかないから隠れていると思われる。認識阻害魔法でも使っているのか姿は見えないが、何かあれば即座に飛び出して来そうである。

魔導師だと彼らには隠しているが、下手な行動を取らなければ問題ないだろうと結論付けてフェイトたちの前に立つ。

「よ、おはようさん」

「あ、リョーヤ……おはよう」

「おはようリョーヤ」

「この子が貴方たちが言っていた子なのかしら？」

「はじめまして、加賀美両夜です」

「フェイトの母のプレシア・テストアロッサよ。私が居ない間、貴方には迷惑をかけたみたいね」

プレシアは凜として、一見してみれば出来る女性の様な雰囲気を見せているものの、さっきの気まずさそうにしている姿を見てからは威厳もクソも無い。思わず吹き出してしまいそうになるのを奥歯を噛み締めて堪える。

「いえいえ、困った時はお互い様ってヤツですよ。こんな歳でストーリーされるなんて経験したく無い事でしょうしね、部屋を貸したただけですけど助けになったのなら幸いです」

「リョーヤ、アンタが敬語使ってるのなんだか気持ち悪いんだけど」

「ア、アルフ!! 本当の事でも言ったらダメな事があるんだよ!!」

「……フェイト、それはフォローになっていないフォローだからやらないでくれ」

「その……別に敬語なんて使わなくても良いわよ?」

「ああ……うん、そうさせてもらおうわ」

一応年上の人間なのだからと敬語を使って話していたのだがどうやら不評だったらしい。だけどアルフからのストレートな物言いよりもフェイトの優しさの方が心にくる。本人は諫めようとしているのかもしれないが、本当の事でもと言っている時点で彼女も同じよう

に思っていると自分から告げていることになる。

プレシアの優しさがちよつと嬉しかったが、さっきの気まずそうにしている姿を思い出して吹き出してしまう。

「さて、フェイトは話があるって言ってたけどちよつとこつち来い」
「待ちなさい、今なんで私の顔を見て吹き出したのかしら？正直にーって、アルフ!?何をするの!?!」

「まあまあ」

プレシアを羽交い締めしながら離れていくアルフを見届ける。どうやら俺たちで話すべきだと判断して、邪魔者になるプレシアを遠ざけてくれるらしい。魔法の使用を禁止されているのかそれとも自粛しているのか、2人は身体強化魔法を使っていなかった。それでは病人であるプレシアがアルフに逆らえる訳がなく、抵抗しているものそのままズルズルと離れていく。

フェイトはオロオロとしているだけだった。

「んでだ、フェイトー」

「り、リョーヤ……?フア!?!」

オロオロとしていたフェイトに近づき、彼女の両頬をギリギリ痛いと感じる程度の力加減で摘まみ上げる。

「ーいつも俺がこの時間帯に起きているからって言っても今日も同じように起きている保証は無いわけだよな?朝早くから電話してくれて……お陰で寝不足なんだけど?」

「ふあ、ふあっへひかんふあふあふあつたから……」

「ん?ん?言い訳をする悪い口はこの口かな?この口なのかな?」

「いふあいいふあいい!!ごめんなさい……!!」

「謝ってるみたいだけど思いの外楽しくなって来たからお仕置きを兼ねてこのまま続行で」
「!？」

数分ほどフェイトの頬をこねくり回し、頬から手を離す。肌質なんて同じ物だと考えていたのだが、愛歌のそれとは違った感触が面白く感じてしまい、ついついやり過ぎてしまった。

「うう……リョーヤ酷いよ……」

「反省してないみたいだなーもうワンセット行つとくか？」

手を頬に伸ばそうとするとフェイトはビクツと肩を跳ねあげて俺から距離を取った。余程こねくり回されるのは嫌だったらしく、涙目になっている。

その姿にゾクリと、暗い愉悦が走った。

「リョーヤ!!顔が怖いよ!!」

「ああ、ごめんごめん。フェイトがイジメられている姿が輝いて見えてな」

「嬉しく無いよ!!」

叫びながら怒っていますと言いたげなポーズを取るフェイトを見て、声を噛み殺しながら思わず笑ってしまう。

ジュエルシードを探索している間の魔導師として活動している彼

女は、俺の家に来て暮らしていた彼女は、自分を押し殺している様に見えた。理由もわからずにプレシアからの命令を実行しているだけの、まるで人形の様な有様だったのだ。

しかし、今の彼女は自分を押し殺す事なく曝け出せている。俺が与えた理不尽に対してちゃんと怒ることが出来ていた。

その姿を見るだけで、俺が裏でこそこそ活動してプレシアを生かしている価値があつたと思う。

「で、引っ越すって言ってたけど何処に行くんだ？」

「……遠いところ。今までみたいに一緒に遊んだり、気軽に会ったり出来なくなるくらいに遠いところに行くんだ」

「そっか……」

時空管理局の本拠地はミッドチルダにあるので、フェイトはプレシア共々そこに向かう事になる。確かにこの世界からミッドチルダまでは簡単に行き来が出来そうな距離ではなかった。

「……手紙、書いてもいいかな？」

「おう、愛歌と一緒に返事書いてやるよ」

「……ビデオレターってのも、やっていいかな？」

「おう、俺たちからもフェイトが嫉妬しそうな程に楽しそうなやつ送ってやるよ」

「……離れたく無いなあ」

「……俺も、友達とは離れたく無いなあ」

フェイトの目から涙が溢れる。俺と離れたく無いと、涙を流す程に別れを悲しんでくれているらしい。生憎と俺は涙の流し方なんて知らないで泣くことは出来ないのだが、もしも知っていたらフェイトと同じように泣いていたのだろうか。

フェイトと過ごした時間は短い物だったが、かなり濃い付き合いだったと言える。桜木の様な共通点があったから出来た繋がりではなく、愛歌の様な特別な出来事があったから出来た繋がりではない。

偶然出会って、出来た初めての繋がり。悪としてあらねばならないのに、助けたいと考えて行動してしまう程に大切な存在になった。

「……また、帰ってくるから……!!時間はかかるけど、必ず帰ってくるから……!!」

「……ああ、待ってるよ。お前とアルフが使ってた部屋、綺麗にしておくからさ、また泊まりに来てくれよ?」

「うん……うん……!!」

愛歌に向けている想いとは違った感情だが、不思議と不快な物だとは思わなかった。それこそ、不要なはずのこの繋がり間違いではないと言いつれる程に。

「なあ、指切りって知ってるか?」

「ユビキリ……?」

「知らないみたいだな。日本じゃ約束をする時に小指同士を絡ませてるんだよ。その約束を守る様になって、ちよつとしたおまじないみたいなやつだよ……また帰って来られる様に、指切りをしよう」

「えつと……どうやるの?」

フェイトに小指を出させ、それに俺の小指を絡ませる。そして御決まりの言葉を教え、せーのと声を合わせ、

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のーます、指切った!」

必ず、また会える様にと約束を交わした。

「……お帰りなさい」

「ああ、ただいま」

フエイトと再会の約束を交わし、別れを済ませて家に帰ると玄関前で愛歌が待っていた。彼女もフエイトが海鳴から……正確には地球から離れる事は知っている。本当だったら電話で伝えたかったのだが起きていないと思い、メールで伝えておいたから。

「フエイト、行っちゃうのね？」

「高町たちと挨拶を済ませたらミッドチルダに向かうそうだ。いつになるかは分からないけど、必ず帰って来るってさ」

「そうなの……だったら2人が使ってた部屋は掃除しておかないといけないわね」

フエイトと会えないと分かっても愛歌は悲しむ素振りを一切見せない。それは彼女が薄情な人間だからでは無い。また会えると信じているから悲しんでいないのだ。

「……そうだな、いつ帰って来ても良いようにしておかないとな」

「もしも2人が帰ってきたらパーティーしましょうよ。ちよつと良いお肉を買って焼肉パーティーなんてどうかしら？」

「いいんじゃないか？結局、あの日は2人とも帰って来なかったせいで残してた肉もダメになったしな」

時空管理局が到着した日に荷物を持って家から出て行ったので2人の為に取りっておいた肉はダメになってしまったのだ。色々と忙しすぎて2人は覚えていないだろうが、帰ってきた時にはみんなで焼肉をするもの良いかもしれない。

「それにしても……両夜、もしかしてまた幽霊が増えたのかしら？」

「なんで覚えてないのに分かるんだよ」

愛歌には魔導師のことを教えるついでに俺の目の事を話してある。そうすれば士郎さんと話していても不思議がられる事はないと考えたからだ。普通ならば見えない存在を見ることが出来る者は忌避されるのだが、愛歌はそんな事はせずに、こんな胡散臭い事を疑いもせずに信じてくれたのだ。

自分も見えないかと目を細くして何もない空間を見ている愛歌の姿をハスターに頼んで写真に撮ってもらった事は今でも間違いではないと信じている。

「なんか、こう私の立ち位置が脅かされる感じがしてるのよー！ーフェイトが来た時みたいに！！私の金髪美少女キャラが！！被ってる私の直感が叫んでるのよ！！」

「マジかよ」

見えていないはずなのに、感じられないはずなのに、愛歌は正確に金髪美少女キャラの存在を捉えていた。なんでキャラ被りに関してこんなにも神懸かり的な直感を見せるのだろうか。ジュエルシードの時に仕事をして欲しかった。

「私の金髪美少女幼馴染ポジションは揺るぎないとはいえ、ここはガツンと言っておかないといけないわね……!!」

意気込んでいるつもりなのか、腕まくりをしながら肩をあげて家の中に入っていく彼女の後ろ姿を見て思わず笑いをこぼしてしまふ。

フェイトがない事で寂しさを感じていたが、俺の日常はそれでも変わらずにあるのだと感じられたから。

「まったく……愛歌、見えないのにどうやってガツンと言うつもりなんだ？」

「……気合いと根性よ!!」

「あらやだ、漢らしい」

無駄に愛歌の漢らしい姿に感心させられながら、俺も彼女の後を追って家の中に入る。

別れた大切な友人との再会を願いながら。

いずれ訪れる決定的な対立を思い描きながら。

その果てでやって来るであろう、俺の望む光景を待ち焦がれながら。

幕間

dirty heart

「……え？」

気がついたら見覚えのない場所にいた。目の前に建つ建物はまるで出来の悪い作品のように継ぎ接ぎでチグハグ。足元はアスファルトでは舗装されておらずに乾いた地面のまま。その上に地面や建物の壁には赤いシミのようなものがこびり付いている。

「落ち着け……落ち着きなさい……私……」

どうしてこんなところにいるのか分からないが、こういう時に慌ててはダメなのは分かっているので胸に手を当て、大きく深呼吸をしようとし……手に心臓の鼓動が伝わらないのに気がついた。

「嘘、私、死んでる……？」

「……イヤイヤ、死んでなんか無いからね？ 混乱してるからってネタに走るのは止めようよ」

冷静さを取り戻す手段として両夜から教えられていたネタに走る行為をした時、背後から声を掛けられた。振り返るとそこには薄い桜色の長髪を靡かせた童顔の女性が立っていた。服装はまるで物語に登場するような魔法使いを思わせるローブを、女性らしい体つきを隠そうとしないで羽織っている。

その為、童顔でありながら凶悪な胸部装甲がインナー越しに曝け出されてしまっている。

「敵——!!」

「うん、今ボクの胸を見て判断したよね？敵じゃないから」

「五月蠅いわよオツパイオバケ……!!」

母親が絶壁なせいで絶望的な将来が予想出来てしまう私の胸に対して嫌味なのだろうか。お母さんはどうしてベストを尽くしてバストを育てなかったのか。そのせいで私の胸の将来が絶望的なのだ。

彼女が何かリアクションを取るたびにプルプルと震える胸。胸が震えてた回数だけ、私の憎しみが増していく。

「まあまあ落ち着いて。どうしてこんなところにいるのか知りたくない?」

そう宥められて、一先ず言われた通りに落ち着く事にする。大きな胸を見ると殺意のボルテージが高まってしまいが、今はそんな事よりもこの場所について知るのが先決だ。深呼吸を何度か繰り返して頭に登った血を下げ、なるべく胸を視界に入れないように気をつける。

「落ち着いてくれたみたいだね？それじゃあまは自己紹介だ。ボクの名前はマーリン。リョーヤの魔術の師匠で、彼の親代わりの事をしていたただの魔術師だよ」

「……マーリンって、アーサー王物語のマーリン?」

「そうそう、そのマーリンであってるよ。別世界のつて付くけど」

魔術師、そしてマーリンという名前から推測出来た人物と同一かを尋ねると、彼女はあっさり肯定した。思わぬビッグネームの登場に頭が真っ白になりかけるが、深く理解してはダメだと判断して「そういうもの」だと納得する。

魔術に関して、そして両夜が別の世界にいた事に関しては既に本人

から教えてもらっているので驚きはしない。最初に聞いた時には信じられないような話であったが、ジュエルシードという現代科学では到底作り出せないような物を見て、そして彼が嘘を言っていないかったので信じる事にしたのだ。

もともと、彼の魔術の師匠で親代わりがアーサー王物語に登場する花の魔術師だとは思わなかったのだけど。

「沙条愛歌——両夜の正妻よ」

「恥ずかしげもなく言い切ったね……!!」

「奥手なヒロインなんて時代遅れよ!!押しして押しして、押しまくって攻めるのよ——人生の墓場までね!!」

アニメとかで恥ずかしがり屋で控えめなヒロインがいるのだけどもあれはふざけているのだろうか。好きだと思っている、だけど恥ずかしくて気持ちを伝えることが出来ない。で、好きな相手がほかの女の子といい感じになったら悲しそうにする事で罪悪感を抱かせてその相手の気を引くって。

そんな事をしている暇があれば羞恥心を捨てて好きだと言葉で伝えるべきだ。行動で示すべきだ。前に両夜が言っていたように、何もしなければ想いは伝わらないのだから。

「それで、ここはどこなのかしら?」

「ここは夢の中だよ」

「夢の中……?」

マーリンからそう言われて、この場所に来る前の事を思い出した。

両夜がベッドに入った時を見計らい、私は一緒に寝ようと彼に提案したのだ。それははじめての事ではなく、何度もやった事なので両夜

は特に悩む素振りをして見せる事なく了承してくれて私はベッドの中に入った。

そして眠りにつき、ここにいたのだ。

「ならここは……」

「リョーヤの夢だね。無意識なのかわざとなのか分からないけどリョーヤの起源でマナカは干渉されて招かれたみたいようだ。ここは彼の生まれ故郷。幼少期に過ごしていた、最低最悪という言葉が生温い様な街だよ」

その時、どこからか男が走って来た。身なりは浮浪者の様にボロボロで、手足はロクなものも食べていないのか痩せ細っている。中東系の顔は恐怖で青くなっていて、その手には赤黒い錆の付いたナイフが握られていて、走りながら後ろを気にしている様だった。

男は進行方向にいる私たちに気付いておらず、このままではぶつかると考えて避けようとしたのだがマーリンに止められる。

そして、男は私たちを通り抜けて走っていった。

「これは夢だけど過去の出来事だ。だからボクたちはこの世界から何もされないし、何もすることが出来ない……まあ、ボクくらいの魔術師になれば干渉なんて簡単に出来るけどね!!」

マーリンがドヤ顔をしながら胸を張る。そのせいでぶるんと効果音付きで胸が震えた。反射的に手を伸ばして忌々しい胸をもぎ取ろうとすると、男が走っていった方向から悲鳴が聞こえてきた。

悲鳴で正気を取り戻して、男の方を見る。すると男は頭から血を流しながら地面に倒れていて、その側には廃材を握った少年が……今

よりも幼い姿の、私と出会った頃の両夜が立っていた。

顔を見られない様になっているのかボロ切れを被っているが、一目見て彼だと分かってしまった。服の下から見える彼の身体は男と同じように痩せ細っていて、その上に暴行でも受けたのか青アザや瘡蓋がいくつもあつてとても痛々しい姿だった。

両夜は握っていた廃材を数回倒れていた男の頭に振り下ろしてトドメを刺すと懐を漁り、財布の代わりだと思われる袋を手にしてこの場から立ち去っていった。

「……なんて世紀末チックな光景なのかしら」

「ネタに走るってことは余裕があるのかな？それとも余裕がないからネタに走っているのかな？」

マーリンが囁し立てるようになってくるが割といっぱいいっぱいなので言い返す事が出来ない。想像してほしい。自分が好いている相手が淡々と人を殺し、当たり前のように財布を奪い、何事も無かったかのように現場から去っていく姿を。普通ならば幻滅し、手のひらを返してしまおうだろう。そうでなくても殺人という罪を当たり前のように犯して何事も無かったかのように振舞っている姿に恐怖を感じ、今まで通りに接する事が出来なくなるに決まっている。

だというのに……私の彼に対する想いは変わっていなかった。

それどころか……強くなっているように感じられる。

「……成る程、異常者である彼が愛した人もまた異常者である、か……異常者同士は惹かれ合うって事なのかな？」

「異常だってことは自覚しているのだけどハッキリと口にしないでもらえるかしら？……ああ、でも両夜と同じだって言われるのは悪くな

いわねーもつと口にしなさい……!!」

「自分の欲望にどストレートだね!!」

いい笑顔でサムズアップをしながらそう言えば、マーリンもサムズアップで返してくれた。ここまでの反応を見て分かったのだが、どうも彼女は私に対して悪感情を持っていないようだ。彼女は両夜の親代わり、つまり将来のお義母さんである。ポイントを稼いでおいて損はないだろう。

マーリンに言われる前から、私は自分が異常者だと自覚している。周囲に両夜と桜木君という突き抜けた人物がいるので時々自分の事が分からなくなるのだが、それでも普通の人間に比べれば十分に異常の域に入っているのだ。

同年代よりも頭が良い……教科書を読めば、高校生で学ぶことだつて簡単に理解出来る。

同年代よりも精神が早熟している……10にも届かず、生理もまだなのに両夜の事を繋がりたいと思ってしまうほどに愛している。

それは異常というしかないだろう。幸いなことに早い段階から自分の異常を自覚していたので優秀で終わらせられる程度に抑えているが、もしも自覚していなかったらその異常性を恐れられて社会から排除されていたかもしれない。

ちなみに両夜は私と同じようにある程度抑えていて、桜木君は惜しむことなく見せびらかせている。普通ならばそれで恐れられるのだが、彼の持つカリスマ性により逆に親しまれるという事態になっている。羨ましいとは思わないが、純粋に凄いと感心した。

「よし、それじゃありョーヤの事を追いかけてようか。このままここにいるとよろしくない光景を見ることになるからね」

「よろしくない光景ってー」

何なの、と続けようとしたのだが、道の陰から小さな人影がー細く、小さ過ぎるのだが、体格からして子供であろう者たちが現れ、男の死体を引きずって物陰に持つて行く光景を見て、何となく察してしまった。

殺された男の姿、そして幼い両夜の姿を見るに、この街では食べ物が足りていないのだと分かる。そんなところで死体が放置されたらどうなるのか……その答えがこれだった。

物陰に隠れたお陰で直接的な現場は見えないのだが、グチユグチユと湿った音が聞こえてしまい、見えない場所で何が行われているのかを想像する手助けをしてくれる。

「ー早く行きましょう!! 迅速に!! あそこを見ないようにしながら!!」

「流石にカニバリズムはチョット無理があつたみたいだね?」

「シヤラップ……!!」

せっかく想像しないように両夜のカッコいい姿を思い出していたというのにマーリンの余計な一言のせいで蒸し返してしまった。

耳を塞ぎ、物陰で行われているであろう精肉作業を視界に入れないように気をつけながら、私とマーリンは両夜の後を追いかけることにした。

マーリンの後ろを歩きながら幼い両夜の後を追う。彼は追っ手を警戒しているのか時折背後を確認しながら、迷路のように入り組んだ街を無造作に、無計画に、だけどしつかりと目的地に向かって歩いていた。追っ手はいないと思っっているが気が付いていないだけかもしれないと考えているようだ。警戒に警戒を重ねた過剰すぎる警戒っぷり。しかし、それも街の有様を見れば納得してしまう。

無法地帯、そう言うしかなかった。

人数は少なかったが、見かけた誰もが周囲への威嚇の為か持っている武器を見せびらかせている。

道端で普通に、当たり前のように殺し合いが行われている。

勝者は死んだ敗者から有り金どころか着ている物を全て剥ぎ取って悠々とその場から立ち去り、死んだ敗者はどこから現れる子供達や手足を無くした大人達の手によって物陰に運び込まれ、その場で“精肉作業”されている。

“精肉作業”を行なっている彼らも弱者である事には変わらず、五体満足でこの街では比較的マトモな体格の大人に見つかれば蜘蛛の子を散らすようにその場から逃げ出していた。

捕まればマトモな扱いをされないことを理解しているからだろう。逃げ遅れた子供の1人が大人に捕まり、その場で犯されていた。そして行為が終われば解放せず、息絶え絶えになっている子供を連れてどこかに立ち去っていく。

両夜はそれを理解していたからなのか人気のない道を選んで進み、時には物陰に隠れて、時には家の上をパルクールのように登って移動していた。

両夜の事を追いかけながらマーリンからこの世界の説明を受ける。

どうやらこの世界は異世界などではなく私たちのいる地球と同じ世界なのだが、時間軸は前に進んでいる上に過去に起きた出来事が違っている、所謂並行世界に分類される世界らしい。

分かりやすい例として織田信長を挙げられた。私たちの世界では日ノ本統一を前にして明智光秀に反逆されて本能寺で打たれた武将なのだが、この世界での織田信長は明智光秀の反逆を跳ね除けて逆に明智光秀を本能寺でフアイヤーし、喜びの敦盛ブレイクダンスを踊りながら日ノ本統一を達成。天下布武の世界進出の最中に病没したらしい。そのせいで徳川幕府は起こらず、そこで行われるはずだった鎖国も無かったようだ。

そして軽く今の時代の世界情勢についても教えられた。

世界のあちらこちらに植民地を有し、角砂糖の代わりに阿片を紅茶にぶっ込んで決まっている英国。

神の教えを広めると同時に弾薬と爆薬をばら撒いている北歐の宗教国家。

重火器をもともしないマジカル武術を研究、開発、研鑽をしている修羅の国アジア。

ロシアでは異常気象により年中冬將軍が滞在して人が生きていられる環境では無いので国家は存在せず、なのにどこからか沸いている半裸のモヒカンがボルシチとウオツカで身体を温めながらヒヤッハーしている。

国土全域を核兵器で完全武装して世紀末帝王になっている超物量国家のアメリカ。

訳が分からなくなった。特に難しい事を言われていないはずなのに頭がマーリンの言葉を理解する事を拒否していた。

確かに英国は阿片戦争で阿片をばら撒いていたし、宗教は異端だな

んだと理由をつけて虐殺をしていたし、アジアには太極拳や空手といった独特の武術が伝わっているし、ロシアは寒くてウオツカはロシア語で水を意味する言葉だし、アメリカは第二次世界対戦で核兵器を開発していた。でも、だからと言ってどうしてその方向に伸びてしまったのか。世紀末チックどころか頭の先までドツプリと黙示録に浸かっている世界観だった。

こんな世界はすぐに滅びるだろうと思っていたのだが、マーリンはそう考えていないらしい。確かに何か切欠があれば坂を転げ落ちるように人類どころか地球そのものが死の星になるのだが、互いが互いを問題視しているからこそ奇跡的に均衡を保っていると言っていた。

どこかが弱みを見せれば英国は阿片を送り、宗教国家は救済のために布教しなきやと言いなながら弾薬と爆薬をばら撒きに向かうし、アジアは荒れて修羅場になるのを予想して鍛錬のために人を送り込んで泥沼化させようとするし、アメリカは取り敢えず核撃つとけばいいだろ？的な思考で核兵器を地球の滅亡が決定してしまう過剰な量を放つらしい。

どこかが動けば地球が減ぶと理解しているから、一步間違えれば滅びてしまうような世界で均衡が保たれているらしい。

ちなみにモヒカンの世界のどこにでも湧き、定期的に駆除しなければ徒党を組んでボルシチとウオツカを抱えながら火炎放射器を振りまいてヒヤツハーするらしい。彼らは害獣か何かだろうか。

ならばここは一体どこなのかと聞けば中東だと返された。中東といえど私たちの世界でも問題が発生している地域だと覚えているが、この世界の中東はそんなレベルではないらしい。

曰く、世界のゴミ箱。世界から見捨てられた土地。

中東という地名で呼ばれていたのは遠い昔の話で今はただの土地としか見られておらず、生み出される工業廃棄物や表社会どころか裏社会でも生きられない問題を抱えた人間が集められる土地らしい。

国としてあるわけではないので法律は存在せず、「弱肉強食」というシンプルな掟だけが存在している無法地帯。

それが、両夜が1度目の生を受けた場所だった。

マーリンからこの世界の説明が終わったところで両夜は足を止め、周囲に誰もいない事を確認してから近くにあったドアを一定のリズムで叩く。それが合図だったのだろう、鍵が退かされる音がして扉が僅かに開き、両夜はその隙間に身体を滑り込ませて家の中に入った。

扉には再び鍵がかけられて中に入れなくなったのだが、それは普通ならの話だ。夢を見せられているだけの私たちは壁を幽霊のように通り抜けて家の中に入る。するとそこにいたのは細身であるがしっかりとした身体つきの、最低限の部分しか隠していない半裸の女性に抱き締められている両夜だった。

即座にその女性に攻撃しようとするが、マーリンに止められてしまう。

「ドイテ、アイツ、ナグレナイ」

「まあまあ待たさない。大好きなリョーヤが他の女性に抱き締められてイラつくのは分かるけどさ、ちゃんと状況を把握した方が良く思うよ。それにどうやって夢の中の人に攻撃するつもりなのさ?」

「そこは、ほら……気合いと根性でどうにかするのよ」

「ちよつと脳筋過ぎやしないかな?」

マーリンに諭されて渋々握り締めた拳を下ろし、言われた通りに状況を把握しようとしたのだが、どうやら女性は両夜に欲情して襲い掛かった訳ではないらしい。

何故なら両夜に抱き付いている彼女の顔は、酷く安堵したものでしきりに涙を流して同じ言葉を呟いていたから。

「……何を言っているのかさっぱりだわ」

「言葉が違うから分からないよね？ 簡潔に説明すると彼女はこの店のオーナーで、さっきの男に店の売り上げを盗まれてそれをリョーヤが取り戻したんだよ」

「お店って……やっぱりあっち系のお店なの？」

「そりゃあ当然。アジア生まれなら兎も角、普通の女性は弱い生き物だ。そんな彼女たちでは弱肉強食が掟のこの土地では生きていけない。だから強い者の庇護下に入り、身体を売る事で生きる為の糧を得ているんだ。リョーヤが売り上げを取り戻してなかったら、この店の女の子たちは居場所を失っていただろうね」

そうなたったら彼女たちはどうなるのかなんて、散々この土地の有様を見てきたのだから簡単に分かっってしまう。同じ女性としてそんな終わり方を迎えるのは嫌だった。

店の売り上げを取り戻すことで彼女たちを救った両夜だが、それは善意では無いのだろう。何やら言いながら彼は女性から離れ、女性はそばに置いてあった袋を両夜に渡していた。彼が中身を確認するのに乗じて後ろから覗き込んでみれば、袋の中身はパンや瓶詰めされた水が入っていた。

それを受け取って、何も言わずに両夜は店から出て行く。行きと同じように付いてくる者を警戒しながら歩く彼だったが、その足取りは不思議と浮き足立っているように思えた。数十分歩いた先にあつた

のは完全に崩壊している廃墟。瓦礫と瓦礫との間を器用に通りながら奥へと進む彼に付いて行く。

すると奥は広々とした空間が広がっていて、そこには金髪の三白眼の少年が差し込む日差しを灯りに本を読んでいた。

視界にノイズが走る。何かが起こる前触れかと思い身構えるが、マーリンは慌てるそぶりを見せない。数秒もすれば視界が落ち着き、時間が進んだのか夜になっていた。

明かりとなる太陽が沈んだからか辺りに人気は無い。そんな誰もいないと思ってしまうような空間で、両夜と金髪の少年は廃墟の上に座りながら夜空に浮かぶ満月と月を眺めていた。

「――」

「――、――ツ!!」

何を言っているのか分からない、だけど何か大切な事を言っている。それを直感で理解し、分からなくても良いから何を話しているのか聞こうとして2人に近づき――

「――そこまでだ」

――あと少し、そんなところで横から手が伸びて遮られた。視線を向ければそこには両夜が大人になったらこうなるのでは無いかと思える成長をした男性が立っていた。

「こいつが誰なのか、一体どんな話をしているのか気になるだろうがもう目覚めの時間だ。悪いが知りたかったら直接俺に聞いてくれ」

「貴方、もしかして――」

両夜なのかと聞こうとしたが、視界が歪んで言葉が続かない。眠る時に感じたことがある落ちるような感覚とは違う、逆に浮かび上がるような感覚。

最後に見ることが出来たのはイタズラが成功した子供のような笑みを浮かべる両夜らしき男性と——何故かドヤ顔で胸を押しつけながら彼に抱き付いているマーリンの姿だった。

「——巨乳死すべし……!!」

「朝一から平常運転してるなあ……」

跳ね上がるようにして目が覚める。辺りを見渡せばそこはさつきまでいた無法地帯などでは無く、私が眠っていた両夜の部屋。クローゼットの前には寝間着からジャージに着替えている途中で半裸の両夜の姿があった。

その姿を脳内に保存するのを忘れない。

「……おはよう、両夜」

「ああ、おはよう。気分はどうだ？」

その言い方から察するに私がどんな夢を見ていたのか分かってい
るのだろう。つまり、あの夢は彼が自分の意思で見せたものになる。

「世紀末どころか黙示録突入してる世界見せられて憂鬱なだけで、

貴方の過去を知れたから問題ないわーっむしろ、今口直しの感覚で両夜の裸体を眺めてるから」

「恥ずかしがるような物ではないからなーっ存分に眺めてくれ」

半裸の状態でポージングをする両夜の身体は同年代の子供の身体に比べて引き締まっている。前に触らせてもらった事があるのだが、彼の筋肉は硬い物では無く、しなやかで程良い弾力があった。

その時の事を思い出して涎が溢れそうになる。

「あの先について知りたかったらもう少し待ってくれ……俺の心の準備的な意味で」

「あそこで止められると気になってしょうがないのだけど……そこは我慢してあげましょう。その代わり、ちゃんと話すって約束しなさい」

あの時の光景が彼にとって大切な瞬間であると分かっている。なので待つ事にした。彼の口から、彼の意味であるあの光景について教えてくれる日が来るのを。

私の大好きな彼が、一番大切にしてくれるのを明かしてくれる日を。

「うーん……つまらない程に異常が無くて安定してるねえー！ちよつとだけでも良いから、軽く暴走して死にかけてくれないかな？」

「脊髄ぶっこ抜くぞテメエ……!!」

愛歌を検査した結果、モニターに表示される夥しい数の数字や文字を一目見ただけで全て把握し、安定している事に残念そうにしているジェルにキレる。彼の性質的には変化が無くてつまらないと感じているだろうが、俺たちからしてみれば安定しているに越したことは無いのだ。

ジュエルシードに関する騒動が終わりを迎えて、フェイトたちと時空管理局の人間が去ったが愛歌の容体は変わらない。細胞の一つ一つが魔力を貯蔵する機能を持ってしまったが為にリンカーコアを持たない魔導師と言える状態のままである。幸いな事にこれまでは安定しているので異常は起きていないのだが、これから先がどうなるのか分からない。出来る事ならば治療して普通の人間に戻してやりたいのだが、どうやって治せば良いのかすら分からず、下手に手を出したら悪化するかもしれないので現状ではそのままでいさせるしか無いのだ。

「まあ、そういう意味ではカガミきゅんの方が私としては興味を引かれるんだけどね」

「眼球引っこ抜いて欲しいのか？」

「引っこ抜かれても義眼にすれば良いだけだからー」

そう言いながらキーボードを操作し、愛歌の資料とは別の資料をモニターに映し出す。

「さつき調べた君のデータなんだけどさあ……これはどういう事なんだろうね？前に調べた時には無かったはずの物が身体中に張り巡らされている。まるで神経のようだね。しかもその神経自体がリンカーコアの生み出す魔力とは微妙に異なる魔力を生み出している!!
こんなの初めて見たよ!!」

「神経が魔力を、ねえ……」

ジェイルの言う神経とは魔術回路である擬似神経の事だろう。ほかに魔力を生み出せるような存在には心当たりはない。しかし、前回調べた時には魔術回路は確認されなかった。それなのに今回はしっかりと確認されてしまった。悪性情報の使い過ぎか、それともこちらの世界の魔法が原因なのか、どちらにしても身体には異変は無いので大丈夫だと思われる。

「俺のデータは好きにしてくれて構わないけど愛歌の方は気をつけてくれよな?」

「安心してくれたまえ、頭の前までマッドサイエンティストだって自覚している私だが契約は守るさ……いやはや、つまらない時代に生まれたと思ったが未知の出来事に出会えるとはなあ!!」

高笑いをしながら俺と愛歌のデータを嚴重にロックして保存している辺り、本当に俺たちに対して深い興味を持っているようだ。本人が言ったようにジェイルはマッドサイエンティストであるが、だからこそ貴重な研究材料に対して真摯に接する。鶏を殺せば鶏肉が得られる代わりに卵が得られないように、俺たちを解剖すればそれ以降の生体データが取れなくなると理解している。

俺たちがジェイルの興味を引く実験材料である限り、ジェイルは俺たちを死なせることは絶対にしないだろう。

「そういえば頼んでた物作った？」

「ん？ああ、あれの事だね？製作は終わっているから後はマスター登録だけだよ」

ジェイルが手元にあつたベルを鳴らすと空気の抜ける音と共にドアが自動で開き、白熊が二足歩行で歩きながらカートを押して入ってきた。

「二足歩行出来るのかよ」

「出来ることは多いに越したことは無いからね。そして、これが注文の品だ」

白熊に押されるカートの上に乗せられていたのは一本のレイピアのような形状の剣と、20本の小型のナイフ。刀剣類であるという以外にも外見が機械的な見た目をしている、そしてレイピアの方には刀身と柄の間にリボルバーが、ナイフの方には握り手にマガジンが付いているという共通点があつた。

「剣型のデバイスにナイフ型のデバイスだ。細かい指示があつたのは外見だけだったから細部には私の趣味全開で弄らせてもらったよ。レイピアの方は魔力変換機能を組み込んでいて電気に変換することが出来る。ナイフの方は同一規格に仕上げたけど、一本一本にAIが組み込んである。そしてどちらともカートリッジシステム搭載だー作っておいてなんだけど、戦争でもやるのかい？」

「俺としては頑丈なだけのデバイスでも良かったんだけど、お前がここまで仕上げたんじゃないか」

事の始まりは前の検査の時にジェイルから持ちかけられた話。与えられたものには相応の対価を払わなくてはならないと彼は言い出し、何か欲しいものはないのか尋ねてきたのだ。俺たちとしては診てもらえているだけで助かっているものでそれ以上は必要ないのだが、

ジェイルからすればその程度では得られるデータの対価として足りないと言っていた。

なので、デバイスを作ってもらおう事にしたのだ。

ハスターとカスパールの二つのデバイスを持っているのだがハスターはサポート特化で戦闘用では無く、カスパールは遠距離攻撃しか出来ないで近接戦に弱い。その上A、s編になれば大人の姿に変身する前に見つかってそのまま戦闘になる可能性がある。そうなればカスパールを使わなければなくなり、時空管理局に見つかった時に大人の俺アクロ・ダカーハと俺が同一人物ではないかと怪しまれる事になる。

最低でもA、s編が終わるまで、出来る事ならばstrickers編が始まるまでは俺とアクロ・ダカーハが同一人物である事を隠して行動していきたい。なので今の姿で使う用のデバイスと、アクロ・ダカーハとして使うデバイスの二つが欲しかったのだ。

そうしてジェイルに頼み、完成したのがこの二つのデバイスだった。レイピア、ナイフ20本を振るって具合を確かめてみる。レイピアの方は今の俺には重たく、扱い辛く感じられ、頼んでいた通りに大人の時に合わせて作られているようだ。対してナイフの方は小振りなのも相まって今の俺でも問題なく使うことが出来る。

「流石はジェイル、文句無しの仕上がりだな」

「そりゃあ特注品ワンオフの方が文句ないのは当たり前さ。量産品は誰が使う事になるのか分からないから誰でも使えるようにしなきゃ行けないけど、特注品ワンオフの方はそこを気にしなくてもいいからね。量産品を作るよりも楽しくやらせてもらったよ」

ジェイルの言う通りに、使う人間に合った調整をされている方が絶対的に使いやすい。弘法筆を選ばずという言葉がある。どんな物で

も一定以上のレベルで使い熟せるのは確かに凄いが、ジェイルの言ったように合わせて作られた特注品ワンオフならばそれ以上のレベルを発揮することができる。

「さあ、その子たちに名前をつけてやってくれ」

「その子ってなんだよ?」

「その子たちは私が作った作品だ。つまり、私の子供だと言っても過言ではない。ーということは私の子供たちがカガミきゅんの元に婿入りしたと言う事じゃないか……?!」

「ちようど試し切りがしたいと思つてたところだ……!!」

レイピアに魔力を流し、それが本当に電気に変換されている事を確かめながらジェイルに向かって振るう。魔法で再現されているからなのか本来の物よりも遅いとはいえ雷の速度は人間の反応出来る範囲を超えてジェイルに迫りー間に入ってきた影に防がれる。

「確かに私は作品を作り上げた。そしてそれを君に渡したーならば、次は作品の性能テストだ。相手はこちらで用意してあるから存分に戦つてデータを収集させてくれ」

間に入ってきたのはープロテクターを着用したパンダだった。

目を擦つて再度確認してもパンダだった。

急所を守るためにプロテクターを着用し、腰のベルトから剣と銃をぶら下げているパンダだった。

白熊、熊、月の輪熊に続く新たな熊が登場していた。

マジかよ、こいつの頭どうなってるんだと思うが、ジェイルがわざわざ用意したとあつてそのパンダはマトモなパンダでは無かった。

少なくとも後に動いていたのにレイピアの放った雷に追いついて無傷でそれを防ぎきっている。動き方も武術でもインストールされているのか、前世の修羅の国アジアに生息しているマジカル拳法家の動き方と良く似た動きをしていた。少なくとも近接戦に関しては俺の上のレベルであるだろう。

「パンダか……相手をするのなら人型の方が良かったんだけどなあ……」

出来る事ならば対人戦の戦闘経験が欲しかったのだが、わざわざ用意してくれたのでそんなに強くは言えない。少しだけガツカリしたように肩を落とすリアクションを試してみせる。

しかし、本気でガツカリしているわけではない。

ジェイルがデータを欲しがっているように、俺も戦闘経験が欲しいのだ。

パンダだとはいえ、ジェイルが用意したのだから相当に戦える仕上がりになっているに違いない。

「レイピアの方はナルカミ、ナイフの方は……一本一本名前つけた方が良いのか？」

『名称設定完了ー！ー当機はこれよりナルカミとして起動します』

『出来る事ならばそれぞれに名称を着けて頂きたいのですが、手間だと感じるのなら総称でも構いませんー！ー何本か言う事を聞かない物が現れるかもしれないでしょうが』

「気難しい過ぎだろ!!もつとナルカミの方を見習えよ!!」

『これはこれは、新入り風情がマスターに意見とは……マスター、少々時間を頂いてもよろしいでしょうか?』

「ああ……うん。ジェイルー、悪いけどハスターのお話が終わるまで待ちでお願い」

「上下関係の構築は当然の事だからね!!なら30分後に実験室に来てくれ、それまでに機材の用意しておくから」

そういうとジェイルは白熊が運んできたカートの上に乗り、白熊に押されて部屋から出て行った。

音声機能はオフにしてあるのか無言だが、何かしらのやり取りが行われているのかハスターとナイフ型のデバイスのコアはチカチカと激しく点滅していた。ーいや、よく見ればナイフ型のデバイスの方はモールス信号で俺に助けを求めている。本当にAIかよと思ってしまう。

対するナルカミの方は完全に指示待ちの態勢で、語りかけるどころかコアを点滅させて俺の気を引こうともしていなかった。

機械なのに感情豊かだなあ、と現実逃避のように思いながら、次第に弱々しくコアを点滅させているナイフ型のデバイスの名前を考える事にした。

「あゝあゝあゝ涼しい〜……」

汗のせいで身体に張り付いた服の袖を掴んでパタパタと仰ぎながら室内の冷気を服と肌の間に入れて火照った身体を冷ます。現在の季節は夏、前世のように異常気象が起きているわけではないがクーラーなしでは普通に過ごすのも厳しい季節になった。

そんな時にクーラーが壊れたのだ。冷気の代わりに黒い煙を吐き出すという壊れ方で。

その気になれば暑さを無視して活動出来るのだがその気にはなれず、業者に頼んで修理をしてもらっている間、図書館に避難することにしたのだ。技術力に関しては前世の方が数歩先を行っているのだが、安全の面では今世の方が優れている。仮に前世の世界にこの図書館が現れた場合、本は薪になり、建物は資材を得る為に解体されるか沸き出てきたモヒカンの住処になるだろう。

「……あれ？加賀美くん？」

図書館だからなのか小さな声で名前を呼ばれたので顔をそちらに向けると、そこには紫色の長髪を靡かせた少女が本を抱えて立っていた。友人と呼べる粹組みに入っている数少ない人物だったので気怠げに片手を挙げて応じる。

「よお月村、奇遇だな」

「加賀美くんこそ図書館にいるなんて珍しいね。どうしたの？」

「家のクーラーが壊れたんで避難してきた。付けた瞬間に黒い煙を吐き出してさあ……消防が駆けつけて来たから土下座して謝り倒した」

「そ、それは何というか……」

笑い話のつもりで話したのだから笑ってくれればいいのに、月村は困ったようにはにかむだけではつきりと笑うような事はしなかった。そういう反応を見るだけで彼女が善人なのだど理解できる。桜木なら内外共に間違いなく大笑いするだろうし、愛歌も桜木程ではないが笑う姿が見えている。

「沙条さんの姿が見えないけど、今日は1人なの？」

「ああ、親戚の結婚式があるからってそっちに行ってる。俺も誘われたんだけど流石に関係者じゃないからって断らせてもらった」

「普段の加賀美くんと沙条さんを見てると関係者になるのは時間の問題だと思うんだけど……」

そう言われて態とらしく笑ってみるがそれ以上は何も言えなかった。何せ、そうなる未来しか想像出来ないから。愛歌はその気満々だし、綾香は愛歌に言わされているのか、いつになったら本当のお兄ちゃんになるの？とか純粹な眼差しで言ってくるし、沙条さんに至っては俺の事をガチで息子扱いしている。気がついたら入籍していたなんて事になってもおかしくなかった。

だけど、それも良いなあと考えている。俺のやらなくてはならない事を全て終え、その結果に満足し、生きているのなら、そう言った人生を送るのも悪くない。可能性はあまりにも低いが決してゼロではないのだから。

「と、まあそういうわけでクーラーが直るまではここにいますつもりだ。なんかオススメの本があったら教えてくれないか？」

「加賀美くんって本当に本が好きだよな。どんなジャンルがいいの？」

「別にこれといった好みは無いな。気になったから読むって感じだ

し」

前世では本なんて治安の良い土地以外では見かける事は無く、あつたとしても薪代わりとしてしか使わなかった。幸いに文字や会話に会話に関してはマーリンから教わっているので日本語と英語の読み書きと会話には困らないが、本を読むという事自体が面白いので読んでいるという感じである。

そうやって学校の図書室に入り浸っている時に月村と出会い、本について話し合う内に仲良くなったわけだ。

「だったらこれとかどうか？短編集だからサクサク読めるし、作者さんの言葉遣いが独特で面白いよ」

「……短編集？電話帳や辞書並みに分厚いんだけど」

月村に勧められたのは読むだけではなくて鈍器としても使えそうな程の分厚さを誇る一冊の本。巻末のページを確認すれば3桁を超えて4桁の数字が刻印されていた。

手渡された時にずっしりとした重さと共に読む事に対して忌避感が生まれるのだが、どうせ暇だし時間を潰すには丁度いいかと勧められた本を読む事にした。

「クツソ……普通に面白かったことが非常に腹立たしい」

「こんな時間になるまで集中して読んでたからね」

忌々しい太陽が沈み出した頃になつて図書館から出る。今まで冷房の効いた室内にいたせいで、体感ではさらに暑く感じてしまうがそれでも昼間の気温に比べれば随分とマシになつていた。

最初はあまりの分厚さにドン引きしながら月村から勧められた本を読んでいたのだが、勧められた理由の通りに短編集だった事と独特な言葉遣いに世界観が面白くてすぐに読み終わり、その作者の他のシリーズまで読み込んでしまった。最初の本は最新作だったらしいが、何故か最初期の方は普通の本よりも若干分厚いだけの厚さだったのが納得出来ない。

「私は塾があるけど、加賀美くんはどうするの？」

「クローラー直つただろうし、そろそろ愛歌たちも帰つてる頃合いだから家に帰るつもり。どうせ帰り道の途中だろうし、送つて行こうか？」

「迎えが来るから大丈夫だよ……それよりも、私といると沙条さんが嫉妬しちゃうんじゃないかな？」

「するだろうなあ……だけど、月村放つて帰つたところで『女の子には優しくしないとダメでしょ!!』ただし、私以外には甘やかしたらダメだからね!!」って愛歌に怒られるだろうし」

「沙条さんって、嫉妬深いのに気遣いが出来るというか何というか……」

月村が困つたように笑っているが、それを否定する事は出来なかつた。愛歌の本音としては自分以外の女性に目を向けて欲しくないだろうが、自身と俺の異常性を分かっているが故にそれではダメだと理解している。なので、基本的に人として当たり前前の行動をする。例えそれが愛歌にとって不快な結果に繋がるとしても、現代社会で生きるのと決め、それから爪弾きにされない為にそうするしかない。

でも、嫉妬はされるので後でご機嫌取りをしなければならぬのが理不尽だと思うが。

だけでもそれはそれで可愛い愛歌の姿を見ることが出来るので役得だと思ふ事にする。

「迎えが来るならそれまで待つてやるよ……あ、飴いる？」
「うん」

迎えが来るのなら送る必要は無くなるが、それが来るまでは一緒にいてやる事にする。ジュエルシードが無くなったことで魔法関連の厄介ごとは無くなったはずだが、赤城と御剣の転生者たちがいらぬちよつかいをかけないとも限らない。

黒須は月村の友人だし、紳士なので問題なし。桜木は基本的に傍観に回ることを良しとして登場人物たちとは関わらないスタンスを取ってる。残る1人も手を出すような人物ではないと調べて判断しているので心配していない。

近くにあったベンチに腰をかけ、タバコを吸いたくなった時の衝動を誤魔化す為に買った棒付きの飴を口に咥える。俺は青リンゴ味で、月村はイチゴ味だった。

飴玉を削るように舌で転がしながら、口の中に広がる甘味に頬を緩める。前世での食糧事情が原因で食に飢えているという自覚はある。だからこうしてマトモな食べ物を食べられているという事実だけで、頬を緩めてしまうのだ。

隣に座る月村は飴を舐める事に集中しているのか話しかけることをしなかった。近い距離にいらるといふのに無言。だけど気まずさは欠片も

感じず、どこか心地良いものを感じている。

ああ、悪くないーだけど無粋だなあと、周囲の雰囲気に変化したのを感じながら思う。

夏の夕暮れどきで、暑さが鬱陶しいとはいえ人が外を出歩いている時刻だというのに、周囲から人の気配を感じない。いや、感じる事には感じるのだが、俺たちを包囲して逃がさないようにしていることから一般人の物ではないと判断出来る。

《ハスター、これは魔法か？》

《いえ、索敵したところここに通じているルートが全て塞がれていません。魔法では無く人力によるものです》

結界を張られた様子も無く、ならば魔術のような手段によるものなのかと若干の期待を込めてハスターに確認したのだが違うようだ。残念だと内心で肩を落しながら、隣で幸せそうに飴を舐めている月村に視線を向ける。

ここに繋がる道を封鎖し、包囲しているという事はこの場にいる人間が目的だと理解している。俺がこの世界の人間に狙われる理由は無い。ならば狙われているのは月村という事になる。確かに彼女の実家はそれなりの名家であるが、だからといってこんな手間をかけてまで狙う必要がある人物なのかと聞かれれば首を傾げるしか無い。

道を封鎖して人の往来を断ち、夜でも無いのに堂々と動いているという事は警察を無視出来るだけの、あるいは警察を抑え込める事が出来るだけの力があるという事である。そんな力を持つ者が、月村1人を狙う理由が分からない。

それを疑問に思ったところでもう遅い。急いでこの場を離れようとしたところで、包囲は完成してしまっている。ハスターの索敵の結

果を見せてもらったが抜け道は存在せず、しかも屋根の上にまで配置しているという徹底っぷりだった。力任せに包囲を突破したところでその行動を目撃される事になってしまふ。現時点で加賀美両夜を目立たせたく無い俺としては、その選択を選ぶ事は出来なかった。

もつとも、俺と月村に被害が出る場合ではその限りでは無い。魔法、魔術を使う気はないが、全力で抗わせてもらうつもりだ。愛歌の暴走、月村は高町の友人であるなどの理由は幾らでもある。――が、そんな建前がなくても俺は月村を助けるだろう。

何故なら、友達を助けるのは当たり前前的事だから。フェイトの時とは勝手が違うが、やれる事はやるつもりだ。

そうして啜っていた飴玉が溶けきり、棒だけになった辺りで包囲していた気配が近寄ってくる。視界に入ってきた者たちは街に似つかわしくない迷彩服にアサルトライフルと特殊部隊を思わせる出で立ち。平和な今では決して目にして良い存在ではなかった。

「月村すずか、そちらの少年と一緒に来てもらおうか」

アサルトライフルの銃口を突きつけられながら、彼らのリーダーと思わしき人物が口を開く。

ただの少年であることを装っている俺と、多少運動神経の良い程度の少女でしか無い月村にその命令に逆らうという選択肢は存在せず、大人しく従う以外に無かった。

現代の日本では滅多にお目にする事の出来ない銃を突きつけられて命令に逆らえるはずが無く、俺と月村はリーダーと思わしき人物の指示に従う事にした。俺たちが無抵抗で素直に指示に従うと判断したのかりーダーは無線でどこかに連絡を取る。その間も周りの者たちは油断なく銃をこちらに突きつけていた。

前世での死んだ時の記憶が蘇る。黒塗りのボックスカーに腕を縛られた状態で乗せられ、数十分の時間の移動で辿り着いた先は豪邸だった。移動時間と体感した車の走行スピードからここは海鳴の外だと思われる。周りには民家は無く、木々が生い茂っているので恐らくは山の中。門の前に立つ警備員達は銃こそ持っていないが、俺たちの姿を見ても顔色を変えなかった事からグルだと判断出来た。

そうして豪邸の一室に月村と共に監禁される。見張りが付けられている上に腕を縛られて監禁されているとは言え部屋は豪華なもので、何をしてはいけないとも言われていない。試しに立ち上がって身体を解すふりをして、見張りの者たちが僅かに目を向けるだけで何もされなかった。

「ごめん……ごめんね……私のせいで……」

奇妙な拉致に目的を凶り損ねていると、月村が泣きながら謝ってきた。彼女にはこうなった原因に心当たりがあるようで、俺と一緒に連れてこられた事を悔やんでいるようだ。

「泣くなよ、俺が悪くないはずなのに俺が悪いみたいになってるじゃないか……ほら、あそこの見張りのやつ目の目を見てみるよ。俺が月村のことを泣かせたっていう目をしてやがる」

慌てて目を逸らしたが見逃さない。あの目は確実に俺が悪いと無言で訴えていた。確かに女を泣かせるような男は良い印象を与えないが、だからといって全てが俺が悪いように見られるのは納得がない。

近いうちに、何かしらの報復をする事を誓う。

「取り敢えず、今すぐに何かされるわけじゃなさそうだからこのまま大人しくしといたら良いさ。誘拐って事は俺たちは人質だ。脅す側の弱みなんだからそう簡単には殺されないだろうし」

テーブルの上に置かれていたポットに茶葉を入れ、電気ポットのお湯を注いで紅茶を淹れる。正しい淹れ方なんて知らないので適当だが、茶葉が良かったのか雑な淹れ方でも甘く優しい匂いを漂わせる。

「何でもかんでも自分が悪いって追い込むのは月村の悪癖だな。多少は開き直った方が良いぞ。あ、砂糖とミルク無い？無いの？お茶受けは？そつちも無し？そつかあ……」

「……加賀美くん、ちよつと落ち着き過ぎじゃない？」

「こんなの、昔に比べたら危機的状況にもなりやしないからな」

昔と言っても当然今世の話ではなくて前世の話だが。そもそも前世では人攫いなんていうものは死と同じ意味を持っていた。見つかって逃げられなければその場で犯された上で殺されて食料にされる。運良く犯されて生きたまま連れ去られても、連れ去られた先で手足と声帯を切られて何も出来ないようにしてからオモチャのように扱われる事になる。それに比べたら今の状況なんて優し過ぎるくらいだ。拉致や誘拐なんてものではなく、少し強引にお茶会に誘われたように思えて仕方がない。

そんな俺の態度を見てか月村は呆氣に取られて泣くのを止め、少しだけだが笑い声を零した。

「そうそう、泣くよりも笑ってた方が絶対に良いつて。折角可愛いんだからさ」

「か、可愛いって……そんなこと言っちゃって大丈夫なの？沙条さんがこのこと知ったら……」

「……ゆ、誘拐なんて事態だから。許されるはずだから」

自分の言った事を思い返し、完全に口説いていると理解して冷静になるように努めながら出た言葉は誤魔化せない程に震えていた。月村が可愛いと言われて照れて泣くのを止めたので狙い通りなのだが、代わりに俺の危機が出現してしまった。もしも愛歌にこのことが知れたら、間違いなく桜木のされた触手プレイよりも酷いことになるだろう。

誘拐されて、動揺していた月村を落ち着かせる為にという理由で許してもらえる事を神に祈るしか無い。

『無理だと思うぞ？あの小娘は嫉妬深い。仮に事情が事情だからと納得されたとしても、それはそれと言われて触手責めされる事になるだろうな——ハッ、ザマア』

神頼みしていたら邪神が聞き届けてしまったようで、有り難い神託などでは無く無慈悲な死刑宣告が返ってきた。

救いが無いことを悟り、今度ハスターの擬人化同人誌の新作を流す事を決める。

「もうダメだあ……おしまいだあ……」

「私からも許してもらえように謝るから……」

月村と一緒に謝ったところで愛歌はそれはそれ、これはこれでお仕置きを執行するだろう。希望を信じて目を背けていたが、愛歌は嫉妬深いのだ。頭で理解しても感情で納得出来ないだろう。そういう子供らしさが彼女の可愛らしいところではあるのだが、今回はそのせいでお仕置きされる事が決定してしまった。

「……失礼します」

月村に慰められながら項垂れていると、扉がノックされて1人のメイドが入ってきた。顔付きは美人と呼べるほどに整っているのだがまるで能面のような無表情で、仲良くしたいとは思えない人物だった。

「イレインか、一体なんの用だ？」

「安次郎様よりそちらの少年を連れてくるように命じられました」

「安次郎叔父様が……!?!」

イレインと呼ばれたメイドが口にした名前に月村が反応する。どうやら叔父様呼びからして月村と関わりのある人物で、声色と反応からこんな事をするような人物では無いらしい。とはいっても本心を隠して月村に接触していた可能性があるのです、彼女の印象を素直に受け取る訳にはいかないのだが。

見張りの1人はそれで考えるような素振りをし、命令に逆らう訳にはいかないと判断したのか俺に向かって顎でイレインに着いて行くように指示を出した。

現状では逆らう事は下策であるし、それに今回の件の主犯格に会えるので俺はそれに素直に従った。その際に月村が俺の身を案じてくれたが、心配いらないとサムズアップをして別れる。

移動している最中に屋敷の様子を確認する。調度品の全ては高級
そうな雰囲気を漂わせているものの前世でいた成金趣味のように過
度の装飾は嫌っているようで全体的に質素な印象を受ける。途中で
イレインのようなメイドや警備員とすれ違ったのだが、メイドの全て
がイレインのような無表情を浮かべていて、その動作が機械じみてい
るように感じられた。

《マスター。解析の結果、この屋敷にいるメイドは全て機械……わか
りやすく言えばロボットであると分かりました》
《マジかよ、日本ってスゲーな》

前世でも出来ていなかったロボットメイドを完成させている事に
戦慄を覚えていると、イレインはとある一室の前で足を止めて扉を
ノックした。

「安次郎様、すずか様と一緒に拉致した少年をお連れしました」
「……入れ」

失礼しますと声をかけて扉が開かれて入室を促される。それに
従って部屋の中に入れば、そこにいたのは1人の中年の男性。彼から
放たれる覇気は集団の長であると認めるには十分すぎるもの。俺を
見定めようとしている鋭い目からは強い意志が見え、それだけで彼が
今回の件を何かしらの覚悟を持って行っているのだと分かった。

「私は月村安次郎、月村すずかの親戚にあたる者だ」

「これはご丁寧にどうも。加賀美両夜と言います」

「そんなとって付けたような態度は止めろ。似合っていないし、不快
感を与えるだけだ」

「なんで初対面の人からボロクソ言われるのさ……」

プレシアの時もそうだったが、俺の改まった態度はどうも不評らしい。年上だから、長く生きている目上の人間だからと敬った態度を取っているのだ。

言葉遣いをいつものに戻しながらソファーに崩れ落ちるように座り込む。それを見たイレインが紅茶の入ったカップを俺の前に置き、安次郎には鉄臭さが漂う液体の入ったワイングラスを差し出した。

その匂いは前世では嫌という程に嗅いだ匂いであつたので、すぐに何か分かってしまう。

「……血？カニバリズムなのか？」

「ほう？これが血だと分かるか。随分と鼻の利くようだな。だが生憎と私には人肉を嗜む趣味は無い。これは我が一族の生きるために必要不可欠な物なのだ」

「血が生きるために必要？おいおい、まさか吸血鬼とか言いださないよな？」

「その通りだ」

冗談半分で口にした言葉を安次郎は真顔で肯定した。嘘かと思えたが、彼の声色と表情から判断する限りでは嘘をついているようには思えない。

「……本当なのか？」

「ああ、本当だとも。お前を呼び出したのは巻き込んでしまった事の謝罪と、我らの一族について話すためだ。本来ならば秘匿せねばならないのだが……さすががお前と話をしている姿が楽しそうだったのでな。万が一、彼女に何かあつた時に、理解者となって欲しかったのだ」

そう、すずかの事を語る安次郎はその時ばかりは僅かに頬を緩めて

いた。それは子を想う親の様な、孫を愛する祖父の様な印象を受ける。月村が言っていた安次郎は今の彼の事なのだろう。今の彼ならばこんな事をするとは思えなかった。

「我々月村の一族は人間では無い……いや、人間と同じように活動出来るのだが、我々が生きる為には人間の血が必要不可欠なのだ。そんなに多くの量を必要とするわけでは無いが、血を飲まなければ成長が遅くなったり、衰弱して死んでしまう。それ故に吸血鬼と呼ばれ、我々の一族もそれを自称している」

「……吸血鬼、ねえ」

吸血鬼という言葉を口の中で転がすように呟く。月村を見る限りでは本の中にあるように太陽の光を浴びても問題無かったし、流水に浸かっても平気そうだった。それだけならば血液嗜好症ヘマトフィリアや吸血嗜好症ヴァンパイアフィリアと呼ばれる血液に執着を見せる精神病のように思えるのだが、生きるために必要となってしまうえばそれは精神病の類では無くなってしまう。

魔法なんてある世界に転生したが、まさか吸血鬼まで現れるとは思わなかった。いや、魔法があるからこそ吸血鬼の存在が許されているのだろうか。

長々と考えたところで答えは出ないのでそういうものだとして理解して終わらせる。

「そんなに驚いていないようだな？」

「そう見えるだけで内心では結構驚いてるさ。ただそういう存在もあるんだなって受け入れたただけだ」

「成る程、中々器の大きい男の様だな？」

「なんで思考停止した様な回答で好印象なんだよ」

「考えた上でそう結論づけたのならそれは思考停止では無い。考え

もせずに頭ごなしに否定するだけの愚か者に比べれば幾分マシだ……一族の中には考えることもせずにいる阿呆が多くてな」

おかしい、さつきまでは集団のトップの様な雰囲気を漂わせたのに今ではうだつの上がらない中間管理職の様な雰囲気を醸し出している。

「……なら、こつちから質問させてもらおうぞ。なんでこんな事をしたんだ？月村が言うにはあんたはこんな事をする人じゃなかったそうじゃないか。こんな事をして、一体何が目的なんだ？」

「……確かに、巻き込まれた貴様には知る権利があるな。良いだろう、話してやる。ただし、誰にも口外しない事を条件にな」

無言で頷き、その条件を受け入れる。別に俺は彼の行いを正したいわけじゃない。どうしてこんな事をしたのか、それが知りたかっただけなのだ。それを知れるのなら誰にも口外しないなんて条件は優しすぎる。

そして安次郎はワイングラスに注がれた血で喉を潤し、ゆっくりと口を開いた。

安次郎から話を聞いた。彼の考えとその選択に関しては思うところはあるものの、何も口に出さずにそうかの一言で終わらせる。

彼の行動の理由はとても自己中心的な物だった。他人の都合も、心情も何も考えずに自分の思うままに行動した結果がこれなのだ。それに関して何かを口にしてしまえば、それは自分もだろうと盛大にブーメランが帰ってくる事になるので何も言えなかったのだ。

そうして安次郎からこれ以上話すことは無いと話を切られて、イレインに連れられて監禁されていた部屋に戻る。改めてイレインの事を観察してみると、彼女の行動はあまりにも規則的過ぎた。特に意識もせずに歩けば一定のリズムになるのは当然の事だが、人間ならば若干リズムが崩れたりとある程度の不規則性が生じてしまうのだが、機械である彼女は一定の速度で歩く様にプログラミングされているのかその不規則性が無かった。

それに重心も傾いている。メイド服の中に武器でも仕込んでいるのか、それとも機械である事を生かして身体の中に武器を隠しているのか。

《恐らくは後者かと。わざわざ外付けするよりも内包していた方が持ち運びに便利ですし、隠密にも向いています》
《だろぅな》

ハスターと念話で会話しても、当然のことだがイレインは気がつく様子はない。盗聴防止の魔法を使っていないのだ。それだけでイレインが別次元の魔法技術で作られた機械ではなく、地球で作られたものだと分かる。

「加賀美様、少々よろしいでしょうか？」

「何か？」

「すずかお嬢様の事です」

コツコツと靴の音を響かせながら、イレインは感情を感じさせない平坦な声でそう切り出した。

「彼女は夜の一族、吸血鬼と呼ばれる種族です。その事を知つてなお、貴方はお嬢様を友人として接しようとしている」

「そうだな。そのつもりでいる」

「何故、一体どうしてなのか？吸血鬼は貴方方人間からしてみれば異なる種類の生物、生き血を狙っている敵であるはずですーだと言うのに、どうして貴方はお嬢様の事を未だに友人として接することが出来るのでしょうか？」

イレインが足を止めて、理解が出来ないと疑問を投げかけて来た。

それを見て少しだけ驚く。彼女は純粹に俺の決めた事に対して疑問を抱いている。現在の地球の科学技術では優れたAIが作れないことは調べている。ハスターの様なまるで人間であるかの様な起伏に富んだ感情を持つAIは別次元にでも行かなければ手に入らない。

だと言うのにイレインは疑問を抱き、その疑問を解消するため質問していた。分からないから知りたいという、とても機械とは思えない理由で。

「どうして、ねえ……俺の考えは一般的な考えじゃないって事は頭に入れておいてくれよな？」

「それは先ほどの安次郎様とのやりとりで理解しています。一般的な感性の持ち主であるのなら、吸血鬼の話が聞かされても冗談だと信じ

ないものだ」と知っていますので」

「吸血鬼だーって言われても、それがどうしたって感じなんだよな。月村は俺の友人だ。吸血鬼だろうが人間だろうが、何であろうが俺の友人であることには変わりないさ」

「……そういう考え方もあるのですね」

一般的な感性からは外れた考え方であると自覚している。だけどそれが俺の出した結論なのだ。月村すずかという少女は俺の友人であり、例え人外であろうと無かろうとその事実には変わりはない。

そもそも転生者なんていうかトンドデモ存在である俺が人外云々を気にするとか笑い話でしか無い。

俺の答えに納得してくれたのか、納得は出来なくてもそういうものだど飲み込んだのか、イレインはそう呟いて再び歩き始めた。

どうやら彼女は特別な存在らしい。他の同類であるメイドたちは命じられた事だけをするように設計されている様に見えるのだが、イレインはその辺りの縛りが緩い様に感じられた。何かしらの不具合が生じてそうなったのか、それともわざとそういう風に設計されているのかは分からないが、観察する分には興味の尽きない相手であった。

他のメイドたちが人の形をした機械だとすれば、彼女は人と機械の間くらいだろうか。

これから先いろんな事を知って人に近づいていくのか、それとも言われた事だけを何も考えずにこなすだけの機械になるのかは分からないが、彼女が将来どうなるのか知りたいと思ってしまう。

そうして再び監禁されていた部屋に戻る。イレインは恭しく一礼

をして、部屋の入り口で別れた。

「ただいま」

「……おかえりなさい」

返って来た彼女の言葉は暗かった。何かされたのかと思いつながら近くにいた見張りの者を少女趣味の変態でも見るような目付きで見ているが、首が取れるのではないかと思うほどに激しく横に振られた。

ただそのリアクションが必死過ぎたのか、近くにいた他の見張りたちは彼は距離を取っていた。

「どうした？何かされたのか？あのロリコン野郎に」

「……安次郎叔父様から、私たちの一族の事を聞いたんだよね？」

それを聞いて納得する。つまり彼女は、自分が人間じゃなくて吸血鬼だと明かされたから拒絶されると怯えているのか。もうすでに答えを出している俺からすれば呆れてしまう程に馬鹿馬鹿しく思えるのだが、それを知らない彼女からすれば吸血鬼であるから拒絶される事なんて恐怖に違いない。

気持ちには分かる。俺も愛歌から全力で拒絶されたら死にたくなるだろうし。

「ああ、聞かされた。月村の一族が吸血鬼だって事はな……で、だから？」

月村の座っているソファア、その彼女の隣に座る。近づき過ぎず、離れ過ぎず、図書館のベンチで座っていた時と同じ距離で。吸血鬼だと明かされても、この距離は変わらないという事を示すために。

「吸血鬼だろうが人間だろうが、それこそ宇宙人であろうが月村が友達だって事には変わりないんだ。そつちから離れていくのなら兎も角、俺からは離れる事はしねえよ」

「……本当に？」

「本当だ。俺が今まで嘔吐いた事あったか？」

「……本当に、信じていいの？」

「おう、信じるよ。それくらいの甲斐性はあるつもりだ」

「う……うう……!!」

拒絶されなかった事に、受け入れられた事に安心したのだろう。月村は涙を流しながら俺に抱きついて来た。人間とは違う種族であると自覚しながら人間に紛れて生きていたので今まで溜まりに溜まった物もあるのか、噛み殺しきれない嗚咽を零しながら。

泣きじやくっている彼女を安心させる為に背中をさすりながら見張りたちを見れば、彼らは目を擦っていた。どうやらこのやり取りで感動して涙が出たらしい。中には良くやったと言いたそうにサムズアップをしている者までいる始末だ。

だけどころなつた原因がお前たちにあるのを忘れたわけじゃない。

というわけで報復を実行すべく、ポケットの中に入っていたサイコロを取り出して見張りたちに見えるように掲げる。

「おーい、えつと……そこのロリコン野郎。お前だよお前。違うつて首振つても他の奴はロリコン認定してるから諦めろーこれからこのサイコロ振って奇数が出たらコレまでであった恥ずかしい失敗談、偶数が出たらお前のこれまでの女性経験を話せ」

「!？」

月村が泣き疲れて眠り、ロリコン野郎の過去の失敗談と女性経験が全て吐き出されて一人死にかけている者が出ているがいい時間潰しにはなった。時計を見れば時刻は午前の5時、今の季節ではもう時期日の出の時間になる頃合い。

これだけ時間をかければ、月村の家族はこの場所を特定しているだろう。安次郎は月村の事を人質にして交渉をすと言っていた。交渉役を拷問してこの場所を吐かせるなり、電話で行われていたとしても逆探知したり、首謀者から監禁場所を推測したりなど様々な方法がある。少なくとも、すでにこの屋敷の場所は分かっていると考えていだろう。

そして行動するのなら今の時間帯だ。夜の間中見張りを続ければ集中力が切れる。集団に対してアクションを起こすのならば早朝の時間帯が一番効果的だと前世の経験で知っている。

なので近いうちに何かしらのアクションがあるだろうと考えながら、サイコロを振ってロリコン野郎に完全にトドメを刺そうとする
と、

前世では聞き慣れた轟音――爆発音が屋敷の裏側から聞こえて来た。

モーニングバズーカならぬモーニング爆破により、泣き疲れて眠っていたすずかは飛び起きた。流石に爆破があっても寝ていられる程凶太く無かったようだ。

「な、何ー！？」

「どうやらお迎えが来たみたいだぞ」

さっきの爆発で屋敷そのものが揺れた感覚はせず、だけどそれなりに近いところから爆破音が聞こえて来た。俺たちが屋敷にいるのは分かっていて、けどどこにいるのか分からない。だから爆発で人の目を引き、その間に侵入しようとしているのだろう。

見張りたちは無線機で連絡を取り合うと床に崩れていたロリコン野郎を含めて1人残らず部屋から出て行った。侵入者がどうのこうのと聞こえたのでそれの対処に向かったらしい。爆破してすぐのタイミングで見つかったところからすると、その侵入者は凶だろう。派手に暴れ、その隙に他のところー！恐らくは爆破のあった方向から、だれかが侵入していると思われる。

見張りたちが居なくなった事で俺たちは自由になった。逃げられる事を考えていなかった訳ではないだろう。彼等はきつと、安次郎の直接の部下だから。むしろ逃げてくれた方が都合が良いのかもしれない。

このまま待っていれば迎えが来るのは分かっている。だけど、どうしてもやりたかったことがあったのでここで動くことにした。

「月村、今から安次郎のところに挨拶に行くけどどうする？」

「……え？この状況で？」

「この状況だからこそだな。上手くいけばあいつの本音が聞けるかもしれないけど……どうする？待っていていけば迎えが来て安全に帰れるぜ？」

「……会いたい。どうして叔父様がこんな事をしたのか、私は知りたくない」

「よし、それじゃあ行こうか。エスコートは任せてくれ。鉄火場の立ち回り方なら心得ているからな」

「……加賀美くん、一体どんな人生を送ってたの？」

「R指定が付きそうなほどに血生臭い人生」

月村の質問を冗談でも言っているかの様な軽々しいトーンで濁しながら答える。友人であるとはいえ、俺の過去を明かしても良いと思える程に俺と彼女との仲は深くは無い。それにマトモな彼女に俺の前世の話なんてしたら優しい彼女は心を痛めてしまうか、最悪は拒絶されてしまうだろう。桜木の様な2度目の人生を送っている者や、愛歌の様な通常から外れた異常者ならば俺の話聞いても驚きはするがそれで済ませるだろうか、吸血鬼であるとはいえ普通である彼女にこんな話をする気にはなれなかった。

だが、それは今の話であってこれから先はどうなるのか分からない。

願う事ならば俺と彼女の仲がそれを話しても良いと思える程に深くなり、話しても受け入れられる事を望みながら座っている月村に向かって手を差し伸べた。

イレインに案内された時から人の気配が少なかった屋敷だったが、今では無人なのではないかと思ってしまうほどに誰もいなかった。一階の入り口と思われる場所からは銃声が聞こえているのでそこで侵入者と戦っているのは分かる。まさかその対応に全員が使われているのだろうか。

だとしたら好都合だった。安次郎の部下ならば俺たちを見ても無視するか、或いは逃がそうとしてくれるだろうが、それ以外ならばその場で射殺、もしくは捕まって刑事ドラマの様に人質扱いされかねない。周囲に気を配りながらも堂々と、無人の通路を月村を連れて歩いて行く。

そして安次郎のいた部屋まで辿り着いた。部屋の中には気配があり、安次郎がまだここにいる事を教えてくれている。幸いにも安次郎以外の生きている者の気配は感じられず、さらにこの部屋に近づいて来る者の気配も無かった。

月村に入り口から離れた場所で静かにしているようにハンドサインで指示を出し、頷いてくれたのを確認してから扉を蹴破る。蝶番こそ壊れなかったが蹴破られた事で扉は閉まらなくなり、通路に繋がらる。これで部屋の外にいる月村にも話が聞こえるだろう。

「よお、別れの挨拶に来たぜ？」

「ドアを足で開けるな。貴様はマナーを学ばなかったのか？」

「生憎と礼儀作法なんてものとは程遠い場所で生まれ育ったからなあー知ってるけど使う気にならなかったし」

「悪童め」

部屋の中にいたのは安次郎、そして彼の側に控えているイレインだった。安次郎は侵入者がやって来て全員で対応しているのに焦っている様には見えず、それどころか憑き物が取れた様な晴れやかな表

情をしていた。

「俺が悪童だったらあんたはタヌキジジイかペテン師だな。自分を信じてついて来てくれた奴らを裏切つてさ」

「あやつらがそんな殊勝なものか。吸血鬼だからと人間の上位種であると勘違いし、人間を支配するべきだと騒ぎ立てるだけの愚者に過ぎん」

「だからこうやって芝居を打つたんだろ？」

「ああ、そうだ」

事の始まりは月村の一族、夜の一族の派閥内の争い。下等種族である人間を支配するべきだと主張する強硬派、人間を共存相手としてこれまで通りにひっそりと生きていこうと主張する穏健派。その2つの内の強硬派が行動を起こそうとしていた。安次郎は強硬派のトップであったがそれは先代から引き継いだけであつて本人としては穏健派だつた。それでも彼は穏健派に移る事をせず、目を離せば暴走しかねない強硬派の手綱を握る為に敢えてその座を保持していた。

そしてある日、強硬派が行動を起こそうとしていた。夜の一族の中でも名家の党首である月村忍の妹の月村すずかを人質にとり、月村忍の持つ技術を使って暴動を起こそうと計画していたのだ。安次郎は時期尚早だと言つて収めようとしていたが強硬派はそれでは治らず、安次郎の意向を無視してまで行動を起こそうとしていた。

なので、安次郎は考えた。この計画を上手く使えば強硬派の力を削ぐ事が出来るのではないかと。

そうして実行されたのが今回の件。夜の一族で戦える者と保持していた自動人形を全てこの屋敷に集めた。普通ならばそれだけの戦力を集めれば誰も勝てないのだが月村忍のそばには御神流の師範代である高町恭也と同門である高町美由希がいた。人間でありながら

戦闘能力は夜の一族さえも凌駕している彼らの存在、夜の一族の月村忍、彼女が保持している自動人形のノエル・K・エアリヒカイト、それらを合わせればこの程度の戦力など叩き潰されると確信して。

そうして安次郎の計画通りに物事は進んでいる。下から聞こえる戦闘音、正確には銃声はドンドンと小さくなっており夜の一族側の不利を知らせている。殺しているのか、それとも無力化しているのかは分からないが、今回の件で強硬派は力を削がれて穏健派の方が増した事には変わらない。

「部下には悪い事をしてしまったと罪悪感を覚えているが、言ってみればそれだけだ。今の世は人間の物だ。いくら優れているからとはいえ夜の一族が出しゃばったところで数により圧殺されるだけ。それならば現状のまま、人間と共に共存した方が良いのだ」

「月村、悲しそうにしてたぞ？ 叔父様がこんな事をするはずが無いってさ」

「……すずかには悪い事をしたな。だが、後悔は欠片もしておらんよ」
そう言い切った安次郎の顔には言葉通りに後悔しているようには見えず、その姿に思わず前世の友人の姿を重ねてしまった。

「確かに、私のやった事は大多数からしてみれば間違った事なのかもしれない。しかし私はこれが正しいと確信している。過去の歴史の中で迫害されていた我々が、正体を隠しているとはいえ穏やかに暮らすことが出来ているのだ。それを下等種族だと、上位種族だとくだらん理由で壊されてたまるものか……!!」

その言葉は今までの彼とは思えない程に熱く、そしてずっしりとした重みを感じさせるものだった。

彼は夜の一族の事を真摯に思っている。故に一族の台頭よりも平

穩を選び、平穩を壊そうとしていた者たちを切り捨てた。自分が信じ、決めた事を成し遂げんとするその姿勢は、俺の親友であり英雄である彼と全く同じであった。

「で、これからどうするんだ？逃げるのか？」

「バカをいえ、やった事に対して責任を取らねばならんだろうが」

「つまり、自分が全ての黒幕だと言い張るつもりか？」

「言い張るも何も実際にその通りだ」

一族の事を思いやった事ではあるが、それでも罪であることには変わりない。彼はこのまま全ては自分の責任だと言って月村を助けに来た者たちの前に立つつもりなのだろう。

それを間違っているとは言わない。その行いで悲しむ者が現れるが、それでも罪は罪であり、罰を受けなくてはならないのだから。

「そうか……お疲れ様です、月村安次郎。貴方の行いが実を結ぶ事を心より願います」

「ふん……その口調は不快だから止めろと言ったはずだ。さっさとすずかを連れて出て行け。ここから先は子供が見るようなものではないからな」

「人の好意を悉く無碍にするなあ……!!」

中指を突き立てるものの、これ以上話す事は無いと言わんばかりに安次郎は俺に背を向けて微動だにしない。イレインの一礼に見送られながら部屋から出て――声を殺しながら泣いている月村に近づく。

「行くぞ」

泣き声を零さないようにと口を押さえながら、月村は頷いた。本当

なら止めたいだろうな、こんな事をして何になるんだと叫びたいだろうに、彼女はそれを必死になって我慢している。ここでそんな事をすれば安次郎の思いを無碍にしてしまうと思っっているからだろう。

そうして俺は月村と共に部屋から離れた。

一族の平穏を願うが故に、その身を犠牲にした1人の男をその場に
残して。

「……行つたようだな」

「そうですね。扉の陰にいたすずかお嬢様と一緒に行かれたようです」

「最後まで生意気なガキだったな、あいつは。自分から話さない約束しているからか私に話させよつた」

「誓いを破つていい無いですか?」

「こういうのを契約の裏をかくというのだ、覚えておけ。にしても、最後にあんな子供にいいようにやられるのは気に入らんなあ……そう
だ。イレイン、命令を下す。これは最優先であり、何があつても従う
ように」

「畏まりました。何なりと」

「……うるせえ……」

折角気分良く眠っていたというのに連続して鳴り続けているインターフォンの音が聞こえて目を覚ます。時計を見れば午前1時、目覚めるには遅い時間なのだが、月村の件で一徹した分を取り戻すたので本音を言えばもつと眠りたいところだ。

月村安次郎の起こした事件からは一日が経っている。このタイミングでやって来る人物には心当たりがあつたのだが、気分良く眠っているところを無理矢理起こされたとなればどんな聖人であろうと昇龍かますくらいに機嫌が悪くなつて当然だろう。

なのでパジャマ姿のまままで玄関に向かい、外にいる人物の姿を確認してチェーンを掛けたまま鍵を開けて扉を開く。

「おはよう、それともこんにちわが良いかしら？」

外に居たのは月村が成長したらこんな姿になるんじゃないかと思えるほどに月村に似た紫色の長髪の女性――月村忍。彼女の背後、正確に言えば俺の家の前には前世の死因を思い出させる黒塗りの高級車が停められていて、そこから恭弥と月村、それとイレイン程ではない物の表情の硬いメイド服姿の女性の姿が見える。普段であれば月村の姉であるからとそれなりに対応していただろうが、無理矢理起こされて機嫌が悪い。

なので無言で扉を閉めようとした。

そしたら扉の隙間に足を入れられて防がれてしまう。

「なんで無言で閉めようとしたのかしら？ 私は一応お客様よね？ 地味に痛いから止めてほしいんだけど？」

「事前の連絡も無しで突然来てお客様扱いしろとか厚顔にも程があるだろ。寝不足なんだよ。あと10時間は寝たいから、用事があるならそれからしてくれ」

「寝過ぎよ……!! 事後処理が忙しくて時間が取れたの今くらいしかないよ……!! 出来る事なら開けて欲しいのだけどーああと、足踏むの止めてくれない!? 小指ばかり踏まれて凄く痛いから!!」

彼女が忙しいのは理解しているが、それよりも睡眠の方が優先されるのだ。扉の隙間から入れられている足の小指を踏みながら全体重で引つ張っているので拮抗しているのだが、このままでは後ろにいる者たちが手を貸して俺の睡眠を妨害して来るに違いない。愛歌を心配させた事によるお仕置きを乗り越えてようやく眠る事が許されたのだ。今日1日は何があつても睡眠を貪る事を決めている。

なので、俺も助っ人を呼ぶことにした、

「イレイン、手伝ってくれ」

「承知しました」

「ちよーー」

家の奥から現れたのは安次郎に仕えていた自動人形のイレイン。空になった洗濯物カゴを床に置き、扉の隙間に腕を入れて向こうで彼女の存在に驚いている月村忍の額にデコピンをかました。デコピンと聞けば子供がするような、イタズラでやるような軽いものをイメージするかもしれないが、スペックが人間よりも圧倒的に高く、夜の一族に迫る程の馬力を持つと自称しているイレインのデコピンはそんな微笑ましいものではない。

ドゴオつと、重々しい音と共に月村忍の額にイレインのデコピンが突き刺さった。

「いったぁー！！」

痛みで仰け反っている内に扉を閉める力を緩めて足を外に出し、扉を閉める。しっかりと鍵を掛けておく事も忘れない。これで一階からの侵入は不可能になった。ピッキングなどの非合法な手段や窓を割るなどの暴力的な手段で来られた場合にはそうはいかないが、そうになったら警察に電話するので大丈夫だろう。

これで安眠を邪魔する者は居なくなつた。俺は部屋に戻ろうと、イレインは家事の続きに戻ろうとすると、月村忍が出しているであろうぐわあつという悲鳴に紛れるように、控えめに扉がノックされた。

「寝てたところをゴメンね？でも、大事なお話があるから開けて欲しいんだけど……」

聞こえてきたのは月村の声だった。その声色からはこちらに対する思いやりと、だけど話がしたいという思いが伝わってくる。機嫌が悪かった事もあるのだが、月村忍が新聞の押し売りでもやるように足を入れてきたのであんな対応をしてしまったのだ。数秒だけ思索し、そうするしかないかあと結論を出してチェーンと鍵を外して扉を開ける。

するとそこに居たのは暑くなってきた気候に合わせたワンピース姿の月村、額を抑えながら地面を転げ回って姉の尊厳を失っている月村忍、両手で顔を覆い隠している恭也、転げ回っている月村忍の事を無表情で眺めているメイドの姿だった。

即座に視界から月村以外を追い出す。

「おはよう、月村」

「……うん、おはよう加賀美くん」

あの事件以来始めての再会であったが、口から出てきたのはいつも通りの声色でかけられる挨拶だった。

月村安次郎の事件は高町恭也らの活躍により無事収束した。過激派で作戦に参加していた吸血鬼は安次郎を含めて全員が捕らえられ、イレインのような自動人形も全て破棄されたとの事らしい。事件に巻き込まれ、夜の一族の事を聞かされたからなのか助けにきた月村忍に聞いたところ素直に教えてくれた。

ただし、1つだけ懸念があるとも言っていた。それはイレインの事だった。

メイド服姿の女性――イレインと同じ自動人形であるノエル・K エーアリヒカイトとの戦闘の最中でイレインは逃げ出したという。奇襲を悟られないようにする為に最小限の人数で行なっていた事もあり、イレインはその場からの逃走に成功した。安次郎によればイレインは自律回路を重きに置いて製造されているので通常の自動人形よりも思考に自由がある――つまり、何かしらの拍子で暴走する可能性があると事だった。

月村忍が言っていた事後処理の中にはイレインの事も入っていたのだろう。何せ現代ではありえない自意識を持った自動人形^{オートマタ}だ。その存在そのものに天文学的な価値が付けられてもおかしくないし、何より夜の一族並みの馬力を使えば簡単に人間を殺す事が出来る。表沙汰になる前に見つけ、捕獲するか処理する。それが今まで続いてきた人間と夜の一族の関係を保つ為に必要な、最優先事項といっても過言ではない。

「加賀美様、お茶をどうぞ」

「ああ」

「高町恭也様も、すずかお嬢様もどうぞ」

「頂こう」

「ありがとう」

「……忍お嬢様には水道水を」

「……なんか私だけ扱い雑じゃないかしら？しかもなんでお皿なの？
せめてコップで出さないよ」

「先ほどのやり取りから、忍お嬢様の扱いはこれで十分だと結論を出
しましたので」

そんな最優先事項^{イイレ}が我が家にいる。恭也と月村にお茶を、月村忍には水をお皿に入れて出すという人どころか犬のような扱いをした彼女は無表情のまま俺の後ろに控える。

ちなみにアリシアは話し合いがつまらないなどと言って四つん這いにさせた士郎さんの上に跨って家から飛び出して行った。彼女は一体どこに向かっているのが気になってしょうがない。

「……色々と言いたいことがある過ぎるのだけど、まずは自己紹介からね。私は月村忍。すずかの姉で、月村家の当主です。そして、彼女はノエル・K・エーアリヒカイト。私の従者でイレインと同じ自動人形よ」

「初めまして加賀美様」

月村忍に紹介されて、彼女の後ろに控えていたメイド服姿の女性――ノエルが一礼する。その動作は計算し尽くされていて完璧な物だったが、あまりにも滑らか過ぎて人にあるはずの不規則性が見当たらない。それだけでイレインと同じ自動人形であると察するこ
とが出来た。

「加賀美両夜、月村の友人だ」

「少しぐらい敬語で話そうって姿勢を見せないのかしら？」

「前までは一応目上は敬語で話してただけどあまりにも不評だったから止めることにしたんだよ」

「そっちの方が良いと思うぞ。敬語で話されるとどうも違和感が酷くてな。美由希の奴が良く似合わないって言ってたし、俺も実はそう思ってたからな」

こういう事だと肩を震わせながら笑ってみるが月村忍は困ったような反応をするだけだった。味方がいない事を悲しく思いながら懐を漁ってタバコを吸おうとしたのだが、出てきたのは棒付きの飴だった。そもそもこの場には俺の事を知らない者もいるのでタバコが吸えなかったなあと思いつつ、喫煙衝動を誤魔化すために飴を口に入れる。

「で、今日は何の用？寝たいから早く終わらせてくれると助かるんだけど」

「……そうね。まずはイレイン、彼女がどうしてここにいるのか教えて貰えるかしら？」

「安次郎から押し付けられたんだよ」

昨日、家に帰ったと同時に彼女は俺の前に現れたのだ。どうしてここにいいのかと聞けば、安次郎の最後の命令で俺に従うように言われ

たから来たとの事。どうやら最後に月村に事情を聴かせた事に気がついていたらしく、良いようにされたのが気に入らないから意趣返しのため送りつけたらしい。

「それは本当なのかしら？」

「はい、私は安次郎様から加賀美様に仕える様にと命を下されました。勿論それは強制では無く拒否権もあつたのですが、加賀美様からは快諾していただきました」

「強制では無かつたかもしれないけどほとんど強制だつたじゃねえか。断つたらプレス機に挟まれてサンドされるって言うんだぜ？」
「断られたのならそうする様にと安次郎様から言われておりましたので」

自動人形でありながら人間に近づいている彼女の事を俺は気になってる。それなのに断つたら自壊するなんて言われたら、承諾する以外に選択肢は無かつた。それに家事をしてくれるのは正直なところ助かる。俺も自分でする様にはしているのだが、殆どの事は愛歌が済ませてしまうのだ。彼女の負担が減るので、イレインが来てくれたのは素直に嬉しい事だと言える。

「そう……加賀美君も知っているとと思うけど、イレインは自動人形でロストテクノロジーの塊なの。情報規制はしているのだけど、どこからかそのことが漏れてしまうかもしれない。そうなったら、貴方や周りの人を傷付けてでも奪い取ろうとする奴がきつと現れるわ。だからー」

「だから、イレインの身柄をそちらに渡せと？」

月村忍の首が縦に振られる。彼女の声色からは、純粹にこちらを心配していることが伺えた。

確かに言われた通りにイレインが自動人形であることが知られ

ばそうなる可能性がある。それは彼女から選択肢のない選択を迫られた時点で気が付いていた事だった。それだけの事をしてでもデメリットを上回るほどのメリットが得られる。イレインにはそれだけの価値があった。

だが、

「断るよ」

それを承知の上で、俺はイレインをそばに置く事を決めている。

「生憎とその可能性を承知の上で俺は彼女を受け入れたんだ。改めて教えられたからと言って手のひらを返す様な事はしたくないんだよ」「無理矢理にでも、連れて行くと言ったら?」

恭也の身体が僅かばかりに強張る。言葉の通りに無理矢理に、力任せに連れて行くこうとしているのだろう。四年前の荒れていた時期は恭也のメンタルと身体が満身創痍だったので勝てたが、今の万全の状態の彼には敵わない。魔法や魔術を使えば勝てるかもしれないが断言出来るほどの勝率では無いし、そもそも論外である。

だからこそ笑う。それがどうしたと言いたげに。

「連れて行けば良いさ。ただ、その場合はこちらも好きにやらせてもらう。俺がやったと明確に分かるように、小事大事色んな事をイレインを返してくれるまでな」

「……こちらは善意で言っているのか?」

「善意で言っているとしても、だ」

恭也との間に嫌な緊張が漂う。向こうが善意からイレインを引き取ると言っているのは重々承知している。だが、危険があるからなん

て理由で彼女を手放すような無責任にはなりたく無いし、それを愛歌に知られれば間違いなくお仕置きが待っている。

それに、一瞬であるとはいえガリア・オールライトの面影を魅せてくれた彼の頼みが無碍にするわけにはいかないから。

数瞬間か、数秒か、数分かの睨み合いの果てに恭也は息を吐いて身体から力を抜いた。そして月村忍の方を見て、首を横に振る。

「ダメだ、試しに軽く脅してみたけど少しも動じやしない。こう言う手合いは言い出した事を梃子でも曲げないぞ」

「つまりは引き渡しには応じないと……はあ、目に届くところに居てくれるだけでよしとしますか」

「認めてくれるって事で良いんだな？」

「ええ、その代わりにこの町から私の許可無しで出るのは遠慮してほしいわ。流石に町の外になると事前に根回ししなきゃならないからね」

「それくらいはしないと安心出来ないよな」

思ったよりも軽い条件でイレインがいることを認められて内心で安堵する。外出禁止や、見張りを付けるなどの条件が付けられると思っていたのだがそこまで厳しくするつもりは無いらしい。

「ところで興味本位で聞くのだけど、好きな事をやるってどんな事をやるつもりだったのかしら？」

「テロるつもりだった」

「テロる」

「具体的に言えば月村の家と関わりがある企業を中心に超テロる。親父から餅は餅屋だって色んな事を教えてもらってるから可能かな可能かと言えば可能だからな」

「イレインの事を認めて本当に良かった……!!」

実際には保護者からでは無くて前世の経験なのだが、どちらにしても俺にテロの知識がある事には間違いないので大差無いだろう。恭也から僅かに侮蔑の目線が向けられているが、それは土郎さんの事があるからだと考えられる。流星に完全には割り切ることは出来ないかと納得し、言い訳もせずに素直にその視線を受け止める事にする。

「ふう……それじゃあ次の、というよりはこれが本題のだけど」

気分を落ち着けるためにか、目の前に置かれている皿の水を飲もうか迷い、最終的に恭也から差し出されたお茶を飲んで、

「私たち夜の一族に関する記憶を失うか、それともすずかの婚約者になるか、どっちが良いかしら？」

まるで世間話でもするかのような気軽さで爆弾を放り投げて来た。

ため息を吐き、飴の無くなった棒を捨ててお茶を飲む。

「ゴメン、脳みそが今の言葉を理解するのを拒んだからもう一度言ってくれませんか？」

「私たち夜の一族に関する記憶を失うか、それともさすがの婚約者になるか、どっちが良いかしら？」

「聞き間違いじゃねえのかよクソツタレ……!!」

冗談だと思いたいのだが月村忍の顔を見る限りでは冗談を言っているようには見えない。つまり、本気で夜の一族に関する記憶を失うか、それとも記憶を持ったまま月村の婚約者になるかどうかを問いかけていた。

「何でそんな二択が出てきたんだ？」

「夜の一族も色々と大変なのよね。安次郎叔父様の件で過激派は一掃出来たし残党が居たとしてもしばらくは活動出来ない程に消耗させる事は出来たわ。だけどその代わりに穏健派が勢力を増してきたのよ。これまでの平穏を保つ為に部外者を始末するべきではないかと言われたわ」

「穏健、派……？」

「一応穏健派よ。夜の一族の平穏を守る為にやってる事は過激派と然程変わらないけど」

やろうとしている事はあれだが、穏健派の気持ちも理解出来る。秘密を守る為に一番の手段は口を封じる事なのだ。その場では喋らないことを約束させたとしても、生かしておけばいつか口に出してしまうかもしれない。それならば殺して喋られないようにすれば良い。短略的で暴力的な手段ではあるが、確実に秘密を守る事が出来る。

「で、殺されなくなかったら代わりにどちらかを選べど？」
「ええ、夜の一族が持つ異能を使って記憶を消すか、それともさすがと婚約を結ばせる事で夜の一族に取り込むのか、どちらかを選ばせると言つて言いくるめておいたわ……」

穩健派との交渉に余程力を使ったのか彼女の顔には濃い疲労の色が浮かんでいた。それをご苦労様、なんて労うつもりはない。何せ俺は巻き込まれた被害者なのだから。自分から厄介ごとに飛び込んでいったのならば多少は申し訳なく思うかもしれないが、今回に関しては完全に巻き込まれた立ち位置にいる。俺が何かをしたわけではないので、何も言うつもりは無かった。

ふと気になって月村の方を見ているが満更でもなさそうな、けどどこか諦めたような顔をしていた。やはり、もしかしたらと思つていたのだが、あの一件で月村は俺に対して特別な感情を抱いてしまったらしい。チョロいなどと言われるかもしれないが、月村からしてみれば俺は吸血鬼なのにそれがどうしたと受け入れてくれた存在になる。人間とは異なる存在であると知つても、以前と変わらぬ対応してくれる俺の事を特別視してもおかしくないだろう。

月村の容姿は優れていて、学校でも異性に対して意識し出している男子生徒たちから人気がある。月村忍の姿を見る限り、将来的に彼女に酷似した容姿になるのが伺えて、加えて性格も良いと来ている。しかも、実家は名家で婿入りしたとしても生活に困らないだろう。総じて紛う事なき優良物件。普通ならば万歳三唱しながら即座に婚約を受け入れ、薔薇色の未来が約束される事になるだろう。

だが、生憎と普通ではない事を自覚している。

それに俺には心に決めた相手がいる。

しかし、命が惜しいからといって彼女の秘密を忘れるような甲斐性

無しにもなりたくない。

「悪いがどちらも断らせてもらう」

だから、夜の一族に関する記憶を失う事も、月村の婚約者になることも断る事にした。

「……理由を聞かせてもらえるかしら？」

「俺は安次郎から夜の一族の事を聞かされて、その上で月村と関わり続ける事を決めてるんだ。別に夜の一族の事をバラすつもりはないし、だからと言ってなし崩しにはいえ彼女が明かしてくれた秘密を忘れるような甲斐性無しの玉無しになりたくない。なら婚約者になるのかって言われても断るさ。何せ、今の俺は大切に想っている相手がいるんでな。そいつを蔑ろにする事なんて出来やしない。だから両方とも断るって言ったんだ」

「穏健派が強硬手段に出るかもしれないわよ？ そうなった場合、私たちは貴方を守る事をしないと行ってても？」

「そうなたったら夜の一族は月村だけになるだろうよ」

夜の一族の事をバラすつもりは無いが、穏健派はそう考えずに俺の命を狙うかもしれない。そうなたったら、何でもありの戦争になるだけだ。穏健派は俺の事を狙い、俺は月村家以外の夜の一族全員を狙う。半端に終わらせる事などしない、どちらかが途絶えるまで殺し合う事になる。それだけだ。

「そういえばテロるとか言ってたわね……はあ、分かったわ。貴方の記憶は消さないし、すずかと婚約を結ばせる事もしないわ。だけど穏健派には貴方の記憶を消したと報告する。だから絶対に口にしないでもらえるかしら？」

「安心しろ、口の硬さには自信がある。拷問されて話しそうになつたら舌を噛み切つても絶対に喋らない」

「……すずか、残念だったわね？」

「お姉ちゃん……!!」

恥ずかしいのか、月村は顔を赤くしながら月村忍の事を叩いている。これがポカポカと軽い音ならば可愛らしい光景だったのだが、生憎と聞こえてくる音はドスドスという重たい音。夜の一族の身体能力を遺憾無く発揮しているのが分かる。月村忍も辛いのか、初めは軽く笑っていたがすぐに乾いた笑いで顔を引き攣らせている。

「す、すずか？ちよつと痛いから手加減してくれると助かるのだけど……あら、もうこんな時間なのね。悪いけどそろそろ帰らせてもらいわ」

「おお帰れ帰れ。帰って俺に安眠させてくれ」

処理をしなければならぬ事がまだまだあるのだろう。イレインの事と月村の事を話して彼女たちは帰り支度を始めた。すると月村が何かを決心した顔で俺の近くまでやって来る。

「加賀美君……」

「どうした？」

寝不足だったから、月村だったから油断していたのだろう。彼女は俺の頬に手を添えると顔を近づけて、俺の額に唇を当てた。

「……私、諦めないからね!!」

それは奥手な月村の精一杯の頑張りだったのだろう。林檎かと思うほどに真っ赤にした顔でそう告げると、彼女は逃げるようにしてリビングから出て行った。

「あらあら……」

「へえ、中々の色男っぷりじゃないか」

「加賀美様は俗に言うすけこましなのですね」

「そこはせめて女誑しにしてくれよ……いや、それも違うけどさ」

そんなつもりは無かった、だけど実際にはそうなってしまっている
ので強く反論することは出来なかった。

俺は明日の朝を迎える事が出来るのだろうか。

「ああああ……!!しちやった……しちやったよお……!!」

火がついたように熱くなっている顔を手で覆い隠しながら加賀美君の家の玄関先で蹲る。流石に唇にはしていないとはいえキスはキスだ。事件の疲労が抜けきっていないからなっているどこかボンヤリとした状態で、勢いに任せてやってしまった感はあるけど恥ずかしいものは恥ずかしい。

だけどした事に対する後悔は無い。あるのは羞恥心だけだ。

そうやって数十秒程その場に蹲って、顔の熱が多少引いてきた頃合いを見計らって立ち上がる。今日は無理矢理お姉ちゃんに着いて行く事で加賀美君に会ったのだが、こうしてキスをしてしまった以上は他に話さなければならぬ相手がいる。

加賀美君の隣に立っている家……沙条さんの家に行き、インターフォンを鳴らす。

「はい……って、月村さん？顔が赤いけど大丈夫？」

「うん、大丈夫だから」

出て来たのは話しかかった相手である沙条さん本人で、顔が赤い事を指摘されたけど気にしている暇は無い。

何故なら、今から宣戦布告を行うのだから。

「沙条さん……私、加賀美君の事が好きになりました」

「……友人としてかしら？」

「ううん、異性としてです」

普段の加賀美君と沙条さんのやり取りを見ていれば、2人が深い関係にある事はすぐに分かる。そんな2人の間に割って入るような私は間違いなく悪者だろう。そうだとしても、

「だから、宣戦布告です。私は加賀美君と一緒に居たい。例えば沙条さんがいるとしても」

この気持ちが無かった事にはしたくは無かった。私の正体を知り、それでもそんな事は知った事かと言って友人で居てくれる彼とそれ以上の関係になりたいと思った。

だから、沙条さんに正直に自分の気持ちを伝える。私が悪者だと言う自覚はあるけど、だからと言って横から搔っ攫うような卑怯な女にはなりたく無いから。

そうして私たちの間に重たい沈黙が続く。私の言葉が余程不快なのか、彼女の眉間には深いシワが刻み込まれて今にでも殺すんじゃないかと思う程に鋭い視線を向けている。

それを真正面から受け止めて、目を逸らさない。ここで目を逸らしたら、彼と一緒に居ることなんて出来やしないと直感で判断したから。

「……良いわ、一先ず貴女が両夜の事が好きって事は認めてあげる」

重苦しい沈黙を破ったのは沙条さんからのまさかの一言だった。思わず啞然として彼女を見るが、さつきまで刻まれていたはずの眉間のシワは無くなっていて、それどころか寧ろ愉快そうに笑っていた。

「えっと……良いの？本当に？」

「認めてるのは好きだって思うだけよ。昨日両夜が帰って来なかった事が原因ね？月村さんと一緒に事件に巻き込まれて、そこで秘密を共有して、油断していたところを両夜の言葉とでノックアウトってところかしら？」

「何で分かるの……!？」

「恋する乙女の勘よ」

お姉ちゃんの手によつて情報規制が敷かれ、外部には漏れていないはずなのに沙条さんはまるでその場にいたように言い当てられてしまった。加賀美君が本当に話していないか怪しく思えたが、彼は本当に話してはいけない事は絶対に話さないので違うはずだ。つまり、彼が昨日帰って来れなかった事と私を見て推理したのだろう。

相変わらず、この常人離れた洞察力と想像力には舌を巻くしか無い。

「寧ろ今までそういうのが現れなかったことの方が不思議だわ。両夜ったら格好良くって、優しくて、モテそうな要因は沢山あるのに」
「それは隣にいつも沙条さんがいたからだと思うけど……」

「まあ影でこそそそやってたのは居たみたいだけど、そういうのに関しては影でこっそり始末しておいたわ」

「影でこっそり」

沙条さんはもしかして噂に聞くヤンデレというヤツなのだろうかと思っただが、どちらかと言えば彼女は嫉妬深いだけなのだろう。加賀美君の事が好きだから一緒に居たいという感じだし、大切だからといって独占したいようには見えないし、加賀美君が自分以外の女の子に惚れられてもどこか誇らしげに見える。

だけど一線を越えたら容赦はしないみたいだが。

「そういう意味では月村さんは見込みがあるわよ？なんて言っただけで私に直接そのことを言いに来たのだから。もしも泥棒猫みたいなことをしようとしていたら影でこっそり始末する事になっていたわ」
「良かった……言っておいて本当に良かった……!!」

夜の一族だから同世代の人間に比べて身体能力は高い方だ。沙条さんくらいの女の子に襲われても簡単に倒す事は出来るのだが、どういふわけか沙条さんと戦っても勝つ未来が思い浮かばない。逆に路地裏で横たわっている私と悠々と立ち去る沙条さんという未来なら簡単に想像出来るのだが。

「だから……私も宣言させてもらおうわ」

胸に人差し指が突きつけられる。横取りをすると宣言している私に対して沙条さんは楽しそうな微笑みを浮かべ、けども目には絶対に渡さないという自信が満ち溢れている。

「貴女がいくら彼の事を好きになっても構わないわ。だって、誰かが誰かを好きになる事なんて当たり前前の事なのだから。……だけど、彼は絶対に渡さない。私が愛した王子様を、貴女に絶対に渡さないわ」

「沙条さんが加賀美君の事を好きだったのは知ってるよ。だけど、私も加賀美君の事が好きなの……だから、正面から正々堂々挑むよ。私も、彼と一緒に居たいから」

2人の少女が1人の少年を取り合う。昼ドラや少女漫画のような展開だが、不思議とそれらで感じられるようなドロドロとしたものは私たちの間には存在していなかった。

「フフツ……ねえ月村さん、貴女の事を名前で呼んでも良いかしら？ 私の事も名前呼びで構わないから」

「うん、良いよ。これからよろしくね、愛歌さん」

「精々頑張りなさい、すずかさん。両夜のこととは絶対に渡さないけどね」

相手は加賀美君の幼馴染。一緒に居た時間は愛歌さんの方が圧倒的に長く、知っている事も彼女の方がずっと多い。加賀美君が言っていた大切に思っている相手というのもきつと彼女の事だろう。

そんな不利すぎる状況で、だけど不思議と負ける気はしない私の初恋が始まった。

A's編

dark knight

「ガツテム、まさか白菜とキャベツを間違えて買ってしまおうとは」

「あり得そうだけど普通ならしない間違えよね？わざとなのかしら？」

「違う……違うんだよ……白菜とキャベツが隣に置いてあったから間違えだんだよお……」

10月に入り、夜になれば肌寒くなり防寒着が手放せなくなった頃、俺は愛歌と一緒に夜の町を歩いてきた。寒くなってきたから鍋にしようと思いをし、その最中で白菜だと思って買っていた物がキャベツだと気がついたのだった。

その事実には俺は啞然として愛歌は苦笑い、桜木は内外共に大笑いしていたので顔面にキャベツをぶつけておいた。

「それにしても寒いわねえ。手が悴みそうだわあ」

「棒読みだし、視線が分かりやすいんだよなあ……」

その言動で愛歌が何を求めているのか分かったので彼女の手を握ってやる。それが正しかったのか、愛歌は照れ臭そうにはにかみながらも機嫌を良くしていた。普段は嫉妬深いのだが、今の彼女の姿を見る限りでは普通の少女にしか見えない。とても桜木から一歩間違えれば地球を滅ぼすと言われた存在だとは思えなかった。

「そういえばさっちゃんからメールが来てたみたいだけど何かあったの？」

「ああ、何でも図書館で新しい友達が出来たってさ。良かったら暇な

時に一緒に遊ばないかって誘われた」

「ふうん……ところで両夜、気になる映画があるのだけど今度一緒に観に行きましょう」

「そんなに警戒するくらいならそうしなきゃ良いのに」

月村が俺に対して好意を持っていると明確にした翌日、愛歌に月村から宣戦布告されてそれを受け入れたと話された。それを聞かされた時、どういう反応をしたらいいのか分からなかった。愛歌が俺に対して愛情を持っているのは理解しているし、俺も彼女に対して同じような感情を持っている。いわば俺たちの関係は完成されている様なものなのに、横から出てきた月村の存在を認めて勝負を始めているのだ。

普通ならばこういういった愛情によるイザコザは昼ドラのようにドロドロした感じになると思っていたのだが、どういうわけなのか二人の間にはそういう物は感じられず、寧ろ以前よりも仲良くなっているように見えている。何をどうしたら三角関係みたいな関係で、取り合っている者同士が仲良くなるなんて事態になるのだろうか。

俺も俺で愛歌の事が好きだからと言って拒絶すれば良いのに、月村の事は友人だからと強く言い出す事が出来ずに、今日までズルズルと引きずってしまっていた。いや、本当だったらすぐにでも断ろうとしたのだが、愛歌からまだ断らないでくれと言われたので断る事が出来ないでいた。

何でも俺と自分との関係はポツと出の月村なんかでは断ち切れな
い程に強い事を見せつけたらしい。とんでもない理由だった。

今のままならまだいい。だが付き合いが長くなれば必然的に情が湧き、拒絶するのが辛くなってしまう。俺はそれを嫌って早く断ろうとしているのだと言ったが、愛歌はそれを理解している上で断らない

ように頼んだのだ。

何だか口クでもない事を企んでいる気がするが、惚れた弱味という奴だろう。最終的に俺は愛歌の頼みを受け入れてしまい、今日までそんな関係が続いている。その関係が煩わしく思っている訳では無いのだが、それが続いてしまえば断らなければならない日が来た時に彼女の事を思うあまりに断れないなんて事になってしまいそうで怖い。

はあ、と溜息を吐くと寒さのあまりに息が白くなって風に乗って流れていく。この調子で寒くなれば年内中には雪が降るだろう。景色一面が真っ白に染まる光景は前世ではモヒカンが徘徊しているロシアくらいでしか見る事が出来なかつたので正直なところ嬉しかったりする。

だけど前世の経験からモヒカンが沸いていないのか疑ってしまうのだが。

ボルシチとウオツカが無ければ増殖はしないはずなのだが、どうしても警戒してしまう。

半裸のモヒカンが狭い密室で犇めきながらボルシチとウオツカを決めてパーティーしているという地獄のような光景を思い出ししまい、それを忘れるために空を見上げる。街灯や町の灯りのせいで見えづらくなっているのだが、雲一つない夜空には三日月と大小様々な星がはつきりと輝いていた。

モヒカン・ボルシチ・ウオツカ・パーティーの記憶が徐々に薄れて行き——その最中で、突如として三角錐型の結界が展開されて台無しにしてくれた。

「マジかよ」

「ねえ、どうして人が居なくなつたのかしら？」

結界が展開されたという事実にもヒカン・ボルシチ・ウオツカ・パーティの記憶は消し飛んだ。しかし、結界内には俺と愛歌以外の人の姿は見え無くなっている。

ミッド式と呼ばれている魔法の結界は半円型であり、今回の三角錐型の結界では無い。それに付け加えて俺と愛歌の共通点、そして居なくなった人間などの情報に原作での出来事を照らし合わせればこの結界を張った下手人と目的は簡単に割り出せてしまう。

「愛歌、敵襲だ。守るつもりだけど方が一に備えてくれーレギオン」

『Yes master.』

『Set up.』

変身する手間も惜しいと子供の姿のまま、ハスターでは無くてジェイルに作ってもらった新しいナイフ型のデバイスーレギオンを起動させる。最初の頃は生意気だったレギオンだが、ハスターとお話された事で影響されたのか、今では従順なデバイスになっている。問題があるとするなら、俺よりもハスターのいうことの方をよく聞くというところだが……今の状態にしてくれたのはハスターなので文句は言わないように気をつける。

レギオンを起動させた事で、設定していたバリアジャケットが展開される。ハスターを起動させた時の黄色いコートでは無くて、全身を覆い隠すようなフード付きのボロボロのローブ。ハスターの時のように簡単にバリアジャケットが思いつかなかったので愛歌にデザインを頼んでみたのだが、こんな暗殺者のような格好になってしまった。しかし動き易さやレギオンの携帯などは俺が思っていた以上に優れていたので愛歌のデザインを採用する事にしたのだ。

ローブの裏と身体の彼方此方にレギオンが存在しているのを確認する。今まで何度かセットアップしているので場所が変わっていないかを確認している訳ではなく、戦う前に行うルーティンワークとして確認しているだけだ。

しつかりと20本が存在している事を確認すると、上から気配を感じる。

「……警告する。我々の目的はお前たちの持つリンカーコアだ。大人しく提供してくれるのなら必要以上に危害を加えない事を約束する。だが、もし断るといふのならば実力行使だ。例え手足を粉碎しでも、リンカーコアの魔力を奪わせてもらおう」

俺たちの頭上、何も無い空中に立っていたのはピンク色の長髪をポニーテールのように纏めた女性と青い毛並みの大型の狼。手に持つ機械仕掛けの剣と騎士のようなバリアジャケット、凜とした佇まいから女性の方は女騎士のように見えてしまう。彼女と狼の纏う雰囲気は管理局員の物とは比べ物にならない程に研ぎ澄まされていて、戦う者という印象が強い。

そして何より、女性の方の胸元の2つの大きな膨らみが驚異的だった。

「あああああああー!!卑怯よ!!卑怯だわ!!女騎士で巨乳とか属性が卑怯過ぎるのよおッ!!」

「……お前の連れ、頭は大丈夫なのか?」

「割と平常運転だから心配しないでくれ。そのうち治まるから」

女騎士のご立派な胸元を見てしまい、愛歌は泣き叫びながらその場に崩れ落ちて地面を殴っている。その有様に敵であるはずの彼女からも心配される始末だった。狼の方も今は絶対のチャンスであると

いうのに仕掛けて良いのか迷っている様に見える。どうやら有無を言わさぬ二択を突きつけて置きながら、その性根はお人好しの様だ……いや、命令があれば問答無用で容赦無しに仕掛けて来ていただろう。

初対面ではあるがそうだと知っている。そういう存在であると知っている。

《ハスター、外部との通信は？》

《念話による通信は妨害されています。ですが、いつも使われているチャット機能による通信なら、一文程度であるなら一方通行ですが伝える事が出来ます》

《なら桜木に伝えてくれ》

愛歌を慰めながら、仕掛けてこない隙をついてハスターに桜木との通信を頼む。本当ならば念話による通信が出来れば一番だったのだが、敵の事情を考えれば通信妨害なんてして当たり前だ。寧ろその対策をしていなかったこちらに非がある。

こんなタイミングで仕掛けてくるとは思っていなかった。言い訳をするのならそうだったところか。

《SOS……それとA、s、その2つだ》

闇の書の騎士たちによる原作の第2部……その幕開けだった。

「よおしよし、良い子だ……少しは落ち着いたか？」

「グズツ……ごめんさない、迷惑かけて……」

「何、いつもの事だから気にするなよ」

女騎士のご立派な胸元を見て絶望に打ちひしがれていた愛歌を慰める事数分、漸く彼女は人の言葉を話せる段階にまで落ち着いてくれた。まだ成長の余地があり、自分もそうなる可能性があるというのに見ただけでここまで発狂するのは成長する可能性が無いことを無意識の内に悟ってしまっているからなのか……言葉にしたら悪性情報の触手を出して暴れそうなので思っておくだけにしておこう。

さて、と慰めていた愛歌から離れ、律儀に待っていてくれていた女騎士と狼に向かい合う。

「悪いな、こつちの用事で待たせて」

「どうして突然泣き出したのか理解出来ないがそちらにはそちらの事情があるのは理解している。気にするな」

「うーん、見た目だけじゃなくて中身までイケメン」

凛々しい外見と相まって彼女の発言を聞く限りではイケメンにか見えてこない。これが噂に聞くオツパイの付いたイケメンという奴なのだろうか。きつと彼女が男装をしたら女からキャーキャー言われるに違いない。あのご立派な胸元を隠すのは勿体ないと思うが。

「兎に角だ、そつちがリンカーコアの魔力を求めているのは分かる。ただどだからと言ってハイそうですかと気軽に渡せるものでも無い。加えて、リンカーコアからの魔力の譲渡は大なり小なりの苦痛が伴うらしいからな、素直に頷きたく無い」

「そうか……なら」

「まあまあ、話は最後まで聞けよ。魔力集めて何をしようとしているのかは分からないけど、そっちにも事情があるんだろ？だから、1つ提案したい……俺と勝負だ。そっちが勝ったら魔力を持っていくなりなんなり好きにしろ」

ローブの中からレギオンを二本取り出す。うろ覚えになってきたが、記憶が正しければ彼女たちは闇の書の騎士たちで、闇の書を完成させる為にリンカーコアから魔力を蒐集している筈だ。俺にはリンカーコアは存在しているが、愛歌はリンカーコアを持っていない。そのことを話したところで向こうは信じてくれないだろう。愛歌は魔力こそ桁外れに多いのだが、戦う者では無い。なので、逃げる事が出来ないこの場では俺一人が戦うしか選択肢は無かった。

一応愛歌の魔力は桜木の財宝で隠蔽していたはずなのに愛歌も結界に取り残されるのは相手の方が上手だったからだと考えよう。闇の書は確かベルカ時代に作られた魔導書だと聞く。現在では管理局により所持どころか研究すら禁じられている兵器を息をするように使って殺し合っていた地獄の時代の遺物なのだ。桜木の財宝による隠蔽を超える程の索敵能力があってもおかしくない。

「ほう……それは後ろの少女を守るためか？」

「分かっているなら聞かないでくれ。恥ずかしいから」

「……良いだろう、その提案を受けよう。加えて私が勝ったらお前から魔力を蒐集し、そちらの少女にはこの場では手を出さない事を約束する」

「良いのか？あの少女の魔力はかなりの物だが」

「済まないな、ザフィーラ。あの少年を見ていると微笑ましくなってきた……か弱い少女を守る為に命を賭ける。まるで本物の騎士の様ではないか」

女騎士は眩しそうに、そして羨ましそうに俺たちの事を見ていた。闇の書の騎士となり、騎士としての働きとはかけ離れた行いをさせられたのだろう。だからこそ、俺の事を見てそういう風に感じてしまっている……それこそ、なさねばならない事を一時の感情で止めてしまう程に。

それに関しては思うところはあるのだが、彼女はそれを承知の上で言っているのだろう。デメリットは無く、メリットしか無いこの提案を断る理由は無かった。

「良いのかよ、そんな気分で決めて」

「構わん。この場ではと約束したが他の場ではと言っているわけでは無いのだからな。別の場で出会ったのならその時は蒐集させてもらう」

「……ホントイケメンだよ。なんで女か不思議に思うわ」

俺が女なら抱いて欲しいと懇願してしまう程に今の彼女の姿はとも格好良かった。騎士を目指すのならこうでありたいと思うほどに、彼女は自分の気持ちに真っ直ぐで、だけでも騎士として命令を下されたのならそれを無視して行動出来ると思えば知らされる。

彼女たちは地面に降り、狼の方は離れる。どうやら一対一で戦ってくれるらしい。元々は一対二で戦うつもりだったので都合だった。

「闇の書の騎士、烈火の将シグナムだ」

「魔術師、加賀美両夜」

本来ならば馬鹿馬鹿しいと言って切り捨てるはずの名乗り合いだが、彼女に敬意を表する代わりにその名乗り合いに付き合う。女騎士——シグナムはデバイスである剣を構え、それに習う様に俺もレギオン二本を逆手に握って構える。

「いぎ、尋常にーー」

「勝負ーーッ!!」

足場のコンクリートが砕ける程に全力で突貫、そしてシグナムと衝突しーー俺だけが弾き飛ばされる。

シグナムは成人女性で、俺は未成年。純粹な質量はシグナムの方に軍配が上がるし、彼女の方が身体強化が強く施されている。確か古代ベルカ式の魔法は近接戦に特化しているのだったか。ミッド式の魔法の身体強化が劣っている訳ではなく、向こうの方が優れている。故に、最初の衝突は負けることが分かっていたので慌てない。

吹き飛ばされながら二本のレギオンをシグナムに目掛けて投擲する。不意を打ったわけでも無い単なる投擲は彼女には見戯に等しく、防ぐまでも無く最低限の体捌きだけで躲されてしまう。

正面からでは戦いにならない事など初めから分かっていた。なので、今使える物を使って食らいつき、シグナムの戦い方を学ばせて貰う。

「霧に霞に紛れ込み、ゆめうつ夢現 と迷い込め」

着地しながら体勢を整えて幻覚の魔術を行使すると、俺が5人に増えてそれぞれが動き出す。2人は正面から向かっていき、残り2人は左右から迫り、本体である俺はシグナムの注意が幻覚に向いた瞬間に気配を薄くする。

「幻か」

流石は闇の書の騎士。存在している期間が長いことはあって、それ

に比例するように経験も豊富なのだろう。突然増えた俺の幻覚に一切動じる事無く、冷静に剣を連結刃へと変化させ、鞭のように振るつたその一振りで幻覚の俺を全て斬り伏せた。

もう少しは持つと思っていたのだがまさか一瞬で全滅させられた事に軽くショックを受けつつ、本体の俺を見失っているシグナムの背後を取って斬りかかる。狙うのは人体の急所である首。

完全に死角からで、意識外からで、不意を打った一撃だったのだが、彼女は振り返る事すらせずに元の状態に戻した剣を掲げてその一撃を防いだ。

「成る程、囷だな？」

半歩程後ろに下がり、頭上から落ちて来たレギオンを躲す。見ていなかった、見えていなかったはずなのに当たり前のように避けられたのは見覚えがある。恐らくは経験則による回避なのだろう。前世のアジアに跋扈していた拳法家どもや、ジェイルのところのパンダが同じような感じで避けたのを見た事がある。

狙っていた必殺が避けられた以上、接近している意味は無い。自ら弾き飛ばされるようにしてシグナムから離れ、再び幻覚の魔術を使って本体は気配を隠す。

現状では俺は全てにおいてシグナムに劣っている。力や技術は言うまでもなく、戦闘経験に魔導師としての経験もだ。

経験というのは持っているだけで価値がある。昔では長く生きていただけでリーダー扱いされていたりしていたが、それだって長く生きていく為には他よりも多くの経験を積んでいるから、多様な問題に対処出来るという理由から来ている。前世での経験を入れれば密度だ

けなら負けていないという自信はある。しかし闇の書の騎士として長年戦い続けて来た彼女の戦闘経験は俺とは比べものにならない程に多い。さっきの必殺のつもりで放った頭上からの一撃も、前に似たような事をされた経験があるのかアツサリと看破されて躲されてしまったように。

唯一勝てそうな気配があるのはスピードくらいなのだが、それさえもシグナムの本気を見ていないので不明であるし、仮に勝っていたとしても経験していたという理由で簡単に対処されてしまいそうな気配はある。

現に今だって、彼女は幻覚を切り捨てながらも背後からの奇襲を警戒し、その上で隙を見せている。その隙を喜んで突きに行けば切り捨てられる未来しか見えない。試しに幻覚が切り捨てられるタイミングを見計らってレギオンを投擲する。完全に振り切った状態で、回避したとしても体勢を崩す事になるはずのタイミングでの投擲は狙い通りに体勢を崩し、そしてそのままデバイスを振った遠心力を生かして振るい、左右から迫っていた幻覚を切り裂くという結果に終わる。

冷静に彼我の実力差を見極めて、シグナムには勝てないと悟る。格上との戦闘という点では以前に戦ったプレシアと同じなのだが彼女は生粋の魔導師で、どちらかと言えば学者肌であったので彼女の予想を上回ったところで生じた動揺を突けば勝つことが出来た。

しかし、シグナムにはそれが通用しない。

例え彼女の予想を上回る事が出来たとしても、「ああ、そう来るのか」とそれだけで受け止めてしまい、動揺する事なく冷静に対処されてしまう。そもそも経験の多さから、「前にもこういう事をされた事がある」と動揺させる事さえ出来ないだろう。

やりにくい相手——それが俺のシグナムの評価だった。

「どうした？いつまでも幻覚に紛れていては勝てるものも勝てないぞ」

「元々の勝率が絶望的過ぎるんだ、このくらいは見逃してくれよ」

もしかしたら隠れている位置さえバレているかもしれないが念のために魔術で声の位置を誤魔化しながらシグナムの軽口に付き合う。そう、この勝負はあまりにも絶望的過ぎるのだ。

戦闘経験が豊富な闇の書の騎士、その将を務めるシグナムに静観はしているもの。いつ乱入して来てもおかしくない青い毛並みの狼。そして結界内にいる愛歌の存在。

シグナムはこの場では愛歌を見逃すと言ったものの襲撃者である彼女の言葉を簡単に信じる事は出来やしないし、静観している狼が彼女を襲わないとは限らない。愛歌と狼に気を引かなければならない事になり、シグナムだけに集中する事が出来ないでいた。

勝ち目が無いからとリンカーコアの魔力を渡して引かせる事も考えたのだが、後々の事を考えればそれは余りにも悪手である。記憶が朧げになっているのだが、闇の書を完成させた事で出現した闇の書の闇は蒐集した者の魔法やスキルを使っていた。もしもそれが転生者である俺たちにも適応されるのなら、最終決戦で闇の書の闇を強化することになってしまうのだ。俺や黒須のような魔力変換資質はまだ良いかもしれないが、赤城や御剣のスキルを使えるようになれば手のつけられない存在が誕生してしまう。幸いなことにスフィアの監視によればまだ彼らは魔力を蒐集されていないようなので、それだけは絶対に避けなければならない。

と、改めて状況を確認したら色々と絶望的過ぎて泣きそうになるど

ころか一周回って笑いそうになってしまう。しかし、絶望的だからといって勝てない訳では無い。時計を出して時間を確認する。家からここまでの距離を考えればもうそろそろやって来ても良い頃合いだろうなと思っていると、

上空から爆発音が聞こえてきた。

来たかと思えば見れば、結界の一部が破壊されて再生している途中。そして上空には黄金に輝く一隻の飛行船が浮遊していた。

「……全く、いつまで待っても戻らぬと思えばこの様な雑事に手を焼いていたとはなあ」

黄金の飛行船に備え付けられていた玉座には1人の少年が座っていた。光り輝く黄金の飛行船の輝きさえ霞む金髪に鮮血の様に鮮やかな赤眼。服装はパーカーにカーゴパンツという有り触れた格好だったが、その左腕には鎖が巻き付けられていて、それだけで彼が少なくとも荒事に参加する意思があるのだと証明している。

傍観に徹すると発言していた転生者の1人、桜木累がこの場に現れた。

「悪かったって。こっちにも色々都合があるんだよ」

「大方マナカの事であろう？手段さえ選ばなければ、貴様であれば傀儡の1つや2つなど苦戦はすれども負ける事は無い。あやつが巻き込まれたからこそ、貴様は行動を制限させられている」

「分かっているのならどうかしろよ。飯抜きにするぞ」

距離は離れて声が聞こえないでいるが何を喋っているのか大凡理解出来るので会話が成立している。桜木はフンつと鼻を鳴らすと左手を愛歌の方へと差し伸べ、巻き付けられていた鎖を伸ばして愛歌を

黄金の飛行船に釣り上げた。

「遅いわよ桜木君。負けるとは考えてなかったけど、凄いい心配したんだから」

「ちようどドラマの時間と被っていたのだ。許せ」

愛歌がその発言にキレてアツパーカットをかました。桜木の顎が跳ね上がり、玉座から落ちて痛み悶え苦しんでいるのが伝わってくる。

ともあれ、桜木が愛歌のそばに居てくれるのなら心配する必要はないだろう。前に一度だけ、頼み込んで桜木と模擬戦をした事があるのだが、桜木の存在は「戦争」と同意義だった。もしも桜木が敵になるのなら戦う事を徹底的に避けて、隙を見つけて暗殺しなければ倒せないと思うほどに強烈で強大で強靱なスキルだったのだ。

そんな彼が愛歌のそばに居てくれるのであれば、例え闇の書の騎士だろうが愛歌に手を出す事は出来ない。

「さてー殺りますか」

愛歌に意識を向けなくても良くなった事で、絶望的だった勝率が僅かに上がった。それでも勝つのは難しいことには変わらないのだが、よくよく考えてみればそんな事は前世では日常茶飯事であった。

なら、前世でやっていたように勝つ。それだけだと結論付け、レギオンを握り直した。

桜木の登場により愛歌の危険が無くなったので幻覚を全て消し、気配を殺す事も辞めてシグナムの前に立つ。

「成る程、今までののは時間稼ぎだった訳だな？」

「ああ。あんたは手を出さないとはいったけど、あつちのワンワンは分からないからな。助けを呼んで、来るまで適当に凌いでたんだよ……怒った？」

「いや、己の可能不可能を見極めてその範疇で彼女を守ろうと手を尽くしている。外道や非道と呼ばれる手ではない限り、それらを称賛こそすれども怒る理由になりはしない。それと、ザフィーラは犬では無くて狼だ」

「イケメン過ぎるだろ。なんで女やってるんだよ」

「生憎と私のオリジナルは女に生まれてしまったからな。父にもどうして女に生まれたのだと真顔で言われたものだ」

オリジナルという言葉に首を傾げるが、よくよく考えてみればそれは不思議な話ではない。シグナムたち闇の書の騎士は闇の書のシステムの一部である。防衛手段の一つとして作られた彼女たちだが、そこには元となった人物たちがいるはずだ。シグナムの言うオリジナルとはその人物の事を指しているのだろう。

軽く自然にあの狼の事を侮辱するような言葉を会話の中に混ぜてみたのだが、シグナムは愚か狼の方も乱入していた桜木を警戒しているくらいで反応を見せなかった。侮辱に怒り、思考が狭まって行動が単純化される事を狙っていたのだがそう上手くはいかないようだ。

人型で、感情と思考がある以上は絶対に踏み込んではいけない領域が存在している。時間をかけてシグナムの事を観察すれば、そのライ

ンは見つかりそうなのだがそこまで長く戦うつもりは無いので今回は諦めることにする。

「幻覚を消して目の前に現れたと言うことは、正面から挑むつもりか？ 敵わないと悟ったから幻覚に紛れ、暗殺者のように振舞っていたのでは無いのか？」

「全くもって仰る通りだ。だけど、生憎と敵わないからって理由で戦うのを止められる程に諦めが言い訳じゃないからな。裏からこそこそするよりもこうした方が勝てそうだと思っただよ……それに惚れた奴と友人の手前だ。格好付けても良いだろ？」

勝機が存在しないからと言って泣き叫ぶのはあまりにも格好が悪過ぎる。

俺が愛し、俺を愛してくれる人が見ているのだ。敵対する事など考えられない、同じ境遇の友人が見ているのだ。

ならば……粹がってやろうでは無いか、見栄を張ってやろうでは無いか。そのくらい出来なければ、男でいる意味が無い。

レギオンを握ると同時に残数を数える。投擲に使用し、回収してないので残りは10本程。耐久度を考えればシグナムの剣戟を受け止める事は愚策であり、避ける以外には無いのだが、どこかで必ず受け止めなければならぬ時が出てくる筈だ。それを考えれば心許ないが、回収させてくれる隙をシグナムが与えてくれるとは思えない。まあ、それさえも仕込みに行っているので無駄では無いのだが、通じても一回だけだろう。2度目なんて通じるとは思えないし、そもそも一度目も経験則から躲されそうであるから期待しない方がいいかもしれない。

「……クックック、お前は馬鹿だな。もつと賢く振る舞えばいいのに」

「賢く振舞って息苦しさを感ずるよりも、馬鹿でいて楽しく生きたいんだよ」

「だが……ああ、私はお前のような馬鹿は嫌いでは無い」

そう言われてシグナムは微笑み、照れ臭さを感じて少しだけ顔が熱くなるのを感じる。シグナムの様なクールタイプの美女から嫌いでは無いと、凛々しい表情を僅かにだが崩して微笑まれたのだ。男である以上、それを嬉しく思わない筈がない。

しかし、その熱も黄金の飛行船……ヴィマーナから放たれた視線によつて一瞬で引いてしまう。

思わずヴィマーナを見れば、愛歌が瞳孔を開ききつた目で俺の事を見ていた。距離があるので会話は聞こえていない筈なのだが、どうして分かったのだろうか。

「よおし、ちやつちやとバトろうか!!」

「ああそうだな。少しばかり時間をかけ過ぎた」

愛歌の視線に耐え切れなくなり、急ぐ様にしてレギオンを構えて、シグナムが構えるよりも先に突貫する。

「身体強化……思考高速化……」

『Yes master.』

眩く様な指示にハスターが反応し、その通りに身体強化魔法と思考高速化魔法が行使され、突貫の途中で一気に加速してシグナムに肉薄する。

負けるつもりは無い。しかし、今の俺ではシグナムに勝てない事は分かっている。唯一優っているのかもしれないものはスピードだけ

で、それさえも時間をかけ過ぎれば慣れられてしまう。

故に、先ずは一撃を叩き込む事を目標にする。

突貫の途中の身体強化の行使により、タイミングを外した筈なのだがそれさえもシグナムの予想から出ていなかったのか、外した筈のタイミングを合わせられて剣を振るわれる。

「加速——」^{accel}

速さが足りなかった。このままでは直撃し、戦闘不能になると高速化した思考で考えて、速度だけを上昇させる魔法を行使。更に加速する。

「加速——」^{accel}

振り下ろしの一撃を寸でのところで躲す事に成功したものの、回避に集中していたせいで反撃まで移れ無い。そもそも、今のタイミングで無理やり攻撃したところで受け止められてから返しの一撃で終わっていたので攻撃する意味が無かった。

それをシグナムに追い付かれているから、速さが足りなかったからと結論付けて、更に加速する。

「加速——」^{accel}

シグナムが追いつかない速度を目指し、更に加速する。現状で、スピードだけ見るのならばシグナムに勝っているのだろうが、彼女には長年存在して戦い続けたことによる経験がある。俺の動きを先読みし、最低限の体捌きだけでついて来られて剣を振るわれている以上、総合的な速さではまだ負けているのだと判断する。

「加速——」^{accel}

だから、まだ加速する。減速する事など一切考えずに、身体が無茶苦茶な加速に耐えられなくなりつつあって痛みという形で警報を鳴らし、視界に映る光景が段々と認識し辛くなってくる。

いかに身体強化と思考の高速化を施したところでそれには限度が存在する。いくら身体のパフォーマンスを引き上げたところで上限以上の能力を発揮しようとすれば耐えられなくなって自壊するし、情報処理能力を上げたところでそれ以上の情報が入れば処理出来ずにパンクする。

今の俺の状態がそれだ。加速に加速を重ねた事で身体は自壊する寸前、高速移動の影響で情報処理能力を上回る情報が入った事で脳はパンク寸前。ここまでして漸く互角かどうか……いや、シグナムを振り切れていないのだからまだ劣っている。

これ以上の加速は危険だと理解し、判断した上で、

「加速加速加速——ツ!!」^{accelaccelaccel}

「まだ速くなるのか——!!」

それがどうしたと全てを一蹴して更に加速する。身体があげる警報はアドレナリンを出す事で誤魔化し、パンク寸前の脳は視野を意図的に狭める事で情報を制限する。勝てない勝負に挑むという状況に、だからこそ必ず勝つてやろうと興奮し、心臓が煩いくらいに稼働して大量の血液を目まぐるしく全身へと送る。

度重なる加速にシグナムは漸く表情を驚きで崩す。だが、まだ彼女の目は俺の動きを追い掛けて、彼女の剣が先読みで振るわれている。

「違うー！ー！こうじゃない」

身体が無茶苦茶な加速に痛みを訴えると言うことは、性能以上の能力を発揮しようとしていることもあるだろうが使い方が間違っているのだと直感で悟る。道具だって正しく使えていないのならすぐに故障する様に、俺が自分の身体を正しく使えていないから悲鳴をあげているのだと。それを模索している時間など無い。そんな暇を、目の前の彼女が許す筈がない。

だから、見て覚える。

最小限の無駄の無い動きだけでシグナムはスピードで優っている筈の俺に追いついている。無駄が無いということは、不要な動きを削ぎ落とした正しい動き方だという事。俺はそれを求めている、目の前に丁度いい手本が存在している。それならば、それを利用しない手はない。

目を限界まで見開き、狭まった視野でシグナムの動きを観察する。筋肉の力み方を、重心の移動の仕方を、関節の使い方。全てを見て覚える。だが、覚えたところでそれはシグナムの動き方であって、俺が使える動きでは無い。なので、覚えるのと平行して自分の動きへと最適化する。こうか、それともこうか、などと模索し、試している暇などないので直感任せの一発勝負。

「ッ!?また速くー！ー!!」

「アッハッハ!!いいなあコレー！ー!!」

結果、それは成功した。身体からあがっていた悲鳴いたみはアドレナリンが要らなくなる程に引いていき、それなのにスピードは更に増していく。興奮からあげてしまう高笑い、あまりの速さで生じてしまう残像が、シグナムの振るう剣閃によって斬り刻まれるのを後ろ目で捉

え、それにより更に気分が良くなる。

ここに来てシグナムの先読みは通じなくなっていた。いや、先読みされている事には変わらないのだが、それが行動に移されるよりも前に俺がその場から居なくなってしまうているのだ。いくら経験則により俺の行動が先読み出来るとしても、それに身体が追いつかなければ意味を成さない。シグナムが手を抜いている可能性もあるのだが、悔しそうに歯を食い縛りながら剣を振るっている彼女の顔を見る限りではそれは無いだろう。演技であるかもしれないが、それが出来る程に器用には見えなかった。

つまり、ここに来て俺は速度でシグナムを凌駕した事になる。

仕掛けるのならばここでしかないレギオンを握り、シグナムの首を狙う。狙うのは人体の急所である頸動脈。受けるのは不味いと考えたのか、シグナムは剣を持たない左手を盾にしてレギオンを受け止める。超高速で動く物は少量の質量であろうと多大な被害を産む。ネジのボルトサイズのスペースデブリで人工衛星が致命的な損害を負うのと同じ様に。

レギオンにプラスして俺の全体重を乗せた一撃は、盾にしたシグナムの左手を容易く斬り裂いた。バリアジャケットのせいで切断までとはいかなかったが、それでも使い物にはならない程の大きな負傷。

「――紫電一閃ッ!!」

しかし、シグナムはそれを無視する。攻勢に回ったことで、左手という障害にぶつかった事でスピードが落ちた一瞬、そこそがシグナムの狙っていた瞬間だった。レギオンに斬り裂かれたというのに痛みにも顔色を変える事無く剣から薬莖を吐き出し、魔力変換資質による産物と思わしき炎に包まれた全力の一振りを放つ。

それを見た瞬間に、回避も防御も不可能だと悟る。避けるにしてもからだを酷使し過ぎたせいで咄嗟の反応が遅れてしまい、防御なんてそれごと斬り伏せられるのだから。

故に、

「アーレギオン、群がり絡め取れ」

『Yes master.』

ここまで終ぞ使う事のなかった仕込みを使う事にした。周囲には撒かれたレギオンからシグナムの剣と同じように葉莖が吐き出され、柄の部分からワイヤーが伸びてシグナムを拘束する。

「ほう、ここまであのデバイスを回収しなかったのはこの為だったか」「そーだよ。元々は攻撃用にするつもりだったけどな」

拘束したとはいえワイヤーの経は細い。思っていた通りにシグナムはワイヤーを力技で引き千切って自由になるが、出来た一瞬の隙の内にシグナムの間合いから離れる事に成功した。

「驚いたぞ。まさかお前ほどの年頃で躊躇いも無く私の腕を斬るとはな」

「生憎と過去には色々とあつてね、躊躇えば死ぬって事は嫌になる程に理解してるんだ」

思い返すのは前世の故郷。力が無ければ食い物にされ、善意を見せれば使い捨てられ、最後には死体すら余す事なく利用されるというクソのような環境。あそこで生きていくためには躊躇いなど邪魔では無かった。

それを聞いて納得したのか、シグナムは再び剣を構えた。左手は動かさないようにしているものの負傷は完全に無視している。コレで応急処置でもしてくれればその隙を狙っていたのだが残念だと思いつながら、さっきの攻撃で刃がダメになったレギオンをしまつて新たなレギオンを取り出す。高速移動での攻撃に付け加えてシグナムのバリアジャケットのせいで後少し負荷を加えたらそのまま折れてしまいそうだ。一応自動修復機能が付いているのだが、使える本数が減った事には変わらない。

シグナムの速さの限界は見た。再びそれを超える速さで攻め、殺しはしないが動かなくなるまで痛めつける事にしようと思いついたところ、

警報のような、耳障りなラツパの音が聞こえ、俺の上に影がさした。シグナムから警戒を逸らさずに、視線を上に向ければ――

「は――？」

ミサイルをぶら下げた戦闘機が飛んでいて、ミサイルをしこたまばら撒いていた。

ミサイルの襲撃に気がつくのと同時にその場からロープで顔を隠しながら飛び退く。すると、その数瞬遅れでミサイルが地面に着弾し、紅蓮の焰を撒き散らしながら盛大に爆発した。爆弾の一番の脅威である爆風はそれよりも速く飛び退いている事により無害となり、爆発の影響で飛んでくる破片はバリアジャケットであるロープでガードしているので無傷。あれが非殺傷設定されているとは考え難いので、多少の負傷を覚悟していたのだが、無事に避けられた事に安堵する。

そうして突然の襲撃によりシグナムへ向けていた集中が途切れ、この場に俺たち以外の人間の視線がある事に気がついた。ビルの上に立っているその人物は現代には残っていないはずのナチスのシンボルである鉤十字ハルケンクロイツの付いた軍帽と外套を羽織っていて、顔はまるで能面を思わせる様に無表情で蒼白。

そして何より特徴的なのは、その人物の首から花卉が散っている事だった。

《桜木、アレって転生者だよな？特典がどんな物か分かるか？》

《えつと……ちよつと待ってください。見覚えがあるからどこかで見た事があるはずなんだけど……!!》

《頑張って思い出してくれ。主に俺の為に》

桜木が外にいる時には使えなかつた念話チャットだったが、中に入った事により問題なく使えるようになっていたのでそれを使う。赤城ではなく、御剣でもない転生者の正体はもう分かっている。分かっているのは転生特典だけで、その不明が一番怖かった。

未知であるというのはそれだけで恐怖するのに十分な理由となる。さっきの襲撃を見る限りでは爆撃機を召喚してミサイルで広範囲を爆撃していたが、それだけだとは限らない。攻撃する為に間合いに踏み込んだ瞬間、そのまま即死してもおかしくないのだ。

「お前か……どうしてこの場に来た？」

「……ヴィータが時空管理局と交戦している。蒐集は一旦中止し、助けに向かう」

「時空管理局に？……仕方がないな」

あのタイミングの襲撃で予想はしていたが、あの転生者はシグナムの仲間だった様で気軽に話しかけていた。他にも仲間がいるのだろう、その人物が時空管理局と交戦していると転生者から告げられると、少し悩むと名残惜しそうに剣を下げる。

「これからなのに済まないが仲間を助けに行かねばならない。この勝負、一先ず預けておくぞ」

「どーぞどーぞ。負けを覚悟してた勝負がお預けになるのなら喜ばしいからな」

もしも転生者が何もかもを無視して俺を攻撃していたら間違いなく負けていた。シグナムはその介入に対して不愉快には思おうかもしれないが、最終的には目的を優先してそのまま手を組んで襲ってくるのが簡単に予想できる。その場合は離れた場所にいた狼ーラザファイラも間違いなく参戦していただろう。桜木は基本的に傍観に徹しているので助けは期待出来ない。

トンつと軽く地面を蹴り、シグナムとザファイラは飛行魔法で飛びながら転生者のそばまで移動する。そしてシグナムはバリアジャケットの袖をまくって肌を露出すると、転生者は彼女の肌に爪を立てて傷を付けた。

その瞬間、転生者の身体から黒いモヤが噴き出す。それだけでも異常だと言うのにその黒いモヤには幾多もの縦になった目が蠢き、その目のどれもが例外無く一つの目に二つの瞳があった。

《気持ち悪ッ!!》

《一つの目玉に瞳が二つ……重瞳……?もしかして項羽の『万象儀』?だったらさっきのはルーデルの『不死鳥』?》

《思い出せたのなら後で教えてくれ。奴さん、捨て台詞吐きながら撤退するみたいだから》

黒いモヤに蠢く目を見て転生特典に関して思い出したらしいがそれを気にしている余裕は俺には無かった。

何故なら、黒いモヤに包まれている転生者から敵意が向けられているから。

「そこのお前。お前はシグナムを傷付けた。私はそれを許さない」

「閉じ込めて襲って来たのはそっちからだ。正当防衛だからセーフセーフ」

「そうだとっても。これが八つ当たりだってことは分かってる……それでも、許せないものは許せない」

それだけで何を言っても考えを変えないのを悟り、降参の意を示す為に両手を挙げてみる。少なくとも、あの転生者は自分の感情が八つ当たりだって事に気がついていない。これで甘ったるい理想論を垂れ流す様なら適当に暗殺でもして退場させていたのだが、キチンと自分の感情と状況を把握して理解している上での言葉ならば受け止めるだけだ。

身内を傷付けられて許せる様な奴など、その怒りが簡単な言葉で覆

る様な奴など、見ていてもつまらないだけだから。

言いたいことを言い終えたのか、転生者はシグナムとザフィーラと共に黒いモヤに包まれてその場から姿を消した。ハスターの探知に引つかからなかったところを見る限りでは今の移動は魔法によるものではない様だ。

そして彼らがいなくなってから数十秒、もしかしたら奇襲されるかもしれないと警戒していたが、時間が経ってそれは無いと分かったところで全身から力を抜き、その場に崩れ落ちた。

「両夜ツ!!」

それを見た愛歌がヴィマーナから飛び降り、触手を器用にビルに引っ掛けながら降りてくる。それを見てもリアクションをすることでろか軽口を叩く事さえ出来ない。身体強化とシグナムの体捌きの最適化、それに加えてアドレナリンで誤魔化していたのだが、俺の身体は度重なる加速によって限界を迎えていた。どうにか戦場特有の緊張感でギリギリ動ける程度で留まっていたのだが、彼女たちが去った事でそれが一気に吹き出してしまったのだ。

《ハスター、回復頼む。動けるようになる程度で良いから》

《了解しました》

《レギオン、初めての实战ご苦労様。回収が怠いから自動で集まってくれ》

《承知しました》

《はい》

《あいあい》

《わはー》

念話でデバイスたちに指示を出していると、ハスターの回復魔法が

効いて来たのか身体から痛みが徐々に消えていく。回復魔法は便利そうに見えるが人間の身体……正確には細胞には回復出来る回数というのは決まっている。それを無理矢理回復させるといふことは、若干ではあるが寿命を縮めている事と同じなのだ。それは乱用しない限りは誤差の範囲で済むような僅かな物だが、これからの事を考えれば出来る限り自然治癒で治しておいた方が良くと理解している。

回復魔法の具合から、後五分もあれば動けるようにはなるだろうと考えていると、そばに愛歌が駆け寄ってくる。

「両夜、大丈夫？」

《あー……口動かせないからチャットで話すけど大丈夫。ちよつとばかり無茶をしただけだから》

「動けなくなるような状態でちよつとの無茶って何よ」

《返す言葉も無い》

《まあまあ、加賀美さんは沙条さんを守る為に頑張ったんだから大目に見て挙げたらどうですか？》

ヴィマーナを宝物庫にしまいながら、外見では不愉快そうに眉間に皺を寄せている桜木が降りて来た。相変わらずの内外の温度差に吹き出しそうになるが、今の状態で吹き出したら間違いなく激痛に襲われるのが目に見えていたのでなんとか堪える。

《そういえば悪かったな。傍観するって言つてたのに巻き込んで》

《別に気にして無いですよ。確かに初めは傍観に徹するつもりでしたが、よくよく考えてみたら闇の書なんていうジュエルシードよりも危ない物が地球にあるんです。つまらない意地で介入せずいたらバッドエンドなんて事も現状じゃ有り得ますからね》

《ホントそれな》

ジュエルシードは誰でも使うことが出来てしまうという意味で危

険物だったのだが、闇の書は下手をすればそれを上回る。原作通りに期間内に完成させる事が出来なければ主である八神はやては死亡して闇の書は転生してしまう。完成させても転生者という不純物がいるせいで原作を上回る強さになる可能性が存在し、倒せなかったらその時点で地球滅亡。

闇の書側の転生者が早まらない事を祈るしか無い。

チャットで話している間に身体が動かせる程度まで回復したと判断して上半身を起こす。軽く動かして確認すれば、勢い良く動かせば鈍痛が走るものの、ゆっくりと動かせば問題なさそうだった。

「あーあー……：良し、動けるくらいには回復したな」

「結界も無くなったし帰りましょう。今日はしっかり休んだ方が良いわ」

彼女たちがいなくなってから結界が残されていたのは彼女たちなりの気遣いだったのか。俺が動けるようになる頃になってようやく結界は消滅した。それにより、周囲から無くなっていった人の気配が戻ってくる。深夜というほどでは無いが夜なので人は疎らだったが、もしすぐに結界が無くなっていたらちよつとした騒ぎになっていただろう。

「そうしたいところだけどなあ……」

《魔力反応を確認。これは間違いなく来てますねえ……》

本音を言えば、愛歌の言うように家に帰って休みたい。しかし、今の時期が悪かった。

転生者は時空管理局と交戦中だと言っていた。街中で結界を張られているのを見逃すほど、時空管理局と言う組織は間抜けでは無い。

こことは別の場所で戦っていたようだが、それでも隠す事なく魔法が使われていたら、間違いなく見つかってしまう。

「……済まない、少し良いだろうか？」

現れたのは黒い上着にジーンズ姿の少年。それだけならばただ声を掛けられたように思えるが、彼の手に握られている機械じみたアクセサリー……デバイスを見れば、あちら側の関係者だと分かってしまう。

「時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ。さつきまで行われていた戦闘について話をしたいのだけど、付いてきて貰えるか？」

少年……クロノの言葉遣いは丁寧でこちらを気遣っているのを伺えるのだが、彼の提案には選択肢というものが存在していないかった。断れば間違いなく時空管理局から目を付けられることになり、最悪の場合実力行使で、なんて事もありえる。闇の書の騎士への対抗手段である時空管理局の戦力を削ってしまう事は好ましく無い。それに、現段階で加賀美両夜が目をつけられれば、この先が動き難くなってしまう。

どうやら休めるのはまだまだ先になりそうだ。

「……ハンバーガーのセットとか、育ち盛りの子供を舐めてるのかしら？ちゃんとバランスの取れた食事を用意して頂戴」

「……なんだ、この畜生の餌にも劣る物は？こんな物を我に食せというのか？巫山戯た事を抜かしたな？普段であればその首を落とされているが……良い、気まぐれで許してやろう。ただし、次は無いぞ」
「お前たち本当に自由だよな」

クロノ・ハラオウンの指示に従い、宇宙に停泊しているという超時空要塞アースラに連れて行かれた。そこで食事をまだ取っていないので何かを用意してくれないかと頼んだところの2人の反応がさっきの物だ。愛歌に関してはまだ理解が出来るが、桜木に関しては絶対に肉体の口調に任せているように見える。だって、いつもなら散々扱き下ろした挙句に普通に食べているのだから。

唯一桜木が一切文句を言う事なく食べたのは翠屋の商品くらいだ。

美由希さんのゲテモノ料理は出てきた瞬間に内外ともにブチ切れていたのだが。

俺は食に関しては大きな拘りは無いので運ばれてきた物を素直に食べている。下げられようとしていた2人の分まで残してもらっているので3人前と随分な量が目の前にあるが、このくらいの量ならまだ許容範囲内なので問題ない。それにシグナムとの戦闘で身体を酷使したので身体が栄養を求めている。味も質も関係無い、ただ栄養補給として食べているだけなのだ。

《マスター、念話機能とチャット機能のプロテクトを強化しました。これで外部からのハッキングを気にせずにご利用することが出来ます》

《ありがと》

アースラ内、時空管理局の懐という事で盗聴や盗み見の可能性を考えて念話もチャットの使用も控えていたが、ハスターからの連絡でそれを解禁することにする。試しにその状態のままではばらくいたが、愛歌と桜木の注文に右往左往しているだけで管理局員たちが気づいている様子は見えない。

《よし、バレる様子も無いからチャット解禁だ》

《やつとですか……警戒するのは分かってますけど、使えないと本当に不便ですね》

《桜木君の外と内の差が酷過ぎて笑いそうになつたわ。訴訟するわね？》

《やっても良いですよ？その代わりに、バビロン式弁護術によって間違はなく沙条さんは負けるでしょうけどねえ……!!》

《フッフッフ……ドラマで見た検事の技術をアレンジした愛歌ちゃん式検事アーツが火を噴くわよ……!!》

《クツソ面白そうな事は後にしてあの転生者の特典に関して教えてくれ。さっきの様子なら気がついてるんだろ？》

バビロン式弁護術と愛歌ちゃん式検事アーツというパワーワードにはとても惹かれるのだが、今はそんな事をしている場合では無い。桜木が気がついた闇の書側に着いた転生者の転生特典の情報共有をしないで。愛歌は転生者の存在を明かしているのでチャットで話題に出しても問題では無い。

《そうでしたそうでした……えっと、あの人の首から出てた花卉、それに使っていた黒いモヤと戦闘機の召喚から、転生特典は“廻り者”だと思えます》

《“廻り者”？》

《輪廻返り……輪廻の枝という刃物で首を切って、前世を遡って偉人

や犯罪者の才能を引き出す事……だったかな？輪廻返りを成した人の事を“廻り者”と言うんです。必ず“廻り者”になれるという訳ではなく、前世を引き出したからと言ってプラスの才能を得られるわけじゃないですけど、転生特典だから選べたんでしょね。ちなみに使われていた才能はドイツ軍人のハンスⅡウルリツヒⅡルーデルと楚の武将だった項羽です》

《……ルーデルと項羽って、もしかして空の魔王と西楚の霸王の事かしら？》

《そうですね。ルーデルの才能は何度も撃墜されながらも生還した事による傷付かないという形での不死の“不死鳥”。項羽の方は万象あらゆるものを闘気で支配して武器にする才能の“万象儀”だったはずです。ちなみにメインはそれですけど、おまけのようにルーデルは爆撃機に搭載されていた武器と爆撃機そのものを出す事が出来ますし、項羽の方に至ってはどうか分らないくらいにチートです》

《ルーデルの不死とか言うのもうお腹いっぱいなんだけどなあ……で、どんな感じでチートなの？》

《“万象儀”の本質は支配で、作中では他人を傷つけさえすれば何でも出来る才能だと言われています。身体に纏わせて使えますし、モヤを使つての転移も出来ますし、致命傷を負つても延命出来る。ぶっちゃけ、何でもありな能力だったりします。確か最後まで使われてないけど略式的なビッグバンっていう意味不明な技もありましたし》

《ハッハッハ……ばつかじゃねえの？》

《ちよつと何を言ってるのか分からないわね……》

ルーデルの才能の不死の時点で厄介極まり無いと言うのに、項羽の才能はそれを上回るレベルで意味不明な才能だった。何だよ、略式的なビッグバンって。

しかも、才能がそれだけだとは限らないのが厄介だ。桜木の言葉からすれば、普通は才能は1人につき一つなのだろうが、あの転生者は

ルーデルと項羽の二つの才能を使っていた。二つ使ったから二つだけだとは考えられない。それ以上の数の才能を使えてもおかしくは無い。幸い、同時に別々の才能を使う事は出来ないようだが、ルーデルと項羽の才能のそれぞれが優秀過ぎるのでさして問題にはならないのだろう。

桜木キラーになり得る “無アンリミテッド・ブレイドワークス限の剣ブリスデッド・ギア製” の御剣、10秒ごとに自分の力を倍加させる赤城の “赤龍帝の籠手”、前世を遡って偉人や犯罪者の才能を引き出す “廻り者”。

改めて並べてみると、どいつもこいつも頭がおかしいレベルの転生特典だった。

《まあ、“廻り者”に関しては魔力を消費して行われるスキルって事になってるはずなんで永遠に事は無いですよ》

《問題はそこじゃない。あの転生者が明確に俺の事を敵として見てる事だ》

《そーういえば別れ際に何か言われてたわね》

あの転生者は俺がシグナムを傷付けた事を怒っていた。襲ってきたのはシグナムの方だし、俺は被害者だと向こうは理解しているが、感情では納得出来ない。正面から堂々と襲ってくれるのならまだ良い。最悪なのは俺の周りの人間に手を出す事だ。事前の調査でそれをするような人間ではないと分かっているが、だからといって無警戒でいる事は馬鹿のする事だ。A、s編が終わるまでは警戒しておいた方がいいのかもしれない。

そんな事を考えながら最後のハンバーガーに手を出すと、部屋の扉がノックされて自動で開く。そこには肩にトゲを生やした黒いバリアジャケットに身を包んだクロノ・ハラオウンの姿があった。

「待たせてしまつて済まないな。君たちの件とは別にもう一つ事件があつてね……それと食事の件だが、悪いが今のアースラでは彼女は兎も角、そちらの少年の注文に応えられそうにない」

「なら無視してオツケーだから。むしろ、この場に居ないと認識してくれた方が話がスムーズに進むし」

「カガミイツ!! 貴様あ!!」

《加賀美さん!?!》

「分かった、ならそうさせてもらおう」

「!?!」

流石は執務官というべきか、桜木の肉体の方の問題を知つてこちらに合わせてくれる。アイコンタクトで愛歌に桜木を下げさせて、空になつたトレーを積み上げて机の上を空ける。これで俺とクロノが対峙する形になつた。桜木は呪いのせいで初見だとともに意思の疎通を交わすことが難しいので論外。愛歌は頭が良く、交渉ごとに向いていそうだが、経験が無い上に魔法世界に関する知識が不足している。なので、俺がクロノと話す事になるのは必然だつた。

「改めて自己紹介だ。僕は時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ」
「加賀美両夜。自称魔術師だけど……そつちの言い方だと魔導師の方が良いのか? それをやつてる。後ろの2人は桜木累と沙条愛歌。どつちも魔法の存在は知つてる」

《私よりも先に桜木君の名前が出たのはどうしてかしら?》

《沙条さん、お静かに》

最近、愛歌の地雷が分からなくなつてきた。ちよつとした事ですぐに機嫌が悪くなつてしまうので気を使わなくてはならない。

「そうか……どうして管理外世界なのにこつちも魔導師が出てくるんだ……地球は修羅の国か何かか?」

「半年前くらいにも馬鹿みたいに魔力の多い宝石がばら撒かれたみた

いだし、間違つてないんだよなあ……」

「魔力の多い宝石……もしかして、蒼い宝石の事を言ってるのか？」
「そうそう、それに巻き込まれたせいで魔法の事を知らなかった愛歌は知っちゃったし。何とか助けられたけどな」

間違いでは無い。重要な部分は言っていないだけで、実際にあつた事を話しているだけなのだから。嘘を付いているわけではない上にこの程度の事では心拍数は乱れる程に柔な精神はしていないので嘘発見器に掛けられてもバレないだろう。実際、クロノはデバイスらしきものに目を向けているが顔色一つ変えずに、少しも動じる事は無かった。

アースラに招かれる前に桜木から新たな隠密の財宝を愛歌に渡してもらったので、愛歌にはジュエルシード三つ分の魔力がある事はバレていない筈だ。もしもバレていけば、もつとアースラは慌ただしくなっているに違いない。

「それで君たちが襲われた件に関してだが、詳しく話してもらえると助かる。最近、近くの世界で魔力を奪われるという事件が多発している。もしかしたら同一犯かもしれないんだ」

「その様子じゃ情報は足りてないみたいだな？」

「ああ、けどどうややく犯人の姿を見る事が出来たんだ。これ以上被害を出さない為に、協力してくれ」

「良いぞ、少なくとも出された飯分は話してやる」

こちらはあくまで情報提供を求められたからそれに応じて来てやっている立場で、クロノは下手にいる立場なのだ。それを間違えればいいように利用される未来しかやって来ないので、そういう立場にあるんだと教えるように出来るだけ高圧な態度を心掛ける。

クロノの方もそれを承知しているのか、それともそういう態度に慣

れているのかは平然とデバイスの録音機能を起動させている。

「俺と愛歌が買物から帰ってる途中で結界が張られてな、シグナムっていうポニーテールの女とザフィーラっていう狼に魔力を寄せさせて襲われた……といっても直接戦ったのはシグナムの方だけなんだけどな」

「ザフィーラに関しては分からないと……シグナムの戦闘スタイルは？」

「剣一本で戦う男らしいスタイルだった。だけど剣を連結刃に変えていたから、近距離中距離はシグナムの間合いだろうな。あと、見た目に反して長い間戦ってたのか経験が豊富そうだった。俺が困りなつて上から必殺かまそうとしたら、視線動かさずに何が来るのか分かった様子で避けられたからな」

「成る程……」

「シグナム倒そうと思ったら純粹に強い奴を1人だけぶつけた方が良い。中途半端な奴を集めて物量戦で挑もうとしたら食い散らかされるぞ？実際に戦ってだけど、間違いなくそうなるって言える。集団で挑んでも良いけど、封殺出来るだけの奴ら集めないとキツイぞ」

「ならカガミはどうやったんだ？」

「俺は速さで超えた。他に勝ててそうなのが無かったからな……経験からくる先読みも、反応の行動も全部それよりも速く動けば良いって感じでハイテンションで……お陰で終わってから一度ぶつ倒れたけどな」

「医療チームでも呼ぼうか？」

「治療はしてるから大丈夫」

シグナムの情報をいくら明かしたところで俺たちには痛手にはならないので遠慮無く明かしていく。管理局の戦力がどれ程のものかは分からないが、少なくともシグナムよりも強い筈ない。管理局と闇の書側の戦力が拮抗していた方がこちらとしては好ましいのだ。その差を少しでも埋める為に、管理局はこの情報を糧に頑張つて欲し

い。

「それで、シグナムは速さで負けたから引いたのか？」

「いや、左腕斬ったけどそのまま続けようとしてな。そのタイミングでもう1人乱入して来たんだよ。で、確かヴィータって奴が時空管理局と交戦しているからって言って2人を連れて行った……さつきクロノが言ってた別の件ってそっちの方だろう？」

「流石に分かるか……その通りだ。前回、僕らが地球に来た時に協力してくれた女の子が襲われてね、さつきまでその対応に追われていたんだ。彼女はリンカーコアを抜かれて命に別状は無いけど魔法が使えない状態にある……回復の見込みがあるのが幸いだな」

「負けてたらそうだったのかよ……」

魔力を蒐集されたらどうなるか知っていたとは言え負けなかった事に、そして引いてくれた事に安堵する。リンカーコアが使えなくても魔術回路があるので魔術は使えるが、だからといって手札の一つが減るのは困る。

最終決戦時、とんでも決戦兵器が生まれる可能性は残っているが。

「と、分かっているのはこのくらいだな」

敢えて転生者の事を話しても能力については話さない。なぜ知っているかと追求されれば回答に困るし、あいつは俺を見れば優先して俺のことを狙ってくる筈だから。目的があるのでそれを達成しようとして行動するだろうが、あの手合いは感情を爆発させて仕舞えば暴走する。適当に煽って我を忘れさせ、俺にヘイトを集めておけば管理局は転生者と戦わずに済むだろう。

現時点で管理局ではあの転生者に勝つ事は出来ないし、高町やフェイトであつても勝負にもなりやしない。いくらか手札を明かす事に

なりそうだが、出し惜しめばとんでも決戦兵器が誕生して地球がアポカリプスなうしてしまう。

「情報の提供、感謝する……ところで、一つ提案があるんだが聞いてくれないか？」

「聞くだけならな」

クロノが何を言いたいのか察している。なので聞かずに断るような事をせずに、その先を促す。

「強制はしないが……よければ僕たちに手を貸してくれないだろうか」

「ーーと、言うわけで今日から外部協力者として協力してくれる事になったカガミリヨウヤとサクラギルイだ」

「どうもどうも、加賀美です。カガミきゅんと呼んだヤツは殺すので覚えておけ」

「フッハッハッハ!!我だよ!!」

「沙条愛歌です。私は戦えないので頭数に加えないでね?ーー後、両夜に色目を使ったヤツは殺す」

「?!?!」

クロノとの話し合いの結果、俺たちは時空管理局に外部協力者として力を貸すことになった。もちろん正義感なんでもので動いている訳ではなく、幾らかの打算ありきでの協力であるが。

そうやって管理局員たちが集められた食堂で、クロノに紹介された。管理局員たちは俺たちの自己紹介を聞いてもさして驚いた様子は見せずに拍手をして歓迎ムードである。こんな子供が殺し合いの場に参加する事を何一つとして疑問に思っていないようだ。これも魔法主義によって年齢による差別が薄くなった結果なのかもしれない。

「リヨ、リョーヤ!?!なんでここにいるの!?!それにマナカも!!」

「よおフェイト、久しぶりだな」

「あら、フェイトじゃない。久しぶり」

俺と愛歌に驚いていたのはフェイト1人だけ。詰め寄られても俺たちは動じる事なく片手を挙げて軽く対応する。

「ちよつと襲われてやり過ぎしたところをクロノに迫られてな」

「間違っていないけど悪意のある言い方をすんじやない。彼らはなのはを襲った襲撃者と繋がりのある人物に襲われていたんだ。それで話を聞くためにここに呼んで、外部協力者として協力を頼んだんだ」
「ってことは、2人とも魔導師なの？」

「魔導師なのは俺とこつちの痛々しい金髪だけだ。愛歌は関わってるだけの一般人だからそここのところを間違えないように」

「何か言われてるわよ、痛々しい金髪くん？」

「何を言っている？我が痛々しいだと？ハッ、己の欠点を我に押し付けてるなよ」

「セイツ!!」

愛歌のノーモーシヨンの飛び蹴りが桜木の顎に突き刺さる。あれは痛い。桜木が無様に床を転げ回っているのも分かる。

「そ、そうなんだ……あれ？そうならもしかして、私たちが魔導師だって事に気がついてたの？」

「気付いてはいたけどな……なんか危なっかしい物を好き好んで集めているようだったから巻き込まれないように黙っておいた。悪かったな」

「ううん、それは間違ってる事だから……」

たった今考えた建前だが、フェイトはそれで納得してくれたようで簡単に許してくれた。前から思っていた事だが、彼女はその生まれからか人を疑うと言う事をまるでしない。闇落ちしたプレシアとよく分らない方向へと進化しているアリシアの遺伝子を引いていると言われても信じられない。

「おい見ろよ、カガミきゅんとフェイトそんが語り合っているぞー！ー尊いな」

「やはりロリシヨタこそが至高だな」

「これはフェイトそんとマナカちやまによる三角関係が約束されたな

!!

「ハッ、これだからノーマルラブ至高主義者共は困る」

「その通り、年下のカガミきゅんが年上のクロノきゅんと出来てしま
うオフィスラブこそが究極」

「おっと、ユーノきゅんの存在を忘れられては困るな!!」

「……あれ、何だ？」

「ああ、あそこら辺の異常性癖者たちはいつもの事だから気にするな
……胃薬がいくつあっても足りなくなるから」

突如として管理局員たちの一部がカップリングについて語りだし、
気に入らなかつたのか殴り合いを始めた。周りにいた者たちはそれ
を止めるどころかトトカルチョを始めてどちらが勝つのか賭け始め
る始末である。見間違いでなければ、胴元はジュエルシードの事件の
時にアースラの艦長を名乗っていた人物であった筈だが……

「あれでもいい人たちだから……いい人たちだから……いい人たち、
なのかなあ……」

「あやふやになつてるじゃねえか」

協力をする事を早まったかと思つたが、すでに契約をしてしまつて
いるのでここに来て反故することは難しい。それに管理局に協力を
したのは愛歌の保護も兼ねての事なのだ。

闇の書はリンカーコアから魔力を蒐集する。その為、リンカーコア
を持たないで魔力を有している愛歌から魔力を蒐集する事は不可能
だ。しかし、シグナムたちは愛歌がリンカーコアを持っていない事を
知らない。魔力を持つているのならばリンカーコアがあるという常
識に沿って、愛歌の存在しないリンカーコアを狙って襲ってくる。

その時に俺1人だけだと間違いなく負けて愛歌に危害が加えられ
る事になる。桜木がその場にいれば良いのだが、前回のように時間が

あれば駆けつけられる距離にいるとは限らない。なので、管理局に今回の事件で協力する代わりに愛歌の保護を頼んだ。いざとなれば彼らは肉盾となり、愛歌はその隙に逃げる手はずとなっている。

あとは金。日本円とミッドチルダの通貨を半々で、時給換算で給料として支払われる事になっている。ミッドチルダの通貨で支払いを求めた時に少し怪しまれたが、将来ミッドチルダに行く事を考えているといえばすぐに納得してくれた。

「そういえばクロノ、他に地球の魔導師がいるって聞いたけど」

「ああ、なのはは医務室で眠っているし、リュウトは彼女に付き添っている。あと、ミツルギヤイバとアカギカズマという2人がいるんだが……彼らは少々厄介でな、前回の事件の時に魔力の封印をしているんだ」

「一応その2人には声をかけておいた方がいい。あいつらの狙いは魔力だ。封印してようがあるまいが魔力がある事には変わりは無い。厄介だからって目を離してたから襲われる事になるぞ」

「……仕方がない、僕が行ってこよう」

赤城と御剣に会うのは心底嫌なのか、クロノは酷く疲れ切った顔になっていた。確かにあの思い込みの激しい2人に会うのは躊躇われるかもしれないが、闇の書側にあの2人の魔力の蒐集を許してしまえば最終決戦でとんでもない化け物が生まれてしまう事になる。それだけは何としてでも防がねばならないのだ。

闇の書側の転生者が冷静なら、この可能性を考えてあの2人の蒐集を許してはいはずだ。事実、俺の展開している監視用の魔力スフィアで得た情報では彼らはまだ魔力を奪われていない。しかし、何かのキツカケがあれば闇の書の騎士たちはその指示に逆らって彼らから魔力を蒐集しようとするかもしれない。そうならない為に、管理局には彼らの事を保護してもらわなければ困る。

もつとも、何の関係の無い俺が行ったところで話を聞いてくれないのは目に見えているのでクロノに任せるしか無いのだが。

「で、俺たちはどうしたら良い？流石にここで寝泊まりするわけにはいかないだろう」

「こちらとしてはそうした方が都合が良いんだがな……一先ず一旦家に帰っても構わない。流石に向こうも僕らが来てすぐに行動を起こさないだろう。ああ、契約通りに護衛の者たちは付けておくから安心してくれ」

「あいよ、何かあったら連絡してくれ」

「リョーヤ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

こうして俺たちは一旦家へと帰る事にした。……その時に加賀美きゅんと言っていた奴らの尻を蹴り上げておくのを忘れない。

《手駒が欲しいな》

《ちよつと何言ってるのか分からないですねえ……》

管理局が来たとは言え、シグナムたちが再び襲撃してこないとも限らないので愛歌と桜木を家に泊め、護衛をしている管理局員たちに気づかれないようにチャットによる会話を始める。

《これが加賀美様の仰っていた念話チャットですか》

《あれ？もしかしてイレインさんも参加してるんですか？》

《ああ、レギオンの一本を持たせて参加出来るようにしておいた》

《出たわね、ロボットメイド……!!》

《どうどう》

イレインのチャットの参加に愛歌がいつも通りに喧嘩腰になっている。イレインの正体は2人には話してあるのだが、人間じゃないと分かっていても愛歌はイレインの事をロボットメイドという属性持ちだからと言って警戒しているのだ。確かに機械でありながら人間の感情を知りつつあるイレインが恋心を持つ可能性は否定出来ない。愛歌が敵愾心を持つのも仕方がない事だろうと理解している。

だけど、異種族恋愛は恋愛物のロマンと言うのにはちよつと理解が出来なかった。

《ふう……両夜の事だから思い付きとか無意味とは思わないけど、詳しく説明してくれるかしら？》

《俺たちってさ、ある意味で一つの集団みたいなものだろう？》

《まあ、確かにそうですね。加賀美さんがリーダーって感じの集まりですよね》

《俺様口調で話している桜木様が下っ端という事ですね》

《転生者の俺と桜木、ジュエルシード3つ分の魔力を持つてる愛歌、自動人形のイレイン……こうして並べてみると、魔法側のヤツが居ないんだよなあ》

俺たちの共通点は全員が地球出身であるということ、それはそのまま魔導文化に疎い事を意味する。原作という形で俺も桜木もある程度は分かっているが、それでも知識不足であることは否めない。ジエイルは仲間では無くて協力者という立ち位置なので、信頼も信用もできないのだ。

《だから魔法側の人間を引き込みたいと?》

《そうそう》

《フエイトは……ダメね。あの子をこっちに引き込むとか良心の呵責が……!!》

《確かにフエイトは良い子ですからね。悪側には引き込みたくないです》

《話でしか聞いた事は無いですが、確かにテスタロッサ様のような桜木様とは比べものにならない程のお方を引き込むのは道徳的な観点からどうかと思いますね》

《……イレインさん?さつきからちよくちよく僕の事をデイスってますけど何ですか?》

《このチャットの目的は桜木様を辱める事だと愛歌お嬢様から教えられたのですが……》

《沙条さあん!》

愛歌はイレインに対して敵愾心を持っているが、だからといって仲が悪いわけでは無い。普通に話しているところを目撃する事があるし、こうして桜木で遊ぶ時には愛歌はイレインに妙な事を吹き込んでいる。そのせいで桜木の心労が大変なことになるが……彼には涙を飲んで堪えてもらうことにしよう。

《ねえ桜木、だれかちようど良い奴知らない?魔導師としては優秀だけど後ろめたい事をしていて、近いうちに表舞台から消えそうな奴をさあ?ちよつとそいつさらって洗脳して良い感じの手駒にするからさあ》

どうせ手駒にするのなら魔導師として優秀な人物にしたい。後ろめたい事をしているのならそいつが消えても、そういう事をしていたからでは無いか?と勝手に想像してくれて隠れ蓑になるし、近いうちに表舞台から消えるのであればこれから先で高町たちとは関係

を持たない……つまり、原作で登場しなくなるから strikers
編で関わりの無い人物だから。

《さりと洗脳とか言い切りやがった……ちよとピンポイントで当
てはまる人物がいますよ。しかも、今の時期なら地球で活動してい
るはず》

《お、マジで?》

俺に心当たりは無かったが、桜木の中にはちよと当てはまるよう
な人物がいたらしい。

《マジですよーまあ人間じゃなくてリーゼ姉妹っていう使い魔何
ですけどね》

「よつと……ここがリーゼ姉妹が見張っている家か」

桜木の勧められた人物を捉えるために、その日の深夜に行動を起す。管理局の護衛たちには気が付かれないように気配を消し、変身魔法を使って大人の姿になるのを忘れない。魔力を隠す魔法だけは使っているが、それ以外は全て技術で隠蔽を施している。前世の生まれ故郷で生き残る為につけた技術だ。そして仮面のデザインは若干変えて、口の部分を露出した物に変えている。タバコを吸う時に仮面をズラすのが面倒だからだ。

辺りを一望出来るように電柱の上を陣取りながら見下ろしているのは近くにある桜木がリーゼ姉妹が出没するだろうと言っていたのは海鳴内の民家。何でもここに重要人物がいるらしく、彼女たちは契約者の指示で見張っていると聞いていた。その重要人物がどんな人物なのか教えて欲しかったのだが、後でのお楽しみだと言い残して桜木は寝落ちしてしまった。気になるのは気になるのだが、俺の目的は手駒として使えそうな人材の確保であってその重要人物の詳細を知ることでは無いので後日改めて聞く事にする。

「ハスター、解析モード」

『Yes. 解析モードに移行します』

ハスターに指示を出すと視界が薄い緑色に染まる。桜木によればリーゼ姉妹は猫の使い魔で、猫に変身して監視をしているらしい。それを見破る為に即席でハスターに作ってもらったのがこの解析モードだ。

効果は単純なもので、魔法が使用されていればそれに反応し、どん

な魔法が使われているのかを解析する物なのだが――

「おや？あれは要塞か何かかな？」

『過剰なまでに魔法が行使されていますね』

さつきまでは普通だったはずの民家が、解析モードを通して見た事で魔法でガチガチに固められている事に気が付いた。あまりの量が多い上に、魔法がミッドチルダ式では無いので解析が追いついていないのだが、それでも大凡の種類は判別出来る。

「アラームに自動迎撃、それらを隠す為の隠蔽魔法つてところか？」

『しかもあれらの魔法はベルカ式のようなですね』

「Fuck、後でのお楽しみってそういう事かよ」

サポートに特化しているハスターが作った魔法だからこそあの要塞級の防備を固められている事に気が付いたが、時空管理局はあれに気がつく事は無いだろう。察知しようと思えばアースラの全システムをそれだけに裂かなければ見つからないのでは無いかと思えるほどのガン防衛が築き上げられていた。

ここに来て桜木の勿体ぶった言い方の真意に気がつく。あの家にはシグナムたち闇の書の騎士が――正確には闇の書の主がいる。そうでなければ、あそこまで防備を固める意味が無い。記憶があやふやになっていたので怪しいのだが、確か現闇の書の主は魔法について何も知らなかった一般人である上に、闇の書によって日常生活を送る事が困難になっている筈だ。戦う力も抗う力も持っていないから過剰と言えるレベルにまでガン防衛しているのだろう。

『この事を時空管理局に報告しますか？』

「いや、しないよ」

闇の書の主の居場所を知ってもそれを誰にも言わずに黙っておく事にする。確かにここで闇の書の主の場所を教えれば戦力を整えた管理局の襲撃でA's編は終わるかもしれない。だが、そうした場合だと間違いなく闇の書は別の世界に逃げる事になる。今後の闇の書の被害を出さない為には出来る限り原作通りに動いてもらい、原作通りの方法で完全消滅させてもらわなければならない。それに万が一襲撃が失敗すれば、シグナムたちの居場所が分からなくなってしまう。思いもよらず手に入れた情報だが、このアドバンテージを活かそうと思えば黙っておくのが一番なのだ。

後、間違いなく怪しまれる。一体どうやって闇の書の主の居場所を見つけたのかを。まだアクロ・ダカーハである事を隠したいこちらとしては、この段階で要らぬ疑いをかけられたく無いのだ。

『そうですかローマスター』

「ああ、こつちでも見つけた」

そうやって民家を見張っていると、塀の上に一匹の猫がいるのを見つけた。一見すればただの野良猫にしか見えないのだが、解析モードを通してあるのであれが魔法で猫に変身しているのだと分かる。

他に同じ存在がいるかどうかを確認するが、残念な事にいるのはあそこの一匹だけのようだ。優秀な人材はいればいるだけ良いのだ。洗脳するのが手間だが、それ以上のリターンがあるのならば手間暇を惜しまないのが重要だ。それに、良く良く考えてみればこちらの方が都合が良い。

「ハスター、隠蔽のレベルを最大限まで引き上げて捕獲」

『Yes! I'll Struggle Bind.』

猫が塀の上から地面に降りた瞬間に、灰色の光帯が現れて猫を縛り

上げる。それもご丁寧に声を上げられないように首を絞めた上で口を塞いでいる。さらにそれだけでは終わらず、猫はショートヘアの女性へと姿を変えた。あれが元の姿なのだろう。

「姉妹って聞いた時から覚悟していたけど、間違いなく愛歌が荒れるなあ……!!」

『マスター、早くしなければ対象に逃げられてしまいます』
「分かってるわ」

ハスターに急かされながら電柱から降り、体重と体幹を操作する事で無音で女性の背後へと着地。そして気が付かれないまま、女性の首に手刀を叩き込んで意識を奪った。力無く崩れ落ちる彼女を抱き抱え、周囲の警戒をするが誰にも気づかれていないようだ。

「ハスター、移動するから警戒は任せた」
『了解しました』

本当だったら魔法で移動したいのだが、流石にシグナムたちの目の前で魔法を使うのは躊躇われる。なので気配を消し、気絶させた女性を肩で担ぎ上げて移動する事にした。

「……う……(っ)は？」

「Good morning. 随分気持ち良く眠っていたね、仕事で疲れていたのかな？忙しいのは分かるけど休む時には休まなきゃ」

「だ、誰だ!？」

海鳴にいくつか用意してある俺の隠れ家の1つ。そこに連れ込んで準備を済ませた時にタイミングよく女性は目を覚ました。起きたので挨拶をしたというのに勝気な目を吊り上げて敵意を向けられただけ。身体を動かさそうとしているが、椅子に拘束された状態で座らされているのでそれも叶わない。

威勢の良さを感じて当たりを引いたと確信する。こういう手合いは洗脳するまでは時間がかかるものの、成功させてしまえば従順な手駒になるからだ。

「誰だとは礼儀がなつて無いな……まあ、目が覚めたら捕まつてましたくなんて状態だし大目に見よう。初めましてお嬢さん、俺の名前はアクロ・ダカーハだ。以後お見知り置きを」

「アクロ・ダカーハ……!?クロ助が言っていた次元犯罪者か!!」

「知ってるのか、手間が省けて何より何より」

どうやらジュエルシードの時に動いた事によって、しっかりと時空管理局には犯罪者認定をされているようだ。この時点でアクロ・ダカーハという存在を植え付けられているのなら、今回は何度か手を出しておくくらいで良いだろう。

「名前を聞かせて欲しいんだが……その様子じゃ期待出来ないな」

「誰が教えるか……!!」

俺がアクロ・ダカーハだと分かり、女性から向けられている敵意に警戒が混じる。出来る事ならばこの段階で名前を教えてくれれば色々と楽になるから教えて欲しかったのだが、今の彼女ではそれは望めないようだ。

「名前だけじゃなくて色々と聞きたいことがあるんだけど……うん、いつも通りにやろうか」

部屋の隅に転がっていたロッカーを蹴破り、中から用意していた道具を引きずり出す。ノコギリ、ハンマー、ペンチ、電動ドライバー、釘、針金、ホース……前回の管理局員に「質問」をする為に使った道具。それらと拘束されているシチュエーションから、この先自分がどんな扱いを受けるのかを想像したのか、女性の顔が青くなる。

「この……ッ!!」

逃げ出そうと、身体強化魔法を使って拘束から抜け出そうとする。……が、それは叶わない。前回の「質問」の最中で一度、管理局員に身体強化魔法を使われて逃げられそうになったのだ。その反省を生かし、彼女には魔力吸収の魔術を施している。

車があってもガソリンが無ければ動かないように、いくら魔法が使えようとも魔力が無ければ使う事が出来ない。デバイスでは無くてカード型の魔力貯蔵装置を持っていたが、それも魔力を抜き取ってから破壊してあるので意味が無い。

「壊れてくれるなよ？ そうなったら色々手間だからな」

管理局員にした「質問」のように、聞くだけが目的ならば容赦無くやれる。プレシアの時のように価値観を弄るだけならば多少強引にやっても上手く行く。しかし、今回の目的はあくまで手駒を増やす事なのだ。勢いに任せて壊れてしまえば要らぬ手間がかかる事になるので出来る限り丁寧に、時間をかけてこちらに引き込む。

ペンチで彼女の爪の先を摘む。これからされる事が予想出来ているのか、彼女の目には怯えと屈してなるものかという意志が入り混

じっていた。

それがいつまで持つのか。出来る限り長く持つてくれと祈りながら――手始めに彼女の爪を剥がすことにした。

u n h a p p y f a m i l y

「……」

「う……あ……」

カチカチと聞こえてくるのは一定のリズムしか刻む事の無い時計の秒針の音。狭い密室の中を満たしているのは何重にも重なった秒針の音と、拘束された状態で椅子に座らされたボロボロの女性の呻き声だけ。

「君の名前は？」

「ろって……りーぜろって……」

彼女を捕らえてから二週間が経っている。初めは苦痛を伴う拷問を行つた。後に手駒になるのだからと壊さないように、だけでも苦痛を鈍らせる様な事はせずに丁寧に、丹念に甚振つた。その頃はまだ良かった。何をしても呻き声はあげても泣き言一つ溢さずに威勢のいい姿を見せていた。最低限の睡眠と、最低限の食事だけを許可し、生きることが出来るギリギリのラインを見定めながら、甚振つた。

暗い密室で、時間の経過を知らせる様な物を一切置かずに一週間程閉じ込めた。そこまでは良かった。目に見えて憔悴していたが、それでも心は折れる事無く、俺が姿を見せる度に睨みつけて来た。

「君のお姉さんと、ご主人様の名前は？」

「おねえ、ちゃん……ありあ……とおさま……ぎる、ぐれあむ……」

そこで、彼女にとあるビデオを見せることにした。それはエンドレスで再生されていて、今でも壁に映し出されている。

「でも、君のお姉さんとご主人様は君の事を知らないんだってさ？」

彼女リーゼロッテを攫って2日後、彼女とそっくりな顔をした女性を見つけたので播さぶりをかける意味合いで話しかけ、リーゼロッテを預かっていると伝えたところ、一瞬だけ悲痛そうな顔をして返ってきたのはリーゼロッテという人物は知らないというものだった。

時空管理局に所属していて、アクロ・ダカーハの存在を知っていたはずなのに彼女は何をするわけでも無く、足早にその場から立ち去って行ってしまった。

壁にエンドレスリピートされているのは、その時の光景だ。これを再生した始めは嘘だと否定していたが、丸々3日ほど流したままで放置していたら今の状態にリーゼロッテ完全に心が折れてしまった。

姉が、主が助けに来てくれる。それが心の支えだった様だが、他ならぬ姉自身の口で否定された事が効いたようだ。

「あ……ああ……!!」

「君は要らない子なんだ。要らないから、見捨てられたんだ。こんな酷い目に合っているというのに、役に立たないから捨てられたんだよ」

それが独断なのか分からないが、彼女の行動自体は理解出来る。桜木によれば、彼女たちは独断で行動しているらしく管理局は彼らの行動を把握していない。リーゼロッテが拐われたと管理局に訴える事が出来ない。故に切り捨てるという選択をした。それは間違っていない。そうしなければ、彼女たちが元々計画していた出来事に支障が出てしまう。

それに切り捨てた様なポーズを取っていたが、リーゼロッテの姉のリーゼアリアは民家の監視以外の時間は海鳴を探索してリーゼロッテの事を助けようとしているのを見かける。残念ながら魔法による隠蔽では無く魔術による隠蔽なので、いくら魔法の痕跡を探したところで見つかる筈がないのだが。リーゼアリアだけでは無くてギル・グレアムも彼女の事を見捨てていないのだろう。そうであるのなら、リーゼロッテに対して使い魔の契約を続けている意味が無いのだから。

もつとも、その事実をリーゼロッテは知らない。リーゼアリアとギル・グレアムが自分を見捨てたという事実こそが彼女の中での真実だと、今日までの間に刷り込ませておいた。

捨てられた、要らないと、自分の価値を徹底的に否定されてポロボロと泣き囁るリーゼロッテ。この二週間で彼女は自分は価値のない存在なのだと認識させている。

精神状態は最悪、始めの頃の気丈な姿は見る影もない。心が強かったからこそ、一旦徹底的にへし折ってしまえば致命的になる。

「よしよし……可哀想なリーゼロッテ」

みつともなく泣き囁るリーゼロッテを優しく抱き締める。彼女の涙と鼻水でコートが汚れるが、そんな事は御構い無しに。

「お姉さんに捨てられて、ご主人様に捨てられた要らない子……. けど、俺には君が必要なんだよ」

「ヒグッ……ひつ、よう……っ？」

「ああ、必要だ。おんなじ顔の君のお姉さんじゃなくて、君だからこそ必要なんだ」

「でも、でも……わたしは、いらないうって……やくにたたないって

……」

「君は要らない子なんかじゃない。役立たずなんかじゃない。俺は、君が……リーゼロッテの事が欲しいんだ」

優しく、優しく……ボロボロになった心に毒を流し込むように、虚ろになっているリーゼロッテの目を見つめながら彼女が望んでいる言葉をくれてやる。己には価値なんて無いんだと思い込ませ、俺がそんな自分を求めていると思込ませる。難しい言葉を使う必要ない。複雑な言い回しをする事なく、簡潔な言葉で真つ直ぐに伝えてやる。

それだけで、虚ろだったはずの彼女の目にはほんのりと怪しい光が宿る。

「ごめんね？もう行かないと……だけど、俺は君の事が必要なんだって事は忘れないでね？」

「あ……」

最後に優しく彼女の頬を撫で、リーゼロッテを監禁している部屋から、隠れ家になっていた廃墟から出る。今の時刻は早朝で、丁度朝日が顔を出しているところだった。

「両夜、雌猫の調教具合はどうかしら？」

そんな時間帯だと言うのに、廃墟の入り口には愛歌が立っていた。

「良いペースだな。もう少し時間はかかるだろうけど、それが終われば俺に従順な手駒の出来上がりだ」

「……雌猫の臭いが染み付いてるわね」

「必要な事だから見逃して欲しいんだけど……」

「見逃すけど気に入らないわね」

リーゼロツテの体臭が気に入らないようで、彼女はどこからか消臭スプレーを取り出して過剰なまでの量を吹きかけてくる。バリアジャケットに染み付いた臭いなのだから再度展開すればリセットされるのだが、そう説明しても気に入らないからとこうして消臭スプレーされる事になってしまった。

愛歌は俺がやっている事を全て知っている。リーゼロツテをさらに、監禁し、洗脳して手駒にしようとしている事を。

それを知っても、彼女は何も言わなかった。

また俺の周りに女が増えるのかと頭を抱えて悶絶していたけど。

「それで、あの雌猫を調教したら何をさせるのかしら？爆弾持たせて神風特攻？」

「それは愛歌がやらせたい事だろうが……折角の魔法関係者なんだ。そんな勿体ない事をさせるかよ。それに、俺は物を大切にする主義なんだ。完璧にどうしようもないレベルに壊れるまで、大切に大切に使つてやるよ」

「調教が終わったら私にもあの雌猫を貸してくれないかしら？いい加減魔法の1つでも使えるようになっておきたいのよねー今のままじゃ愛歌ちゃんウィップを振り回す事くらいしか出来ないし」

「もうそれが正式名称なのね……終わったら貸してやるよ。まあ、魔法はそんなに得手じゃないみたいだけど、知識はあるから頑張つて学んでくれ」

生憎と狙っていた魔法関係者ではあったが、魔法が得意な人物では無かった。しかし魔法の知識は持っていたし、指導者の経験もあった。それならば不得手であろうが魔法を教えるという行為は問題なく行える筈だ。

「今日は休みだから帰ったら二度寝を……あ、ダメだ。月村に誘われてたんだった」

「図書館で知り合った友達を紹介したいとか言っていたわ。一体どんな人なのでしょうね？」

「月村の友達だから問題無いと思うけどなあ……」

消臭スプレーをたっぷりとかけられて、愛歌からオツケーが出たので変身魔法を解除して子供の姿に戻る。

「管理局員たちが目を覚まさない内に早く帰ろうか」

闇の書の騎士たちは管理局が来た事が原因なのか、地球での蒐集を行わずに別の管理外世界で活動している。俺が結んだ契約は地球だけの場合だと決めているので管理外世界での場合は管轄外になり、給料が支払われない代わりに休みになっている。そんな状況だろうがもしものために管理局員の護衛は家に滞在している。彼らの目を誤魔化すために、彼らの食事には睡眠薬を入れてこの時間帯には寝るように仕向けているのだ。そうでもしなければ、この時間帯で堂々と外出する事はあまりにもリスクすぎる。

「朝の町を2人つきりで歩くのってちょっととしたデートみたいよね？」

「個人的にはこういうのの方が好きだったりする……まあ、いつ襲撃があるのか分からないから頻繁に出来ないけどな」

「ガツテム闇の書め。愛歌ちゃんウィップでバラバラにしてやろうかしら？」

「そんな事したら後々が面倒だからやめろ下さい」

早朝特有のヒンヤリとした空気の中、指を絡ませるようにしながら愛歌と手を繋ぎ、ゆっくりと歩きながら帰る事にした。

「適当に選んだ服だけど変じゃないか？」

「大丈夫、似合っているわよ。やっぱり暗い色の方が両夜にはお似合
いね」

「明るい色の服はどうしても着こなせないんだよなあ……」

月村に誘われて新しく出来た友人の家に行くというので、普段は然
程気にしていない身嗜みにも気を使う事にした。最近では日中も肌
寒くなって来たので薄手のグレーのタートルネックのセーターに
ジーンズ、その上から黒のコートを羽織っている。愛歌はお気に入
りとなっている翠色のドレスのような洋服の上からポンチョを被つて
いる。

そこまでするのなら素直にズボンを履けばいいんじゃないかと
思ったのだが、オシャレをしなくなったら女として死ぬのだと真顔で
力説されたのでそれ以上は何も言えなかった。

目の前で四つん這いになっている土郎さんの上に乗りながらテレ
ビを見ているアリシアは e l e c t r i c a l と書かれた真つ黄色
のクソダサTシャツを着ているのだが……あれはそもそも死んでい
るのだから例外なのだろう。愛歌の言っている通りなら、彼女は死ん
でいるのだからオシャレをしなくてもいいわけなのだし。

それにしても、最近の土郎さんはずっと四つん這いになっているよ
うな気がする。

「加賀美様、こちらを。遊びに行かれるという事なのでロールケーキ
を作らせて頂きました」

「サンキュー、イレイン」

「ガツデムイレイン。乳があつてメイドな上に料理が上手くてお菓子も作れるとかちよつと卑怯じゃないかしら?」

「それが作られた私の役目なので。悔しかったら私以上の体型に成長されてはいかがでしょうか?もつとも……いえ、何でもありません」

「ねえ、今なんて言おうとしていたのかしら?私のどこを見て言うのを止めたのかしら?」

「どうどう。イレインも煽るのは止めてやれよ」

イレインの煽りに対して笑顔のままに青筋を浮かべると言う器用なキレ方をしている愛歌を後ろから羽交い締めにする。彼女は我が家に来てから人間らしくなっているように見えるが、それ以上に煽りの技術が上達してきている。完全に我が家の芸風に染まつてきている。

この間なんて存在は知っているものが見えない、感知できないはずのアリシアを清めの塩をばら撒いて追い詰め、俺の用意した魔術礼装で結界を張ってゴキブリと一対一で過ごさせるなんて事をしていったし。

「両夜……ねえ、両夜……私は大丈夫よね?これから先、まだ望みはあるわよね?」

「愛歌様、身体的特徴は基本的に生活と遺伝によって左右されます。愛歌様のお母様のお写真を拝見した限り、愛歌様の成長は……いえ、忘れてください」

「忘れてくださいって何よ!!ほとんど言ってるようなものじゃない!!そこまで言うのなら最後まで言い切りなさいよお!!」

「落ち着け、本当に落ち着け。流石に今は触手は不味いから。イレイン、ちよつと煽り過ぎだ。これ以上怒らせると家が壊れる」

うがあ、つと叫びながら愛歌は悪性情報の触手を伸ばしてイレインに向かって振り回している。もつとも、冷静さを欠いている上に戦闘

用に作られたイレインには届かずにまるで踊るように避けられているのだが。

煽りに煽られて半泣きになりながら触手を振り回している愛歌だが、それでもまだ理性は保っているのか家具は壊れず、汚染されて溶けるような様子も見えない。これ以上怒らせるとどうなるのか分からないが。

「こんにちわ、月村です」

「ほら、月村来たから行くぞ」

「離して!! 離してえ!! この毒舌ロボメイドだけはこの場で八つ裂きにしてやらなきやいけないのよ……!!」

「行つてらっしやいませ、加賀美様……将来性の見込めない愛歌様」

「イレイン、お前しばらく充電禁止な」

「!?」

煽るなど言っているのに煽り続けているイレインに充電禁止という罰を与えておく。彼女の動力源は意外にも電力で、定期的に充電しなければ稼働する事が出来ない。仮に充電が切れたところでスリープ状態になるだけで彼女の記憶に問題は無いのだが、人間に言い換えれば仮死状態になっているようなものらしくイレインはスリープ状態になる事を嫌っていた。その事を考えれば、罰としては十分だろう。

玄関に向かう途中で愛歌がガチ泣きに移行し、コアラのように俺に抱き着いて来たのだが構わずにそのまま移動する。

「悪い、待たせたな」

「それは良いんだけど……愛歌ちゃんはどうしたの?」

「イレインに煽られた結果」

「ああ……」

玄関のイレインの性格を知っている月村はその一言で納得したの
だろう。泣きながら俺に抱き着いている愛歌を見て可哀想なもの
を見るような、同情するような目をしていた。

「愛歌ちゃん……なんて言われたのか分からないけど、きっと大丈夫
だから」

「すずかあ……ナイスバディな姉のいる貴女にそんな事を言われても
慰めにはならないのよおー!!」

「キヤアアアアアア!!」

知らなかったとはいえ、月村の言葉は今の愛歌にとってクリティカ
ルヒットだった。逆鱗にドロップキックを決めた後に昇竜拳を叩き
込む行いだった。泣くのを止めたかと思えば月村に飛びかかって押
し倒している。

夏頃までは互いに苗字呼びだったはずの2人だが、月村の誘拐に巻
き込まれた後ごろから名前呼びになり、ちゃん付けに呼び捨てと非常
に親しい仲になっている。2人の間に何があつたのか予想は出来る
が、俺から言うことは何も無い。こう言うことに男が口を出しても痛
い目を見る事になるのは重々理解しているのだ。

「しかも何よ!!前よりも大きくなってるじゃないのよ!!羨まけしから
んわな!!少しぐらい私に分けなさい……!!」

「んん……!!ま、愛歌ちゃん……や、止めてえ……!!」

美少女と言える2人が、我が家の玄関で絡み合っている。

目の前の光景を言葉にすればそんな所で、アースラにいるロリ百合
スキー共がこれを見ればスタンディングオベーション待った無しな
のだろうか、現実には血の涙を流さんばかりに泣いている愛歌が一心

不亂に月村の胸を揉みしだいているという犯罪的な光景だったりする。

見目麗しいと言っても過言では無い2人の絡み合いを前にしても、欠片も反応する気配の無いマイサンに悲しくなってくる。

「そこまでにしておけ」

「痛ッ!!」

愛歌の気持ちは分からないでもないがやり過ぎである。容赦無く拳骨を落とし、怯んだ隙に首根っこを引っ張って月村から引き剥がす。

「やり過ぎだ」

「だって……だってえ……!!」

「だってじゃない。ほら、被害者の月村に謝れ」

「うう……ごめんなさい」

「はあ……はあ……だ、大丈夫だから……痛く無かったし、むしろ気持ち良かったし……」

後半の言葉は聞かなかった事にしておこう。それがきつと彼女の名誉の為だ。後、彼女が新たな性癖に目覚めない事を切に願う。

だが道路に止められた車の運転席からサムズアップをしていたメイドに対しては中指を突き立てておくのを忘れない。

「それで、これから会う月村の友達ってどんな奴なんだ？」

愛歌様御乱心事件が終息し、落ち着いた所で車に乗って本来の目的地に向かう道中で気になった事を聞いてみる。月村からは新しく出来た友達を紹介したいとしか聞いておらず、どんな人物なのか全く聞いていないのだ。

「あれ？教えて無かったっけ？」

「少なくとも、俺は聞いた覚えは無いな」

「えっとね、関西弁って言うのかな？そんな方言を使う女の子だよ。なんでも足が不自由で車椅子に乗ってるけど、凄く良い子だよ」

「関西弁で車椅子の女の子」

月村は凄く良い子だと言っているが、それに反して俺は凄く嫌な予感がする。関西弁、車椅子、そして女の子という3つのワードに当てはまる人物を、俺はたった1人しか知らない。

《両夜両夜、どうしてか分からないのだけどずっとごく嫌な予感がするわ!! 具体的に言えば傷害事件の加害者と被害者が道端で偶然出会うような!! 偶々入ったお店で相席になるような!!》

《妙に具体的だなあオイ》

愛歌も嫌な予感がしたようでチャットを使って話しかけてくる。それでも顔色1つ変える事なく月村と話を続けられている辺り、彼女には感謝するしかない。ここで顔色を変えてしまえば月村に心配をかける事になるから。

「名前はなんて言うんだ？」

「八神^{やがみ}はやってって言うんだよ」

《クソツタレがあーっ!!》

この予感が外れて欲しいと僅かな期待を込めてその少女の名前を聞いたのだが、思っていた通りの名前が月村の口から出てしまった。本当だったら今すぐにでも叫びたかったが、それを代わりにチャットで叫ぶ事で堪える。

八神はやてー俺の記憶と、桜木から聞いた話を合わせれば、彼女こそがA's編の中核。今回の事件の中心にして、ある意味で一番の部外者。悪意のある改造により、破滅と破壊を撒き散らす闇の書に魅入られた悲劇の少女。

そして、八神はやてが闇の書の主だと言うのなら、その傍らには必ず闇の書の騎士たちが控えている。自分たちの行いが大衆にとって害悪になると理解している彼らならば、時空管理局が来ているこのタイミングで、主である彼女の側から居なくなる筈がない。

どうか何事も無く終わるようにと祈りながら、車が停まったのはとある民家ー俺が捕らえたりゼロツテが見張っていた家。

《オワタ》

《ねえ、オワタって何よ？何がオワタなのよ？両夜？両夜ーっ!?!》

この時点でこの家に住む者が八神はやてであると確定してしまった。桜木の言っていた重要人物が八神はやての事であると納得し、同時に教えてくれなかった事に対して罰を与える事を心に誓う。

イレインのマキシマム・ロボメイドタイキックか、愛歌の愛歌ちやんウィップによる私刑か、それとも俺のアポカリプス・プロレスメドレーか。

なんて事を考えながら現実逃避していたのだが、月村が呼び鈴を鳴らした事で追いつかれてしまう。

「よく来たなー」

インターフォン越しに確認したのか、何ら警戒する事なく家の扉が開かれ、そこからピンク色の長髪をポニーテールに纏めた長身の女性ーシングナムが現れ、俺と愛歌の姿を見て動きを硬直させる。家に張り巡らせているセンサーを、桜木から借りた財宝で乗り越えてしまった事が原因で油断していたのだろう。その姿は見ていてとても滑稽だった。

この日、予期せぬ形で俺たちはシングナムたちとの再会を果たす事になった。

「ええつと……」

「何やねん、この重苦しい雰囲気は……」

予期せぬ形でシグナムとの再会を果たしてしまい、彼女の方もまさかこんな形で再会するとは思ってもしなかったのか、フリーズしてしまつて数分。固まっている俺たちにどうしていいのかわからずに月村がオロオロとしていると、シグナムの背後から車椅子に乗った少女――八神はやてがやって来た。そして固まっている俺たちを見て何をしているのかと呆れつつ家の中にへと案内されたのだが、今の雰囲気は最悪だった。

まずはあの夜に襲つて来たシグナムとザフィーラ。シグナムは俺の隣に座つて自然体を装っているが、俺が行動を起こせば即座に鎮圧出来るように備えている。ザフィーラは八神の側に控えていて、大きく欠伸をして人畜無害の振りをしているが何かあれば八神の盾になるようなポジションを確保している。

そして八神の右隣に座る赤毛の少女。彼女に至っては敵意を隠そうとしていない。初対面なのだが、シグナムたちから話は聞いていたのだろう。どういう関係なのか理解しているようで、幼いながらも鋭い目で並んでいる。八神の左隣に座る金髪の女性も同じだ。この2人はシグナムとザフィーラとは違い、平時のように振る舞えて居ないがそれは赤毛の少女は幼いからで、金髪の女性は前衛職では無くて後衛職だからなのだろう。少なくとも彼女たちの振る舞いから、シグナムほどの手練れでは無いにしても彼女と同じ闇の書の騎士であることが簡単に予想出来た。

そうして、主に赤毛の少女と金髪の女性が原因で八神家のリビング

は非常に重苦しい雰囲気になってしまっている。そりやあ主が友人を招いたと思っていたら敵がやって来たのだ。混乱はするし、警戒もして当然。ただ、出来る事ならば荒事を経験したことの無い月村と八神に要らない心配をさせないように振舞って欲しかった。

内心で溜息をつきながら、イレインが用意してくれたロールケーキをテーブルの上に乗せて八神に差し出す。

「初めまして、加賀美両夜だ。これはお土産な……心配は無いと思うけど、一応食べる時には注意してくれ」

「沙条愛歌よ。親しみを込めて沙条様と呼ぶ事を許可するわ。豚のようにブヒブヒ鳴きながら感謝しなさい」

「アカン、突っ込みみたいのにどれから突っ込んでええのか分からん」

「はやてちゃん、こういう時は1つずつ処理した方が良いよ」

月村の言葉に驚いた八神はそうやな、と言ってからティーカップに入っていたお茶を一口飲み……力一杯テーブルを叩いた。

「何でや!!何でお土産食べるのに注意せなあかんねん!!」

「作ってくれた奴が最近理解出来ない方向に進化してるんだよ。前なんてロシアン肉まんを作ったとか言って、大外れが超激辛中華まんだった……3日は何食べても味しなかったなあ……お土産に用意されたやつだから大丈夫だとは思うけど、念のためにな」

「アンタが被害者かいツ!!それで次はアンタや!!何をどうしたら様付けが親しみになるねん!!豚扱いたらどういうことや!!」

「私、生まれつきこういう気質なのよ。支配者タイプってやつね……あ、両夜には逆に支配されたいわ!!」

「スルーやスルー!!最後にすずかちゃん!!何で平然としてられるねん!!度肝抜かれてもうたやないか!!」

「はやてちゃん……大丈夫、すぐに慣れるから」

「その満面の笑みが不安しか感じられへん……!!」

流石は関西弁で喋っているだけのことはある。八神は力の限り俺たちの発言に関して全力の突っ込みを行なっていた。彼女からすれば突っ込みたかったから突っ込んだだけなのだろうが、それだけで十分だった。

八神が全力で、それまでの雰囲気など知った事かと突っ込んでくれたおかげで重苦しい雰囲気は幾らか和らいでいる。

愛歌がツボにハマったのか、肩を震わせて笑いを堪えているのは予想外だったが。

《カガミ、と言ったな。聞こえているか?》

八神が息を整え、愛歌が笑いを堪えているのを視界の端に捉えながらお茶を飲んでいるとシグナムから念話が届いた。愛歌の様子からして話しかけられているのは俺だけなのだろう。こうなることは予想していたので顔に出さずに冷静に対処する。

《聞こえてる。久しぶりだな、シグナム》

《このような形で再会するとは思わなかったがな……貴様には悪いが、この場ではあの日の事は無かったことにしてほしい。はやてに我々の行いを知られたくないのだ。そちらも月村をこちら側に巻き込まなくて済む……条件としては悪くはないと思うが?》

《安心しろ。元々あの日の事を持ち出すつもりは無いからな》

この場ではシグナムたちに襲われた事を明かすのは簡単だが、そうすればこの先がどうなるのか分からなくなってしまうというデメリットが存在している。原作という形でこれから先の未来をある程度知っているものの、それは俺たち転生者の存在が無い場合での話。俺たちの与える影響を考えれば、いつ破綻してもおかしくない。なの

で、出来るだけ俺の知っている通りに物事を進ませる。物語の終盤……闇の書の完成されるその瞬間まで、そうしてくれた方が都合が良いのだ。

それにこの場で下手に動けば月村に魔法の存在を教えてしまう事になる。夜の一族という現実世界に生きる吸血鬼の彼女ならば魔法の存在もあっさりと受け入れるだろうが、だからと言って知らなくても良い事を知らせる必要は無いのだ。

「深淵を覗く時、深淵もまたこちらを覗いている」という言葉がある。それに当てはめれば、月村が魔法の存在を知った時、魔法も月村の存在を知る事になる。

例え魔法の存在を知ったところで、魔力を持たなければそれだけでお終いになるだろう。地球では魔導文明が存在していないので、一部の突然変異と呼べる例外を除いてリンカーコアを持たない。しかし、月村はリンカーコアを持っている。活性化していないのか魔力を貯蔵する機能は働いていないのだが、彼女の身体にはしっかりとリンカーコアが存在しているのだ。

これを知れたのは偶然だった。ふと夜の一族と普通の人間はどんな差があるのだろうとハスターに月村の身体をスキャンしてもらった事で発覚したのだ。夜の一族はリンカーコアを持っているので吸血鬼になっているのかと考えてこっそりと月村忍の事もスキャンしたが、彼女の身体にはリンカーコアが存在していなかった。つまり、月村だけがリンカーコアを持っている事になる。

リンカーコアが活性化していないので魔力は持たないが何かきっかけがあれば活性化してもおかしくないと言うのがハスターの見解だった。魔法の存在を知り、魔法に触れる事でそうなるのであれば、俺は月村に魔法の存在を教えようとは考えない。夜の一族なんてい

う普通では有り得ない存在として生まれた事を苦悩していたのだ。これ以上普通と懸け離れた存在になる必要は無い。

《そうか……感謝する》

《てかさあ、あの日の事を持ち出すつもりが無いのならあの2人どうにかしてくれない？特に赤毛の方。敵意を隠そうともしないんだけど》

《シャマルとヴィータか……シャマルは私の怪我を治療したから、ヴィータは設計上精神が幼く設定されているからだな。私からこの事を話せば幾分はマシになる筈だ》
《そう思うのなら早くしてくれ》

ともあれ、シグナムとの取引が成立した事でこの場でバトるような事態にはならなさそうだ。この事がシグナムから伝わったのか、赤毛の少女と金髪の女性——ヴィータとシャマルからの敵意は幾らか治った。それでもシャマルから警戒されている事には変わらず、ヴィータは相変わらず睨んでいるのだが。

「はあ……はあ……ふう……取り敢えず、あんたらの頭のネジが足りひんのは理解出来たわ」

「自覚はある」

「自覚しとるんかい!!」

「あら、そんなの当たり前よ？だって、足りない事を自覚していなきやただの精神異常者じゃない」

「ああもう!!これからあんたらの事はそういう奴やと思って接するわ!!ええな?」

「オツケー」

「どうやら遠慮しなくて良さそうね?」

愛歌が新しい玩具を貰った子供の様な、弄りがいのある人間オモチャを見つけた様な無邪気と邪悪が入り混じった笑みを浮かべているが、八神は

それを向けられても徹底抗戦するつもりらしく愛歌の事を睨みながら中指を突き立てていた。骨のある人物で何よりだ。そうでなければ、愛歌がやり過ぎてしまった時に心が折れてしまうかもしれないから。

「はあ……怒鳴ったら疲れたわあ……シヤマルく、お茶のお代わり淹れてえな。あ、ついでにこのお土産も出しといてな？」

「分かりました。あ、そうだ。ついでに私の作ったクッキーも一緒に――」

「――ヴィータ!!仕留めろ!!」

「任せろお!!」

その瞬間、ヴィータのボディブローがシヤマルの横腹に突き刺さる。スナップを効かせた良い一撃を無防備に食らったシヤマルはその場に崩れ落ちた。

「……今のは何かしら？」

「見苦しい物をお見せした。シヤマルの作ったものは……あれだ、見た目は悪くないのだが味が不味いのだ」

「初めてシヤマルが作ったモン食べた時、救急車呼ぶかどうか迷ったもんなあ……」

「ザッフィー、シヤマル廊下に運んどいて」

それは彼女たちにとっていつもの事だったのか、ザフィーラは八神の指示に従いシヤマルの首元を噛み、廊下まで引きずって連れて行った。あの様子からするにシヤマルはしばらくの間は戻ってきそうに無かった。あまりの手際の良さに愛歌ですら呆気に取られ、月村は一度見たのか「またこれか」みたいな目で見ている。

「――ふああ……はやて〜?なんかシヤマルが廊下で死んでたんだけど、また料理作ろうとしてたの〜?」

そして、シヤマルと入れ替わりになる様に新たな人物がリビングにやって来た。

八神と同じ茶髪を肩の辺りまで伸ばして置きながら、寝起きなのか寝癖で荒れ放題。上はキャミソール、下は下着だけという非常にラフな格好の女性が眠たそうに欠伸をしながら姿を現し――

「ヴィータ!!ザファイラ!!」

「おう!!」

「……」

その姿を見た八神の指示を受けたヴィータとザファイラにより、速攻でリビングから姿を消した。

「……今のは?」

「ぎ、座敷わらしちやうかな?」

「声が震えてるぞ?それにあんなにデカイ座敷わらしがいてたまるか。顔は八神に似てたから身内じゃないか?」

「……そうです。ウチのお姉ちゃんです」

身内とはいえ……いや、身内だからこそなのか、家の中で非常にラフな格好をしていた姉の痴態から目を逸らしたいのだろう。八神は顔を手で覆いながらさっきの人物が姉であると告白した。

「そっかー姉かー……マジかー……」

俺だっけさっきの光景は見間違いだと思ったが、八神の口から肯定されてしまったのだから信じるしかない。

今の人物こそ――この世界に転生してきた、最後の転生者なのだ

۲۰

「お見苦しいところをお見せしました……」

「頭が高いわよ、もつと頭を下げなさい」

「殴りたい……!!」

八神によく似た女性はヴィータとザファイラによって連れ去られ、戻ってきた時には寝癖を直し、キャミソールに下着姿からセーターに膝丈のスカートという格好に変わっていた。目を覚まして自分が何をやったのか理解したからなのか、それとも八神に睨まれたからなのか——この場合は間違いなく後者だろう。彼女は今、リビングの床に正座で座って頭を下げている。それだけで、女性のカーソトの低さが伺えた。

そして愛歌は無邪気で邪悪な笑みを浮かべながら彼女の頭を踏んでいた。

これは愛歌の趣味ではあるが、彼女の意味では無い。八神にお仕置きをしたから手伝ってくれと頼まれ、月村による罵詈雑言プレイをするか愛歌の王女様プレイをするかの協議の結果こうなったのだ。

愛歌の素足で頭を踏まれているのが屈辱的なのか女性は顔を真っ赤にし、だけでも八神からお仕置きだと告げられているので抗うことも許されずに愛歌のなすがままにされていた。

あんなに生き生きとしている愛歌は久しぶりに見る。八神家に来る前にイレインに煽られていた事もあってストレスが溜まっていたのだろう。僅かに痛みを感じる程度に、しかしそれを苦痛に感じない程度の強さで女性の頭を踏みつけていた。

「ところであの人の名前は？」

「お姉ちゃん、自己紹介や」

「このままの体勢で!?」ルーあ、ちゃんとなりますから踏む力を強くするのは止めて!!や、八神めぐりやがみです!!」

年下の少女に頭を踏まれながら自己紹介をするというクツソ情けない姿に八神の気は済んだのか、愛歌に止めるように言う。愛歌はもっとしたかったのか若干不満そうではあるがそれに従い、女性ルーめぐりの頭から足を話し、ワザワザ脱ぎ捨てていたソックスを履き直して俺の隣に座った。

「楽しかったか？」

「とつても楽しかったわ。本音を言えばもう少し屈辱を味わわせてやりたかったのだけど……」

「最近の幼女怖すぎない!?それにもっとこう、年上の人間に対する礼儀とか無いのかなあ!?!はやてに頼まれたからって躊躇いなしに頭を踏むとか!?!」

「さっきのダラシない姿を見せられた時点で礼儀とか必要ないと思うわ」

「それに無職のお姉ちゃんに年上云々とか言われとう無いし」

「はやてえ!?!」

めぐりは叫びながら立ち上がろうとするが、八神のひと睨みで怯み、大人しく座り直している。どうやら頭を下げるのは許されたようだが、正座を止めることは許されていないらしい。彼女のカーストはどれだけ低い位置に存在しているのだろうか。

少なくとも我が家のゴーストカースト最下位の士郎さんよりも下に位置しているように見える。

お茶を飲みながらイレインからお土産として渡されたロールケーキ

キを摘んでいると、めぐりから敵意の込められた視線を向けられているのを感じた。恐らくはあの夜のシグナムの左腕を傷つけた事を根に持っているのだろう。闇の書の騎士という、本来ならば使い捨てられる様な立ち位置にある彼女たちを、八神とめぐりの2人は家族として扱っている様に見える。いくら蒐集という行為が悪だとしても、家族を傷つけられて平然としていられる訳がない。シグナムから取引の事を話されているのでそれ以上は何もしてこないが、彼女の怒りは傲慢でありながら至極真つ当なものだった。

そこら辺の事情は分かっているので俺からは何も反応を起こす事なく、無視してロールケーキを食べる。どうやらお土産用だけあつておかしなことはしていないようで普通に食べられる。

《……ねえ、聞こえているのですよ？何をしに来たのよ》

《別に何も？月村に誘われたから来ただけだ。お前が考えている様な事をするつもりは無いから安心しろよ》

大きめにカットされたフルーツとクリームのハーモニーを楽しんでいるとめぐりから念話が飛んで来たので顔に出す事なく応じる。声色から感じられるのは敵意と警戒。前者はシグナムの事から、後者は家に俺が来た事からなのだろう。

《そんな事を言われて信じられると思う？》

《シグナムは信じてくれたぞ？それにあの日の事は秘密にするという取引もしたしな。聞いてないのか？》

《聞いているけど……シグナムう……》

《そちらが悪い、こちらは正当防衛。それを理屈で理解しても感情では納得出来ない。その気持ちは分かっているから安心しろ》

《……》

俺に諭されている事が気に入らないのか、めぐりは複雑そうな顔を

浮かべていた。

それを見た八神が反省していないと判断し、ヴィータにポリタンクを持って来させて彼女の膝の上に乗せる。

「ぐわああ……ッ!!」

「だ、大丈夫なの？」

「大丈夫や。ウチのお姉ちゃん、一日中家の中でグータラしてる癖に身体は頑丈でな、この間なんて階段の一番上から一番下まで落ちたのに擦り傷一つ付いてなかったしな」

八神のめぐりへのヘイトが高過ぎる。やはり無職というのがいけないのだろう。原作から薄っすらとだが八神の家庭事情は知っている。亡くなった両親が遺してくれた遺産があるので食うに困っていないだろうが、だからといって無駄飯食いを許す事はしない様だ。

改めて八神めぐりという人物を観察する。彼女の容姿は八神が成長すればこうなるのでは無いかと思うほどに八神に似通ったそれで、普通にしていれば美女と呼ばれる類である。欠点があるとすれば八神が言っていた通りに無職である事……それと胸が無い事か。

服越しで分かりにくいが見る限りでは平坦だった。更地だった。起伏は僅かも存在せず、無情と呼べるほどに真っ平らである。八神はまだ少女で成長期を控えているから希望はあるのだが、めぐりに関しては成長期を通り過ぎてしまっているのでこれ以上の成長は見込めない。

これから先、嘆きの平原とともに生きていくのだと思うと見ていられなかった。

めぐりの嘆きの平原から目を逸らし、隣に座るシグナムの胸部装甲

を見て目の保養とする。

「ねえ、どうして目を逸らしたの？それよりもさっきまでどこを見ていたの？なんでシグナムを見たの？答えなさいよ……!!」

「俺からは何も言えない……だって、現実を突きつけるなんてそんな酷い事は出来ないから……!!」

《両夜？あの無職の事は兎も角、今シグナムのどこを見ていたのかしら？ちよつと私に教えてくれないかしら？》

《こ、こごじや迷惑になるから帰ってからな!!》

目の前に広がる絶望から目を逸らし、隣にあった桃源郷を見ていたら反対側から恐怖がやって来た。一先ず落ち着かせる事には成功したのだが、帰ってからが怖い。

そんな中、八神が俺の事を不思議に見ている事に気がついた。

「どうしたんだ八神？そんな顔して」

「いやな、お姉ちゃんのお賀美君に対する態度が妙に親しそうに見えるてな……2人は知り合いか何かなん？」

めぐりがやってしまったみたいな顔をしているが幸いな事に八神、そして月村に見られる事は無かった。しかし、これは不味い事になった。

俺とめぐりの関係は現段階では加害者と被害者の関係である。シグナムが八神にあの日の事を秘密にしたいと言っていた以上、八神は魔法関連に関しては詳しくないのだろう。そんな彼女に俺たちの関係を馬鹿正直に話す事は出来ない。ならば誤魔化すしか無いのだが、めぐりはテンパっていて期待できそうに無い。

しょうがないと思いつながらお茶で口の中を湿らせ、

「そうだな、簡単に言えば―――夜に散歩していたら、太くて硬くて長い物を振り回されながら追いかけられた事がある仲だな」

「ヴィータ!! 追加や追加!! 家にあるだけのポリタンク持ってきてえ!!」

「はやてちゃん、他に使えそうな物ないか探しても良いかな?」

「はやてえ!? すずかちゃん!」

「ひ、酷い目にあつた……!!」

「どこからどう見ても自業自得だな」

「ええ、貴女がちゃんと誤魔化せていたらこうならなかつたわ」

夕方になり、俺たちは家路に着く。本来ならば月村を迎えに来た車に乗せてもらって帰る予定だったが、途中で買い物をしたいと理由をつけてそれを断り、子供だけでは心配だからと散々お仕置きされてようやく誤解を解く事に成功しためぐりを付けて貰っている。一応八神の誤解を解く事には成功しているのだが、疑わしい真似をしたということで帰れば彼女にはシャマルの手料理が待っている。

それで良いのかと八神に聞いたところ、いい笑顔でギルティーと即答された。

「……で、貴方たちは転生者よね?」

日が暮れて薄暗くなつた道を歩いていると、周囲に人影が無いことを確認しためぐりが小声で訊ねてきた。念の為に魔力スフィアが存在しないことを確認し、愛歌にはアイコンタクトで黙っておくように支持する。どうやら彼女は俺たちの2人共が転生者だと思つていようだ。それは半分正解で半分間違いなのだが、訂正する義理も無いので勘違いさせたままにしておく。

「それが何か？」

「この先……正確に言つたら闇の書が覚醒したら、どうなるのか分かつているよね？」

「蒐集した奴の魔法やスキルが使えるってことだろ？」

「そう、私からは出来る限り転生者から蒐集を行わないようにさせる。だから貴方は他の転生者たちに戦場に出てこないように伝えておいて」

それを聞いて顔には出さずに内心で安心する。闇の書側の味方をしている彼女だが、ちゃんと先の事を考えることが出来るだけの冷静さを持っていたようだ。これが感情のままに行動するタイプだった場合、転生者であろうが無かろうが御構い無しに魔力を蒐集し、闇の書の覚醒後に行われる最終決戦でとんでも兵器が誕生する事になっていた。

その事を考えればめぐりの提案はベストな物だった。原作通りに物語が進めば少なくとも八神の命は助かり、闇の書は消滅する。その為に邪魔な転生者を戦場に出さない。それが間違いなく最善で――同時に最悪手でもあった。

「それを他の奴に伝えたところで反発されるのが目に見えてるんだけど？」

間違いなく反発するのは黒須と赤城だろう。黒須は英雄ガリアに憧れていて、悪を許さないからこそ人々を傷付けている闇の書の行為を見逃す事が出来ない。赤城は黒須とは違ったベクトルで正義感が強すぎる上に思い込みが激しい。自分がそうだと決めたのなら、それが正しいと信じて周りの制止を聞こうとせずに突っ走るだけ。

意外な事かもしれないが、一番反発しなさそうなのは御剣である。管理局によって魔力を封印された彼は臆病になった。それまで傲慢だったのは神様から与えられた転生特典があつたからであつて、それを自由に使えなくなったのだから周囲が怖くて堪らないといった様子だつた。

端的に言えば、心が折れている。仮に封印を解除するから戦えと言つても、御剣が拒絶するのは目に見えている。

「そこは……ほら、こう、なんかいい具合な感じで言いくるめるとか……」

「何にも考えてないのかよ。これだから無職は……」

「わ、私はあえて働いて無いだけだから!!はやての事が心配で、側にいたいから!!」

「今日の八神の様子を見てる限りじゃあ、完全に穀潰し扱いされてるんだけど?」

グハツと、よく分からない声をあげながら膝を着くめぐり。偶々向かいからやって来ていたサラリーマンが不審者を見るような目で彼女の事を見ていたが、いつもの事だからと言って誤魔化す。

「はあ……」応言うだけは言つてみるけど期待するなよ?万が一、ダメだったら蒐集される直前で助けに入るから」

「う、うん……お願い……」

足を子鹿のように震わせながら立ち上がるめぐりの姿を見て不安
しか感じられなかった。

u n h a p p y f a m i l y ・ 5

「うう……!!ああ……!!」

「よしよし、良い子だ」

リーゼロッテを監禁している密室の中、俺と彼女以外に誰もいないそこで俺は泣きじやくっているリーゼロッテを抱き抱えながらあやしていた。今の彼女の有様はとても酷いものだ。来ていた服は肉体的苦痛を与える過程でボロボロになってしまい、ただの布切れに等しい。リーゼロッテが接近戦をメインにしているためか程よく締まっている健康的な肉体には夥しい傷が付けられていて見ているだけで痛々しい。涙を流している瞳には家族から裏切られたと信じ切っているので光を宿しておらず、絶望に染まっていた。

しかし、彼女は俺に抱きついて泣いていた。肉体的苦痛を与え続け、健康的な身体を傷だらけにし、家族から裏切られたと信じ込ませて絶望に追いやった俺に抱きついて泣き、あやされている。

今の俺は変身魔法で大人になっているものの、バリアジャケットは装着していない。魔法を使えないとは言え油断している様に振舞っている。俺の首の骨を折ることが、首に噛み付いて殺す事が出来るというのにリーゼロッテはそれをしようとしなない。ただただ泣き、俺のなすがままにされているだけだ。

それを見て、リーゼロッテの洗脳が完全に終わった事を確信する。実は前回でこの部屋から出る時にいつもならしている鍵を閉めずに出ていたのだ。鍵をかける音は大きく、彼女も鍵が掛けられていない事に気付いていたはず。すでに彼女を拘束しているものは無く、いつでも逃げられる状況――それなのに、彼女は俺が再び訪れるまでこの部屋に居続けた。俺が来るまで一步も部屋から出ずに、俺の事を待

ち続けていた。

「すてないでえ……!!なんでもするからすてないでえ……!!」

リーゼロッテの中にあるのは俺に捨てられるのではないかという恐怖心。心の支えを奪い、へし折り、崩れそうになっていたところに俺という存在を差し込んだので彼女の中では俺が全てという認識になっている。

恐怖、カリスマ、大義名分。人を都合良く動かせる方法というのは山程あるのだが、今回俺が選んだのは依存だった。俺という存在が全てであり、俺に求められているからこそ自分には価値がある——そういう風な洗脳を彼女に施した。

結果はご覧の通り。逃げられる状況をわざわざ分かりやすく提示してみせたというのに彼女は逃げる事を選ばず、俺の事を待ち続けた。こうして泣きながら抱きついてあやされる程に俺に気を許し、みつともなく泣きながら捨てないでと懇願する程に俺に依存している。

「ああ、捨てるなんてしないさ。俺の可愛い可愛いリーゼロッテ。お前の命が無くなるまで、俺はお前の事を見捨てやしない」

力強く抱きついて来るリーゼロッテを拒む事をせず、それどころか優しく抱き返してやりながら優しい声色で彼女の耳元で囁く。それは紛れも無い俺の本心。情けない話かもしれないが、洗脳をしている間に彼女に対して情を抱いてしまったのだ。

洗脳をもっと雑に行なっていたのなら、ただ一度つきりだけの人形として扱うつもりだったら、俺に依存する前に完全に壊れてしまっていたのなら、情など湧かなかっただろう。どうでも良い便利な手駒と

して使い潰して終わりだった。

しかし、俺は彼女に対して情を抱いてしまった。故に、使い潰す事はない。俺の役割が終わるその瞬間まで、彼女は俺の者として側にいさせる事を決める。

「だからリーーこれは首輪だ」

そう言つてリーゼロッテの首筋に歯を立てる。数週間風呂どころか水浴びもしていないので彼女の身体は汚れているが、前世の故郷の衛生環境に比べれば綺麗なので気にせず。

「あ……んん……!!」

遠慮なく、容赦無く歯を突き立てているので痛いはずなのに、リーゼロッテの口から溢れたのは快楽を堪える様な甘い声だった。俺から与えられる物が何であれ、彼女からすれば嬉しいのだろう。

口を離せばリーゼロッテの首には痛々しい咬み傷が付いていた。重要な血管は避けて歯を立てたので命の危険は無いが、その傷は治つたとしても残るだろう。流れ出る血を舌で拭い、残るような傷をつけられた事に安心する。

「この傷はお前の首輪だ。首輪を掛けたのは俺だ。これでお前は俺の者だ」

「わたしは……あなたの……もの……」

「そうだ。俺はお前を捨てない。絶対に、捨てない。俺のために生きる。そして俺のために死ぬ。お前の全ては俺のためにあるのだから」

正常な状態ならば何を言っているのだと罵倒されそうな事を言ったのだが、リーゼロッテは俺の言った事を掠れる様な声で復唱してい

た。繰り返させる度に、絶望に染まって光を宿していなかった目に怪しい光が灯る。

リーゼロッテの洗脳は、ほぼ完了していた。

「はあ……まさか醤油を買い忘れるなんてベタな事するなんて……」

「加賀美様が出られなくとも、私だけで十分だったのですが」

「買い物以外にも目的があるから気にするな」

買い物袋に業務用の醤油のボトルを詰め込みながらイレインと共に夜の道を歩く。冬が近づいていて本格的に冷え込む様になり、息を吐けば白く染まって風に流されて消えていく。それを見るだけで余計に寒くなった様に感じたので、首に巻いていたマフラーを鼻まで持ち上げて露出している部分を減らす。仕えるものであるからとメイド服を着ているイレインだが今の彼女はセーターにスカート、そしてその上からコートを羽織るといふ普通の格好をしていた。流石にメイド服では目立ち過ぎる事を理解している様だ。

「買い物以外にですか……もしかして、この視線の事でしょうか？」

「へえ、分かるんだ」

「戦闘用に製造された自動人形ですのでレーダーを内蔵しています」

「便利だな」

イレインが言ったように、俺が外に出たのは醤油を買いに行く事以

外にもある。彼女はリーダーという科学技術でそれを察知したが、俺は家を出た時からずっと見られている事を察している。

「数は5、反応から全て人型だと予測。距離は……上空50m」
「5つてことは全員勢揃いかよ。ブラフでもいいからバラしておけばいいのに」

今の時期に魔力を持っている人間が出歩けば、闇の書の騎士たちに襲われる事になることは分かっている。それを承知でワザと出歩いているのだ。それでも無ければこんな人気の無い暗い道を通る必要など無い。

「反応、散開しました。1つはその場に留まり、残り4つは真っ直ぐにこちらに向かっています」
「掛かったな」

周囲の景色が変わり、三角錐型の結界が展開されるのを見てからポケットの中に入れていた機械ローアースラに襲撃を知らせる装置のボタンを押す。これで管理局は闇の書の騎士たちが現れた事に気付いたはず。

後は管理局が来るまでの間、時間を稼ぐだけだ。

「レギオン、展開」
「ローー来ます」

レギオンにバリアジャケットを展開させるのと同時に、上から怒気と喜色を感じ取りその場から弾けるように飛び出す。本来ならば結界から弾かれるはずのイレインだが、レギオンの一本を持たせて魔力を持っていると誤認させているので彼女も取り残されている。彼女もあのタイミングでの襲撃を察知していたようで俺の一瞬遅れで同

じように行動していた。

咄嗟の回避行動で醤油はお亡くなりになってしまったが。

「……久しいな、カガミ。あの日の夜の続きをしよう」

「……ぶっ潰す……!!」

先陣を切つて来たのはシグナムとヴィータ。砂埃を払いのけながら姿を現した彼女たちの反応は怒りに喜びと真逆。シグナムはあろうやむやになった続きが出来るから喜んでいるのだろう。ヴィータはシグナムに怪我をさせた俺が許せないのか怒っている。

「……加賀美様、失礼致します」

一言だけ俺に断りを入れ、イレインはコートから拳銃を取り出して上空に向けて引き金を引いた。人のいなくなつた夜の街に銃声が響き渡り、一瞬遅れで何かが弾かれるような音が聞こえてくる。目の前にいる2人から注意を晒さぬようにしながら上を見れば、そこには障壁で銃弾を防いでいるザファイラの姿があつた。

そして甲高いラツパの音が響き渡る。それが攻撃の前兆である事を知っているので加速魔法を行使しながらイレインのコートを掴んでその場から逃げれば、頭上からミサイルが降り注ぐ。

「『不死鳥』のジェリコのラツパ……だったか？」

爆撃機による爆撃だというのにある程度の指向性を持たせていたのかシグナムたちは巻き込まれずに俺たちにだけ爆風が襲い掛かるが、それを鼻先で回避する事に成功する。

「やれやれ……烈火の将に鉄の騎士、盾の守護獣に『廻り者』。お腹

いっぱい過ぎて吐き気を催すぞ」

「加賀美様、過食は健康に宜しくありません」

「よし、冗談に反応出来るってことは余裕はあるな」

イレインの若干の外れな返答に満足しながらレギオンを構える。そしてイレインは……虚空から重機関銃を二丁召喚していた。

魔法文明の存在しない地球で製造されたイレインはリンカーコアを持つていないし、魔法が使えるような構造をしていない。だが、デバイスという外付けとカートリッジシステムという燃料を持たせる事で限定的に魔法を使えるようになっていて、流石に魔導師たちのように魔法戦を練り広げられるだけの魔法を使うことは出来ないが、地球の武装を召喚してそれで戦う事は出来る。

「ヴィータとザフィーラ……ちっさい方とムキムキの方は任せる」

「承知いたしました」

俺の指示に一切反論する事なくイレインはヴィータとザフィーラに銃口を向け、容赦無く引き金を引いた。

「チィ……ッ!!」

イレインが引き金を引くのと同時にザフィーラがヴィータの前に障壁を展開しながら立つ。盾の守護獣の名の通りに、彼の役割はタンク役のようでその行動には一切の迷いは無く、また庇われているヴィータも動揺する事なくザフィーラを盾にしていた。

拳銃や軽機関銃などの人間が装備出来る種類の銃であればザフィーラ1人でも対処出来ていたのだろうが、生憎とイレインの使っているのは重機関銃。人間が直接使用する事を考えておらず、何かしらに設置して使用することが前提となっている物だ。人間ならばそうしなければまともに使用することが出来ない銃だが、自動人形であつて人間では無いイレインはその反動を細腕一本で抑え込み、当たり前のように全弾をザフィーラに集中させている。

そうして出来るのは弾幕の壁。分単位で800発も発射する重機関銃を防ぎながらも余裕が無いのかザフィーラはその場に釘付けにされ、背後に庇われているヴィータもまた動く事が出来ないでいた。

あの銃は安次郎から送られてきた物なのだが、彼は一体何を考えてあんな物を送ってきたのだろうか。

「ッ!!シグナム!!そいつは任せる!!」

ザフィーラのガードの硬さは知っているであろうが、この状況は不味いと考えたのかめぐりはシグナムに俺の相手をするように言つて2人を助けようとする。魔法の力にバリアジャケットという防御が

あつたとしても、イレインの弾幕は驚異的だ。それを考慮すれば2人を助ける為にめぐりが動くのは至極当然だった。

「ま、^{加速術式}、^{負荷軽減}だけどね」

それを理解しているからこそシグナムの視線を掻い潜り、魔法で加速しながら2人の事を助けようとしていためぐりの前に飛び出し、両手に持つレギオンでめぐりの目と喉を切り裂く。目の前に俺がいる事を理解していながらザフィーラとヴィータに注意を向けてしまった隙を突いた奇襲は成功し、仰け反りながらもめぐりは無傷でいた。

桜木からの話によれば、爆撃機の兵装を使っているのはハンス・ウルリツヒ・ルーデルの「不死鳥」の才能。第二次世界大戦でドイツ空軍に所属し、三十を超える被撃墜回数を積み重ねながらも生還して戦い続けた事に由来する不死身の能力。詳しく言えば、外的影響を同等の反作用力によって打ち消す事でどんな攻撃も無効化出来るらしい。

十全に理解する事は出来なかったが、あの状態のめぐりはどんな攻撃でも傷付けられない事だけは理解出来た。完全な不死者であるのなら相手をする事自体が悪手であり、出来るのならば戦場に立たせ無い事が好ましい。

だが、桜木によれば「廻り者」の才能は完全なものではないらしい。原典では才能の使用には例外なく多くの体力と精神力を使うとあつたと聞かされている。転生した事で魔力が消費されるスキルに変わっているだろうが、それは変わらないだろうと言っていた。

つまり、あの不死身は限りのある不死身であって完全な不死身では無い。

であるのなら、魔力が尽きるまで戦い続ければ勝てるという事だ。

「シューーッ!!」

シグナムが俺の行動に気が付くまでの一瞬の間で5度は致命傷になるように斬りつけ、固まっていためぐりの身体を蹴って横から迫る一閃を避ける。

予想はしていたが、今のめぐりの反応で確信した。『不死鳥』の才能は不死身になる才能であるが戦闘者になる才能では無いと。もしもそうであるのなら、斬られても怯むことなく行動していたはずだ。俺なら近づいていた相手を捕え、手にしている機関銃で撃っている。

そのままできてくれればめぐりの存在は然程脅威では無い。爆撃機の爆撃こそ範囲が広くて厄介だが、それはそのまま味方を巻き込む可能性に繋がる。それと機関銃の銃撃にさえ気を付けていれば、めぐりはただの傷付けられない人間でしか無い。

「シグナム……」

「……私としてはそのままできて欲しいのだがな」

「ごめん……でも、私も一緒に戦うって決めたから」

「謝罪は要らない、欲しいのは生きて帰るという覚悟とその結果だけだ。その為に為すべき事を為せ」

能面のような顔に僅かに罪悪感を浮かべながらめぐりは自身を背中であぐらに立っていたシグナムの頬に手を伸ばし、爪で浅く傷を付けた。シグナムの白い肌には赤い雫が映える。出来る事なら俺がそうしたかったなあとの外的な事を考えながら、めぐりの変貌を見届ける。

傷害行為を行うのと同時にめぐりから重瞳を貼り付けた黒い霞が

立ち上がり、そのまま全身に纏わりつく。『不死鳥』の時にはあつた甘さは一切消え失せ、今のめぐりからは傲慢さが滲み出している。

彼女から垂れ流される覇気に息苦しきを感じるが、動きにくさは感じない。前世で認められた英雄は彼女以上の覇気を放っていたのだ。この程度の覇気で動けなくなるなど、彼に対する侮辱でしか無い。

そしてめぐりの姿が黒い霞と共に解ける様に消えた。動く気配を見せないシグナムに疑問を抱きながら、姿を消しためぐりを警戒していると、上空に黒い霞が集まり、それがめぐりになって殴り掛かってきた。いつもならばそれを皮一枚で避けながらカウンターを決めるのだが、生存本能が警鐘を鳴らしているのでそれに従ってその場から飛びのく。

するとローローめぐりのパンチ一発で、地面が砕けた。

飛んでくるコンクリートの破片をローブで防ぎながら、普段通りにカウンターを決めようとしていたら死んでいたかもしれないと肝を冷やし、頭上から迫っていた連結刃の剣先を躲す。この光景を見る限りでは今のめぐりの膂力はシグナムのそれとは比べものにならない程に高い。

更にそれだけでは終わらず、纏っていた霞がコンクリートの破片を黒く染め上げローローそれが一人で浮かび上がり、俺に目掛けて飛んでくる。質量とスピードからバリアジャケットでも受け止められないと判断して逃げ回れば、破片の陰に隠れる様にシグナムと握っている道路標識を棒術の様に振るうめぐりが接近していた。

「マジかよ」

一旦引いて態勢を立て直したかったのだが、残念ながら逃げ道はい

つのままにか黒く染まったコンクリートの破片が待ち構えている。仕方がないので全身を弛緩させ、待ち受けることにした。

シグナムとめぐりが凶器を振るう度に耳に風を斬る嫌な音が届く。一対二、二方向から同時に、あるいはタイミングを僅かにズラしながら振るわれるそれらを二人の身体を見て、どういう軌道で振るわれるのかを予想しながら全霊で逃げに回る。レギオンのバリアジャケットは速度を出すために防御にはリソースを割いていない。一発でも受ければ良くて重傷、悪くて即死なのだが、反撃の事を一切考えずに避ける事だけに集中していれば問題ない。

“廻り者”としての才能の切り替え。“不死鳥”の才能では俺とは戦えないと判断し、彼女の使える才能の中で最も強い物であろう項羽の才能“万象儀”に切り替えた。“不死鳥”の時の様な戦いへの不慣れな素振りは欠片も残っておらず、シグナムと同じような歴戦の勇士の風格と達人級の武術の映えを見せつけている。

卑怯などとは言うつもりは無いが、呆れてしまう。個人であるはずなのに戦っているこちらからしてみれば何人もと戦っているように感じられるから。桜木の転生特典とはベクトルが違うが、彼女の特典もあいつと同じ様な“戦争”に部類される物なのだと認識する。

だとするならば、個人で戦うのはあまりにも分が悪過ぎる。圧倒的に特化した力でもない限り、そういう部類の人間と戦うのは厳しいのだ。大人の姿なら全力を出せばいけなくも無いのだが、子供の今では俺Ⅱアクロ・ダカーハである事を隠す為に色々と制限を設けているのだ。今の状態では拮抗に持ち込めれば御の字といったところだろう。

まあ、今の俺の勝利条件は管理局が来るまでの時間稼ぎであって彼女たちを倒す事ではないのだが。

それにしてもめぐりの俺に対しての殺意が高過ぎる。シグナムは前回の戦いで戦闘^{バトルジャンキー}狂や修羅っていると理解していたので特に驚く事も無いのだが、彼女の振るう一撃はどれもが人体の急所を狙った必殺のそれ。魔法であれば非殺傷設定が施されるだろうが、急拵えの武器である道路標識にそんな事をしていない様には見えない。

もしかしたら、原作を知っているからこそその思い込みなのかもしれない。非殺傷設定があるからどんな事をしても傷付けたり殺したりする心配は無いと考えているのだろうか。もしそうだとしたらその思い込みを正さなくてはならないのだが、それを実演して本当に死んでは話にならない。言葉で正そうにも今の彼女は軽くバーサークしているみたいなので聞く耳持たないだろう。

難儀だなあと思いつつも二人の攻撃を避け続ける。反撃が出来ないこともあるのだが、二人の動きを見て自分の物とする為に。そうやって観察をしてーめぐりが未熟であることに気がついた。

確かに項羽の才能で驚異的な膂力を、武術の才能を得ているので強いのだろう。だが、彼女には圧倒的に経験が足りていなかった。一撃で殺せる攻撃を鋭く放って来ようとも、真っ直ぐにしかして来ないので避けるのは容易い。シグナムと二人掛かりで攻めて来ているというのに、めぐりは何も考えずに攻めていてシグナムがそれに合わせているといった風だった。

もしもシグナムが前回と同じように攻めて来たら観察するだけの余裕を持つことが出来ず、この事に気付かなかっただろう。桜木から聞く限りでは完全無欠の特典だと僻んでいたが、隙があるのならばどうにでも出来る。

いくら攻めても当たらない事に戯れて来たのか、めぐりが大振りの振り下ろしを放って来た。躲す事は難しくなかったのだが、その一撃

で足場が崩れて一瞬だけ身体が宙に浮く。その隙を見逃してくれる程、シグナムは甘くは無い。

「紫電一閃——ッ!!」

飛び散っているコンクリートの破片など無視しながら接近し、剣から薬莖を吐き出して炎を纏わせた一閃を放って来る。

足場が無いので避けられる筈がなく、防ごうにもシグナムならば防御ごと斬り伏せて来るだろう。そういう予感があるのでは無く、シグナムならばやりかねないという信頼から来る確信。

迷う事なく、前回使わなかった短距離転移で炎剣の一撃を回避する。だが、これによりシグナムに俺が短距離転移が出来る事を明かしてしまった。出来る事ならば最後まで取っておきたかったが、だからと言って使わないでいて負けるなど間抜けすぎる。

兎も角これで二人と間を開けることが出来た。彼我の距離は大凡30m、シグナムであろうとこの距離を詰めるには2秒は必要の筈だ——そう思いながら足をつけた瞬間、地面から黒い棘が生えて下半身に突き刺さった。

「な——」

痛みに悶えるよりも先に驚きが来る。黒く染まっていることから『万象儀』による攻撃だと分かるが、こんな使い方も出来たのかと。棘から逃れようにも返しが付いているようで抜くことが出来ない。

「喰らええええええ——!!」

吐き出した言葉に秘められたのは怒りか、憎しみか。めぐりが動く

事が出来ない俺に向かって突貫し、道路標識の先端で俺の腹を穿った。

素手でコンクリートを砕く事ができるほどの膂力で放たれた刺突はバリアジャケットの防御を容易く超え――上半身と下半身を別れさせた。

「――」

血飛沫と肉片を撒き散らしながら上半身は宙を舞って重力に従い落下し、下半身は棘によって支えられてそのまま残っている。そしてこれをした下手人は目の前の光景が信じられないと言わんばかりの表情をしていた。それを見て彼女は魔法技術を信賴し過ぎていた事を確信する。

「え……あ……う、嘘……」

「ああ、嘘だ」

人を殺したという事実に関を青くさせていためぐりの側にシグナムが立ち、地面に転がっている上半身を踏み砕く。

すると上半身、そして下半身は溶ける様に消えた。

「短距離転移ショートジャンプと同時に幻覚を使ったのか。中々精巧な物だったが私の目は誤魔化せないぞ」

「知ってるよ」

睨め付ける様に向けられたシグナムの視線をビルの屋上で受け止める。特別な事はしていない、シグナムが言った通りに幻覚を残して俺は屋上に転移していたというだけの事だ。直感に従って行動していて良かった。していなかったら、あの幻覚が俺の末路になっていた

た。

「生き、てる……？殺して……無い……？」

「シグナム、そいつ大丈夫なのか？殺すつもりで来たかと思えば面白いくらいに動揺してるんだけど？」

「彼女は戦いを経験した事がない。そういう事だ」

「つまりは経験不足と……相手が俺で良かったな。俺以外だったら死んでたぞ？」

いくら才能を持っていようと、使いこなせなければそれは役に立たない。今回で言えば、めぐりは才能を使いこなしていなかったから加減が出来ていなかった。シグナムは殺さない様に心掛けているが、殺してしまう可能性も考慮している。しかしめぐりはそんな事は考えていなかった。だからこそ、あの俺の幻覚で面白いくらいに動揺しているのだ。

これに関して俺は責めるつもりはない。平和な現代で殺しても平然としていられるのは異常者か狂人の類だ。一般的な感性を持っている彼女はそれに当てはまらないから、殺しに対してショックを受けるのは当たり前前の事だ。

俺の様なアポカリプスな世界から転生して来たか、シグナムたちの様な殺し合いが日常茶飯事な世界から来たのなら話は別だが。

ともあれ、これでめぐりに“魔法は万能ではない”事を植え付ける事が出来た。これを機に転生特典を使い熟す為に努力するか、それとも開き直って転生特典に振り回されるかは彼女次第だ。

「ああ、時間だな」

そろそろ来る頃合いだろうと思っていると、張られていた結界の一

部が力任せに破壊された。脳筋だなあと思いながら上を見ればそこにはクロノとユーノとアルフ、そしてジュエルシードの時とは違ったフォルムのデバイスを展開している高町とフェイトの姿があった。

「さて、増援も来た事だし第2ラウンドと行こうか」

「援軍!?このタイミングで!？」

「……成る程、さつきまでののは時間稼ぎだったというわけか」

「そうだよ。そうでもないと一対二とかいう不利な状況で戦おうなんて思わないさ」

めぐりは管理局の登場に対して目に見えて動揺しているが、シグナムはどこか納得した表情で頷いていた。やはりめぐりは転生特典によって戦闘能力こそ得ているが、こういう点で未熟な所が見える。これは彼女だけでは無く赤城と御剣にも言える事だが、彼らはどうにも楽観視が過ぎる。神様から凄い力を貰ったから自分たちは凄いんだとでも思っているのだろうか。

全くもって馬鹿らしい。

凄い力を与えられたところでそうなのは特典だけであって、その人間が凄い人間になる訳ではない。これなら俺と同じでらしい特典を与えられなかったが英雄を目指して努力している黒須と特典を使いこなそうと影ながらに努力している桜木の方が余程素晴らしい人間だ。

勿論、その枠組みに俺が入ることは無い。自分がそんな人間ではない事など前世の時から理解している。

「済まない、結界の破壊に手間取った」

「加賀美!!大丈夫だったか!？」

自分という存在を改めて再認識しているとクロノと黒須が隣に降りて来た。二人は当たり前前の様に飛んでいるが、飛行魔法の適性が悲

しくなる程にない俺からしてみればそれはとても羨ましい事だった。一応空中戦を行うための手段は確保してあるのだがそれはアクロ・ダカーハの時の為の物なのでこの場で明かすことはしないでおく。

二人からの言葉を受け止めながら乱入によって掻き乱された戦況を見直す。高町とフェイトは前回のリベンジのつもりなのか二人掛かりでヴィータに挑み、アルフとユーノはザフィーラと対峙している。となるとめぐりとシグナムは俺たちが相手をするのだろう。欲をいえばもつと人手が欲しかったところなのだが、中途半端な実力者に来られても余計な被害が出るだけにしかならない。

「加賀美様、お待たせしました」

「御苦労」

ビルの壁面を登りながら屋上に現れたイレインに労いの言葉をかける。二人はイレインの存在を知らなかったので一瞬驚いていた様だったが俺の反応を見て味方だと認知した様ですぐに冷静さを取り戻していた。

「クロノ・ハラオウン様と黒須龍斗様ですね？私は加賀美様に仕えているイレインと申します。今宵、この場において主に武器を向けた愚者どもを片付ける為、微力ながら協力させていただきます」

「……クロノ、イレインさんの持つてる銃って管理局的にはアウトなんじゃない？」

「銃？一体何の事を言っているんだ？彼女は現場に居合わせた地球の住人で、魔法が使えないから使える武器を使って戦っていただけだ。何もおかしいところは無い」

「それで良いのか管理局……ッ!!」

「正しいだけ、ルールを守るだけじゃダメな時があるからな。このくらい柔軟さを持ち合わせていなければ管理局ではやっていけないぞ？……ああ、勿論おっぴらにはいけないけどな」

「腹黒いなあーそうなのは実に好ましいけどネ!!」

サムズアップをすればクロノも同じようにサムズアップで返してくれる。その反応に内心で安堵する。

管理局の法では禁止されている質量兵器にあたる重機関銃を武器にしているイレインは、管理局的に言えば黒須が言った通りにアウトだ。これが頭の固い者だったら法律違反だなんだと言ってイレインの事を捕らえようとしていたに違いない。そうした結果、訪れるのは戦力の低下というデメリットだけであって一切メリットは無い。正義を掲げてそれに殉じることが俺は止める気は無い。だが、目的を果たすまで俺は死ぬつもりは無いから巻き込まれるわけにはいかないのだ。

「加賀美様、よろしければメイド服に着替えさせていただけたいのですが」

「ブッ!!」

「何ッ!?!」

イレインは自動人形であるが、それを知っている者は俺を除いてこの場には居ない。そんな彼女が脱ぐと言い出したのだからそれに反応しても仕方がない。黒須は吹き出し、クロノは驚きに目を見開きながらもデバイスでその光景を撮影しようとしていた。

「クロノ、ステイだ。その動画撮影モードを起動させたデバイスをしまえ……イレイン、その発言は場所を考えなかったら痴女扱いされるから気をつける。で、なんでメイド服に着替えたがるんだ?」

「はい、やはりメイドにとつての戦闘服はメイド服を除いて他にはありません。貴方がた魔導師たちがバリアジャケットを着て戦うのと同じようなものです。具体的に言えば、メイド服を着る事によって私のやる気が現在の10倍に跳ね上がります」

「メイド服が戦闘服」

「こちらクロノ、アースラ聞こえるか？結界内の映像は撮れているか？」

クロノが欲望に素直過ぎる気がするが、色物が詰まっているアースラの指揮官相当の地位に就いているのだからと納得してしまう。艦長であるリンディ提督はクロノの実母なのだが、彼はその事を理解しているのだろうか。

「やる気が出るのか……いいぞ、許可する」

「感謝します……それでは、お目汚しを失礼します」

恭しく一礼し、持たせていたレギオンでメイド服を自身に重なるように召喚する。そうすると今着ている服の上に着てしまう事になるのだが、同時に服を送り返したのだろう。俺がいつも目になっているメイド服姿になったが、着膨れしているように見えなかった。

魔法を使った早着替えの一種に黒須は安堵の溜息を零し、クロノはサービスシーンが見えなかったからか地団駄を踏んでいる。

そして……足場になっているビルが崩れた。

俺たちのやり取りが気に入らなかったのだろうめぐりが下手人である。振り切った体勢で手にしている道路標識は黒い霞によって長さが伸びていた。

「シグナムの方は知っているよな？もう一人の方はあの黒いモヤを使って攻撃してくるし、爆撃機を召喚してくるから気をつけろ」

「爆撃機!?!なんて物を召喚するんだ!!」

「管理局にあった闇の書のデータには無かった人物だな……今代の主か?。」

「私は遠距離からサポートに徹します。それではご武運を」

飛ぶことが出来ない俺とイレインは重力に従いながら下へ落下し、飛ぶことが出来るクロノと黒須は飛ぶ事で落下を回避している。ふざけた様に見えるても執務官という役職に就いている以上、それなりに経験は積んでいるようでクロノは意識を切り替えてシューターを撃ちながらシグナムとめぐりを牽制している。

イレインはビルの破片を蹴りながら姿を隠した。言葉の通りに遠距離からのサポートを行うつもりらしい。クロノたちが来たことで四対二と数の不利は覆す事が出来たが、質の不利までは補えていない。

唯一の救いはめぐりの挙動がぎこちない事か。

どうやら俺の見せた幻覚が効いているようで、先程までに比べてどこか戸惑っているように見える。戦った事が、殺し合った事が無かったが為に生じてしまった隙。きっと次回では覚悟を決めてしまうので無くなってしまうであろうそれ。

遠慮無く容赦無く、突かせてもらう事にする。

一緒に落下していたビルの破片を蹴りながら空中を移動してめぐりに向かう。黒須の方はシグナムと戦うと決めたらしく、魔力変換によって炎を噴出しながらシグナムに突貫していく姿が見えた。どうやら黒須は正面からシグナムと切り結ぶつもりらしい。彼の技量とデバイスの頑丈さを考えれば、追い付くことは出来なくても追いつがる事は出来るはずだ。クロノの援護があっても勝ち目の無い戦いだが、負けは次回の糧になるのだから存分に楽しんで欲しい。

「よお、少し遊ぼうぜ?」

「加賀美イ……ッ!!」

目に怒りを燃やしながらめぐりが向かってくるが、やはりその動きにはぎこちなさが見て取れる。さっきまではシグナムもいたので避ける事しか出来なかったのだが、この隙を突けば反撃をする事も出来る。管理局の介入に気がついていいる彼らの仲間……面子からしてシヤマルだろう人物が、撤退の準備をしているに違いない。早くて数分、遅くて十数分といったところか。

やられっぱなしというのは癪なので一発だけ返しておく事にする。

振り下ろされた道路標識の一撃を前に踏み出して躲し、手を伸ばせば容易く触れられる距離にまで近づく。これまで避けるばかりしかしていなかったからなのかめぐりは驚いていたがそれは一瞬だけですぐに膝で蹴り上げてくる。至近距離での攻撃手段なんて黒い霞を使ったものか徒手空拳くらいしか無いのでそれは予想の範囲内であり、膝に足を乗せてその勢いを利用し、上空へと飛び上がる。

と、その時、道路標識を握っていた手が弾けた。手放しはしていないものの仰け反らせて体勢を崩す。それがイレインからのサポートだと気付いて内心で良くやったと褒めながら、レギオン10本を取り出してめぐりの周囲にばら撒く。

「本当だったら趣味じゃないんだけど管理局がいるからな、あっちの流儀に合わせてやってやるよ」

『ワイヤー展開』

『収束』

『拘束』

カートリッジが消費されると同時にそれぞれのレギオンの柄からワイヤーが伸び、めぐりの身体を拘束する。どうやら実態のまま

だったらしく、先程のように霞になって逃げられるような事はなかった。しかし、それを喜ぶ事はできない。桜木によれば「万象儀」の本質とは支配であり、極論であるが地球さえも単独で掌握する事も可能だと言っていた。拘束したままにしておけばレギオンの支配権を奪われて武器にされるのが目に見えている。

なので許されている時間はめぐりが支配しようとする意識を向けるまでの一瞬の間。

そしてそれだけあれば一発を見舞う事ができる。

「爆ぜろ」

呟いた言葉がキーワードとなり、レギオンが爆発した。内蔵されているカートリッジを使用しての自爆。前に桜木と一度だけした模擬戦の中で、財宝を爆発させていたのを見て真似させて貰った。威力はフルチャージで無ければ本家には遠く及ばないのだが、やり過ぎれば管理局に目をつけられる事になるので程々にしておく事にする。

「カ、ハ……」

爆炎の中からめぐりの苦しむ声が聞こえた。魔法に見えない技だが一応分類上では魔法に入っているので非殺傷設定が効く。食らうにしても魔力ダメージだけなのだが、それが効いている様だった。

赤城や御剣にも言えるのだが、転生して来た者たちは痛みに対して弱すぎる。そもそも攻撃を食らわない事を前提として戦っている様な桜木は例外としても、黒須の様に攻撃を受けても歯を食いしばって堪える様な覚悟が感じられない。

事実、本家には遠く及ばない一撃を食らわせただけで、めぐりは息

を乱して膝をついている。

「覚悟が無い、気合いが足りん。あれくらいのダメージ堪えてみせろよ」

「はあ……はあ……!!」

何を言っているんだと言う目で見られるがその通りなのだから仕方がない。戦っている最中で一々傷をつけられる度に痛がついては話にならないのだから。理想は無傷で勝つ事だが、そう上手くいかないのが現実というものだ。最悪、死なない程度の傷を負いながら勝つ事もある。このまま物語に付き合っていくつもりなら戦いからは逃れられない。そうなればいずれ敵対するのだから、それまでで敵として認識出来るくらいには成長してほしいものだ。

だって、そうでなければつまらない。

ともあれ、今回は俺の勝ちだ。才能があるのに本人の気質が故に味気ない勝利を得る為にレギオンを握り直し、気絶させる為に振りかざし――

「――あ?」

胸から、人間の腕が生えて来た。

胸から手が生えた。それを認識していながら俺は然程動じていなかった。普通ならばそんな事をされれば即死か、あるいは致命傷であり、それに相応しい痛みが襲って来るのだがそれが少しも無く、強いて言えば痛みは無いのに身体の中を探られている様な不快感があるだけだった。

生えている手の骨格からして恐らくは男性のそれだろう。殺すつもりなら兎も角、こんな事をして何になるのだろうかと思議に思っていたのだがその手の中心部にある物ロードス黒く光る物を見て手の主の狙いが俺のリンカーコアだと気が付いた。

だとするならば1つ疑問が出て来る。それは、この手の主が一体誰なのかという事だ。リンカーコアが目当てだというのなら闇の書の騎士たちが思い当たるのだが、騎士たちの中で唯一の男性であるザフィーラはユーノとアルフのコンビを相手にしている上にこんな細かい芸当が出来るとは思えない。そうなれば闇の書の騎士たち以外の人物がこんな事をしていう事になるのだが、闇の書を完成させたところで恩恵を得られるのは今代の主である八神だけであって利益が無いはずだ。

胸から手が生え、リンカーコアから魔力が奪われそうになっているというのに頭の中は冷静で、身体を動かすつもりは無かった。初めは反射的にレギオンで手を斬り落とそうとしたのだが、それよりも面白い事を考えたので放っておく事にした。

「魔力が欲しいのか？良いぞ、くれてやるー取れるもんならなあ！！」

手がリンカーコアの魔力を奪おうとするその瞬間――どろりと、その手が崩れ落ちた。

愛歌の悪性情報は俺のリンカーコアと魔術回路を汚染している。そのおかげで俺も悪性情報を使うことが出来るのだが、放出か変換されて外に出している悪性情報は周囲の被害を考えてある程度薄められた物を使っている。それなのにこの手はリンカーコアから……薄められていない場所に触れているのだ。そんな事をすれば即座に汚染され、形を保つことが出来なくなり腐った様に崩れ落ちるのは当然の事。流石に全身まで行き渡るようには時間が掛かるので無事な部分から切除するという手段を取れば逃れる事は出来るだろうが、少なくとも義手や移植でもしない限りはこの下手人は片腕を無くしたままで戦闘能力が低下し、大きな目印になる。

誰がやったのか分からず、何が目的なのかも分からないがやられたら熨斗つけて倍返しにすると前世から決めているのだ。特別な事情でもない限り、必ず報復をしてやると誓う。

「だがまあ、中々の判断だったと褒めてやるか」

感心した様に呟きながら、胸に走る鋭い痛みを堪える。なんと下手人は腕が崩れ落ちるまでの間で魔力を奪う事を諦めて俺のリンカーコアを砕こうとしていた。リンカーコアという前世では無かった器官なのでハッキリとは断言出来ないのだが、感覚からして2つに割れている様に思われる。試しにリンカーコアから魔力を出そうとすれば傷口に塩を塗られた様な痛みが走る。

だが、魔術回路からの魔力の精製は問題なく行って事が出来た。全くの別物だから当然の話であるのだが、これで加賀美両夜は戦う事が出来ず、アクロ・ダカーハが戦う事が出来ると分かった。次切りはアクロ・ダカーハとして暴れるのも良いかもしれない。

リンカーコアの事に関してはジェイルに任せれば治るだろう。仮に治らない、あるいは前よりもランクが落ちると言われてもアクロ・ダカーハとして活動出来るのなら問題にならない。

簡潔に自己分析を終え、再びめぐりを気絶させようとしたところで大きな揺れが来た。震源は下では無く上で、見れば結界に向かって黒い雷が落ちていた。恐らく管理局が来た事で分が悪いと判断した残りの一人がやっているのだろう。2度、3度と雷が落ち、結界の上部が砕けた。ベルカ式の結界だけなら解除すれば良いだけだと思っていたのだが、ご丁寧にベルカ式の上からミッド式の結界を被せて覆っていた様だ。

クロノ辺りがそうする様に指示していたのだろうか、いやらしい判断だなあ、と思っていると、めぐりがシグナムに攫われて行った。

「次は、負けない……!!」

「残念、勝負ついでるから」

負け惜しみの様にめぐりが吐き出した言葉を、侮辱する様に嘲り笑う。今回は管理局の乱入に逃亡を許してしまったとはいえ、結果としては俺の勝ちなのだ。魔法だから安心だという幻想を打ち砕かれ、たった一撃を受けただけで膝を着いためぐりの姿は敗者以外の何者でも無い。どんな思いを込めて何を叫ぼうとも、その目に戸惑いと怯えが混じっている以上、彼女はそこから先に進む事が出来ない。

出来る事ならばそれでも彼女には立ち直って欲しいと願っている。最悪、この事件が終わるまでの間は折れていてくれても構わない。俺が悪として本格的に動くその瞬間までに立ち直り、成長してくれればそれで良い。

俺の態度が気に入らなかつたのか、それとも凶星を突かれたからなのか、めぐりは不愉快そうに顔を歪めながらシグナムと共に黒い霞に包まれて姿を消した。周りを見ればヴィータとザフィーラの姿も見えないので、彼らも逃げる事に成功している様だ。

タバコが吸いたいなあと思いつつ、出て来たのはお馴染みになっている棒付きの飴だった事に肩を落としながら口に入れる。

最後の最後で妙な事をされたものの、概ね俺が予想していた通りの展開で終わった事に満足しながら。

ローフエイトのリンカーコアが、闇の書の騎士たち以外の人物に蒐集されたという事を聞くまでは。

《桜木、ちよつと地獄見せたい奴がいるから頭と手を貸してくれない

？》

《のっけから殺意高すぎやしませんか？》

《両夜だから普通よ》

《加賀美様だから普通ですね》

《畜生!!味方がここに居ない!!》

シグナムたちとの戦闘の事後処理を済ませた深夜。護衛に来ている管理局員たちには寝ると伝えながら、いつも通りに念話チャットを行なっていた。

《僕は大人モードで仕事があつたんで参加出来なかつたんですけど一体何があつたんですか？》

《フェイトがさあ、闇の書の騎士たち以外の奴に魔力を奪われたんだよお》

《ギルティ》

《愛歌お嬢様、お静かに》

《多分、俺も同じ奴に魔力奪われそうになった。まあ悪性情報の汚染モロに食らって失敗してたけど、リンカーコア傷付けられて暫くは使い物にならないな》

《ギルティ》

《ギルティですね》

《御二方、御静粛に》

《イレインもその場で待機な》

俺の隣で眠る愛歌が動き出そうとしていたので抱き締める事で止める。少し間を空けて彼女の体温が高くなったが、それはきつと恥ずかしくなっているからなのだろう。

《ちよつとここの女性陣たち殺意の波動に目覚めてないですかねえ……あ、宝物庫の鍵は開けておくんで見つけたら教えてくださいね？出し惜しみ無しで行くんで》

《お前もお前で殺意の波動に目覚めてるんだよなあ……で、心当たりはあるか?》

《ヴォルケンリッターの手助けをして利益のある人物……ギル・グレアムと、彼の使い魔のリーゼ姉妹くらいですね》

《リーゼ姉妹といえば、加賀美様の捕らえた雌猫の名前がリーゼロットと記憶していますが》

《だから後は姉の方のリーゼアリアだけだな。ところでそいつらはシグナムたちの手助けをして何の利益があるんだ? 覚えてる限りじゃあ闇の書を完成させたところでそいつらに益があるはずはないんだけど》

《ギル・グレアムは前回の……1年前の闇の書の事件の時に部隊の指揮を執っていたんですよ。封印に成功して帰還している途中で闇の書が暴走して、破壊する事には成功したんですけどその時に部下……クロノの父を死なせてしまったんです。だから独自の手段で闇の書を永久封印しようと思論んでいるんですよ》

《その為に闇の書を完成させる必要があると……何だ、こいつもこいつで復讐鬼に覚醒しているじゃねえか》

ギル・グレアムのやっている事自体は間違いでは無いと思う。それまで管理局が行なっていたやり方では闇の書を封印する事が出来なから別の手段で封印しようというのは当たり前前の事だ。寧ろ、管理局からすれば違法行為を行ってでも闇の書を封印しようとしているのは好感が持てる。普段の俺ならそれを知って賞賛し、頑張れと高みの見物に洒落込んでいただろう。

それが地球で行われていかなかったら、俺たちが巻き込まれていなかったらだが。

《にしてもギル・グレアムにリーゼアリアかあ……地獄見せるのは止めにしておくか》

《おや? 止めるんですか?》

《この用意していたアンチマテリアルライフルはどうすれば良いのでしょうか?》

《bjptxmooaaaaa》

《なんか沙条さんバグってませんか?》

《ハグってるからそれでだろ》

《ところで、何故ギル・グレアムとリーゼアリアを血祭りにあげる事をお止めになるのか教えていただけませんか?》

《簡単な話だよー我が家の殺意の波動に目覚めた復讐鬼ちゃんがその2人に復讐したいらしいからな。獲物を奪うわけにはいかないだろ?それに洗脳が完璧かどうかの最終テストにも丁度いいし》
《理由がクツソ外道過ぎるんですけど……》

そんなことを言われてもそうすると約束したのだから仕方がない。俺がそういう風に洗脳し、調教をしたとはいえ、それを望んだのは彼女なのだから飼い主として望みを叶えてやるのは当たり前のことだ。

兎も角、知りたいことは知れたのでチャットをそこで終わらせ、未だに疼く胸の痛みを誤魔化すように愛歌を抱き締めて眠りにつく事にした。

normal day

「なーなー加賀美い、隣のテストロッサさんが休んでるけど何か知らない?」

「何故俺に聞くの?普通に隣のクラスの奴に聞けばいいじゃねえか」

「オイオイオイ俺に死ねって言ってるのかよ。隣のクラスには赤城と御剣がいるんだぞ?御剣の方は最近大人しくなつたみたいだけど行きたいとは思わないよ」

「気持ちに分かる」

昼休みの時間帯になっていつも来ているフェイトの姿が見えないことを気にしてか、クラスメイトの男子が話し掛けてくる。今の学年になってから知り合ったような間柄であるが、狭い空間で半年以上も一緒に学校生活を送っていれば気軽に話しかけられるくらいの仲にはなれるのだ。

「風邪ひいたから休んでるって聞いている。まだ引き始めっぽいけど大事を取って休むってさ。これで治るようなら明日には来るつもりらしいけど、本格的に引いたら二、三日は休むって」

言わずもがな、フェイトが休んでいる理由は風邪などではなく魔力を蒐集された事でリンカーコアが収縮したからだ。そのせいで体調を崩してしまったので、大事をとって学校を休んでいる。ノートの方は同じクラスの高町と黒須が取ると言っていたから心配ない。

「マジかー……テストロッサさんの御尊顔が拝見出来ないなんて……」

「御尊顔」

「だってよー金髪美少女で可愛くって、若干人見知りだけど天然で優しいんだぜ?天使じゃん。崇拜するしかないじゃん」

「金髪美少女なら目の前にいるぞ？崇拝しろよ」

「あ、愛歌ちゃん様はほら、天使じゃなくて小悪魔だから」
「愛歌ちゃん様」

俺たちの会話を聞いていた愛歌がそれに反応し、ニツコリと微笑みかける。俺からすればそれは可愛らしい部類に入るのだが、彼はそうは捉えなかったようで少し顔を青くして身震いしていた。

彼が聞きたかったのはそれだけのようで、そこで会話は打ち切られてさっきまでいたグループに戻っていった。情報を共有し、お見舞いに行こうかどうかを話し合っているのが聞こえるがそればかりには集中してられない。

最後まで残った白米と鮭の切り身を口に放り込んで咀嚼し、飲み込んで手を合わせて一礼して食事を済ませる。

「ご馳走さまでした」

「お粗末様でした……で、今日はどうかしら？」
「……」

目の前にいる愛歌はどこか勝ち誇ったような笑みを浮かべながら俺が食べていた弁当箱を片付け、月村は緊張した面持ちで俺の言葉を待っていた。

夏休みが明けた頃から月村が俺に弁当を作るようになり、そこから自然と愛歌の作る弁当とどちらが美味しいのかを勝負するようになったのだ。小学校といえは義務教育の最中で給食が出てくるものだと思うっていたが、ここでは私立だからなのか各自で弁当を用意することになっているのだ。

愛歌と月村が用意してくれた弁当2つを平らげ、水筒に淹れていた

お茶を啜る。自然と始まった弁当対決だが、その内容はどちらが俺にとって美味しかったのかという恐ろしくアヤフヤな物だ。初めから俺の好みを知っている愛歌にとっても有利な勝負で、月村はそれを承知の上でこの勝負に望んでいる。

だからこそ弁当の味は真剣に吟味して、正直に結果を伝える事になっている。

「愛歌だな」

「ふふっ、当然の結果ね」

「また負けちゃったかあ……」

「だけど、初めの頃に比べるとだいぶ俺好みの味になってるぞ？付き合い長い分、愛歌の方がよく知っているってだけで充分美味かったし」

「そっかあー……」

「でも、私が、勝ったのよ!!」

「お静かに」

胸を張って月村のことを煽ろうとしていた愛歌を鎮める。勝てて当たり前前の勝負とはいえ勝てることが嬉しいのか、それとも自分の方が俺の好みを熟知していることを知らしめたいのか、弁当対決で勝つと愛歌はその結果を勝ち誇っている。

前に止めずに放置していたら、気付いた時には愛歌が高笑いをしながら四つん這いにさせたクラスの男子の背中に座っていたからなあ。

「ん？月村、少し顔色悪いけど大丈夫か？」

いつもと同じ結果とはいえ、負けた事に気落ちしながら弁当を片付けていた月村の顔色が少しだけいつもよりも悪くなっていた事に気がつく。月村と親しい奴でも見逃してしまうような些細な変化だが、

そのくらいの変化に気づかなければ前世のクソのような故郷では生き延びられなかったので自然の観察眼が養われたのだ。

「へ？……うん、大丈夫だよ。ちよつと寝不足なくらいだから」

「また本でも読んでたのか？前に明け方まで本読んでて居眠りしたの忘れたのか？携帯に写真があるんだけど？」

「な……なんであるの!？」

「なんか知らんけど愛歌から送られてきた。指示された通りに保存して待ち受け画面にしてある」

「愛歌ちゃああん……!!」

二つ折りの携帯を開いて待ち受け画面にしてある月村の寝姿を見せる。日当たりの良さそうな席で腕を枕にしながら眠っている月村の姿は絵になりそうなものだった。

学校でも人気があるからなのか、クラスの男子に画面を見られた時には全員が土下座をして頼んでくるという事態になった。

それも愛歌の蔑むような目と桜木の一言で収められたが。

「なんであんな写真あげたの!？それよりもなんで撮ったの!？」

「面白半分であげたわ!!それと、油断している方が悪いのよ!!」

月村に追いかけてらされて愛歌は捕まらないように逃げ回る。昼休みとはいえもう半分は過ぎていたので弁当を出している者はおらず、注意するどころか捕まるか捕まらないかの予想までしている始末だ。この光景に慣れている証拠だろう。

時折、月村の背後に回ってスカートの中を覗こうとする猛者がいるが、それは女子の手で目潰しをされて未遂に終わっている。

追いかけれながらも楽しそうにしている愛歌だが、彼女のしたい事が分からない。月村の事を純粹に恋敵として見ているかと思えば、こうして手を貸すようなことを普通にしている。若干外道じみた方法であるのだが、それでも俺からすれば月村の手助けをしているようにしか見えない。女同士の友情という奴なのだろうか？男である俺には理解が出来ないものだった。

「月村ー、愛歌の昼寝中の写真あるけどどうする？」

「両夜ツ!？」

「私の携帯に送っておいて!!プリントアウトするから……!!」

「すずかぁ　　ー！ーツ!？」

　　どういふ事情でこうなっているのか分からない。しかし2人が楽しそうにしているのであれば、それで良いんじゃないかと思い、それ以上深入りすることを止めた。

　　月村が若干、我が家の芸風に汚染されているような気配を見せているのを見なかつた事にしながら。

　　時間は経って放課後、いつもなら愛歌と桜木と一緒に帰っているのだが、図書室に新しい本が入ったと聞いたので2人を先に帰らせて新しく入った本の確認をする事にした。人の目がある今の時間帯ならば闇の書の騎士たちの襲撃を心配しなくてもいいし、愛歌には桜木だけでなく管理局の護衛も付けられている。クロノがわざわざ色物が多い局員たちの中から比較的常識人の部類を選んでくれたので、彼らが暴走した挙句に愛歌によって行方不明になる様な事も心配してい

ない。

「あ、カガミじゃない」

「加賀美君」

「どうも」

一体どんな本が入っているのかと心を躍らせながら図書室に向かう道中で高町と黒須、そして金髪を靡かせた少女――アリス・バニングスに出会った。バニングスとは繋がりが無かったのだが月村経由で夏休み明けから知人と呼べる関係になっている。

愛歌はまたキャラ被りなのかと悲嘆しかけていたが、バニングスがツンデレキャラだと見抜いて落ち着きを取り戻していた。それで良いのかと突っ込みたくなかったが、そうしたら面倒になるんだろうなあと改めて自重する事にしたのは懐かしい。

「ねえねえ加賀美君、すずかちゃんを知らない？」

「月村？見てないけどどうしたんだ？」

「すずかかったら午後の授業で体調が悪くなったからって保健室に行つたのよ。それで授業が終わってから迎えに行こうとしたんだけど姿が見えなくなつて……鞆も靴もあつたからまだ学校にはいると思うんだけど」

「それでこうやって探してるんだけど、見てないか」

「月村あ……昼休みに言ったのに……分かった。俺の方でも探してみよう」

「お願いね。私たちも別の場所を探してみるから」

本を楽しみにしていたが月村が行方不明になつているとなればそちらを優先する。また夏休みにあった時の様に夜の一族関連の件に巻き込まれているかもしれない。バニングスたちと別れ、待機状態になつているハスターに月村の居場所を探させる。高町と黒須はバニ

ングスが一緒だからなのか魔法で探していない様子だったが、俺には躊躇う理由が無いので素直に使う事にした。

リンカーコアが損傷しているのもそれを使った魔法は使えない。なのでカートリッジに注入していた魔力を取り出すことでサーチ魔法を使う事にした。

「見つけたか？」

『搜索中……発見。月村様は図書室にいます』

「図書室？」

『はい。図書室の隅、本棚の陰に隠れていますね』

どうして月村がそんな場所に隠れているのか分からない。だが、万が一のことを考えると俺1人で行った方が良い予感がしたのでバニングスたちに知らせるよりも先に図書室に行く事にした。

学校の設備に比例するように図書室も上等な物だが、小学校という環境だからなのか図書室を利用してゐる者は誰もいなかった。折角本が揃えられているのに勿体ないなあと考えながら薄暗く、誰も居ない図書室を進み、ハスターの言っていた通りに本棚の陰に隠れていた月村の姿を見つけた。

「月村、何やってんだよ？バニングスたちが探してたぞ」

「加賀美、君……」

薄暗い上に陰に隠れていたせいでその時の月村の表情は分かりにくかったが、それでも彼女の目に妖しい光が灯っている事には気付くことが出来た。どうした、一体何があったのかと訊ねるよりも先に月村の手が伸ばされ……途中で我に帰ったように引っ込められる。

「ごめんなさい……!!私、ちよつと離れて……!!」

「単なる体調不良、ってわけじゃなさそうだな……夜の一族に關係してるか？」

「……うん」

薄暗さに目が慣れてきた事で月村の顔をようやく確認する事が出来た。今の月村は全力疾走した時のように呼吸が荒く、頬が赤く染まっている。何かを堪えているように熱っぽい吐息をしながら、その目は真っ直ぐに俺の首筋に向けられていた。

「成長期に、入ってるから、なのかな……血が、足りなくなってる……しばらくしたら、落ち着くから……」

「血が足りないからそうなる？なら話は早いな」

体調不良の原因を聞き、それと同時に解決策が思いついたので即座に人差し指の腹を噛み千切る。プツリと犬歯が皮と肉を傷付け、それによって指からは真っ赤な血が流れ出した。

「あー」

「ほら、我慢せずに飲んどけ。その様子じゃあ昼休み頃から我慢してたんだろ？」

偏にここまで堪えることが出来ていたのは自分が吸血鬼である事を隠したかったからだろう。しかし、今の図書室には俺たちを除いて誰も居ない。月村が吸血鬼であるとバレる心配は無く、目の前にはずっと我慢していた血が流れている。

少しずつ、少しずつ、月村は差し出された指に顔を近づけ……僅かに理性が残っていたのか、だけでも血を求める本能が優ったのか、遠慮しがちにはあるがしっかりと指を啜えた。

「はあ……はあ……んん……ちゆる……」

血を零さないように小さな口で啜え、味わうように舌で指を舐め、唾液と混ぜ合わせながら嚙下する姿はまるで奉仕しているようだった。こういう方法で吸血をした事が無いのか月村のそれは拙さを感じさせていたが、それ以上に彼女にこんなことをさせているという背徳感に興奮してしまう。

だが、これは彼女にとっては食事と同じ、つまり生存行為だ。それを悟られないように顔には出さないように努める。

そして2、3分程時間を掛けて、月村は指から離れた。その時に彼女の口元と指に唾液の橋がかかり、名残惜しそうにしていたが彼女の名誉の為に忘れる事にする。

「どうだ？少しは楽になったか？」

「うん……加賀美君の、熱くて、濃くて、だけど甘くて……美味しかった」

「さっきと言いつの発言と言いつ、それ狙ってるの？」

「何の事？」

「良かった、ただの天然か」

狙って言っていたわけでは無いと安心するが、今までののが全て天然だった事実には戦慄を禁じ得ない。今でこれだけの破壊力があるのなら、彼女が成長した時には一体どれだけの威力になっているのか。

「帰りはどうするんだ？あれなら送るけど」

「お姉ちゃんに連絡してノエルさんが迎えに来てくれる事になったから大丈夫だよ」

「そうか。だったらバニングスたちに会って謝つとけ。月村がいなくて探してたからな」

顔色は少しばかり悪かったものの、さつきよりも良くなっていたのである。方法で良かったのだろう。座り込んでいた月村に啜えられていた手とは逆の手を差し出す。月村はそれを遠慮しがちに掴み、しっかりと自分の足で立ち上がった。

normal day・2

「ただいま〜つと」

『お帰りなさい』

『お帰り、加賀美くん』

月村が黒塗りの高級車に乗るのを見送ってから帰宅し、四つん這いになった土郎さんとそれに乗ったアリシアに出迎えられる。始めのうちにはドン引きしていた光景であるが、何度も見せられたので慣れてしまっている。

いつもなら何かしらの言葉を返すのだが、今この家には俺の事を知らない管理局の人間がいる。幽霊が見えると言ったところで信じてもらえるはずが無く、そもそもこんな事を話す程に親しく無いのであえて何も言わない。2人もその事を知っているのでこの対応でも何も言わなかった。

『それじゃあ、私たち散歩に行ってくるからね!!』

『翠屋見に行つて町を歩いて、翠屋見ながら帰ってくるから』

そう言い残してアリシアを背中に乗せたまま、土郎さんは四つん這いの体勢で家から出て行つた。アリシアが来た当初、ゴーストカースト最下位になった時は土郎さんは何かと言って逆らっていたのだが、今では当たり前のように従うようになっていた。娘と年の近い幼女と触れ合えることがそんなに嬉しいのだろうか。聞いた話によれば高町が生まれても土郎さんはボディガードの仕事が忙しく、世話は美由希さんと桃子さんに任せっきりだったそうだ。ボディガードの仕事から引退し、ようやくまともに娘と向き合える直前で死んだのだから彼の気持ちも分からないでもない。

だけど常時四つん這いでお馬さんごっこは無いと思う。

「お帰りなさい」

「ああ、ただいま」

家から出て行った2人と入れ替わるようにしてリビングから現れたのは愛歌だった。一旦家に帰って料理をしていたのか私服姿で、その上からフリル付きの白いエプロンを着けている。

「図書室に行ってた割には遅かったわね。何かあったのかしら？」

「体調崩してた月村を見つけてな、家から迎えが来るまで一緒に居たんだよ」

「成る程ね……このメールはそういう事なの……」

「メール？」

携帯の画面を見せて貰えばそこには“やったよ”というタイトルのメールが月村から送られていた。内容は慌てて打ったのか支離滅裂なものだったが、タイトルだけでどういう内容なのか察することが出来てしまう。

「これはそれ以上の凄い事をして自慢するしか無いわね……!!」

「何がしたいんだよ……」

目に闘志を燃やしながら拳を握る愛歌の姿に不安しか覚えないう。と言うより、彼女は俺に何をさせるつもりなのだろうか。メールの内容がアレだったのであの図書室での出来事はバレていないだろうが、バレていないはずだからこそ愛歌が何を仕出かすのか分からないで怖い。

「っと、いつまでも玄関で話してちゃダメね……料理はもう少しで出来るから、先にお風呂に入ったらどうかしら？」

「そうさせてもらおうわ」

家の中は暖房のおかげで暖かくなっているが、さつきまで冬に近づいている外を歩いていたのだ。前世のロシアの異常気象を身を以て体験して知っているので寒さには強いという自負はあるが、だからといっていつまでも寒い所に居たいわけではない。

靴を脱いで家の中に入り、愛歌が手を差し出して来たのでご所望通りに背負っていたカバンを手渡した時、

「……なんか新婚みたいなやり取りだな」

ふとそれが以前にドラマで見た光景に似ていたのでそう呟いた。カバンを受け取った愛歌はそれを聞いて呆気に取られたような顔をし、すぐに何かを思いついたようにその場で一回転。エプロンとその下のスカートを回転で翻しながらニツコリと笑い、

「……お帰りなさい、あなた。ご飯にする？お風呂にする？それとも……わ、た、し？」

そうドラマと同じようなセリフを言った。ノリの良さを見る限り、彼女はこれを使って月村への仕返しにするつもりらしい。そうであればそうね、と恥ずかしさと嬉しさが入り混じったような笑みを浮かべるはずだから。

それにしてもどうしようか迷う。いつもなら前者の2つを選ぶのだが、それではノリが悪い。ここは愛歌のノリに合わせた方が良く、直感で判断し、

「なら、お前だな」

「え？」

迷う事なく愛歌を選ぶ。それが予想外だったのか惚けた表情を浮かべた彼女に近づき、顎を軽く持ち上げる事で顔を上に向けさせながら顔を近づける。

「りよ、りよりよりより両夜!」

「何を慌ててるんだ? 愛歌が選べと言ったんじゃないか。だから俺はお前を選んだ……何かおかしな事があるか?」

「そういうのじゃないんだけど!! 違うんだけど!! おかしいとかじゃないんだけど!! え? 本当に? これって夢とかじゃないの?」

「嫌なのか? なら止めるけど……」

「嫌じゃない……けど……!!」

鼻と鼻が触れ合うほどの距離まで近づいたせいで視界は真っ赤になった愛歌の顔だけしか映っていない。俺の雰囲気から本気だと感じ取ったらしく彼女は観念したように目を閉じ、唇を突き出して完全にキス待ちの体勢になっていた。それを見てから俺も同じように目を閉じ、ゆっくりと焦らすように顔を近づける。

そしてあと少しで唇が唇に触れる——そのタイミングで軌道を変え、遥か上の額に口付けをした。

「……え?」

「クッククク……冗談だよ。残念だけどファーストキスはまだお預けだ」

唇にされると思っていたのに額にされた。その事に啞然としている彼女の顔を見て思わず笑ってしまい、顎に添えていた手をズラして頭を撫でる。為すがままに撫でられている愛歌は未だに状況が把握出来ていないようだった。

愛歌は自分からする時は余裕を見せているが、逆に俺から攻めると面白いくらいにウブな反応をしてくれる。サデイストは攻められると弱いと聞いた事があるが、それなのだろう。こうしてキョトンとしている愛歌の姿が何よりの証拠だった。

「もう少し、俺たちが大人になるまでお預けだ。楽しみにしておくんだな」

頭を撫でていた手をそのまま頬を這わせ、愛歌の唇を触れるか触れないかのギリギリのところでなぞる。コクコクと何も言わずに首を縦に降る姿に満足げに微笑みながらその場から離れ、風呂に入る準備をするために部屋に入りー扉を閉めるのと同時にその場に崩れ落ちた。

『心拍数の上昇を確認』

「自覚はあるから一々報告しなくて良いんだよ!!……っはあ……恥ずかしい。よくドラマはこういうのを顔色一つ変えずにやるな。感心するぞ」

俺とデバイスたちを除いて誰も居ない部屋に入った事で気が緩み、高揚しないように努めていた顔が熱くなるのを感じる。さっきまでは余裕の姿を見せていたが、俺だって恥ずかしさを感じるのだ。前世で性交渉をしなかったわけではないのだがそれはどちらかと言えば作業のようなものであり、特別に好意を持った相手にしたものではない。日常的に密着していることはあるのでこのくらいなら大丈夫かと思っていたのだが、これはそれとは全く別物だった。

好いている彼女が相手だったからなのか、揶揄うつもりでいたのだが、少しでも油断をしていたらあのままキスをしていたかもしれない。

「あゝ……アツツ……」

そのまましばらく、俺は羞恥心によって上がった熱が引くまで部屋から出る事が出来なかった。

「もう少し、俺たちが大人になるまでお預けだ。楽しみにしておくんだな」

両夜の言った言葉に首を縦に降る事しかできない。それを見て満足げに微笑み、彼はお風呂に入るために自分の部屋に戻って行った。

そして彼の姿が見えなくなるのと同時にその場に崩れ落ちる。

彼の行動が予想外過ぎて腰が抜けてしまったのだ。

そのまま這いずるようにしてリビングとは違う目の前の部屋の中に入り、扉を閉める。イレインは台所から離れないだろうし、管理局の人間も桜木君が相手をしているので動かないだろう。

「~~~~~……ッ!!」

誰もここには来ない事を確信し、口を押さえて声が漏れないようにしてからその場でのたうち回った。床を転がる事で服に埃が付くのだが、そんな事は知らないとばかりに転げ回る。

なんだアレは？ 反則過ぎる。新婚みたいと言われたから揶揄うつもりで思いついた新婚っぽい事をしたら逆に揶揄われてしまった。両夜の事だからお風呂を選ぶと思ったのに迷う事なく自分が選ばれ、そこから顎クイされてキスされるかと思った。いや、私的にはキスをしてくれてもウエルカムだったのだが、彼の対応が余りにも余裕があつたので飲み込まれてしまったのだ。

それに悔しさを感じるーーーだけでも、額とは言えキスをされた事実にそれを上回る嬉しさが込み上げてくる。

両夜と私のスキンシップというものは殆どが私からのものだ。転生者である彼には前世があり、肉体年齢には同じなのだが精神年齢には私よりも遥かに成熟している。だからなのか、彼の私へのスキンシップは驚くほどに少ない。精神が成熟しているためにどこか達観しているのだ。だから私は彼への想いを自分から行動で、言葉で示している。

そんな彼が、額にとは言えキスという行動をしてくれたのだ。

これは愛歌ちゃんトウルーパーエンド間違い無しだ。

このまましばらくこの幸福感を味わっていたのだが、それは出来ない。私は料理の最中に両夜が帰ったので迎えると言ってその場から離れたのだ。いつまでも戻って来ない事に不信感を抱いたイレインが探しに来ないとも限らない。そうなればあのメイドの事だ。無表情のまま、嬉々として煽りに来るのが目に見えている。

早く戻らなければと思う反面、この幸福感を味わいたいというジレンマにしばし苛まれた。

《そろそろアクロ・ダカーハとして大々的に動こうかと思ってる》

《唐突にとんでもない事言いますね？頭大丈夫ですか？》

《馬鹿野郎!!頭大丈夫じゃなかったらこんな事言いださないだろうが!!》

《頭が大丈夫じゃないって自覚してるから救いようが無いんだよなあ……》

深夜になって恒例となっている念話チャットで桜木との会話を始める。いつもなら愛歌とイレインが参加しているのだが愛歌は弄りすぎてしまったからなのか早いうちに別の部屋で寝てしまい、イレインは充電が切れて動けなくなって現在は部屋の隅で落ちたままコンセントに繋がれて充電中である。

《ってかこのタイミングでアクロ・ダカーハとして動くんですか？最終決戦まで動くつもりは無いんじゃないかと思ってましたけど》

《それも考えてたけど、最終決戦に参加するってなると間違いなく闇の書を相手する事になるから。そうなると悪というよりもツンデレ拗らせてる奴になっちゃうんだよなあ。ほら、ゲームで良くある敵対してると思ってたらボス戦になって味方になるライバルキャラ的な感じで》

《加賀美さんの中でそれをしようとしている時点で手遅れなような気が……》

《だから最終決戦前に大暴れして印象付けてやろうと思ってな。それに俺の可愛い復讐鬼ちゃんにそろそろ復讐させてやりたいし》

《ああ、リーゼロツテですか。調教の具合はどうですか？》

《調教じゃなくて洗脳……どっちでも変わらないか。どのくらいかと思われたら足を出したら迷う事なくキスすらくらいに従順で、ギル・グレアムとリーゼアリアの名前を出したら怒気と殺意を垂れ流すく

らいには2人にヘイトを集めてるな。管理局の奴らがいるから隠れ家に住ませたままだけど行ったら猫の尻尾を振り回して全身で喜びを表してる》

《完全に落ちてますねえ……》

《アクロ・ダカーハの時の姿しか見せてないけどな。兎も角、大暴れした時に出て来るであろうリーゼアリアの相手をさせるつもりだ。その時の対応次第で彼女に加賀美両夜としての姿を明かすか決めるから》

桜木が言うようにリーゼロッテの洗脳はほぼ完了していると見て良いだろう。俺もそれを主観ではなくて客観的に見てそう判断している。

だが、それでもほぼなのだ。もしかしたら今までの対応全てが演技で、俺の首を狙っているかもしれないという可能性が捨て切れない。それはそれで喜ばしい事なのでそうであるのなら歓迎するつもりだ。

今回の件はアクロ・ダカーハの悪の印象付けにリーゼロッテの洗脳が完了しているのかの確認をするつもりだ。躊躇する素振りを欠片も見せる事なく、俺に躊躇っている事を感じさせる事なく、リーゼアリアの相手をする事が出来たのであれば、彼女の洗脳は完璧だと判断してこれから先、彼女の事を従順な手駒として大切に扱う事にする。

仮にそうでなければ……洗脳をやり直すか、新しい手駒を探す事にする。

《でも、そんなに都合よくリーゼアリアが来ますかね？前の時に加賀美さんのリンカーコアに触ったせいで片手失くなったんですよ？普通だったらそこで諦めるなり、別の人に任せるなりすると思いますけど……》

《闇の書の騎士たちが劣勢になれば絶対に来る。リーゼアリアとギ

ル・グレアムの目的は覚醒した闇の書を氷結魔法で封印する事だ。闇の書が完成する前に騎士たちが居なくなってしまうのは蒐集の効率が悪くなるから避けたいだろうし、内容が内容だけあって誰にも計画を話す事は出来ない筈だ。加えてギル・グレアムはそこそこのポジションに着いてるんだろ？偉くなれば出来る事は増えるだろうけど、その分立場に縛られる事になる。自由に動く事は出来ないはずだ。だから闇の書の騎士たちが劣勢になったら片手が無くなっていようが自由に動けるリーゼアリアが来る》

《言われてみればその通りですけど……それってヴォルケンリッターたちが劣勢になる事が前提ですよ？追いつめられるんですか？》
《前に言っただろ？頭と手を貸してくれて。特典の財宝使って正体がバレないようにして暴れようぜ？》

《あくそういう事ですか……仕方ないなあ、ちよつと使えそうな物を探すんで見つかるまで待つてくださいね》
《宜しく》

それを最後に桜木からの返信が途絶えた。言っていた通りに今から宝物庫を漁って使えそうな財宝を探しているようだ。もう遅いから明日にでもすれば良いのに真面目な性格をしていると感心する。外面は傍若無人を体現したようなものだというのに。

明日も学校があるので寝ようとしているのだが、どうも眠れない。どうしてかと考え、すぐに愛歌がない事が理由なのだと気が付いた。管理局の護衛が着いてから、寝るときはいつも愛歌が側に居た。自分でも気がつかない間にそれが当たり前になってしまい、居ない今の状況に違和感を覚えて眠る事が出来ないようだ。

理由は分かったが、だからと言って今から愛歌の眠っている部屋に向かい、ベッドに潜り込むのはダメだと却下する。試しに布団を丸めて抱き枕にしてみたのだが、愛歌に比べると抱き心地が悪くて眠るどころか目が覚めてしまう。自然に眠るまで待つかと考えて横になっ

た時、控えめにだが部屋の扉がノックされたのが聞こえて来た。こんな時間に誰だと思いつながら扉を開けると……そこには愛歌の姿があった。

「どうしたんだ？先に寝るって言ってたのに」

「寝ようと思ったのだけど寝れなくて……」

そう言いながらほんのりの朱の刺した顔を抱き抱えていた枕に埋めながら上目遣いになる。どうやら俺が愛歌が居ない事に違和感を覚えて眠れなかったように、彼女も俺が居ない事で眠れなかったらしい。

それを断る理由も無いし、わざわざ来てくれたのに無下にしたく無い。愛歌を部屋に入れ、一緒にベッドに入る。その時に廊下の影の方で管理局の護衛たちがトータムポールのように顔を縦に並べながらこちらを見ていたのを目撃してしまう。後にクロノに報告すると決める。

「ああ……これよこれ。両夜の温もりが無かったから寂しくて寂しくて……」

「俺もだよ。いつも愛歌が居たのに今日に限って居なかったからどうにも寝れなくてな……」

いつものように抱き締められ、そして抱き締めながら横になる。すっぽりと腕の中に収まる愛歌の存在と、彼女から伝わって来る温もりが言いようもない安心感を与えてくれて、さっきまでどうやって寝ようかと悩んで居たのにすぐに睡魔がやって来た。

「お休み、愛歌」

「お休みなさい、両夜」

どうやらそれは愛歌も同じだったようで、眠たそうな声でそう言われたのを聞き届けて睡魔に従って眠りにつく事にした。

「……さてさて、それじゃあ動きますか」

数日後、地球から然程離れていない管理外世界で闇の書の騎士の1人であるヴィータが活動しているのを確認した。どうやら一人で蒐集をしているようで、ヴィータ以外の騎士たちの姿は見えない。この状況は好都合だった。

アクロ・ダカーハとして戦えば加賀美両夜の時のように制限を設ける事なく全力で戦う事が出来るので、騎士たち全員が相手だろうが負けるつもりはない。だが、それで悪役を印象付けられるのかと聞かれれば首を傾げるしか無い。だが、先にヴィータを倒して確保し、彼女を使って他の騎士たちを呼び出せば解決出来る。その時についてで管理局にもリークしておけば問題ないだろう。

「悪いな、ナルカミ。せっかくジェイルに作ってもらったのに全然使ってやらなくて」

『問題無し、主が思うがままに振るわれよ。我らはそれについて行くのみ』

「カツコイイなあオイ」

ジェイルの元でパンダ相手にデータを取って以降使う事が無かつ

たナルカミを稼働させる。子供の姿では大き過ぎて使い物にならないナルカミだが、すでに変身魔法で大人の姿になっているので問題ない。調子を確かめる為に数回程振るえばそれだけで感覚を思い出し、手に馴染んでくる。逆の手にはこれまた久しぶりの稼働となるカスパールを握る。AIを積んでいないので自我は持っていないはずなのだが、僅かに震えて喜びを露わにしているような気がする。

本当にゴメン。超ゴメン。

内心で二機に謝りながら、ヴィータがこの世界に生息している巨大な魚のような生物相手に無双しているのを見下ろす。騎士たちの中で最年少の外見をしていふとはいえ闇の書の騎士の一人である事には変わらない。ハンマーというその体躯に似合わない武装を慣れた手つきで振るいながら魚の急所に遠心力を利用した一撃を叩き込み、その反動を利用して別の魚に向かって行っている。

だが、それだけだ。いくら技術が優れていようとも設計上の設定で精神が幼く設定されているヴィータではシグナム以上の戦士足り得ない。

ハスターに頼んで魔力を固めて作っていた足場を消し、眼下で戦っているヴィータに向かって自然落下で強襲を仕掛ける。

戦いの本質とは、いかに効率的に敵を倒すかという事にある。

死力を尽くした殺し合いというのも好みといえば好みなのだが、この後にシグナムたちと管理局との本番を控えているのと傷だらけになって帰ったら愛歌を心配させてしまうので残念ながら出来ない。

気配を殺しながら魔力の使用によって俺の存在を勘付かれないために重力に任せた自然落下だけで上空からヴィータ目掛けて迫る。

万全の状態での彼女ならば気がついていたかもしれないが、巨大な魚を倒して目的である蒐集を行なっている彼女は隙だらけである。戦闘中の乱入ならば警戒されていて出来なかったかもしれないが、今の彼女は戦闘を終わらせた事で気が緩んでいる。シグナムやザフィーラ辺りならば見せないであろう隙であるが、それを告げる程に俺はお人好しでは無いし、見逃してわざわざ正面から立ち向かう程に戦いというものに清廉さを求めている。

汚くても良い、醜くても良い。血に塗れてズタボロになったって最後に立って拳を挙げている者こそが勝者なのだから。

そのままヴィータの僅かに残されていた警戒を潜り抜けて間合いに侵入し、ナルカミを振るう。餌として使うつもりなので殺すつもりは無く、しかし抵抗は出来なくなる程度の深手を負わせるつもりで振るった一撃は―――触れる直前に反応されて半回転された事で躲された。

気付いていてわざと見逃しているようには見えなかった。そうなら間違いなく反撃を食らわせているであろう。つまり、勘で避けたか

経験で察したというところか。

見た目は少女とはいえ闇の書の騎士の1人なだけはある。

「な——」

「どうもどうもリトルレディー小さなお嬢さん……死なない程度にボコすから」

躲されたとはいえギリギリだったので刃は届き、ヴィータの背中に傷を残す。深手と呼べる程では無いが動く度に痛むだろうし、早急に手当てをしなければ出血が酷くなつて動く事が出来なくなる程度の傷だ。一撃で仕留めるつもりだったとはいえシグナムを基準としていたので躲される事が前提のつもりでいたが、これだけの傷を付ければ初撃としては充分すぎるだろう。

自身の状態から不利を悟って逃げ出そうとするヴィータ。高度を上げようとするが、それを魔術で生成した真空波によつて遮つて範囲を制限する。

生憎と俺は他の魔導師たちのように飛行魔法の適性は無いので空中戦は得意では無い。一応戦うための手段は用意しているので戦えなくは無いが、不利になる。なので初撃に失敗したと判断すると同時に真空波で高度を制した。活動出来る範囲は湖から高さ3メートルと行ったところだろう。負傷覚悟で突っ込めば無視出来るかもしれないが、そうされたら空中戦に移行すれば良い。ボロボロの彼女の相手ならば、得意では無いとはいえ負ける気はしない。

「クソッ!!」

それを悟つたからなのか、ヴィータは高度を上げることが諦めて後退しながらもハンマーを握り直して交戦の意思を見せる。シグナムたちが助けに来るまでの時間稼ぎなのか、それとも一人で俺を倒せる

と判断したのだろうか……どちらにしても、戦ってくれるというのであれば好都合である。

気絶していた魚の上に着地し、それを足場にしてヴィータへと接近する。一匹や二匹だけならば足場としては使い物にならないのだが、蒐集の為に群れを倒してくれたおかげで湖の半分を埋め尽くしている。殺しはしないで気絶させているだけなのでいつ目覚めるかわからないが、少なくとも俺がヴィータを仕留めるまでには間に合うだろう。

足場の魚と魚を一步で飛びながら進む俺に対してヴィータは魔力で鉄球を生成してそれをハンマーで打ち出す。方法は違うが高町が使っていたシューター系の魔法と同じなのだろう。打ち出された鉄球は真っ直ぐに飛ぶはずなのに物理法則を無視して弧を描きながら俺に向かって来る。

「ま、怖く無いけど」

一発一発の威力は重たいのだろうが、シューター系とはいえ弾幕が薄過ぎる。僅かな時間差で迫り来る鉄球の軌道を見切り、最低限の体捌きだけで躲して肉薄する。だが、避けられる事は予想していたのだろう。鉄球を潜り抜けた先ではヴィータがハンマーから薬莖を排出し、振りかぶりながら待ち構えていた。

「吹っ飛ばえええーっ!!」

『R a k e t e n h a m m e r!!』

ハンマーの片方にジェット機が生成され、それがロケットのように噴出しながら加速して振るわれる。その最中にヴィータ本人が振り回されているように見えるが、ロケットの推進力に加えて遠心力も重ねられているので生半可な防御ではそれごと叩き潰されるだろう。

事実、クロノから見せてもらった最初の襲撃の映像でこの方法で高町の防御を砕いてダメージを与えていたから。

デバイスが改造された事で更に硬くなった高町に通用するか不明だが、元より高町よりも柔らかい俺ではあの一撃を防ぐ事など出来ない。

なので、防がずに流すことにした。

高速回転しながら迫るハンマーの先端を目で追い、俺にぶつかる瞬間を見極めてナルカミと合流させ、振るわれる力に対して横から力を加える事で軌道を変えて受け流す。ハンマーとナルカミが接触した事で火花が飛び散るものの、ナルカミの刀身には歪みどころか欠けているように見えない。耐久テストをクリアしていたので大丈夫だと知っていたが、耐えられるかどうか不安ではあった。直撃を防ぐのは厳しそうだが、この程度の受け流しならば問題なく行えそう。

流されるとは思わなかったヴィータが驚愕の顔を見せながら通り過ぎて行き、回転したままで弧を描きながらUターンしてくる。回転運動を阻害したわけでは無いので当たるまで続けるつもりなのだろう。新たに距離を稼いだ事で回転速度は上昇し、それに比例する形で一撃の威力も上昇していく。さっきまでならば当たりどころによっては重傷で済んでいたかもしれないが、これではどこに当たっても致命傷を負いかねないだろう。

「当たればの話だけど」

いくら加速して威力が上がろうとも、突然別次元のそれらに変わったわけでは無い。さっき受け流した一撃の延長線上でしか無いのだ。

一度見た、一度流した。ならば目に追える速さであるのなら、次は

避ける事など容易い。

足場になっていた魚を蹴り、ヴィータに向かう。逃げる、もしくはさっきのように受け流すことに集中するのだと思っていただろう。ヴィータは俺の行動に目を開いている。驚きは思考を止め、身体を硬直させる。これがシグナムならばそういうものなのかと軽く受け止めて来るだろうが、精神が幼く設計されているヴィータには無理な話だったようだ。

飛び込んだ先に待ち構えているのは唸りを上げながら振り回されるハンマーの先端。これを食らえば紙装甲の俺では握り潰されたトマトのような死体に成り下がるだろう。

容易く即死させる一撃を、僅かに身体を沈めて躲す。

俺を殺すはずだった一撃が頭部のスレスレを通過する。そして一回転して次が来るよりも速くにカスパールの銃底でヴィータの腕を殴る。武器として使用されている以上、あのハンマーは頑丈に作られているだろうが、少女の身体をしているヴィータはそうはいかない。

耳に届いたのは水風船の弾けるような音。

カスパールから伝わるのは肉が潰れる感触と骨が碎ける感触。

高め過ぎた遠心力を利用してバリアジャケットの防御を貫き、彼女の両腕を潰した。

「な——」

痛みよりも驚きが優っているのか、ハリガネのようにひしやげた腕を見てヴィータは硬直する。これがシグナムならばそれがどうした？近づいて来てくれたのだから殺すと折れた腕で剣を振るって来そ

うなのだが、それを彼女に期待するというのは酷なのだろう。

固まっている彼女の腹部にナルカミを刺し、組み込まれていたギミックで魔力を電気に変えて放電する。リンカーコアからの魔力の使用はまだ完治していないので緊急時以外は控えているが、魔力回路からのならば問題ない。

体内に直接電気が流されて、ヴィータの身体が無様にビクビクと跳ね上がる。皮肉な事に前世の経験で人の殺し方と言うものを良く知っている。それは裏を返せば人が死なない程度に痛めつけるラインを知っているという事になる。腹部に傷が残るかもしれないが内臓には傷を付けないように刺したし重要な血管は避けている。電気に関しても強めのスタンガン程度に抑えているので死にはしない。

事実、ヴィータは気絶するだけで終わった。バリアジャケットが収納されて私服姿になるものの、ナルカミに貫かれたままという事には変わらない。

「アイムウイナアアアアー!!と、言うことで追い剥ぎの時間だオラア!!ヘッヘッヘ……紳士達が喜びそうな身体してるじゃねえか……!!……ダメだ、反応無いからつまらん」

ナルカミを引き抜き、魔術で傷口を塞ぐだけの簡単な治療を施して陸地に上がり、ヴィータから待機状態のデバイスを取り上げる。

「Hey, 命令だ。他の闇の書の騎士達にメッセージを送れ。断つたらこのロリが愉快なオブジェクトに変わるだけだ。どうするのが良いか、バカでも分かるような事だけ……お、繋がったみたいだな? 音声は一方通行で、レスポンスは要らん」

カスパールの銃口をヴィータの頭に突きつけながら脅迫すれば、命

令通りにシグナムたちとの念話が行使される。注文通りにこちらからの音声しか送れない仕様になっているが、ここでしたいのは会話では無く報告だけなので相手からの返事は要らない。

「ん、ん、んく!!聞こえてるかな、闇の書の騎士達?お前達のお仲間のロリ担当を拉致るから!!探したかったらこいつのデバイスの反応を追いかけて来てどうぞ!!……ああ、1時間しても来なかったら、こいつは管理局に突き出すからそのつもりでな?」

それだけ伝えて会話を終わらせる。分かりやすいほどに誘っていると向こうにもバレただろうが、これで構わない。普通ならば無視したり、見捨てたりを選ぶだろう。闇の書の騎士という役割からしてもここでヴィータを見捨てて蒐集を続行するのが最善だ。しかし、こいつらは八神と過ごした事で優しさと家族愛を覚えてしまっている。ここでヴィータを見捨てれば八神が悲しむ事になると考え、例え悪手であろうが助けに来るだろう。それが悪い事とは言わない。逆に善意に満ち溢れた素晴らしい行いだと賞賛させて欲しいくらいだ。

まあ、それはそれとして好き勝手やらせてもらうが。

「ハスター、マーキングしていた世界に転移の準備……ああ、その前に蒐集をしておくか」

『了解しましたー魔力蒐集、開始』

ハスターに指示を出すと湖で気絶していた魚たちからリンカーコアが露出され、魔力が蒐集される。闇の書の蒐集ペースがどの程度なのか分からないのでこの集まった魔力でどれだけのページが埋まるのか分からないが、必死になって魔力を集めている彼女たちからしてみれば喉から手が出る程に欲しいだろう。

そして集まった魔力を握り潰し、起源にて干渉を行う。手を開いた

時にそこにある魔力の外見は変わらなかったが、仕込みは終わらせられたと確信出来るので問題ない。

「これでよし。ハスター、始めてくれ」

『次元転移、開始します』

カートリッジに貯蔵していた魔力が消費され、足元に魔法陣が現れる。餌を確保し、仕込みは終わらせた。これから先の事を考えると興奮で顔がニヤけてしまう。

結末はどうに決まっている。ならば、その過程を楽しむだけだ。

ヴィータを捕らえて30分後、俺はさつきまでいた世界とは別の世界にいた。あの世界は天候が悪く、辺りを見渡せば巨大生物がひしめき合っているような湖がいくつもある世界だったが、この世界は天候が悪いものの空気が乾燥していてとても過ごし易い。そして事前の調査で見つけた廃墟の一角でここに来るものたちを待ち構えていた。

「いやあ、こういう遺跡チックなものロマンってえの？それを感じられて良いなくそう思わない？そのロリータ」

『マスター、彼女は気絶しているので返事は無理だと思えますが』
「知っててやってる」

廃墟の一角、そこにあつた一番高い建物の最上階に俺たちはいた。俺は壁に縋って楽な姿勢を取っているが、未だに気絶しているヴィータは掌に杭を打ち込まれて壁に磔にされている状態。これでは助けに来て早々に救出する事は困難だろう。

そして、〃私は不審者に負けたクソ雑魚ロリータです〃と書かれたプラカードを首からぶら下げている。

この世界にヴィータを連れてきて、壁に磔にしたところまでは良かったが待つ以外に何もすることが無くて暇を持て余していた。そこでチャットで暇を潰せるような事は無いかと聞いたところ、敗者を辱める事は勝者の務めであるといレインから言われたのだ。

そこでプラカードをぶら下げてみた。書いてある言葉は俺が考えた。

そしてその画像をチャットに乗せたところ、桜木と愛歌からの返事

が無くなった。心配になってイレインに二人の様子を見てくるように訊ねたところ、二人して腹を抱えて爆笑していたらしい。

他にも愛歌とイレインからの案を実行した結果、ヴィータの頬には油性のマジックで渦巻きが、額には肉という漢字が、鼻の下に髭が、瞼に目が書かれているといえ凄まじい状況になっている。チャットを見ても愛歌からの書き込みが見つからない辺り、彼女は今頃過呼吸にでもなっているのだろう。

『それにしても、何故わざわざこんな回りくどい手段をお選びに？マスターの事ですから、一人で騎士たちの本拠地に特攻するとかやるものだと思っていましたか？』

「それは考えてたけど、つまらないから止めにした。これはな、俺からしてみれば祭りと同じなんだ。結果はハッピーエンドかバッドエンドか、どちらかに決まっただけでそれ以外は存在しないーだったら、その過程を楽しまなくちゃ損だろうがよ。面白そうだから首を突っ込んだけどつまらなかった……そうじゃない。どんな内容であれ参加したのなら、楽しまなければいけないんだ。馬鹿みたいに頭空っぽにして、阿呆みたいに踊り狂う。あれやこれやと考えなきやならん事は山ほどあっても、この瞬間だけは全力でそれに興じる……と、俺は考えてるけどお前らはどうよ？」

「ー成る程、狂人の類か」

廃墟の影から一瞬だけ鋭い殺気が溢れたのを知覚してそちらに声を掛ければ帰ってきたのは納得するような声と矢による狙撃だった。弓矢という、現代社会では主力にならない武器であるが、銃とは違い攻撃の瞬間に音を立てないという利点がある。殺気が溢れていなければ暗殺には成功していただろうに、と思いつながら素手で矢を横合いから叩いて軌道を変える。

基本的に高速で動く物体というのは横からの力に非常に弱い。銃

弾でさえ、近くにあつた葉っぱに当たって軌道が変わったという事例がある程にだ。高速で飛んでこようとも、それを追える目と反応出来るだけの反応速度があれば、このように素手で対処する事は容易い。

「時間切れの30分前か……いいね、行動の早い奴は嫌いじゃない」
「貴様が下手人か……我らの仲間を返してもらおう」

廃墟の陰から現れたのはシグナムが一人。他の者たちが見えないのは、シグナムを囷にしてその間にヴィータを助けようとしているからなのだろう。確かに、彼女たちの目的を考えればそれが一番正しい。わざわざ俺を倒さなくても、ヴィータを助けることが出来ればそれで良いのだから。

だが、それは俺も理解しているから当然対策はしてある。

頭上から落ちてくる気配を悟り、上空に仕込んでいたトラップを作動させると、間をおかずにそれらが起動して頭上が爆ぜた。待ち構えているのだから罠の1つや2つは仕掛けている。魔法によるものなので冷静に探知をしていれば気づけたのだが、どうやらそれに気付かないくらいには焦っていてくれるようだ。

しかし、せっかく仕掛けたトラップも効かなければ意味は無い。爆炎の中から飛び出してきたのはザフィーラで、火傷は負っている物の爆破の規模を考えれば軽傷と言っても良かった。

「はい、あとそこそこそこねー」

右、左と、適当に狙いをつけてカスパールの引き金を引く。使用したのは砲撃魔法で、カートリッジを2発ずつ消費して行使されたそれは光線となって廃墟都市の一角を破壊する。倒壊の影響で舞い上がる砂埃を突き破って現れたのは若草色のドレスを身に纏った金髪の

女性——シャマルと、白い羽毛を生やして鳥と人間の合わさった姿になっためぐりだった。

黒い霞を使う項羽とも、爆撃機を召喚するルーデルとも違う別の才能なのだろう。手にしているのはライフルである事から、狙撃手の才能だと推測出来る。恐らく射程距離内に入って狙撃しようと企んでいたのだろうが、それよりも先に俺に気付かれたので無意味に終わってしまったようだ。

「なんなんですかあの人……バレないように魔力遮断とか色々してたのに魔法を使われずにバレたんですけど」

「私も同じよ……折角ハスコックの才能使おうとしたのにレンジに入る前に気付かれたわ」

「めぐりは兎も角、シャマルは経験したことがあるだろう……ズバ抜けた気配察知能力を持ち、そしてヴィータを封殺出来るだけの実力を持つている。ああいう手合いは用心深く、そして手段を選ばない。前衛は私とザフィーラが務める。2人は後方から支援してくれ」

シグナムが俺を分析した結果を全員に告げ、指示を出す。誰もがそれに異論を唱えること無く、素直にそれに従った。流星は烈火の将といったところか。自身の戦闘能力が高いだけでは無く、人を使う事にも慣れている。

だが、ヴィータから視線を外している気がするが。

「貴様が何者か、ヴィータを攫った目的が何なのかと尋ねるつもりはない……返してもらおうぞ」

「いいねえ、すつごくカッコいい———だけど残念だ……祭りの楽しみ方を分かっちゃいない」

元が生真面目な性格だからなのか、しかしは俺がさつきまで言って

いたことを理解してくれていないようだった。

これは俺にとっての祭りだと言った。俺は祭りとは楽しむものだと思っている……だが、それ以前に祭りというものは、賑やかで騒がしいものなのだ。気絶しているヴィータも含めて6人だけでは祭りだなんてとてもでは無いが言えたものでは無い。

なので、他に人を呼んでいる。

知らせた時間の事を考えればそろそろ来てもおかしくないと考えていると、俺たちがいる廃墟都市をすべて覆いかぶさるように半球のリーミッド式の結界が張られる。地球で使われる結界は一般人たちに見つからない為のものであって、人のいないこの世界で使う意味は無いのだが、この結界は俺たちを逃さないために使われているようで転移を阻害する術式がこれでもかと言うほどに盛り込まれている。サポートに特化しているハスターでも、この結界を無視して転移することは難しいだろう。

そして逃げ場を塞がれ、管理局員たちが結界内に転移してくる。高町やリンカーコアの不調から回復したフェイト、クロノや黒須にアルフトユーノ、更に30人近い武装した局員たちと、中々に力を入れているように見える。

「貴様……まさか管理局に我らを渡すことが目的か？」

「そんな事してもつまらん……祭りは大勢で賑わうのが楽しいんだ。俺たちだけで馬鹿騒ぎしても、ふとした拍子に我に返って虚しくなるだけだからなあ……それに、俺も管理局には嫌われてるし」

「時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ。闇の書の騎士ヴォルケンリッターたちにその協力者、そしてアクロ・ダカーハ。魔導師襲撃や傷害、そしてロストログアの不法所持などの容疑で纏めて逮捕させてもらおう」

「ね？」

「何がね？よ……しつかり理由があるじゃない……」

ともあれこれで祭りを盛り上げられる程度の人数は揃った。後は馬鹿みたいにはしゃいで騒いで、心行くまで楽しむだけだ。

『と、言うわけで……桜木、出てきて良いぞー』

『ワイイ!!』

準備が出来たので待っていたであろう桜木にチャットでオーケーを出した瞬間、張られていた結界が破壊された。余程の強度で作られたのが空いたのは一部分だけで、しかもそれは時間と共に修復されている。しかし必要なのは穴が空いたと言う事実で、外部からの出入りが可能になったと言う事だ。

闇の書の騎士たち、管理局、そして俺の三つ巴になっていた結界内に新たな侵入者が現れる。その正体は子供から大人の姿になった桜木だったが、何かしらの財宝でも使っているのか霞がかかっていて酷く認識し辛い。俺は桜木だと分かっているから正体を即座に看破することが出来たのだが、知らない者からすれば、正体は分からないのだろう。

『宝物庫を徹夜して漁った結果、見つかった効果の高い宝具を全部使ってきました!!これで誰が見ても僕の正体は気付かれず、更には“情報抹消”と同じ効果があるんで誰の記憶にも残りません!!』

『機械的な記録に関しては?』

『エルキドゥが頑張ってくれてます』

『ギルが楽しむために、全力で頑張るよ』

サポートに特化しているハスターと違い、桜木のデバイスであるエルキドゥは基本的に全性能が高水準の万能型だ。それだけなら足り

ないかもしれないが、桜木の宝物庫のバックアップありきならば機械的な記録も対応可能なのだろう。

ともあれ、これで桜木が管理局に身バレする心配は無くなった。

心行くまでこの祭りを楽しませてもらう事にしよう。

「……祭り、祭りと言ったな？良い、許す。精々全力で踊り狂い我^{オレ}を愉しませてみせろ。下らぬ振る舞いをするならば、その首を落とす」
「Let's party !!」

誰もが桜木の登場に混乱し、立ち直っていない事を理解しながら、カスパールを上へと向けて引き金を引いた。

この廃墟都市は俺が祭りの会場に選んだ場所であり、様々な仕込みが施されている。戦いとはいかに自分が有利に戦うか、相手に不利を押し付けるかであるのでこの程度の事で卑怯などと叫ばれても困ってしまう。

祭りの開催を告げる為に放ったカスパールの銃撃に呼応するように、廃墟都市のあちこちから細い光の柱が登る。予め仕掛けていたカートリッジが、このアクションで起動するように設定していたのだ。そして光の柱は俺の頭上に収束すると光球になり、脈動するように徐々に体積を増していく。

「祭りの始まりを告げるなら派手じゃないとなあ!!受け取つてくれえーっ!!」

『スコールレイン、射出』

光球が弾け、光の雨となつて廃墟都市全体に降り注ぐ。それは正しく光の豪雨。一発一発は点で落ちてきながらも、その数により面での攻撃を実現させる。俺と礫にされているヴィータのいる廃墟を除いた全域に闇の書の騎士、管理局、そして桜木も関係なしに容赦無く撃ち抜くのではなく穿つ事を重視した光弾を落とした。

闇の書の騎士たちはめぐりが新たな才能らしい鎧姿になり、巨大な盾を傘がわりに使いシヤマルと共に光弾を防いでいる。シグナムとザフィーラはこの程度、防御するまでもないと判断したようで、自分に当たる物だけを最低限の動きで避けている。

管理局は高町が障壁を張つて盾となり、フェイトと黒須を庇っている。高町1人だけなら魔力に物を言わせたバリアジャケットの防御

だけで耐えられそうなのだが、防御の薄い彼らの事を思つて盾になつたようだ。クロノと他の局員たちは高町と同じように何人かが障壁を張つて盾となり、他の局員たちを守っている。

そして桜木は微動だにしていなかった。自身に落ちてきている光弾など知覚する必要は無いと考えているようで欠片も意識を割いているようには見えず、宝物庫からいくつか盾を取り出して頭上に置くだけで済ませている。

「成る程、開幕を告げる号砲としては及第点というところであろう……見るが良い。これが本当の開戦の号砲と言うものだ」

桜木の周囲に黄金の波紋が現れ、そこから宝物庫に納められていた財宝がガトリングのように射出された。

桜木の転生特典である英雄王ギルガメツシュ。彼は神が人を治める時代にあつて、始めて人が人を治めた世界最古の王である。王族でありながら冒険家としても活躍したギルガメツシュは、集めた財宝をすべて自分の蔵へと納めた。その蔵はギルガメツシュの死後に開け放たれ、財宝は各地へと散つてしまつたが、この世の全ての財を集めて己が手中に収めたという功績は変わらず、各地に散つた財宝は数多の英雄たちの手に渡つて伝説を共にした。

そうしてその逸話はギルガメツシュの宝具となり、桜木はそれを望んだ。世界との帳尻合わせの為に変化したその宝具はスキルとなり、だがその性質は宝具である時と全く変わらずに人類が産み出した物であれば、過去未来の時間軸さえ無視して内包される宝物庫という反則級のスキルとなっている。

宝物庫に納められた財宝は無尽蔵と言つても過言では無い量で、更に現在進行形で増え続けている。スキル保持者である桜木だけでは

なく、宝具として持っていたギルガメッシュでさえ把握し切れていない程の量だという。その為に桜木の戦闘スタイルは無尽蔵の財宝を利用した物量戦となる。ただ財宝を適当に射出する。それだけで有象無象であれば蒸発する程の威力を持った暴力となる。

現に幾らかの手心を加えているのだろう。射出される財宝に内包されている魔力は低いのだが、それでも英雄王の宝物庫に納められるに相応しい一級品ばかり。一発が爆撃を思わせる破壊力を発揮しながら、しかし誰も死んでいないという結果になっている。

一番被害が多いのは管理局だろう。連携こそはこの中に集まったものたちの中でも抜きん出ているかもしれないが個々の力はクロノを除いて並よりも優秀程度のものでしかなく、盾役となった者たちは財宝の暴威に晒されてボロボロになっている。それでも背後にいた者たちを守り抜いた事は評価するべきだろう。他に盾役に勤めていた高町とめぐりは無傷ではあるが消耗した様で肩で息をしている。

そして俺は無傷だった。桜木がわざと狙わなかった訳ではないのは俺の周囲の被害が周りと同じ事から見ても明らか。前以て関与している事を悟らされない為に普通に攻撃しろと言ったのを守ってくれたらしい。

俺が無傷なのは桜木の財宝を防いだからだ。当たる物はナルカミで受け流し、躲せる物は見切った上で最低限の体捌きで躲し、当たらない物は無視した。そんな当たり前の事を当たり前のようにして、財宝の射出をやり過ぎした。それはシグナムとザフィーラも同じな様で、彼らも俺と同じように周囲の被害は甚大だが本人たちは無傷で財宝をやり過ぎしていた。

《うっわ、何で適当にばら撒いたとは言え避けれるんだよ……一応超広範囲の面制圧だったのに》

《やーいやーいクソガバエイムー》
《おっと、手が滑った》

表面上は変わった様子は見せていないのだがチャットでの反応を見る限りでは相当頭に来ていたらしく、俺へとピンポイントで二十を超える財宝が放たれた。煽り耐性低過ぎやしないかな？などと考えながら先ほどと同じ要領で宝具の射出をやり過ぎしー内数本を左右へと弾き飛ばし、そこから迫っていたシグナムとフェイトの迎撃とする。

高速で軌道を変えて向かって来た宝具を物ともせず、2人は手にしているデバイスの一振りですそれを弾き飛ばし突貫してくる。それを避ける事なくナルカミとカスパールで受け止める。

「仲良いねえ、敵対してたんじゃないの？」

「これは祭りなのだろう？ならばそれまでの関係を無視してはしゃいでも構わんはずだが？」

「貴方には母さんを傷つけられた個人的な恨みがあるので」

共闘のような事をしているのはここだけでは無かった。クロノの指揮する管理局員たちが砲撃やシューターを桜木に撃ち込み、それに便乗する形でザフィーラが突貫している。よく見ればここから離れた場所では高町が砲撃の機会を伺っており、その側では黒須が何かに堪えるようにしながら控えているのが見える。

どうやら序盤の全体攻撃が彼らの警戒心を煽ってしまったらしい。管理局と闇の書、敵対している関係でありながら俺たちという脅威に對して手を組むことにしたらしい。明言している訳ではないが、この状況を見る限りではそれで間違いなさそうだ。

それに関してこちらからは何も言わない。争っていた二者が外部

からの敵勢力に対して一時的に手を組んで当たるなんて珍しいことでは無い。むしろ、そうしてくれた方が楽しめる。

「よし、かかって来い」

その言葉を皮切りに、2人は同時に鏢迫り合いを辞めてその場から跳びのく。そしてフェイトはバルディッシュを振りかぶって三日月型の斬撃を、シグナムはレヴァンティンの形状を連結刃に変えて鞭のようにしなせながら斬撃を見舞う。

普段ならこの攻撃を避けていただろうがこれは祭りなのだ。馬鹿になって騒ぐ楽しい楽しい催し物である。避ける、いなすは無粋の極み。

故に、迎撃する。

「ナルカミ、稲走り」

『承知、カートリッジ使用許可』

「認める」

ナルカミの柄から空になった薬莢が3つ吐き出され、内包されていた魔力を電力に変えて刀身に帯電する。そしてそれを一閃。帯電していた雷が斬撃となって稲妻のような軌道を描きながらフェイトとシグナムの斬撃に命中する。

普段ならばカートリッジの使用は一つで済むのだが2人からの攻撃、それも二方面からなのを配慮しての増量なのだろう。消費は多かったものの、望んでいた通りに迎撃には成功する。しかし走る稲妻は迎撃には成功しても本命たる彼女たちには当たらない。直前になって稲妻を避けられた。魔法による再現で本物よりも劣るとはいえ、少なくとも音速よりも速いそれを肉眼で見ながら反応したとは考

えられない。恐らくは直感なのだろう。そのバトルセンスには脱帽するしかない。

稲妻を軽く避けられ、ミドルレンジへと踏み込まれる。振るわれる鎌と剣。リーチの違う武器がそれぞれの振るい方で、バラバラのタイミングで襲い掛かってくる。流石にフェイトにはシグナム程の練度は見られないが、それでも接近戦が主体な為に並みの魔導師よりも上手いと感心させられる。

それを、ナルカミとカスパールで同時に捌く。シグナムの剣をナルカミで弾き、フェイトの鎌をカスパールでいなす。二方面から同時に攻撃されるので対処は面倒ではあるが、前世のように四方から襲い掛かられるよりはマシだ。

フェイトはまだ幼い為か正直に正面からしか攻めてこないが、シグナムはさり気無く俺の視界の外へと逃げようとしている。それをさせないように立ち回り、時折落ちてくる桜木の宝具を上半身を動かすだけで躲す。流石に管理局とザフィーラを同時に相手しながら俺を攻撃するのは厳しいのだろう。開幕で財宝をばら撒いた時よりも雑に放っているように感じられる。

このまま我慢比べに付き合っても良いが、それではつまらない。フェイトの足元へと振るわれた一撃を飛んで躲し、シグナムの一閃をナルカミで受け止め、その勢いで吹き飛ばされる。そうして廃墟都市を一望できる程の高さからの自然落下が始まる。

壁面のスレスレを落下しながら身体の正面を上に向ければ、視界に追いかけてくる2人の姿が映り込む。ただ落下しているだけのこちらに対して向こうは魔法による飛行だ。ただこうしているだけでは追い付かれるのは目に見えている。

なので牽制にカスパールの弾丸をばら撒き、落下しながら壁面を蹴って下に向かって落下する。スピードタイプのフェイトには避けられ、シグナムには剣で弾かれてしまうが、その行動に意識が割かれてしまい速度を上げられないので差は開く事になる。

加速した状態でその速度を殺すこと無く着地し、その際にかかる負荷を全て横へと向けることでダメージを無くしながら速度を落とすこと無く着地して移動する。

そして、さっきまで居た廃墟の元に仕掛けていた爆弾を起動させる。支えになっていた4本の柱の内の2本を無くしたことで支えをなくし、廃墟がこちらに向かって倒れ込んでくる。それを見てシグナムは俺を追いかける事を諦めて全力で倒れる廃墟へと向かっていった。何せあそこにはまだ礫にされているヴィータがいる。彼女を助ける為に毘だと分かっていたいながらもシグナムたちはこの場に来ただ。

俺よりもヴィータを優先することは当然でありーその背後目掛けて砲撃魔法を放つ。

シグナムならばこれに気が付き、振り返ること無く避けるくらいのことにはやるだろう。しかし砲撃の射線上にはヴィータの姿がある。避けてしまえばヴィータに当たってしまう、絶対に避ける事が許されない攻撃。殺ったとは考えられない。シグナムのバリアジャケットの硬さから推測するに、精々ダメージを与えられる程度の物。

それは別方向から放たれた桃色の魔力光の砲撃により、あえなく掻き消される。

「チイツ!!」

魔力の輝きを見ただけでその砲撃が高町の物だと分かり、思わず舌打ちしてしまう。強引に行われている乱戦で、利害が一致したとは言え敵対している相手が攻撃されたのだ。戦力が減るのは痛いかもしれないが、今後の事を考えれば見捨ててダメージを与えておくのが定石である。事実、クロノたちはザファイラを助ける事無く、ザファイラもまたクロノたちを助けるような行動をしていない。

手を貸すことはあっても、助ける事はしない。それがこの場のルールだと思い込んでしまっていた。だからこそ、高町の行動でそんなルールなんて無いんだと気付かされ、そんな自分に苛立ってしまう。

「ハアアッ!!」

高町に意識を取られた瞬間を好機と読んだのか、フェイトが加速して斬りかかってくる。

「緩い」

それが振るわれるよりも先に彼女の顔面を蹴り飛ばす。

フェイトの体躯と鎌の形状が原因で、彼女がバルディッシュを使うにはどうしても振りかぶらなければならなくなってしまい、どうしても初動が遅くなるという欠点がある。さっきまではシグナムと共闘していたのでその欠点をつく事が出来なかったが、こうして一対一になったのであれば容易くつく事が出来る。

加速をしていた事で自分から突っ込む形で蹴られたフェイトは仰け反り、体勢を立て直そうとしたところをナルカミの柄で、カスパールの銃底で殴り抜く。鎌のリーチよりも内側に入り込まれた事でフェイトは反撃する事は出来ず、逃れようと電気を放電するが、無視出来る程度のダメージだったので御構い無しで殴り続ける。

「あ……」

「こんなもんか」

十数発も一方的に殴られた事でフェイトはその場で崩れ落ちる。バリアジャケットの防御のお陰で骨折や打撲程の傷は負っていない様だが、内部にはダメージが残っていて少なくともこの戦闘での復帰は不可能だろう。

フェイトに興味を無くし、次は誰にしようかと品定めを始めたところで猛烈な勢いで炎が向かってくるのが見えた。

「アクロオオオーッ!!」

「お前が来るか、同類」

その目に怒りと憎悪を宿しながら、前世で同じ世界の住人であったであろう黒須が向かって来るのを嬉々として迎え撃つことにした。

黒須の振るう剣の一撃を躲すこと無くその場で受け止める。前に徹底して距離を保っていたのは接近戦の経験が皆無であったのと近接戦で耐えられそうな武器が無かったからだだが、今回はパンダやシグナム相手に経験を積んでいる上にナルカミを保っているので解禁している。

炎を纏った剣と雷を纏うナルカミがぶつかる。上空から、炎を推進力として突貫してきたので衝撃は大きかったが耐えられない物ではないし、この程度ならば受け流す事が出来る。手首、肘、肩と関節部位を利用しながら手から伝わって来る衝突のエネルギーを全身へと分散させ、足の裏から地面に流す。

その衝撃に耐えられずに地面は爆ぜ、クレーターが出来上がるが俺は無傷。結果的にその場から一步も動く事なく黒須と鏑迫り合う。

「久しいな、同類。元気そうで何よりだ」

「黙れツ!!お前に同類呼ばわりされる筋合いは無い!!」

「いやはや、これは手厳しい。前世あちらでやった事の自覚はしてるから罵倒は覚悟していたとは言えここまで嫌われているとはな」

黒須の感情に呼応するように、背中から噴き出している炎の勢いが増していく。流石に強化だけでは押されてしまうので魔力を放出する事で力の格好を強引に釣り合わせる。

「そう邪険に扱ってくれるなよ。他の転生者たちとは違って同郷の間だーその上、同類ともなれば仲良くやっていきたいと考えるのは当たり前だと思うが?」

「俺がお前と同類だど?!ふざけるな!!そんな事があつてたまるか!!」

「ところがだ、そんなふざけた事があるのだよ」

後先を考える事なく魔力を炎へと変換している為に、その熱量はバリアジャケットの防御すらも貫通して肌を焼く。息をするだけで喉が焼かれ、見るだけで眼球が沸騰しそうになる。――それに構う事なく、顔を前へと突き出す。

「お前は英雄になりたいのだろうか？あの世界で英雄へと至った究極至高の人間、ガリア・オールライトの様な存在に……いや、ガリア・オールライトになりたいのだろうか？この世全ての悪を憎み、嫌い、根絶やしてやると怒りに燃え盛るあの男に対して畏敬と憧憬を抱いたのだろうか？」

「それが、どうした!!」

「――故に、俺とお前は同類なのだよ」

放出している魔力の出力を上げ、足を前に踏み出す。

「あの男は、救いようの無い狂人だ。悪を認めない、悪を許せない、この手で必ず滅ぼしてやる……それを思う事は誰しもがあるだろうが、それを実行する事は誰もしない。何故なら、それは出来ないからだ。悪があるからこそ善が成り立つのであってその逆もまた然り。どちらかだけでは意味が無く、どちらも揃ってこそ始めて善悪は意味を持つ」

更に一步、足を前に踏み出す。

「それ以前に、あいつは異常者だ。諦めない心、不屈の精神と言えば聞こえが良いかもしれないが、あいつのそれは逸脱し過ぎている。楽を愚だと断ずるように、手助けを甘えだと断ずる様に、自らを傷つけて追い詰める姿は異常の一言に尽きる。マトモな奴が傷しか得られない道を喜んで進めると思うのか？出来ないだろうよ――だって、苦

しいのは嫌だものなあ。誰だって楽が出来るのならそちらの方が良いに決まっている。それは生き物として当たり前判断であつて何の恥でも無いというのに」

黒須が押されている事に気付きながら炎の勢いを増す。それを上回る量の魔力を放出する事で乗り越え、更に一步前に進む。

「故にお前は異常者だよ、黒須龍斗。異常者でしかないガリア・オールライトに憧れるまでなら良いさ。例えば異常者であつたとしても、誰だつてカッコいい存在には憧れるものだからな……だが、それになりたいと思ひ、そうならうと誓つたのなら別だ」

ここに来て拮抗していた天秤が此方に傾く。黒須から吹き荒れている炎の猛りは衝突時のそれを超えていて……しかし、俺の放出している魔力が容易くそれを凌駕している。

「異常者になりたいなど考える人間の事を、異常者以外になんと呼べば良い？悪行を息をする様に行つて、積み上げ垂れ流される屍山血河を眺めて愉快だと高笑う俺。そして異常者である英雄に焦がれなりたいと思ひ異常者……そら、等式は成り立つたぞ？俺とお前は、どうるい異常者であるとな」

「例え……ツ!!例え、そうだとしても……!!俺は……俺はあ……ツ!!」

悲痛そうな、泣きそうな、苦しそうな顔で齒を食いしばりながらも、黒須の目からは戦う意思は消えていない。誰からも認められなくても、異常者だと罵られても、それでも自分の目指した憧憬を追い求めているのが伝わってくる。

その姿を見て満足し、力任せに剣を弾く。幸いにも飛ばされる事はなく手に握られたままであつたが体勢は崩れて無防備な姿を眼前に晒している。

「その否定されたとしても貫こうとする姿には好感が持てるよ。取り敢えず、己を見つめ直してくるんだな」

そしてカスパールをホルダーにしまい、無防備な黒須の顔面に拳を叩き込む。鼻血を出しながら仰け反る黒須の脇腹にナルカミを突き立てて地面に縫い付け、マウントポジションを取って更に数発。反撃しようとするかそうとしていた手を握り潰して使えなくし、ついでに逆の腕も砕いておく。その最中で高町が黒須を助けようとシューターを放ってくるが、非殺傷設定を施されている魔法なんて恐れる必要が無い。これが砲撃魔法であったのなら話は変わっていたのだが、黒須を巻き込む事を恐れているのか使ってこない。

これがいくらかの戦闘経験を積んでいたのならそういう犠牲も必要なのだと割り切って、黒須ごと俺に向かって砲撃を撃っていたかもしれないが、この場にいる高町はまだ実戦を数度しか経験していない上に戦いのいろはを学んでいない。彼女の優しさが足を引っ張る形になっている。

そうして両腕を使えなくしてからマウントポジションを取って殴り続けた事で黒須は動かなくなった。いくらか加減はしているので死にはしないだろうが顔は打撲痕だらけで痛々しく、殴った手応えからして頭蓋骨にはヒビが入っているだろう。そんな状態でありながらもまだ動こうとしているのは感心する。

ともあれ、これで俺の知りたかった事を知れたので満足する。前回の戦闘で黒須が善の側に立っている理由を知る事が出来たが、だからと言ってそれを成せるかどうかが不安だったのだ。

だからこそ、徹底的に否定してやった。英雄になろうとしている姿を異常だと蔑み、憧れている英雄の事を異常だと侮辱した。矛盾だら

けの暴論だと言われたらそうだと肯定するしか無い内容であったが、ガリア・オールライトという男を説明するのならあれで間違いない。

もしもこの程度の事で心が折れたり、自分の都合の良い事だけしか受け入れられない様な脆弱ならばこの場で殺し、適当な奴を代役として仕立てるつもりであった。悪神たちから不況を買い、消滅させられるかもしれないがそれでも殺すつもりであった。

だが黒須はそれを認めながらも、そうだとしてもと受け入れながらも折れる事なく向かって来た。なので生かしておく事にする。この敗北を糧にして、より一層精進して欲しい。

生まれが劣悪な環境下で無才の身でありながら、強靱な意志力を持つて英雄と呼ばれるに至ったガリア・オールライトの様に。

『こちら両夜、こちら両夜。個人的な目的は達成した。あとは姉猫を引きずり出すだけだ』

『そうですか、分かりました。適当に結界破壊して行き来が出来るようにしておきますね？多分、そう離れてない所からこちらの様子を伺ってるでしょうし』

『だろうな。我が家の復讐鬼ちゃんによれば管理局と闇の書の騎士たちだけなら乱入しても逃げられるくらいには実力があるらしいし、俺とお前が乱入して混沌となってるから警戒してるんじゃないか？』

『それ以外に考えられないですからね。適当に1人になれば釣られてくれるんじゃないですか？確か、猫姉妹は結構家族愛って言うんですか？それが強かった筈ですし、無警戒でいたら感情的になって来てくれそうですよ』

『よし、なら結界壊してくれ。そこで俺が適当にでかいの打ち込んで攪乱するから』

『そろそろ見たいドラマの時間だったんで丁度良かったです』

「ふむー飽きた。我は帰るぞ」

それだけ言うと桜木は財宝を結界に向けて射出し、来た時と同じように結界に穴を開ける。そしてそのまま、その言葉通りに、アツサリと飛行船を操作して結界の外へと出て行った。その行動が予想外だったのか呆気にとられているクロノたちとザファイラの姿に笑いそうになるがそれを堪える。

「――神罰招来」

そして紡ぐのは魔術を行使する為のキーワード。残念ながら自前の魔力は黒須との鏝迫り合いのせいで放出してしまったせいでそこその量しか残されていない。このままでは魔力が足りず、使おうとしている魔術は発動することが出来ずに不発に終わってしまうだろう。

無論、それを承知の上で使おうとしている。自前で足りないと言うのなら、他から持ってくれば良いだけの話だ。

コートのポケットに手を入れ、そこから蒼い宝石――ジュエルシードを取り出して宿っている魔力だけを引っ張り出す。

ジュエルシードは願いを叶えるために使おうとすれば、使用者の意思に関係無く暴走して歪んだ形で願いを叶えるという危険物である。なので正しい使い方をする事は諦めて、魔力タンクとして使用する事にした。ジュエルシード一つで世界一つを崩壊出来るほどの魔力を宿しているのだ。魔力タンクとして使うのであれば、これ以上に使える物は他にない。

魔術の行使の気配、正確に言えば魔力の気配を感じ取った誰もが俺の方を向き、そして頭上に発生した積乱雲を見て止めようとするがもう遅い。止めるために行動に移すよりも先に、全ての準備は終わる。

非殺傷設定にはしてあるから安心してくれ。魔力ダメージだけでも相当な物だけど。

「随神相カムナガラ——級長津祀雷命シナツノミカツチイイツ!!」

「ふう……」

級長津祀雷命を落とし、戦場が混乱しているうちに転移でそう離れていない廃墟に移動する。隠蔽をしている上にダミーをいくつか混ぜているのであの場にいた誰も俺がここにいる事には気付いていないだろう。唯一心配なのはアースラからの監視なのだが、それは桜木がアフターケアで誤魔化してくれるらしいので大丈夫だろう。

バレるとしてもA×sが終わるまで持てば良いし。

一仕事終えた、そういう風を装いながら廃墟に持ち込んでいたクーラーボックスからビール缶を取り出して一気に煽る。色々とはしゃぎ過ぎて火照っている身体にキンキンに冷えたビールが染み渡っていく感覚が堪らない。

「あーこの一杯の為に生きてるって感じがするわー!!キンキンに冷えたビールこそがジャステイス!!」

「———そうか、だったら死ね」

空になった缶を握り潰し、次のビールへと手を伸ばそうとしたのと同時に、背後からそんな言葉をかけられて胸から手が生えてきた。

俺の胸を背後から貫いたのは仮面を付けた男。片腕は存在せず、残された隻腕で背後からの確に心臓のある部位を手動で穿っていた。バリアジャケットの防御を容易く貫いている辺り、バリアブレイクでも行使しているのだろう。いくら防御が薄い事を自覚しているとは言え、流石に急所の守りは固めてある。仮面に隠されていて表情を伺う事は出来ないのだが、男からは尋常では無いほどの殺意、そして俺を殺した事に対する喜悦が感じられた。こんな不審者丸出しの人物に対して何かをやった記憶は無いのだが、こいつは俺に対して何かしらの恨みを持っているらしい。そうでも無ければこれ程の殺意を抱く筈がない。

胸から生えている手を唾然として見て、背後を振り返って貫いている下手人の姿を認識し――血を吐き出している口を吊り上げて嘲笑う。

「残念、幻だ」

そう言った瞬間に貫かれていた俺の姿が崩れて黒い液体に変わる。それに驚きながらも手を引き抜こうとしていたが、それよりも液体が蠢いて男の身体を拘束する方が早かった。

「やあやあ始めまして、どこかの誰かさん」

動けなくなっている男の背後から声をかける。拘束されているが首だけは動かせるので男は首を回し、初めから後ろにいた俺の姿を視界に入れる。

「いつの間に……!!」

「初めっからだよ。来る事は確信していたから無防備晒しているように振舞っている幻覚を見せていただけの事だ」

幻覚の俺の背後を取りながら殺してやると無言で息巻いている男の姿は丁度良い酒の肴になってくれた。お陰で缶ビールを3つも開けてしまうほどに。

「まあ男に見えるっただけで男だとは限らないわなあ。つうわけだ、スツピンになろうか」

男の事を拘束している液体の正体は悪性情報に汚染されている魔力変換で出した水だ。故に魔法に対する特性は変わっていない。俺の意志一つで本来の特性を露わにして行使されている魔法の改竄を始める。

そうして魔法が無力化され、男は女性に姿を変える。リーゼロッテと同じ顔だがロングヘアで、彼女と同じ顔を殺意と怒りで醜く歪ませている。

「ああ、誰かと思えばお前か、リーゼアリア。どうしたんだ？俺とお前との間にはなんの関係も無かったはずだが？」

「惚けるな!! ロツテを……!! 私の妹を返せ!!」

「ロツテ？誰だそれは？前に聞いた時にはリーゼロッテなる人物は知らないと言っていたでは無いか。それを返せだと？ハッ、笑い話か？」

「黙れえ……!! 黙れエツ!!」

余程俺に対して憎しみを抱いているのか、リーゼアリアは液体に拘束されて身動きが取れないにも関わらず俺へと近づこうとしている。無理に身体を動かしているせいで全身からは悲鳴が上がり、激痛に襲われているだろうがそれを上回る怒りに突き動かされているのか痛

がる素振りを欠片も見せていない。

ギチギチと、離れている俺にも聞こえる程に身体を軋ませながら残された腕を俺へと伸ばす。

「やれやれ……何をそんなに怒っているのだから。まあ良い、お前の妹の事なんぞ知らんが、俺が捕らえたリーゼロッテなら……ほら、お前の後ろにいるぞ？」

「……え？」

予想していない言葉に呆気にとられた顔になりながらリーゼアリアは後ろを振り返り……彼女の後ろに立っていたリーゼロッテに殴られた。

「が、は……ッ!？」

「久しぶりね、お姉様だった人」

使い魔であったとしても人間の姿をしていれば臓器の位置は人間のそれと変わらないのだろう。顔を殴られた衝撃で軽い脳震盪になりながら、リーゼアリアは妹であったはずのリーゼロッテの姿を見て、信じられないと目を見開いていた。

リーゼアリアと同じだったはずの茶髪は度重なる拷問と家族に裏切られたというショックにより白く染まっており、衣服の下から見える彼女の手足には夥しい量の傷跡が残されていてとても痛々しい。首には包帯が巻き付けられて、出血していたのか乾燥した血の跡が残っている。

そして何より、リーゼアリアを見る目が、憎悪に燃えていた。

「ロッテ……なの……？ どうして……どうして……」

「どうして？笑わせないでよ。貴女達が私の事を捨てたのでしょうか？私なんて知らないよ、切り捨てたのでしょうか？だからこうなったの……分かる？貴女達のせいで、私はこうなったのよ」

リーゼロッテの姿を見て、言葉を聞いて、リーゼアリアの心が折れる音が聞こえた。きっと彼女は信じていたに違いない。今も自分の妹が耐えていると、自分たちの助けを待っていると。それなのに闇落ちした姿を見せられたのだから折れても仕方がないと思うが。

「だけどね、1つだけ感謝している事があるの」

そう言うリーゼロッテはこちらに近づいてきた。先程までの憎悪を燃やしていた表情は鳴りを潜め、蕩けた様な顔と目に妖しい光を宿しながら俺に抱きついて来る。

「貴女達に捨てられたけど、私はこの人に拾ってもらえた。私の事を必要だと言ってくれる人に出会う事が出来た。ボロボロになって汚い私の事を優しく抱き締めってくれる人に出会えたの」

そう言いながらリーゼロッテは首に巻かれていた包帯を外す。彼女の首筋には俺が付けた噛み傷が残っている。時間が経ったので瘡蓋が出来る程度までは治っているが、魔法で治療しない限りは完治するまでもう暫く時間が掛かるだろう。

「……ありがとう。私の事を捨ててくれて」

自身の首筋に付けられた傷跡首輪を愛おしそうに指でなぞりながら、リーゼロッテは満面の笑みを自分の事を捨てたリーゼアリアに向けた。

「ああ……!!嘘、嘘よ嘘……こんな……こんな……!!」

「おいおい、現実から目を逸らすなよ。嘘だと喚こうが夢だと叫ぼうがこれが現実だ。お前達が彼女を捨てた、だから俺が拾った。自分のことを無価値だと蔑む彼女を抱き締めてそんなことは無いと囁いてやった。役立たずだと自虐する彼女に必要だと語りかけた。捨てないでと泣きながら叫ぶ彼女を捨てないと約束した……ああそうだ。俺からも言わせてくれ」

嘘だ嘘だと壊れた様に繰り返して自分に言い聞かせているリーゼアリアの耳元で、優しく囁く。

「……ありがとう。彼女を捨ててくれて」

「あ、うつ、あああ……ああ、あ、アアアアアアアアアアアアアア……!!!

それがリーゼアリアのトドメになった。心が折れるのでは無く、砕ける音が聞こえる。心が折れたのであれば時間を掛ければ再起する望みがあるが、砕けたのであればそうはいかない。英雄譚で語られる様な英雄、物語の主人公の様な特異性でも秘めていなければ、心が砕けた者が再起する事などあり得ない。

現に汚染された液体の拘束を解いてもリーゼアリアは暴れる素振りを見せず、狂った様に笑っているだけだ。

そのリーゼアリアの首を、リーゼロッテが手刀で跳ね飛ばす。胴体から泣き別れた首が宙を舞い、傷口からは噴水のように勢い良く血が噴き出す。それだけでは足りないのか、リーゼロッテはリーゼアリアの身体を踏み潰した。

肉を砕き、骨を砕き、内臓を砕き……何度も何度も、リーゼアリアがいた痕跡など残さないつもりなのか、必要に彼女の身体をグチャグ

チヤにすり潰しー数分掛けてリーゼアリアの首から下を、全てミンチに変えた。

「お疲れ様、気分はどうだ？」

「……すつごく清々しい。でも、ちよつとだけ悲しい、かな？」

「まあ、血肉を分けた姉妹を殺したんだ。いくら憎んでいるとは言え、多少は罪悪感があってもおかしくないわな」

ミンチになった肉片を、死体から飛び散った返り血を浴びながら姉だった物の中心に立っているリーゼロッテはー泣いていた。後悔をしている様には見えないが肉親であるリーゼアリアに手を掛けた事を悲しんでいるのだろう。

「ほら、顔血だらけだぞ？」

「だ、ダメ!!汚れちゃうから!!」

「お前が汚れたままの方が俺としちゃあ問題なんだよ」

生憎と拭ける物を持ち合わせていなかったのでバリアジャケットであるコートでリーゼロッテの顔を拭う。彼女はそれを申し訳ないと思っているのか拒絶しようとしていたが、そんな事よりも彼女が汚れたままにいる事の方が許せないので彼女の言葉を強引に押し切つて顔を拭く。

幸いな事に乾く前に拭う事が出来たので、リーゼロッテの顔は綺麗になった。

「ん、綺麗になったな」

「ご、ごめん……でも、ありがとう」

「気にするな。お前は俺の者なんだからな」

彼女の顔は綺麗になったが、血は全身に浴びているので髪や服はま

だ汚れたままだ。このままでいられて変な病気になられても困る。

「よし、帰って風呂に入ろうか」

「うん!!……そ、その……一緒に入ってくれる?」

「あー……うん、良いぞ?」

愛歌に知られれば間違いなくお仕置き案件なのだが、こうして肉親を殺したのだから褒美の1つでもやらなければダメだろう。

後で愛歌に謝る事になるなあと考えながら、猫の尻尾を振って喜びを露わにしているリーゼロッテの姿を見ていた。

surprise party

「目え閉じたか？」

「閉じたけど……いい、居なくならないよね!？」

「居なくならないから安心しろって……お湯かけるぞ」

口頭でリーゼロッテが目を閉じた事を確認して、頭からお湯をかけてシャンプーを洗い流す。度重なる拷問と家族と呼んでいた者たちから裏切られたショックで白くなった髪はリーゼアリアの血肉で汚れていたが、綺麗に洗い流す事が出来た。返り血で汚れた服はすでに燃やして証拠隠滅してある。新しい服を買わなければならなくなつたが、タナカから定期的に送られてくる金は使い切る事が出来ずにより余っているくらいなので問題にならない。

管理外世界から地球に戻り、俺はリーゼロッテを連れて家に帰つた。管理局の護衛たちは魔術と先に帰っていた桜木の財宝で催眠状態にしてリーゼロッテだと認識する事が出来ず、更に元から家に居た地球の人間だと誤認させている。加えて彼女の事をアースラにいる管理局員たちには口外しない様に暗示をかけているので直接家に来られない限りはバレることはないだろう。

その場合はリーゼロッテには猫になった状態で隠蔽効果付きの財宝を装備してもらおう事しているので心配はしていないのだが。

「次は背中流すからな」

「うん。あつ!!ま、前は自分でやるから!!」

「そうしてくれ」

流石に前まで洗うとなつたら俺の理性が削られるので御免被りた。イレインの方がリーゼロッテよりもスタイルは良いのだが自立

人形で無機質な為に欠片も性的な興奮を感じる事はない。しかしリーゼロッテは有機質、つまりちゃんとした肉の身体を持っているのだ。触れれば暖かな体温を感じる事が出来るし、肌は張りがありながらもとても瑞々しい。胸だってスポーティーな女性だと捉えれば、バランスの取れたサイズでポイントの1つとなる。

残念ながら精通していないのでジュニアは少しも反応する素振りを見せてくれないのだが。

タオルにボディーソープをかけて泡を立て、リーゼロッテの背中を洗う。泡で見え隠れする背中をよく見れば、そこには俺が付けた傷以外にも古い傷がいくつも付いていた。長年、管理局でギル・グレアムの使い魔として従事していたのでその最中に負ったのだろう。

「……ゴメンね、こんな醜いの見せちゃって」

「醜いとは思わないけど？ 跡になる傷を付けるほどに頑張ってきたっていう証なんだ。それを感じしても蔑むなんて絶対にしないさ」

俺が洗脳したので管理局に離反したが、だからといってリーゼロッテが管理局に勤めていたという過去まで否定するわけではない。過去とはその人間がこれまで生きてきた証なのだから、否定してしまえばその人間のこれまでを否定することに繋がる。

背中を洗う手を止めて、一番大きな傷跡をなぞる。そこは敏感になっっているのかなぞられた事でリーゼロッテが艶やかな声をあげかけて堪えるが、それが余計にエロい。

だけでもジュニアは反応してくれない。

「と、終わったぞ。あとは自分でやってくれよな」
「うん」

「へいカモーン」

リーゼロッテに使っていたタオルを渡し、愛歌が先に使っていた浴槽に入る。普段よりも高めの温度でお湯を入れておいたのだが、一仕事終えた後の身体にはその高めの温度が嬉しい。

実は現在、リーゼロッテと2人つきりではなくて愛歌も一緒に風呂に入っている。帰ってきてリーゼロッテの事を紹介し、復讐を果たしたご褒美として彼女と風呂に入る事を正直に愛歌に明かした。初めは愛歌ちゃんウィップが高速でスイングされるほどに荒ぶっていたのだが、リーゼロッテの事を考えればそれは仕方がないと落ち着きを取り戻し、それなら自分も一緒に入ると言い出してこうなったのだ。

流石に全裸で入ることはまだ恥ずかしかったのか、学校指定の紺色のスクール水着を着ての入浴だが。ちなみに俺もトランクスタイプの水着を着て入浴しており、この場で全裸なのはリーゼロッテだけだったりする。

「ほら、御覧なさい両夜。あの雌猫、揺れる乳を持つてるわよ……ガツテム」

「落ち着け」

一人で身体を洗っているリーゼロッテの揺れる胸を見てセルフでダークサイド愛歌ちゃんにレボリューション仕掛けていたのを止める。リビングで暴れられても多少不便になる程度で済むのだが、流石に風呂場で暴れられたら直るまでの間風呂に入る事が出来なくなってしまう。

「ほら、その……なんだ、まだ希望はあるからな？今の段階で胸に憎しみを抱くんじゃねえよ」

「言い淀んでる時点で希望なんて無いんだけど」

「そんなに大きな胸が良いの？これって動くのに邪魔になる時があるんだけど……しかも最近また大きくなったみたいだし……」

「……」
「そこまで!!それ以上は愛歌がダークサイドに落ちるからな!!この話題はここまで!!」

腕を組むようにして自分の胸を持ち上げるリーゼロッテを見て愛歌の目から光が失われる。手を置いていた浴槽の縁が握力でヒビ割れているのを見る限り、これ以上この話題を続ければ殺意の波動に目覚める事になるだろう。

これはこうなると分かっていた筈なのに一緒に入ると言い出した愛歌が悪いのか。それともイレインとは違って無意識で煽っているリーゼロッテが悪いのか。

リーゼロッテが身体に付いていた泡を流しているのが見えたので詰めてスペースを空けて入るように促す。今は大人の姿では無くて子供の姿なのだが、流石に子供2人と大人1人も入れば狭くなってしまう。それでも一応入ることは出来る。

リーゼロッテに俺が背中から寄りかかり、愛歌が俺に背中から寄りかかっている形ではあるが。そんな姿勢になっているせいで頭にはリーゼロッテの胸が押し付けられる様な形になっている。

「両夜、おっぱい枕はどうかしら?」

「超最高……ハッ!」

「ぐ、ゴメンね?こんな押し付ける感じになって……」

「溢れる……!!高まる……!!」

「止めるよ」

愛歌ちゃんウィップが出現しかけていたので後ろから抱き締める

事でそれを阻止する。彼女の顔が赤くなり、体温が高くなった様に感じられるのはお湯だけのせいでは無いだろう。

「それにしても……アクロって本当は子供だったんだね？」

「変身魔法でちよちよいとね？それと、家に居る時と子供の姿でいる時は加賀美両夜の方で呼んでくれ。バレない様に色々とやってるけど、用心するのに越したことはないからな」

「カガミリョウヤ……そ、それなら、リョウヤって呼んでも良いかな？」

頷く事でそれを認めると、リーゼロッテは嬉しそうにリョウヤリョウヤと繰り返しながら抱き締めてきた。初対面の時は負けん気が強くてカッコいい系の女性かと思っていたのだが洗脳の影響なのか、それともこちらが素なのか、こうした可愛い所が目につく様になっている。

「……カッコいい系かと思ったら可愛いじゃない」

「だろ？俺もそう思った」

「か、可愛い!?そんな事ないって!!私なんて短気だし、男勝りな性格だし……」

「猫耳垂らしながら落ち込んでる所が可愛いのよ!!しかもあざとさが感じられないってことはこれ天然でやってるわね!?反則よ!!こんなの反則だわ!!」

「アリアの方じゃなくてリーゼロッテの方を捕まえて本当に良かったと心の底から思ってる」

「あうう……!!」

愛歌も彼女の可愛さに気がつく事が出来たようでしばらくの間、リーゼロッテは可愛いコールが浴室に響き渡り、それを聞かされ続けた彼女がずっと恥ずかしそうにしている光景が続いた。

《えっと、これが聞いてた念話チャットってやつなの？本当に文字が見えるんだ》

《今日から念話チャットに参加する俺の手駒のリーゼロッテだ。みんな仲良くするように》

《はーい》

《はーい》

《了解致しました……ところで加賀美様、三味線に興味が出たのですが》

《作っても良いけどリーゼロッテに手を出すなよ？出したら分解して粗大ゴミに出してやるから》

夜、愛歌と猫に変身したリーゼロッテと一緒にベッドに入って念話チャットを開く。愛歌からのヘイトは風呂場の一件で幾らか緩和することが出来たのだがイレインは自分の従者ポジションが奪われるのではないかと考えているようで未だにヘイトが高い。イレインの役割は家事全般と万が一の護衛役、リーゼロッテは魔法関連と被っていないのだと教えてあつた筈だが。

《さて、次のターゲットはギル・グレアムだな》

《なんか名前がギルっていうだけでムカつくんで惨たらしく殺してくれるとありがたいんですけど》

《桜木様と若干名前が被っておられますからね》

《殺す、絶対に殺す》

《殺すのは良いのだけど、どうやってそこまで行くつもりなの？自分

の手駒が使えなくなった事は向こうだって気がついていてしょうし、管理局の本部にいるのでしょうか?》

リーゼロッテの復讐の手伝いをするよと決めた以上、ギル・グレアムは死ぬ以外の結末は存在しない。問題なのは愛歌の言っているようにどうやってギル・グレアムの元まで行くのかだ。

桜木によればギル・グレアムは管理局の中でもそこそこのポジションに就いているらしく、年老いた今ではほとんど前線に出るような事はない。リーゼアリアの時のように俺を囚にして引つ張り出すという手段が使えないのだ。

《しかもリーゼ姉妹がやられた事に警戒して今回の復讐を諦めるまでありますかね。一筋縄ではいかないですよ》

《ここは本部に乗り込んで始末するのが一番だと提案します》

《いやいや、それはちよつと無茶だと思えますよ? 仮にもいくつも世界を管理している管理局の本部です。侵入者にだって警戒している筈ですよ》

《いや、ここはイレインが言った通りに本部に乗り込む事にするわ》

《ファツ!?!》

《リヨ、リヨウヤ? そんなに無理しなくても、時間をかけて隙を伺えば良いんじゃないかな?》

《外見に関しては大人の姿で制服着ればいけるし、セキュリティだってハスターでハッキングが出来るし。それにギル・グレアムだって間抜けじゃない。自分の使い魔がやられた事からもしかして自分が狙われてるんじゃないかと察してしまうかもしれない。そうなら下手に時間をかけてどこかに雲隠れされるよりも、多少は危険でも居場所が分かっているうちに殺した方が楽なんだよ。これ、俺の経験則な》

リスクは承知の上だが、それでも居場所の分かっている内にギル・

グレアムは殺してしまいたい。

可愛い可愛い俺の手駒が殺したいと叫んでいるのだ。主として、彼女の願いを叶えてやるのは当たり前前の事なのだから。

「ほお、あれが時空管理局の本部か」

『あれ？リョウヤつてミッドに来たこと無かったの？』

「前にミッドチルダに来た時は廃墟区画の方に入り浸ってたからな。こっちの普通の都市部に来るのも、本部を見るのも初めてだ」

リーゼリアの殺害の翌日、俺はリーゼロッテを連れてミッドチルダに来ていた。ギル・グレアムの殺害を計画しているのだが、肝心な本人に関しての情報が桜木の覚えている知識とリーゼロッテからの情報しか無いのだ。それに加えて時空管理局の本部に関しての立地的な情報も持っていないかったので、実際に現地に訪れて確認する事にしたのだ。

学校に関してはタナカの関係で日本を少し離れる事になったと説明して始業式まで休む事にしてある。普通なら疑われそうなのだが俺の授業態度が真面目だった事と、我が家の表向きの家庭事情により疑われる事なく休むことが出来た。クロノにもそれを説明し、緊急時には転移する事を条件に休みを勝ち取る事に成功した。

ミッドチルダの商業区画にあるデパートの屋上、そこに設置されている望遠鏡で遠く離れた場所に建てられている時空管理局の本部を見る。流石に幾多もの世界を管理している組織というだけはあつて建物の規模は大きい。パッと見ただけでも一般用に解放されている区画や職員だけが立ち入ることの出来る区画、そして限られた者しか知らされていない区画がある事が伺える。

リーゼロッテと桜木の話によればギル・グレアムは闇の書の件以外には暗い事をしていないそうなのでそういった類の区画には出入りしていないだろう。いるとするなら職員だけが立ち入れる区画の自

分の仕事部屋だろうか。

「成る程成る程。よし、外見は大体理解した。次は近くに行ってみるか……服装、大丈夫だよな？」

子供姿で平日に出歩けば補導されるのは目に見えていたので大人の姿で怪しまれる事が無いようにバリアジャケットのデザイン変更機能を使ってダークグレーのスーツ姿に中折れ帽を被っている。顔はアクロ・ダカーハの……つまり成長した俺の物だが、仮面で隠しているので素顔で出歩いててもバレる事は無いだろう。

リーゼロッテは顔バレしているので人の姿ではなく猫の姿になって俺の肩に乗ってもらっている。元は茶色の毛並みだったが、髪と同じ白色に変わっているのを見た事のある人間が見ても彼女だと気づく事は無いだろう。

『流石に近くまで行ったら声を掛けられるだろうけど、観光ですって言えば大丈夫だと思うよ？別の世界からの観光客もいないわけじゃないし』

「それは良かった。最悪、後先考えずに直接乗り込む事になるところだった」

『私としてはあの男を殺せたらどうでも良いのだけど』

「将来的には敵対する事になるけど、流石に今行動を起こすには準備不足過ぎる。俺は嫌だぞ？管理局に押し入ってギル・グレアムを殺す事が出来たとしても、何百人って言う局員に囲まれるなんて」

『あー……確かにそれは厳しいね』

ギル・グレアムを殺すという目的があるにしても、今の段階で管理局と事を構えるのは得策では無い。ある程度戦えたとしても、最終的には数の暴力に押し潰されるのか目に見えている。それに本部ともなれば襲撃される事を警戒して高町クラスの魔導師が警備を担当し

ていてもおかしくは無い。質と数が揃えられている以上、考えなしに行動を起こした所で無意味なのだ。

「予定通りに今日は情報の収集だ。殺してやりたいだろうけど我慢してくれ」

『分かっているから安心して。一人で突っ込むような事はしないから……す、捨てないでね!?!』
「捨てるかよ、バーカ」

ふとした事ですぐに捨てられるのでは無いかと不安になるリーゼロッテの姿に苦笑しながら、安心させるために彼女の身体を撫でてやる。若干クセが付いている毛並みだが、肌触りは良くスルリと指が通るのが心地よい。

耳元で気持ち良さそうに鳴いているリーゼロッテの毛並みを味わいながら、ギル・グレアムを殺す為の手段を頭の中で考えていた。

「分かっていたつもりだったが、警備厳しいなあ……」
「あっち側だった時はそう思わなかったけど、こうして敵になってみると厄介だね……」

夜、管理局の偵察を終えて借りていた安宿のベッドの上で集めた情報を整理しながら、改めて強大な組織を相手する面倒さを体感していた。

今日の警備は確認出来ただけでも人間と魔法、そして機械のセンサーで外部からの侵入は完全にシャットアウトされていて、こっそりと侵入する事は不可能。唯一、一般向けに解放されている区画はその限りでは無いのだが、それ以上先に進もうと思えば局員が持っているIDが必要になっている。無理やり越えようと思えば超えられるのだが、その場合は配置されている魔導師たちが即座に出動するのが目に見えているので実質不可能である。

一応リーゼロッテがそのIDを持っているので入ろうと思えば彼女だけ入る事は不可能では無い。しかし彼女は俺に依存しているので、復讐の為だとはいえ俺から離れる事はしたがないだろうから却下である。

「現実的なのはIDを偽造しての侵入って所だな」

「でも、どうやって偽造するの？」

「アテはある事にはあるんだけどなあ……」

盗聴器や監視カメラなどが無い事を確認し、人の姿になったリーゼロッテに子供の姿で寄りかかって背凭れにする。

一番現実的な手段であるIDの偽造が出来るアテはある事にはある。管理局の上層部に飼われているジェイルならば上を通じて作る事が出来るだろうし、そもそもハッキングして架空の存在を作り上げる事だって出来るだろう。だが、そうしてIDを入手し、ギル・グレアムを殺したらジェイルがやったのではないかと疑われてしまう。それだけで済めば良い方で、最悪は上層部に見限られてる可能性がある。そうなればstrickers編に繋がるかどうか不明だし、愛歌に方が一があった時に設備不足で助からなかったなんて事もありえる。

「だったら、本部から出たところを狙うってのは？」

「ありはありなんだけど、出てくるか怪しい。最近家は帰ってないみたいだしな」

管理局の下見を終わらせた後にその足でギル・グレアムの家に向かった。いくつかのセキュリティがあつて防犯対策がされていたが、元とは言えその家に暮らしていたリーゼロッテのお陰ですべてを無視して家に入る事は出来た。家自体はハウスキーパーでも雇っているのか綺麗に掃除されていたが、冷蔵庫の中身や郵便物を確認した限りではしばらくの間、家に帰っていないようだった。自分も狙われていると警戒しているのか、それとも純粋に仕事が忙しくて帰っていないのか判断が難しいが家で待ち伏せするというのは却下。加えて、リーゼロッテの言っていた案を考えつき、家に放火してボヤ騒ぎを起こしてみたのだがギル・グレアムが管理局から出てきた様子は無かった。

重ねておいたギル・グレアムが集めていた上物の酒を一つ開けて一息つく。

「……兎も角、情報が欲しいな。ハスター、管理局にハッキングは出来るか？」

『可能ですが逆探知される可能性もあります。いくつかのサーバーを経由してアクセスしてみますが絶対にバレないとは言いません』
「十分、取り敢えず中の地図と局員の勤務表を見つけてくれ。リーゼロッテは休んでて良いぞ？」

「リョウヤも休まないとダメだよ？ マナカからちゃんと寝るように言われているの忘れたの？」

「あー……そうだったなあ……」

俺がミッドチルダに行く事を決めると、愛歌はリーゼロッテに俺の世話を頼んだのだ。どうやら昨日のやり取りだけで彼女は俺に対し

て好意では無く依存しているだけだと気がついたようで、珍しく悔しそうな顔をせずにいつもの様子で話しかけていたのが印象的だった。

「徹夜して明日一日寝るってのは駄目？」

「ダメ。中身は兎も角、リヨウヤは子供なんだから。ちゃんと寝ないと大きくなれないよ」

『私としてもマスターには最低6時間程の睡眠を取っていただきたいです。それに、今日は一日中マスターは歩きっぱなしでした。情報の収集と整理は私がしておきますので、マスターはお休みになつて下さい』

「畜生、味方がいない」

「リヨウヤ、私は貴方の道具だから貴方の心配をしているの」

『私としてもマスターの体調が悪くなるような事は避けたいですから。それと、風邪でも引いて帰ったら愛歌様が怖いですよ？』

「はあ……」

ハスターとリーゼロッテが俺に作業をさせずに休ませようというのが純粹にこちらの身を案じての発言だから強く言い出すことが出来ない。これが少しでも敵愾心が混じっていれば無視していたのだが。

深々と溜息をついて、頭を搔く。そうして彼女たちを言い聞かせて作業をするよりも、いう事に従った方が良いと判断して、全身の力を抜いた。

「なら、休ませてもらおうわ。リーゼロッテも休んどけよ？もしかしたら明日になったら良い考えを思い付いて即実行つて事になるかもしれないしな」

「分かってるよ」

『それでは2人とも、お休みなさませ』

「ああ、お休み」

「お休み」

そのままリーゼロッテと共にベッドに横になり、部屋の電気を消す。いつもなら寝るときは愛歌の事を抱き締めて寝ているのだが、今日に限ってはリーゼロッテに抱き付かれる形になっている。

愛歌を抱き締めて眠る時の暖かい者を抱き締めながら寝るのは違う、暖かい者に抱き締められている感覚にむず痒さを覚えるが、これはこれで悪くないなと思いつつながら微睡みに身を任せることにした。

「リーゼロッテ、制服は大丈夫か？」

「んっ……ちよつと胸がキツイけど、大丈夫」

ミッドチルダの大通りから外れた路地裏。人気の無いそこで、俺とリーゼロッテは时空管理局の制服に着替えていた。俺の方はサイズはピッタリなので問題なく着ることが出来たが、リーゼロッテの方は少し胸のサイズが合っていないかったようでも悪戦苦闘しながらも制服を着る事に成功していた。一応リーゼロッテのスリーサイズを聞き、ハスターのハッキングによって得た局員の個人記録を元にしていただけがどうやら成長していたらしい。

この事を愛歌に話したら暴走間違い無しなので胸にしまっておく事にする。そう考えながら、人間2人分の肉塊が入ったポリバケツの蓋を閉める。

管理局に潜入するに当たって必要不可欠なのはIDと管理局の制服だった。ID自体は既存の物を強奪してハスターのハッキングで顔写真を俺たちの物に差し替え、奪われた事に気付かれる前に使えば良い。制服に関してはどこかで作ってもらおう事を考えたが時間が足りず、さらに管理局の制服という特殊な物を求めている客が居たという情報を残したくなかったのでIDと一緒に強奪する事に決めたのだ。

昼過ぎで外食の為なのか外に出歩いていた男女の局員を路地裏に誘き寄せ、制服が汚れないように気絶させてから始末するだけの簡単なお仕事だった。殺す必要がないと思うかもしれないが、意識が戻って制服とIDを強奪された事を報告されると困るので殺す事にした。

「それにしても……リョウヤはその、独特だね？」

「言葉を濁さずに似合わないと言ってくれて良いぞ。どういうわけか黄色を除いて黒っぽい色しか似合わないんだよなあ……」

管理局の制服は紺色の物なのでもしかしたらと思ったがリーゼロッテの反応を見る限りでは駄目らしい。今回は必要なので我慢して着るが、事が終わったらさっさと処分する事にしよう。

反対にリーゼロッテは管理局の制服を見事に着こなしていた。前は管理局に所属していたからというのもあるだろうが、服に着られているのでは無くてちゃんと着こなしている。胸が苦しいのか時折胸元を弄っているが、その動作でも妙な色香を漂わせている。流石にそのままでは彼女の事を知っているもの達にバレてしまうのでウィッグを付け、化粧を施して変装をしている。今の彼女なら、知り合いに出会ったとしてもリーゼ姉妹に似ている女性としか認識されないだろう。

気休めにミッドチルダの露店で買ったサングラスを掛けてみる。

「これならどうだ？」

「うーん……なんとかセーフって感じ？それで、これから管理局に侵入するんだよね？」

「ああ、ハスターのハッキングが成功したらだけだな」

「本当に大丈夫なの？これまでのほただデータを見てるだけだからバレなかったかもしれないけど、流石にデータの改竄は見つかりそうだけだ」

「そうだったらそうなったで考えはある。それに、ハッキングくらい気にしてられない程の騒ぎを起こすからな」

一応作戦は考えてはあるが、細かな部分はリーゼロッテには明かしていない。これは別に彼女を信用していないからでは無く、伝える必

要が無いと判断してだ。

「さて、本部までは歩いて移動するぞ。ちよつとした散歩……いや、制服デートって言っても良いかもな」

「で、デートって……!! マナカにバレたら怒られるよ!!」

『マスター、愛歌様からメッセージが届いていますー！分かっていくわよね?との事です』

「遂に次元を超えるまで至ったか……!!」

愛歌の進化が別次元に天元突破しているようにしか思えない。メッセージの内容からして、そういう事があつたかもしれないという予感では無く、そういう事があつたと確信しているのが分かる。

帰ったら何をされるのか恐怖で体が震えるのだが、それでも止めるわけにはいかない。変に距離感を感じさせれば不自然に思われて印象に残ってしまう。ギクシヤクした2人組と親しげな2人組、この2つを比べると後者の方が好印象に見えるし、容疑者探しの段階で外れ易くなる。俺たちがこれからやる事を考えれば、疑われる可能性は少しでも減らしておいた方が都合なのだ。

だから、愛歌からのお仕置きを覚悟する為に溜息を吐きながらリーゼロッテに手を差し出す。

「ほら、行くぞ。背中を曲げるなよ? 挙動不審だと怪しまれるからな」
「え、あ、う、うん!!」

混乱しているのか慌てているのか、若干どもりながらも差し出した手を掴んだリーゼロッテに苦笑しながら裏路地から大通りへと出た。

徒歩で十数分程かけて管理局にたどり着く。制服に着て変装しているからか周りからは怪しまれる様子は無かったが、周囲からの温かい目線が気になった。恐らくは手を繋ぎながら歩いているのと恥ずかしそうにしているリーゼロッテの姿からそういう関係なのだと思いますのだらう。変に目立つ事にはなったが、怪しまれた様子はなかったのでこれで良しとする。

道中で胸を押さえながら倒れる男性や、苦悶の声を上げながら泣き崩れる男性の方が気にはなったが。

「ハスター、どうだ？」

『リーハッキング、及び写真の差し替え完了。セキュリティに気づかれた様子もありません』

「それは良かった。どうやらこれは脅しに使うだけで良さそうだな」

ハッキングが気づかれた場合、管理局を混乱させてその間に侵入するプランを考えていたのだが成功したようなので使わなくて済みそうだ。そちらの方が簡単に侵入することは出来そうだが警戒されて今後同じ手段で侵入する事が出来なくなってしまうので使うのは控えたかった。

「良し、行くぞ」

「ふう……うん」

心を落ち着かせる為に深く息を吐き出したリーゼロッテは、次の瞬間には気持ち切り替えていた。さっきまでの恥ずかしそうにして

いる素振りは欠片も見せることなく、実に堂々とした立ち振る舞いである。

正面玄関からエントランスに入り、奥に設置されているゲートを目指す。あれを潜ることで所持しているIDと管理局のデータベースでの照合が行われ、一致しなかったりそもそもIDを持っていないかったら警報が鳴って全ての入り口がロックされる仕掛けになっているとリーゼロッテは言っていた。もしもそうなってしまえば管理局の全戦力との戦闘が始まる事になる。

そうなたら厄介だなあ、と多大な緊張と若干の高揚を覚えながらリーゼロッテとともにゲートを通過する。

潜り抜けてもシステムが反応する様子は無く、出入り口がロックされているように見えなかった。つまり、これで最初で最大の難関を超えた事になる。

警備が厳重であろうが中に入ってしまえばそれらは全て意味をなさなくなる。すれ違う管理局員たちも俺たちの事を同僚だと思っっているのか擦れ違いざまに挨拶をする程度の反応しかしてからず、疑っている素振りを見せない。それを見る限り、リーゼロッテの事も気づいていないようだ。

最も、何人かが彼女の胸をチラ見して鼻の下を伸ばしたり、自分の胸を見て表情が抜け落ちていたりしていたが。

「いやいや、これを使わずに済んで良かった」

「何それ？ スイッチ？」

「ミッドの発電施設に仕掛けておいた爆弾の遠隔装置」

通り過ぎる人が居なくなっただけでポケットから出したスイッチを

回して遊んでいたらリーゼロッテに聞かれたので正直に答える。もしもの時にはこれを使つて発電施設を破壊し、その際に生じる混乱に乗じて管理局に侵入するつもりだった。

「……えげつないね」

「安心しろ、自覚はしているから。嫌がらせっていうのは相手が一番嫌がる事をしなきゃ意味が無いんだよ」

魔法至高主義を掲げているとはいえ、ミッドチルダの文明を支えているのは機械だ。重要な施設になれば個別に発電装置を備えているかもしれないが、それ以外は発電施設から送られてくる電気が無ければ今の生活は成り立たない。しかも魔法による操作ではなく、純機械による遠隔操作なので妨害される心配も無い。魔法による犯罪の対策はされているのにこういう質量兵器への対策が甘い辺り、管理世界というのは本当に歪だと思わされる。

その後、リーゼロッテの案内の元でギル・グレアムがいるであろう部屋に辿り着く。途中で局員に所在を訊ねたところ、ここ最近はずつと与えられた仕事部屋に籠っているらしく、今日も居るのではないかと教えてくれた。

引きこもっている理由が脅えているのか、それとも俺たちが来ることを確信して待ち構えているのか分からない。出来ることならば後者であると嬉しいんだけどなあ、と考えながらノックをする。

「……入り給え」

低く、それでいて落ち着いた男性の声に失礼しますと返して扉を開け、リーゼロッテと共に部屋に入る。

ギル・グレアムの部屋は思っていたよりも質素なものだった。来客

用のソファーと観賞用の絵画、そして観葉植物が置かれているがそれだけで飾りっ気が無い。そして一番奥に置かれている執務机には空中にいくつものモニターを投影しながら作業をしている初老の男性がいた。

その男性を見た瞬間、リーゼロッテが激昂しながらもそれを理性で押さえ込んだのを感じた。その反応だけで、あの初老の男性がギル・グレアムであると判断するには十分だった。

そしてギル・グレアムもまた、入室した俺たちを視界に入れた瞬間にリーゼロッテには変装しているリーゼロッテを見た瞬間に身体を強張らせ、何かを悟った様な表情になって深く息を吐き出して脱力した。

「……そうか、次は私の番なのだな」

「理解してくれた様で話が早い」

ここまで来れば隠している必要は無くなった。サングラスを外して胸ポケットにしまいながら来客用のソファーに腰を下ろしてテーブルの上に組んだ足を乗せる。

「初めまして、ギル・グレアム顧問官殿。俺はアクロ・ダカーハ、ぶち殺しに来ただけど興味が湧いたから少し話しようや」

「ああ、構わないとも。だが少し待ってくれるかね？今引き継ぎのあれこれをしている最中なのだ」
「了解」

俺の返事を聴くとギル・グレアムは再びモニターを操作する作業に戻った。もしかしたらあれを使って外部と通信を取っているのかもしれないが、それを気にすることなくソファアに座ったままで正面に掛けられている絵画を眺める。

「……いやいやいや、それで良いの!？」
「良いんだよ。あいつ、死ぬ事を覚悟しているからああして引き継ぎの作業をしてるんだぜ」

でなければああも忙しくモニターを操作している理由にならない。もしも彼がこれから先生きるつもりなのなら急いで作業をする必要などなく、すぐに俺との話に移って時間を稼げば良いからだ。

ギル・グレアムは死ぬつもりでいるからこそ、それによって生じる混乱を最小限にとどめるために作業を急いでいるのだ。

「でも作業をするフリをして外に助けを呼んでるんじゃないや……」
「部屋に入った時点でそれをさせないようにしているから大丈夫だよ。外部への通信は魔法でも機械でも出来ないようにしてある」

リーゼロッテは気がついていないようだが、俺がこの部屋に入ると同時に部屋全体を囲うようにして悪性情報を含んだ魔力を張り巡らせている。魔法を阻害するという特性上、念話を用いての連絡は不可能。更にいつものように濃度を意図的に薄めていないので物質に

も影響を及ぼすレベルであり、壁の中に通っている電話線は今頃グズグズになって使えなくなっている。

「何？それは本当か？」

「本当だとも。気になるなら試してみるといい」

「ふむーテストテスト、放送テスト。レジアス・ゲイズ中將は最近、〴〵みっどつと〴〵という店で赤ちゃんプレイにどハマりしている……成る程、本当の様だな」

「さらにと誰かの性癖バラさなかつた？」

「レジアス・ゲイズって、陸の防衛長官じゃない……!!」

「防衛長官が赤ちゃんプレイにどハマりしてるのか……」

「どうやら陸のぞんざいな扱いにストレスが溜まっている様でそうやって発散しているらしい。ちなみにこれが証拠写真だ」

目の前にモニターが現れ、そこに涎掛けとおしゃぶりにオムツ装備の中年男性が小学生くらいにしか見えない体格の際どい格好の少女に膝枕をされながらあやされている写真が映し出される。非常に汚い絵面だが赤ちゃんプレイに勤しんでいる中年男性はすべてから解き放たれていると思ってしまうほどに無邪気な笑顔を見せ、それに付き合っている少女も外見からでは不釣り合いな程の慈愛に満ちた笑みを浮かべていた。

それを指差しながらリーゼロッテの方を見れば、彼女は顔を覆い隠しながら頷いて中年男性がレジアス・ゲイズという人物である事を肯定した。

あの格好に赤ちゃんプレイ対応というところを見るに、恐らく彼らがいる場合は風俗店の類なのだろう。つまり、あの小学生くらいにしか見えない少女はしっかりと成人しているという事になる。

合法ロリにバブみを感じてオギやる中年男性とかちよつと情報量

が多過ぎてついていけない。

「なんでこんな社会的に抹殺出来る写真持つてるんだよ。あれか？このオッサンの尻でも狙って弱みを探してたのか？」

「そんなわけあるか。私の目的を達成する為に必要になるのではないかと思っ張り巡らせていた情報網に引っかけただけだ。まあ、思いの外業が深すぎて扱いに困っていたのだがな」

そう言われれば頷くしかない。桜木とリーゼロッテから聞いたのだが、ギル・グレアムの目的は闇の書の完全封印。その為にグレイゾーンを飛び越えて完全に違法行為に当たる事にも手を出していると言っていた。目的を果たしてからバレるのなら兎も角、果たす前に計画がバレてしまえば犯罪者として捕まってしまう。それを防ぐ為の手段として取引に使えそうな材料を集めている最中に得てしまったのだろう。

「バブアス中將のことは置いておいてだ。待たせた、引き継ぎは終わったぞ」

「折角忘れようとしたのにほじくり返してるんじゃないやねえよ」

ただの脅迫写真として処理しようと思っただけだがバブアス中將という呼び方で笑いそうになってしまう。リーゼロッテも顔を覆い隠しながら肩を震わせている。表情が分からないのでそれが笑いを堪えているのか、それともショックを受けているのかは判断出来ない。

「っつか早かったな。そんなにやる事少なかったのか？」

「いや、今日までで進めていたから早く終わったただけだ。アリアからロッテとの連絡が取れなくなったと聞いた時からこうなるのではないかと思っただけ」

流石は長年の間管理局に勤めているだけの事はある。リーゼロッテとの連絡が取れなくなつたその瞬間から、直感的に自分の死を予想してその後の為に行動を始めていた様だ。とんでもなく優秀であるのだろう。顧問官という役職に就いているが調べた限りでは闇の書の完全封印の件以外では後ろめたい事にも手を出しておらず、完全に自分の実力だけでその地位まで上り詰めている。

「酷い目に合わせられているのではないかと心配していたのだが……」

「……私を見捨てたくせに心配していただと!!ふざけるな!!」

犬歯を剥き出しにしながら怒りを露わにするリーゼロッテだが、ギル・グレアムは怒気をぶつけられても慌てる事なく、取り乱す事なく、それは当然だろうと静謐にその怒りを受け止めていた。

「否定はしない。私はアリアから君が捕らえられていると教えられた時に、彼女に君の事は知らないと言うように指示を出した。それが事実だ。今更助けるつもりだったなどと言ったところで、言い訳にしかならないだろう……それを君は望んでいるのか?そうならば幾らでも語らせてもらおうが?」

「ッ……!!」

「待て」

ギル・グレアムの物言いに激昂し、衝動的に殺しそうになったリーゼロッテを言葉だけで止める。何故止めると彼女は視線だけで訴えていたが、何も言わずに睨み返せば数秒後に苛立たしげに鼻を鳴らして一歩後ろに下がった。

「悪いな、直ぐに終わるから」

「……どうやら、ロッテは新たな主人を見つけた様だな」

「使える手駒が欲しかったものでな、じっくりゆっくりと洗脳させて

こつちに引きずり込ませてもらった。罵詈雑言は受け付けるぞ？」
「……いや、こうなる事を予想して防ぐ手立てを用意していなかった私の不手際だ。何を言ったところで負け犬の遠吠えに過ぎん。それに……洗脳されたと言っているが、ロツテは自分の意思で君に従っている様だ。彼女が自分の意思で決めたのなら、私からは何も言うまい」

「娘分を取られた感想は？」

「……ブチ殺してやりたい」

隠すつもりなど欠片も無い、ドストレートな殺意のこもった言葉だった。顧問官という役職に就いて一線を退いているはずだが流石は歴戦の勇士と言うべきか、その気迫は思わず身震いしてしまいそうな程に荒々しく、そこいらのチンピラが吐きそうな言葉だということにこいつならやりかねないという納得を抱かせてくれた。

「まあご覧の通りにあいつはご機嫌斜めだからな。グダグタと長話し出来ないんで1つだけ聞かせてくれ」

ソファアールから腰を上げ、ギル・グレアムの正面に立つ。

「ギル・グレアム、あんたは自分の行いを後悔しているか？闇の書を完全に封印する為に主に選ばれた普通の少女を見殺しにする事を、娘と言っても過言では無い存在を俺なんかに奪われた事を、娘分の片割れを殺された事を、お前が目的を果たす過程で失われる者たちを、欠片でも悔いているか？」

初めはギル・グレアムは俺の知っているガリア・オールライトと同類だと思っていた。しかし彼を見て、彼と言葉を交わし、それは思い違いなのでは無いかと考えた。もしも俺の考えている通りに答えるのなら、こいつはガリア・オールライトと同じ異常者えいゆうの素質を持っていることになる。それならばこの場では殺さず、黒須と接触させて成

長を促すつもりでいるが……

「悔いているか……君は若いから分からないかもしれないが、人生というものは後悔の連続だよ。あの時、ああすれば良かった。あの時、こうしていれば……今日まで生きていて昔を思い出す度に、やり直しを願わずにはいられない」

「リーゼロッテ、リーゼアリア、あとはクライド・ハラオウンの事か？」
「クライドの事を知っているか……いや、ロッテから聞いたのか」

ギル・グレアムがこれまで積み重ねてきた経歴を全て無下にしてまで闇の書の完全封印を目論んでいる理由は桜木とリーゼロッテから聞いているので知っている。彼は11年前に闇の書事件の際に指揮を執り、その最中でクロノの父親であるクライド・ハラオウンを死なせた事が原因で、管理局の指示ではない別の方法での完全封印を企んでいると。

「ああ、その通りだよ。クライドの事を後悔しているからこそ、私はこうして闇の書に執着している。敵討ちだなんて高尚な理由では無く、自分が楽になりたいからという低俗な理由でな」

「俺からすればそれも立派な理由なんだがな」

それにギル・グレアムはそうかもなと苦笑しながら答えた。その時の疲れ切った様な顔を見て、こいつはガリア・オールライトとは別者だと悟る。

ガリア・オールライトに同じ事を聞けば彼も悔いていると答えるだろう。だがその後で彼らの犠牲は無駄にはしないと、報いる為に良き明日を作ると宣言する。何故なら彼は英雄だから。過去を忘れる事はしないが未来だけを見て突き進み、誰かの為に生きて死ぬる、そんな人間だったから。

それに対してギル・グレアムはどうした？これまでの経歴を見る限りでは確かに素晴らしい人間なのかもしれない。しかし、過去を悔いてやり直したいと願い、誰かの為にはなくて自分の為に行動を起こしている。とてもではないが英雄とは呼べない俗物的な人間である。

だからこそ、俺は彼に敬意を抱いた。

ギル・グレアムも見ると限りではガリア・オールライトの様な異常者になり得る素質を持っている。自分を意思を貫き通し、邪魔する全てを粉碎し、己が間違いを認めながらも決めたからと前進し続ける、そんな存在になる事が出来る人間だった。

人間だったローローそう、だったのだ。素質を持っていながら、彼はそんな異常者になる事なく生きている。過去を振り返って後悔に捉われ、自分が間違っている事に気がついて苦悩している。

異常者に堕ちる事が出来たというのに、唯一無二の存在になる事が出来たというのに、彼はどこまでいっても俗物で、普通の人間であり続けた。光の輝きという、とても魅力的な輝きに晒されながらもそれに惹かれる事なく、どこにでもいる普遍的な存在である事を選んだのだ。

英雄という存在を知っているからこそ彼に対して蔑みでは無く敬意を抱いた。確かに俺は悪役で、自分の事を倒してくれる英雄を待ち望んでいるが、だからといって英雄の異常性を認めているわけではない。特別という甘美な響きに惑わされる事なく、凡夫であった彼を純粋に尊敬する。

「知りたいことは知れたかね？」

「十分にローローゼロツテ」

一言、俺の後ろで堪えていたリーゼロッテに声を掛ける。それに勘違いして飛びかかる程に感情的になっていくわけでは無いらしく、殺意を漲らせながらも彼女は行動に移さなかった。

「最後に何か言いたいことは？」

「ロッテの事を頼む。そして、闇の書の連鎖を断ち切って欲しい」
「任された。だから、死ね」

ヒュンと、俺の後ろからリーゼロッテが突貫し、手刀でギル・グレアムの心臓を貫いた。一撃で即死と分かる攻撃。だが彼女の手は止まらずに、そのまま絶命したギル・グレアムの身体を八つ当たりする様に素手で解体を始める。骨を砕き、肉を引き千切り、臓物をブチまける。

そうして数分後には部屋はギル・グレアムだった肉片と血液で真紅に染め上げられる。下手人であるリーゼロッテはどこか満足げに、しかし目からは涙を流しながら自身が模様替えした部屋を見ている。

本音を言えば早々にこの場から立ち去りたかったが、感慨深そうにギル・グレアムのいた場所を見つめている彼女の姿を見てるとそんなことは言い出せずに、彼女が満足するまでこの部屋にとどまることにした。

「悪いな、風呂借りて」

「何、気にしないでくれ。いきなり血塗れで現れてそのまま居られるのはこちらとしても落ち着かないのでね」

大人の姿から子供の姿に戻り、シャワーを浴びたせいでまだ濡れている髪をタオルで拭きながらソファーに腰を掛けてコーヒーを飲んでいるジェイルに感謝を告げる。

ミッドチルダでリーゼロッテの復讐を果たしたは良いが、今の俺は海外へと出ている設定なのでそのまま家に帰ることは出来ない。そこでジェイルの家に泊まらせてもらうことにしたのだ。一応前もって部屋を貸して欲しいと伝えてあったが、ギル・グレアム殺害直後そのままの格好……返り血やら肉片やらで汚れた姿で研究所に入った瞬間にパンダと白熊の手により浴室に叩き込まれた。

別に誰を殺そうが構わないが、汚れるから風呂に入ってこいとの事だった。

それに関しては俺からは何もいうことは出来ない。むしろ当然の反応だろうと納得し、素直に風呂を借りることにした。リーゼロッテとは離れる事になったが、泣き囁る彼女を何とか説得して別々で入る事になった。

「それで、ギル・グレアムを殺したんだって？管理局に目を付けられる事になるけど良いのかい？」

「殺したのはアクロ・ダカーハと闇堕ちしたリーゼロッテだ。加賀美両夜っていうガキは一切関係無いからセーフセーフ」

「2人が同一人物だと気が付かれたらアウトだけどね!!それにしても

ハスター君の隠蔽は凄いな。攻撃魔法を使えないとはいえ、魔法を行
使している事を一切悟らせないことが出来るとは……ちよつとだけ
バラさして?」

「お前をバラしてやろうか?」

縮地で離れていた距離を一息の間で詰め、ジェイルの首筋にレギオ
ンを突き付ける。それと同時にパンダが俺の背後を取って首筋に鋭
利な爪を突き付けたのだが無視する。

「冗談かもしれないが、言っちゃいけない冗談がある。理解してるだ
ろ?」

『Dr. ジェイル、貴方が私に興味を持っている事は理解しています。
しかし、私はマスターのデバイスなのです。AI、回路、塗装、私を
構成している全てがマスターの物なのです。なので、貴方の興味を叶
える事は出来ないで悪しからず』

「うーん、このマスターにしてこのデバイスと言うべきか……残念だ
けど、ここは諦めようか……その代わり、バラさないから調べさせ
て!!」

「ハスター、お返事は?」

『お断りします』

「ガツデム!!」

頭を抱えながら叫ぶ姿を見る限り、心の底から残念に思っている様
である。しかし、そんなポーズを取っても調べさせるわけにはいかな
いのだ。

ハスターはタナカから与えられたデバイスだ。この世界で活動す
るために必要だと判断されて用意された物だが、使われている技術は
現在の人間の技術の遥か先を行っている。ただの凡人に見せたところ
で理解する事は出来ず、ただの天才に見せたところで1%にも満た
ない劣化品を作り出すことがやっつとだろう。

しかし、ジェイルだけは違う。ハスターに使われている技術を余すことなく理解、そして把握し、完全な複製品を作り出すどころかそれらを応用して進化したデバイスを作り出してもおかしくない。そんな事をされればデバイス産業は急激な発展を遂げる事になるだろう。――急激な発展の先には滅びが待っていると知りながらも、それがどうしたと進んでいくのが目に見えている。

そんな事になってしまえばタナカからの依頼を果たすことが出来なくなってしまうし、俺の望みも叶わなくなってしまう。故に、ジェイルだけにはどんな理由があろうともハスターを見せる事は出来なかった。

「まあまあ落ち着けて。代わりにこれやるからさあ」

バカヤロオと、膝をつきながら叫んでいるジェイルの目の前にギル・グレアムから渡されたバブアス・オギヤア中将の写真を投影する。突然現れたその内容を、写っているのは誰かを理解した瞬間、ジェイルは盛大に吹き出して腹を抱えて笑い転げた。

「待って、ちょっと待って。それってレジアス・ゲイズ中将だよな？」
「レジアス・ゲイズ？誰の事だ？こいつはバブアス・オギヤア中将だ。合法ロリにバブみを感じてオギヤア事でストレスを発散している業の深い奴だよ」

それを聞いて更に笑いが大きくなる。実のところ、俺だってジェイルと同じように笑い転げたいのだが、そんな事をすれば埃まみれになって風呂に入った意味が無くなってしまふので必死になって堪えている。

ギル・グレアムが見せたバブアス・オギヤア中将の写真がどうして

俺の手元にあるのかというと、ハスターがあの写真を見て何かに使えそうだとハッキングをしてデータをコピーしていた様なのだ。正直な話、あまりにも破壊力が大きすぎるので処分してしまいたいのだが、この写真の産み出す利用価値を考えてしまうと処分しようにも出来ないのだ。

嚴重にロックをかけてこの写真を封印する事を決めると、背後の扉が開いてリーゼロッテとソーサラーとポットの乗ったトレーを持って二足歩行している月の輪熊が現れた。

「リヨウヤア……!!」

「お前、俺がいないと本当ボロボロだよなあ……」

俺を視界に入れるとすぐに泣きそうになりながら抱き着いてきたリーゼロッテに苦笑してしまう。そうなるように色々と弄つたのは他ならぬ俺なのだが、思っていたよりも深く俺に依存してしまった。加減を間違えたのか、それとも彼女に元々そういう素質があったのか。どちらにしても優秀な手駒であり、俺が居なければ生きられないようなリーゼロッテの姿を見ても可愛らしいという感想しか出てこないのだが。

【紅茶をぐ用意しましたがホットで大丈夫でしょうか？アイスも用意出来ますよ】

「ついに筆談まで出来るようになったのか……ホットで大丈夫だ。リーゼロッテは？」

「ん……私も大丈夫」

熊の手で器用にボードとペンを使って筆談で意思の疎通を成功させている月の輪熊の姿に戦慄を覚えながらリーゼロッテに抱きつかれたままであやしなからソファアに座る。彼女の様子を見る限りでは暫くはこのまま好きにさせておいた方がいいだろう。無理やり引

き剥がすことも出来るのだが、そうした場合の彼女の精神状態が良くない事になるのは目に見えている。

「ヒイ……ヒイ……ッ!!あー久し振りに笑った笑った!!ちよつとあの写真の破壊力凄すぎない?ミッドにばら撒くだけで管理局落とせそうなんだけど」

「破壊力あり過ぎるから暫くあの写真は封印する事にした。あれはちよつとヤバすぎるからな」

「あの写真?」

「バブアス・オギヤア中将の写真」

「ああ……!!」

バブアス・オギヤア中将の写真を思い出しのか、リーゼロッテは顔を俺の身体に埋めてしまった。何の関係も無い俺たちならただの笑い話で済ませられるのだが、元職場の上司のとんでもない痴態を知ってしまった彼女からすれば笑い話では済まないのだろう。

彼女をこれ以上追い詰めても意味が無いので、この場でこの写真を嚴重に封印しておく事にする。

「はあ……そういえば聞いたんだけど、今地球で闇の書が活動しているらしいね?そこでちよつと頼みがあるんだけど……良いかな?」

「闇の書のデータでも欲しいのか?」

「その通り!!よく分かったね!!」

ジェイルの性格、そして闇の書の存在を合わせて考えれば、彼が闇の書に興味を持っているという答えを出すのは簡単だった。

「違法改造されて害悪になっているみたいだけど、古代ベルカ時代に創造されたロストログアだ。出来ることなら実物が欲しいんだけど、危険性を考えたらデータだけで良いから取ってこれないかな?」

「近いうちに闇の書とは戦うつもりだったから構わないぞ?とは言っても闇の書は破壊するつもりだからなあ……欠片だけでも確保しておいてやろうか?」

「マジで!?お願い!!」

「まあ、貸しだけどな」

「闇の書のデータと欠片だけでも手に入るなら怖くない……!!」

互いに目的があつての取り引きならばそこで終わるのだが、今回はジエイルだけが一方的に要求しているだけの構図になっている。特に求めている物も思い当たらなかったので貸しという形で保留しておくことにした。これで無茶苦茶な内容で無ければ何でも言うことを聞かせられる命令権を得た事になる。ジエイルもそれを理解しているので震えているが、それでも闇の書のデータと欠片が欲しいのか否定するような事を口にしていない。

データと欠片の確保という難易度の高いミッションではあるが、備えはしてあるので大丈夫だろうと考える。問題なのは闇の書を倒せるのかという事だが、最悪俺と桜木が相手をすれば良いだろう。

頭の中で闇の書との戦闘をシミュレーションしながら、バブアス・オギヤア中將のダメージから立ち直れないリーゼロッテをあやす事にした。

八神はやてが入院したと、月村から教えられたと愛歌から連絡があった。本当だったら俺に直接連絡を取りたかつたらいいのだが、生憎と地球の俺はタナカに連れられて世界中を飛び回っている設定なので、そして実際には地球どころか別の世界にいるので表向きには連絡を取る事が出来ないので愛歌を通じて教えてくれたらしい。

「八神が入院したのか……桜木は何か言ってるか？」

『外見は物語通りだってワイングラス片手につまらなさそうにしていたわね。内心は知っている通りの展開で安心していたみたいだけど』
「物語通りの展開、ってことは闇の書の覚醒もその通りになりそうだな」

普通ならば世界が違えば連絡を取ることは不可能だが、愛歌は万が一の為にとジェイルから渡されたデバイスがあるので俺と通信することが出来ている。空中に投影されているモニターに映る愛歌の顔は、少しばかり苦々しい物になっていた。

初めての邂逅がアレだったが、愛歌は八神の事を友人だと認めているのだ。助けるつもりでいるとはいえ、現在進行形で苦しんでいる八神の事を思えば手放しで受け入れられる事ではないだろう。

『それで明日にお見舞いに行くって事になったんだけど……』

「マジで？」

入院した友人のお見舞いに行く。それ自体は何もおかしな事ではなく、寧ろ行われるべき事だと思う。しかし、八神は闇の書の主である。万が一に備えて彼女の側には闇の書の騎士たちか八神めぐりが控えているだろう。後者ならば原作を知っているので大丈夫かもし

れないが、もしも前者の誰かだった場合が問題だ。蒐集すれば八神が助かると信じているであろう彼女たちからすれば愛歌の存在は垂涎物である。リンカーコアが無いことを認めず、焦りで手を出してくる可能性がある。

安全を考えるのであれば愛歌をお見舞いに行かせなければいい。だが、モニターに映る彼女の顔は、その事を理解しながらもお見舞いに行きたいと訴えていた。

「あー……俺とイレイン、桜木のバックアップありなら大丈夫かな？」
『止めるとは言わないのね』

「本当だったらそれが一番なんだけどな。けど、愛歌が行きたいと言ってるのなら止めやしないさ。まあ、そうするなら俺がそっちにいる理由が必要になるけどなあ……」

『近くの国にいて私からの連絡を聞いて慌てて帰ってきたって事にしたら良いんじゃないかしら？』

「それがいいな……よし、それなら韓国で即席キムチのセールスやっただって事にしておくか」

『どうしてキムチの本場で即席キムチのセールスしてるのよ……』

理由なんてその場で考えた適当な物でしかない。大切なのは近くに居たから駆けつけたという事で、適当な部分は冗談としてでも捉えてくれるだろう。

八神の性格ならそうしてくれると信じている。ノリツツコミでもしてくれそうだ。

そうして明日の合流する時間などを話して通信を切った。他に報告する事など無かった。バブラス・オギヤア中将の事はここぞという時に明かして笑いのタネにしよう。

「つてなわけだ。明日には俺だけだけど地球に帰るから」

「リョウヤだけって……わ、私は!？」

「連れて行きたいんだけどねー、ほら、ギル・グレアムのアレがあるから」

ギル・グレアムを殺害したその翌日に、彼の死がリーゼアリアと共に報道された。流石に面子のためなのか時空管理局の本部で殺されたとは発表されていなかったが、誰かの手による殺害だと明確に告げていた。恐らくは地球にいるクロノたちにもそれは伝わっているのだろうが、闇の書の件を優先しているのかミッドチルダに帰る素振りを見せていない。

そんな中でギル・グレアムの使い魔であったリーゼロッテを連れ回すのはあまりにもリスキー過ぎる。前のように家の中にだけ居させれば良いかもしれないが、ここから闇の書の覚醒までは家には帰らずに動き回るつもりでいる。依存を拗らせて常に側にいないと情緒不安定になるリーゼロッテの存在は正直に言って邪魔にしかならないのだ。

「お前は頭が良いから分かるだろう？俺と一緒に居ることが俺にとって不都合だって事がさ。だから、少しの間で良いからここで大人しくしてくれ。何、すぐに会えるからさ」

「す、捨てない？私の事捨てない？」

「バツカ、誰が捨てるかよ。お前は俺の大事な大事な手駒なんだ。前にも言った通り、死ぬまでお前は俺の者だ。捨てられるかどうか悩んでいる暇があるのなら、捨てられないように自分でも磨いてたらどうだろ？丁度いい相手がそこに居るしな」

指を指した先にいるのは宴会芸のつもりなのか玉乗りをして両手で器用に棒を持ちながら、その先端で皿を回しているパンダの姿。ふざけたような話であるが、あのパンダの実力は本物だ。無印編までは

近接戦に関しては不安があったのだが、ナルカミとレギオンのデータ収集の際にあのパンダと戦っているうちにその不安は無くなってしまったのだから。

リーゼロッテは元より魔法は不得手で近接戦の方が得意だと聞いている。それならばあのパンダの相手をすれば何かしら得られるものがあるはずだ。

「うう……絶対、絶対迎えに来てよね!!約束だからね!!」

「おう、好きなだけハグして好きなだけマーキングするといいさ」

寂しい思いをさせているのだからそのくらいはさせても良いだろう。いつものスキンシップが多少過激になった程度で許されるのなら安いものだ。不安があるとするなら愛歌の存在だが……多分大丈夫だろう。あいつも何かとリーゼロッテの事を可愛がっていたし。

胸へのヘイトは凄かったが。

「まあそれも明日の話だ。今日はどうしたい？」

「……一緒に風呂に入って、一緒に寝る」
「了解」

不貞腐れたように、だけど恐る恐ると言った様子でそう言ったリーゼロッテの姿を見て苦笑してしまう。肉体年齢だけならば間違いない彼女の方が年上だと言うのに、こうして見せる姿があまりにも幼過ぎて可愛らしいのだ。

リーゼアリアではなく、リーゼロッテを手駒に引き入れて本当に良かったと思う。

「と……ところでお見舞いなんて初めて行くんだけどさ、何持って行ったら

いいと思う？お菓子とか？」

「入院してるって事は食事制限とかされてるかもしれないから……お花とかがいいんじゃないかな？」

「イヤイヤ、ここは私が開発した服だけが透けて見える特性コンタクトレンズをだね……」

しれっと、何の前触れもなくジェルが話に入り込んで来たが、白熊が彼の首根っこを掴んで引きずって行った事で強制的に退場させられた。その時に「納期が迫っている」と書かれたスケッチブックが見えたので何かしらのオーダーを管理局の上層部からされているのだろう。

少しだけ服だけが透けて見えるコンタクトレンズに後ろ髪を引かれながら、八神のお見舞いに何を持って行くかをリーゼロッテと話し続けた。

「ヤッホー」

ノックをして返事がされた事を確認してから引き戸を開けて八神の病室に入る。真っ先に目に入ったのはベッドの上で身体を起こして本を読んでいる八神と、椅子に座っているシグナムの姿。まだ話の通じる相手であった事に内心で安堵する。

「こんにちわ、はやてちゃん。お見舞いに来たよ」

「すずかちゃん、わざわざ来てくれておおきに」

「これ私たちからのお見舞いのお花よ。百合の花で良かったかしら？」

「取り敢えず喧嘩売つとることだけは分かったわ」

「冗談よ。本当はこっちのプリザーブドフラワーだから」

愛歌と月村は事前に2人で話し合つて何を持って行くのか決めていたようで、百合の花束を部屋の隅に置いて箱詰めにした造花を手渡していた。

「俺からはこれだな」

「フルーツの詰め合わせに……何やこれ？何が入ってるん？」

「イレインが作ったドリアンキムチだそうだ」

「ドリアンキムチ」

「一応試食はしてみたけどめっちゃ臭かったしめっちゃ癖があったけど、それも慣れたら中々いける」

「病院で開けたらテロ扱いされそうやなあ……お姉ちゃんに喰わせたろ」

フルーツの詰め合わせは枕元にあった机に置かれたが、ドリアンキムチ入りのパックはシグナムの手によって冷蔵庫に封印されてしまった。

「まだ浅くて年末ごろが食べ頃らしいから、それまでに退院しろよ？」

「そっかあ……うん、楽しみにしとくわ」

わざわざドリアンキムチという癖の強過ぎる物を持ってきた意図を理解してくれたようで、八神は微笑んでくれた。取り敢えず生きる意欲が無くなった訳ではない事に安心する。バッドエンドを破壊す

るつもりではいるが、だからといって救われる者が生きる意志を持っていないのでは話にならない。桜木の話によれば、この頃の彼女は闇の書の侵食による痛みに苦しんでいると聞いていたが、これならば救う意味がある。

《カガミ》

《シグナムか》

愛歌と月村が八神と話を始めたのでお茶でも淹れようと支度をしている、フルーツの皮を剥いているシグナムから念話があった。愛歌と八神は反応していないところを見る限りでは、俺だけに向けられているようだ。

《ムシのいい話だとは理解している。何か求めるものがあれば応じよう……だから、主の事を管理局には明かさないうで欲しい》

《安心しろ。今日の俺は八神の友達として来ただけだからな。協力者として来たわけじゃないから管理局には言わないさ》

今もクロノたちが必死になってシグナムたちの事を、そして彼女たちの主である八神の事を搜索しているのを承知の上でシグナムの懇願に応じてやる。

《……こちらとしてはありがたいが、良いのか？》

《良いんだよ。利害の一致ってヤツだから》

俺が目指している結末を迎える為にはまだ管理局に八神の存在を明かさないう方が都合が良い。理由はどうであれ、八神の存在を秘匿したいシグナムと目的は一致している。

シグナムは俺の事を警戒するだろう。管理局の協力者でありながら、敵対している自分たちの存在を明かさずにいるのだから。しかし

怪しみながらも彼女はそれを警戒する事しか出来ない。八神の現在地を知っている俺に、そして俺に近いし存在に手を出せば、管理局に八神の存在を明かされると理解しているから。怪しいと、何か企んでいると警戒しながらも、それ以上の事をする事が出来ないで、俺の機嫌を損ねないように下手に出るしかない。

シグナムの訝しむような目線を感じながらも、目の前の愛歌と月村が八神と楽しそうに話している姿を目に焼き付ける。どこにでもあのような自然でありふれた光景。そんな光景こそが、俺にとっては何よりも眩しかったから。

人としての理性を投げ捨てた、獣の理が支配するこの世の地獄。そこで俺の憧れである男が涙を流しながら語っていた光景が目の前にあるのだから。

だからこそ、この光景が続くように願っている。これから先、八神には悲しみと苦しみが待ち受けている。しかし、それらを乗り越えた先にはこの光景と同じ物があるはずだからと信じて。

darkness heart

八神のお見舞いを数日前に終わった。やはりというべきかシグナム曰く、八神の状態は闇の書の侵食が原因らしい。こちらは一応手を貸さないが彼女たちの存在を明かさず、それを条件に向こう側もこちらに手を出さない事を約束させた。口約束でしつかりとした契約という訳ではないが、騎士たちの将であるシグナムはなにかと義理堅い性格をしている。少なくとも俺から約束を破らない限り、向こうも約束を破る事はないだろう。

そう設定されているからなのか難儀な性格をしていると思う。その高潔さを捨てて外道に堕ちれば今よりも蒐集のペースが格段に向き上るというのに。しかし、それは逆説的に彼女たちがまだ道から外れていないという事の証左でもあるので喜ばしい事なのだが。

12月に入って本格的に寒さの厳しくなってきた中で、海鳴の都市部に聳え立っているビルの屋上を陣取りながら夜の街を見下ろす。高所を陣取るというのは基本的にはそれだけで優位に立っているのだ。360度開けた景色を見渡せば、視界の中に管理局の魔導師の姿が見える。どうやら騎士たちが地球を拠点にしているのではないかと考えての行動らしい。

今は大人の姿ではなく子供の姿でここにいるのだが認識阻害の魔術を行使しているので管理局に見つかる事はない。協力者なので堂々としていれば良いのでは無いかと思っただが、クロノには帰ってきた事は告げずに俺は未だに海外にタナカと一緒にいるのだ。八神のお見舞いを理由に予定を切り上げた事を伝えれば、そこから八神に対して捜査の手が伸びる可能性がある。まだ八神Ⅱ闇の書の主だと明かす事は出来ないのでこうするしか無かったのだ。

「――同調開始」
リンク・スタート

寒空の中でビュンビュン飛び回っている局員たちに若干同情しながら同調を開始する。リンカーコアではなく魔術回路が唸りを上げて魔力を精製し、それと同時に意識が僅かにブレて夢見心地になり、別の場所にいる自分と感覚を共有する。

繋がったことを感覚的に理解し、片目を閉じて別の場所にいる自分の片目を開く。そこは深い深い闇の中だった。一寸先は闇という言葉を体現したかのように漆黒でありながら、光源がない筈なのに自分の姿をしっかりと視認出来ているという不思議空間。

そこは闇の書の内部だった。

『成功成功つと。初めてやってみただけどやれば出来るものだな』

以前にアクロ・ダカーハとしてヴィータを倒した時に彼女が集めていた魔力にとある仕掛けを施していた。それは俺の起源である《干涉》による魂の分割。魂を物質化するのならそれは魔術では無くて魔法の領域だとマーリンから教わったが、分割程度ならば魔術でもどうにかなると言っていた事を思い出して魂を分割し、ヴィータの集めていた魔力に《干涉》して忍び込ませておいたのだ。

実験的な意味合いでの仕掛けだったのだが、結果としてその試みは成功した。魔力が闇の書に蒐集された事で俺の魂も一緒に闇の書に取り込まれた。異物として排除される可能性や、魔力と一緒にたにされて失敗する可能性を考えていたのだが杞憂に終わったようだ。

外にいる自分の身体の機能を最低限にして、闇の書の内部にいる自分をメインとして動かす。比較対象が存在しないので定かでは無いが、今の身体は子供の姿であった。本当なら大人の姿で活動したいの

だが、この場にいるのは俺だけでデバイスであるハスターたちは連れてくる事が出来なかった。

戦闘にはかなり不安が残るが最悪こちらの俺は自壊させれば問題ない。そう考えて闇の書の深部を目指して潜行する。

今回の目的は闇の書、そして闇の書の原点である夜天の書のデータである。ジェイルから頼まれる以前に俺はデータをどうにかして手に入れる事が出来ないかと考えていた。目を付けているのは闇の書と夜天の書が持つ魔法・スキルの蒐集機能。本人の適正の有無を問わずに蒐集した魔法やスキルが使用できる機能を持っているのだ。出来る事なら完全に、出来なくとも断片的にでも蒐集機能に関するデータが欲しい。

外部からの主である八神以外のアクセスは認めず、無理にしようとするれば主を飲み込んで転生してしまうらしいのだが、俺の方法は内部からの干渉であってそれに当て嵌まらない。試しに幾らかのデータをコピーしてみたのだが、システムからの干渉は感じられなかった。そもそも俺にシステムを弄る意思は無く、ただデータをコピーしたいだけなのだから許して欲しいのだが。

『にしても、予想はしていたが酷いこと酷いこと』

普通の視界で見ただけならば、闇の書の内部は何もない暗い空間であるが、霊視の魔眼を通して見た場合はそうでは無い。

幽霊……いや、死霊や悪霊と呼べる霊体が視界一面に蠢いていた。

どれもこれもが土郎さんやアリシアのように自我を持っていない。長い時間を経て失くしてしまったのか、それとも他の霊体に当てられ

て失ったのかは定かではないが、どちらにせよここに蠢いているのはただ死に間際の苦しみを叫び、生者を嫉み、ただそうしているだけの現象でしかない。それでさえ認識する事が出来る俺がいたからこそわかった事実だ。この光景を見る事が出来ない者はこんな光景がある事なんて知らないだろう。

そしてこれが見える俺は、これらをどうにかしてやろうとは考えない。助けを求められたのならば気まぐれに救ってやろうかと考える事もあるだろうが、これらは死に間際の苦しみに囚われているだけではない。自分たちが死んだ事を認められず、生きている者を妬むだけの現象に他ならない。例えどうにかしてやろうと思つて手を伸ばしたところで、これらは嬉々として自分たちと同じようにしてやろうと手を伸ばした者を引き摺り込むだけだ。

救いようが無く、どうしようもなく救えない存在だった。

何もしないと決めた以上、視界に映つてこれらはただの邪魔者ではない。意識的に見えているものを排除し、視界一杯に広がっていた苦しむ死霊たちを映らないようにする。そうして視界が元の暗い空間に戻った事を確認し、再び求めているデータを探しながら潜行を始める。

『これは違うーこれもダメーこれは惜しいけど違う……クソ、ちゃんとデータの整理くらいしておけよな』

魔力を蒐集している影響なのか、得られるデータはどれもが闇の書のものでは無くて他者から蒐集したデータばかりである。時折闇の書のデータも見つかることには見つかるのだが、求めているものとは違うので落胆しながら、欲しがっているジェイルのために一応コピーしておく。

別に無差別にデータをコピーする事も出来なくは無いが、そのデータを保存しているのは俺の本体の脳である。容量が限られているので出来る限りは目的のデータ以外のコピーを取りたくないのが本音だ。ハスターがいれば無差別にコピーする事も出来たのだが、それは無い物ねだりでしかない。

蒐集機能に関するデータを、あるいは闇の書独自の機能に関するデータを求めて潜行を続ける。その最中で銀髪赤眼の女性を見かけた。恐らくは夜天の書の管制人格だろう。彼女に俺の存在がバレそうになったが、気配を消してやり過ごす。生憎と今の段階で彼女と接触するつもりはないのだ。可能性は低いのだが、彼女から八神に俺の事が伝わるかもしれない。それは俺にとって好ましくない。

出来る事なら彼女がどういう心境なのか知りたかったが、それは最終決戦の時までのお楽しみとしておこう。

そうして潜行を続ける事数十分。ようやくお目当ての蒐集機能に関するデータを見つけることが出来た。幸か不幸か、転生機能に関するデータもその近くで発見する。

『蒐集機能に関しては完コピだな。転生機能は……どうしようか。ジェイルに渡してもろくな事にならなさそうだしなあ……よし、コピーは取らないでおこう。蒐集機能と夜天の書の設計図を渡せば満足するだろう』

蒐集機能に関しては兎も角、転生機能はあまりにも害悪すぎる。ジェイルにこれを渡した場合、死んでも即座に転生する事が出来るような装置を作り出してもおかしくない。幸いにもジェイルの興味が惹けそうな物は見つかったのでこれで我慢してもらおう事にしよう。

『……ッ、……』

『ん?』

目当ての物は見つかったのでこれ以上ここに居る理由は無いらぬ。なのでこちらの俺を破棄して元に戻ろうとしたのだが、声が聞こえた気がした。

気のせいな可能性はあるが、万が一を考えて耳を澄ませる。するとか細く、消えてしまいそうな物ではあるが確かに声が聞こえて来た。

『誰だ? 管制人格は上にいるはずだけど……』

記憶を漁ってもこの現象を起こす事が出来る存在が思い当たらない。俺が思い出せないだけで桜木なら知っているかもしれないが、この状態では桜木と連絡を取る事が出来ない。一旦接続を解除して聞くことはできるが、深くに潜りすぎたせいで再びこちらの俺と接続する事が出来るか怪しいのだ。

探るか、それとも引くか。それによって得られるメリットと生じるデメリットとを秤にかけ……最終的に好奇心で探る事を決意し、声が出た方へと進んでいく事にした。

『これは……なんともまあ醜悪な……』

声が出た方へと進み続け、見つけたものを見てそんな感想しか出てこなかった。

そこにあつたのは空中に浮かぶ黒い球体。しかし近くによればそれは無数の蛇が絡み合っていて出来ているのが分かる。それだけなら醜悪なんて感想は出てこなかったが、問題なのはその状態だった。上ではただ蠢いていただけの死霊が、その球体に吸い込まれている。始めて見る現象でどうなっているのか理解出来ないが、現実で同じような事があれば間違いなく周囲に悪影響を及ぼすと断言出来るほどに、それは呪われていた。

『……お前は、誰だ？』

『なんだ喋れるのか……喋れるのか!? どうやって声出してるの!』

『音など所詮は振動に過ぎない。振動を起こす事が出来れば声帯が無くとも会話する事が出来る……重ねて問いかける。お前は誰だ？』

無視する事が出来たのにわざわざ律儀に球体は俺の疑問に答えてくれた。見た目や現在の状態がヤバいだけで思いの他生真面目な性格らしい。それに今ので少なくとも会話できる知性と、周囲を把握出来るだけの理性がある事が理解出来た。好奇心でここまで来た以上、最低でもこの正体を知って帰らなければならぬので会話を続ける事にする。

『人に名前を聞くときにはまずは自分から。それが礼儀だぞ?』

『……濟まないが、名乗る事は出来ない。名乗れる名が無いのだ』

『名前が無い、ね……だったら呼び名とかは? お前には名前は無くても、他の奴はなんて呼んでるんだ?』

『呼ばれた名か……それならばある。ナハトヴァール。夜天の書の管制人格はそう呼んでいた』

ナハトヴァール、その名前に聞き覚えがあつた。桜木から教えられた闇の書の自動防衛運用システムと同じ名前で、闇の書が暴走する要因の1つであると。

『ナハトヴァールね……俺は加賀美両夜だ。出来る事なら、俺のことは内緒にしてくれると助かるんだが……』

『安心しろ、私は誰とも意思の疎通を取ることはできない……いや、そもそもヴォルケンリッターは愚か管制人格であつても私に意思がある事を知らないだろう』

『知らない？ AIとして初めから組み込まれていたんじゃないのか？』

『そうだ。私という存在は初めから存在していなかった。闇の書の自動防衛運用システムとして設計され、実用されていく内に自我に目覚めたのだ』

その言葉に思わず口笛を吹いてしまう。ナハトヴァールの言葉が本当なら、その生まれは紛れもなく偶然の産物であるから。誰の意思や意図が絡んだわけでも無い、純然たる奇跡の賜物。例えナハトヴァールが産まれたのと同じ回数繰り返したとしても、同じ結果になるとは限らない。

『成る程成る程。で、どうしてお前は俺を呼び出したんだ？』

『……さて、どうしてだろうな？ 正直なところ、私もどうしてカガミを呼んだのか理解していない。だが、話し相手になつてくれると嬉しい。自我を得てから初めての会話なのだ』

『ああ、良いぜ。管制人格に気付かれるまでならな』

その時ナハトヴァールに対して抱いた感情が同情なのか、それとも哀れみなのか分からない。しかし、初めて会話をするとどこか寂しげに話す姿を見て放っておくことは出来なかつたと思つてしまったの

だ。

俺と話すことでその寂しさが少しでも薄れるのなら、幾らでも話してやろう。

『でも話すつても何を話すんだ？』

『ふむ……それならばカガミの趣味を教えてくださいか？』

『お見合いかッ!!……しょうがない、それじゃあバブアス・オギヤアという深過ぎる闇を抱えた人間の事を話してやろう』

『……それで全裸で徘徊してた桜木が愛歌の愛歌ちゃんウィップに滅多打ちにされてからイレインにボコボコにされたんだけどよ、本人は“我^{オレ}の究極美の肉体を見て恥ずかしんでいるのだな？フフツ……”なんて簧巻きにされながら開き直ってやがってよ？だけどそれは口ではそうであって、内心じゃあ“もうお媚に行けない……!!”って死にそうになってたんだぜ？』

『難儀な体質をしているのだな、そのサクラギという者は』

ナハトヴァールと話し始めてどの位の時間が経ったか。ここには時計がないので分からないが、相当な時間話している気がする。とは言ってもナハトヴァールは外部から情報を得ることが出来ないので話題を持つておらず、俺がひたすら話し続け、それをナハトヴァールが相打ちするような形式になっている。

そして話した結果、ナハトヴァールはまだまだ未成熟だという事に気付いた。

バブアス・オギヤアやキャストオフ桜木の話をしても笑うどころか引いている気配すら見せない。普通の感性を持つていればどちらかの反応をするはずなのだが、ナハトヴァールはどちらにも興味を惹かれていないような反応を見せただけだった。自我を得てからそれなりに時間が経っているようで落ち着きが見られるものの、肝心なところが成長しておらずに幼いままである。知識はそれなりにインストールされているようだが、どれもが“知っているだけ”の状態であってそれを見たことも、触れたことも、感じた事も無いのだ。

非常にもつたいないような気がするが、ナハトヴァールは何も出来なかったのだから当然かと納得する。

ナハトヴァールには自由が無かった。闇の書の自動防衛運用システムとして設計され、闇の書が暴走する度にそれをアシストするように顕現して、破壊と殺戮を振りまくだけの存在。自我を得たところでその役割から解放された訳ではなく、ただ役割に縛られて存在するだけでしか無かった。

その事にナハトヴァールは文句は言わないだろう。何せ、ナハトヴァールはそうする為に作り出された存在なのだから。銃が自我を得ても銃としての使われ方をしている事が当たり前であるように、ナハトヴァールもまたそうであれと願われて作り出されたコンセプトに従って行動しているだけなのだ。

文句を言うとしたら――俺だけだ。

『なあ、ナハトヴァール。お前さ、もつと色んな事を知りたくないか？』

『どう言う事だ？』

『こんな薄気味悪いところに閉じ込められてるだけじゃつまらんだろ？身体を自由に動かして、自分の思うように動き、やりたい事をやってみようと思わないか？』

ナハトヴァールに興味を惹かれ、その境遇に同情し、解放されたらどうなるのかを知りたくなってしまうた。

『――不可能だ。私の役割は防衛運用システムである事。そしてそもそも私は肉体を持たない意志だけの存在だ。その気になれば暴走の際に顕現した管制人格の身体の支配権を奪うことが出来るだろうが、そんな事をしている時間は許されていない』

『違う、違うんだよ。可能か不可能か、出来るか出来ないかの話じゃない。やりたいかやりたくないか。そう言う次元の話をしているんだ』

機械的に言えばナハトヴァールの意見は間違っていない。俺の言ったことは身体を持っていないナハトヴァールには全て不可能な事なのだ。実に機械的な判断だ。妨げとなるような感情的な考えを一切盛り込む事無く、現状を把握して条件を理解して、正しい答えに辿り着いてそれに悲観する事なく当たり前だと受け入れている。

それは……なんとまあつまらないことか。

『可能不可能と判断する前に自分がそうならと考えた方は無かったか？自分がその状況の当事者だったらこうしてみたいともしもを思い描いたことは無かったか？出来るか出来ないかじゃない、やってみたいなあと漠然と考えた事は無かったか？』

『……無い、訳では無い。だが、私にはそれをすることが許されていない。そんな事を思考するだけリソースの無駄だ』

『良いから聞かせてくれよ。やりたいか、それともやりたく無いかを』
ナハトヴァールからは返事は帰ってこない。しかしそれは機嫌を損ねたから口を閉ざしている訳ではなく、思案しているから喋らないのだと理解出来た。

ここがナハトヴァールにとっての分水嶺なのだろう。ただのシステムとしてこのまま終わる事を選ぶか、それとも意思を持った一個体として続く事を選ぶか。どちらを選ぶのか、それはナハトヴァールの意思を尊重する。選択を押し付けたのは俺ではあるが、最終的に選ぶのは他の誰でも無いナハトヴァール自身なのだから。

『……私は……』

そうして長い沈黙を経て、ナハトヴァールは恐る恐ると言った具合で、口を開いた。

『私は……もし、叶うのなら……自由に生きてみたい。二本の足で地面に立って、二本の手で何かを掴みたい。センサーでは無くて目で物を見て、色んな物を味わってみたい』

『苦しいかもしれないぞ？……ここに引きこもっていれば良かったと後悔するかもしれないぞ？』

『だとしても、その後悔を、その苦勞を味わってみたいー私は、生きてきたい』

その言葉は後ろめたさを感じさせながらも、堂々と自分の意思を伝えていた。システムから生まれたナハトヴァールはAIであり、AIであるが故に最善を選ぶ。そのナハトヴァールが間違っていると自覚しながらも、自分の意思を言葉にしたのだ。

肉体では無い、魂だけの身体を思わず震わせる。ああ、素晴らしい。やはりこうでなければと、魂がナハトヴァールの行動に興奮で震える。

『ああ……気に入った。気に入ったぞ、ナハトヴァール』

機械的に判断して行動するだけの人形など興味が無い。自分の意思を持ち、それが間違っていると自覚しながらも、されども折れないその意思こそ、最も素晴らしいものだと言っているが故に。

例えナハトヴァール自身がそれが間違っていると自覚していたとしても、讚えよう。素晴らしいと叫ぼう。それで良いと認めよう。

『生きたいと言うのなら、俺がそれを叶えてやる。手段は持っていないが、それが出来そうな奴には心当たりがあるからな』

幸運な事にジェイルには貸しがある。それを理由にクローン技術

を応用して肉体を作らせ、そこにナハトヴァールを入れれば良い。それが不可能でも魔術でホムンクルスを作ればナハトヴァールの身体を作る事は出来る。

『……出来るのか？本当に？』

『最悪は俺の身体にお前を移せば良いだけの話だ。その代わりと言っちゃなんだが――俺の物になれ。俺はお前が欲しくなった』

『闇の書の自動防衛運用システムが欲しいと言うことか？』

『そんな物要るかよ。俺が欲しいのはお前の意思だけだ。道具として使われたいのなら壊れ果てるまで道具として使ってやろう。生物として扱われたいのなら死に果てるまで生物として扱ってやろう』

だから、と言葉を続けてナハトヴァールの表面で蠢く蛇に触れるか触れないかの所まで手を伸ばす。

『お前の全てを、俺にくれ』

再び訪れる沈黙。ナハトヴァールは戸惑っているのか、球体だったはずのそれを歪ませながら思案しているようだった。とは言っても、それは俺を疑っているのではないのだろう。疑うという考えが出来るほど、ナハトヴァールは成熟している様には感じられない。本当に俺の手を取って良いのか悩んでいるように見えた。

『何故だ……何故私を求める？闇の書そのものでは無く、管制人格でも無く、自動防衛運用システムでも無い。ただのバグによって生じた私を、何故求める？』

『そんな物よりもお前の方が欲しくなった。それだけの話だ』

利益損害を全て無視してでもナハトヴァールの方が欲しくなったのだ。万人からすればナハトヴァールの挙げた物の方が価値があると考え、それらを欲しいと求めるだろう。闇の書も、管制人格も、自

動防衛運用システムも、危険性さえ度外視してしまえば値が付けられない程の価値がある事は重々承知している。

だが、それら全てと比べたとしても、ナハトヴァールの方が素晴らしいと感じたのだ。それ以外に理由は無く、それ以外に理由は要らない。

『……貴方は、変わっていると言われるのではないか？』

『よく言われるし、変わっている自覚もしてるよ』

『……馬鹿だ。ああ、大馬鹿だ。貴方はきつと、今を生きる人間の中で一番の大馬鹿だろうな』

『違うない』

クツクツク、と喉を鳴らすようにして笑うとナハトヴァールもそれに釣られて笑った。バブアス・オギヤアの話でも、キャストオフ桜木の話でも笑う事の無かったナハトヴァールが、初めて笑っている。その事実には妙な感動を覚えてしまう。

まあ、顔は無いので声だけで判断するしか無いのだが。

『……そうだな。私がこの役割から解放されるというのであれば考えてやろう』

『言ったな？言質は取ったぞ？』

『ああ、楽しみにさせてもらおう』

『よし、それなら今から動くか。ああ、意識が無くなるだけだから身体は置いておくけど壊すなよ？壊さなかったら好きにして良いから』

『好きにして良いと言われても扱いに困るのだが……』

始めは逆探知や緊急脱出目的でこの身体を破棄する事に決めていたのだが、再びナハトヴァールと会うための目印代わりにこの場に置いておく事にする。再度接続することが叶わなくてもこの身体は俺

の魂の一部である。感覚的にどこにいるのかなんて手に取るように分かるのだ。

そうしてナハトヴァールに別れを告げて接続を切り、元の肉体にサブからメインへと切り替える。視界に入ってくるのは丁度夜明けの光景。どうやら一晩中話を続けていたらしい。

「よし、まずはジェイルに話をして、ダメならホムンクルスの材料を集めて……ああ、その前にデータを起こしておかないとダメだな……それにホムンクルスを作るのなんて初めてだからマーリンにも一度話をしときたいし……やる事いっぱいだなあ!!」

登ってくる太陽の日差しを浴びながら、睡眠を取らずに行動していたというのに気分が高揚し続けている。

何せ、ここに来てやる気が出てきたから——いや、正確にはやる気が増してきたというべきか。

闇の書の完全破壊、そしてリインフォースと名付けられる事になる管制人格の救済はもはや前提条件となっている。後に訪れる strikers 編では、俺は遠慮無く容赦無く、思う存分に行動するつもりでいる。黒須の事情や戦力など考えずに行動する。ワンサイドゲームなんぞ望んでいないので、そうならない為に向こう側の戦力を充実させておく必要があるのだ。だから管制人格を救い、向こう側の戦に加えさせる。

そう言った意味ではナハトヴァールの解放など完全に無意味である。そんな事をする暇があるのなら、もっと別の事に手間をかけると叱られても文句は言えない。

だが、それで良いのだ。どう足掻いたところで、俺の結末は決まっ

ている。だからこそ、その過程を楽しむのだ。無意味で無駄な事を努力して、ああ楽しかったと馬鹿笑いするのだ。

所詮は自己満足でしかない行動に過ぎない。だが俺が楽しむ為に、俺が満足する為に、全力で頑張らせていただきますか。

「シューーッ!!」

リーゼロッテの短い掛け声と共に放たれる拳を躲す。威力では無くて速度を重視しているせいか速いだけの物なので躲す事に集中していれば万が一でもまぐれが起こつても、当たるなんて事はない。それに威力が無い事で手数回転率が上がり、躲したかと思えばすぐに次の拳が、或いは蹴りがやって来る。

速度を重視しているので破壊力は無いが、それを当然理解しているのだろう狙う箇所は水月、喉、腎臓などの急所狙い。殺せる程の威力は無いが、当たればダメージが残るように考えられている。デバイスを持たず、管理局に所属していたリーゼロッテは管理局のルールに従って非殺を心掛けている。以前ならばそれでも良かったかもしれないがこちら側に来た以上、それは悪癖に成り下がっている。近いうちに矯正しなければならぬと考えながら頭部を狙ったハイキックをしゃがんで躲し、軸足を払う。

唯一支えとなっていた足が地面から離れたことでリーゼロッテの身体は宙を舞う。魔法の使用が制限されている上に自分の意思で地面から離れた訳ではないので行動をとる事が出来ない。

そして隙だらけの彼女の鳩尾に、掌底を全力で放つ。

「ガーーーーッ!!」

防御を固める事が出来なかった以上、リーゼロッテにはそれを受け除ける以外の選択肢が存在していない。ミチリと筋肉と肋骨が軋む音が耳に届き、彼女の口からは息が溢れる。そして投げられた人形のように

に受け身を取る事すら出来ずに地面を弾みながら転がりーー起き上がらなかった。

芝居である事を警戒しながら寝転がるリーゼロッテに近づく。しかし間合いに入っても彼女は起き上がるどころか反応する素振りすら見せない。彼女の足を強めに蹴っても反応を見せなかった。そこで彼女の手を取って脈を取り、仰向けにして胸に耳を当て、瞼をこじ開けて瞳孔を確認する。

結論から言つてーーリーゼロッテは死んでいた。いや、心臓に強い衝撃が来たのが原因で止まったのだから心肺停止状態と言うのが正しいだろう。心臓は止まっているが、まだ生きている状態。このまま放置すればそのまま死んでしまうことになるのだが。

なので足を上げ、リーゼロッテの胸に、正確には心臓に振り下ろす。加減をしていない一撃に彼女の身体が跳ね上がりーー心臓が再び動き出した事で息を吹き返す。

「ーーッ!?エホッ、エホッ……!!」

「そのまま暫く深呼吸しておけ。ちよつとの間とは言え心臓止まったんだからな」

むせるリーゼロッテの背中をさすりながら深呼吸を促す。自分が何があつたのか理解出来ずに混乱しているようだったが俺の言う通りに深呼吸を始め、数十秒後には落ち着きを取り戻していた。

「ふう……ふう……今のは一体?」

「体験したそのままだけど?心臓に強い衝撃を与える事で停止させるってだけのものだ。覚えておくと便利だぞ?生け捕りにする時なんか仮死状態にしてる訳だから暴れられる心配も無いし。まあ、ちゃんと生き返してやらないとそのまま死ぬことに注意しないといけな

いけどな」

軽くリーゼロッテの事を診てみるが、即座に蘇生させたので後遺症が残っていないようだった。彼女が残っている事を隠している可能性もあるが、不調があればすぐに申し出るように言いつけてあるのでその心配は無いだらう。

ともあれ、生き返らせたとは言え仮死状態になったのでこれ以上無理をさせるのは愚行だと判断して今日の鍛錬を終えることにする。今は大人の姿で、いつもならばここで子供の姿に戻ってリーゼロッテにもたれ掛かるのだが、今日は少しばかり趣向を変えてみようと思う。座り込んで胡座を組み、股の間にリーゼロッテを乗せる。大人の姿であるが彼女の身体は思っていたよりも軽い。もう少し肉を付けた方がいいんじゃないかと思う。

まあ、一部の肉付きは愛歌が嫉妬する程に付いているのだが。

「りよ、リョウヤ!？」

「いいからいいから。後遺症はないかもしれないけど一度心臓止まってるんだから暫く休んでおけ」

「で、でも……こんな事したらマナカが怒るんじゃない……」

「大丈夫。リーゼロッテの恥ずかしがってる写真と引き換えで許してもらおうって話になってるから」

「え？嘘？てかいつのまにか撮ったの？」

「たった今」

リーゼロッテの顔の前につき撮った写真……恥ずかしそうに顔を赤らめている顔のドアップの写真を投影し、見せびらかすように愛歌に向けて送信する。数秒ほどでサムズアップの絵文字付きのメッセージが届いた。俺の周りに女の姿があれば嫉妬する愛歌だが、どうやらリーゼロッテはその枠から外れているらしい。月村やイ

レインもその枠から外れているので、無関係な者だけに反応しているように見える。

「ほら、良くやったって返事きたぞ。ん？次はもう少し服を乱してのバージョンが欲しいってさ……よし、ちよつとやってみようか」
「やるの!?本当にやるの!?私なんかそんな事しても全然つまらないよ!」

「馬鹿野郎!!リーゼロツテの羞恥を堪えながらの着崩した写真だぞ!? エロいに決まってるじゃないか!!」
「なんか趣旨変わってきてない!」

愛歌に頼まれたと言うこともあるが、俺もその姿を見たいので実行させる事にする。口では否定的な事を言っていたリーゼロツテだが、俺の言葉には逆らえないのか本当にいいのかなあ?なんて口にしなながらも着ている服のボタンを緩め、肌の露出を多くする。その姿にエロいなあと思いながら写真を撮り、愛歌に送る。

数秒後には返事が帰って来た。ブラヴォー、マーベラスといった賞賛する言葉と一緒に愛歌がリーゼロツテと同じように服を着崩しながらポーズを取っている写真が添付されている。それを見てもリーゼロツテの時のようなエロいなあという感想よりも、微笑ましいと思ってしまう。それは愛歌の身体が未熟だからなのだろう。

写真を保存し、その旨を書いたメッセージを送る。

数秒後には口に出して言えないような罵詈雑言をメッセージの文字数制限一杯までに書き連ねたメッセージが帰って来た。

「相変わらずこの手に関しての暴走がヤバイな」

「マナカが気にしてるって分かってるのに話題にしちゃうんだね……」

「最近、この話が鉄板になりつつあるんだよなあ……イレインが話題にして、愛歌が過剰に反応するのに慣れたんだろ」

初めは恥ずかしそうにしていたが、今ではそれよりも俺と触れている事が嬉しいのだろう落ち着いた様子のリーゼロッテとの会話を楽しむ。ここはジェイルが作った作品の試運転をする為の実験室で、頑丈なだけの殺風景な部屋だが、基本的に静かで誰もやってこないので会話するにはうってつけの部屋でもある。

「……ねえ、気になった事聞いても良い？ 答えにくかったら話さなくてもいいから」

「おう、何が聞きたいんだ？」

「前に話してたよね？ リヨウヤは悪役になろうとしているって。それなのにリヨウヤはどうしてそんなに関わろうとするの？ マナカから聞いたんだけどジュエルシードの時だって必要以上に関わってたみたいだし、今回の闇の書の事だってそう。どうして？」

言われるほどに関わったのかと首を傾げながら思い返す。

ジュエルシードの時はフェイトと成り行きだったとは言え友人になり、家の近くで暴れられているという理由からアクロ・ダカーハとして姿を見せた。そしてフェイトの事情を知っているが故に事前には庭園に乗り込んでプレシアと接触し、しなくても良い洗脳をして親バカに仕立て上げた。必要最低限に動くのなら無印編の最終盤面だけに姿を見せるだけで良いのだ。

今回だってそうだ。手駒が欲しいからと言ってリーゼロッテを洗脳し、リーゼアリアとギル・グレアムを殺した。愛歌と行動している時の闇の書の騎士たちとの邂逅は不可抗力だったとは言え、アクロ・ダカーハの姿で桜木を誘ってまで管理局と闇の書の騎士たちを巻き込んだのドンパチは流石にやり過ぎている。必要最低限の接触なら、

裏で管理局員から魔力を蒐集して騎士たちに渡すだけで良かったのに。

結果として、確かにリーゼロッテの言うように些か深く関わり過ぎている気がする。その事実には納得しながらも、同時に何故そうなったのかという理由にも心当たりがあった。

「リーゼロッテには俺の起源について話したっけな？」

「起源って……確か、《干渉》って言ってたの？レアスキルみたいなもので色んな物に干渉できるって言ってたけど」

「間違っちゃ無いけど説明が足りてなかったな。教えてくれた奴が言うには起源っていうのはそのモノの最初の方向性、そのモノがそのモノである事をたらしめるものを起源と言って、この世の全ての形あるものには何かしらの起源があってそれに沿うように行動してるんだとき。普通はそれを自覚していないから目立ってそうしているようには見えないけど、中には起源に目覚めた奴がいる。そういう奴の事を起源覚醒者というんだけどな、それよりは起源を自覚しているからより起源により強く惹かれてしまうんだ。例えば起源が《剣》だったら剣に対して執着するようになるし、《食べる》事だったら一人を平気で食べるようになる」

「だったら、リョウヤの《干渉》は？」

「文字通りの意味だよ。他人の事に立ち入って口を出したり、自分の考えを押し付けようとする。それが転じて他者への干渉能力が上がってるけど、リーゼロッテが言ったように関わらなくても良い事なのに深く関わってしまうんだ」

霊体に触れたり、リーゼロッテやプレシアに行った洗脳行為が普通以上の効果を発揮したり、魔術で大気を操れたり、起源を自覚しているが故に《干渉》という行為に関しては常人以上の能力を発揮する事ができる。しかし、そうであるが故に本来ならば関わらなくてもいい事にまで深く踏み込んでしまうのだ。前世でもそういう経験は

あつた。

自覚していたはずなのにその事をリーゼロッテに指摘されるまで気がつく事が出来なかった。マーリンが起源に目覚めればいずれは起源に人格を塗りつぶされる事になると言っていた事と関係があるのかもしれない。精神力に関しては何人とは比べものにならない程に強いという事を自負しているが、それでもいずれは起源に飲み込まれてしまうかもしれない。

「ああ……そうだな。だからリーゼロッテ、1つだけ頼みがある」
「何？」

「俺が完全に起源に飲み込まれて、以前の俺とは違う俺になったと判断した時には俺を殺してくれ。そんなつもりは無いけど、《干渉》する為だけに動く俺とかどう考えても害悪だからな」

自分の能力の高さは理解している。起源に完全に飲み込まれて、それに沿うだけの存在となった俺はどう考えても害を齎す存在でしか無くなる。望みはしっかりと敵対者として相応しい存在に成長した黒須に倒される事だが、そうなってしまえば悪役もクソも無くなってしまう。だからこそ、そんなつもりは無いとはいえ万が一に備えてリーゼロッテにこの役目を頼む事にした。愛歌にこんな事を頼むわけにはいかないし、桜木なら事情を話せば理解してやってくれそうだが俺の心情的に頼みたく無い。

そこで俺の手駒で、道具でもあるリーゼロッテに任せる事にした。消去法で選んだ上に酷な役割を任せる事になるが、それは仕方がないと割り切ってもらわうしかない。

「……どうしても、そうしなくちゃいけないの？」

「ああ、どうしてもだ」

「……分かった。もしもの時には、私がリョウヤを止めてあげる。だ

けどね」

「だけど？」

「リョウヤにはマナカがいる。ルイだっているし、イレインもいる。例え起源に飲み込まれても、みんなリョウヤの事を助けようとするんじゃないかな？勿論、私だって助けるつもりだから」

「――」

リーゼロッテの言葉に呆気に取られてしまい、そうだったと上を仰ぐ。俺がみんなの事を少なからず思っているように、みんなも俺の事を思ってくれている。もしも俺が起源に飲み込まれてしまったとしても、必ず助けるんだと奮戦するがみんなの姿が簡単に想像出来てしまう。

ああ――だとしたら、みんなに迷惑かけるわけにはいかないから飲み込まれるわけにはいかないな。

「ごめん、やっぱり無しで。そんなの聞かされたら闇落ちしてる場合じゃないわ」

「でもそうやってどうしようもなかった場合、マナカがリョウヤの事を捕まえそうじゃない？」

「……超分かる。なんか鉄の檻に閉じ込められて首輪付けられてる未来が見えたんだけど」

「すっごく簡単に想像出来た」

起源に飲み込まれて害悪になった俺を檻の中に閉じ込め、首輪から伸びた鎖を手にしながら目のハイライトを亡くして笑う愛歌の姿が簡単に想像出来てしまった。リーゼロッテもその光景を想像してしまったのか真顔で俺の言葉に同意し、見つめ合っておかしくなって同時に吹き出してしまう。

そして身体と心が少しばかり軽くなっているのに気がついた。ど

うやら無意識の内に起源に飲み込まれる事を懸念していたようだった。考えてみれば前世では転生するなんて考えてもいなかったもので飲み込まれる前に死ぬだろうと思っていた。それが転生してしまい、無意識の内に起源に飲み込まれる事を恐れていたらしい。リーゼロッテに指摘され、自覚し、そうなる訳にはいかないなど決心した事で改善されたようだが。

ともあれ、これで俺は起源に飲み込まれるなんて下らない終わりを迎える事が出来なくなってしまった。正義として相応しい存在になった黒須に倒されるために、みんなに起源に飲み込まれて害悪になった俺を助けるなんて要らない手間を掛けさせないために。

そして何より……想像してしまった愛歌に檻の中で飼われるペットエンドを迎えない為に。

口に啜えていたタバコを放し、肺一杯に取り込んでいた空気と一緒に煙を吐き出す。高所にいるせいか強い風に煙は流されて、瞬く間に見えなくなってしまった。それに少しばかり儂さを感じながら、最終的にはどうでもいい事だなと結論付けて、フィルターまで燃え尽きたタバコを捨てて踏み躪る。

「ハスター、中の様子は？」

『索敵中……どうやら八神はやて1人のようですね。シグナム、ヴィータ、シャマル、八神めぐりは高町なのはたちを連れて屋上へと向かっています。自分たちと八神はやてとの関係がバレたので決着をつけるつもりなのでしょう』

「一番楽な口封じは殺す事だからな。死人に口無しっていうくらいだし。まあそうしたらそうしたで管理局にバレてより厄介な状況になるんだけどな」

12月24日の夕方、ついに高町たちに八神が闇の書の主であるということがバレてしまった。月村が友達が入院していると高町たちに伝え、一緒にお見舞いに行こうとしたところ病室でぼったりとシグナムたちと鉢合わせたのだ。流石にその場で事を起こす程に短気では無かったようで若干ギスギスした空気ではあるがお見舞いを終わらせ、月村とバニングスが帰ってから話があると言って屋上へと誘ったようだ。

まったくもってお粗末としか言いようの無いバレ方だ。僅かな手掛かりから地道に捜査をして犯人たちのアジトを見つけている者たちの努力が馬鹿馬鹿しく思える程に呆気なく、彼女たちは今回の事件の主犯格でありながら部外者でもある八神の元に辿り着いてしまった。流石に念話の阻害が施されていて管理局にはバレてはいないか

もしれないがこの後に起こる事を考えれば確実にバレるだろう。寧ろバレない方がおかしい。

「ザツファイアの姿が見えないのが気になるけど好都合っちゃ好都合だ。今の内に動かせてもらおうか」

『マスター、結界の展開を確認しました』

予想していた通りに三角錐型のベルカ式の結界が展開される。結界の色合いからして術者は恐らくシヤマルだろう。これまでと同じ対象としたものだけを取り込むタイプの結界だと予測出来、このままでは見つかっていない俺は結界に弾かれて中に入る事が出来なくなってしまう。

だが、問題ない。この結界はすでに何度も見てきた。故にそれに対する対策はすでに出来上がっている。

「任せたぞ、マスター」

『Yes master』

足元にドス黒く光り輝く魔法陣が現れ、魔力光が黒から徐々に結界と同じ色合いのものに近づいていく。そして目の前まで結界が迫り、弾かれる事なく結界の中へと取り込まれた。

結界から弾き出されるのは対象に取られていないからである。ならば対象であると誤認させれば弾かれる事なく結界に取り込まれることが出来るわけだ。どういった理屈で結界を展開した時に人を取り込むのかを調べていた過程で思いついたのだが、マスターがそれを魔法として形にしてくれたのだ。

『侵入成功です。同時に隠蔽を施しているので術者にも気付かれていないはずです』

「上々だな」

最悪は結界の一部を破壊しての侵入を考えていたが、ハスターのお陰で誰にも気付かれること無く結界内に侵入することが出来た。これでシグナムたちと高町たちは俺に気付くこと無く、上でドンパチを繰り広げてくれるだろう。

何気無しに病院の屋上を見れば、ピンクと赤の砲撃や雷に炎、果ては剣が飛び交う戦場が出来上がっていた。

赤の砲撃は赤城の物であり、剣は引きこもっていたはずの御剣の物で違くないだろう。心が折れてリタイアしたと思っていたがどうやら再起を果たしてくれたようだ。それが自力によるものなのか、それとも他者からの叱咤激励によるものなのかは興味を惹かれるのだが今は好奇心で動く場面ではないので自重する事に決めながら八神の病室を目指す。ハスターによれば八神も結界の中にいるとの事。巻き込まれる可能性を考えて外に避難させておいた方が良いのではないかと考えたが、シグナムたちの立場で考えればそれは不安でしかないだろう。目の届く場所において欲しいという気持ちは分からないでもない。

それは俺にとって好都合以外の何でもないのだが。

人気の無い病院をアクロ・ダカーハの姿……つまり仮面装着の完璧な不審者ルックで悠々をと歩いて行く。上で激しい戦闘が行われているのだから多少なりともその影響はあるはずなのだが、病院の中は静かなままで揺れ一つ感じない。シヤマル辺りが結界を展開する際に何か仕掛けを施したのだろう。シグナムたちとは違い、純粋な後衛であるシヤマルならばこれくらいはやってのけるという確信がある。

そして数分後には何事もなく八神の病室にまで辿り着く。もしか

したらザフィーラ辺りが警護でもしているのでは無いかと警戒していたが姿は見えず、気配も八神のものしか感じられないので完全に別行動を取っているようだ。いざ開けようと手を伸ばして扉を引いてもビクともしない。感触からして鍵が掛けられているのでは無くて固定されているように思えた。恐らくはシヤマル辺りが魔法でやったのだろう。力任せに破るには少々骨が折れ、解析して解除するにしても時間がかかり、その間に騎士たちが来るのが目に見えている。

「だけど、まあ、相手が悪かった。悪性情報を含めた魔力を手を覆うような形で付属し、扉に触れる。それだけでひび割れる様な音がして扉は普通に開いた。」

「ん？誰やー！ーホンマに誰や!？」

「good evening!!八神はやて!!12時を迎えるよりも先に不審者サンタのアクロ・ダカーハさんの登場だ!!」

今日はイブとはいえクリスマス。なのでバリアジャケットのカラーの色を赤色にし、所々にファーをあしらったサンタ風のコーディネートネットにしてみた。勿論帽子も装備しているし、つけ髭も抜かりない。

結果として仮面装備の不審者エセサンタの出来上がりである。改めて言葉にしてみると思っていた以上に酷い。

ベッドの上で身体を起こしながら本を読んでいた八神だが、不審者エセサンタとなつている俺の姿を見て身構えながら警戒を露わにしている。その際に俺から見えない様にナースコールのボタンを連打している辺り抜け目ない。

「ナースを呼ぼうとしても無駄だよ。今の病院は俺とお前しか居ないからな」

「何でや!?誰もおらへんなんておかしいやろ!？」

「アレだよ、魔法魔法。魔法で限られた人間しか居られない様にしてるんだ……っーかこの格好飽きたな」

いつもと違う格好というのは存外落ち着かない。その上、八神は俺の登場に驚きすぎていてサンタコーデイネートに関して何もリアクションをしてくれないのだ。飽きたのでハスターに指示していつも通りの黄色のコートに戻してもらおう。

「服が変わった!?……もしかしてアンタも魔法使いなん?」

「Yes!!I, m m a g i c i a n!!そして今日は病気に苦しんでいる君にプレゼントをしようと思ってきたんだ」

前に出ただけで八神がビクリと身体を震わせるが仕方がない。何せ今の俺は八神の友人である加賀美両夜では無く、仮面装備の不審者魔法使いなのだから。

「最近、君の家族がコソコソと何かやってるみたいだけど何をやってるか知りたくないかい?」

「そ、それは……」

「気になるよね?気にならないわけがないよね?普段だったら穀潰しになっている君のお姉さんまで忙しそうにコソコソしてるんだからさあ」

「ウチのお姉ちゃんの事まで……だ、だけど、それはみんなが内緒にしよう思ってるからであって……」

「これが、君に内緒で彼女たちがやってる事だよ」

八神が見やすい様に顔の前にモニターを投影する。そこに映るのは外の光景……つまり、シグナムたちが高町たちと戦っている映像だった。

「っ!?!なのはちゃんにフェイトちゃん!?それに龍斗君たちまで……何で何でみんなと戦ってるんや!?!」

「シグナムたちが裏でコソコソやってたことが原因だよ。彼女たちがやってた事は魔法側からすれば見事に犯罪行為に当てはまっててな?それを止めようとしている高町たちと戦ってるっていうわけだ」

映っている映像が余程ショックだったのか、普通ならば偽物だと疑って当たり前なのだが八神はこの映像を信じ、俺の言葉を信じている。まあ、疑われてもこの映像はリアルタイムで送られている物だし、シグナムたちが犯罪行為を行っていたのは事実なのだが。

「と、止めな……みんなを止めな!!」

「行くんだつたら連れて行くぜ?その為に来た様なものだし」

部屋の片隅に置かれていた車椅子をベッドの側まで持っていき、八神を座らせる。そして八神に知らせる様にフィンガースナップを行い、魔法陣を展開して高町たちとシグナムたちがドンパチを行なっている屋上へと転移した。

「やめてえええー!!」

「ッ!?!はやて!?!」

「はやてちゃん!?!」

予期していなかった八神の乱入に戦っていた全員の手が止まる。リアルタイムで観ていたから分かるが、戦況はシグナムたちが有利だった。数では優っているとはいえ高町たちはまだ未熟であるし経験も少ない。シグナムたちにはその程度の有利など覆せる程の地力と経験を有している。このまま決着がつくまで戦っていればシグナムたちが勝ち、高町たちは殺されるか重傷を負っていたに違いない。そう考えればタイミニングとしては良かったのだろう。

初めは八神の声で驚いていた高町たちとシグナムだが、彼女の座る車椅子を俺が押していることに気がついて顔色を変える。高町たちは経験が浅いが故に困惑し、シグナムたちが八神を助けようと行動に移すよりも先にナルカミを展開し、背後から八神の首筋に突き付ける。

「え？あ？……え？」

「stop and freeze. 言うことを聞かなかつたらどうなるか……分かるだろう？」

そう言いながら露出している口元を歪め、困惑している八神の事を嘲笑う様に笑った。

「え？……これは、一体、何で……」

「俺の事を親切な仮面装備の不審者魔法使いだとも思っていたのか？ 残念、実は俺は悪い仮面装備の不審者魔法使いだったんだ。サンタクロースじゃなくてサタンクロース的な存在だと思えば間違っていないぞ？」

首筋に突きつけられたナルカミの刀身に困惑しながらも口を開いた八神に敬意を表して答えてやる。この場にわざわざ八神を連れてきたのはシグナムたちの秘密を彼女に教えるためでは無く、彼女一人を人質にして戦場を硬直させる為だ。

シグナムたち闇の書の騎士は言わずもがな。歴代の主たちとは違い、自分たちの事を道具としてではなく人間として接してくれる八神の事を深く敬愛している。それこそ、八神を救う為なら八神の命令に背く程に。こうして八神の命を握ってしまえば彼女たちは動くことが出来ない。

高町たち管理局勢もそうだ。八神の身を案じているというものであるだろうが、ここで八神が殺されれば主を無くした闇の書は何をするのか分からない。転生機能により別の世界に移動するだけならばまだしも、これまでで蒐集された魔力が火薬の様に爆発でもすればどれだけの被害を齎らすのか判断出来ない。

転生者たちはここで闇の書が覚醒し、最終的に破壊される事を知っている。その話の流れを変えたくないと考えたのなら、この場では動けなくなる。事実、この場にいる俺と桜木を除いた転生者全員が本来のストーリーでは現れなかった俺の行動に対して怒りの籠った視線を向けている。

「さて、この状況を理解することの出来ないド低脳が存在しなくて結構結構」

「テメエ……何が目的だぁッ!!」

「んんん？どこかから不審者に負けたクソ雑魚ロリータの喚き声が聞こえるなあ？……まあ良い。で、俺の目的だっけ？」

不審者に負けたクソ雑魚ロリータと言ったところで心当たりがあつたのかヴィータが若干苦しそうにしながら無い胸を押さえている。どうやら表面上では平気そうに振舞っていても、あの日の出来事が心に刻み込まれているのだろう。

「みんなはさあ、積み木って積み上げるのが楽しいタイプ？俺は積み重ねたのを崩すのが楽しいタイプでさあ、特に誰かの積み重ねたヤツを崩すのが楽しくて仕方がないわけよ。そいつの頑張りを否定してみたいでさ」

「……何が言いたい」

「暴露だよ、暴露。中心人物でありながら部外者扱いされて除け者にされている八神さんちのはやてちゃんに、懇切丁寧に何がどうなっているのかを教えてやろうと思つてな」

「ッ!?止めろ!!それだけは……止めてくれ!!」

「止めて欲しいよなあ？話して欲しく無いよなあ？……だけど話す。彼女には話を聞くことが出来る資格じゃなくて、話を聞かなければならない義務があるからな」

「……ヴィータ!!今よ!!」

余程話されなくなつたのか必死になつて止めようとしているシグナムを嘲笑っていると身体が糸の様な物で縛り上げられる。声から判断するにシャマルが俺の事を拘束しているのだろう。だとするならシグナムのあれは囮だったのか。

事前に念話で話し合っていたのか、シャマルが叫ぶよりも速くにヴィータが突貫してくる。狙いは動けない俺ローではなくて八神の方。流石に真っ先に俺を倒しに来る程に冷静さを失ってはいない様で人質にされている八神の救助を優先してきた。

まあ、そんな行動は想定内では無いが。

爪先で軽く地面を蹴るアクションをすれば足元からこんこんと泥が湧き上がり、それが触手となってヴィータへと殺到する。愛歌が良く悪性情報を具現化させた物を使っているのでそれを真似てみたのだ。一刻も早く八神を助けたいという思いが強いのか、ヴィータは悪性情報の触手を前にしても無視するように突っ込んできた。恐らく自分なら無視してでもいけると考えているのだろう。

悪性情報の触手がヴィータの腕に、足に、首に巻き付く。振り解こうと槌のロケット噴射の勢いを強くするが、そんなもので振り解ける程やわでは無い。触手は千切れる気配を欠片も見せず、それでも前へ前へと進もうとしてあるせいでヴィータの身体をより一層締め付ける形になっている。

「……おっ。」

ヴィータの無駄な頑張りを眺めいると、突如として視界がブレた。何があったのか、その答えは逆さまになった視界に映るシグナムと、頭から上が無くなっている自分の身体を見て理解した。どうやらヴィータは囿で、本命はシグナムによる奇襲だったらしい。俺の事を危険だと認識しているからこそその生かすつもりが無い初撃必殺。しかも八神に俺の死体と殺した瞬間を見せない為に背後に首を跳ね飛ばすという心遣いまで見せている。

そして……俺の身体が崩れて泥になる。

「何ッ!？」

シグナムが驚愕しながら飛びのくものの、それよりも泥が触手となって彼女を捕らえる方が早い。腕に絡みついて動きを鈍らせ、脚に絡みつい動きを封じ、首に絡みついて締め上げる。これでヴィータとシグナムの動きを封じた。

狙いは良かった。行動も悪くなかった。一切躊躇うことなく殺しに来た辺りは非常に好感が持てる。

残念なのは俺の想定を超えられなかったという一点だけである。

そんな事を考えながら、背後からシャマルの腹部をナルカミで貫く。

「……え？」

「シャマルウー!!」

「残念、俺が本物だよ」

優しく耳元で正解を教えながら放電する。流石に後衛メインのシャマルでは体内を直接雷で焼かれるという経験は無いのか、声にならない悲鳴をあげながら悶える。数秒程放電を続けてシャマルという名の楽器が奏でる音色ひびいを堪能して止める。するとシャマルは全身から焦げた匂いを漂わせながら力なく項垂れて気絶した。

それではつまらないのでナルカミを捻り、内臓をかき混ぜてその痛みで目覚めさせる。

「止めてえ!!もう止めて!!」

「何もしなければ手を出さないさ。これは向こうから手を出したか

ら、正当防衛つてヤツだよ」

「みんなが……みんなが何をしたっちゆうんや!!そないな事をされなあかん様な事をしたんか!？」

「したともさ」

ナルカミをシャマルから引き抜きながら、八神の涙ながらに叫ぶ声に応じる。

「こいつらはお前を救う為には闇の書を完成させる必要があると信じて魔力を集めていた。問題なのはその対象だ。魔力を持っているのなら動物であろうが人間であろうがお構いなくて集めたんだ。それはとてもとても辛い事だ。何せ生きたまま心臓から直接採血している様なもんだからな」

変身魔法で姿を変えていたリーゼアリアに一度魔力を蒐集されそうになったのがそれが苦痛だと理解している。リンカーコアに触れただけでも内臓を素手で触れられているような不快感を覚えたのだ。あのまま魔力を蒐集されればどうなっていたものか。

「その上でだ、騎士たちは主である君に義理立てしてなのか、蒐集しても対象を生かしておいた。それが不味いんだよ。地球育ちだとイマイチ理解出来ないかもしれないが、基本的に魔法至上主義なんだよ。だっていうのにリンカーコアから魔力を蒐集したせいで、そこが異常をきたして魔法が使えなくなってしまう奴が現れる。そうなった奴は悲惨だろうな。マトモな生活を送る事も出来ずに村八分よろしく差別されて惨めに生きる事になるんだからな」

高町やフェイトのように魔力を蒐集されてもリンカーコアが再生するのはほんの一例でしかない。殆どの者は蒐集されたことが原因でリンカーコアが異常をきたして貯蔵出来る魔力が減るか、魔法が使えなくなったりするらしい。魔法至上主義の中で生きているものか

らすればそれは地獄でしか無いだろう。何せ魔力があるから、魔法が使えるから優遇されるのであって、それらの要素が無くなればあつという間に迫害される側に落とされる事になる。

命は助かったかもしれないが、社会的地位を失ってしまえば現代社会では人間が生きる事は不可能に近い。シグナムたちがやつてる事は、遠回しな殺人と何も変わらなかつた訳である。これならば殺された方が良かったと考える人間は山ほどいそうだ。

「そんな……そんな事を……」

「お？何自分は関係無いみたいなのツラしてるんだ？言っておくけどこれはお前の監督責任でもあるんだからな？騎士たちが登場した時にその役割を聞かされた筈だ。それを良しとしなかつたら、何がなんでも蒐集させないようにしなくちゃならなかつたんだよ。お前はそれを怠った……つまり、お前が全て悪い」

重傷で呻き声しか出せないシヤマルは兎も角、縛られただけのヴィータとシグナムがそれは違うと反論しそうなので拘束に使っている泥を変形させて猿轡にしておく。シグナムが縛られている姿は興奮するのだが、ヴィータが縛られている姿を見ても何も感じないのはやはり身体が貧相なのだからだろう。

俺が言った内容は一理あると考える者もいるだろうが殆どがこじ付けである。暴論も暴論である。騎士たちがただの道具であつたのなら、人間の感情を持ち合わせていなかったのなら、自身の感情に揺さ振られる事はなく機械的に八神の命令に従っていただろう。最も、闇の書に縛られている以上、完成を最優先に行動していたかもしれないが。

結論、一番悪いのは夜天の書を闇の書に魔改造決めた奴である。

だが、今回は八神を追い詰める為にそういうことにしておく。桜木によれば、闇の書の覚醒条件は闇の書の完成、そして八神が絶望する事であるらしい。闇の書を完成させる為には騎士たちのリンカーコアを蒐集すれば事足りるらしい。

なので、それまでの間に八神を追い詰める必要があるのだ。

言葉責めはもう十分だろう。優しい八神では、自分の為に誰かが犠牲になっているという事実が負荷になっているように見える。

故に、次は行動で絶望に落とす。

なんの前触れも無しに、屋上に転がって動けないシャマルの心臓をナルカミで貫いた。プログラムだとはいえ人間を模して作られているからなのか、人間と同じ箇所が急所であるという事はヴィータをクソ雑魚ロリータ認定した時に調べてある。死ぬ事を覚悟し、八神に何か言おうとしているのを許さず、心臓に直接電気を流し込んで即死させる。

「……………え？」

シャマルが死んだという事実を受け入れられないのか、八神からはそんな間抜けな声が上がった。現実逃避大いに結構。最も、逃避したところでシャマルが死んだという事実には変わらないが。

続けて拘束されているヴィータの元に近づき、頭を掴んで一息で頭部を捻じ切る。ブツリブツリと筋肉が千切れる音が、ゴキヤリと頸椎が碎ける音が、そしてなにより飛び散る鮮血がヴィータの死を何よりも強調する。

「あ……………ああ……………!!止めて……………止めてえ……………!!」

シヤマルが殺された。ヴィータが殺された。ならば次はシグナムだ。それを予想した八神が止めて止めてと涙ながらに懇願するが止めるつもりは無い。これ以上俺を自由にさせるのは不味いと漸く気がついた高町たちが動き出そうとするが、横合いから飛び込んで来た乱入者——ボロ切れを身に纏い、俺と同じ青白い仮面で顔を隠したリーゼロッツテに防がれる。

「何か最後に言い残す事は？」

「……地獄へ落ちろ、狂人め」

「聞き慣れた素敵な捨て台詞をありがとう」

騎士ならば最後にどんな言葉を残すのだろうかと興味を持ち、猿轡を外してシグナムの言葉を聞いたのだが、出て来たのは前世で嫌というほどに聞いた台詞だった。そのことに少しだけ残念に思いながら、だけど騎士であるシグナムがそんな台詞を吐き捨てた事に驚きながら——ナルカミでシグナムの首を刎ねた。

首が桃色の髪と鮮血を撒き散らしながら宙を舞い、八神の足元に転がる。

「ヒグツ、ヒグツ……!!シグナムう……シヤマルう……ヴィータあ……!!」

「そら、守ってくれる騎士が死んだぞ？ だったら、動くよなあ？」

シグナム、シヤマル、ヴィータの騎士たち3人が死亡した。闇の書がどこまでも機械的な判断をするというのなら、既存の戦力では主を守護する事は不可能と判断して覚醒しようとするだろう。

その考えは正しかったようで、八神の側に一冊の本が現れる。

『……烈火の将シグナム、湖の騎士シヤマル、鉄槌の騎士ヴィータの死亡を確認。魔力の蒐集を開始します』

機械的な音声が終わると同時に死んだ3人の胸部からリンカーコアが現れ、闇の書に蒐集される。魔力量がそれ程の量なのか、それとも完成の為のキーだからなのか、闇の書のページは目まぐるしい勢いで埋められていき、残すところザフィーラの分で闇の書は完成するだろう。

そうして数十秒で蒐集は完成し、魔力で作られていたシグナムたちは文字通りに何も残さずに消えていった。

「オオオオオオーツ!!」

「なんだ、来てたのか」

横合いから猛スピードで突貫して来たザフィーラの一撃を躲す。これまで見たことの無い殺意のこもった攻撃だったが冷静さを残しながらも感情的になり過ぎているのか大振りであるので恐ろしくは無かった。

「貴様がぁ……!!貴様がぁぁぁー!!」

「うっわ、これが本当の負け犬の遠吠えってやつ?悪いけど負け犬の戯言に付き合っつてられる程暇じゃ無いんでねーさっさと餌になれ」

ザフィーラの攻撃を躲しながら腕を掴んで投げ飛ばす。飛ぶ事が出来るので空中で体勢を立て直されてしまうのだが、目的はそれでは無くて投げた方向に……闇の書に近づけさせる事なので問題ない。

『盾の守護獣ザフィーラを確認、蒐集を開始します』

「なツ!?待て!!まだ戦える!!」

『蒐集』

闇の書から蛇が数匹現れ、それがザファイラを拘束して無慈悲な蒐集が始まる。リンカーコアから魔力を奪われる苦しみに呻きながらも、それでも俺への怒りを抑える事が出来ないのか射殺さんばかりの視線で俺の事を睨みつけ、必死になって手を伸ばしている。

だが目と鼻の先、俺に触られるかどうかの辺りで蒐集が完了し、ザファイラは消え去った。

『全666ページの蒐集を確認』

「みんなーう、ああ……ああああああ!!!」

全てのページを埋め尽くして完成された闇の書、そして新しい家族である闇の書の騎士たちを目の前で殺されて絶望を味わって泣き叫んでいる八神。

『闇の書、起動します』

そして全ての条件をクリアした闇の書が動き出す。

闇の書の覚醒が始まるのと同時に八神の足元にベルカ式の魔法陣が現れ、暴風かと間違える程の魔力が吹き荒れて思わず顔を庇う。幸いな事に吹き飛ばされる程のものではないが、前に進む事が出来る程に弱くは無い。高町たちは魔力に吹き飛ばされたのと突如として起きた変化に警戒してから八神から距離を取り、リーゼロッテはそんな高町たちから離れた場所まで避難している。

そうして八神の変貌が始まった。幼かった少女の肢体は瞬く間に成熟した女性のそれへと変わり、肩程で揃えられた茶髪は伸びて銀色に変化する。魔力の暴風が収まった頃には八神はやてという少女はこの場から消え失せ、代わりに銀髪赤眼の女性――闇の書の中で見かけた管制人格が無表情ながらに涙を流しながら立っていた。側には完成した闇の書と、無数の蛇が蠢きながら球体を作り上げている。

「劇的ビフォーアフターってか？視聴者が見たら間違いなく別人だろうって突っ込みたくなるような変わりようだなあオイ」

軽口を叩き、管制人格の意識がこちらに向くように仕向けながらハスターに念話で指示を出して今の状態をスキャンングする。結果、外見は完全に管制人格の物になってしまったが、DNAやリンカーコアは八神のそれと一致しているという情報が得られた。しかも俺が使っているような変身魔法による物ではなく、実際に肉体が変化して管制人格の肉体になっている。

記憶が確かならば、管制人格の正体はユニゾンデバイス。ハスターのようなAIの組み込まれたインテリジェントデバイスでは無く、クロノの使っているようなAIの組み込まれていないストレージデバイスとも違う。ユニゾンデバイスと銘打っているように所有者と融

合して共に戦うデバイス。強いて言えばインテリジェントデバイスに近いのかもしれないが、こうして実物を目の当たりにすると全く別物だと分かれる。

「……お前が、主を絶望へと落としたのか」

管制人格の赤眼が俺を射抜く。現界条件が闇の書が完成してから暴走を開始するまでの間だけなので感情は希薄だと考えていたのだが、無表情ながらも敵意と怒りを滲ませている視線を向けられている辺り、もしかすると思っていた以上に人間味はあるのかもしれない。

少なくともバブアス・オギヤアやキャストオフ桜木の話の聞いても爆笑もドン引きもしなかったナハトヴァールよりも。

「Exactly!俺が八神はやてという少女から家族を奪い、闇の書の覚醒を促した張本人だ」

「何故だ、何故このようなことをした?この呪われた魔導書に魅入られた時から彼女の運命は決まっていた。なら、その終わりは安らかであるべきだ。なのに何故、彼女を絶望へと落としたのだ」

俺の事を敵だと認め、俺に対して怒りを抱いているのは間違いない。しかし、管制人格はそれらを抑えて俺との対話を選んでいた。これは機械的な思考では理解しきれないからという理由によるものなのか、それとも純粹に彼女が疑問に思っているからなのかは分からない。だが、暴走するまでの間という僅かな時間を使ってくれているのだ。例え理解されなくても、その疑問には答えてやらなければならない。

「理由は二つある。一つはさっさと目覚めて欲しかったから。闇の書なんていう危険物が近くにあるんだ、一体いつ暴走するのか気になっ

て仕方がなくなてな。それならいつそのこと暴走させた方がいいんじゃないかと考えたんだよ」

人差し指と中指を立てた手を管制人格に突き出し、その内の中指を折り畳む。桜木から、そしてうる覚えになりつつある原作から闇の書の覚醒はクリスマススの辺りだという事は分かっていた。しかし、俺の行動により本来なら覚醒させるはずのリーゼ姉妹は片方は俺の手駒となつて片方は人生から御退場してしまっている。最もそれはアニメ版の話で劇場版だとナハトヴァールによつて強制覚醒させられるらしいのだが、そうなるとは限らない。

なので俺の手で覚醒させる事にした。時期を合わせるために、そして管制人格との戦いに備えて仕込みをしておくために。流石に世界を滅ぼせるだけの危険性を待っている相手に勢いで立ち向かえる気はしない。

「んで、もう一つの理由は……」

そして、何より……

「……闇の書の……いや、夜天の書の管制人格。お前に会いたかったからだ」

「私に……だど？」

そうだと答えながら困惑の入った管制人格の目を見つめる。

「希少な魔法、スキルを集めて研究する為に作られた魔導書だというのに魔改造されて破壊と殺戮を齎すだけの兵器になってしまった憐れで可哀想な魔導書。そんなお前が何を思い、何を考えているのか気になつて気になつて仕方がないんだ」

「そんな……そんな事を知る為だけに主を絶望へと陥れたというのか

……」

「然り然り。それにそんな事だなんて下卑た言い方はやめてくれよ。人間観察って言うの？俺の趣味なんだからさーまあ、お前がそれに当てはまるかどうかは微妙なところだけだな」

作られた当初は夜天の書としての役割を果たせていただろう。その為に作られたから、当時はきつと彼女は嬉々としてその役割に徹していたかもしれない。しかし、いずれかの主の手によって夜天の書は闇の書へと墮とされた。やりたくも無い破壊を、殺戮を行う。人間ならば余程精神が強靱であるか、完全にそれはそれだと割り切れるタイプの者で無ければ発狂してもおかしくない行為。それを長年の間強制されていた管制人格はどういう心境でいるのか、それが知りたくて仕方がなかった。

そして一目で理解してしまった。管制人格は自分の境遇に対して絶望し、自分の行いに対して諦観しーーだけでも心の底では救いを求めている事を。殺戮と破壊を振り撒くだけの装置と成り果てて絶望しているのは分かる。諦めても仕方がないだろう。だが、それでも助けて欲しいと思っている。プログラムである管制人格は未熟なAIと同じように機械的な判断しか出来ないと思っていたが、彼女は機械的な判断で救いが無い事を理解していながらもそれでも救いを求めていた。

なんともまあ可愛らしいことか。最も、彼女に救いを齎すのは八神の役割なので俺は何をしようとは思わないが。

「そうか……度し難い程に狂っているのだな」

「自覚はしているから口にしてくれなくて結構ーーで、それを理解したお前は どうするんだ？お前の主を絶望へと陥れた俺を、騎士たちを皆殺しにした俺を、自分の欲求を満たすためだけにお前を呼び起こした俺を どうしたい？」

にたりと露出している口を歪ませながら管制人格に問いかける。分かり易い程の挑発、こんな事をしなくても彼女がする行動なんてはなっから決まっているというのにだ。

ここから先は完全に俺の趣味である。気の向くままに、思うがままに、やりたい事だけを好き勝手するだけの利益度外視のサービスタイルだ。世界を滅ぼす事が出来る闇の書、その管制人格を相手にしてどこまで戦う事が出来るのかが知りたいという理由で、俺は彼女に挑まなくてもいい勝負を挑む。

「――無論、滅びを。主が最後の時を穏やかに過ごす為に、主を悲しませ騎士たちを傷つけた貴様を滅ぼす」

「――いいねえ、気の強い女は嫌いじゃない。殺すように愛でてやろう、砕け散る程に抱き締めてやろう、貪るように組み伏せてやろう。何、女から誘われたら応じると言うのが男の役目という奴だ。遠慮せずに来るがいい」

『マスター、マナカ様から恐ろしい勢いでメッセージが送られていますが……』

『終わってから目を通すから今は保留で!!』

結界に覆われているとはいえ、内部の光景を外に伝える手段は幾らでもある。今回はジェイルのデータ収集を兼ねた協力で機械による盗撮が行われていて、その映像は愛歌たちも見ているのだ。どうもさっきの台詞が愛歌の琴線に触れるようなものだったらしい。こちらに集中する為にチャットは敢えて繋いでいないのだが、見たらこんでもない事になっていそうだ。

管制人格の怒りと殺意に満ちた視線を受け止めながら、これが終わったら愛歌の機嫌取りをしなくてはいけないと内心で冷や汗をかくのだった。

大丈夫大丈夫と内心で自分の事を励ましながらナルカミとカスパールを展開する。それと同時に管制人格は傍に浮かんでいた蛇の塊に左腕を突っ込んだ。何をしているのかと思っていたが、蠢いていたはずの蛇が徐々に数を減らしていき、全ていなくなった時に彼女の腕には槍のような物を備え付けた籠手が装着されていた。あれがナハトヴァールの武装形態なのだろう。見たところパイルバンカーのような形をしていて、破壊力と貫通力がありそうだ。

さて仕掛けるかと身体を沈め、ローロー全身を寒気が襲った。まるで身体の中に直接氷でも入れられたかのような悪寒には覚えがある。このままでは死ぬと、生存本能が叫んでいた。

「ッ!!来い!!」

何をされるのか分からない。しかしこのままでは死ぬと判断し、ローゼロツテを呼び寄せて抱きしめ、可能な限り密着した状態で悪性情報の泥を出して周囲を囲う。ローゼロツテがこの行動に可愛い声を上げて驚いていたが、状況が状況なので反応している余裕は無い。

泥によって管制人格の姿が見えなくなる間際、彼女は右腕を高々と掲げる。闇の書は忙しくなくページを捲り、彼女の掌には黒い球体が脈打っておりローロー

「ローロー闇に染まれ」

『Diabolic Emission』

ローロー悪性情報の囲いが完成すると同時に、それが解放された。一拍の間を空けて、凄まじい揺れが襲い掛かってくる。

『マスター、恐らくは広域空間攻撃魔法だと推測されます。どうやら術者を中心とした一帯を純粹魔力で攻撃するタイプの物です』

「初手空間爆撃かーハッ!!戦争でもやってる気分だなあオイ!!」

「ちよ……!!ひ、ひつつき過ぎだつて……!!」

「密度上げとかないと落ちそうだったからな!!我慢してくれ!!」

魔法であるとはいえ、攻撃自体は純粹な魔力によるものであるので悪性情報による汚染は期待出来ない。こうして耐える事が出来るだけでもありがたい。

咄嗟の判断で壁を厚くしていたがそれが功を称したようで広域空間攻撃魔法を防ぐ事が出来ている。もしも楽をしようとして薄くしていたり、困うのでは無く壁を一方にだけ出していたら落とされていたに違いない。泥越しにでも、それを確信させるだけの衝撃があった。

そして徐々に揺れが収まっていき、広域空間攻撃魔法の終わりを迎える。このまま泥に囲まれていてもその内に突破される事が目に見えているので泥を崩し、外へ飛び出しながら周囲の確認を手早く済ませる。

管制人格は正面、周囲には血を思わせる程に赤い短剣が浮かんでいる。恐らくはシューター系のような魔法だと思われる。威力は不明だが、先ほどの広域空間攻撃魔法の時のように生存本能があればヤバイと叫んでいるので俺を殺すには十分な威力を持っているのだろう。

高町たちは落ちていなかった。高町のシールドと、御剣のレアスキルの応用らしい盾を使ってさっきの魔法は耐えたらしい。高町と御剣はガードしたからなのか肩で息をしているが、他の面子は無傷でダメージを負っているようには見えない。

さり気無く高町たちの側にめぐりが混じっているが、これからどうするつもりなのだろうか。妹である八神が闇の書の主であり、さらに管制人格に身体を乗っ取られているのだ。助けるために動きたいのだろうが、力不足を理解しているだろうから高町たちに協力を仰がなければならぬ。彼女にその選択をする事が出来るのだろうか。

まあ高町たちに関しては敵にならなければそれで良い。管制人格を相手にしながら更に高町たちの相手までするのは御免被りたい。この三つ巴の状況下で戦力で圧倒しているのは管制人格、数で優っているのは高町たちの管理局勢で、一番劣っているのは俺たちなのだ。管制人格と協力し、俺たちを先に始末するという可能性はなくもないのだ。

そうなった場合でも負けるつもりは無いのだが、制限時間までに管制人格を倒せるかがどうか怪しくなってくる。そうなれば待ち受けるのは地球崩壊に加えて闇の書存命エンドだ。そうなった場合は仕方ないが、出来る事ならば避けたい。

状況の把握を済ませ、管制人格にカスパールの銃口を向ける。

「――刃以て、血に染めよ。穿て」

『Blutiger Dolch』

「――五重式」

『^{イガサ}五重ネノ呪砲』

管制人格の周囲に浮かんでいた短剣が高速で放たれる。射出されるのと同時に軌道を修正しながら飛んで来ることから誘導機能もあると思われる。躲したところで追尾してくる上に、そもそも短剣の速度が速いので回避自体が困難である。躲すよりも撃ち落とす方が早いと考え、魔法陣を五つ展開し、悪性情報に汚染された砲撃を

放つ。

いつもならばある程度濃度を下げて使うのだが、管制人格を相手にそんな加減をしている余裕は無い。高速で飛翔してくる短剣が、砲撃に触れた瞬間に溶けるように崩れる。

それを見て即座に管制人格は障壁を展開し、砲撃を受け止めた。魔法ならば即座に無効化するはずの悪性情報に汚染された砲撃を受け止められているところを見ると、魔法だけでは無く魔力を放出させて防いでいると思われる。たったの一瞬で悪性情報の危険性と対処法に気がついたようだ。考えれば闇の書の大元である夜天の書は古代ベルカ時代の物だ。似たようなスキルを蒐集し、対抗策を講じていたとしてもおかしくは無い。

ともあれ、管制人格は砲撃を受け止める事に集中している。カスパールから空の薬莢を五つ叩き出しながら管制人格に接近し、ナルカミで刺突を放つ。手応えは硬かった。あれだけの高威力の魔法を連発するのだから防御の方は幾らか手薄になっていないかと期待していたがそんなことは無いらしい。考えてみれば高火力で砲撃魔法を連発している高町だって防御は硬いのだ。フェイトのような高速機動タイプでも無い限り、魔力が多い魔導師は防御が硬いと思っておいた方が良いかもしれない。

刺突を防がれた事に舌打ちをしながら飛び退いて管制人格から距離を取る。刺突は防がれたものの、管制人格の障壁に触れるという目的は果たしている。ナルカミで障壁に触れた瞬間にハスターが障壁のデータを収集、そして解析し、アンチプログラムを製作してくれる。これで次は障壁を乗り越える事が出来る。

だが、管制人格だって馬鹿では無い。破られたのを見れば即座に障壁の術式を変えてくるだろう。チャンスは1度と考えて行動するべ

きだ。

「――烈火の剣を」

『Laevatein』

カスパールの銃口を向けながらどう攻めるか考えていると、管制人格が先に動いた。俺の悪性情報の泥の危険性を理解している筈なのに背中から生やした翼を羽ばたかせながら接近し、赤黒く染まったシグナムのデバイスを振るってきた。マジかよ、と思いつつもナルカミでそれを受け流し、返す刀で振るわれた切り上げを上体を逸らして躲す。

管制人格が剣を振るったのは2度だが、これは物だけではなく技術までシグナムの剣であると理解出来た。

考えてみればそれは当然の事だった。闇の書は覚醒のために騎士たち全員のリンカーコアを蒐集している。本来ならば蒐集出来るのは魔法やスキルなのだが、騎士たちは元より闇の書の一部である。騎士たちの技術がデータとして闇の書の中にある以上、管制人格である彼女が騎士たちのデータを利用できてもおかしくは無い。寧ろ使えて当然だと考えるべきだった。

仰け反った勢いを利用しながら宙返りで距離を取るが、シグナムのデバイスからヴィータのデバイスに切り替えられ、彼女の持ち味だった突貫力によって出来た距離を潰される。カウンターのつもりで刺突を放つも、容易く見切られて紙一重で避けられてしまう。距離を潰されてしまったが同時にこの間合いではヴィータのデバイスは威力を十二分に発揮することは出来ないはず。

それを理解しているから体勢が崩れた状態で、無理やり足の力だけで後ろに飛び退き、管制人格の拳を自分から吹き飛ばされる形で威力

を殺す。

見切りからの流れるような一撃は剣術では無くて体術によるもの、つまりザファイラの技術だった。管制人格の華奢な身体では鍛え上げられたザファイラと同じ威力は発揮出来ないと思っていたが魔力で強化しているのか、それともそれだけの膂力が設定されているのか本家と同じかそれ以上の威力があるように思えた。しかもご丁寧にバリアブレイクまで付属してある。自分から飛んでいなければ良くて内臓破裂、最悪は上半身と下半身が別々になっただろう。

この調子ならばシャマルのデバイスや技術まで使われそうだが、こちらは警戒しなくても良いだろうと考える。シャマルのデバイスは一度しか確認していないが、ワイヤーのような物を使って悪性情報の泥で作った俺の分身のことを拘束していた。仮にまた拘束されたとしても悪性情報の汚染で対処出来るし、そもそも彼女のタイプはサポート型である。使おうとしたところで隙にしかない。

管制人格もそれを理解しているはずだが、ヴィータのデバイスが消え、代わりに彼女の指にシャマルのデバイスだと思われる指輪が装着される。AIである彼女が無駄な事をするはずが無い。何かあるはずだと警戒していると指輪から複数のワイヤーが伸びるが、そのどれもが俺には伸びずに別々のところに伸ばされている。

「は……ハハ……マジかよ」

目の前の光景に思わず乾いた笑いしか出てこない。何かあると色々なパターンを予想していたが、これは流石に予想外だ。実際にこの光景を見れば、誰だって乾いた笑いが出てくるに決まっている。

何故なら——管制人格の指に嵌められているシャマルのデバイス。そこから伸びるワイヤーは周囲のビルに向けられていて、ビル群

を・持・ち・上・げ・て・い・る・の・だ・か・ら・。

シャマルのデバイスによって持ち上げられたビル群、それを管制人格は全てを俺の頭上へと移動させ、半数をぶつけて砕いた。大小様々なサイズの瓦礫が降り注いで来る。防御してやり過ぎそうとしたところで、足を止めてしまえばその次に残された半数のビルが降ってきて圧倒的な質量で押し潰されるのが目に見えている。

「ものみな眠る小夜中に、水底を離れることぞ嬉しけれ。

水のおもてを頭もて、波立て遊ぶぞ楽しけれ」

故にまともな手段を選ばない。リンカーコアではなく魔術回路を起動させ、歌うようにして前に読んだ本の一文を唱える。

「澄める大気をふるわせて、互いに高く呼びかわし、
緑なす濡れ髪うちふるい、乾かし遊ぶぞ楽しけれ」

放出される魔力が水へと変換されていく。しかしそれは無色透明な液体などでは無く、ドス黒く粘度を持ったどちらかといえば泥に近い液体。それだけを着目すればさつきまで使っていた悪性情報の泥と大差ないのだが、決定的に違うところがある。

それは量だ。先程までの悪性情報の泥と比べ何十倍、何百倍もの量が生成され、重力に従って足元へと溜まり、許容量を超えてビルの壁面を伝って下へと溢れていく。

「喰らい、犯し、貪り尽くせ、水面の魔性ーー!!」

そして泥が蠢き、重力に逆らいながら天へと登る。最初は円柱状だった泥は瓦礫に接近すると自ら広がって表面積を増やし、降り注ぐ

瓦礫に自分からぶつかっていく。普通ならば液体であるので突破されて終わりなのだろうが、生憎とこれは悪性情報の泥である。触れた瓦礫を一瞬で汚染し、形を保てなくなったそれらを飲み、凄まじい速度で体積を増やしていく。

悪性情報が使えるようになってからその研究を怠ったことは無い。何せ俺にとっては十分な益になっているとはいえ、類似はあれど前例は無いのだ。今日までは平気でも明日になった瞬間に使用者である俺や愛歌に牙を向ける可能性があるのだ。初めはコンピューターウイルスのようにプログラムによって発動している魔法の障害をしているのだと思っていた。実際魔法に対して使えばその通りになる。しかし、それはただの一面でしかなかったのだ。

度重なる研究と実験の結果、悪性情報の本質はウイルスに近い物だと分かった。

元来、ウイルスは宿主となる生物の体内に侵入し、数を増やす。増え過ぎた結果として発病して宿主を殺すのだが、この悪性情報はウイルスとは違い、宿主である俺と愛歌には悪影響を齎さずに泥や魔力などで体外に放出して初めて悪影響を齎すという特徴を待っていたのだ。しかもただ汚染して溶かすだけでは無く、汚染された物は俺の意思通りに動かす事だって出来る。考えてみればコンピューターウイルスだって感染したパソコンを壊さずに遠隔操作で使用出来るのだから当然だと言えば当然なのだが。

瓦礫の雨を喰らって肥大化した悪性情報はまだ喰らい足りないのか、管制人格が更に落としてきたビル群に向かって触手を伸ばす。さっきの瓦礫とは違い、ほとんど形を保ったままのビル群であったが、悪性情報の汚染を考えればそんなものは些事ではない。大質量であったはずのビル群でさえ、瓦礫と同じように汚染し、飲み込み、肥大化する。

それを見て管制人格は物質による攻撃は無駄だと判断し、初撃で使った広域空間攻撃魔法で自身に迫っていた悪性情報の塊を吹き飛ばした。流石は夜天の書のユニゾンデバイスなだけはある。状況の把握、理解、判断が人間よりも早い。機械だからと言ってしまえばそれだけなのだろうが、それを支えているのは夜天の書としての駆動期間、そして闇の書としての駆動機関なのだろう。機械であるがゆえに既知の出来事に対しての対処は早い。例え未知の出来事であったとしても、過去の前例から類似した出来事と比較する事によって即座に対処してみせている。

即ち、経験の差。数百年、或いは千年以上にもなる経験が、相性的には有利であるはずの悪性情報が即座に対処されている理由だった。

ともあれ、未だに想定範囲を出していない。前世を合わせたところで半世紀も生きていない若造なのだ。高々相性的に有利というだけで勝てるのであれば拍子抜けも良いところだ。

ジュエルシードで補っているとはいえ魔力は劣り、経験の差は絶望的なまでに決定的。蒐集したスキルや魔法を適正の一切を無視して使われているので手数でも勝てるはずが無い。成る程、改めて状況を把握してみれば、泣きたくなるほどに絶望的だった。泣いて謝って許しを乞いたくなるが、しでかした所業が所業なので許してもらえずに刺殺される未来しか見えない。

常人ならば心が折れてしまいそうな状況だと再認識して――それでも諦めるという選択肢は存在していない。

何故なら、俺は悪であるから。

絶望的な状況であってもそれが楽しいのだと嘲り笑い、崇高な願い

を素晴らしいと称賛した上で唾を吐きかけ、どこまでも傲岸不遜に、ふてぶてしくあり続ける。前世ではそうあった。故に今世でもそうあるだけだ。

しかしこのままでは相手にならない事も理解している。そもそも俺は飛行が不得手なのだ。管制人格や高町たちのように自由自在に飛び回ると言ったことは出来ずに、精々魔力を使って足場を一瞬だけ形成するのが関の山。

故に、垂れ流されている悪性情報に命令を下し、一塊にしてから形を変えさせる。瓦礫とビル群を鱈腹喰らって肥大化した悪性情報の泥はその形状を徐々に俺は意向に沿ったものへと変化させていきー30メートルを超える東洋式の巨大な竜へと姿を変えた。

その額に飛び乗って高度を上げさせ、ようやく管制人格と同じ目線で立つことが出来る。

「……それは一体なんなのだ。私は知らない、過去の記録を検索しても前例どころか類似したものすら出てこない」

「なんだって良いだろ？それとも何か？八神はやてを傷つけた俺の始末よりも自分の知識欲を満たすことの方が重要なのか？成る程、お前の主を思う気持ちというのは所詮その程度だったというわけだな」

その言葉が琴線に触れたのか、それともそれでやらなければならぬ事を思い出したのかはわからないが、管制人格は言葉では無く突き出した手のひらに魔力を収束させる事で応じた。魔力光は桜色なので高町から蒐集した魔法だろう。思い当たるのはフェイトとの戦いで使ったスターライトブレイカーだが、あれよりも小規模なので恐らくは砲撃魔法。

「吼えろ九頭龍。荒々しく、そして猛々しく」

放たれた砲撃は九頭龍の咆哮を媒介にして広められた悪性情報によって敢え無く掻き消される。悪性情報による魔法無効化と、咆哮に込められた魔力で放たれた砲撃魔法に込められた魔力を上回ったというだけに過ぎないゴリ押しだ。管制人格だって原理を理解すれば再現出来るような小技に過ぎない。

「さあ、第二ラウンドと行こうかー！！」

地上戦は終わり、空中戦へと移る。俺の言葉に従い九頭龍が巨体を荒々しく唸らせながら管制人格へと突進して行った。

「どうしたら良いんだ……!!」

黒須龍斗は目の前で繰り広げられている管制人格とアクロ・ダカーハの戦いを見て苦しそうにそう呟いた。

普段の彼ならば、間違いなくアクロ・ダカーハに向かっていっただろう。何せ、アクロ・ダカーハは黒須の前世で彼に消えることのない傷を付けた。あの時の痛みが、あの時の後悔が、あの時の無念が、黒須の内側で燃えたぎる炎となって彼を突き動かす原動力となる。

だが、現状を考えれば激情の赴くままに行動することは出来なかった。何せアクロ・ダカーハの対峙している相手は闇の書——悪質な改造の結果、本来の機能を失って破壊と虐殺を齎す宿業を背負わされた夜天の書の管制人格なのだから。彼女が現れた事により闇の書の暴走へのカウントダウンが始まってしまった。それはアクロ・ダカーハの手によるものだが、時の庭園の時のように愉快犯じみた無責任な行動かと思えば、先んじて管制人格と戦っている。

危険度で言えば止めなければならぬのは管制人格の方だ。今はまだ大丈夫だが、本格的に闇の書の暴走が始まってしまえば地球が崩壊してしまう。この場での最善はアクロ・ダカーハと手を組み、管制人格を止める事。それを黒須は理解している……理解しているからこそ、苦しいのだ。前世で彼が憧憬を抱き、人々を導いた英雄ガリア・オールライトの唯一無二の怨敵であるアクロ・ダカーハと手を組まなければならぬという事が。

頭では理解している、そうしなくてはならないという事も分かっている。だが消えぬ傷をつけられた心が身体を縛り付けて、その行動を取らせてはくれなかった。

なのはと御剣はどうすれば良いかわからずに困惑し、赤城は2人も倒すべきだと主張している。前者の行動は御剣の精神年齢を考慮してもまだ納得出来る。しかし、赤城の主張はこの場に限って言えば間違いなく最悪手でしかない。

管理局の存在意義を考えれば、民間協力者とはいえ所属している黒須たちはそうしななければならぬだろう。しかし、現在のアクロ・ダカーハと管制人格の戦いは拮抗しているようにも見える。つまり、赤城が言うようにどちらとも倒そうとすれば、拮抗している戦力の全てがこちらに向けられる事になるのだ。闇の書が蒐集した全ての魔法とスキルを扱う事が出来る管制人格と、正体不明な泥を竜として扱っ

て管制人格と拮抗しているアクロ・ダカーハ。そのどちらからも狙われるなどと想像もしたくはない。

赤城は正義感があまりにも強すぎるのだ。間違いを許さず、正しい行いをしようとして、それを周囲にも押し付ける。今回のように正しいだけではどうにもならない事態もあるというのになだ。

将来、アクロ・ダカーハが赤城和真という人間の本質を理解した時、彼の事を“正しさの奴隷”だと称するのだが。

どうしたらいいのか理解していながらも、黒須は動かないでいた。前世で付けられた心の傷が疼き、無意識にデバイスであるセイフアートを持っていない手で胸元を握り締めてしまう。高町と御剣は困惑しているものの、黒須が率先して動けばそれに続く形で従ってくれるだろう。赤城は従うかは未知数だが、最悪は気絶させれば良い。

動かなければならない、だけど動く事ができない。呼吸が段々と荒くなっていき、過呼吸気味になっている。

そんな最中、

「バルディッシュユ」

『Yes, sir. Barrier jacket, Light ning form』

フェイトがバルディッシュユに指示を出し、ヴォルケンリッター戦でスピードを上げるために薄くしていたバリアジャケットを元に戻した。黒須の感性ではあの時のフェイトの格好は痴女じみていたので元に戻ってくれたのはありがたかったりする。

「フェイ、ト……」

「私、アクロの事を助けてくる」

「どうして……あいつは、君のお母さんを利用して傷付けたのに……」
「確かに、あの人は母さんを傷つけた人だよ……でも、私ははやてを助
けたいんだ。その為に、今回は我慢する事にする」

「……ああ……」

はやてを、闇の書の主である少女を助けた。たったそれだけの理
由でフェイトはプレシアを傷付けられた怒りを堪えて下手人である
アクロ・ダカーハに手を貸そうとしていた。転生した自分たちよりも
幼いはずの、年端もいかぬ少女が、だ。

彼女の決意を、そして優しい理由を聞いて黒須は思わず感嘆してし
まった。自分よりも幼い彼女が、大好きな母親を傷付けられた怒りを
堪えているのだ。なんと強い事か。そして同時に自分に呆れてしま
う。自分はなんと小さな理由で動けなくなっていたのかと。

胸元を握り締めていた手を解き、改めて拳を作って自分の頬を殴り
ぬく。加減無しで殴ったので切ったらしく、口の中には血の味がす
る。突然の自傷行為にフェイトが慌てているが、心配ないと落ち着か
せる。

もう、息苦しきを感じない。身体だって自分の意思で動かせる。

「行く。アクロ・ダカーハと共闘して、はやてを助けよう」

心の傷は無くなる事は無い。だがこの一時だけ、黒須はそれを忘れ
る事にした。

「互角か……不味いな」

九頭龍の咆哮によって放たれる砲撃を掻き消し、カスパールで砲撃を乱射しながら現状に舌打ちをする。九頭龍を使っているとはいえず管制人格と互角に戦えている事は間違いなく大戦果なのだが、今回に限っていえばそれではダメなのだ。

管制人格の出現は闇の書の暴走へのカウントダウンが始まったことと同じ意味を持つ。互角に戦っていればカウントダウンはいずれ尽き、闇の書の暴走が本格化する。僅かにでも天秤が傾けば抵抗はされようが一気に決着まで持っていける自信はある。だが現状は互角、しかもそれは良くてであり、全体で見れば俺が押されている。

湧き上がってくる焦りを抑えながらどうにして押す事は出来ないかと脳みそをフル回転させる。好みから普段使うことの無いマルチタスクまで使った様々な手段を模索してみるが、結果はどれも互角が精々である。現在隠れて隙を伺っているリーゼロッテを使えばやれなくも無いのだが、その場合は間違いなく彼女が死ぬ事になるので保留しておく。

確かにリーゼロッテは俺の手駒だ。だからこそ、彼女が限界を迎えるまで使い潰すような事をしたくない。

「……沈め」

静謐に告げながら管制人格が赤い短剣を飛ばしてくる。隙を伺う為にか何度か使われたので焦る事なく九頭龍の身体の一部を触手に

変え、それを防がせようとし、

複数の短剣の内の一本だけが軌道を変え、触手を掻い潜るように避けた。

不味いと思ったがもう遅い。俺が回避に移るよりも先にあの短剣は俺の心臓を穿つ。バリアジャケットの防御も恐らくはバリアブレイクが付与されているだろうから無意味だろう。

無駄な足掻きと分かっているながら、身体を動かして短剣を避けようとし——俺に届くよりも先に閃光が間に割って入り、短剣を弾き飛ばした。

「……大丈夫、ですか？」

「……被害者の娘に安否を問われるとか新しいなあオイ」

閃光の正体はフェイトだった。加賀美両夜の時ならば友人なのだが、今の俺はアクロ・ダカーハである。彼女にとって俺は母親を傷付けた仇であるはずだ。それなのに助けられ、心配されるという事態に少しばかり混乱してしまう。

「俺を助けたって事は、そういう事だっと思っていいか？」

「ああ、お前が考えている通りだ」

脳裏に思い付いた可能性を口にしてみれば、隣にやってきた黒須が苦虫を噛み潰したような顔をしながらもそれを肯定した。彼の心情は理解出来る。だが、そうするのが確実だからそうするのだろう。俺としては三つ巴の混戦も悪くなかったのだが、現実性を考えればこちらの方が好ましかった。

黒須の後に高町が、御剣が、赤城が続く。赤城の目が怒りと憎悪に

満ちているのが気になる。黒須とフェイトにそういう目をされるのならまだ納得出来たが、こいつにそんな目をされる理由が皆目見当が付かない。この状況では背中を預けるしか無いのだが、完全には信用しない方が良さそうだ。

「俺たちははやてを、そして管制人格を救いたい――だから、手を貸せ」

「まさかこうなる時が来るとはなあ――だか、それもまた一興だ。2度と無いだろうし、精々楽しめ」

黒須と――善の側の転生者との共闘。思わぬ事態に堪えなければならぬというのに口角が持ち上がるのが抑えられなかった。

「あなた達は、そいつに付き従うのか」

共闘の意思を見せ、実際に隣にいる黒須たちを見て管制人格は悲しげにそういった。彼女は覚醒以前から周囲の状況を知覚しているので、友人である彼らが八神と敵対するような構図になっていることに悲しんでいるのだろう。

「違う。俺たちは貴女とはやてを助けたいだけなんだ」

「なんだ、照れてるのか？ 恥ずかしながら胸を張ってイエスと大きな声で肯定してやれよ。なんなら肩組んでピースしてやろうか？」

肩を組もうとして腕を伸ばしたところで反射的に身体を沈める。すると頭ストレス、さつきまで首のあった位置を黒須の剣が通り過ぎていった。

「殺すぞ？」

「殺そうとしてから忠告するって遅くない？……と、まあこんな程度の間柄だ。必要に迫られて手を組んでいるだけで仲良しこよしって訳じゃないから安心しろ」

「……だとしても、彼らが敵になったことには変わらない」

故に滅びを、と管制人格は高度を上げ、右手を空へ掲げる。その行動だけで嫌な予感がし、阻害しようと思うものの、それは既に遅かった。

「咎人たちに、滅びの光を――」

掲げられた右手に収束する魔力。先までの砲撃魔法のように自身

の魔力だけを収束しているわけでは無く、結界内に撒き散らされた魔力がまるで流星の如く集められていく……高町なのはが作り出した最大最強の集束魔法スターライトブレイカーの前触れだった。

被害者であるフェイトに視線を向ければ彼女と目が合い、頷きを交わして管制人格に背を向ける。

「総員撤退ー……ッ!!」

「早くここから離れて!!」

「え?え?ど、どうしたの?」

「集束魔法が来るから逃げるんだよ……!!」

「生半可な防御じゃその上から落とされるから距離をとって威力を減衰させるんですよ!!」

「足の遅い奴は九頭龍に掴まれ!!共闘するって決めたのに速攻で落とされちゃ話にならない!!」

スターライトブレイカーの威力を理解している者たちは俺とフェイトの指示に迷う事なく従ってくれたが、開発した本人であるはずの高町だけがどうして慌てて逃げようとしているのか理解していないようだった。開発者本人がああ魔法の危険性を理解していないというのはどういう事なのだろうか。俺は映像で見ただけで実際には見えていないのだが、それでもアレを喰らえば問答無用で落とされる事は理解しているというのに。

黒須、御剣、赤城、そしてめぐりが九頭龍に掴まったのを確認して九頭龍にこの場から全力で離れるように命じる。静止した状態から最高速度になった事で掴まった者たちから悲鳴が上がるのだが気にしている余裕は無い。防御に自信のある高町ならば兎も角、俺やフェイトのような防御の薄い者は範囲内イコールキルゾーンなのだ。発射されるまでの間に出来る限り距離を取り、その上で全力で防御しなければならぬ。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれー」

救いなのはスターライトブレイカーの集束が明らかに高町のそれよりも遅い事だ。高町の持っているスキルを管制人格が保持していないからなのか、フェイト戦の時に比べて魔力の集束が明らかに遅い。最も、使用者のスキルによって左右されるというのなら管制人格のスターライトブレイカーには、高町のスターライトブレイカーには無い特性を持っている可能性があるので安心は出来ないのだが。

ともあれ、今の集束のペースならば防御して受け止められる範囲まで逃げられそうだ。

『ーーツ、マスター。結界内に生命反応があります』

「生命反応？人がいるってことか？」

今展開されている結界はシャマルのもので、管制人格が出現すると同時に支配権がそちらに移って街一つを覆い隠す程の規模に広げられた。今まで人影を見なかったことを考えるとシャマルが設定していたまま引き継がれているものだと思っていたが、どうやら何人かがその設定に引っかかって結界に取り込まれてしまったようだ。

だが、それを知ったところでどうしようとも思わない。今の距離では防御したところでスターライトブレイカーを防ぐ事が出来るか怪しいし、見ず知らずの人間を無償で助けようと思うほどに自己犠牲の精神を持っているわけでは無い。

「で、それがどうした？」

『生命反応は2つ、内一つはご友人の月村すずか様の物です』

それを聞いた瞬間、九頭龍を割った。五分五分では無く八割と二割

に。二割の部分は黒須たちに掴まれたまま逃走を続け、八割の部分に乗って反応のあつた場所に向かわせる。

見ず知らずの人間ならば迷う事なく見捨てていた。だが、それが月村だと言うのなら助けない理由は無い。それに恐らくもう1つの反応はバニングス辺りだろうか。八神のお見舞いからそんなに時間が経っていないのだから、2人が一緒に行動していてもおかしくは無い。

幸いな事に2人との距離はそんなに離れていなかった。結果に入ったせいで人の姿が見えなくなった事に戸惑っている月村とバニングスの姿が見える。

「貫け、閃光――」

そして最悪な事に、管制人格の魔力の集束が終わったようだ。遠く離れた場所にいる彼女は束ねられた魔力を放とうと構えているのが見える。

「九頭龍、巻け。ナルカミ、陣雷展開」

『カートリッジ使用数6つ、使用許可を』
「任せた」

九頭龍から飛び降り、困惑している月村とバニングスの前に立つとナルカミを地面に突き立てる。それと同時にナルカミの柄からカートリッジが6つ飛び出して六角形の魔法陣が展開される。元々は管制人格が使っていた広域攻撃魔法のような広範囲への攻撃を目的とした魔法を防ぐ為のものだ。残念だが、これだけでスターライトブレイカーを防げるとは思わない。

なので、その上から重ねる。竜の形状から元の泥へと戻させ、俺た

ちに覆いかぶさるように陣雷へと纏わりつかせる。これだけやって漸く防げるかどうかと言ったところだろうか。

「貴方はー」

「ちよつと!! 一体何が起きてるのよ!!」

「悪いが口を閉じていてくれ、舌を噛むぞ……!!」

月村とバニングスが突然登場した俺に、そして普通ならばあり得ない現象に対して問い質そうとして来るがそんなことをしている暇など無い。ジュエルシールドから魔力を補給し、その全てを陣雷へと注ぎ込む。

「ーースターライトブレイカー」

集束された魔力が放たれた。一度地面が揺れ、それが治るところが大きくなっていることから直接ぶつけるのでは無く、着弾してから爆発するように拡散されているらしい。

そして、拡散された魔力に飲み込まれた。陣雷に、覆いかぶさっている泥に触れた瞬間に内部にまでスターライトブレイカーの衝撃が伝わってくる。それで今の状況を理解出来なくても察してくれたのか、2人は可愛らしい悲鳴をあげ、目を閉じて耳を塞ぎながら蹲る。

大人しくしてくれて助かった。いつもならば軽口の1つや2つでも言っているのだが、今は防御に集中していたいのだ。

陣雷の上から泥を被せているので直接スターライトブレイカーに触れているのは泥だけだ。しかし、その泥は瀑布のように叩きつけられる魔力によって刻一刻とその量を減らしていて、陣雷の障壁はその圧だけで軋みをあげている。魔力を流し続ける事で保つ事は出来ているのだが、被さっている泥が無くなってしまうえば敢え無く碎け散つ

てしまうだろう。

魔力の量に関してはジュエルシードがあるので問題は無いのだが、一度に供給出来る魔力の量は決まっているのだ。今は魔力の供給が間に合っているがそのうちに追いつかなくなるのが目に見えている。そうならば俺たちはそれまでだ。

そうしてー泥が全て剥がされる。緩衝材が無くなったことで陣雷の障壁が直接スターライトブレイカーの魔力に晒され、ギチリという嫌な音を立てながらヒビが入った。

これはダメだ、そう直感的に判断しー

煩いほどの音と身体を叩く揺れが無くなったことに気が付いた。

理解出来なかった。友達のはやてちゃんをお見舞いに行った帰り道に気がつけば私とアリサちゃん以外に誰もいなくなってしまった。大声で誰かいないか叫んでみても返事は返って来なくて、電話でお姉ちゃんたちと話そうとしても繋がらない。さらに遠くの方からは爆発するような音と、何か大きな動物の叫び声のようなものまで聞こえてくる始末だった。

そうして漸く人に出会えたと思えばそれは蒼白い仮面をつけた男の人で、私たちの質問に答える事なく泥のような物と電気で私たちの

周囲を囲んだ。今ならあれは、さっきの揺れを防ぐために用意したのでは無いかと予想することが出来る。

本当だったらこのまま目を閉じていたい。しかし、それではなにも知る事は出来ない。何が起きたのか知るために、恐る恐る目を開く。

すると――目の前に、さっきの仮面の人がボロボロになりながら立っていた。

「……………え？」

声を出したのと同時に彼は前のめりに倒れた。視界に映る彼の背中では――欠けていた。

背中の中程から腰にかけての部分が削られたように抉れていて、本来なら見える筈のない中身が曝け出されてしまっている。医学に詳しくない人間の誰が見ても、この傷は致命傷でもう助からないのだと分かってしまう。

そして、彼が倒れた拍子に血が跳ねて私の口の中に入る――私はその血の味を知っていた。燃えるように熱く、そして蕩けるように甘い血の味は私の好きな男の子の血の味と全く同じ。血の味というのは人によって違っているのに、全く同じ味の別人がいるなんて有り得ない。

つまり、目の前で死に掛けている男性は、彼ということになる。

「あ……………ああ……………ああ……………!!」

その事実が気が付き、全身の血が一気に引いてしまう。アリサちゃんも目の前で人が死に掛けているからなのか、顔色が悪くなってい

る。思わず彼の名前を叫びながら駆け寄ろうとした時、俯せになったまま彼の手が上がる。

それはまるで、気がついた事を黙っているように伝えているようだった。

「ゴボツ、ゴボツ……あんのクソ女、躊躇わずに殺傷設定にしがったな……!!いや、それだけヘイト稼いでたって自覚はしてるけどよ」

「だ、大丈夫ですか!？」

「心配するな……ただの致命傷だ」

「もう手遅れじゃない……!!」

口から血を吐き出しながらサムズアップしている姿を見ると余裕そうに見えるのだが、私の耳に届く彼の心臓の鼓動はだんだんと弱くなっているのが聞こえている。これではもう、病院に連れて行つたとしても延命処置しか出来ないだろう。

「致命傷だけど、即死じゃない。3分ほどで応急処置は出来るから安心してくれ」

そういうと、彼の傷口から黒い泥のような物が溢れ出してきた。欠けた部位を補うように、グロテスクに蠢いているのを見ているのは精神的によろしくない。

「いやあ、危なかった危なかった。持っていかれたのが腑だけで助かった。脳か心臓が無くなってたら流石に死んでた」

「内臓持っていかれただけで普通に死ぬわよ!!それにその黒いのは一体何よ!!急に人が居なくなつて、漸く会えたと思つたらいきなり死に掛けて……訳がわからないわ!!」

「生憎だけど説明している時間は無いんでな、そういうものだと無理矢理に納得してくれ」

「……アリスちゃん!! すぐかちちゃん!!」

なのはちゃんの声が空から聞こえた。上を向けば、そこには学校の制服に良く似た服を着たなのはちゃん、そしてレオタード姿にマントを装備しているフェイトちゃんの姿があった。

なのはちゃんは兎も角、フェイトちゃんの格好は中々に危ないのだが、それを彼女は理解しているのだろうか……いや、彼女の事だから理解していない気がする。

「2人とも、大丈夫!？」

「うん、この人が助けてくれたから……」

地面に倒れながらタブルピースを決めている彼の姿を見て、なのはちゃんとフェイトちゃんが信じられないものを見たかのような目で見ている。きつと彼がなにかをやらかしたのだろう。もしかすると、この状況も彼が引き起こしたのかもしれない。

彼は優しい。優しいのだがその優しさは誰にでも向けられるという訳ではなく、いざという時には切り捨てられる程度の物でしかない。きつとなにかを企んでいて、その結果としてこうなっているのだろう。最も、それは彼の正体を知っているからこそ出来る考えであって、気づいていない者からしたら不明のままなのだろう。彼と親しいフェイトちゃんなら、正体に気が付けば察してくれそうだが、天然だから怪しい気がする。

「他の奴らは?」

「貴方の竜に連れて行かれてここから離れた場所にいます。私たちは彼女たちがいるのが見えたから止まって耐えましたけど」

「ならさっさと連れて行け。じゃないと直ぐに来るぞ」

なのはちゃんとフェイトちゃんがそれに頷き、私たちの手を取ろうとした時、オレンジ色に光る鎖がどこから伸びてきて、彼女たちと地面に倒れている彼を拘束し、そのまま力任せに釣り上げた。

「チイツ!!」

舌打ちをし、腕を払えば彼を縛る鎖だけはボロボロと崩れ落ちていった。しかし、治療中である彼は未だに重傷の身であり、そのまま受け身を取ることができずに地面に落下する。

そして倒れている彼の頭を、どこから現れた銀髪の女性が踏みつけた。ルビーのように紅い目は怒っているのか燃えているように見えてしまう。

「H e y !!踏まれて喜ぶ趣味はないから辞めてくれない!?あと、この体勢だとパンツ見えちゃうぞー!まあ、人形に発情出来るような特殊な性癖じゃないけどな!!」

女性が足を上げ、力任せに振り下ろした。彼の頭を守るように光の壁が現れたので大丈夫なのだろうが、下のアスファルトは蜘蛛の巣状にヒビ割れていて、どれだけの力が込められていたのかを教えてくれる。

「我が主の嘆きを晴らすー!貴様は、ここで死ね」

ガシャンと音を立てながら女性が装備していた籠手から葉莖が飛び出し、杭を彼に向ける。目には見えないが、杭の先には何かが集まっただけでそれを殺す事が出来るのだと直感で理解出来た。

それを見た瞬間、頭で考えるよりも先に身体が動いた。彼にだけ注目している女性に体当たりをして彼から退かし、2人の間に立つ。

「……退いてくれ。私の目的はその男だけであつて貴女を傷付けたい訳ではない」

「……嫌、です。それに、さっきの攻撃をしてきたのは貴女でしょう？ そんな人に傷付けたくないなんて言われても、私は信じられないです」

怖い。目の前の女性には自分を容易く殺せるだけの力があることを理解しているから恐怖で喉が引きつって情けない声が出て、膝は震えているのが分かる。だけど、それでも立つ。私がいなければ、彼女は躊躇うことなく彼の事を殺すだろうから。

好きな人が傷付けられている姿を見ているだけでも辛いのに、目の前で殺されるなんて耐えられる訳がない。

「……そうか。ならば、諸共に滅びるが良い」

悲しげに女性はそういうと、杭の先端を私に向けてきた。

アリサちゃんの悲鳴が聞こえる。

なのはちゃんとフェイトちゃんの叫び声が聞こえる。

後ろにいる彼が苛立たしげに舌打ちをしながら動こうとしているのが分かる。

後悔はしていない。だけどごめんね、と誰に伝わるわけでもないのに心の中で謝罪をして、せめてもの抵抗として彼女から目を逸らさない。絶対にこの場から逃げないと、震える足に力を入れる。

「せめて、苦しまずに逝ってくれ」

そして杭が放たれるその間際――

「――見事である。その気概、確かにこの我^{オレ}が見届けた」

私と彼女の間には盾が現れ、放たれるはずだった杭を受け止めた。甲高い音と衝撃を感じながらも、その盾は壊れるどころか歪むことすらせずに杭の一撃を受け止めていた。

「なんだと……!?!」

「貴様」

背後から尊大で自信に満ち溢れた声が聞こえてくる。振り返ればそこには金髪を逆立て、黄金の鎧を着た男性が端正な顔を不愉快げに歪ませながら立っていた。

「誰の許可を得て我^{オレ}を見ている？不敬であるぞ」

パチンと、黄金の男性が指を鳴らす。すると彼の背後から黄金の渦が2つ現れ、そこから槍と剣のような物が高速で放たれた。夜の一族の動体視力を以ってしても影しか捉えられない速度で放たれた凶器が女性に衝突する。直前で光の壁が現れて防がれてしまったが、衝撃までは殺せなかったのか女性は弾き飛ばされた。

「よくぞ耐えた。誇れよ、その気概は我^{オレ}が見るに値する勇姿である」

唯我独尊とでもいうべきか、まるで遙か高みから私たちの事を見下

しているかのような喋り方であったが、不思議とそれに不快さを感じる事はなく、寧ろ褒められた事実気分が高揚してしまう。

「故に褒美をくれてやろう。喜べ、我が勇姿を間近で見る事を許す」

この人が誰なのか分からない。彼とどんな関係なのかも分からない。

だけど、この人ならば大丈夫だろうという不思議な安心感があった。

「何故だ……」

スターライトブレイカーによって削ぎ落とされていた部位と臓器を補っている最中、桜木の宝具によって吹き飛ばされた管制人格が無傷で砂埃の中から現れる。顔は俯いているので分からないが、声が震えている。

「何故……何故お前もその男に手を貸すのだ!!その男は主から騎士たちを奪ったのだぞ!!それなのに……どうして誰もがその男の肩を持つのだ……!!」

「決まっている。それは貴様の方が危険だからだ」

管制人格の叫びは悲痛だった。彼女の立場からすれば、彼女は主である八神の為という大義を持っている。八神から家族である騎士たちを奪った俺こそが倒さなければならない悪であるという認識が出来上がっている。高町たちの立場からしても、俺の行いを庇い立てる事は出来ないだろう。これを最初から知っていてそれでいてなお俺の事を悪ではないと庇い立てる奴がいるのなら、そいつは間違い無く狂人の類でしかない。

桜木は全てを知っている。その上で、管制人格の叫びを一蹴してみた。

「貴様の出現はそれ即ち世界が減びる事を意味している。減びを前にして醜く足掻くのは生物として当然の帰結である。ならば、大事を前にして些事を置いておく事など珍しくもないであろう?」

「だとしても……だとしても……!!」

「理解しろ、そして納得しろ。貴様の事を憐れみはすれども貴様の味

方をする者は誰もいない。この場において最大の悪性は貴様である」

それは桜木が言っているはずの言葉。しかし、呪いによって強制されている喋り方の所為なのか、暴論でしかないはずの理由なのにそれが正論であるかのように聞こえてしまう。

「貴様の境遇には同情をしよう、憐れみもしようーだが、それだけだ。道具であるのならば道具らしく人の心を捨て去るべきであった。それが出来ぬのならば疾く自害するべきであった。道具であると悟りながらも人の心を捨てる事が出来なかった、己が罪であると心得よ」

桜木の背後に現れていた2つの黄金の渦、その内の1つがチェーンバインドで縛られている高町とフェイトの方を向き、蔵の中に収められていた槍を射出してバインドを砕いた。これによりフェイトたちは自由になり、それと同時に九頭龍によって連れ去られていた黒須たちがやって来る。事前に交戦の経験があるせいが高町たちは桜木の事を警戒していたようだが、桜木の視線は管制人格に固定されていて、それでこの場では敵対しないだろうと判断したのか誰もがデバイスを管制人格に向ける。

「しかし、この我が^{オレ}がそうであると断じて、否であると叫ぶのであれば足掻いて魅せよ」

桜木の背後に現れていた黄金の渦が数を増やす。2つから4つに、4つから8つに。倍々で数を増していき、最終的には32で増える事を止めてその全てから蔵に収められている宝具を展開する。

「さすればその散り様はさぞ見応えのあるものとなろうー!!」

内1つだけでも想像を絶する威力を誇る宝具の原点。その32

丁が同時のタイミングで射出され、中座されていた戦いを再開する号砲となる。

桜木の乱入時の初撃により、その威力を味わっていたせいかな管制人格は障壁による防衛ではなくて空中に飛んで避難する事を選ぶ。しかし元からそういう性能だったのか、あるいは管制人格がそうすると予想していたからなのか、宝具は管制人格の後を猟犬のように軌道を変えて追いかける。

それに対して管制人格は血染めの短剣を同数展開、それを射出して追いかけてくる宝具を撃ち落とすが背後から黒須とフェイトにデバイスを振るわれて障壁で防いだ物の急拵えなのか弾き飛ばされる。

さらに吹き飛ばされた先、体勢を立て直そうとしたところに高町の砲撃が放たれて飲み込まれた。

さらに砲撃から逃れた先で待ち構えていたのは赤城と御剣。御剣が転生特典である アンリミテッド・ブレイドワークス “無限の剣製” で作り上げた剣群で管制人格の動きを阻害し、その隙に赤城が数段階倍加させた魔力を使って大火力を叩き込む。

即席にしては中々の連携だが、そのどれもが決定打に成り得ていない。手数を重視している黒須とフェイトと御剣では管制人格の障壁を抜く事が出来ない。高町と赤城ならば威力としては十分なのだが彼女もそれを理解しているのか2人への警戒を怠っていない。その上、桜木が要所要所で管制人格に牽制をしているから今の状況が成り立っているのだ。もしもそれが無ければ、今頃は連携の粗さを突かれて各個撃破されているだろう。

そして気になるのが1つ。戦っている者たちの中でめぐりの姿が見えないのだ。隠れて管制人格の隙を伺っているのか、それともこの

後に及んで八神と戦う事が出来ないのか。前者であればまだいいが、後者ならば残念でしかない。まあ、現状では彼女が来ても戦力になり得るかは怪しいのだが。

管制人格と高町たちの戦いを地面で仰向けになりながら観戦しつつ、傷の修理作業を続ける。治療では無く修理と言ったのは間違いなどでは無くてそう言い表すしか出来ないから。初めはハスターに頼んで魔法で治そうとしたのだが、あまりにも傷が深すぎるので魔法での治療はできないと言われたのだ。

流石に臓器が無くなれば治せないかと魔法の限界を再認識しつつ、取った手段は悪性情報による欠損部位の補充。

具現化した悪性情報は泥の形状を取らせているが決まった形を持たず、俺の意思で自由に形を変える事ができる。それを活かして無くなった臓器を、血管を、神経を、骨を、筋肉を、皮を、全てを悪性情報で代用して埋めている。治しているわけでは無くて別の物で代用しているというのは修理というしか無いだろう。幸いな事に医学書を読んで人体の構造は一通り把握しているので修理そのものには問題は無い。ただし、初めての試みなので手こずっているのだが。

「どうして……どうして、貴方はこんな事をしたんですか？」

修理作業の最中、俺の側で腰が抜けたのか地面に座っていた月村がそんな事を聞いて来た。その声色はとても悲しそうで、そして苦しそうであった。その反応、そして管制人格に立ちほだかつて俺の事を庇ってくれた事から月村は俺の正体に気が付いているのだと分かっ
てしまう。

立ち振る舞いから気づかれるようなヘマはしていないと自信を持って言える。顔は仮面で隠しているので見えていないはず。それ

なのに確信を持っているように見えるので何かしらの方法で俺の正体が加賀美両夜であることに気がついたのだろうか。

だからこそ、この問いには真摯に答えなければならぬ。いつものように適当な対応で煙に巻く事は出来るが、そんな事をしたくは無いと考えてしまったから。

「どうしてね……必要な事だからだよ」

「必要な事だから……？あの人があんなに悲しんで、貴方もこんな大怪我をして……そうしてまでしなくちゃならない事って一体何なんですか？」

「それは教えられない。どうしてこんな事をしたんだと罵られる覚悟はしてるさ。そうでなきゃとてもじゃないがやってられないからな。だけど、これは必要なんだ。今は理解されなくても、いつか理解されるだろうさ」

一から十まで、それこそ俺がそういう考えに至った理由を話したところで理解も納得もされる事はないのは分かっている。答えるつもりであったが、この質問が来ると予想はしていたが、だからといってこの場で打ち明けられるようなものではないので結局いつも通りにはぐらかすような返事になってしまう。

「……何か大変な事になっているのに、教えてくれないのね？」

「生憎と気軽に打ち明けられるようなものじゃないんでな。お前の秘密と同じさ」

「ズルい。それを言われたら何も言えないじゃない」

「ハハッ、許してくれ」

泣きそうになりながらも笑みを浮かべる月村に、露出している口元を歪めて笑っている事を示す。上空で繰り広げられている高町たちの戦いを眺め、欠けた部位を修理している中で月村との会話はとても

穏やかに行われていた。このまま話を続けていたいと思ってしまうが、そんな事をすれば手遅れになってしまうので名残惜しく思いながらも修理を終了して立ち上がる。

背骨が無くなっていたので動くかどうか怪しかった下半身も以前と同じように動いてくれる。血液の流れも良好であり、問題なく動かす事が出来る。とはいえ重傷の身でこれがただの延命行為であることには変わりはない。これが終わってからジェイルにキチンとした治療をしてもらう事にしよう。

「行くんだね？」

「ああ、行くよ。生憎と決定打に欠けているからな。あいつが真面目にやってくればすぐに終わるんだがそんなつもりは無いらしい。それに、あの拗らせてるクソアマの顔面をグチャグチャにしてやりた
い」

背中を抉られた事に関してはまあいいだろう。それをされても仕方がないような事をしでかしたという自覚があるし、される覚悟をしていたのだから。

しかし月村とバニングスをーいいや、月村を攻撃した事が許せない。気がついていなかったかもしれないが、それが何の免罪符になると言うのか。仮にも八神を主と仰ぐのであれば、彼女の友人である2人に手を出して良いはずがない。

自分を傷つけられたと言うことよりも、月村に危害を加えられたと言う事に対して沸々と怒りが込み上げて来る。

「リーゼロッテ、2人を結界の外に出してやってくれ。それが無理なら守れ」

「ー分かった。任せて」

この場に月村とバニングスを放置しておくのは心配なので隠れていたリーゼロッテを呼び出し、この場から脱出させる事にする。とはいえこの結界は中にいる者を外に出さないためのものなので出られない可能性もあるが、その場合はリーゼロッテに守らせれば問題ないだろう。

「てな訳で行って来るわ」

「……怪我をしないでなんて言わない。だけど、ちゃんと帰ってきて」「……ああ、約束だ」

できる限りのことはしたので手を振りながら約束を交わして別れ、調子確かめるついでに歩いて戦闘の行われている場所まで移動をする。月村とバニングスを巻き込まない為にか戦場は2人から離れた場所に移動して海に近づいているように見える。

『桜木、見えてるか?』

『あ、やっと復活しました?』

『心配させたな。そっちに合流するけど、それに合わせて管制人格地面に落としてくれない?』

『オツケー、それくらいなら問題ないです……あ、あと沙条からメッセージ預かって来てます』

『おう、足が震えるけどドンと来い』

『そんな気を張るようなものじゃないですから安心して下さいーー両夜の性格から無茶をするのは分かっているわ。だから、無傷でなんて言わないけどちゃんと帰って来なさい。だそうです』

桜木から伝えられた愛歌のメッセージ、それを見て呆気に取られ、そして声に出して笑ってしまった。何せそれは月村が言った言葉と同じだったから。

本当ならば俺が傷ついている姿を見るだけで心が痛いのだろうか、その痛みを堪えて俺の背中を押してくれている。ああ、2人ともなんていい女たちなのだろうか。前世で彼女たちに出会えなかった事に神を呪いたくなり、そして今生で彼女たちに出会えた事を神に感謝しなくなってしまう。

ただしクトウルフ神話の邪神ども、テメーらはダメだ。感謝の代わりに同人誌を製作してやる。

遙か彼方から泣き叫ぶような突っ込みがされたような気がしたのだが、気のせいだと無視する事にする。

「さて、あいつの事だから丁度いいタイミングであのクソアマを叩き落としてくれるだろう。顔面殴ってからファイナルラウンドだな」

桜木たちが戦っている場所に行くため、そして激しく動かしても以前と同じように動くかどうかを確かめるため、地面を全力で蹴り、戦場へと向かう。

「――来たか」

近づいて来る彼の気配に気がつき、桜木は管制人格の隙を作るために行なっていた宝具の射出を一旦止める。彼がその気になれば初撃の時点で彼女を殺すことは可能であった。それをしなかったのはこ

れからの展開の事を考えてと、友人を傷付けられた憂さ晴らしをする為に嬲りたかったから。故に自分の力でこの場を解決するつもりは無く、彼が来た以上もうこの場にいる理由は無くなってしまった。

ならばあとは頼まれごとをするだけだと、桜木は宝物庫から一際大きな槌を取り出し、黒須とフェイトの相手をしている僅かな隙を見極めて管制人格に振り下ろす。これまでの行動を阻害するものではない一撃は管制人格を的確に捉え、防御の為に展開された障壁を突き破って彼女を地面に叩き落とす。

「ク……ッ!!まだあのような武器を隠していたのか……!!」

それまでの宝具の射出は避けられる、あるいは障壁で防げる物でしか無かった。それは桜木がこの場ではその程度の物で事足りると判断していたからなのだが、両夜のオーダーに応える為に一級品の宝具を取り出して使用したのだ。少なくとも片手間程度で展開された障壁などでは防げるような代物ではない。

悪態をつきながらも先の宝具のデータを組み込んで障壁の強度を上げる。これであれと同程度の宝具が来ようとも確実に防ぐ事は出来る。そう結論付けて敵のいる空中へと飛び立とうとした瞬間——管制人格の肩に手が置かれた。

「どっ行くの?」

音符でも付きそうな程に喜色を含んだ声色とは裏腹に、彼女の肩に置かれた手は万力の様に締め付けて振り解く事を許そうとはしない。

管制人格は忘れていた。いや、忘れていたはずが無いが高町たちが予想していた以上に健闘していた事、桜木の危険性、そしてあの怪我では動けないだろうと考えて彼の存在を注意から外してしまった。

振り返りながら手に砲撃魔法を準備し、それを振り返るのと同時に確認する事なく放つ。ゼロ距離で高火力の砲撃魔法は非殺傷設定などされておらず、当たれば上半身が消し飛ぶだけの威力を秘めていた。

それを下手人は踏み込み、更に距離を詰める事で躲す。紙一重の回避で仮面の一部が欠損したが、それを気にすることなく硬く握り締めた拳を振り抜いた。

「ハスター」

『barrier break』

本来ならばその一撃は障壁に遮られて不発に終わるはずだったが。しかしデバイスと思わしきペンダントから無機質な声が発せられ、拳が触れると同時に障壁はヒビ割れて砕け散った。

そして拳が管制人格の顔面に突き刺さる。強化も施されていない素面の一撃で頭蓋骨が軋みをあげ、頬骨が砕け、管制人格は初めて殴られて吹き飛ばされると言う経験を味わう。無論それだけの威力で殴ったのなら殴った方も無事では済まない。殴った手はひしやげて使い物にならなくなってしまっている。

だというのに殴った張本人は痛みなど感じていないようで実に清々しい顔をしていた。

「スツキリ、超スツキリ」

『強化なしで殴ったせいで完全に手が砕けてますけど……』

「あいつらが感じた恐怖に比べたらこんなの屁でもねえよ。それに手が砕けた程度で痛がってたら話にならん」

取り込んだ騎士の1人であるシヤマルの回復魔法で傷を癒しながら立ち上がる管制人格に対し、彼は砕けた骨を元の位置に戻して泥で覆うことでそれを固定する。

「さあ、ファイナルラウンドだ――長かった馬鹿騒ぎもそろそろ終いにしようや」

不敵な笑みを浮かべ、露出した目には怒りの炎を燃やしながらアクロ・ダカーハは傲岸不遜にそう宣った。